ISSN 0387-2807

アジア・アフリカ言語文化研究

JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES

No. 65 March, 2003

目　次

論　文

サラワク・イバン社会における小家族の編成と機略的行為 ……内　堀　基　光… 1

ホー・チ・ミンとスターリン
—ホー・チ・ミン訪ソ（1950年２月）の歴史的意義 ……栗　原　浩　英… 19

Note d'introduction sur les musiques traditionnelles des Antakarana …Live, Yu-Sion… 45

社会的実践としての工芸技術の変容
—フィリピン・ルソン島北部山地民社会における機織りの産業化を巡って—
……大　西　秀　之… 67

資料・研究ノート

A Talubin Text with Wordlist and Grammatical Notes
……Kikusawa, Ritsuko & Reid, Lawrence A.… 89

タタール知識人による女性向け雑誌『スユム・ビケ *Sūyum Bīka*』
（カザン，1913-1917）目録 ……生　田　真　澄…149

パプアニューギニアをめぐる華人の移動とコミュニティの変遷過程
……市　川　　哲…181

The Fijian Transitive Ending *-(C)aki/a* in Loan Words ……Tamata, Apolonia…207

大きな罠小さな罠—焼畑周辺をめぐる小動物狩猟— ……西　谷　　大…229

フィリピン・ココヤシ栽培農村における生業の変遷
—ルソン島ラグナ州S村の事例— ……藤　井　美　穂…259

アジア・アフリカ言語文化研究 51-65 総目次……287

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA (ILCAA)

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【論　文】

サラワク・イバン社会における小家族の編成と機略的行為

内　堀　基　光
（アジア・アフリカ言語文化研究所）

Strategic Actions and Structure: Iban *Bilek*-family Reconsidered

Uchibori, Motomitsu
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

1. This article deals with short-term diachronic processes in which Iban *bilek*-families are recurrently reorganized through a chain of interactions of individual members. Each individual's actions are treated here as manifestations of his/her strategies for reducing the risk of over-burden in domestic life and, if possible, of enhancing the benefit of sharing the resources belonging to the *bilek*-family, the basic domestic unit of Iban society. By focusing upon actions of choice on the part of younger members, the composition of the *bilek*-family can be analysed from the perspective of formative process rather than that of formed structure.
2. The Iban *bilek*-family is structurally an exemplar of a 'stem family', which means that at the completed stage of its 'developmental cycle' it consists of members of successive generations with exclusively one conjugal pair at each senior generation. Although it may also include unmarried members of both sexes at each generation, its continuation as a unit rests upon guaranteed existence of a successor-pair at the most junior level. Freeman discerns in his pioneering study the four 'principles' in the recruitment of *bilek*-family members; namely, birth, adoption, marriage and incorporation. My argument is that among these principles only birth and possibly infantile adoption do not involve the subjective action of individual recruited agents, and as such, can be regarded as a semi-automatic part of reproduction of the *bilek*-family, while other principles, including juvenile adoption, can be realized only through complex interactions between multiple agents. Each of the latter principles is not so much concerned with mere recruitment of a *bilek*-family as with its dynamic reorganization. Reorganization as a process, when it is analysed as a unique diachronic event involving subjective agents, reveals far more characteristics of the *bilek*-family than when it is seen under the light of normative principles.
3. Three cases discussed in this paper illustrate, among others, long lingering

Keywords: Iban, family, strategy, choice, structure
キーワード：イバン，家族，機略，選択，構造

uncertainty around the future succession of the *bilek*-family. Even the would-be successor-pair living together in the same room (*bilek*) with senior generations may leave it to join another, usually the other spouse's original, *bilek* or to set up their own independent *bilek*-family. The final settlement of succession matters may take a considerable time, involving interactions between the parental pair, married or unmarried junior members, and members of other *bilek*-families. Although the parental pair may take strategic action to secure the successor, the initiative in this matter tends to be taken by junior members. That is only because the latter have more options open to them, including passive actions such as postponing their own determination. The discussed cases also indicate the high frequency of juvenile members' actions of changing *bilek*-family affiliation without the formal procedure of adoption, which may or may not last for long.

4. Formative processes of *bilek*-families suggest, or even prove, that they are in reality not everlasting entities. Despite the existence of a certain ideology putting emphasis on continuity of the *bilek*-family from the past to the future, the actual concern of individual agents is directed no so much to the past as to the future. A secure future is the ultimate target of their strategy. The Iban *bilek*-family, reconsidered in this perspective, is characterized as a structurally ever-generated—not necessarily everlasting—entity, produced—not merely reproduced—over and over again by subjective agents, and necessarily open to the future. The core moment of this generation cum production is marriage, that is, formation of a conjugal pair.

1 視点
2 イバン社会における「ビレック家族」
3 拘束と選択── 3つの事例──
4 行為の機略
5 結論──構造と「戦略」──

1 視 点

本論は，ボルネオ島西部の丘陵地帯のイバン社会における小家族の編成を，行為論ないし実践論の視点からとらえかえそうとする試みである。その主要な論点は，人間社会における集団編成のあり力を理解するためには，対象とする集団の形態を分類し，またその統合のメカニズムを共時論的に分析するだけでは不十分かつ不適切であり，その集団が生成されるに至るプロセスを，不可逆な時間のなかで生起する出来事として通時論的に把握する必要があることを示すことにある。

本論における対象は地域的にも数的にもごく限定されたものであり，そのアプローチもきわめて微視的なものである。また理論的射程としても遅く来すぎた観が否めないところがある。だがあえてこれを呈示するのは，社会人類学のかかえてきた古くからの大きな問題，すなわち構造（集団）と過程（個人）との関係，より特定的に言えば，集団のもつ構造的拘束性と個人の主体的行為のあいだに成立するフィードバックについて，一つの実証的な寄与をなそうと考えるからである。

言うまでもなく，集団はそれを構成する個々のメンバーなくしては存在しえない。この自明の事実に対して，半世紀前の社会人類学者は，主として集団構成員の集団へのリク

ルートメントという観点からのアプローチをとった。「成員権」membership という概念に端的に見出されるように，そこでは個人に先立って存在する集団が前提にされ，個人は，その構成員に構成員としての一定の義務と権利を課すことになる集団に，いわば後から加入するものとみなされたのである。しかもこの集団への加入は，多くの場合，出自・親族関係・年齢といったなかば自動的に決定される諸条件を中心に考察されていた。こうした観点に立つかぎり，集団との関係における個人とはいっても，それは永続する集団の維持メカニズムのなかでの代替可能な素材のように扱われるほかなかったのは当然である。

個々のメンバーに先立って存在し，またその入れ替えにもかかわらず保持される集団の同一性という前提は，実のところ，集団ないし社会一般についての共時論的なアプローチの原因でもあり，またその結果でもある。集団先行論――と一応名づけておく――は，構成員の交替という本来時間的な過程のなかで生起する事象から，その個別性と不可逆性を奪いとることによって，集団の共時論的分析に現実的な根拠を与える。一方，共時論の内包する理論，とりわけ構造―機能主義的な理論は，集団のあり方の超時間的同一性を探る方向に研究の大勢を導くのである。これに対して，集団先行的な見方とは逆の観点，すなわち集団編成にあたって個人のとる行為が集団自体のあり方を規定する決定的な要因になるという観点は，われわれを必然的に集団の通時論的研究に導くことになる。特定個人の特定の行為は一回性のものであり，時間的に不可逆のものだからにほかならない。本稿が行為論・実践論からの集団へのアプローチであり，同時にその通時論的把握であるとした理由はここにある。

集団編成への行為論・実践論的なアプローチは，ここ三十年来の社会人類学の主要テーマのひとつである。この線を最も明確に打ち出しているのは，バース F. Barth［1981］とブルデュー P. Bourdieu［1977］であるが，本論も基本的には彼らの問題意識を受け継いでいる。すなわち，ここでの行為ないし実践は，個人が他の諸個人にむかってとる「選択と決定」（バース）からなるものと考えるが，こうした選択的決定行為の集合が，ある社会のある状況において一定の目標を達成するために個人がとりうる可能な「機略」（ブルデュー）を構成するのである。言いかえれば，われわれは具体的な個人の選択の実例をとおして，社会的人間の機略のあり方に至ることができる。ここで機略という抽象概念を用いることは，われわれの議論にとって重要である。これによって，同様にひとつの抽象である「規範」の概念が内包するような，社会過程における個人の行為の一義的被決定性から，一定の自由度をもった行為を救い出すことができるからである[1)]。

1) 機略という語はブルデューの言う stratégie，strategy の訳語として用いる。戦略という，より熟した訳語があるにもかかわらず，あえてこの語を使用するのは，第５節で述べるように，戦略の概念を組織体レベルの事象に限定したいと考えたからである。その意味でこの語は「個人戦略」という内容をもつものだと理解されたい。ここでは個々の文脈における具体的な「戦術」よりは抽象的な概念として用いているが，もともとブルデューの概念には大がかりな一般戦略というよりも，個人的で状況依存的な戦術に近いところがある。本論でなそうとしている親族関係行為論の意義を補強するために次の引用をしておこう。「親族関係をひとびとが作りあげる何ものか，またひとびとがそれによって何事かを為していく何ものかとして取り扱うことは，今日の分け方ではそう思われてしまうかもしれないが，単に『構造主義的』な解釈に代えて『機能主義的』な解釈をとろうとすることではない。このことが根源的に疑問視しようとしているのは，必然的に実践的である諸機能との関連で，親族関係をそれを生産し，再生産し，利用するという実践のかたちで見るのではなく，マルクスの言葉を使って言えば『客体あるいは直観のかたち』でそれを見ようとする人類学の伝統のなかにこめられた暗黙裏の実践理論なのである」［Bourdieu, 1977, pp.35-36,（強調は原著者）］。なお人類学から見たブルデューの実践概念については，最近田辺が詳論している［田辺, 2002］。

2 イバン社会における「ビレック家族」

イバン社会の基底的単位集団は，フリーマン Freeman［1957, 1970］が「ビレック家族」*bilek*-family と名づけた小集団であり，これは社会人類学において通常一子残留型の直系家族，ないしはステム家族と呼ばれるものの典型的な例であるとされてきた。ということは，その小集団の中核は，それが「発展循環」developmental cycle において完成段階に達している状態では，各世代に一組ずつの夫婦を有する三世代ないし（ごく稀れには）四世代にわたる人々の集まりであることを意味する。この中核に，最下位世代の未婚者と，場合によっては上位世代の単身者ないし未婚者とが加わったものが，現実に見られる完成されたビレック家族の範例になる。

ビレックとは本来イバンの居住形態に特徴的なロングハウスの居室部分をさす言葉である。ビレック家族とは，したがって，この居室を共にする集団であり，生産（とりわけ焼畑での陸稲栽培）と日常の消費を共同にする集団，つまり一つの「世帯」である。イバン社会において，ビレック家族の独立性・自律性は一般にきわめて強いものとみなされている。

フリーマンが指摘しているように，あるロングハウス共同体に所属するビレック家族は自分たちの意志で自由に共同体から去ることができるし，また先住者の同意が得られれば，他の共同体に加わることができる。その意味では，ロングハウス共同体はビレック家族の一種の連合体であるともいえ，事実この共同体はイバンの人々の意識においても，そのままのかたちで永続しつづけるものとは考えられていない。イバンの社会編成の核はあくまでもビレック家族であり，その自律性は比喩的には独立国家とも言われるほどである[2)]。さらに重要なことは，イバン社会全体がビレック家族の間隙のない集合体であるということ，すなわち社会がビレック家族によってくまなく覆われているということである。これをイバンの諸個人の側から見れば，彼ないし彼女はいかなる時もかならずどこか一つの，しかも一つだけのビレック家族の成員であるということになる。このことは本稿の論点に直接関わることなので強調しておかなければならないが，ビレック家族という集団の特質は，一つの時点を取りあげてこれを見た場合，それぞれの間の境界が，空間的にも人的にも，非常に明確に認知される集団であるということにある[3)]。

ビレック家族はその内的構成から見て直系家族であるとされている。したがって，その最も顕著な特徴は，この集団においては一組の夫婦という結合単位と世代とが一対一の対応をなしていることであり，これによって集団内部の編成は諸世代の層序という原理のもとに理解されることになる。この原理はイバンの諸個人という行為者の主観においても明瞭に認識されている。この認識は，例えば，系譜的に定義された異世代間の結婚を原則として禁ずる婚姻規制の存在，また養取縁組において養子たりうるものは直近下位の系譜的世代のものとするという慣行に，その客観的表現を見出している。これらの規制と慣行の

2) Sutlive［1978, p.39］がビレック家族を独立国家にたとえたインフォーマントの言を引用している。なお，イバン語にはビレック「家族」にあたる名詞はない。これを指し示すには，「ビレックを共にする」という修飾詞によって，人びとの集まりを限定する。詳しくは［内堀, 1996, pp.50ff.］参照。

3) 清水［1970, p.184］は出雲の村におけるイエの分析で，社会をくまなく覆い，しかも成員の重複を排除するイエの特質を「離接性」という概念で表現している。この点に限らずイバンのビレック家族が日本のイエと構造的に類似していることは，これまでもたびたび指摘されている（例えば Nakane［1967, pp.168-169］，村武［1972, pp.29-48］）。本稿はビレック家族の構造をその形式面で考察しようという意図をもっていないので詳しくは述べないが，ごく大まかなイメージとして日本のイエの対外関係性と内的構成を考えておくと，本論を読むうえで便利であろう。

存在によって，ビレック家族内の世代関係はより広範囲の社会における世代関係と一貫性をもって結びつけられるのである。ごく一般化して言えば，親族関係にかかわるイバンの観念体系において，「世代」（*serak*）――この語は「層」をも意味する――の概念は全目的的ともいえる座標を提供している。イバン社会は，親族に関わる諸関係について，知られるかぎりもっとも徹底的に双側性原理を貫いている社会の一つであるが，そこにおいて，世代による差異性が人間関係の要になっていることにまず注目する必要がある。

その編成原理からして，ビレック家族の維持に不可欠なことは，世代から世代への継承のメカニズムが十分効率的に働くことである。これまでの構造―機能論的な研究においては，このメカニズムは暗黙のうちに安定的なものと想定されてきた。言いかえれば，婚姻にはじまる生物学的な再生産過程が世代交替の継起を直接的に保障するものとみなされてきたのである。フリーマンは，この前提にもとづいて，ビレック家族をその再生産過程，すなわち「発展循環」においてとらえたわけである[4)]。

フリーマンの基本的な視点は，「発展循環」の諸契機を現存するビレック家族への新しい成員のリクルートメントの原則を抽出することによって位置づけようとすることにある。そこで分別される原則は四つ，すなわち，出生，養取，結婚，合同である。双側性原理が支配するイバン社会にあって，結婚は新婚男女のいずれか一方が自分のビレック家族からみて，相手のビレック家族に婿入するという形態をとるものとされる。出生と養取は直接に次世代者の再生産にかかわっているが，フリーマンの説明によれば，これによって新たなメンバーとなる者は「父方か母方どちらか一方の」――どちらになるかは前記の婚入形態による――ビレック家族の所属になるとされる（この説明の問題点については第４節で述べる）。最後の合同という契機は二つのビレック家族が合体するというものであり，したがってそこには，一つのビレック家族の自律性の消滅が含意されている。ビレック家族の編成原理の一つの大きな特徴は，そのおのおのの成員は，これらの異なるリクルートメントのどの契機をとおしてであるにせよ，いったん成員になった以上は権利・義務の両面でひとしく完全な成員となるということにある。

さて，ビレック家族の再生産過程をこの４契機に分解することは，多少機械的にすぎるとしても，一応認めてよい。これらの契機にそれぞれに，イバン社会における小家族編成の特殊性が容易に見てとれ，かつその「発展循環」がそれらの組合せによって論理的に呈示できるからである。しかし本論における筆者の意図は，この「発展循環」という枠組そのものを問いなおすことにある。「発展循環」は一見時間的な軸上に集団編成の特質を追及するもののようにみえながら，その実，そこにおける時間の枠組は回帰的なものとしてのそれであり，具体的な出来事としての通時過程を超越している。それゆえに，こうしたアプローチは常に非時間的なモデルに還元的に行きつくことになってしまうのである。ビレック家族を観察する際の陥穽は，フリーマンがまずはじめにその主要な特徴と言い切った二つの特徴，つまり「数的に小さな集団」であり，「系譜的に単純な集団」であるという，まさにそのことにある[5)]。この事実によって――これは確かに事実である――ビレック家

4) Freeman［1970, Chapter1］。フリーマン自身は「発展循環」の語をみずからの著作，論文では使っていない。この語はJ. Goody が編集した論文集［Goody（ed.), 1957］の全体主題として使われているだけだが，フリーマンの分析は完全にこの概念の枠内で行われている。彼の人類学一般に関する展望はその後大きく変わったが，イバン社会の特質についての見解には基本的な変化は見られない［Freeman, 1981, pp.30ff.］。

5) Freeman［1970, p.9］

族は緻密な観察を要することのないもの，あるいは人類学の理論上においてその意義はもっぱら規範論の面にのみ限られるものとして扱われてしまいがちであった。

しかしながら，次節で具体例をとおして検証するように，ビレック家族の現実の編成は個々の成員のさまざまな行為の集積の結果であり，しかもその結果は凍結されたものではなく，常に将来にむかって開かれているのである。さらに強調しておかなければならないのは，ビレック家族という制度がもつ問題点が最もするどく浮き上がるのは，これらの必ずしも予測をゆるさない諸個人の行為の過程においてであるということである。語るべき多くのことが静態的な「発展循環」論を越えたところに横たわっている。

3 拘束と選択――三つの事例――

ここで紹介する具体例は，マレーシア・サラワク州第二省スクラン河の最上流部に位置する一つのロングハウスでの調査より得られたものである。時間的には1975年９月を始点とし，1980年７月を終点とする約５年間にわたるビレック家族編成の変化をカヴァーしている[6]。この間，ロングハウスの構成ビレック数は20から23に増加し，人口も112から122へと増えている。ビレック数・人口ともにイバンのロングハウス共同体としてはほぼ平均的なものであり，したがって，一ビレックあたりの構成員数もイバン社会の平均値にきわめて近い[7]。この共同体をある時点で共時的に観察した場合，そこから得られるものは，前節で述べた意味で典型的で，ほぼ規範に即したビレック家族の集合体の姿であろう。ある時点 t1 と別の時点 t2 のそれぞれにおいて，そこに見られる家族集団の編成は模範論的な分析モデルに合致しているか，あるいはそれから大きくはずれてはいない。言い換えれば，この間のビレック家族の編成をめぐる通時的変化は，規範―構造論的なモデルの枠内での微細な変換を示すものにすぎないようにみえるのである。

しかし，すでに述べたように，規範―構造論的なモデルそのものには，こうした微細な変換を説明する指向はもともと欠けている。例えば最も単純なケースとして，ある個人Ａがビレック家族ａからビレック家族ｂにその所属を変えた場合を想定してみよう。この時もしａ，ｂともにＡに対して彼（彼女）を成員とすべき（またはしうる）規範的―構造的関係にあったとするならば，この変換を説明しうるのは規範―構造論的モデルではなくて，ＡとＡに関係する諸行為者の相互行為の過程の分析のみであろう。規範―構造論のモデルはこうした相互行為の拘束条件を与えることはできるが，最終的に相互行為を具体化する個人の選択決定の次元にまで下降することはできないのである。事実，ここで考察する期間中のビレック家族構成の変化は，構

6) 本説の具体例は1975年９月から1977年１月までの筆者による観察，1980年７-８月の再調査時における観察とこの間の変化についての聞き取りから傳られた資料にもとづいている。この２時点での当該ロングハウスの全ビレック構成と空間配置は【図０】のとおりである。1977年２月から1980年７月までの期間についての記述はしたがってすべて伝聞である。調査地の概況については拙著［内堀, 1996］を参照のこと。なお調査資金は第一期はオーストラリア国立大学から，第二期はユネスコ東アジア文化研究センターからのものである。記して感謝したい。

7) 一ビレック家族あたりの構成員数は1975年９月で5.6人，1980年７月で5.3人である。この減少は若いカップルによる独立のビレック家族が増えたためである。この数値はフリーマンが第三省バレー河地域で調査した３つのロングハウスの平均ビレック家族員数5.75人をやや下まわる。一ロングハウス共同体内の平均ビレック家族数はフリーマンの調査でも筆者の調べたスクラン河上流域でも約14であるが，このなかには家族数の極端に少ないものも含まれているので，印象としては17-18家族というのがロングハウスのイメージに近い。こうした曖昧な表現をせざるをえないのは，ロングハウス共同体の規模はばらつきが大きく，数量的にはなかなか典型的イメージが表現されないからである。

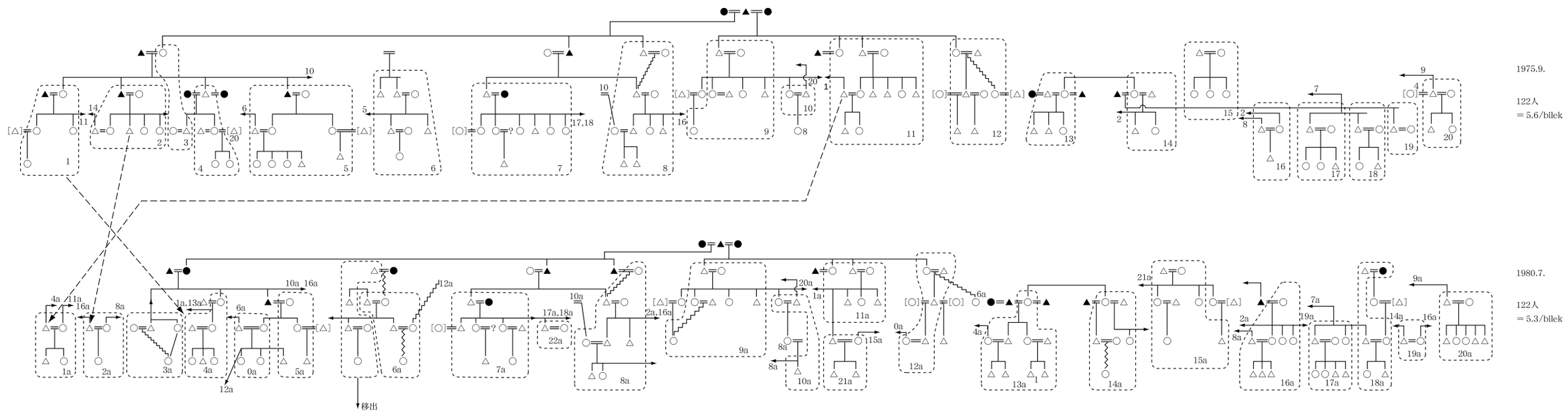


図 0　［ビレック配置と人的構成］

番号はロングハウスにおけるビレックの位置を表わす。
上図と下図のビレック番号が同じものは同一の居室。
上図になく下図にあるビレック番号は増加した分。

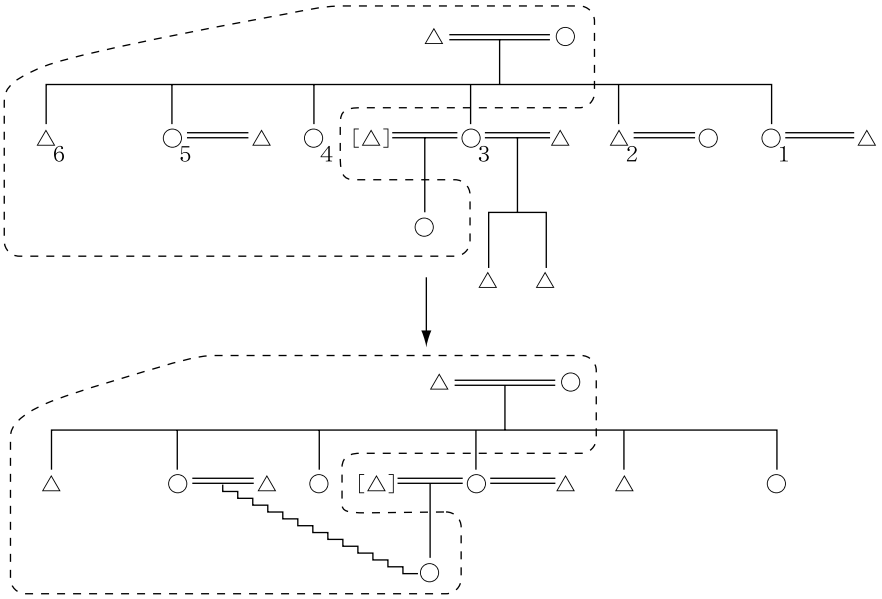


図１

上図は1975年９月（図０の９）。
下図は1980年７月当時（図０の 9a）。
付番は兄弟の年齢順。

造論的なモデルの呈示からはこぼれおちてしまうような，さまざまの個人的エピソードの累積である。こうしたエピソードをどのように掬いあげ，通時的過程のなかに個人の行為を位置づけていくか，これが本節の課題である[8)]。

【具体例１】まずきわめて単純な例から出発する。単純というのは，ここで経過した５年間という時のなかでは外側からの観察によるかぎりビレック家族の構成に変化が見られない例だからである。したがってこれを見ることによって，イバンのビレック家族の具体的イメージを得ることができる。このビレック家族の構成員は７名。内訳は，ロングハウスの長（世襲ではない）の夫婦，その第四子（女），第五子（女）とその夫，第六子（男），および第三子（女）の娘である（図１）。第一子（女）と第二子（男）はそれぞれ結婚して同じロングハウスに独立のビレックをかま

8) ここでは不十分なかたちではあるが，ヴァン・ヴェルセンの主張する「状況分析」situational analysis の手法を採用してみた。ブルデュー自身もヴァン・ヴェルセンへの基本的な共感を表している［Bourdieu, 1977, 202］。非構造的社会の「小さく，しばしば短命な集団における恒常的に変化する合従連衡によって結びついた諸個人」を行為主体とするとき，「［正常に対するものとしての］例外について語ることは十分な意味がない」Van Velsen, 1964, xxvii」という彼の議論には，イバン社会が「非構造的」であるかどうかは別にして，筆者の観点と相通ずるものがある。なお一般に「構造的」であると思われているヌアーの社会においても，世帯レヴェルの構成の現実態は構造的規範から逸脱する個別事象が数多く見られる［エヴァンズ＝プリチャード, 1985, *passim*］。こうした社会においても本節で記述するような個人の機略にもとづくプロセス分析が必要とされるはずである。イバンの場合は，構造的規範に合致しつつも，しかもその規範が個人に選択の余地を広く残している点でヌアーの例とは異なるとは言えよう。しかしヌアーの親族関係を読むとき，常に言及される規範の存在を別にすれば，ほとんどイバンと同じだという印象をもたざるをえないことも確かである。

えており，このビレックに娘のいる第三子は山越えで４時間ほど離れた別のロングハウスに，夫（娘の父ではない）と２人の幼児および夫の父母とともに一つのビレック家族をなしている。すなわちここに見られるのは，ロングハウス長夫婦のビレックをその娘である第五子とその夫という対が継承するかたちで実現された規範的構造体であり，しかもこれはすでに安定の状態に達しているとみなしてよい。

しかしこの安定状態のなかにも可能的な危機の種がひそんでいる。それは一つには精神的なハンディキャップを負った独身の成人男女各一（第四子・第六子）の存在であり，もう一つはビレックの継承者たる第五子の夫婦に子供ができる見込みがほぼ確実にないことである（この理由については伏せる）。この事態はビレック家族の将来を考えるとき，とくに第五子夫婦にとっては厄介な問題とならざるをえない。老人あるいは心身的なハンディから十分な生産活動に従事できない者を複数抱え，しかも生産にたずさわれる若年構成員が自分たちだけとなるような将来を，彼らは何とか避けようとしていた。この場合彼らにこのビレックを去って独立することは実際上不可能であった。1975年当時，彼らはすでに７年の結婚歴をへていたが，このうち最初の２年あまりは河の下流にある夫方のロングハウスで独立のビレックをかまえており，今のビレックに合流したのはビレックを継承し，妻の両親の老後に至るまで面倒を見ることのできる者としての最終候補，いわば切札としてだったからである。

こうしたなかで，彼らには第三子の娘，つまり妻のメイを養子として確保するという企図を選択するのが最も容易なことであった。この娘は1975年当時12歳で，その父はかつて妊娠した彼女の母と一時的には同居したものの，彼女の誕生前に別れていたという。それ以来彼女は，母が「再婚」して他ロングハウスへ去ったのちもこのビレックに住みつづけていた。したがって彼女は，オバ夫婦の養子になろうとなるまいと，まぎれもなくこのビレックの成員であったわけであり，それをあらためて養子とするという企図のうちには，将来にわたって彼女がこのビレックにとどまることを保証あるいは拘束するという黙契が含まれていた。しかしこの養取過程は徐々に，いわばなしくずし的に進行するほかなかった。1975年から1977年にいたるまで，第五子夫婦は時おり少女のことを「われわれの子」という言いかたで言及していたが，この間彼女はけっして彼らを「父母」とは呼んでいない。それどころか彼女はロングハウスの同年輩の少女たちといさかいを起こすと，しばしば遠いロングハウスにいる実母のもとに逃避し，時にはひと月以上もそこに滞在することがあった。このようなとき，ロングハウス長の妻（つまり少女の祖母）などは「これまでわれわれが育てたのに」という嘆きと非難の入りまじった声を発したものである。事実祖母の眼には，実母が成長した少女を引き取りたいと思っているようにみえたらしい。少女のこうした逃避行為は，1977年初頭に実母のビレック家族がはるか遠方のサラワク中北部に移住したことによって終止符がうたれることとなった。３年後の1980年になって下流の町の中学校に入学した彼女は，第五子夫婦を「父・母」と呼ぶようになっていた。

イバン社会における養取は多くの場合乳幼児をもらい受けるかたちで行なわれる。こうしたとき養取の取りきめは親同士によって行なわれ，そこに子供の意志の入る余地はない。これに対して上の例では，少女がいわば傍系の家族成員から将来ビレック家族を引き継ぐと期待される者へと意味づけの変化を受けるわけであるが，そこには少女の側に一定の範囲で選択の幅が残されている。こうした選択の幅をどのように利用するか，あるいは事態の進行のなかで――つまり他者の行為の累積によって――ほかの選択肢を利用することができなくなっていくかが，一般的な意味での

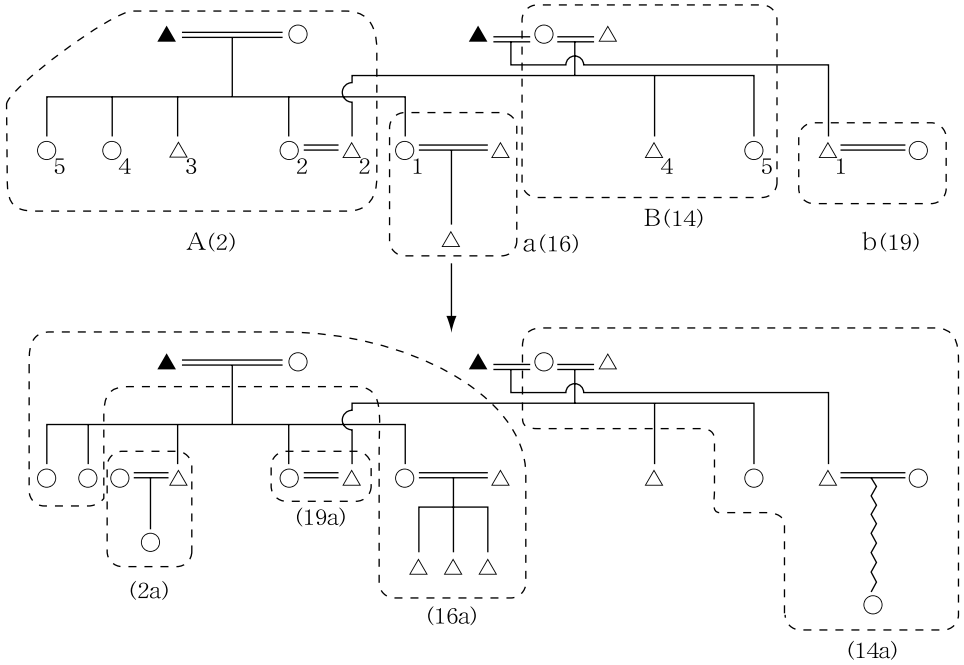


図２

上は1975年９月。
下は1980年７月。
カッコ内の数字は図０におけるロングハウス内のビレックの位置を示す。人に付した数字はそれぞれの兄弟年齢順。

通時過程における個人の行為の軌跡である。上の場合，第五子夫婦の側の希望，彼らと祖父母への心理的愛着，実母の移住による物理的隔離などの要因によって，少女が将来このビレックを出て，例えば実母のビレック家族へ加わるといった可能性がますます狭められていく過程としてこの５年間の推移を見ることができるわけである。

イバンのビレック家族編成をめぐる諸行為は，この例に見られるように，いかにして将来の継承者を確保するか，あるいはこれを若者の側から言えば，ある既存のビレック家族の継承者としてみずからの将来を描くか，それとも新たな独立のビレック家族を形成しようとするかといった，それぞれの行為者の目論見の実現ないし実現努力として理解される。そこには当然関係する人びとの目論見の相克があり，ときにはこれがドタバタ劇とも言いうるほどの騒々しい過程として現れることもある。

【具体例２】あるビレック家族の構成に変化がある場合，誕生・死といった自然過程によるものを除けば，これは必然的に別のビレック家族の構成の変化を伴うことになる。すでに強調したように，個々のイバン人はかならずどれか一つ，そして一つだけのビレック家族の一員でなければならないからである。もちろん変化の波及先のビレック家族は同一ロングハウスに属するものにかぎられるものではないが，ここで述べる例では，同一ロングハウス内で少なくとも四つのビレック家族が関わっている。図２に見られるように，75年９月当時，これら四つのビレック家族は，以前からあった二つのビレック家族と比較的最近になって独立・創設された二つのビレック

家族からなっていた。これを便宜上A，B，a，bと呼んでおく。Aは未亡人，その第二子（女）とその夫，第三子（男），第四・五子（ともに女）から成っており，aは未亡人の第一子（女）が同じロングハウスの別ビレックの次男と結婚して独立したビレック家族である。Bには一組の夫婦（妻は再婚）とその第四子（男），第五子（女）が同居していた。Bの夫婦の第二子（男）がAの第二子の夫である。bはBの夫婦の第一子（男）――正確には妻と死亡した前夫の子であるが，Bのビレックで養育され夫婦の子とみなされるにいたっている――と他のロングハウス出身の妻とからなる夫婦だけのビレック家族であった。Bの夫婦の第三子（女）は他ロングハウスに婚出していた(図には記していない)。

この時点での四つのビレック家族の構成は，規範的にとらえられたイバンの家族＝世帯構造にそれぞれ合致している。しかしその後の経過は，関係するビレック家族のほぼ全面的ともいえる入れ換えを引き起こした。この例は，規範的な構造がそれ自体として安定しているとは言えないこと，さらにビレック家族という集団の現実の再生産過程が「発展循環」論の内包するような半自動的過程ではないことを如実に示している。

動きはまずAで起きた。1975年12月，第二子夫婦がこのビレック家族から離脱しはじめたのである。彼らが結婚して妻方のこのビレックに居住してからわずか半年たらずのことであり，回顧的に見れば，この時期の彼らの居住，ということはすなわちビレック帰属については，なお未決着で曖昧なところがあったと言うべきであろう。というのはBの夫婦が彼らの妻方居住を認めるにあたっては，Bの第一子夫婦が独立のビレック家族bをいとなむのをやめてBに戻ることが了解ないし期待されていたが，この時点では第一子夫婦はこうした両親の期待を実現しようとはしなかったからである。第二子夫婦はとりあえずAのビレック家族に属する出作り小屋に移り，半独立的な生活を営んだが，この間Aの未亡人とは米や塩の消費をめぐって激しく口論をくりかえすこととなった。こうしたなかで二，三の調停者をもまきこんで幾度となく個人的折衝が行なわれ，結局1976年の焼畑作業開始（７月）にあたって，彼らはBのビレックに入ることになる。形式的に言えば，ここで若夫婦ほ夫方居住をとることになったわけである。この後Bの第四子は他のロングハウスに「よばい」に行ったまま，結婚して彼の地にいついてしまい，結果的にこのビレックから去っている。

第二子夫婦に去られたAのビレックでは，男手は15歳になる第三子だけとなった。この彼が学童の妹二人をかかえるビレックの状況にいやけがさし，亡父の唯一の価値ある遺産である鉄砲一丁をもって，同じロングハウス内の亡父の弟のビレックCに「逃げた」のは1976年９月のことである。Cにはオジ夫婦だけが住んでいた――オジの一人っ子の娘は同ロングハウス内の別ビレックに婚出していた――が，とくに将来を展望するというよりも一時的な保護のつもりで，そしておそらくは鉄砲の魅力もあって，少年の同居を許したものと思われる。とはいえこうして同居しているかぎり，少年の日々の生活はオジのビレック家族の完全な一員としてのそれであり，また少年自身みずからの決断によってこのビレックを「自分のビレック」と呼び，はっきりとAのビレックとの決別を主張するにいたった。この事件は関係ビレック間に深刻な亀裂を生じさせることになった。少年の母は彼とそのオジを恨むあまり，約３カ月にわたって彼らと言葉を交えなかったほどである。

以来，少年は77年の末に同じロングハウスの少女と結婚するまで，結果的にオジのビレックに住みつづけた。正式に養取関係に入ったわけではないが，事実上彼はオジを「父」とみなすようになっていた。しかし結婚に際してはそのままオジのビレック家族の継承者としてそこに住むつもりはなかったようであ

る。経過は詳かではないが，新しいカップルは少年のもとのビレック，つまり母が住んでいた居室に住むことになった。というのはそのしばらく前までAのビレックを維持していた母が，独立の生計を立てていくのに疲れてaのビレック家族に第四・五子ともども合流してしまっていたからである。少年は居住空間としての同じビレックに，今度は独立の新たなビレック家族を形成するものとして入居したわけである。ビレック家族としてのAはこうして消滅した。未亡人の第一子夫婦のビレック家族aはAの継承ではなく，イバンの主観的意味づけにおいては，今述べた少年のそれと同様に，独立の新しいビレック家族とみなされるからである[9]。

BとbのSその後の変化については簡単にふれることしかできないが，ここでも興味ある変換が起きている。1978年の農耕開始時に，それまで独立のビレック家族をなしていたbの夫婦(および彼らが76年に養取した幼女児)がBに合体し，それと入れかわりにBの第二子の夫婦が分離して，bが住んでいた居室に移り住むことになったのである。先に述べたように，もともとBの両親としては第一子夫婦が自分たちと同居してビレック家族の継承者となることを期待しており，これが実現されない段階ではしばしば紛糾を起こしていたのだから，結果的には彼らの期待が成就したと言えよう。だが，これは確実性をもって予期されていた結果ではなく，関係者間の思案を越えて錯綜することとなった相互行為が生み出しえたいくつかの可能な結果の一つであったにすぎない。

こうして1980年７月には，５年前とはその構成がほぼ全面的に置換された四つのビレック家族が存在することとなった。彼らの占める四つの居室は物理的にはもとどおりだが，エミックな意味では，実体的単位として存続したのはBとaであり，残りの二つが消滅し，あらたに二つのビレック家族が創出されたわけである。上の例で注目しなくてはならないことは，５年間のビレック編成の変換過程のどの時点を取りあげても，ビレック家族という小集団の編成原理そのものは一度も侵犯を受けていないということである。ここには規範的構造からの明白な逸脱はない。このことから，イバンの家族の構造的拘束性が個人の行為が実現されていくうえで前提となる強固な基盤となっている，という結論をみちびきたことは十分に可能である。しかしこの論理を逆の方向から見れば，現実の社会過程およびその時々の集団編成の具体相は，この構造的拘束性によってはほとんど何も説明されていないということもになろう。現に規範にそったビレック家族が実現されているにもかかわらず，なぜそれがくりかえし再編成されなければならないのかという問題に，構造論的な議論は対処しえないのである。

具体的な「構造体」――ここでは個々のビレック家族の構成のことであるが，抽象的な「構造」に対して，実現されたものをこのように呼んでおく――は，編成の原理そのものから無媒介的に生成するのではなく，原理にかなういくつかの可能性のうちの特定のものが時の進行のなかで相互行為に媒介され選択されることによって生成する。しかもこうして選択された構造体は，それが選択されたものであるだけに，機会があればまた別の選択にさらされなければならない。とすれば，上例における四つのビレック家族構成の急激な変換もけっして一時的な移行期ゆえの不安定とみるべきではなく，ビレック家族という集

9) Aのビレック家族が消滅したのであって，aにひき継がれたのではないことの文化的・象徴的表現は，合同にあたって，ジュズダマを栽培してはならないというAのビレック家族に特有のタブーが放棄されたこと，またそのビレック家族が継続するかぎり植えつづけるとされる「聖なる稲」――各ビレック家族がそれぞれ特定のものをもっている――が放棄されたことに見られる。第三子もこの稲を受け継がなかった。

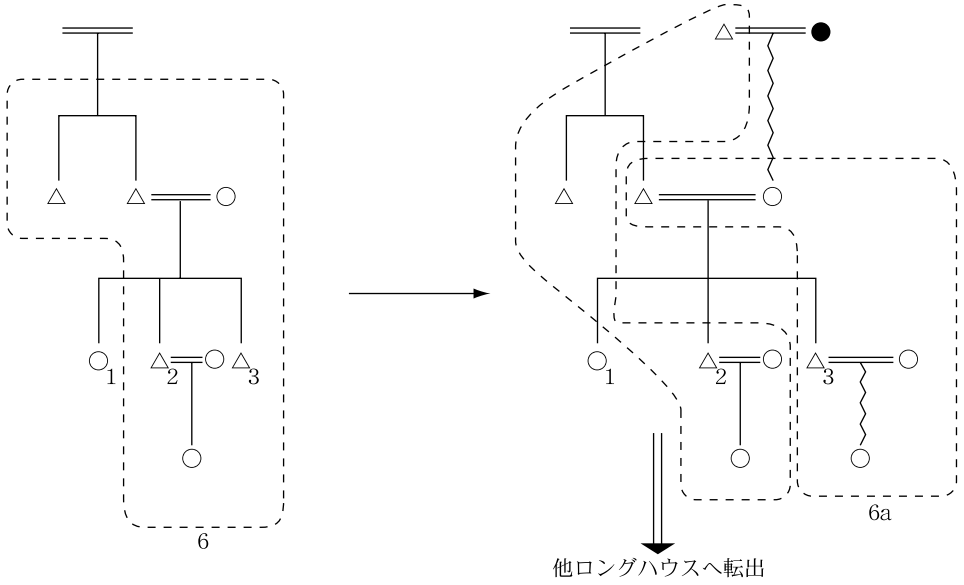


図3

左は1975年９月（ビレック番号は図０に対応）。
右は1980年７月。
数字は兄弟年齢順。

団編成の本質を幾分極端なかたちで現したものと考えるべきであろう。

このようにビレック家族の構成をとらえかえすことによって，例えば【具体例１】で紹介したような相対的に安定した構造体についても，これを消極的な選択の結果，言いかえれば他の選択肢のたまたまの不在とみなすこともできるのである。次の例に見るように，こうした安定したように見える構造体も，新たな選択肢が出現すれぱ，その時点で組み換えの可能性が生じてくる。

【具体例３】これは1975年当時には相対的に安定しているようにみえたビレック家族の例である。夫婦に子供が３人おり，そのうち第一子（女）は隣接するビレックに婚出していたが，第二子（男）およびその妻と子，独身の第三子（男），および夫の精神的なハンディキャップのある弟，が当時の構成員である（図３）。すでに三世代を含むこのビレック家族は，いわば「発展循環」の完成段階にあったと言うことができ，第三子が結婚する際には他ビレックに婚出ないし新しいビレック家族として独立するものと予想されていた。1976年はじめには妻の年老いた養父が加わっているが，基本的な構成に影響は与えていない。事実，1976年９月に第三子が，同じロングハウスに住み，かつて他ロングハウスに婚出していたが離婚して戻っていた女性と「結婚」したとき，彼は即座に女性方のビレックに同居しはじめたのである[10)]。

しかしこの「結婚」には男女どちらの側の親族も同意を与えなかった。そのため最初の同居はわずか３日で破綻し，その後彼らはそれぞれのビレックに別居せざるをえなくなった。自分の親――実父母ではなく養父母だったが――との関係が悪化した女は，こうして別居したまま夫方のビレックに出入りし，畑

10) イバンの「結婚」が男女間の性的な交渉に続く同居によって事実の積み重ねとしてなされることについては，［内堀, 1996, pp.63ff.］参照。

仕事も手伝うようになる。こうしたなかで，はっきりとはしないがおそらくは，この女性と第二子の妻とのあいだがうまくいかないことが一因となって，第二子夫婦はビレックを去り，しかも近隣にある妻方のロングハウス共同体に転出してしまった。もっとも農耕年がはじまっていたために，彼らはもともとの出作り小屋を住まいとして利用しつづけたので，見かけ上の変化はさほどドラスティックではなかった。ついで女性と第三子がロングハウスから突然姿を消したのは11月末のことである。この「かけおち」に動転した男の母は二人の居場所を求めつづけたが，１カ月ほどしてようやく，彼らが下流の町に近いロングハウスに寄宿していることが伝わってきた。伝聞によれば，1977年３月ごろ母は単身彼らのもとを訪れ，残り穂を穫って生活していた二人の帰郷をうながしたという。

1980年７月，もとのビレック家族は，両親と第三子夫婦およびその養子である幼児からなっていた。夫の弟と妻の養父は，第三子夫婦が戻ってからほどなくして，隣のロンゲハウスの第二子夫婦のビレック家族に引き取られていた。これは第二子夫婦からの申し出によるものだったとのことである。

相互行為の連鎖のなかで，ある行為者がなぜある特定の行為をとったか，そのすべての要因を確定することはできない。個人的な愛憎には，とくにそれが行為として発現する以前の状態では計りがたいものがある。個人を取りまくより顕在的な社会的条件あるいは先行する諸行為にかぎっても，そのすべてを知り，さらに一つの行為への規定性を特定することはむずかしい。ここに通時過程を行為論的に分析するさいのアポリアが横たわっていることは否定しがたい。【具体例３】における第三子の結婚をめぐる問題一つを取りあげても，われわれには――当たり前のことだが――なぜ彼がここで登場する特定の女性を選んだかを完全に説明する力はないし，この結婚に対する周囲の反応も，女性の生活史の相当多くの部分を知り，かつその生活史に対する他の行為者の評価にいたるまでを知ってはじめてある程度が理解されるのである。しかしそれでもなお，ビレック家族構成の交替過程を行為論の立場から見ることは，規範論の視点にとどまることに比べて明白な優位性をもっている。たとえ行為における選択の個人的動機のかなりの部分がブラックボックスに閉じこめられていても，その選択の集団構成に与える効果，【具体例３】で第三子の「結婚」が最終的にビレック家族継承者の入れ換えを起こしたこと，【具体例２】でＡの少年の離脱行為がビレック家族の消滅にみちびいたことなどは，かなりの確実性をもって特定できるからである。

本節の諸例においては行為の記述を集団の再編に直接かかわりのあるものに限ったため，現実の錯綜した相互行為のもつドラマ性が減じられてしまったきらいがある。しかし今のところ，これでビレック家族の動態とそのなかにおける個人の選択を探るには十分であろう。

4　行為の機略

ビレック家族をめぐる個人の行為の機略は何か。この問題をつきつめていくと，ビレック家族という集団の本質的特徴をどう見るかにかかわってこざるをえない。第１節で「集団先行論」への批判を示唆しておいたが，ここではさらに，この視点をイバン社会における小家族編成という具体的なコンテクストで展開することにする。

ビレック家族の「再生産」過程はなによりもまずその「再編」過程である，というのがわたしの主張である。この過程を既存の集団への新たな成員のリクルートメントという面からのみとらえ，リクルートメントにあたっての候補者の資格を抽象的に論ずることは，「発展循環」論がリクルートメントの諸契機を，それぞれが集団の編成に寄与する効果の

違いを無視して同列に並べるのと同様，この再編のダイナミクスを過小評価することにつながる。そこには当然のことながら，再生産をになうことになるいわば新しいメンバーの側の選択という側面は視野に入ってこないからである。出生，養取，結婚および合同というフリーマンのあげる四つのリクルートメントの契機のうち，実際にビレック家族の意味ある再編とそれにかかわる行為をそれ自体として内包しないのは出生の契機だけであって，ついでごく幼い子供の養取が出生に近似するものとみなせるくらいのものであろう。合同はその定義からして二つ以上のビレック家族の再編そのものにほかならず，また結婚が単なる一方の配偶者のビレック家族帰属の変更以上の再編効果を，関係する複数のビレック家族にもたらすことは前節の事例から知られるはずである。

直系家族としてのビレック家族の再生産の中心となるのは継承者の結婚である。これによってはじめてこの集団が将来にわたって存続しつづけるということへの最低限の保証が与えられるからである。出生と養取はある男女が結婚していることが前提であり，さらにイバン社会においては養取による子供は出生による子供と完全に等価のものとみなされるから，ひとたび結婚という関係さえ確立してしまえば，こうした子供が再び結婚適齢期にさしかかるまでは，後続世代のことを気にやむ必要はない。その意味で出生や養取，すなわち単純な意味での再生産は，結婚という契機に対して従属的なものにとどまるのである。ところで継承者の結婚ということには，形式的に言って，ともに選択を内包する二つの要素が含まれている。すなわち継承者の選択と彼（彼女）の結婚相手の選択である。この二つの選択というところにビレック家族の再生産過程が本質的に再編過程とみなされなければならない理由がひそんでいる。

再編過程とはビレック家族の再生産過程が当該のビレック家族の人員の増減という孤立した事象ではないということを意味している。ビレック家族が外婚単位であるからには，結婚についてはこれはまさしく自明のことである。しかしこの場合，結婚する男女の一方がビレック家族の継承予定者であり，かつ他方がそうでなければ，問題となりうるようなドラスティックな再編は起こらない。あるいは双方ともに継承予定者でない場合も同様である。ところが，これがイバン社会の性質を考えるさいに最も重要な点になるが，それぞれのビレック家族――より正確に言えばそのなかの中核的な親夫婦――は，継承者をあらかじめ１人の子供に限定的に予定したりはしないのである。彼らは可能ならばすべての子供を潜在的な継承者として確保しておきたいと望んでいると言ってよい。一つのビレック家族を超えた社会的拡がりのなかで継承者を計画的に均等配分するという見取り図は彼らの念頭にはない。そこで子供の結婚にあたっては，ほとんど常に二つのビレック家族間で新婚夫婦の居住をめぐって「つなひき」が起こることになる。あるいはより効果的には，そのまえに子供の結婚相手の選択に親が介入することにもなる。新カップルが独立のビレック家族を形成していればともかく，相手のビレック家族に入ってしまうと，継承者として取り戻すことは難しくなるからである。もっともこれが不可能でないことは【具体例２】に見られるとおりであり，こうしたときに現存ビレック家族の再編過程が最も顕在的に現われるのである。

継承者の最終的な選択が時間的にひき延ばされることは，実は継承の候補者たちがビレック家族の継承を多くの場合望んでいないことの結果であるにすぎない。したがって正確には，この選択は継承候補者の行為によって，ひき廷ばさざるをえないのだと言うべきである。たいていの場合，この行為は積極的な行為というよりも，継承を覚悟する意志をはっきりと表さないという不作為ないし消極的行為のかたちをとる。親夫婦にしてみれば，子

供が結婚して自分たちと同居していても，つまりその時点で継承者らしくあっても，いつ出て行かれるかわからないという不安に常につきまとわれているわけである。そのためにこそできうるかぎり複数の潜在的継承者が必要とされるのである。継承者選択は，こうして見るといわば世代間の「かけひき」であって，そこでは親と子のあいだに相当長期間にわたる相互行為が展開されることになる。たとえば結婚に過度に親が介入した場合，子供はしばしばかけおちでこれに対応するが，これとても最終的な決定ではなく，それに続く幾多の「かけひき」の初発局面であることが多い。このような世代間「かけひき」に，兄弟姉妹間のババ抜きゲームにも似た責任転嫁，その配偶者たちの親の目論見が加われば，ビレック家族編成，ということはその再編をめぐる相互行為のインベントリー，つまり社会的行為者の行為の機略目録はおおかた出そろってしまうであろう。

ビレック家族をめぐる行為の機略は，将来の事態が予測しがたいなかで，それぞれの行為者がどのように自己の利得を最大限追及していくかにつきるわけであるが，行為者相互の利得が最も端的に相克しあうのが継承という契機であった。継承候補者はこれに主体的にかかわり選択的に行為するのである。リクルートメントという視点に欠落しているのはこのことであった。ビレック家族は共同生産の単位であると同時に，あるいはそれ以上にその内部での消費の共同性を保証する単位である。利得とは共同生産と共同消費の個人にとっての長期にわたるバランスシートのことだと言ってよい。したがって，行為者が単純に利得を追い損失を避けようとするならば，自分が生まれ育ったビレック家族を結婚と同時に去り，夫婦で新たなビレック家族を作って，将来は老後のためにその継承者を確保するのが最も効率的だということになる。私権地に区切られていない「原住民慣習地」に位置するイバン社会では，焼畑のための土地は実質的にロングハウス共同体の成員すべてに開放されているから，あるビレック家族が特別の家宝とかゴム林などの家産に特に恵まれていないかぎり，既存のビレック家族を継承することに物的なメリットはない[11]。こうした状況下で，イバンの若者は特殊な場合を除いて普通には独立を指向するのである。上位世代の夫婦はこれを強制的に止めることはできない。したがって継承をめぐる機略においてイニシャチヴをとるのは基本的には常に若者の方である。

このように機略の視点からビレック家族をとらえかえしてみると，集団先行論的なアプローチをここで採ることはこの集団のむしろ特殊な面のみを強調することになることが理解できよう。ビレック家族という集団は既存のものに後続のものが取り込まれることによって成り立っているというよりも，結婚を契機として男女の対が作りあげていくものと考えたほうが論理的に一般性が高い。フリーマンはビレック家族の発展循環が完結したあとは，これが理想的には永続するものとみなした。この指摘はそれとして正しい。しかし，そこには一つの論理的落とし穴がある。すなわち集団の永続性は望まれているものであっても，そのことは集団が過去から永続してきたものであることを意味しないのである。事

11) ビレック家族を日本のイエの萌芽形態と見る中根［1970, p.117］の次の指摘は興味深い。他書からの引用になるが，継承者の資格が相当厳格に規定されているイエの場合でも，「いうべきほどの家産のない非常に貧しい世帯のあいだでは，個々の成員の都合次第でどんなタイプの継承も行なわれうる」［Nakane, 1967, p.11］。イバン社会においては，たとえ彼らの主観にとって意味ある財産があったとしても，いかなるタイプの継承もありうる。この点でイバンの双側主義ないし無性主義，非年齢主義は徹底している。しかし，機略の観点からすると，有産のビレック家族は継承者を得るのに容易であり，しかも一旦継承者が決まれば，その安定度は高くなる。この場合，継承をめぐる機略において，イニシャチヴが上位世代者ににぎられる可能性もあるわけである。

実としても，ビレック家族には発展循環の最初の段階のものが相当多く，これがむしろ常態と言えるほどである。したがってビレック家族を分析するときには，論理としても事実としても，その生成の位相に着目することが決定的に重要なこととなる。生成の位相から見るとき，ビレック家族は集団としての過去に存在の根拠をもつ過去指向的なものではなく，未来指向的な集団だと言わなければならない[12]。

この意味で，ビレック家族に疑似的にせよ出自論的な議論を適用することは不適切である。若い夫婦が独立するときはもちろん，一方の配偶者の親のビレック家族と同居しその継承者となる場合でも，夫婦という対で――潜在的には独立しうるものとして――それを継承することを選択したのであって，そのビレック家族は彼らの結婚が存続しているかぎり夫婦が共同で所属するビレック家族である。したがって，そこに生まれてくる子供は夫婦の子供として夫婦の所属するビレック家族に生まれてくるのであり，フリーマンが言うように「父かあるいは母のビレック家族に」生まれ，その成員となるのではない。そのことは，結婚に際してたとえば妻が夫方のビレック家族に居住した後に離婚した場合，夫婦のあいだの子供が夫方のビレックに残るかどうかはまったく不確定であることからもうかがい知れることである。フリーマンは結婚後の居住形態と子供の所属に関して，択一的居住 utrolocal residence あるいは択一的親子関係 utrolateral filiation という表現で，「男女どちらか・父母どちらか」という「二者択一性」の属性概念を提出し，この双側（双系）親族関係を軸とする社会における選択のあり方を分析したが，実はイバン社会における選択の幅は「二者択一」の概念が意味する以上に大きいのである。フリーマンは，究極的には出自論に由来するこの概念を採用することによって，「独立居住」の過程のなかで生成する新しいビレック家族の存在が明示し，またさまざまの再編過程が暗示するこの集団の本質的特徴を，十分にはとらえきれなかったと言わざるをえない。

5 結論――構造と「戦略」――

これまで述べてきたような集団編成をめぐる個人の行為とその機略のあり方を根本的に規定しているのは，イバン社会がビレック家族という自律的小集団によってすき間なく覆われているという事実である。ビレック家族の内的構成が行為論の視点からとらえかえすことができたにしても，この事実は，個人の行為が上に論じた意味での利得追求の機略として成り立つ根源的な基礎であり，個々の行為者にとっては先験的に与えられた行為の前提的枠組として現われる。それは構造的なものであり，かつ規範的なものであると言ってよい。すなわち，個々のビレック家族は機略的行為によってさまざまな構造体として生成され再編されるが，より深いレベルではこの

12) フリーマンはビレック家族の永続性を強調するあまり，その過去連続性を過大に評価するような記述をしている［1970, pp.31ff.］。ビレック家族の継承者として夫婦という対ではなく，出自論的な視点から一人の特定の実子ないし養子であると見る彼は，ビレック家族の継承線を過去にたどることができるとする。しかし，彼も認めているように，こうしてたどれる現実のビレック家族の深度はせいぜい３-４世代にすぎない［ibid., p.33］。しかも彼の呈示した107ビレック家族のうち38%までが三世代に満たないという事実がある［ibid., p.12］。このうちの相当部分が「新しく」創出されたものであろう。本論で扱ったロングハウスの場合，1975年当時で33%，1980年で39%がこうしたビレック家族である。仮りにこの比率が同じだとすると，一つのビレック家族として４世代前にも「存在」したものの全体の20%にも満たないことになる。ビレック家族の独立にあたっては，既存のビレック家族からの副次的な「聖なる稲」の継受が行なわれるが，このことによって新しいビレック家族が親ビレックの支線とみなされるわけではない。イバン社会の双側性原理の基本を夫婦という対の生成に求めるとき，そこで言われる双側性原理は出自論的な概念というよりも，関係生成の原理とみなしたほうがよいことになる。

社会の構造的特質によって決定づけられているのである。そこで本論を結ぶにあたって，イバン社会の構造的特質と個人の機略との関係について簡単に補っておきたい。

イバン社会は，その歴史を見てもまた現状を見ても，常に拡大していくことによって成り立ってきた社会である。移動性の高い焼畑耕作を人口的に過疎といえる環境のなかで営んでいるという生態的与件が，このイバン社会の拡大傾向と相伴している。イバン社会の全体を一つの集合的組織体とみなす一種のアナロジーを用いれば，拡大的移動という現象はボルネオ島という自然環境と他民族集団との関係を含む社会環境のなかでこの組織体が採った，生存のための一つの「戦略」であったと考えることができる。この場合，ビレック家族という小集団は組織体の一つの単位，それも全組織体を内部からくまなく構成していく，いわば細胞ともみなしうる単位である。ところでこの細胞は，第２節で述べたように，自律性のきわめて高い単位集団であり，現実に存在しているより大きな社会集団，つまりロングハウス共同体の規制から原則的に自由でありうる存在である。ここでわれわれは，イバン社会の拡大がこの自律的で，しかもすべての個人がそのうちのどれか一つに属するという意味で「全社会的」な単位によって担われていたということに注目しなければならない。イバンの移住は基本的にはビレック家族単位――ないしは少数のビレック家族の連合――によって行なわれるのである。ビレック家族はその「小ささ」と機動性によって，組織体拡大の前衛の役割をよく果たしうるのだと言ってもよい。

このことを一言でいえば，イバン社会の構造的特質は全体としての拡大という戦略によって要請されたものである，と要約することができる。ここで注意しなければいけないのは，このことはすべてアナロジーにもとづいているということである。イバン社会は現実には決して一つの組織体ではない。ここで行為する個人は純粋に個人間の相互行為としてだけ行為しているのであって，社会全体についてはなにも見えていない。この意味で社会の戦略はいわば主体なき戦略と言いうるものである。しかしそれにもかかわらず，社会の全体様態は結局のところ個人の行為の歴史的集積にほかならず，社会的人間としての個人が主体的動作主としてみずからの利得追求の機略にそって行為することは，ビレック家族の編成における流動性を高め，結果的にその単位集団としての機動性を増大させていくことになる。これによって具体的には，移住に適合する小さな構造体，利害の一致した成員から成る構造体が適宜形成されうるのである。あるいはまた，焼畑農耕における不作の危険に対しても，その時々での一時的な成員の組み換えという個人的機略が行なわれることによって，究極的には社会の生存戦略を組み立てていくことになる。

平等主義的かつ競争主義的と形容されるイバン社会にあって，個人の機略こそが社会の戦略と構造を絶え間なく生成し，恒常的に実現させているのである。イバンの社会はアモルファスなアメーバのような印象をいく人かの研究者に与えてきた[13]。そうした印象を与えるもの，それがビレック家族という小集団の自律的な地位であり，さらにはその編成をめぐる個人の行為の機略的なあり方である。

【謝辞】

この論文の初稿は，もともと国立民族学博物館共同研究会『集団の編成と統合』（福井勝義代表）の成果公刊論文集に寄与するため

13) たとえば歴史家の印象として Pringle［1970, pp.28ff.］。本稿における機略と戦略の使い分けはセルトー［1987, pp.97ff.］における戦術と戦略の区別にやや近いところもあるが，個人の行為として見たときの後者の区別は実態的というよりも概念的区別である。私は戦略の語を社会全体に関する面でのみ用いる。

1985年９月に用意された。論文集は今なお未刊だが，17年間眠っていたままの初稿をこのまま死に至らしめるのも惜しく，ここでふたたび起こすことにした。時間の経過を考えて「エピローグ」を書き足そうかとも思ったが，必要とされる理論的再考察とともに，別稿としてまとめるほうが議論の整合性を維持できると考えなおした。したがってこの論文は初稿に必要最低限の加筆修正をほどこしただけのものとなっている。たいへん楽しくかつ魅力的な話題に満ちた研究会を組織してくれた福井教授に，たいへん遅い感謝を申し上げたい。

参 照 文 献

Barth, Fredrik. 1981. *Process and Form in Social Life*, Routledge and Kegan Paul, London.

Bourdieu, Pierre. 1977. *Outline of a Theory of Practice.* Cambridge Studies in Social Anthropology 16, Cambridge.

セルトー・ミシェル・ド　1987 『日常的実践のポイエティーク』（山田登世子訳）国文社。

エヴァンズ＝プリチャード E.E.　1985 『ヌアー族の親族と結婚』（長島信弘・向井元子訳）岩波書店。

Freeman, Derek. 1957. 'The Family System of the Iban of Borneo', in Goody, Jack (ed.) *The Developmental Cycle in Domestic Groups*, Cambridge University Press, Cambridge.

———. 1970. *Report on the Iban*, Athlone Press, London.

———. 1981. *Some Reflections on the Nature of Iban Society*, An Occasional Paper of the Department of Anthropology, Research School of Pacific Studies, The Australian National University, Canberra.

村武精一　1973 『家族の社会人類学』，弘文堂。

Nakane, Chie. 1967. *Kinship and Economic Organization in Rural Japan*, Athlone Press, London.

中根千枝　1970 『家族の構造』東京大学出版会。

Pringle, Robert. 1970. *Rajahs and Rebels: The Iban of Sarawak under Brooke Rule, 1841-1941*, Cornell University Press, Ithaca.

清水昭俊　1970 「〈家〉の内的構造と村落共同体」，『民族学研究』35巻３号，pp.177-215。

Sutlive, Vinson, Jr. 1978. *The Iban of Sarawak*, AHM Publishing, Arlington Heights.

田辺繁治　2002 「再帰的人類学における実践の概念――ブルデューのハビトゥスをめぐり，その彼方へ――」，『国立民族学博物館研究報告』26巻４号 pp. 533-573。

内堀基光　1996 『森の食べ方』東京大学出版会。

Van Velsen, J. 1964. *The Politics of Kinship*, Manchester University Press, Manchester.

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【論　文】

ホ ー ・ チ ・ ミ ン と ス タ ー リ ン

―ホー・チ・ミン訪ソ（1950年２月）の歴史的意義―

栗　原　浩　英
（アジア・アフリカ言語文化研究所）

Ho Chi Minh and Stalin:

The Historical Significance of Ho Chi Minh's Visit to the USSR in February 1950

Kurihara, Hirohide
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

This paper aims to analyze the historical significance of Ho Chi Minh's first visit to Moscow in February 1950 as the President of the Democratic Republic of Vietnam, especially some factors that motivated him to make a dangerous and long journey to Moscow via Beijing and the content of his dialogue with Stalin, utilizing the recently released archival sources related to Stalin in Russia.

Originally Ho Chi Minh's visit to the USSR was planned to deal with the following matters: 1) the political and military situation in Vietnam and the perspective on the future of the Vietnamese revolution, including the Indochinese Communist Party's (ICP) role there; 2) Soviet support for the ICP and the DRV; and 3) the establishment of diplomatic relations between the USSR and the DRV. During his stay in Beijing at the end of January 1950, however, the third matter was withdrawn because the USSR officially recognized the DRV on 30 January 1950. With the help and arrangement of Liu Shaoqi, Ho Chi Minh departed for Moscow by train on 3 February. He was supposed to have arrived in Moscow on 13 February at the earliest. In Moscow, Ho had talks with Stalin on the above-mentioned matters, presumably accompanied by Mao Zedong, who had also stayed there since December 1949 for the Sino-Soviet treaty negotiations.

In the talks with Ho Chi Minh in Moscow, Stalin basically agreed with Ho's revolutionary strategy and the results gained by his forces, but at the same time demanded the agricultural revolution be implemented, emphasizing the class struggle between peasants and landlords. So why did Stalin refer to the agricultural revolution, the contents of which were completely incompatible with the policy of building a broad national united front adopted by the ICP at that time? On this matter we must note Stalin's own comments (February 1951) to the draft platform

Keywords: communist party, aid, agricultural revolution, diplomacy, national united front

キーワード：共産党，援助，土地革命，外交，民族統一戦線

of the Communist Party of Indonesia (PKI). In fact it was a joint document prepared by the Chinese Communist Party (CCP) and the representatives dispatched from the PKI to Beijing in October 1950. Interestingly Stalin's comments show his disagreement to the formation of "the broadest united front" or the guerrilla warfare strategy pursued by the national liberation army based in the rural areas in Indonesia, most of which clearly originated from Maoist revolutionary strategy. It seems that Stalin never agreed to apply Maoist revolutionary strategy to other communist parties in Asia although he made much of the CCP leaders like Mao Zedong, Liu Shaoqi or Zhou Enlai, and allowed them to support other countries like the DRV or North Korea politically and materially.

On the other hand, after returning to the Viet Bac liberated zone by the beginning of April 1950, Ho Chi Minh was to take a series of actions to realize Stalin's order, including military liberation of the Sino-Vietnamese border area and the "land reform", i.e. the DRV's version of an agricultural revolution, with the help of the Chinese Military Advisory Group.

はじめに
Ⅰ失われた絆の回復
Ⅱホー・チ・ミン訪ソをめぐる外形的な問題
　1．モスクワに至るまでの旅程
　2．中国共産党指導者との関係について：北京―モスクワ―北京
Ⅲホー・チ・ミンとスターリンの会談内容
　1．会談におけるスターリンの発言とその政治的影響
　2．スターリンによる土地革命提起の背景
むすびにかえて

はじめに

ホー・チ・ミン（1890？-1969）の生涯において，ソ連は中国と並んで決定的に重要な位置を占めた国家であった。インドシナ共産党の活動家として1920年代から30年代にかけてモスクワに滞在してコミンテルン中枢に勤務した経験をもつホー・チ・ミンであったが，1938年にモスクワを離れた後，ベトナム民主共和国主席（国家元首）として非公式ながら中国経由で同地を再訪する機会がめぐってきたのは1950年になってからのことであった。その時のホー・チ・ミンとスターリンの会談が結果として二人の最初にして最後の歴史的な邂逅となった。

祖国への帰還後，ベトミンを率いて八月革命を実行して，曲がりなりにも1945年９月ベトナム民主共和国独立宣言を行ったものの，直ちにフランスとの戦争に入らなければならなかったホー・チ・ミンにとって1950年は大きな転機を記した年となった。同年１月18日，30日とベトナム民主共和国（以下，民主共和国と略称）が中国とソ連から相次いで承認を受け，外交関係を樹立したことは，政治・外交・軍事各面における民主共和国の国際的な立場が強化される起点ともなりうる大きな歴史的事件であった[1)]。それは国際的承認を得ることができないままに，ベトバック（越北）地方を根拠地としながらフランス植民地主義

1) 中国が他国に先駆けて民主共和国を承認した１月18日は，民主共和国政府により「外交的勝利を記念する日」と定められた（1951年１月15日）。*Tin tuc*, 15-1-1951.

者と戦う抵抗勢力としての実態しかもっていなかった民主共和国にとって，国家としての要件を備えるための必要不可欠な第一歩でもあった。また，中国・ソ連に続いて民主共和国が朝鮮（１月31日），チェコスロヴァキア（２月２日），ドイツ民主共和国（２月３日），ルーマニア（２月３日），ハンガリー（２月３日），ポーランド（２月４日），ブルガリア（２月８日），アルバニア（２月11日）からも承認され，相互に外交関係を樹立したことは，冷戦構造の中で自らが社会主義陣営に帰属することを民主共和国自身が明確に意思表示したという点においても重要であった。

このような民主共和国を取り巻く国際環境の変化の中で，「革命的国際主義の最も有能かつ敬愛する指導者」スターリンと会談することができたのは[2]，ホー・チ・ミンにとってみれば大きな栄誉と自信の源泉となったことは疑問の余地がない。しかし，その歴史的な重大性にもかかわらず，ホー・チ・ミンの訪ソに関しては従来，資料面での制約から，基本的な事実を把握すること自体著しく困難な状況に置かれてきたため，これを研究対象としてとりあげることはおよそ不可能であった。基本的な事実すら確定しえないという問題に関してみれば，まず訪ソの時期をめぐり，いくつかの異なる言説が流布されてきたことをあげなければならない。ホー・チ・ミンとスターリンの会見の時期に関しては，1949年12月，1950年初頭という二つの言説が存在してきた。1949年12月という説はベトナム共産党の公式な党史において記述されたものであるが[3]，そのベトナム共産党がドイモイ開始以降に編纂した『ホー・チ・ミン年表』では，それを1950年２月へと修正している[4]。さらに，中ソ条約締結交渉のためホー・チ・ミンと同時期にモスクワに滞在していた毛沢東や周恩来ら中国共産党の指導者との関係についても，どこまで行動を共にしていたのかが不詳であった。具体的には，ホー・チ・ミンが北京からモスクワへの往復に際して彼らと行動を共にしていたのか，あるいはホー・チ・ミンとスターリンの会談の場に中国共産党指導者も列席していたのかなどの問題である[5]。また，ホー・チ・ミン訪ソの核心ともいうべきスターリンとの会談の内容に関しても，フルシチョフの回想録がそれに具体的に言及した唯一の文献であるという状況が長く続き[6]，その真偽を検証する術がなかったために，民主共和国とソ連の関係をめぐるホー・チ・ミンとスターリンそれぞれの政治的な思惑を分析することはほとんど不可能のように思われた。

しかし，1990年代以降ホー・チ・ミンの訪ソに関する資料状況にもやや変化の兆しが見えてきた。断片的ではあれ，ベトナム共産党指導者の回想録が出版され，ホー・チ・ミンが当時どのようなことを側近に吐露していたのか，あるいはスターリンとの会談で何が話し合われたのかなどの問題について知ることができるようになった。また，ロシアで公開されたスターリン関連文書の中にホー・チ・ミンの書簡が含まれていたことは，訪ソの時期を確定する上で大きな貢献をするものとなった。本稿はこのような資料状況の変化を受けて，これまで研究対象とされてこなかった

2) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.8.
3) Ban nghien cuu lich su Dang trung uong 1981, tr.596-597. Ban nghien cuu lich su Dang trung uong 1884, tr.610-611. なお，ソ連共産党中央委員会とベトナム共産党中央委員会の共編になる次の文献はドイモイ開始直後に刊行されたものであるが，そこでも，同様な記述が踏襲されている。Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПСС, Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПВ 1987, с. 189.
4) Vien nghien cuu chu nghia Mac–Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.403-408.
5) これに関しては石井明が早くから，言説に差異が存在することを指摘している。石井明 1990, pp. 269-271.
6) Хрущев, Н.С. 1999, с.114-115.

ホー・チ・ミンの訪ソ（1950年）を中心にして，民主共和国成立からスターリンの死去までの時期（1945年〜1953年）をも視野にいれながら，二人の相互間の認識や民主共和国をとりまく国際環境，とりわけ同国とソ連の政治的な接点を明らかにすることによって，訪ソ前後の歴史過程を再構成し，その歴史的意義を再検討しようとするものである。

Ⅰ　失われた絆の回復

ホー・チ・ミンは1920年代前半から30年代後半にかけての７年余をグエン・アイ・クオックの名をもって，コミンテルンの活動家としてモスクワで過ごした経験をもつ。そのうち，スターリンがソ連の党と国家の実権を掌握した時期と重なる1930年代のモスクワ滞在は，ホー・チ・ミンにとって心地よいものではなかったと考えられる。彼に対しては若輩のインドシナ出身活動家たちから，ベトナム共産党の結成に際しての行動が独断であるとの非難が寄せられたり，階級対決路線のもとでホー・チ・ミンの思想は度々改良主義的であるとの非難の対象になったりしていた。ハー・フイ・タップが中心となってスターリンにあてた書簡においても，名指しこそされなかったものの，グエン・アイ・クオック起草の文献が非難されていたのである。この時，東方書記局でインドシナを担当していたヴァシーリエヴァの庇護がなければ，その滞在はより辛苦に満ちたものとなったことであろう[7]。

1935年，コミンテルンの機構改革によって地域書記局が廃止された結果，コミンテルンは，旧東方書記局が管轄していたアジア・アフリカ地域の情報収集能力を喪失しつつあった。ホー・チ・ミンはこのような状況の中で比較的コミンテルン末期までモスクワに滞在していたインドシナ共産党活動家の一人となっていたが，1938年，モスクワを離れて中国に向かい，延安に到着する。モスクワでは東方勤労者共産主義大学も閉鎖され，そこで最後まで活動していたグエン・カイン・トアンのようなインドシナ共産党の関係者も帰国したことによって，ソ連とインドシナの接点は事実上失われることになった。ホー・チ・ミン自身は，広西や雲南が活動の主たる舞台となり，また土着共産主義者との結合に努める中にあってもコミンテルンの活動家であることを忘れてはいなかったが，1943年コミンテルンが解散したことで，もはやソ連とインドシナを結びつける絆は完全に消滅したといってよいであろう[8]。

ソ連はその後，インドシナに関する情報をほとんど持ち合わせていなかったようである。当時，ソ連にとってインドシナ情報の収集源となっていたのはパリであったが，駐仏大使ボゴモーロフの報告（1945年８月20日付）が，インドシナではフランスによる保護は望まれていないと述べたり，インドシナを国連安全保障理事会の保護下におくことを提案したりしているのは，インドシナで抗日闘争を進めてきた運動主体がいかなる政治勢力であるのかが把握されていなかったことをよく示している[9]。また，ホー・チ・ミンがコミンテルンで活動した経歴をもつとはいえ，ソ連におけるその知名度がどれほどのものであったのかも疑問とせざるをえない[10]。コミンテルン執行委員会委員をつとめたレ・ホン・フォンやインドシナ共産党書記長となったハー・フ

7) 栗原浩英 1995, pp.63-65.
8) 1935年以降，1943年のコミンテルン解散までのインドシナ共産党の動向については以下を参照。栗原浩英 2000a, pp.99-119.
9) Бухаркин, И.В. 1998, с.126.
10) ホー・チ・ミンはロシア語では Хо Ши Мин と表記するが，1945年段階では Хоцхиминг あるいは Хочимин と表記されており，ソ連にとって未知の人物であったことを示唆している。Бухаркин 1998, с.127.

イ・タップの方が，コミンテルン内のランクとしては上位であったからである。こうした事情を反映してホー・チ・ミンの経歴に関しても十分な情報がなかったものと思われる。コミンフォルム第１回協議会第２回会議（1947年９月23日）において，フランス共産党代表デュクロは，インドシナ情勢に関して「［ラマディエ政府には一筆者注］ホー・チ・ミン（20年間共産主義者であった）を排除して，バオダイ前皇帝を権力に復帰させようという意図がある」と述べているが，当時の国際共産主義運動の指導者ですらホー・チ・ミンについてその程度の知識しか持ち合わせていなかったのである[11]。

民主共和国独立宣言直後，ホー・チ・ミンはスターリンあてに相継いで書簡（1945年９月22日にモスクワ着）と電報（1945年10月21日付）を送り，インドシナ情勢の重大な変化（バオダイ帝の退位と民主共和国臨時政府の成立）を報告するとともに，飢饉に直面したトンキン人民への支援要請やフランスによる再侵略行動の違法性などを訴えたが，これらに対するソ連側からの回答はないままに終わった[12]。また，民主共和国承認に至る過程で両国の接触に関しては，1947年９月にスイスで国内情勢，共産党内情勢，ベトナムにおける戦争に対する国際的反響について両国の使節の間で会談が行なわれたことが唯一確認できるにすぎない[13]。

このようなソ連側の対応の背景には，前述したように情報が決定的に不足し，判断材料が欠如するという状況の中でソ連が慎重な行動をとらざるをえなかったという事情が存在していた。ホー・チ・ミンに限らず，フランスもインドシナに関してはソ連に対するアピールを展開していた。フランスの駐ソ大使は1949年，最高会議幹部会議長シュヴェルニクあてに書簡を送り，ベトナムにおけるバオダイを元首とする政府の成立とその合法性を説明している。ソ連政府はこれに対しても回答を示さなかったが，この時の対応に際してグロムイコ第一外務次官がスターリンあてに提出した判断は概ね次のようなものであった。(1) バオダイ政府は実体のない傀儡政権であり，民族解放闘争抑圧のために利用されている。このような状況の下で，ソ連はその「政府」の存在を承認することはできない。(2) ソ連政府はこれまでインドシナにおける事件に対して自らの観点をフランスには表明していない。外務省はフランス政府と現在この問題に関する取り決めを行なう根拠はないものと考える。(3) フランスはバオダイ傀儡「政府」を国連に加盟させようとしているが，これに関してみればホー・チ・ミン政府が国連加盟申請にあたって提起した観点の方（1948年11月22日付）がわれわれにより近いものをもっている[14]。ここには，当面事態を静観して，バオダイ（フランス），ホー・チ・ミンいずれの側への加担をも回避しようとするソ連政府内の慎重な観点が明示されているといえる。

さらにより大きな環境として，当時のソ連の対外政策全体において，インドシナ問題は重要度からすれば，決して高位のランキングを付与されていたわけではなかった。民主共和国独立宣言（1945年９月２日）からソ連による民主共和国承認（1950年１月30日）までを範囲として，全連邦共産党政治局会議の議題としてあげられた対外的なテーマのほとんどは，東欧諸国，ドイツ問題，中国などに集

11) Федеральная архивная служба России, Росийский центр хранения и изучения документов новейшей истории, Фонд Джанджакомо Фельтринелли 1998, c.99.
12) Бухаркин 1998, c.126-127.
13) РГАСПИ ф.17 оп.128 д.404. “Беседа посланника СССР в Швейцарии с заместителем государственного секретаря при Президентуре Совета Министров Республики Вьетнам о положении в стране и в коммунистической партии, международные отклики на войну во Вьетнаме.”
14) Бухаркин 1998, c.128.

中しており，インドシナに関してはわずか２件，フランス駐ソ大使の書簡（1949年10月21日に議題として上程）と民主共和国との外交関係樹立(1950年１月30日に議題として上程）を数えるにすぎない[15]。その意味で，「当時ソ連は内外に急を要する問題を数多く抱えていたため，ベトナム問題はその関心を引くまでに至らなかった」というレ・キム・ハイの指摘はその通りであるが[16]，同時にそれはソ連政府の単なる無関心や無策を意味するものではなく，政府内部にインドシナに関する情勢判断が存在していたことも看過されてはならない。

他方，ソ連から民主共和国の承認が得られないという状況に関して，ホー・チ・ミンは民主共和国独立宣言からそう隔たっていないものと推定される時期に周囲に次のように説明していたという。

「今ソ連が私たちを承認する声をあげることができないのは，時期尚早だからだ。私たちはまず自分たちには独立を堅持するに足る力があるということを証明しなければならない。承認した後にこちらが敗北したら，外交面で厄介なことになるだろう。しかし，心の中ではソ連の同志たちは私たちを支持してくれている。私たちは正義の闘争を進め，日ごとに多くの国の支持をかちとっていこう。心配することはない。」[17]

ホー・チ・ミン自身もソ連の行動に一定の理解を示すとともに，インドシナ情勢の抱える不確定要素を十分に認識していたことがこの発言からはうかがえる。ただし，民主共和国成立の時期においては，ホー・チ・ミンは特にソ連のみを重視していたわけではなかった。正確にいえば，ソ連は支持を期待された国の一つにしかすぎなかった。民主共和国が孤立無援の中でインドシナに復帰してきたフランス植民地主義者と戦わなければならないという状況の下では，支持者を選り好みしている余裕などなかった。ホー・チ・ミンは1946年１月にソ・米・中三国の国連代表あてに電報を，２月には中・米・ソ・英各国政府あてに親書をそれぞれ送り，民主共和国の承認と国連加盟に対する支持を求めるとともに，フランスの行動を国連でとりあげてほしいと訴えている[18]。これらの国々の中でホー・チ・ミンが最も期待を寄せていたのは米国であったと思われる。1944年時点からOSS（米国戦略情報局）要員と接触して，ベトミンへの支援を要請したのみならず，有名な民主共和国独立宣言（1945年９月２日）に米国の独立宣言を引用したのはその熱意が早い段階から生まれていたことを示すものである[19]。そして1945年から46年にかけてトルーマン大統領や国務長官にあてて何度も電報や書簡を送り，その中で「フィリピンと同様，私たちの目標は完全独立および米国との完全協力です」とまで述べて，フランスとの闘争に対する理解と支持を求めた[20]。また駐仏大使アボットとの会談（1946年９月11日）では，米国側の不安を解消するためか，ホー・チ・ミンは自分に共産主義者とのつながりがなく，民主共和国政府内にも共産主義者はいないと事実に反する発言までしている[21]。米国に対する期待は，「常に弱小民族のために自由と独立を擁護してきた民主国家」というホー・チ・ミンの米国に対する評価が示すように[22]，そのフランスやオランダに対する反植民地主

15) *Политбюро ЦК РКП(б)-ВКП(б). Повестки дня заседаний. 1919-1952: Каталог/*T.III. 1940-1952. Москва: РОССПЭН, 2001, с.389-643. Там же, с.612, 614.
16) Le Kim Hai 1999, tr.64.
17) Vu Dinh Huynh 1993.
18) *Ho Chi Minh Toan tap*, tap 4, tr.154-155, 178-182.
19) *Ho Chi Minh Toan tap*, tap 4, tr.1. Patti, Archimedes L.A. 1980, pp.53-58.
20) *United States-Vietnam Relations 1945-1967*, Book 1 of 12, c-96, c-97.
21) Ibid., c-103.
22) *Ho Chi Minh Toan tap*, tap 4, Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995, tr.129-131.

義的な態度から発していた。

しかし，米国がこうしたホー・チ・ミンからのアピールに反応せず，フランスを支持する姿勢を明確にするにつれて，ソ連の重要度が増大していった。1948年８月に開催された第５回中央幹部会議では，ソ連を中心とした「反帝民主陣営」が「反民主帝国主義」よりも強力であるという二陣営対立に基づいた国際情勢認識が示されるとともに，ソ連と「新民主主義諸国」（東欧，北朝鮮，中国の解放区）の成長と前進が高く評価された。そしてその中で「インドシナ諸民族の国は帝国主義に反対する民主陣営の隊列に身を置く」ことが明言されるようになったのである。他方，米国は「帝国主義陣営の筆頭（最も反動的な帝国主義）」と位置づけられ，フランスのベトナムにおける戦争や，オランダのインドネシアにおける戦争を援助しているとして，各地の民族独立運動抑圧に対するその加担が厳しく糾弾された[23]。米国に対する評価は1945-46年の時期と比較してほぼ逆転したということができる。

民主共和国の承認に慎重な姿勢をとっていたソ連が，その承認に向けて動き出す大きな契機となったのは1949年10月の中華人民共和国の成立および同国の民主共和国承認に向けた国際的努力であった。中華人民共和国成立直後，毛沢東は中ソ条約交渉のため12月16日にモスクワ入りして，２ヵ月にわたりスターリンと会談を重ねることになるが，その過程において「ベトナム，日本，インドなどアジアの兄弟党の状況」も12月時点から話題になりつつあった[24]。

中国共産党指導者の中には民主共和国のおかれた困難な状況に理解を示し，「ベトナム人民の抗仏闘争を援助することは，われわれの国際主義的義務だ」とみなす観点や，中国の承認が民主共和国の国際的な承認に道を開くことによって，民主共和国が孤立を打破し，国際的地位を向上させるのにプラスになるとの見解が表れ始めていた[25]。中国共産党内でも民主共和国に対する支援が具体化する中で外交関係樹立も検討の対象となり，同時期（12月24日）に中国共産党政治局は，フランスが中国を承認する以前に民主共和国と外交関係を樹立した方が「利が多く弊が少ない」という判断を下していた。同じ頃インドシナ共産党中央からはリー・ビク・ソン（リー・バン）とグエン・ドゥク・トゥイが北京に派遣され，中国側に対する諸要望が伝えられた[26]。このような両党間の協議を経た結果を反映すると考えられる，劉少奇が中国共産党中央のために起草したホー・チ・ミンあての電報（12月28日付）は「ベトナム民主共和国と中華人民共和国の外交関係樹立問題に関して，中国共産党中央は速やかに中越両国の外交関係を樹立するという貴方の提案に同意します。ソ連と新民主主義国家も中越両国の外交関係樹立に続いて，ベトナム民主共和国を承認することが可能となるでしょう。それを実現するために，中国共産党中央はベトナム共産党中央に対してホー・チ・ミン同志がベトナム民主共和国の名においてコミュニケを発して，各国と外交関係を樹立する希望がある旨声明するよう提案します」と述べ，中越両国間の外国関係樹立にとどまらず，民主共和国承認の連鎖を拡大する方策まで提示していた[27]。

23) *Van kien lich su Dang*, tap IV, tr.100-112.
24) 楊奎松 1999, p.292
25) 羅貴波 1988, p.234 および羅貴波 1995, pp.153-154
26) 羅貴波 1995, pp.153-154
27) 中共中央文献研究室 1996, p.236。また中国の資料には毛沢東がスターリンに中国が民主共和国承認の準備をしていることを話すと，スターリンはそれに完全に同意して「あなたたちが先にベトナム民主共和国を承認すれば，われわれもそれに続いて承認する。ソ連もベトナムに対して必要な援助を提供することを望んでいる」と述べたとしているものもある（時期は不明，裴堅章 1994, p.32）。もしこれが事実だとすれば，中国共産党中央の決定の背景にはスターリンの意向が反映されていたことになる。

これを受けて1950年１月14日に「ベトナム民主共和国政府は，平等の原則と，ベトナムの領土主権および国家主権を尊重するあらゆる国の政府と外交関係を樹立する用意がある」というホー・チ・ミンの声明が発布され[28]，１月18日に中国が最初に民主共和国を承認した。この時毛沢東は中国外交部にホー・チ・ミンの声明を「ソ連と新民主主義国家」に送付するよう命じ[29]，ソ連と東欧諸国による民主共和国の承認に向けて中国が労をとろうとする意志を明確に示した。

ソ連が民主共和国を承認し，外交関係を樹立する旨表明したのは１月30日になってからであった。その際，同日付でソ連外相ヴィシンスキーが民主共和国外相ホアン・ミン・ザムあてに送付した電報では，ソ連の決断は１月14日のホー・チ・ミン声明を受けた結果である点が強調されているが[30]，それは中国に遅れること12日を経ての承認となっただけでなく，中国が成立後比較的早く民主共和国を承認したのと比較しても，民主共和国独立宣言後４年以上を経ての承認となった[31]。しかも，ソ連が中国に続いて，民主共和国承認に向けて東欧諸国をまとめようとするなどの国際的な努力を払おうとした形跡を見出すのも困難である[32]。

なお，次章で詳述するように，1949年12月末あるいは1950年１月初頭にホー・チ・ミンはベトバック根拠地を出発して，すでに訪中・訪ソの途上にあった。後に掲げるスターリンの1950年２月１日付の電報において，ソ連の民主共和国承認後もホー・チ・ミンの訪ソの意志に変わりがないのであればそれを歓迎するという主旨のメッセージが述べられていることは[33]，少なくともソ連が民主共和国を未承認という段階にあってはホー・チ・ミン訪ソの主たる目的がソ連に対して民主共和国の承認を働きかけることにあった可能性を強く示唆しているといえよう。しかし，実際には1950年１月30日のソ連の民主共和国承認によって，ホー・チ・ミンにとって訪ソの目的からは民主共和国の承認に関わる問題は除外されることとなったのである。

Ⅱ　ホー・チ・ミン訪ソをめぐる外形的な問題

１．モスクワに至るまでの旅程

冒頭で述べたように，ホー・チ・ミン訪ソの時期に関しては，大きく，1949年12月説（以下12月説と略）と1950年２月説（以下２月説と略）がある。しかし，このうち12月説にはいくつかの点で無理がある。

民主共和国臨時政府で財政相をつとめたレ・ヴァン・ヒエンの日記によると，ホー・

28) *Ho Chi Minh Toan tap*, tap 6, Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995, tr.7-8. なお，1950年１月14日の時点で，ホー・チ・ミンはベトバック根拠地を離れ，中越国境地帯のカオバンに向かう途上にあったものと思われる。劉少奇の電文起草日時とホー・チ・ミン声明とのタイムラグは，民主共和国政府が移動途中のホー・チ・ミンと連絡をとるのに要した時間が反映されたのであろう。

29) 「関於同意与越南政府建立外交関係給劉少奇的電報（一九五〇年一月十七日・十八日）」『建国以来毛沢東文稿』第一冊，北京：中央文献出版社，1987年，238頁。

30) Министерство иностранных дел СССР, Министерство иностранных дел СРВ 1982, с.8.

31) フルシチョフによれば，スターリンはホー・チ・ミンの率いる運動の勝利を確信せず，民主共和国の承認が時期尚早であったとしばしば語っていたという。Хрущев 1999, с.114. スターリンは民主共和国承認が，西ドイツの再軍備に反対していたフランスとの関係に影響するのを憂慮していたとする見解もある。Qiang Zhai 2000, p.15.

32) ソ連のゾーリン外務次官の日記によると，チェコスロヴァキア駐在大使ラシュトーヴィチは民主共和国承認に関するソ連政府の見解をゾーリンに電話で照会している（1950年１月30日）。このことは民主共和国承認に際して，ソ連が他の社会主義国に対して特にイニシアチブをとっていなかったことを示唆している。*Советский фактор в Восточной Европе 1944-1953*, Т.2, Москва: РОССПЭН, 2002, с.254-255.

33) РГАСПИ Ф.558 оп.11 д.295 л.1.

チ・ミンは1949年12月16〜18日の政府会議を主催した後，19日の抗戦記念日の記述を最後に姿を消している[34]。当時は戦争の中で，フランスの攻撃を避けるため民主共和国政府や共産党，軍の中枢機関はベトバック根拠地のタンチャオ（トゥエンクアン省）を中心に180 km の範囲内を１ヵ月〜３ヵ月毎に移動しながら，分散して設営されるという状況にあった[35]。ホー・チ・ミンにとっては，ベトバック根拠地から徒歩で中越国境まで到達した後，中国経由でモスクワに行く以外にはルートの選択肢はなかった。しかも根拠地から中越国境まで徒歩でフランスの目を避けながら17日を要したという当時の移動事情を考慮すると[36]，1949年12月末にモスクワでスターリンと会うことはほとんど不可能となる。

さらに，12月説を覆す決定的な証左として，ここで二つの資料をあげておく。その一つは1950年２月１日付のヴィシンスキーの北京駐在ソ連大使シバーエフ宛て電報であり，スターリンの次のメッセージを劉少奇経由でホー・チ・ミンに届けることを命じたものである。

「ホー・チ・ミン同志
数日前，毛沢東同志からあなたがモスクワを秘密裏に訪問したいとのお考えをもっていることをききました。私はそれに対して，異議を唱えるつもりはないと返答しました。もしあなたが，ソ連のベトナム承認後もモスクワ訪問計画を変更されないのであれば，私はモスクワであなたにお目にかかれるのを楽しみにしています。
フィリッポフ」[37]

もう一つは，ホー・チ・ミンが1950年２月７日付でチタからモスクワ訪問に先だってスターリンあてた次の電報である[38]。

ソ連邦閣僚会議議長スターリン同志
１．私は二つの理由から，モスクワ訪問が秘密裏に行われることを願っています。第一には，私のベトナムからの出国についてはベトナム共産党中央委員会の数名の委員と，政府閣僚二名しか知っていないからです。第二には，フランス人が私のベトナム出国に気づいたら，政治的・軍事的行動に出るのではないかと考えるからです。
２．２月３日に私は無線で私のモスクワ訪問の性格に関してベトナム共産党中央委員会の見解を照会しました。しかし，回答がモスクワに届くには早くても10日かかります。
３．もしスターリン同志が，私のモスクワ訪問が公式であった方がよいとお考えになるのであれば，私はベトナム共産党中央委員会があなたのご意見に同意するものと確信しています。
４．モスクワ到着の際は，あなたのもとへ直行することをお許しいただきたく願います。
ホー・チ・ミン
1950年２月７日

これら二つの資料は，1950年１月末〜２月１日の時点でホー・チ・ミンが北京に滞在していたこと，ならびに同年２月７日の時点ではすでに北京を離れソ連領内に入ってモスクワ訪問の途上にあったことを示している。おそらく，スターリンからのメッセージを受け

34) Le Van Hien 1995, tr.160.
35) 羅貴波 1995, p.174
36) 中共中央文献研究室 1996, p.241
37) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.1. なお，「フィリッポフ」とはスターリンの筆名である。
38) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.2

とった後，２月３日にホー・チ・ミンは「ベトナム共産党」中央委員会に状況を伝えてからモスクワに向けて北京から出発したものと推測される[39]。したがって，出発は早くても２月３日以降のことになる。これはまた，劉少奇がホー・チ・ミンの要求に従って，２月３日夜モスクワ行きの汽車にホー・チ・ミンを乗車させたとする『劉少奇年譜』の記述が精度の高いものであることの証左ともなるであろう[40]。

こうして，２月３日にホー・チ・ミンは北京を汽車で出発し，ハルビン，満州里経由でソ連領に入り，チタを経てシベリア鉄道でモスクワに向かったことがほぼ確実となる。当時は北京からモスクワまで鉄道で11日を要していることを考慮すれば[41]，ホー・チ・ミンは特に支障がなければ２月13日頃にモスクワに到着したものと推測される。その日程はさらに，ホー・チ・ミン訪ソの性格に関する「ベトナム共産党」中央委員会の見解がモスクワに届く時期とも一致する。

また，劉少奇が１月30日に毛沢東あての電報の中で，「彼は［ホー・チ・ミンを指す―筆者注］活動を離れてすでに１カ月となりますが，裸足で歩き17日かけて中国国境地帯に入ったのです」と述べていることから判断すると[42]，ホー・チ・ミンは1949年12月末か1950年１月初頭に根拠地を出発した後，１月中旬後半に中越国境地帯に到達したものと推測される。ホー・チ・ミンの出発日時に関しては，レ・ヴァン・ヒエンがその日記の中で1949年12月24日に「ホー主席に指名された特別の派遣団が外国に行く」と記している。それ以降12月29日にかけてレ・ヴァン・ヒエンが財政相として「派遣団」のための路銀作りや外国の首脳に贈るための金貨鋳造に奔走する様子が日記からはよくうかがえる[43]。さらにその後，ホー・チ・ミンが中越国境地帯に到達した日時については，１月19日にフックホア（カオバン省）から水口（広西龍州県）に入り，人民解放軍龍州分区司令部に宿泊した後，翌20日には自動車で南寧に至り，さらに21日には南寧から来賓へ移動し，北京行きの汽車に乗ったとする『ホー・チ・ミン年表』の記述が説得的であることがわかる[44]。

なお，ここで本論からはややそれるが，12月説に関しても一言しておきたい。12月説はそれが事実であるかどうかということよりも，むしろその政治的な背景を考慮する必要がある。すなわち，12月説が登場したのが1980年代であることと，それが1990年代半ばになって２月説へと書きかえられた点に着目しなければならない。1980年代は，1970年代からのベトナムと中国の対立が継続していた時代であり，ベトナムは自らをソ連陣営（社会主義共同体）に帰属させ，あらゆる面でソ連と密接な関係を築いていた。その裏返しとして，中華人民共和国成立後，30年にわたる中国とベトナムの関係は，中国が絶えずベトナムを抑圧し，様々な陰謀を企図してきたという論

39) ホー・チ・ミンは電報の中で「ベトナム共産党」と表記しているが，この時点では正確にはインドシナ共産党であったはずである。このことはホー・チ・ミンが共産党の実質についてどのように認識をしていたのか，またこの時点ではインドシナ共産党を継承する党の名称が決定していなかった可能性を示しており興味深い。なお，10月14日付のスターリンに宛てた書簡では「ベトナム労働党」の党大会開催について言及しており，新たな党の名称が確定していたことがうかがえる。РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.8. また，中国の資料は当時の党名は正式にはインドシナ共産党であるが，ベトナム共産党とよぶのが一般的であったとしている。中共中央文献研究室 1996, p.236

40) 中共中央文献研究室 1996, p.241

41) 石井 1990, pp.248-249, 253～254

42) 中共中央文献研究室 1996, p.241

43) Le Van Hien 1995, tr.162-164. なお，この時点でレ・ヴァン・ヒエンはホー・チ・ミン自身が外国に行くことを知らされていなかった模様である。

44) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.396-399.

調に統一され，いわば黒一色に塗りつぶされていた[45]。ホー・チ・ミンの人生において中国が重要な位置を占めていたことと，ホー・チ・ミンが中国共産党指導者と親密な関係を保持していたことは否定のしようもない事実であるにもかかわらず，この時期に編纂された『ホー・チ・ミン全集』には，中国に言及した著作や演説が掲載されなかったことはよく知られている[46]。

1980年代にベトナム共産党がとっていた親ソ・反中国路線の下では，成立して間もない中国が真っ先に民主共和国を承認し，それから12日も経ってからソ連が漸く承認したという歴然たる事実は，ソ連とベトナムの友好関係を強調しようとするベトナム共産党にとっては，前者の不熱心さをさらけ出すことにつながり，甚だ都合の悪いものであったとしか言いようがない。それを少しでも緩和するためには，1949年12月にホー・チ・ミンがスターリンと会ったという「事件」を捏造して，あたかもそれが民主共和国の国際的な承認に大きく影響することになったかのような印象を醸成する必要があったのであろう。12月説の消滅と２月説の登場は，まさにこのような親ソ・反中路線の基盤が消失する時期とも重なっている。1990年代半ばには，すでにソ連も崩壊し，中越関係が正常化し，ベトナムの外交が全方位的な方向へと移行しつつあった。対外環境の変化に加えて，ベトナム共産党自身がドイモイ政策を実行に移す中で，「事実を直視する」姿勢を打ち出して，歴史的事実に対する従来の隠蔽体質から大きく脱却したのもこの時期であり，ホー・チ・ミンに関してみれば，死去30周年（1989年）に際してその遺書全文が手書きの草稿とともに公表された他，未公表の著作や演説を収録した『ホー・チ・ミン全集』の新版や極めて詳細な『ホー・チ・ミン年表』（10巻）が相次いで刊行されることとなったのである[47]。

２．中国共産党指導者との関係について：北京―モスクワ―北京

訪ソに際してのホー・チ・ミンと中国共産党指導者との接触についても，いくつかの異なる言説が存在している。それを整理すると，第一に，ホー・チ・ミンは北京で中国共産党指導者のうち誰と接触したのかという問題がある。これに関しては，①1950年１月北京で周恩来と会った後，共にモスクワに赴いたとする説と[48]，②ホー・チ・ミンが北京に到着した時，周恩来は毛沢東の指示を受けて中ソ条約締結交渉のためすでにモスクワに向けて出発してしまっており（1950年１月10日），周恩来とは会えなかったとする説である。後者は，ホー・チ・ミンを迎えたのは劉少奇であり，両者がベトナム支援に関する問題を討論したことと，ホー・チ・ミン訪ソの段取りをつけたのが劉少奇であったことを明らかにしている[49]。この他，ホー・チ・ミンが毛沢東と中南海で会見したとする説もあるが[50]，これは前述したように毛沢東が1949年12月から1950年２月までモスクワに滞在していた事実を考慮すれば，およそ検討する価値はないといってよい。

45) その代表例として以下の文献をあげておく。Ban nghien cuu lich su Dang Trung uong 1979.
46) レ・ズアン書記長時代に編纂が決定され，1980年から89年にかけて出版された『ホー・チ・ミン全集』10巻を参照。Vien Mac-Lenin 1980-1989.
47) *Di chuc cua Chu tich Ho Chi Minh. Ho Chi Minh Toan tap*, (12 tap), Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995-1996.
48) 黄錚 1987, p.125
49) 中共中央文献研究室 1996, p.241. Hoang Van Hoan 1989, tr.327-330.
50) Hoang Van Hoan 1989, tr.328-329. ヴォー・グエン・ザップは1995年刊の回想録の中で，ホー・チ・ミンは中国で初めて毛沢東と会ったと述べているが，1999年刊の別の回想録では，ホー・チ・ミンが北京に到着した時，毛沢東はすでにソ連に赴いてしまっており，両者の出会いはモスクワであったと，前説を修正している。Vo Nguyen Giap 1995, tr.411. Vo Nguyen Giap 1999, tr.14-15.

この問題に関しては②の説が正確であると考えられる。中ソ条約交渉に関する中国側の記録によれば周恩来が１月20日にモスクワに到着していたとしている点とそれを裏付ける資料として，クレムリにあるスターリンの執務室への訪問者リストの中に周恩来の名がある（１月22日・23日）ことからしても，ホー・チ・ミンが２月初めに周恩来と北京から共にモスクワに向かった可能性はありえない[51]。さらに，前述したスターリンのホー・チ・ミンにあてたメッセージが劉少奇経由となっている点も，北京では劉少奇がホー・チ・ミンの受入れ責任者となっていた事実をよく示している。周恩来を除外すれば，ホー・チ・ミンの北京からモスクワまでの同行者としては，ホアン・ヴァン・ホアンがチャン・ダン・ニンの名をあげているのが唯一言及した資料となっているにすぎない[52]。

第二の問題として，ホー・チ・ミンのモスクワ到着後，スターリンと会談した際に毛沢東，周恩来ら中国共産党指導者も同席していたのかという点がある。これに関して，黄錚はモスクワでホー・チ・ミンが毛沢東や周恩来とともに，スターリンと「ベトナム革命に関する重大な問題」を討議したとしている[53]。また，ヴォー・グエン・ザップも，後述するようにホー・チ・ミンとスターリンの会談の際に毛沢東が同席していたと述べ，毛沢東の発言を紹介している[54]。それに対して，フルシチョフの回想録や『ホー・チ・ミン年表』は中国共産党指導者の存在については一切言及していない[55]。以上の問題点を解明するに足る決定的な資料はないが，物理的にモスクワに滞在していた中国共産党指導者がホー・チ・ミンと接触することは可能であること，また中国共産党が当時日本・インドネシア・インドシナ各共産党とソ連共産党との事実上の連絡役をつとめていたこと[56]，さらに訪ソに際してホー・チ・ミンが中国共産党に便宜を計ってもらっていること等々を考慮すれば，ホー・チ・ミンが中国共産党指導者とともにスターリンとの会談に臨むことは十分に可能であったろう。

なお，会談が行なわれた日時や場所も不明であるが，フルシチョフやヴォー・グエン・ザップの回想録では会談が数回に及んだかのような記述がある[57]。1950年２月スターリン執務室への来訪者リストにホー・チ・ミンの名が記載されていないことから判断すれば，会談はスターリンが当時接客に使っていたクンツェヴォの別荘（ダーチャ）で行なわれたものと推測される[58]。伍修権は，２月14日には中国側主催のパーティーが開催され，スターリンと他の指導者が参加し，16日にはソ連政府がクレムリに毛沢東，周恩来，中国代表団全員を招待してパーティーを開いたとし，当時モスクワに滞在していたホー・チ・ミンがパーティーに参加し，そこでスターリンとの間で冗談交じりの会話が交わされたというエピソードを紹介している[59]。伍修権は

51) “Посетители кремлевского кабинета И.В.Сталина: 1950-1953”, *Исторический архив*, No.1, 1997 г., c.6-7.
52) Hoang Van Hoan 1989, tr.330. チャン・ダン・ニンはインドシナ共産党中央委員で，フランスや国民党軍からホー・チ・ミンの存在を隠すために外国訪問団の団長をつとめた。Vo Nguyen Giap 1995, tr.409.
53) 黄錚 1987, p.125
54) Vo Nguyen Giap 1999, tr.14-15. なお，ザップはホー・チ・ミンの訪ソ当時，ベトナムに残留していたため，これはホー・チ・ミンから得た情報であろう。
55) Хрущев 1998, c.113-115. Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr. 403.
56) РГАСПИ, ф.558 оп.11 д.313 л.2, 67-68.
57) Хрущев 1998, c.114. Vo Nguyen Giap 1995, tr.412.
58) “Посетители кремлевского кабинета И.В.Сталина: 1950-1953”, c.7-8.
59) 伍修権 1983, p.13

ホー・チ・ミンがどちらのパーティーに参加したのか明示していないが，フルシチョフの回想録と，スターリンとホー・チ・ミンの会話内容およびフルシチョフの出欠状況を照合すると，２月16日であった可能性が高い。

第三には，ホー・チ・ミンの帰途に関する問題をあげなければならない。これをめぐっては，①ホー・チ・ミンは周恩来より先にモスクワを離れて北京に戻ったとする説（２月17日以前）[60]，②２月17日に毛沢東，周恩来が帰国の途に着いた時，ホー・チ・ミンもこれに同行して，シベリア諸都市を友好訪問しながら北京に戻った（３月４日）とする説[61]，③モスクワから空路北京に戻ったとする説（期日不明）[62]，④ホー・チ・ミンはモスクワに滞在して，２月末の時点でも対外活動を継続し，３月上旬北京に戻ったとする説が存在する[63]。

残念ながら，現時点ではホー・チ・ミン帰国の期日とルートを確定するに足るだけの資料がなく，いずれの説が正しいかを論ずるのは不可能である。しかし，①や②のように，ホー・チ・ミンが２月17日あるいはそれ以前にモスクワを離れたのであれば，前述のチタ発電報との関連からしてモスクワ滞在がほんの数日であったことにもなりかねない。すなわち，ホー・チ・ミンのモスクワ到着が２月13日頃となり，17日にはモスクワを離れたということになるのである。当時ベトナムでは抗仏戦争が進行中という状況の中で，そこから一時的に離脱してモスクワまで到達したホー・チ・ミンにとって，モスクワ滞在を短くしてシベリア諸都市を２週間もかけて友好訪問することにどれほどの意味があったのか，筆者には強い疑問が残る。それよりは，「ベトナム人民の正義の闘争に対する世界の進歩勢力の同情と支持を獲得すべく」モスクワでフランス共産党の代表や国際組織の代表と接触したという説の方が，当時ホー・チ・ミンの置かれていた状況を考えると，説得的であるように思われる[64]。

ホー・チ・ミンはモスクワから北京に到着して，当地にしばらく滞在した後，３月11日に北京を出発して，ベトナムに向かった。ホー・チ・ミンは帰路，北京出発時点から，沿路日付入りの漢詩を詠みながら，広西へ到着しているため，われわれはそのルートと日程を知ることができる。漢詩の題名と日付は次の通りである。

「離北京」（３月11日）／「過湖北」（３月12日）／「過長沙」（３月13日）／「午過遷江」（３月17日）／「近龍州」（３月19日）[65]

龍州に到着した後，ベトナム領内に入りバッカンに到着したのは４月２日であったとされる[66]。この帰国日程は，ヴォー・グエン・ザップが回想録の中で，ホー・チ・ミンが1950年の初めに「外国」に行き，４月上旬に帰還したと述べているのとほぼ一致しているばかりでなく[67]，前述したレ・ヴァン・ヒエンの日記の中でホー・チ・ミンが長期に及ぶ不在の後に，1950年４月10日の党活動者会議と11～13日の政府会議で再登場を果たすのとも一致している[68]。

60) 黄錚 1987, pp.125-126
61) 伍修権 1983, p.16
62) Hoang Van Hoan 1989, tr.327-330.
63) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.405, 408.
64) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.405.
65) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.408-413. 広西社会科学院 1995, pp.162-164
66) Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh 1994, tr.417.
67) Vo Nguyen Giap 1995, tr.408-411.
68) Le Van Hien 1995, tr.160-217.

Ⅲ ホー・チ・ミンとスターリンの会談内容

1．会談におけるスターリンの発言とその政治的影響

ここでは，1950年２月中旬に行なわれたと考えられるホー・チ・ミンとスターリンの会談の内容を，主としてヴォー・グエン・ザップ，トー・ヒュー，フルシチョフの回想録に依拠して再構成することを試みる。これらを総合すると，会談での主要な話題は，ホー・チ・ミンからスターリンへのベトナム情勢に関する報告と革命の展望の説明，ベトナムへの援助物資提供の要請であった。そして，前述したように本来はこれに加えて，ソ連に民主共和国承認を働きかけるという重大な任務があったが，それはソ連が民主共和国を承認したことにより会談の時点では必要のないものとなっていた。

会談に際してホー・チ・ミンがスターリンに八月革命，抗仏戦争を中心にベトナム情勢を報告したところ，それに対してスターリンは同意した上で，ベトナム北西部の山岳地帯を重視してそこを抑えれば，全土で主導権を握れることができるという助言をしたという。しかし，スターリンは他方でベトナムにおける「土地革命」の遅れを批判し，その重要性を力説した。ヴォー・グエン・ザップがホー・チ・ミンの後日談として紹介しているところでは，会談の際スターリンは二つの椅子を指して，ホー・チ・ミンに「こちらの椅子は農民の椅子で，あちらは地主の椅子です。ベトナムの革命家はどちらの椅子に座るつもりなのですか」とたずねたという[69]。農民と地主を鋭く対比させ，地主を否定的に位置づけたこの発言は，インドシナ共産党にとってみれば後述する民族統一戦線政策の内容の見直しを迫るものに他ならなかった。また，トー・ヒューがチュオン・チンから伝え聞いた話として紹介するところでは，スターリンはホー・チ・ミンに「同志のベトナムはもともと封建国家，植民地ではありませんか。ベトナム革命は植民地主義と封建地主に反対しなければなりません。革命と抗戦を遂行したといっても，思想と習慣はそう早く解決できるものではありません」と語ったとされる[70]。スターリンがここでなぜ土地改革や階級対決的なアプローチを提起したのか，その要因に関しては次節であらためて考察することとしたい。

土地革命を促す一方で，スターリンは，ベトナムに自らは深入りせず，実際の支援は中国に任せようとする姿勢も見せていた。トー・ヒューによれば，スターリンの発言はさらに「ソ連はベトナムから遠く，中国ほど近くはありません。ですから同志は毛沢東の経験をたずね，中国の同志に武器，食糧，薬品さらには政治思想に関する支援増大を要請した方がよいでしょう」，「いずれにしてもソ連は国土を再建し，自陣営の社会主義の勝利を保障し，世界革命の拠り所となるために平和を必要としています」と続く[71]。

また，ヴォー・グエン・ザップによれば，ホー・チ・ミンとスターリンの会談時には毛沢東も同席しており，三者の間で次のようなやりとりがあったという。ホー・チ・ミンがソ連側に対して，10個歩兵師団と１個高射砲連隊への各種装備提供を要請すると，スターリンは「ベトナムの要求は大きなものではあ

69) Vo Nguyen Giap 1995, tr.411-412.
70) To Huu 2000, tr.268-269.
71) To Huu 2000, tr.269. ホー・チ・ミン以下，当時のインドシナ共産党の指導者たちにとっては，スターリンがベトナムに関する一定の情報を持ち合わせていたことが驚きであったようである。これに関しては，前述したように，スターリンが毛沢東や劉少奇を通じてホー・チ・ミンと連絡をとっていることや，後述するようにインドネシア共産党に関しても劉少奇がスターリンと同党の仲介的な役割を果たしていることからして，中国共産党指導者が大きな役割を果たしていたのは明らかである。

りません。ですから，中国とソ連の間で分担をすればよいでしょう。ソ連は現在東欧諸国の面倒を見るので手一杯です。中国がベトナムの必要としているものを援助するでしょう。中国にないものについては，ソ連の対中援助物資を転用すればよい。その分はソ連が穴埋めをしましょう」と答えた。毛沢東からはさらに「ベトナムは10個師団を装備してフランスと戦わなければならい。まずは北部［ベトナム一筆者注］で活動している６個師団の装備から始めましょう。ベトナムは直ちにいくつかの部隊を中国に派遣して武器を受け取ってかまいません。広西省がベトナムの直接的な後方となるでしょう」という発言があった[72]。

以下，スターリン発言のいくつかの論点に従って，そのインドシナ共産党への政治的な影響について考察していく。第一に，スターリンが会談の中で「土地革命」の重要性に言及して，ホー・チ・ミンに対する圧力ともとれる発言をしている点に注目したい。ホー・チ・ミンが帰国後，「われわれが土地革命を遂行しなければならない時がきた。中国は大衆動員と土地改革の実行に関する経験を提供してわれわれを援助することを約束している」と語ったことは[73]，ホー・チ・ミンがスターリンの発言をいかに重く受け止めていたかをよく示している。同様にその発言に触発されて「思想工作」すなわち整党に向けた準備と研究も開始された[74]。ただし，それで直ちに土地改革が開始されたわけではなく，ホー・チ・ミンが語った通りの内容をもって土地改革が開始されるまでには，さらに約３年を要することになる。1950年時点で共産党は土地政策として租税・利息減額を実施したり，フランス人や「越奸」の土地を没収して農民に一時的に分与したりするのが精一杯であった[75]。「土地政策の第一段階」と位置づけられたこれらの施策の意義は「封建的搾取の残滓を徐々に廃絶し，貧しい耕作者に生産手段を与え，耕作技術を改善し，生産の増強をはかり，抗戦の需要に十分こたえる」と説明され，階級闘争よりはむしろ抗戦遂行との関連に重点がおかれていた（1950年５月）[76]。これは，党が当時，階級を超えた愛国的な統一戦線を重視する路線をとり，地主全般を否定するような政策をとっていなかったことにも起因していた。地主階級を廃絶する一種の社会革命として1953年に土地改革が開始されるまでには，政治・軍事情勢の安定，フランス人と「越奸」の土地の一時的分与を通じた指導部と大衆双方の経験の蓄積，整党を通じた「幹部・党員のプロレタリア階級としての立場の強化」（1952年）といったステップを経なければならなかったのである[77]。そして後述する1952年11月19日のスターリンにあてたメッセージの中でホー・チ・ミンが「農業プログラム」の実現，すなわち土地改革に努力するという決意を表明していることは[78]，この段階においても訪ソ時のスターリンの土地革命に関する発言が忘れられていなかったことを示している。

第二に，民主共和国に対する支援は専ら中国に任せ，ソ連はそこに深入りすることを避けようとしたスターリンの言動はインドシナ共産党指導部にはどのように受け止められたのであろうか。民主共和国に対するスターリンの消極的な姿勢は，会談後にソ連から援助として民主共和国に提供されたのが，１個連隊用の 37 mm 高射砲，モロトフ工場製輸送

72) Vo Nguyen Giap 1999, tr.14-15.
73) Vo Nguyen Giap 1995, tr.412.
74) To Huu 2000, tr.269-271.
75) Vien Kinh te1968, tr.68.
76) Dang Lao dong Viet Nam, Ban chap hanh Dang bo Khu tu tri Viet Bac 1971, tr.153.
77) Dang Lao dong Viet Nam, Ban chap hanh Dang bo Khu tu tri Viet Bac 1971, tr.87.
78) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.19.

車両数台，軍用薬品というごく象徴的なものでしかなかった点に早くも示されていた[79]。フルシチョフによれば，ホー・チ・ミンが帰国後，マラリア治療用にキニーネを提供してほしいと要請した際，ソ連にキニーネ生産設備があるにもかかわらずスターリンは0.5トンのみ送るよう指示したという。フルシチョフは0.5トンのキニーネが「ホー・チ・ミンが共産主義の事業全体のために闘争で支払った」代価として見合うものかという疑問を投げかけている[80]。この他，外交関係樹立のシンボルともいうべき大使任命に関しても，民主共和国のソ連駐在大使としてグエン・ルオン・バンが1950年12月に着任したものの，ソ連の民主共和国駐在大使任命は「ベトナム政府に恒常的な居住地がない」という理由で見送られ，初代大使ラブリショフが着任したのはジュネーブ協定調印後の1954年11月のことであった[81]。

他方，中国はスターリンや毛沢東の発言に忠実に沿う形で，民主共和国に対する支援を具体化させていった。その皮切りとして，1950年３月上旬には民主共和国駐在の中国共産党中央連絡代表として派遣された羅貴波がベトバック根拠地に到着した。同年４月にはベトナム人民軍308師団所属２個連隊と312師団所属１個連隊がそれぞれ蒙自（雲南）と化峒（広西）に派遣され，中国側から武器の供与と軍事技術の講習を受けた[82]。同年８月にはベトナム側の要請に応じて中国からベトナム支援顧問団が組織・派遣されるとともに，羅貴波がその団長に任命された。軍事支援にとどまらず，インドシナ共産党幹部の養成も1950年から中国の高級党学校で行われるようになった他，広西の桂林にはベトナム人子弟の教育のための学校も開設され，卒業者の大半は管理，財政，銀行，貿易などの実務的分野で幹部となったといわれる[83]。中越両国は軍事面のみならず，人材面でも関係を緊密化させていったのである。

このような情勢の中，1950年５月から10月にかけて人民軍の攻勢下に展開された国境作戦（レ・ホン・フォン作戦）で，フランスはカオバン，ドンケー，タットケーなど中越国境地帯の要衝から退却せざるをえなくなった。この事件は，第一次インドシナ戦争の流れを変えた転換点のひとつとなるものであった。ホー・チ・ミンは1950年10月14日付でカオバンから発信されたスターリンあて書簡の中で，「あなたと中国共産党からの大きな支援のおかげで，私たちの国境反攻作戦の第一段階は成功裏に終了しました」と述べ，具体的に戦果を報告するとともに，中国人顧問の献身的な活動を賞賛している[84]。ホー・チ・ミンはさらに新たな戦闘を準備し，そこで一層の戦果をあげることをスターリンに誓っている。この書簡は，ホー・チ・ミン訪ソ後の民主共和国をめぐる政治・軍事情勢が，先に指摘したソ連の消極的な姿勢にもかかわらず，中越両国を基軸として展開されたかのように分析されるべきものではないことを示している点で重要である。「私たちの勝利は比較的小さなものかもしれませんが，そのことがあなたを最も有能かつ敬愛する指導者とする革命的国際主義の勝利の一部とみなすことは適切でしょうか」[85]というホー・チ・ミンのスター

79) Vo Nguyen Giap 1995, tr.412-413.
80) Хрущев 1998, с.114-115.
81) Бухаркин 1998, с.128-129.
82) Vo Nguyen Giap 1999, tr.15-16. 雲南には1950年４月のベトナム側の要請によりベトナムの軍人を校長とするベトナム軍官学校が開設された（羅貴波 1988, p.241）。
83) 羅貴波 1988, pp.238-241. なお，羅貴波は1954年初代の民主共和国駐在大使に任命されることになる。
84) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.7-8.
85) Там же, л.8.

リンに対する問いかけからは中越両党の上に君臨するスターリンのイメージが鮮明に伝わってくる。

ホー・チ・ミンがスターリンに敬慕を寄せていたのとは対照的に，フルシチョフによればスターリンはホー・チ・ミンの勝利を信ぜず，むしろ侮蔑的な態度をとっていたとされる。例えば，ソ連公式訪問の可能性に未練を残していたホー・チ・ミンに対して，スターリンが後に粗暴な言辞を吐露したというエピソードや，ホー・チ・ミンに請われて自らサインした画報をチェキースト（秘密警察）に命じてホー・チ・ミンの宿泊先から奪い返したという冷酷なエピソードがある[86]。後者に関しては，ホー・チ・ミン自身もスターリンのサインした画報が消失したという事実を，帰国後特に批評することもなく周囲に漏らしている[87]。

フルシチョフが言及している以外にも，確かにわれわれはスターリンのホー・チ・ミンに対する冷淡な対応をいくつか看取することができる。前述した1950年10月14日付書簡の中で，ホー・チ・ミンが「私はあなたが私たちのために特に書くことを約束された本を手にすることを願っています。私はそれを自分で翻訳するつもりです。それは私たちの若い党にとって最も高貴な贈り物となるでしょう」[88]と述べていることから，モスクワでの会談中ホー・チ・ミンはベトナムの党のために特に著作を書き下ろすようスターリンに懇願し，スターリンもそれに対して口約束をしたものと思われる。しかし，それが実現されることは遂になかった。

そして時期的にはやや後になるが，1952年にはいるとホー・チ・ミンがスターリンと再会する機会がめぐってきた。同年10月５日から開催される全連邦共産党第19回党大会に参加するため，ホー・チ・ミンは再び秘密裏にモスクワ訪問の途につくことになった。モスクワ滞在中，ホー・チ・ミンはスターリンと会談したいという強い要望を表明している。10月17日付のスターリンあてのメッセージは，ベトナム問題に関する報告をスターリンの前で行いたいこと，そして同じくモスクワに滞在中であった劉少奇にも参加を要請して意思疎通の便宜をはかってもらおうという内容のものである[89]。しかし，その後１カ月を経てもスターリンからの返答はなく，ホー・チ・ミンがモスクワを離れる日が迫っていた。11月15日付のソ連共産党対外委員会経由でのメッセージで，ホー・チ・ミンはモスクワを離れる前に「数分」でもよいからスターリンと会見したいという希望を再度表明するとともに，もしスターリンが多忙でその時間がなければ，会見を断念してスターリンあてのメモを残していく旨述べている[90]。やはりスターリンからの反応はないまま，遂にホー・チ・ミンは帰国する日を迎えることになる。その時点（11月19日）にあってもホー・チ・ミンは「最愛かつ尊敬するスターリン同志」に「農業プログラムの実現と私たちの愛国的な闘争を前進させるために努力する」ことを誓うとともに，「二，三年後に当地を再訪してあなたに私たちの活動の成果を報告する」ことを希望するというメッセージを残して，帰路に着いた[91]。しかし，ホー・チ・ミンの願いも空しく，1953年３月スターリンの死去によって二人が再会する機会は永遠に失われる

86) Хрущев 1998, с.114.
87) Vo Nguyen Giap 1995, tr.412-413. ザップはこの問題に関して，「ソ連はベトナム民主共和国を承認したが，われわれとの密接な関係をどれだけ公表すべきか勘案していたのかもしれない」と述べている。
88) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.8.
89) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.295 л.15.
90) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.16.
91) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.19.

ことになった。

この時期には健康状態が悪化していたとも伝えられるスターリンだが，人と面会できないような状態にあったわけではなかった。10月20日，24日，27日，31日，11月３日，５日，10日，13日，14日にクレムリの執務室で，マレンコフ，カガノーヴィチ，ベリヤ，フルシチョフらの腹心と会っている。そのうち10月24日には劉少奇，陳雲，王稼祥，師哲ら中国共産党の要人を迎えており[92]，これが党大会後外国からの共産党指導者と面会した唯一の記録として残されている。ここからあらためて，スターリンが中国共産党に関する限り，これを重視していたことがわかる。

その反面ベトナムを含め，中国共産党以外のアジアの共産党に対するスターリンの態度がいかなるものであったのかは，全連邦共産党第19回党大会に先立つ時点で早くも表明されていた。1952年８～９月にモスクワを訪問した周恩来によって，第19回党大会に際してインドネシア，ベトナム，日本などアジア諸国の共産党代表にソ連・中国両党の指導者と党情勢に関して話し合いをもちたいという意向があることがスターリンには伝えられていた（９月18日）。しかし，スターリンは周恩来に「兄は弟からの申し出を拒絶するわけにはいきませんが，それに関しては劉少奇と相談しなければなりません」と述べて即答を避けようとした。劉少奇には「多くの経験がある」というのがその理由だったが，劉少奇自身が資料を携えてモスクワで一連の問題を討議する予定だという周恩来の説明を受けて，「中国の同志がこれらの問題を討論したいというのなら，もちろん私たちの側に異論はありません。もし［討論を一筆者注］お望みでなければ，話し合うまでもありません」と素っ気のない返答をするのがやっとだった。最終的には周恩来の懇願に対して「時間は何とかなるでしょう」と述べるにとどまった[93]。すでにこの時点で早くもアジア諸国の共産党との会談に消極的なスターリンの姿勢を垣間見ることができる。

２．スターリンによる土地革命提起の背景

前節で考察したホー・チ・ミンとスターリンの会談およびそれ以後のスターリンの行動から，土地革命の重要性を説きながら，政治・軍事面での実際の支援や指導は中国に任せて自らは積極的な関与を控えようとする，ベトナムに対するスターリンのアプローチにみられるいくつかの特徴を指摘することができる。ここでは特にスターリンがこの時期に土地革命に言及した要因について考察していく。スターリンはかつてコミンテルンの人民戦線戦術を是認したことからもわかるように，歴史的にみれば必ずしも階級対決路線に固執してきた人物ではない。それがなぜホー・チ・ミンとの会談でわざわざ土地革命を提起したのであろうか。

この問題に関するスターリン本人の見解を知るうえで極めて重要な文献は，ホー・チ・ミンの訪ソから時期的には１年ほど後になる，1951年２月に作成されたインドネシア共産党綱領草案（以下草案と略）に対するスターリンのコメントである。草案はもともと北京に派遣されたコンド（ムリオノ）をはじめとするインドネシア共産党臨時中央委員会代表メンバーが，中国共産党中央委員会と共同で作成したもので，1950年10月11日付で劉少奇からスターリンの意見を求めるべくローシン大使に手渡されている[94]。これを受け取ったスターリンは，インドネシア経済に関する基本的なデータが手元にないためコメントすることは不可能であるとして劉少奇に必要なデー

92) Посетители кремлевского кабинета И.В.Сталина, *Исторический архив*, No.1/1997 г., с.32-33. スターリンの健康状態に関しては以下を参照。Медведев, Ж.А., Медведев, Р.А.2002, с.13-15.
93) Ледовский, А.М.1999, с.172-173.
94) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.2.

タをあらためて送付するよう要求した（10月25日付）。スターリンが要求したのは①交通運輸部門を含めインドネシアの産業で発展している部門はどこか／各部門の労働者の数と全産業における労働者の数／全人口に占める労働者の割合②耕作地・非耕作地の面積とその内訳（地主，国家，外国人，農民ごとに）／全人口に占める農民の割合③小土地所有農民あるいは土地なし農民の数／彼らは誰の土地をどのような条件で耕作しているのか④雇農の有無とその社会階層に関するデータであった[95]。

その後，劉少奇からデータを受け取ったスターリンは，それを分析したうえでコメント（1951年２月２日付）を劉少奇あてに送っているが，その自筆草稿は６ページにも及ぶものとなっている[96]。ホー・チ・ミンに対するスターリンの冷淡な対応と比較すると，それまでほとんど知識すらなかったインドネシアに対するその反応が並みのものではなく，大変な熱の入れ様であったことがうかがえる。一体，草案の何がここまでスターリンの関心を引きつけたのであろうか。コメント全体を通じて，スターリンは封建的土地所有の廃絶を伴った土地革命など階級闘争・階級対決を重視する立場や，ボリシェヴィキ的前衛党としての組織原則に基づいた行動スタイルと政策決定方法の実践などを提起することによって草案に盛り込まれていた革命戦略を批判している[97]。しかし，ここでわれわれはこの批判がインドネシア共産党にのみ向けられたものではないという点を想起しなければならない。前述したように，草案自体が「中国革命の勝利の経験を研究した後，われわれはインドネシア共産党中央委員会に以下の提案を行う―インドネシア共産党は全世界の共産主義軍の勇敢な一部隊である」[98]という一節から始まるように，それが中国共産党とインドネシア共産党の共同作成になるという点にあらためて着目しなければならない。それに対する批判的なコメントは中国共産党の路線に対する批判という意味をもつと考えられるからである。特に次の二点は，1949年11月に劉少奇によって「毛沢東の道」として提起された中国革命の戦略・戦術を機械的に他地域へ適用することの有効性を問い，異議を唱えたものととらえられる[99]。

第一には民族統一戦線の位置付けに関する問題である。草案では「毛沢東の道」における「広範な全民族的統一戦線」とほぼ重なる「最も広範な統一戦線結成，インドネシア人民の真の独立と独立・自由・統一のインドネシア共和国建設のための不屈の闘争」や「労働者と農民の同盟に基礎をおき，労働者階級により指導される，国内のあらゆる民族，小ブルジョアジー，民族ブルジョアジー，すべての愛国的政党と集団，愛国分子を糾合した民族統一戦線」結成の必要性が提起されていた[100]。これに対しスターリンは民族統一戦線の必要性を認めながらも，インドネシア共産党の差し迫った基本的課題はそのような広範な民族統一戦線の結成ではなく，「封建的土地所有の廃絶と土地の農民への譲渡である」と述べて，「インドネシアで重要なことは農民を活気づかせて，立ち上がらせることだ」として「土地革命」遂行の重要性を強調した[101]。草案で「インドネシアからオランダ，アメリカ，イギリス帝国主義勢力すべて

95)　РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.13-14.
96)　РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.51-56, 57-62.
97)　Там же, л.55-56.
98)　Там же, л.2.
99)　「毛沢東の道」の内容に関しては “Речь Лю Шао-ци на конференции профсоюзов стран Азии и Океании”, *Правда*, 4 января 1950 г. を参照。
100)　РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.5-6.
101)　Там же, л.51.

を駆逐する」ことが民族統一戦線の課題の一つとしてあげられていた点に対しても，スターリンは民族統一戦線の矛先をすべての外国帝国主義者に向けるのではなく，「オランダ帝国主義者のみ」に限定し，かつ土地革命と連動させる必要性を指摘している。民族統一戦線の基盤には「労農同盟が存在し，その耐久性は土地革命の進展にかかわっている」というのであった[102]。広範な民族統一戦線の結成を主張する「毛沢東の道」に対して，スターリンは階級を重視した幅の狭い民族統一戦線を対置したといえよう。

第二点は「毛沢東の道」の中核ともいうべき武装闘争，民族解放軍と根拠地の建設に関する問題である。草案では活動の重心を徐々に農村へとシフトさせ，適切な地域を選択してゲリラ部隊を組織して武装闘争を開始するという，「毛沢東の道」に忠実な戦略がうたわれていた[103]。スターリンは中国の事例からその効用を認めながらも，インドネシアの場合大きな限界が存在するとして，以下の３点を指摘した[104]。

(1) ゲリラ戦法が効果的に適用されるには，鉄道や都市から隔たった一連の森林・山岳地帯をもつ大きな国家の存在が前提となるが，インドネシアではそのような条件は限られている。

(2) 解放区の役割を考えた場合，島嶼では敵に包囲され，堅固な後方を築くことができない。中国の場合，ソ連が後方として存在したことが有利に作用した。

(3) 中国共産党にとって有利だったのは，1927年蒋介石と袂を分かった時点ですでに数万人規模の軍隊を保有していたことである。インドネシア共産党にそのような軍隊はない。

さらにスターリンは，「ゲリラ戦を都市と工業地帯における労働者階級の革命的行動，全般的な経済・政治的ストライキで補充し，反動政府の活動を麻痺させ，農村におけるゲリラ戦支持に向けなければならない」と述べ，それが上述の限界からの脱却する唯一の方法であると説いている[105]。ここには農村にばかり目を向けて，ゲリラ戦へとはやろうとする戦略に対する厳しい批判が込められているとみられる。

以上二点に象徴されるスターリンの批判的コメントは，中国共産党にアジア地域の共産党に対する支援を任せても，前者の革命路線を普遍化することまでは許容してはいないというスターリンの意志を示した可能性をもっていたと考えられる。おそらく，スターリンからコメントを受け取った，「毛沢東の道」の作者でもある劉少奇は相当困惑したのであろう。コメントを送付してから２カ月が経過しても中国側から何の返答もないのに業を煮やしたスターリンは1951年４月３日付毛沢東あての電報で，劉少奇と中国共産党中央の求めに応じて作成したインドネシア共産党綱領草案に対するコメントの件がその後どうなったのか情報を提供するよう要求した[106]。劉少奇はこれには直ちに反応し，４月５日付のスターリンあて電報でコメントに対する同意を表明するとともに，コメントをインドネシア共産党に伝えようとしていた矢先，１月６日にインドネシア共産党指導部の交替があったという情報を入手したためにそれを中止せざるを得なくなったと弁明している。劉少奇は同党新中央委員会の状況が不明であり，中国共産党から政治的なアドバイスを受けたいとの意向を表明していないことから，インドネシア共産党中央委員会に対して公式なアドバイスはこちらから持ち出すべき時期ではないと思われること，そして状況が明確になって，インドネシア共産党中央委員会の方から

102) Там же, л.6, 52.
103) Там же, л.10.
104) Там же, л.53-54.
105) Там же, л.54-55.
106) Там же, л.63.

アドバイスを求めたいと言ってきたら，アドバイスをしてはどうかと述べている[107]。

このような劉少奇の対応は中国共産党が他の共産党に対して押し付けがましい態度をとらずに，相手の意向を十分に尊重して慎重な対応をしようとしているかのようにもみえる。しかし，より重要なのはスターリンの意向も確認せずに中国側が独自の判断で，「毛沢東の道」を批判したともとれるコメントを他党に送付することを見合わせる決定を下したことである。これに関していえば，毛沢東は1951年４月７日付のスターリンあてメッセージの中で劉少奇よりも単刀直入に「（前略）今はあなたの指示をインドネシア共産党に伝えるのに適した時機ではありません。状況をはっきりさせるためにもう少し待たなければなりません。インドネシア共産党指導部が政治的支援を求めてきたら，私たちはあなたの指示をしかるべき形で伝えます」と断定的な口調で述べている[108]。

以上のようなインドネシア共産党綱領草案をめぐる中ソ両党指導者間のやりとりには，尖鋭化した形ではないにせよ，後の中ソ対立の萌芽ともいうべきものが見えているといえるだろう。その意味では，中ソ関係が険悪であった時代（1980年代）に，ボリーソフらが「1950年から51年にかけてマオイストはインドネシア共産党とインド共産党に，これらの国々における具体的な状況を無視して，中国における解放運動の経験（農民軍の形成と解放区の建設）をコピーすることを要求した綱領を押し付けようとした。この路線に対して断固として異議を唱えたのがスターリンであった」と指摘していたのは大筋で正鵠を得ていたことになる[109]。

コメントはインドネシアの具体的な状況に基づいて戦略を策定することの重要性についてスターリン自身が模範を示した形をとっており，少なくともそこで提起された観点を例えば「毛沢東の道」に対抗して普遍化しようとするといった姿勢はみられない。それをよく示すのは，草案で政治的要求として提起された「ソ連，中国，人民民主主義諸国との同盟，平和と民主主義の陣営擁護，アジアに対する帝国主義の干渉とインドネシアを帝国主義侵略戦争の踏み台へと変えることに反対する闘争」という一節から，「ソ連，中国，人民民主主義諸国との同盟」という部分を「不適切」であるという理由で削除した点や[110]，前述したように統一戦線の矛先を抽象的な「すべての外国の帝国主義者」に向けるのではなく，「オランダ帝国主義者のみ」に限定するよう指摘した点などである[111]。もともと問題を普遍化するのを嫌い，個別・具体的に把握する傾向のあったスターリンの，一国社会主義論者としての風格がコメントにはよく反映されている[112]。

しかし，同時にコメントにはインドネシアのみに範囲を限定して把握することのできない問題も多く含まれている。まず，スターリンがコメント執筆に先立って労働者と農民に関するデータを要求したこと，しかもその中では後者の方に比重を置いた事実は，その一般的な関心が執筆以前，すでに農民に向けられていたことを示すものである。この点が前述したホー・チ・ミンとの会談に際しての発言内容とも一致することは言うまでもない。そしてコメントの冒頭における「インドネシア特有の農業的性格にもかかわらず，他のいくつかの植民地国家よりははるかに工業が発

107) Там же, л.65.
108) Там же, л.66.
109) Борисов О.Б., Колосков Б.Т.1980, с.124. ただし，本書には典拠が明記されていない。またインド共産党に関するスターリンの立場に関する資料は未見。
110) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.6, 52.
111) Там же, 52.
112) 栗原浩英 1998, p.149, 154

展しているという印象を受ける」という指摘や，武装闘争（ゲリラ戦）に関して「中国の経験が示すように，インドネシアのような後進諸国にとっては有効な方法であることも認めなければならない」という指摘は，スターリンがこの時期広く植民地や「後進諸国」に目を向け始めていたことを示す証左と考えられる[113]。その意味ではコメントで提示された観点がスターリンの「アジアにおける解放闘争の問題への全般的なアプローチ」を示したものであるとみなすことは十分に可能であろう[114]。

さらに，インドネシア共産党指導者は今日に至るまで「左翼的な言辞の虜」になっており，「状況をよく理解せずに一撃ですべての問題を解決しようとしている」という同党の「左翼小児病」的傾向に対する批判や，同党がインド共産党のように「取り留めのない議論」をしていると党が潰れると警告したうえで「非合法党にとって簡単で信頼するに足る方法」として提示したボリシェヴィキ的な前衛党の活動方法は，いずれもインドネシア共産党という次元を超える普遍的な党活動原則につながるものである[115]。

スターリンがコメントに含まれたこれら普遍的な側面を以後どのように発展させようとしていたのか，それは２年後彼の死によって未解明のまま閉ざされてしまうことになるが，少なくともスターリンの植民地に対する関心は，それらの地域における共産党を主体とした民族解放運動の支援には直結しなかったことは確かである。すでに述べたようにスターリンはベトナム革命を直接支援しようとはしなかったし，同様な態度は朝鮮戦争に関しても専ら中国に人的犠牲を強いた点や中国共産党を除くアジア地域の共産党に対する消極的な姿勢に明確に表れていた。スターリン存命中は，中ソ両党間にインドネシア共産党綱領草案をめぐるような齟齬はあったにせよ，それが表面化することはなかったのは，まさにスターリンが国際政治において「ソ連にグローバルな次元での主導的な役割を確保するとともに，中華人民共和国がアジア地域における国際関係において主要な役割を果たすように中国共産党指導部を奨励」するという分業体制をとったからであろう[116]。いずれにせよ，アジアや旧植民地に対するスターリンのアプローチはフルシチョフ以降の指導部が中国との国際共産主義運動をめぐるヘゲモニー争いもあって，世界各地の民族解放運動や「社会主義的傾向」をもった政治勢力を自らのグローバルな革命戦略の中に位置付けて直接支援を展開していったのとは大きく様相を異にしている。

むすびにかえて

本稿における論証を通じてホー・チ・ミンのモスクワ到着の時期，ホー・チ・ミンとスターリンの会談の内容，ホー・チ・ミンと中国共産党指導者との関係については，多くの事実を明らかにすることができたといえるだろう。結果的には『劉少奇年譜』や『ホー・チ・ミン年表』など既存の刊行物の記述に大きな誤りがないことを部分的には確認することになったかもしれないが，それを一次資料に依拠して論証した点には意義があると思われる。しかし，同時にホー・チ・ミンのモスクワ滞在期間や北京までの日程，スターリンとの会談が行われた場所や日時など依然として未解明の問題が残っていることも認めなければならない。

また，本稿でとりあげた時期は，民主共和国にとってみれば中国が最大の援助元であり，

113) Там же, л.51, 53.
114) Данилов, А.А., Пыжиков А.В.2001, с.59.
115) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.313 л.55-56.
116) Ледовский 1999, с.175.

両国・両党間に密接な関係が築かれつつあったことは言うまでもないが，それは中国と民主共和国の二国間あるいは中国共産党・インドシナ共産党二党間の関係に還元して論じられるべきではなく，あくまでもスターリンによる同意や是認の上に成立していた点が銘記されなければならない。例えば，土地改革の遂行過程で生じた問題に関しては中国の果たした役割のみが強調される傾向があるが[117]，その起点としてのスターリンの発言がもたらした意義を看過することはできない。そして，中国共産党とインドシナ共産党にとどまらず，インドネシア共産党やインド共産党のケースが示すように，重要な路線問題に関してこれらの党がスターリンの見解や判定を求めたことは，当時の国際共産主義運動に君臨するスターリンの実質的な最高指導者としての地位をよく示している[118]。またその威厳がいかに大きかったかは，ホー・チ・ミンとの会談での土地革命に関するスターリンの発言が，その後民主共和国の政治情勢を左右するほどの重みをもってインドシナ共産党の指導部には迎えられたことをみれば十分である。

これとは逆に民主共和国に対する援助や指導は専ら中国に負担させてソ連としては積極的に関与しようとはしなかったり，人間関係においても，スターリンが最後までホー・チ・ミンに冷淡な態度をとり続けたりしたことは事実として残る。しかし，それにもかかわらず，ホー・チ・ミンはスターリンに対して心から敬慕の念を抱いていた。スターリンの死後３年を経た1956年のスターリン批判に関しても，ホー・チ・ミンは「スターリンの行動に関していえば，その70%は肯定的な性格をもつものであり，30%が誤りであると考えられるにすぎない」とソ連側に語っている（1957年１月）[119]。ベトナム労働党がスターリン批判の本質的な部分を回避したために，現在のベトナム共産党にとってもスターリンは決して忌避の対象となる歴史的人物の範疇には属していない。皮肉なことにスターリンの冷淡な態度を批判してホー・チ・ミンに理解と尊敬の意を示したフルシチョフに対する評価が今日に至るまで高くないのとは対照的である。スターリン批判を敢行し，民主共和国に対しては本格的な援助の先鞭をつけたフルシチョフだが，彼を失脚に追い込んだブレジネフを中心とするソ連共産党指導部が民主共和国さらにはベトナム社会主義共和国に大口の援助を行ったことからすれば，評価が芳しくないのも当然であろう[120]。

こうした評価の差異に関しては次のような事情も考慮する必要があるだろう。すなわち，スターリンには植民地における革命に対する関心はあっても，そのベトナムやインドネシアに対する認識からは，超大国の要件ともいうべきグローバルな世界戦略を，この時期まだ持ち合わせていなかったことがわかる。第二次世界大戦終了からスターリン死去までの間に，ソ連の「対外政策の範囲」が拡大して，ソ連が国際政治の舞台に登場したことや，社会主義諸国との関係の原則が構築されたなどソ連の国際的な地位に大きな変化は生じたのは確かであるが[121]，そこには中国を除けば，植民地やアジア地域はほとんど包摂されていなかったといえる。まさにスターリンが言っ

117) To Huu 2000, tr.277.
118) РГАСПИ ф.558 оп.11 д.312 л.46-56. スターリン本人もそのことを自認していたとみられる点については石井 1990, p.257を参照。
119) Бухаркин 1998, с.132.
120) 詩人でベトナム労働党・共産党中央委員，政治局員を歴任し，スターリンを賛美する詩も残しているトー・ヒューは，フルシチョフが失脚した時，誰もが喜んだと述べている。ただし，トー・ヒューの場合，フルシチョフに対する嫌悪は，政治的な性格のものではなく，会談の場で正面きって揶揄されたという怨念に発するもののようである。To Huu 2000, tr.351-355.
121) Данилов, А.А., Пыжиков, А.В.2001, с.269.

たように，「ソ連はベトナムから遠い」存在にしかすぎなかったのである。スターリンがベトナムに深入りしなかったことも手伝って，ベトナムからみればスターリンは，遠く高い世界にいる無害な存在であったのだろう。

スターリンが土地革命に言及した背景には，中国共産党の革命路線（「毛沢東の道」）の機械的適用に対する異論が存在していたと考えられることは本文で指摘した通りである。インドシナ共産党が，インドネシア共産党綱領草案をめぐるスターリンと劉少奇のやりとりに関する情報を入手したかどうかは不明であるが，スターリンのコメントが作成されたのと同じ1951年２月に開催されたインドシナ共産党第２回党大会では，「毛沢東の道」の受容が公然と宣言され，毛沢東思想にはマルクス・レーニン・スターリン主義と並ぶ地位が与えられていた[122]。このような選択もスターリンが生きている間は，前述した対外政策の下で問題化することはなかった。しかし，スターリンの死後，ソ連が超大国としてグローバルな世界戦略を展開し，民主共和国との関係も密接になるにつれて様々な摩擦も生じることになるのは容易に予見のできたことではなかったろうか。しかも，そこに中ソ対立とベトナム戦争という要因が加わることになる[123]。いずれにせよ，超大国としてのソ連とそのグローバルな戦略の中に位置づけられた民主共和国との関係の考察はすでに本稿を超える大きな次元の問題であるため，その検討は別稿に譲ることとしたい。

参 考 文 献

《日本語文献》

石井　明　1990 『中ソ関係史の研究　1945-1950』東京大学出版会
栗原浩英　1995 「コミンテルンのベトナム人活動家」『アジア研究』第41巻３号，pp.49-83
――――　1998 「コミンテルンと東方・植民地」岩波講座『世界歴史』24，pp.143-162
――――　2000a 「コミンテルンとインドシナ共産党―KYTB 留学幹部にみる移動と政治思想の伝播―」宮崎恒二編『東南アジアにおける人の移動と文化の創造』論集Ⅰ，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp.99-119
――――　2000b 「ベトナム戦争と中国・ソ連」『アジア研究』第46巻３・４合併号，pp.111-140
古田元夫　1995 『ベトナムの世界史』東京大学出版会

《中国語文献》

広西社会科学院　1995 『胡志明主席与中国』北京：中国大百科全書出版社
黄　　錚　1987 『胡志明与中国』北京：解放軍出版社
『建国以来毛沢東文稿』第一冊，北京：中央文献出版社，1987
羅貴波　1988 「少奇同志派我出使越南」『緬懐劉少奇』（『緬懐劉少奇』編輯組）pp.233-242，北京：中央文献出版社
――――　1995 「歴史的回顧」『開啓国門』（符浩・李同成主編）pp.150-176，北京：中国華僑出版社
裴堅章　1994（主編）『中華人民共和国外交史　1949-1956』北京：世界知識出版社
楊奎松　1999 『毛沢東与莫斯科的恩恩怨怨』南昌：江西人民出版社
伍修権　1983 『在外交部八年的経歴（1950.1-1958.10）』北京：世界知識出版社
中共中央文献研究室　1996（編）『劉少奇年譜』下巻，北京：中央文献出版社

《ベトナム語文献》

Ban nghien cuu lich su Dang Trung uong. 1979. *Nam muoi nam hoat dong cua Dang Cong san Viet Nam.* Ha Noi: Nxb Su that.

122) 古田元夫 1995, pp.154-157
123) ベトナム戦争中，ベトナム労働党とソ連・中国の間にどのような問題が存在したのかについては以下を参照。栗原浩英 2000b, pp.111-140

———— . 1981. *Lich su Dang Cong san Viet Nam (So thao)*, tap I. Ha Noi: Nxb Su that.
———— . 1984. *Lich su Dang Cong san Viet Nam (So thao)*, tap I. Ha Noi: Nxb Su that.
"Chinh phu quyet dinh lay ngay 18-1 lam ngay ky niem thang loi ngoai giao". *Tin tuc*. 15-1-1951.
Di chuc cua Chu tich Ho Chi Minh. Ha Noi: Ban chap hanh Trung uong Dang Cong san Viet Nam, 1989.
Dang Lao dong Viet Nam, Ban chap hanh Dang bo Khu tu tri Viet Bac. 1971. *Van Kïen*, tap VI, Ban nghien cuu lich su Dang Khu tu tri Viet Bac.
Ho Chi Minh Toan tap. (12 tap) Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995-1996.
———— , tap 4. Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995.
———— , tap 6. Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia, 1995.
Hoang Van Hoan. 1986. *Giot nuoc trong bien ca*. Bac Kinh: Nxb Tin Viet Nam.
Le Kim Hai. 1999. *Ho Chi Minh voi quan he ngoai giao Viet-Phap Thoi ky 1945-1946*. Ha Noi: Nxb Dai hoc quoc gia Ha Noi.
Le Van Hien. 1995. *Nhat ky cua mot bo truong*, tap II. Da Nang: Nxb Da Nang.
To Huu. 2000. *Nho lai mot thoi*. Ha Noi: Nxb Hoi nha van.
Van kien lich su Dang, tap IV. Ha Noi: Truong Nguyen-Ai-Quoc.
Vien Kinh te. 1968. *Cach mang ruong dat o Viet-nam*. Ha Noi: Nxb Khoa hoc xa hoi.
Vien Mac-Lenin. 1980-1989. *Ho Chi Minh Toan tap*. (10 tap). Ha Noi: Nxb Su that.
Vien nghien cuu chu nghia Mac-Lenin va tu tuong Ho Chi Minh. 1994. *Ho Chi Minh Bien nien tieu su*, tap 4, Ha Noi: Nxb Chinh tri quoc gia.
Vo Nguyen Giap. 1995. *Chien dau trong vong vay*. Ha Noi: Nxb Quan doi nhan dan.
———— . 1999. *Duong toi Dien Bien Phu*. Ha Noi: Nxb Quan doi nhan dan.
Vu Dinh Huynh. 1993. "Thang Tam co bay". *Van nghe*, so 36.

《英語文献》

Patti, Archimedes L.A. 1980. *Why Viet Nam?* Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
Qiang Zhai. 2000. *China and the Vietnam Wars 1950-1975*. Chapell Hill and London: The University of North Carolina Press.
United States-Vietnam Relations 1945-1967. Book 1 of 12. Washington: U.S.Government Printing Office, 1971.

《ロシア語文献》

Борисов О.Б., Колосков Б.Т. 1980. *Советско-китайские отношения 1945 - 1980*. (Издание третье, дополненное). Москва: Мысль.
Бухаркин, И.В. 1998. "Кремль и Хо Ши Мин. 1945-1969 гг." *Новая и новейшая история*, No.3/1998, с.125-140.
Данилов, А.А., Пыжиков А.В. 2001. *Рождение сверхдержавы: СССР в первые послевоенные годы*. Москва: РОССПЭН.
Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПСС, Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПВ. 1987. *Интернациональное сотрудничество КПСС и КПВ*. Москва: Издательство политической литературы.
Ледовский, А.М. 1999. *СССР и Сталин в судьбах Китая. Документы и свидетельства участника событий: 1937-1952*. Москва: Памятники исторической мысли.
Медведев, Ж.А., Медведев, Р.А. 2002. *Неизвестный Сталин*. Москва: Издательство «Фолио».
Министерство иностранных дел СССР, Министерство иностранных дел СРВ. 1982. *Советский Союз-Вьетнам*. Москва: Издательство политической литературы.
Политбюро ЦК РКП(б)-ВКП(б). Повестки дня заседаний. 1919-1952: Каталог/Т.III. Москва: РОССПЭН, 2001.
"Посетители кремлевского кабинета И.В.Сталина: 1950-1953". *Исторический архив*, No.1/1997, с.3-39.
"Речь Лю Шао-ци на конференции профсоюзов стран Азии и Океании", *Правда*, 4 января 1950 г.
Советский фактор в Восточной Европе 1944-1953. Т.2. Москва: РОССПЭН, 2002.
Федеральная архивная служба России, Росийский центр хранения и изучения документов новейшей истории, Фонд Джанджакомо Фельтринелли. 1998. *Совещания Коминформа, 1947, 1948, 1949. Документы и материалы*. Москва: РОССПЭН.
Хрущев, Н.С. 1999. *Время. Люди. Власть*. (Книга третья). Москва: Московские новости.

《ロシア国立社会政治史文書館（РГАСПИ）所蔵資料》

Фонд 17 опись 128 дело 404: Беседа посланника СССР в Швейцарии с заместителем государственного секретаря при Президентуре Совета Министров Республики Вьетнам о положении в стране и в

коммунистической партии, международные отклики на войну во Вьетнаме.
Фонд 558 опись 11 дело 295: Переписка Сталина И.В. с Хо Ши Мином. 1.02.50-19.11.52
———— 313: Переписка Сталина И.В. с Лю Шао-ци, Мао Це-дуном о политической линии ЦК КП Индонезии, о реорганизации руководства компартии Индонезии. 14.10.50-09.04.51
———— 312: Ответы Сталина И.В. на письма Гоша, информационные материалы о ходе обсуждения ЦК КП Индии проектов Программы компартии и документа о тактике компартии Индии, представленные Внешнеполитической комиссией ЦК ВКП (б).

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【Article】

Note d'introduction sur les musiques traditionnelles des Antakarana

Live, Yu-Sion
Université de La Réunion

This article analyzes the role of traditional music in the lifetime of the Antakarana, a population who lives in the North of Madagascar. Their musical practices are closely linked to their way of thinking, and contribute to strengthen their social cohesion and their cultural identity. In spite of the adverse effects of a modern life and the exodus towards the cities of the musicians and singers, traditional rites have not lost their dynamism and are always accompanied with songs and dances.

1. Bref rappel historique du Nord-Ouest de Madagascar
2. Géographie musicale antakarana
3. Typologie des genres musicaux antakarana
4. Les caractéristiques
5. Chants et danses à travers le rituel des vœux ou *tsakafara*
6. Techniques, sens et symbolisme des chants et danses antakarana
7. Instruments de musique du Nord de Madagascar
8. Conclusions

Le Nord-Ouest de Madagascar est un carrefour humain qui met en contact, depuis deux millénaires, des migrations du monde austronésien, bantou, arabe, indien, chinois, européen... La rencontre des êtres, des savoirs et des civilisations a généré des musiques et des danses propres aux Antakarana. Des chants profanes, rituels ou sacrés, en polyphonie, a capella, en appel-réponse... sont exécutés suivant un contexte particulier, et sont souvent ponctués par des improvisations notamment dans les refrains. Des instruments de musiques des temps anciens et modernes accompagnent les grands rituels de ce groupe de population.

Pour comprendre les spécificités musicales des Antakarana, il est indispensable de revenir brièvement sur les étapes historiques du peuplement de Madagascar, et surtout sur celles du Nord-Ouest où l'origine et le destin des Antakarana et d'une autre population voisine, —les Sakalava—sont étroitement imbriqués.

Keywords: Madagascar, Antakarana population, ritual songs, ritual of vows, traditional musical instruments.

* Visiting Professor ILCAA (September 2002-August 2003)

1. Bref rappel historique du Nord-Ouest de Madagascar

L'histoire de la Grande Ile[1] peut se diviser, grosso modo, en deux millénaires :

- le premier est principalement marqué par les mouvements migratoires malayo-polynésiens et arabo-bantous ;
- le second par la naissance et le développement des royautés issues des migrations du premier millénaire, puis par d'autres arrivées indonésiennes au XVIe siècle[2], et plus tard après XVIIIe siècle, par la traite de l'esclavage et la colonisation européenne.

- Les migrations malayo-polynésiennes ont commencé vers le Ve siècle puis se sont poursuivies jusqu'au XIIIe siècle. Elles ont connu leur point culminant au IXe siècle. Deux thèses s'affrontent aujourd'hui pour ce qui concerne l'arrivée des premiers Indo-malais :

- l'une postule qu'ils sont venus directement de Sumatra au moyen des pirogues à balanciers poussés par des courants marins ;
- l'autre suppose qu'ils auraient longé les côtes indiennes, arabes et africaines orientales en faisant du commerce, et seraient même établis quelque temps sur les terres africaines. Leurs descendants métissés d'éléments bantous auraient migré par la suite vers les régions Nord et Nord-Est de Madagascar.

- Les migrations africaines sont également difficiles à définir.

La proximité géographique avec l'Afrique montre des analogies avec le continent noir. Les hommes et les coutumes présentent des similitudes avec l'Archipel malais, les animaux rappellent les espèces indo-malaises. Dans la sorcellerie, on retrouve les mêmes pratiques en Afrique et en Indonésie.

On ne sait si les premiers africains ont débarqué à Madagascar avant que les Bantous ne maîtrisent la navigation au VIIIe siècle ou bien auparavant. Au XVe siècle, des Makoa de l'Afrique Centrale furent expédiés aux Comores comme esclaves par des commerçants arabes. De nos jours, la plupart de leurs descendants vivent encore à l'île d'Anjouan. A leur libération en 1877, ils sont partis s'installer à Madagascar et ont adopté par la suite des coutumes sakalava. Aujourd'hui, ils se sont répandus sur toute la côte Nord-Ouest de Madagascar ainsi que dans la côte Est (Maintirano).

- Les premiers éléments musulmans à arriver à Madagascar sont aussi délicats à dater que les Africains. On sait seulement qu'entre le VIIIe et le XIe siècle, des commerçants arabes (et swahilis de traditions islamiques), en passant par les Comores,

---

1) Les références sur l'Histoire de Madagascar et sur la partie Nord-Ouest de la Grande île sont nombreuses. Cf. bibliographie, notamment P. Vérin, V. & R. Thompson Adoff, E. Ralaimihoatra, Ch. Radimilahy. G. Feeley-Harnik, L. Sharp, etc.

2) Au XVIe siècle, les migrations d'éléments indo-malais - appelés Merina plus tard (Ralambo 1575-1610) - pénétrèrent à l'intérieur de la Grande Ile.

ont établi des comptoirs qui ont ensuite fini par former des petites colonies sur les côtes Nord et Ouest de Madagascar. Vers le IXe siècle, les conflits qui agitèrent le monde musulman poussèrent de nouveaux migrants arabes vers les côtes africaines, pour donner naissance à des Cités-États. Plus tard, ils partirent s'implanter aux Comores et à Madagascar. Les comptoirs arabes ou Cités-États furent placés sous l'autorités du sultan de Nosy Manja, une île située sur la baie de la Mahajamba (fleuve au Nord-Ouest près de Mahajanga). D'un autre côté, les échanges commerciaux entre l'Afrique orientale et Madagascar se sont poursuivis jusqu'au XVIe siècle. Cependant entre 1550 et 1600, les commerçants arabes ont perdu leur suprématie dans l'Océan Indien. Leurs comptoirs sont fréquentés par les Européens dès l'arrivée de ces derniers. Les Portugais s'en sont ensuite emparés, puis les ont définitivement occupés.

Les Malgaches appellent ces populations de traditions arabo-africaines (arabes et comoriens métissés d'Africains) : les *Antalaotra*, des « *gens venus de la mer* ».

Dès le IXe-Xe siècle, la civilisation *antalaotra* commençait à se constituer à Madagascar. Sous sa forme primaire, elle apparaissait sous des traits culturels à la fois bantous, arabes et malgaches. Par la suite, l'Islam exerça une forte influence sur ces populations côtières, sans pouvoir vraiment pénétrer à l'intérieur de Madagascar. Parallèlement entre le Xe et le XVe siècle, des clans d'Antalaotra se formaient en petites dynasties, avec à leur tête, un chef traditionnel. Ensuite, certains partirent s'établir tout au long des côtes malgaches, ceux du Nord-Est émigrèrent vers le Sud-Ouest de Madagascar.

Les premiers royaumes malgaches naissaient ainsi à partir des XIVe-XVIe siècles. Trois se montrèrent particulièrement entreprenants et dynamiques : à l'Ouest, le royaume Sakalava ; à l'Est le royaume Betsimisaraka ; au Centre le royaume Merina.

- A la fin du XVIe siècle, la dynastie des Maroseraña « *beaucoup de ports* », originaire de l'Est, mais implantée depuis deux siècles dans le Sud-Ouest, établit le Royaume du Menabe (par Andriamandazoala 1540-1575) autour de Bengy, au bord de la Saka, un affluent du Mangoky. Les règnes successifs de Andriamisara et de Andriandahifotsy (environ 1610-1685) dotèrent alors le Menabe d'une administration territoriale et d'institutions durables, par une politique de conquête et d'alliances ou aux moyens d'armes à feu achetées aux trafiquants arabes et européens. Mais les querelles de succession conduisirent Andriamandisoarivo (1685 - vers 1718), fils cadet de Andriandahifotsy, à partir dans le Nord-Ouest pour fonder le Royaume du Boina, près de Mahajanga. (Ambatoboeny devint la nouvelle capitale du Royaume du Boina). Ce deuxième royaume étendit son contrôle jusqu'à l'extrême Nord de Madagascar, en pays Antakarana, et aussi une partie du Nord-Est (Vohémar). Mahajanga fut choisie, à la fin du XIXe siècle, comme résidence monarcale du Royaume Salalava du Boina. Ainsi, la dynastie maroseraña occupa plus du tiers du territoire de Madagascar, contrôlant les ports de la région Ouest, monopolisant le commerce des armes à feu et de la traite

alimentée par des razzias à l'intérieur de la Grande Ile.
Mais divisés par des rivalités claniques au commencement du XIXe siècle, le Royaume du Menabe et le Royaume du Boina furent malmenés par les attaques du Royaume Merina. En 1811, Radama 1er (1810-1828), fils d'Andrianampoinimerina (1787-1810) conquit une partie du Boina et en 1824, il réprima sévèrement la révolte des Sakalava, mais sans pouvoir arriver à les soumettre même s'il épousa une princesse sakalava. Son successeur, la reine Ranavalona 1ère (1828-1861) lança 10.000 soldats pour écraser la résistance des Sakalava mais ne réussit guère totalement à les conquérir. Les Comores et Zanzibar, qui entretenaient d'intenses relations commerciales avec la zone Nord-ouest de Madagascar, vinrent à la rescousse des Sakalava.

Les migrations, le brassage ethnique, les échanges culturels divers, les rivalités politiques... du passé dans la partie Nord-Ouest de Madagascar ont formé la civilisation antakarana. Aujourd'hui, les Antakarana, métissés de traditions africaines et islamiques constituent un groupe où des spécificités culturelles se sont affirmées (culte aux Ancêtres, rites funéraires, circoncision, rituels des vœux, élévation du mât royal...). Leurs musiques traditionnelles découlent de la fusion des apports arabes, austronésiens, africains et européens. Elles sont l'une des composantes majeures de la culture de cette population.

2. Géographie musicale antakarana

La délimitation géographique du territoire des Antakarana, qui court depuis Ambanja au Sud jusqu'à Antsiranana à l'Extrême-Nord, n'a pas beaucoup de sens d'un point de vue culturel, et en particulier musical. Elle s'étend au-delà d'Ambanja. Les musiques traditionnelles antakarana sont nourries par des apports culturels sakalava, arabes, bantous, makoa, ... et plus tard européens. D'une manière générale, lorsque les musiciens antakarana parlent de leur musique, ils utilisent souvent l'expression « musique sakalava ». La frontière ethnico-culturelle entre Sakalava et Antakarana n'est guère étanche. Depuis le XVIIe siècle, les deux groupes de populations entretenaient des relations pacifiques. Les Sakalava du Boina s'étaient, petit à petit, intégrés à la société antakarana en respectant les mœurs et les coutumes de cette dernière. Les échanges séculaires entre les deux groupes ont laissé des traces profondes, surtout dans le domaine musical.

3. Typologie des genres musicaux antakarana

Les musiques traditionnelles antakarana peuvent être divisées en trois catégories :
- musique profane (ou séculière),
- musique rituelle,
- musique sacrée.

La musique rituelle et la musique sacrée sont liées, parfois les deux genres se confondent.

- ***La musique profane traditionnelle***

Elle se fonde sur une catégorie de chants fonctionnels qui mettent l'accent sur des thèmes se rapportant aux réalités de l'existence quotidienne : travail, entraide, solidarité, amour, maladie, jalousie, etc. Du chant des bouviers aux chants engagés (méfaits de la guerre, campagnes de vaccination, protection de l'environnement...), il existe une grande variétés de chants séculiers ou d'entrain...

Un genre profane, appelé sous le nom générique de *rangolahy*, a pour rôle d'encourager les gestes et les efforts au travail dans les rizières, dans l'abattage d'un arbre, lors du passage d'une rivière, durant la construction d'un pont, lorsque des piroguiers pagayent, etc. Ce sont des chants en chœur d'hommes (*mandrango*) ou de femmes (*kolondroy* d'origine arabe) qui sont accompagnés par de battements de mains à rythmes rapides.

- ***La musique rituelle***

La musique rituelle comprend toute une série de chants exécutés lors des naissances, des rites de passage (circoncision, mariage...), des transes, des veillées mortuaires, des funérailles, des fêtes traditionnelles... A chaque cérémonie correspond un chant particulier.

Un genre qui tend à disparaître aujourd'hui est le *baheza* : un récit hagiographique chanté qui relate le passé d'un défunt ou d'un Ancêtre. Ce chant est déclamé par un soliste lors de la veillée mortuaire, ou encore dans d'autres circonstances comme lors d'une cérémonie de vœux, d'un anniversaire de la mort d'un défunt, d'une commémoration d'un événement politique, etc. Le soliste célèbre sur un ton mélancolique la vie du disparu. Le *bahesa* est de plus en plus rarement pratiqué dans le Nord de Madagascar, mais il appartient, toujours, aux répertoires des chants traditionnels antakarana. Ce chant est en fait originaire des habitants du littoral sud-est de Madagascar : les Antemoro et les Antaisaka qui sont également imprégnés de traditions musulmanes. Son introduction dans le Nord de Madagasacar est, selon toute vraisemblance, liée à la fondation et à l'essor des royaumes du Menabe et du Boina.

- ***La musique sacrée***

Les chants sacrés appelés *antsa maventy*, ou *antsa faly* (littéralement chants tabous) sont réservés à Zanahary (Dieu) ou aux cérémonies royales telles que la circoncision des princes, l'érection du mât royal (*tsangan-tsaina*), l'inauguration d'un palais, les funérailles d'un souverain, les cultes aux cimetières royaux (*mahabo*), etc. Les chants et les danses sont spécifiquement réservés aux cérémonies relatives au pouvoir souverain.

4. Les caractéristiques

Les caractéristiques des musiques traditionnelles antakarana peuvent être :
- vocales, polyphoniques, construites sur le mètre mesuré (battements de mains...) et le non-mesuré (improvisation des paroles) ;
- instrumentales (musiques de réjouissances), polyrythmiques (superposition des mesures binaires et ternaires).

Les chants traditionnels dénommés *antsa vakodrazana* sont des polyphonies vocales accompagnées par la polyrythmie des battements ou claquements des mains. Ils sont souvent de type responsorial. Le soliste entonne un vers et le chœur lui répond en reprenant les mêmes paroles. Cette reprise est parfois exécutée par le procédé du tuilage, c'est-à-dire la superposition occasionnelle de la dernière note d'un énoncé et celui du début du chœur. Il arrive aussi que lors des rites traditionnels (première coupe de cheveu, circoncision, transe...) les chants soient construits sur de très courtes paroles qui sont indéfiniment répétées par le chœur ou par l'ensemble de l'assistance. Ce procédé répétitif permet d'appeler les Ancêtres, et pour que les vivants puissent entrer en relation avec eux.

Il existe également dans la catégorie de musiques traditionnelles antakarana des chants a capella, chantés en solo, sans instrument de musique. Quant aux musiques d'entrain ou de divertissement, elles peuvent être monotones ou joyeuses, mais aussi polyrythmiques, instrumentales (hautbois *kabiro*, cithare tubulaire *valiha*, accordéon...), plurivocales ou bien les trois à la fois.

5. Chants et danses à travers le rituel des vœux ou *tsakafara*

En nous appuyant sur une cérémonie rituelle le *tsakafara*, nous tenterons de procéder à la description des caractéristiques des chants antakarana. Dans la région septentrionale de Madagascar, il ne se déroule pas une cérémonie rituelle sans être accompagnée par de la musique ou de la danse. Si la musique réjouit les vivants, elle doit aussi rendre hommage aux Morts, car elle établit la communion avec les aïeux. La musique et la danse créent des moments d'harmonie entre les vivants et les Ancêtres. Le rituel des voeux est également l'occasion d'évoquer, à travers les chants, le courage et la force des hommes, le prestige des lieux historiques, la richesse de la civilisation Antakarana. Voici un descriptif des principales phases du *tsakafara*.

Ce rituel est nourri d'éléments culturels et musicaux africains et arabes (zébu, poteau ancestral, miel, youyou, trotrobe...). Il se déroule au bord d'un Lac sacré, appelé Antanavo, localisé à 75 kilomètres d'Antsiranana. Pour y accéder, il faudrait partir en voiture jusqu'au petit village d'Anivorano-Nord pour y passer la nuit, et rejoindr, à pied le lendemain matin, le Lac situé à cinq kilomètres de ce village.

Le Lac sacré Antanavo et sa légende

La bordure du Lac est un lieu d'invocation des Ancêtres, profondément ancré dans la mémoire collective des habitants des villages avoisinants. Le lac lui-même est sacré. Il est interdit de s'y baigner, de cracher, de faire ses besoins naturels ou de dire des grossièretés en présence des Ancêtres.

La légende qui se rattache à cet endroit est que le Lac fut un petit village juché sur une colline. Comme toutes les légendes, il existe plusieurs versions dont la plus courante raconte qu'un jour, une vieille femme accompagnée de son enfant arrivèrent au village d'Antanavo pour demander à boire à ses habitants. Devant des inconnus, tous refusèrent de leur donner de l'eau, à l'exception d'une famille de la dernière maison du village. Après s'être désaltérée, la vieille femme en signe de reconnaissance, conseilla à cette famille de quitter ce lieu en emportant ses biens, car une inondation allait bientôt noyer tout le village. Le lendemain, un déluge engloutit effectivement tous les habitants d'Antanavo avec leurs maisons.

La famille qui aurait échappé à la colère du ciel serait partie fonder un autre village.

Depuis ce temps, les villageois des environs croient que leurs défunts se sont réincarnés en caïmans qui peuplent le Lac et qui sont leurs Ancêtres. Les habitants d'Antanavo racontent qu'ils peuvent reconnaître chez certains de ces animaux aquatiques leurs grands-parents ou arrières-grands-parents. Ils les appellent ainsi par leurs noms : Kalo, Mboty, Jao-Marengo, Botra, etc. Selon les dires des gens, un vieux caïman porterait des boucles d'oreilles et dans un de ses bras un bracelet d'argent.

Ritualisation du site cérémoniel

Le rituel des vœux consiste à invoquer les Ancêtres pour leur remercier des faveurs ou des vœux exaucés. Les faveurs ou les vœux peuvent être demandés (salangitry) par n'importe quelle personne et pour des raisons de toutes sortes. Il peut s'agir d'une demande de guérison lorsqu'on est malade, d'une demande d'argent si l'on est pauvre, pour avoir des enfants si l'on n'en a pas, ou d'implorer une indulgence lorsqu'on pense avoir transgressé un tabou, etc.

Le site cérémoniel (tany masina) est un lieu de communication avec le surnaturel. Il est organisé suivant les forces cosmiques qui régissent la relation des Malgaches avec le monde terrestre.

Le Nord est une direction noble, il représente le pouvoir honorifique. Et c'est au Nord du site cérémoniel qu'est situé le Lac sacré.

L'Est est une direction sacrée et pure. Il évoque l'autorité fondée sur l'aînesse ou la richesse.

Le Nord-Est est le lieu réservé aux Ancêtres, aux aïeux ou aux aînés. C'est dans cette partie du site qu'est planté le tamarin sacré (madiro) sous lequel on sacrifie le zébu.

L'Ouest est un espace profane et impur. C'est le lieu de la souillure, de la perdition, du déclin. C'est vers cette direction que se trouve l'entrée principale du site cérémoniel.

Le Sud est un espace de soumission. Il représente le peuple, la caste roturière. C'est à cet endroit, assis au premier rang, que musiciens et danseurs entonnent des

chants incantatoires. Derrière eux, la foule assiste au rituel à la périphérie du site.

L'enclos sacré, toñy (PHOTO 1)

Dans la partie Nord-Est du site cérémoniel, est aménagé un enclos sacré appelé toñy au milieu duquel est planté le pieu cultuel (jolamandresy) coiffé de bucranes consacrés auparavant. Au pied du jolamandresy, un autel est dressé avec des pierres sacrées sur lesquelles sont posés les objets du culte :

- une bouteille de miel mélangé avec du rhum et de l'eau lustrale, nommée barisa. Le miel est la nourriture des dieux ; le barisa est le breuvage spirituel par excellence.

- une assiette blanche contenant de l'eau lustrale et de pièces d'argent qui symbolisent l'appartenance des Antakarana à la lignée d'argent (Zafinifotsy) des Sakalava.

- un récipient en terre cuite, le fañimbo, sorte de brûle-encens dans lequel on y met du cendre et de la braise pour produire de la fumée.

- le tsonzo, une gourde contenant de l'eau lustrale qui sert à la purification du zébu avant le sacrifice.

- des pignons d'Inde appelés vala-velona, porteurs de chance dont l'arbre, symbole de la force, est généralement planté dans une cour. (PHOTO 2)

Le jour de la cérémonie est choisi par un devin et doit coïncider dans une période de pleine lune, moment faste. Appelé « angala tsakafara », le rituel débute le matin par l'arrivée des participants. Puis, le premier chant de circonstance Mangataka varavarana est entonné pour demander l'accord des Ancêtres et l'ouverture de la cérémonie.

Entre-temps, la victime sacrificielle est mise à terre et ligotée.

Le rasavolana

Le rasavolana est le moment où le mpijoro (sacrificateur, orant) vient annoncer, par des formules spécifiques, aux Ancêtres l'objet du rituel du jour. La façon de formuler les faveurs dépend de l'art du discours de l'orant. Ensuite le sacrificateur pénètre à l'intérieur de l'enclos sacré, invoque Zanahary (Dieu), les Ancêtres et tous les lieux saints. Il leur expose le sens du sacrifice, les exhorte à venir participer à la cérémonie avec mansuétude et clémence.

Il poursuit : « Nous sommes venus ici, avec tous les membres de notre famille, ainsi que ceux du village, tout le monde est présent, nous avons foi en vous Zanahary. Aujourd'hui, nous allons organiser ici un joro, et espérons que vous acceptiez nos vœux et nos faveurs ».

Enfin, le mpijoro cite les noms des membres de la lignée présents à la cérémonie, demande aux Ancêtres de protéger leurs descendants et de venir en aide aux nécessiteux.

La victime sacrificielle et son symbole (PHOTO 3)

Le zébu, et le symbolisme qui l'entoure, est un héritage bantou. Symbole de richesse, de prestige social et de puissance d'un lignage, il est un animal sacré, joue un rôle capital dans les cérémonies traditionnelles. En tant que victime sacrificielle, il devient l'intercesseur entre les vivants et les Ancêtres.

PHOTO 1 Le *toñy*, enclos sacré

PHOTO 2 Objets rituels au pied du pieu cultuel

La tâche de purification du zébu est exécutée par un garçon et une jeune fille dont les parents sont encore en vie (zaza velon-dray-aman-dreny). L'unité de la famille porte bonheur au déroulement du sacrifice. Avant que le zébu soit égorgé, la tête de l'animal est orientée vers le nord-est, en direction des Ancêtres, des aïeux et des aînés par signe de respect.

Les premières gouttes de sang sont recueillies dans une assiette blanche pour être versées en libation au toñy puis ensuite aux caïmans. Ce geste exprime le respect des aïeux, la pérennité des liens avec ces derniers, et la solidarité villageoise. Le sang du sacrifice symbolise la communion avec les Ancêtres.

Le zébu est découpé selon une règle qui consiste à partager les portions de viande entre les Ancêtres et les vivants. Les parties les plus valorisées (tête, bosse, croupe...) sont offertes aux caïmans, aux aînés du lignage et au sacrificateur. Les parties basses et certains abats sont destinés aux cadets, aux villageois et aux invités.

Liens entre les Ancêtres et leurs descendants (PHOTO 4)

Les caïmans habitués depuis des décennies à ce que des rituels de vœux soient pratiqués périodiquement montent sur la rive du Lac pour happer les quartiers de viande. Les villageois interprètent cet événement par la joie de leurs Ancêtres de se retrouver parmi eux, en venant partager la nourriture que leur apportent leurs descendants.

On raconte qu'il arrive parfois qu'aucun des caïmans ne manifeste leur présence sur la terre ferme. Ce qui signifierait que les Ancêtres ne sont pas satisfaits de la manière dont s'est déroulée la cérémonie qui se termine par le partage du zébu entre les villageois et les organisateurs.

Pour clore la cérémonie, l'un des officiants bénit le nouveau bucrane en y versant du barisa, avant de l'accrocher sur le pilier ancestral.

À la suite de ce geste, la foule quitte peu à peu les lieux par petits groupes pour regagner leurs villages respectifs. Un repas communautaire est ensuite offert dans cour de la maison ancestrale, à tous les membres du clan familial et aux amis proches, pour consommer la victime sacrificielle.

6. Techniques, sens et symbolisme des chants et danses antakarana

Mama Tsara est une chanteuse déjà âgée et connue dans le Nord de la Grande Ile. Elle est souvent sollicitée pour célébrer les cérémonies ou les fêtes traditionnelles[3]. Accompagnée de son groupe, elle commence par le chant d'ouverture du rituel des vœux *mangataka varavarana* qui a pour fonction de demander la permission aux Ancêtres de pratiquer la cérémonie (PHOTO 5). Ce chant rituel est une polyphonie vocale qui fait recours au tuilage et à l'ornementation. L'alternance en tuilage de Mama

3) Un film-vidéo de 26 minutes, retraçant les moments clefs de la vie de Mama Tsara ainsi que le déroulement du rituel des vœux à Antanavo, a été réalisé en mars 2002 par LIVE Yu-Sion, Université de La Réunion.

PHOTO 3 Le tamarin sacré et la victime sacrificielle

PHOTO 4 Ancêtres réincarnés en caïmans dévorant la viande sacrificielle

Tsara et de son groupe s'accompagne de battements de mains selon une polyrythmie ornée, de temps à autre, par des youyous, des cris et des sifflements aspirés de lèvres des femmes.

Le chant est construit sur des courtes paroles déclamées par Mama Tsara en tant que chef de chœur. Lorsqu'elle entonne le refrain, le chœur (son groupe) reprend le refrain qui est répété indéfiniment. Chantées à voix modérées au début du chant, les paroles sont dites de plus en plus vite suivant un rythme en crescendo. Les voix du chœur sont données à l'unisson, elles sont inféodées à la voix du chef de chœur (PHOTO 6).

D'une manière générale, que ce soit dans les *rangolahy*, les *antsa maventy* ou les *baheza*... évoqués plus haut, les chants responsoriaux sont une des caractéristiques musicales pratiquées fréquemment par les Antakarana.

Chants et position sociale

En situation de représentation, les chants qu'ils soient profanes ou rituels sont exécutés debout ou assis, selon leurs thèmes et leur destination.

Tous les chants du rituel d'accomplissement des vœux sont interprétés assis, à l'exception de la soliste lorsqu'elle danse. Cependant, deux chants *andriana* et *fisaorana* sont exécutés debout : le premier étant adressé aux souverains, le deuxième aux *razana* (ancêtres, aïeux).

Dans la conception du monde des Antakarana, les chants rituels sont exécutés debout par respect de la hiérarchie sociale, les interprètes doivent se tourner vers l'Est, la direction sacrée. Par exemple, les *rary* (ou *rare* suivant l'accent) sont des prières, des supplications que les femmes chantent en cœur, en se dandinant légèrement, pour les hommes partis en guerre. Les *rary* sont récités debout parce qu'ils sont adressés à *Zanahary* (Dieu).

Par contre, les femmes doivent être assises pour exécuter un chant rituel (par exemple *Mangataka varavarana*) par respect aux Ancêtres parce que ce chant est une requête. Par conséquent, elles doivent se mettre en position inférieure.

Habituellement, la représentation des chants profanes est donnée assise comme les *rangolahy*, les *goma*, les *lamalama*...Néanmoins, ces chants peuvent entrés dans la catégorie des chants sacrés (*ansta maventy*), dans ce cas, ils sont interprétés debout.

Polyrythmie et procédé du folaka

La structure rythmique des chants antakarana est dominée par des mesures ternaires. Un chant débute souvent par des mesures binaires pour être rejointes assez vite par des mesures ternaires, pour arriver à une superposition des deux. Le rythme devient alors de plus en plus accéléré. Il a pour fonction de créer l'ambiance et de réveiller les esprits. Les chants distraient l'assistance, confèrent un caractère festif au rituel.

Les battements de mains *rombo* qui accompagnent les chants donnent la mesure.

PHOTO 5 Mama Tsara chantant et dansant au début du rituel des vœux

PHOTO 6 Mama Tsara et ses enfants, chants et battements des mains

Ils sont exécutés avec les mains semi-ouvertes (bivalves) au niveau de la poitrine. Les *rombo* engendrent ainsi des polyrythmies sourdes.

Ce qui caractérise encore le rythme des chants est l'exploitation des syncopes et des contretemps. Le procédé consiste à passer d'un rythme à l'autre, sans difficulté, par la stylisation d'un temps fort sur une ligne mélodique à un temps faible, produisant ainsi un effet de rupture. Cette technique s'intitule *folaka*. Tout l'art du maître de chœur est d'exploiter les rythmes, les pauses et les contretemps pour parvenir à une véritable synthèse musicale. Le meilleur musicien ou chanteur est celui qui sait styliser au maximun ces différents éléments phoniques.

Jijy ou l'art de l'improvisation

Les chants mettent en valeur le sens des paroles. L'usage de la langue antakarana est fondamental. Les paroles permettent l'identification des thèmes des chants. Les refrains souvent courts donnent le titre aux chants, et représentent les types de chants. Les couplets sont quelques fois improvisés.

Selon la situation de la représentation musicale, il arrive que le soliste improvise librement le(s) couplet(s) d'un chant profane, en s'adaptant aux circonstances présentes (louer une présence particulière, rendre hommage à un événement précis...). Il peut passer d'un sujet à un autre, ou à en traiter plusieurs dans un même chant. Il n'existe donc pas de couplets pré-établis. Le soliste commence par le refrain, l'entraîne, le lance, répète une ou deux fois pour donner l'ambiance. Le chœur le suit. Et lorsqu'il est sûr que le chœur est bien dans l'ambiance, il commence l'improvisation avec un rythme pas trop long, sur quatre, cinq ou six vers.

Ce procédé se nomme *jijy*, ou plus précisément *jijy mirendra* qui signifie littéralement *jijy errant*. Les *jijy* sont des paroles poétiques improvisées, rythmées et récitées (à toute allure) par le maître de chœur durant l'exécution d'un chant. Dans le rituel des vœux, c'est Mama Tsara qui crée l'art du chant improvisé, en apportant sa propre invention.

Cependant dans le cadre des chants sacrés (ce qui n'est pas le cas dans le rituel des vœux), les formules poétiques sont déjà plus ou moins établies. Le *mpijiy* (soliste, chef de choeur) peut improviser, mais il doit suivre une certaine ligne de conduite et ne peut pas trop dévier des paroles déjà consacrées. Par exemple, à la mort d'un monarque, la liberté d'improvisation du chef de choeur dépend de la grandeur du souverain. Suivant le pouvoir du défunt, le *mpijiy* invente ses couplets, tout en gardant la structure du refrain et du rythme. La disparition d'un prince, par exemple, lui accordera davantage de latitude dans ses improvisations qu'un vieux monarque auréolé de gloire. Dans la pensée malgache, l'âge avancé, les expériences de la vie, les réalisations individuelles, le prestige social... sont pris en compte dans l'accomplissement de soi lors de notre passage sur terre. Plus le capital symbolique d'un seigneur est important, moins le *mpijiy* disposera de liberté de création, en vertu du grand respect que le petit peuple voue à son souverain.

Le *trotrobe*

La danse intitulée *trotrobe* est un pas de deux, basée sur un jeu de piétinements exécutés suivant le rythme des chants et des battements de mains. L'une des danseuses commence les mouvements de piétinements sur un rythme binaire, puis entre-temps, une autre entre en scène et va couper ce rythme par un autre plus rapide, ce qui crée ainsi une rupture rythmique. L'alternance rythmique dans la danse se dit *mañenjika folak'* (PHOTO 7).

Dans le rituel des vœux, seules les femmes dansent. Assises en rang, battant les mains et reprenant des refrains, deux ou trois femmes se lèvent, à un moment donné, pour aller se mettre devant les musiciens et commencer à danser par des dandinements lents durant quelques moments, puis de plus en plus les balancements s'accélèrent, les bras se lèvent vers le ciel en parallèle des deux côtés du corps. En même temps, les pieds frappent sur place le sol de façon répétée et de plus en plus vive, suivant la polyrythmie des battements de mains et la polyphonie des chants, tandis que les hanches continuent à se tortiller. Les pas impriment ainsi au corps un déhanchement régulier des danseuses. Au terme de quelques minutes, ces dernières laissent aussitôt la place à d'autres qui entrent en scène.

7. Instruments de musique du Nord de Madagascar

L'environnement naturel et social joue un rôle primordial dans les productions musicales des sociétés. Il influence, conditionne les attitudes dans la création musicale ainsi que dans la facture des instruments de musique. Les instruments sont fabriqués en fonction des matériaux qui existent dans l'environnement immédiat (bois, bambou, roseaux... mais aussi bidon d'essence, boites de conserves, bouteilles de verre, etc). En tant qu'objets façonnés pour produire des sons, ils viennent relayer le corps de l'homme. Ils sont le résultat du prolongement des doigts, des mains, des pieds, de la voix...

Il existe une centaine d'instruments de musique traditionnelle à Madagascar. Outre les quatre grandes catégories instrumentales (idiophone, cordophone, aérophone, membranophone), on retrouve dans l'instrumentarium malgache l'apport des aires culturelles d'origine :

- Pour l'Afrique : tambours-à-peaux (*ampongalahy, amponga tapaka, hazolahy, tary...*), arc-en-bouche, arc-en-terre (*pitikilanga*), arc musical (jejilavoatavo), hochet-en-radeau (*raloba*), poutrelle frappée (*tsipetrika*), hochet-en-vannerie (*maseva*) etc.
- Pour l'Asie-du-Sud-est: cithare tubulaire ((valiha), cithare-sur-caisse (*marovany*), xylophone-sur-jambe (*atranatrana*), racle (*tsikadraha*), etc.
- Pour les pays arabes : hautbois (*kabiro* ou *kabiry*), trompe-à-manche-longue (*anjomara*), flûte (*sodina*), luth court (*kabosy*), etc.
- Pour l'Europe : accordéon, violon Bara (*lokanga Bara ou mandalina*), tambour militaire (*langoroana, ampongabe*), etc.

Le Nord de Madagascar possède peu d'instruments de musique traditionnelle. On peut les compter sur les doigts des deux mains : *masevy* (hochet-en-vannerie), *valiha* (cithare), accordéon, flûte, *kabiro* (hautbois), *ampongalahy* (tambours sacrés), *rombo* (battements de mains), youyou. Le *tandro-kaka* une corne utilisée comme instrument d'appel notamment lors de la cérémonie du *tsangan-tsaina* (érection du mât royal), le *youyou*.

En faisant le choix de quelques instruments les plus couramment utilisés, nous montrerons brièvement leur origine et leur structure. Ils reflètent l'âme et l'identité des Antakarana.

- Le *youyou*

Le youyou (ou youlement) est une expression musicale commune entre les Comores et Madagascar (régions des Sakalava du Boina, Antakarana). Cependant, il est également pratiqué en Afrique subsaharienne et en Arabie. Connu comme un phénomène musical du monde arabe, il a vraisemblablement transité par l'Afrique musulmane avant d'arriver dans les îles de l'Océan Indien. L'un des gardiens de la tradition orale antakarana, Paul Jaoravoana (alias Paul Congo), affirme que, selon son vieil oncle (cent-quatre ans), cette technique vocale vient du Mozambique et qu'elle a toujours été pratiquée par ses parents et grands-parents.
Le youyou est un cri vocal pour exprimer le contentement, il est aussi utilisé comme ornementation musicale. Nous considérons qu'il fait partie des outils musicaux des Antakarana. Ce cri aigu est poussé par les femmes pour exprimer leur enthousiasme. Il consiste en un hululement long, modulé par un double mouvement de la langue entre les dents de la vocaliste (PHOTO 8). Dans un entretien avec un spécialiste de la musique arabe, Christian Poché pense que le youlement est un cri jouissif[4].

- *Rombo*, battements de mains

Les mains font partie des instruments les plus primitifs que l'être humain s'en sert pour exprimer ses sentiments, ou pour faire vibrer des sons sur des parties de son corps. Les battements (parfois des claquements) de mains appelés *rombo* à Madagascar sont destinés à marquer le rythme, à soutenir la voix ou à accompagner les chanteurs et danseurs. Les sons varient en fonction de la position des mains. Les battements de mains sont étroitement liés au souffle et à la voix. Une des particularités que l'on rencontre chez les Malgaches Sakalava du Boina et Antakarana est que les battements sont exécutés à mains semi-fermées (forme bivalve), à la hauteur de la poitrine. Cette technique de jeu produit un son sourd, elle est un héritage bantou. Ce procédé est également employé par un ensemble vocal, les *Rizikin'Antsiranana*.

Ce groupe, composé en grande majorité de femmes, a inventé une nouvelle technique. Pour rythmer leurs chants, les musiciennes utilisent des sacs en plastique

4) Entretien réalisé à Paris en août 2001.

PHOTO 7 Le *trotrobe* est un pas de deux, basé sur un jeu de piétinements exécutés par les danseurs.

PHOTO 8 Le *youyou*, un hululement modulé par un double mouvement de la langue entre les dents.

pliés et enroulés dans un bout de tissu. Ces « instruments » sont placés dans le creux d'une main et percutés par l'autre. Les sons sourds qui en dégagent rappellent curieusement ceux d'un instrument à percussion.

– *Masevy*, hochet–en–vannerie

En martelant la terre, en piétinant le sol, en frappant leurs mains ou en sautillant en l'air..., les danseurs font, en même temps, résonner des objets attachés à leur taille, ceints à leurs poignets ou à leurs chevilles ou bien tenus par leurs mains. Ils sont utilisés pour scander les mouvements du corps ou pour souligner le rythme du chant ou de la danse, et se présentent sous diverses formes (ronde, ovale, allongée, triangulaire, en grappe, carrée...). Lorsqu'on les secoue ou les entrechoque, ils produisent un son propre à une aire culturelle donnée puisque c'est cette dernière qui produit son identité.
Le hochet–en–vannerie est un instrument commun aux Comores et à Madagascar. Il a la forme d'une grappe de cinq, dix, parfois vingt petites corbeilles quadrangulaires, tressées avec des feuilles de raphia, de sisal ou de palmier. Les corbeilles sont reliées par deux ficelles en sisal remplies de graines sèches (canna), de graines de riz, de lentilles, etc. Elles sont attachées aux poignets, aux chevilles ou à la ceinture des danseurs. Les déplacements du corps, le mouvement des jambes et les gestes des mains secouent les graines qui font résonner l'objet appelé *masevy en* langue antakarana ou *maseva* en langue nationale. Cet instrument provient des Makoa venus à Madagascar en passant par les Comores.

– *Kabiro*, le hautbois

Le nom de l'instrument en malgache *kabiry* ou *kabiro* vient du mot arabe *kabir* qui signifie *grand* car le son de l'instrument est puissant.

Le *kabiro* s'apparente davantage à son ancêtre égyptien par son timbre et sa forme qu'à un hautbois européen actuel. L'instrument possède un son haut et puissant, ce qui lui donne un timbre nasillard. Il comprend une anche et deux pièces de bois : l'une constitue le corps de l'instrument et l'autre le pavillon. Le corps est percé de cinq trous suivant le sens de la longueur de l'instrument. L'anche double est formée de deux lamelles de feuilles (d'un genre de palmier, le pandanus, ou *mokotra* en malgache) qui s'encastrent dans une douille métallique. Les lamelles vibrent l'une contre l'autre sous l'insufflation de l'instrumentiste. Le pavillon permet au son de se diffuser. L'instrumentiste en joue en utilisant la technique de respiration circulaire, ce qui lui permet de retenir le souffle pendant de longues minutes sans avoir **à** interrompre la mélodie.

– *Kabosy*, luth court

Le *gabusi* ou *kabosy* est un instrument qui nous est parvenu des pays arabes. C'est un luth apparenté à l'ancien *qanbus* du Yémen. Son existence est mentionnée dans la littérature arabe depuis le début de l'ère chrétienne. Son nom *qubuz*, (d'origine turque)

ou *qanbus* (d'origine yéménite) devient *gabusi* aux Comores, et *kabosy* à Madagascar avec des variantes selon le parler de chaque région *kabaosy*, *kabaosa*, *kaboche*... Il est sans doute introduit à Madagascar avec l'expansion musulmane (VIIe-VIIIe siècle), mais on ignore le moment précis de son arrivée. Ce luth court se différencie d'une région à l'autre de Madagascar par sa forme, ses techniques d'accompagnement et, par les matériaux servant à sa fabrication.

A l'origine, le *kabosy* est façonné avec un bois d'un seul bloc, creusé en son milieu pour obtenir la caisse de résonance. Une peau de mouton, de cabri ou de zébu recouvre cette dernière. Cinq cordes dont deux sont doubles et une simple tendues à l'aide des chevilles et accrochées à un chevalet viennent compléter l'instrument. Avec le temps et suivant le milieu, d'autres matériaux (des planchettes de bois assemblées), sont employés pour construire le résonateur. Un manche en bois est monté à l'une des extrémités de celui-ci. Disparaît ainsi la peau d'animal, remplacée par une rosace qui permet au son de sortir du caisson. Cinq crins de pêche ou fils métalliques sont désormais utilisés comme cordes. Le plectre fait son apparition dans la technique de jeu. La forme de la caisse de résonance devient alors de plus en plus rectangulaire.

-*Valiha*, la cithare tubulaire

La *valiha* est l'un des témoins de l'héritage culturel du Sud-est asiatique à Madagascar. Elle est par ailleurs l'un des exemples d'un instrument qui a suivi le processus d'élaboration d'une culture à l'intérieur d'un même ensemble culturel. Dans trois régions différentes de Madagascar, elle a développé des caractéristiques propres, tant dans l'esthétique que dans la technique de jeu. Les dimensions, les formes, les appellations, la fonction et le matériau servant à sa fabrication changent d'une région à l'autre. Il existe ainsi dans la Grande Ile plusieurs types de valiha : la *valiha volo*, la *valiha bara*, la *valiha tsimihety*...

La *valiha tsimihety* nous vient de la région Nord de Madagascar qui porte son nom : le pays Tsimihety. Le bambou étant une plante très rare dans cette contrée, les habitants utilisent un autre matériau végétal, le raphia, qui abonde chez eux, pour fabriquer leur instrument. Du fait de la proximité géographique des Tsimihety et des Antakarana, ces derniers ont, selon toute vraisemblance, adopté cet instrument dans leurs traditions musicales.

Un tronc de raphia est coupé en son milieu, sur le sens de la longueur, pour former deux pièces de bois en forme semi-circulaire. Le milieu de chaque pièce est évidé, créant en chacune un espace creux. Les deux pièces sont ensuite rassemblées pour constituer la caisse de résonance. Il faudrait ensuite attendre deux à trois mois pour que la caisse de résonance soit suffisamment sèche. Du tronc de raphia, on y pratique des incisions dans le sens de la longueur afin d'extraire des minces lanières qui serviront de cordes. Les deux extrémités de la caisse sont fixées par des ligatures en sisal pour empêcher les lanières de se détacher plus avant. Les lanières sont polies, puis arrondies avec du papier de verre. Ensuite, plusieurs fentes longitudinales sont ouvertes de part

et d'autre pour laisser sortir échapper les sons du corps de l'instrument. Pour accorder l'instrument, on glisse, sous les cordes, des chevalets en raphia ou en calebasse.

– *Gorodao*, accordéon diatonique

D'origine européenne, l'accordéon diatonique est aujourd'hui un instrument très populaire en pays antakarana comme il l'est dans tout Madagascar. Il est utilisé tant dans les cérémonies profanes que sacrées et joué habituellement accompagné de plusieurs voix, de hochets, de battements de mains, ou de tambours.
L'accordéon tient un rôle prépondérant dans certaines pratiques rituelles : exorcisme, possession (*tromba*, *savatsy*, *bilo*, *salamanga*...), circoncision, rites funéraires, transes, etc. Il est un élément central dans les rites de possession. Les musiciens malgaches se sont appropriés de cet instrument en modifiant son échelle, afin de l'adapter aux sonorités proprement malgaches. Ces sonorités et le jeu intrumental permettent aux vivants d'entrer en contact et d'être en symbiose avec les Ancêtres. Les Malgaches préfèrent ainsi l'accordéon diatonique parce qu'il produit un son spécifique qui permet d'entrer en contact avec les mânes. Grâce à ces particularités acoustiques, les esprits ou les défunts sont appelés par leurs compositions musicales préférées. C'est cette efficacité dans les échanges avec les mânes qui explique la popularité de cet instrument.

– *Hazolahy*, tambours sacrés

A Madagascar, le tambour à deux membranes a son origine dans le Sud et sur la Côte ouest (Sakalava, Antakarana). Le *hazolahy* (littéralement bois mâle) est un tambour sacré. Instrument rituel, il ne peut être joué que par les hommes lors des cérémonies comme la circoncision, le culte aux Ancêtres, les funérailles, les cérémonies royales. Symbole du pouvoir du chef ou du roi, le tambour *hazolahy* établit le lien entre le peuple et son souverain. Il peut avoir une taille un peu différente selon les instruments et se joue par paire. Il est construit de :
– un tronc d'arbre creusé, de forme conique et légèrement bombé,
– deux peaux de zébu couvrant chacun des deux côtés de l'instrument,
– quatre cerceaux en liane dont deux de chaque côté servent à maintenir le bord de la peau,
– une corde en sisal pour relier les cerceaux,
– un chevalet pour accorder l'instrument,
– une baguette en bois pour frapper l'une des deux peaux.

Le *hazolahy* peut être associé aux esprits par sa fonction sacrée. Il représente les Ancêtres qui sont souvent des personnalités royales que l'on craint et que l'on vénère. Il reçoit en offrandes des victuailles, des aliments, de l'alcool, ...C'est la raison pour laquelle il est personnifié. Parfois le tambour et le personnage n'en font qu'un. Le tambour sacralisé ou déifié est ainsi chargé de forces surnaturelles, il est habité par les esprits. Les sons émis par cet instrument est considéré comme la voix des Ancêtres, celle des fondateurs du groupe clanique ou de la royauté sakalava. Il correspond aussi à

un appel pour la communauté, ou une annonce de l'arrivée d'une personnalité. Il symbolise le totem clanique, représente l'âme du peuple antakarana.

Dans les cérémonies royales, lors de la danse du *rebiky*, les Antakarana utilisent le tambour *mañandria* qui est de deux genres : le *mañandria* mâle et la *mañandria* femelle, l'un est placé à droite du joueur, et l'autre à gauche. Le premier est joué sur un rythme binaire (*manenjika*) et la deuxième sur un rythme ternaire (*mamolaka*). Les deux sont utilisés pour accompagner le *rebiky*, une danse rituelle symbolisant la guerre entre les Zafinimena et les Zafinifotsy. On trouve cette scène reconstituée dans la grande cérémonie du *tsangan-tsaina*. Selon Robert Jaovelo Jao (1996) lorsqu'ils ne sont pas en usage, les *hazolahy mañandria* mâle et femelle sont suspendus à un pieu planté à gauche des escaliers saints devant l'enceinte du village royal.

8. Conclusions

Terre de métissage, le Nord de Madagascar forme une mosaïque humaine, ayant un passé commun lié par des influences bantoues, malayo-polynésiennes, arabo-persanes, européennes. De cette interpénétration des êtres et des cultures, sont nées des traditions musicales antakarana. Celles-ci jouent un rôle fondamental dans les manifestations liées au cycle de la vie comme dans les rites de possession, les rites de passage, la circoncision, les cérémonies royales, le culte aux Ancêtres... Elles permettent la consolidation des liens sociaux de la population antakarana, surtout entre les membres des communautés villageoises. Vers la fin du XIXe siècle, la colonisation française viendra tenter d'assimiler mais sans réussir à gommer ces traditions malgaches. Depuis des siècles, la région septentrionale de Madagascar a connu un brassage ethnique et culturel qui a crée une cohésion (unité linguistique, culturelle....) au sein de l'organisation sociale antakarana. Cette unité sociale, culturelle et politique a favorisé l'assimilation constante des éléments culturels étrangers qui apparaît dans les pratiques instrumentales. Des instruments de musique des temps anciens (*maseva*, *kabiro*, *kabosy*...) côtoient ceux des temps modernes (accordéon...) sans qu'il y ait contradiction lors des grandes pratiques rituelles. Ils sont devenus les éléments représentatifs de l'identité antakarana. Leur forme et leur structure ou leur symbolisme révèlent les valeurs sociales, culturelles, cultuelles et esthétiques de cette population de l'Extrême-Nord de Madagascar.

ICONOGRAPHIE: Toutes les photos de cet article sont de Y.-S. LIVE

BIBLIOGRAPHY

Baré, Jean-François, *Sable rouge*. Paris: Harmattan, 1980.

Blench Roger, « Evidence for the Indonesian Origins of Certain Elements of African Culture », in *African Music*, vol.6, n°2, 1982.

Dahl, Otto Chr., *Migration from Kalimantan to Madagascar*. Oslo: Institute for Comparative Research in Human Culture, Norwegian University Press, 1991.

Deschamps, Hubert, *Histoire de Madagascar*, Paris: Éditions Berger-Levraut, 1972.

Domenichini-Ramiaramanana Michel, *Instruments de musique des Hautes Terres de Madagascar*, Mémoire pour l'obtention du Diplôme de l'EHESS, Paris, 1982.

Emoff Ronald, *Musical Transformation and Constructions of History in the Tamatave Region of Madagascar*, PhD Dissertation, Austin, University of Texas, 1996.

Feeley-Harnik, Gillian, *A Green Estate: Restoring Independence in Madagascar*. Washington: Smithsonian Press, 1991.

Jaovelo Dzao Robert, *Mythes, rites et transes à Madagascar*, Paris, Karthala, 1996.

Radimilahy Chantal, *Mahilaka: An Archeological Investigation of an Early Town in Northwestern Madagasacr*, Department of Archeology and Ancient History, Studies in African Archaeology, 15, Uppsala University, 1998.

Rakotomalala Mireille, *Bibliographie critique d'intérêt ethnomusicologique sur la musique malagasy*, Musée d'Art et d'Archéologie, Tananarive, 1986.

——— ., « La musique à Madagascar, son évolution selon divers courants d'influence » in *Taloha*, n°12, 1994, pp.203-216.

Ralaimihoatra, Edouard, *Histoire de Madagascar*, Société Malgache d'Éditions, Tananarive, 1965.

Randafison Sylvestre, *Étude sur la fabrication des instruments de musique*, Tananarive, C.E.N.A.M, 1980.

Randrianary Victor, *Madagascar. Les chants d'une île*, Cité de la Musique/Actes Sud, 2001.

Razafindrakoto Jobonina, *La valiha de Madagascar : tradition et modernité en Imerina de 1820 à 1995. (Études organologiques, acoustique et socio-historique)*. Thèse de doctorat en musicologie, Université Paris IV-Sorbonne, U.F.R de Musicologie, 1997.

Sachs Curts, *Les intruments de musique à Madagascar*, Paris, Institut d'Ethnologie, 1938.

Sharp, Lesley A. *The Possessed and the Dispossessed: Spirits, Identity, and Power in a Madagascar Migrant Town*, Berkeley: University of California Press, 1993.

Thompson, Virginia, and Richard ADLOFF. *The Malagasy Republic : Madagascar Today*. Stanford: Stanford University Press, 1965.

Verin, Pierre. *The History of Civilization in North Madagascar*. Brookfield, Vermont: Ashgate, 1986.

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【論　文】

社会的実践としての工芸技術の変容

―フィリピン・ルソン島北部山地民社会における機織りの産業化を巡って―

大　西　秀　之
(総合地球環境学研究所)

Change of Craft Technology as Social Practice:

A Study on the Industrialization of Weaving as Folk Craft in the Philippine Highlanders' Society, Northern Luzon

Ōnishi, Hideyuki
Research Institute for Humanity and Nature

In recent years there has been renewal of interest in all sorts of social practices in anthropological and ethnographical research. This kind of research frequently adopts Bourdieu's sociology and cognitive science as its theoretical backgrounds. These theories, however, have received some criticism in that the relation between actor and society-culture has been discussed statically, and little attention has been given to the dynamism of socio-cultural change.

This paper aims to describe and explain the dynamism of socio-cultural change, which is caused by social practice, in everyday life. In this paper, I examine this using data on the industrialization of weaving in Philippine highlanders' society, Northern Luzon. This weaving is a social practice that is regarded as one of the folk craft in their society, but on the other hand, it is under economic and technological development pressures to adapt to the market economy by governmental agencies or capitalists at present.

First of all, I attempt to compare the relatively traditional weaving with the most industrialized weaving. In particular, I consider what kind of influence their technical learning received through the industrialization. The result of this research will show a difference in the education system for passing on techniques between the traditional situation and the industrialized situation; the former system is based on self-learning, daily social life, by which novices grow into experts through participating in weaving, the latter system bears a striking resemblance to formal education, by which experts train novices.

In addition to this, such change in learning has had some serious influence on the actors and society-culture. The first important point is the difference in weaver' explanation about their learning experience. Weavers who learned

Keywords: development, gender, practice, weaving, technology, Philippine highlanders
キーワード：開発，技術，ジェンダー，機織り，プラクティス，フィリピン山地民

traditionally did not use words such as “education” or “training”, in their explanation; conversely, weavers who learned in an industrialized situation did use such words. Even more important is that the cultural role of weaving changed. In the traditional situation, weaving played a role of reproducing gender, with other activities and discourses in relation to it, by being practiced as female work in daily social life. Industrialization has separated the practice of weaving from other social practices, so that it no longer reproduces gender. These results lead to the hypothesis that the industrialization has brought about some cultural transition in weavers as actors and weaving as a social practice in daily social life.

Ⅰ．実践論としての技術研究
Ⅱ．コルディリエラ山地民の機織り
　１．機織りの現在
　２．三つの機織り
Ⅲ．産業化による社会的実践の変容
　１．技術の伝習と実践
　２．産業化に伴う変容
　３．日常世界の再構築
Ⅳ．変わりゆく技術を巡って

Ⅰ．実践論としての技術研究

技術は，極めて多義的に使用される概念である（Schiffer & Skibo 1987, p.595）。だが，第一義的には，社会的所産と見なしうるものである（Lemonnier 1992, pp.2-4; Pfaffenberger 1992, p.513）。加えて，技術とは，通常何らかの行為として発現する，と言明することができる（Sigaut 1994, p.424）[1)]。

まず，技術は，人間の生得的な所与ではない。それは，何がしかの目的を達成するために，歴史的・文化的に構築された知識や技能の総体といえる（Sigaut 1994, pp.438-442）[2)]。ゆえに，技術は，誰にとっても，後天的に獲得せざるをえないものである。無論，そうした獲得は，社会という営みのなかで人間から人間に受け継がれるよりほかにない。

ところで，近年，民族誌的・人類学的な研究領域において，諸種の社会的実践に伴う身体化された知識や技能に着目し，それらの伝習を支える社会的・文化的背景，さらにはその伝習や実践によって再生産される社会的・文化的所産を明らかにしようとする研究が改めて注目されている（cf. 田辺 1989, 2002, 福

1) さらにここから，技術は，人間の身体から乖離して存在するものではない，ということが確認できる。なぜなら，行為とは，身体から発信される現象にほかならないからだ。これに対し，「人間の身体によって担われてきた技術は，近代以降，機械に移植されていった」，という指摘がなされるかもしれない。これ自体は，非常に興味深い歴史的展開であるが，厳密に考えれば，機械によって達成されているのは，その技術が目的としてきた結果だけであって，当の身体が担ってきた知識や技能そのものではない。それゆえ，技術にとって身体からの乖離は，その消滅を意味することとなる。

2) 技術や技能という用語は，研究領域や研究者個々人によって差異が大きく，非常に多義的に使用されている。とりわけ，近年，近代的「技術観」を批判，再検討するという意図から，技術と技能を対置させる図式での概念規定がなされている（e.g. 渡植 1987）。しかし，本稿では，技術と技能は階層的な概念として位置づける。具体的には，技能は，後天的に習得された身体的な能力であり，技術を構成する一要素と定義する。対して，技術は，知識や技能に加え，道具や設備さらには作業空間までを含めた，ハードからソフトまでの総体として定義する。なお，英文標記では，技術は“ technology ”に，技能は“ skill ”に訳語を統一する。

島 1995)。こうした研究の多くは，ピエール・ブルデューのプラクティス理論（Bourdieu 1977, 1988）や認知科学的な研究成果（Lave 1988, Lave & Wenger 1991）などに依拠しつつ展開されている。

先の定義に照らすならば，技術は，上記の研究群にとって主要な題材となりうることに疑問の余地はないだろう。実際，すでに同様な視座に立脚し，技術を社会的実践として理解しようとする試みが開始されている（e.g. Lemonnier 1992, 後藤 1997, 大西 1998a, 1988b)[3]。もっとも，どのような社会的実践であれ，それに伴う知識や技能を対象とするならば，その研究はすべからく技術を対象としている，と捉えることができる。いずれにせよ，従来，ともすれば民族誌，人類学の古典的テーマと目されてきた技術は，社会的実践論に位置づけることによって新たな展開を得ることとなった。

しかし他方で，前述のような研究群には，ひとつの批判が提起されている。それは，行為者と社会・文化の関係が比較的スタティックに論じられ，それらが変容してゆく動態について十全な配慮が払われていない，といった類の批判である。この種の批判は，とりわけブルデューのプラクティス理論を念頭に置いたものであるが，ブルデュー自身が反駁しているように，それらは概して理論上の誤謬に根ざしたナイーブな批判であることが少なくない（ブルデュー 1991, pp.27-32)[4]。ただし，具体的な成果として，社会的実践を対象とした研究が，その変容のダイナミズムを積極的に提示してきたか，と問われれば必ずしも十分であったとはいえないのではないだろうか[5]。その意味で，上記の批判は，社会的実践論を志向する研究にとって一概に無視しえないものとなる。

以上のような課題を考慮に入れつつ，本稿では，フィリピン・ルソン島北部の山地民社会における機織りを対象として，その技術の伝習と実践を支えつつ再生産される社会的・文化的背景の読み解きを試みる。とくに，本稿では，「伝統工芸」とされる機織りの産業化が推進された結果，その技術の伝習や実践がどのように変容し，ひいてはそれらの変容が社会や文化にいかなる影響を及ぼしているのか，という問いを追究してゆく。こうした検討を通し，行為者と社会・文化が呼応しながら互いを形作ってゆく，日常世界における社会的実践のダイナミズムの把握につとめる。

Ⅱ．コルディリエラ山地民の機織り

1．機織りの現在

ルソン島北部には，コルディリエラ（Cordillera）地方と呼ばれる，2000 m 級の

3) 技術を社会的実践論に位置づけようとする試みは，マルセル・モースの「身体技法（techniques du corps)」（モース 1976）やアンドレ・ルロワ=グーランの「動作連鎖（chaîne opératoire)」（ルロワ=グーラン 1973）などに，その源泉を遡ることができる。また，それらの概念と問題意識は，今日のフランス社会学・人類学においても受け継がれている（川田 1992, p.65; 後藤 2001, p.92)。実際，本文で参照したピエール・ルモニエールやフランソワ・シゴーなどは，その直接的な継承者達である。

4) とはいえ，ブルデューのプラクティス理論にまったく批判の余地がない，というわけではない。福島真人が端的に指摘しているように，ブルデューのプラクティス理論では，その鍵概念である「ハビトゥス」が，「ルーティン的な行動を産出すると同時に，それに対して転調作用も可能」，といった「何でもできるヌエのような存在」として機能し（福島 1997, p.132)，一種理論上のブラックボックスとなっている感が否めない。なお，同様な批判は，田辺繁治によってもなされている（田辺 2002, pp.562-563)。

5) もっとも，社会的実践から行為者や社会・文化の変容にアプローチを試みた研究が，まったく提起されていないというわけではない。具体的な成果としては，独立戦争のさなかにあった1960年代のアルジェリア社会を対象とし，資本主義経済への移行のなかで人々が繰り広げる生活世界の実践を分析した，ブルデューによる研究を挙げることができる（ブルデュー 1993)。

山脈からなる山岳地帯が広がっている。コルディリエラは，フィリピン国内に14ある行政区（Administrative Region）の一つであるが[6]，それ以上に，政治的・文化的独自性を有するエリアとして内外に認知されている。その理由は，コルディリエラが，現在の共和国体制下において政治的・文化的マイノリティ・グループとされる，山地民の人々が数多く暮らす地域であるからにほかならない。

コルディリエラに暮らす山地民の人々は，通常，さらに幾つかの「民族言語集団」に切り分けられる。もっとも，これら「民族言語集団」なるものは，植民地支配と国民国家形成という歴史のなかで生み出された「近代」の所産にほかならない。加えて，山地民の人々のエスニシティは，市場経済の浸透に起因する村落から都市への急激な人口流出などがあいまって常にゆらぎの渦中にある[7]。

とはいえ，山地民と総称される人々の社会・文化的側面には，顕著な多様性を認めることができることも事実である（e.g. Barton 1949, Eggan 1941, 1963）。だが，そうした多様性は，村落間のレベルにさえ見出され，決して，特定の「民族言語集団」を確定するものではない。むしろ，既存の「民族言語集団」の枠組みに囚われず，村落から国家のレベルまでを視野に入れながら，山地民の人々の社会的実践を把握してゆくべきであろう。

ところで，コルディリエラは，機織りを始め，籠細工，鍛冶，木彫，土器作りなどといった多種多様な工芸品の生産活動が，今日でも村落規模で実践されている姿を目にすることができる地域である。これらは，自家消費される日用品から，現金収入を目的とした商品まで，その生産が実践される動機は様々である。ただ，そうした生産活動は，実態はどうであれ，総じて山地民の人々の「伝統」という範疇で語られる。なかでも，機織りは，観光ガイドなどに登場する「民俗衣装」を身にまとった山地民の人々のイメージともあいまって，最も代表的な「伝統」のひとつに数えられるものである。

実際，機織りは，「民族言語集団」に関係なく，コルディリエラの広範な地域でおこなわれている。とともに，そこで生産される織布は，地域的な偏差は認められるものの，葬送儀礼において遺体を包む布や儀礼的階位を示す各種の衣装などとして使用されている（Canol 1981, p.58; 合田 1989, p.318; 1997, pp. 58-60）。また，ほとんどの場合，機織りは，女性が担う「女の仕事」として実践されている（Jenks 1970, p.114）[8]。機織りは，そうした側面で捉える限り，コルディリエラ山地民の文化に根ざした生産活動であることは確か

6) コルディリエラ行政区は，アブラ（Province of Abra），ベンゲット（Province of Benguet），マウンテン（Mountain Province），イフガオ（Province of Ifugao），カリンガ（Province of Kalinga），アパヤオ（Province of Apayao）の６州とバギオ（Baguio）高度都市化市（Highly Urbanized City）から構成されている。また，同行政区は，将来の自治区政府の設立を睨んだ行政制度が施行されている（合田 1997, p.142）。

7) コルディリエラ山地民のエスニシティについては，様々な機関によって数多くの調査が実施されているが，そのゆらぎを反映するように，「民族言語集団」の人口について調査ごとに著しい格差が認められる（e.g. NCSO 1979）。地理的，言語的，社会・文化的要因などといった「客観的」基準は勿論，当事者のアイデンティティを対象としたとしても，コルディリエラ山地民「諸集団」の彼我を明瞭に確定することは，ほとんど不可能といっても過言ではない。だが，その反面，コルディリエラ山地民のなかに複数の「民族言語集団」の区分があることは，今日，自他共に了解された「既成事実」となっている。それゆえ，本稿では，調査対象とした地域に居住する人々が，相互に総体として了解している「民族言語集団」の名称を，今日の政治的・社会的な言説のひとつとして位置づけ記述する。

8) 後述するように，筆者が調査したマウンテン州のカンカナイ（Kankana-ey）の２村，ボントック（Bontoc）の１村では，機織りは「女性の仕事」として実践されていた。また，同州のビラ（Bila）村という過去に筆者が土器作りの調査をした，カンカナイの人々の村落においても，同様な状況が認められた。

である。

ただし，今日実践されている機織りが，「真正の伝統」として疑いのないものか，といえば否定的な判断を下さざるをえない。というのは，そこで素材となっているのは，圧倒的に海外から輸入された化学染料染めの綿糸やアクリル糸であり，それらはマニラやバギオなど都市部の業者から供給されているものだからである。そもそも，コルディリエラ山地民社会における機織りの隆盛は，外部社会との接触が増加し，低地民のイロカノ（Ilokano）から綿糸が入手されるようになった（Jenks 1970, p.114），20世紀以降の現象といえる。なお，19世紀以前においては，ほとんどの衣類や布は，低地民との交易によって賄われていたようである（Scott 1974, p.147, p.181, p.317）。

他方，織物製品は，デザインや色彩の豊富さ，持ち帰りの手軽さなどから，現在，コルディリエラを訪れた内外の観光客に最も人気のある土産物となっている。そこで人気を博しているのは，財布やサイドポーチ，バックパック，ランチョンマットなどといった観光客のニーズを意識して製作されるようになった「新製品」である。しかも，これらの「新製品」には，工業製品であるジッパーやマジックテープなどが積極的に使用されている。そして，そのような「新製品」は，もはや「伝統」というイメージから程遠い近代的な設備，システムを備える工房において生産されているのである。

もっとも，上記のような工房は，一部の経済的成功例であり，コルディリエラのすべての機織りに一般化できるものではない。同地域には，日常的な営みのひとつとして機織りが実践されている村落が，今日でも少なからず存在している。とはいえ，そうした村の機織りが，市場経済から隔絶しておこなわれている，というわけではない。さらに，近年，行政機関や企業資本などによって，同地域の機織りを産業化＝近代化しようとする開発が推進されている。

コルディリエラの機織りは，今日，「伝統」として語られる一方，現金収入をもたらす「地場産業」としての成長が見込まれている。そうした状況は，地域的な偏差を持ちつつも，同地域の機織りの産業化を促す要因となっている。当然，その影響は，機織りの技術を伝習―実践してきた人々にも，それを支えてきた社会的・文化的背景にも，等しく及んでいることは想像に難くないだろう。

2．三つの機織り

本稿は，コルディリエラ行政区を構成する６州の一つマウンテン州（Mountain Province）における現地調査に基づくものである[9]。現地調査では，サガダ（Sagada），サバガン（Sabangan），サモキ（Samoki）の三地域を主要な対象とした（Fig. 1）。

調査を実施した三地域は，とりわけ機織りが盛んな地として知られており，マウンテン州が発行した観光ガイドにも紹介されている。また，サガダとサバガンが，カンカナイ（Kankana-ey）とされる人々が居住する地域であり，サモキのみが，ボントック（Bontoc）とされる人々が居住する地域である[10]。ちなみに，サガダとサバガンは郡役所のある郡（municipality）の中核行政村＝町（poblacion），

9) 本稿の主要なデータは，1996年３月から７月にかけて実施した現地調査に基づくものである。また，その後の継続調査によって，補助データの収集をおこなった。

10) マウンテン州におけるカンカナイとボントックとされる人々は，言語的にも社会・文化的にも類似性が高いといえる。とりわけ，カンカナイ諸語とボントック諸語は，非常に近似しており，厳密に区分することが困難とされている（McFarland 1980, p.74）。実際，調査した３地域では，地理的に近接していることもあり，ほとんど支障なく言語コミュニケーションが可能であった。なお，それほど多数ではないが，各地域には，婚入などによって他のエスニシティを有する人々も居住していた。

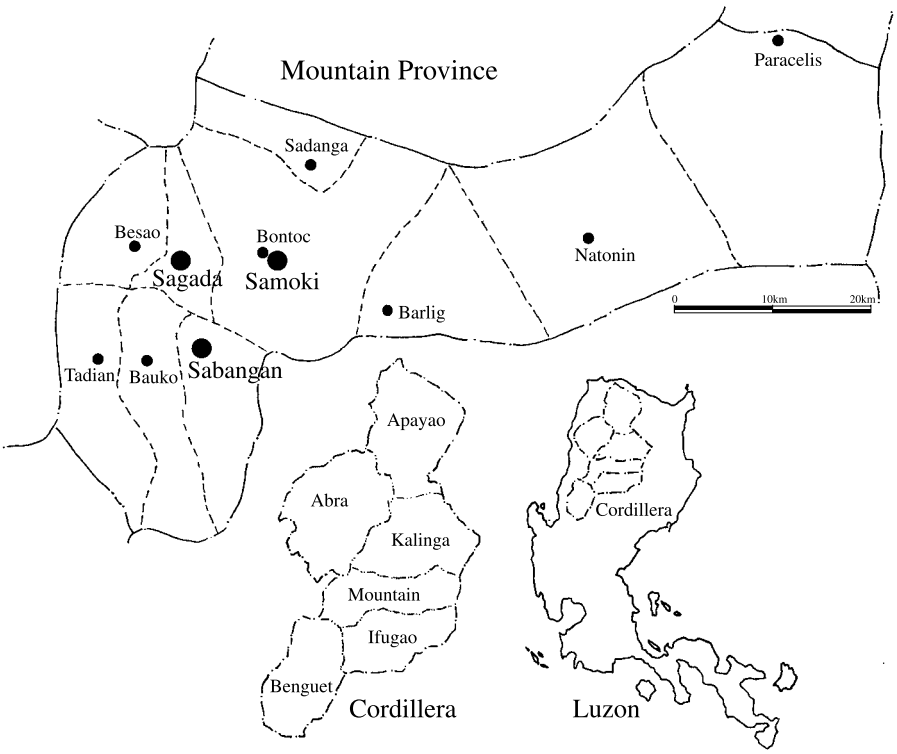


Fig. 1　調査地

サモキは州都ボントック（Bontoc）近郊の行政村（barangay）である。

だが，それ以上に，サガダ，サバガンとサモキの機織りの間には，顕著な違いが指摘できる。それは，市場経済への適応に向けた生産から商品開発，流通に至るまでの産業化のレベルの違いである。そのため，ここではまず，地域ごとに，その機織りを取り巻く現状を確認しておく。

〈サガダ〉

サガダには，法的・行政的に認可された，計四つの機織り関連の団体・組合がある（1995年度マウンテン州調べ）。Table. 1 には，その主要なデータを提示した。一目すれば明らかなように，サガダ・ウィービング（Sagada Weaving）と他の団体・組合の間には，顕著な違いが認められる。その差異は，次のように要約することができる。

a. 持分資本，労働者数，生産力といった規模において比較にならない格差がある。
b. 他の団体・組合が，すべて1990年代になってから設立されているのに対し，サガダ・ウィービングの設立は1965年と格段に古い。
c. 他の団体・組合が，国内の経済開発を担う SEC（Securities and Exchange Commission）の管轄であるのに対し，サガダ・ウィービングは貿易産業省（Department of Trade and Industry）に登記されている。
d. サガダ・ウィービングのみが，マウンテン州産業会議（Mountain Province Council of Industries, Inc.）に加入し，フィリピン国立銀行（PNB）と取引をおこなっている。
e. サガダ・ウィービングの製品は国内のみならず，欧州や北米に輸出されている。

上記に加えて，サガダ・ウィービングの工房では，多数の織機とともに，これも多数の

Table. 1 サガダにおける機織り団体・組合

	Sagada Weaving	Auid Trailblazers Association	Asosyon Ken Sociodaddagiti Umiliti Pide	Assn.of Sagada Producers
Legal Status	Sole Proprietorship	Corporation	Corporation	Corporation
Year Established	1965	1991	1991	1994
Capital Equity	P1500000	P0.2	P.150	P.045
No. of Production Workers	48	15	18	9
Government Registration	DTI	SEC	SEC	SEC
Sectoral Membership	Mountain Province Council of Industries, Inc.	—	—	—
Bank Reference	PNB	—	—	—
Production Capacity	P3000pcs/month	P30pcs/month	P100/month	P200/month
Major Market	Europe, US, Canada	Mt Province	Mt Province, Baguio, Manila	Mt Province, Baguio

出典：GARMENTS AND TEXTILS: Industry Sector Profile
（1995年マウンテン州調査報告。表記数値は原資料のママ）

ミシンが，ひっきりなしに稼働している。その規模と設備は，他を圧倒するものである。なお，サガダで使用されている織機は，すべて「高機」（吉本 1995, p.259）に分類されるもので，外部から導入された新機軸である。ただ，この「高機」で生産されている織布には，旧来の織機によって織られていたものとの差異は基本的に認められない。これは，「伝統」を演出するために，意識的にデザインや色彩，品質などをコピーした結果と見なすべきであろう。

サガダは，マウンテン州において，早くに機織りの産業化が推進され，最も経済的成功をおさめている地域として認知されている。だが，それは，ひとりサガダ・ウィービングのみに帰すべきものである。サガダ・ウィービングは，産業化の一例にとどまらず，機織りによって経済的成功をおさめたコルディリエラを代表する企業とさえいえる。

〈サバガン〉

サバガンで法的・行政的に認可されている機織りの組合・団体は，1988年設立のサバガン織工組合(Sabangan Weavers Cooperative)だけである。ここから，同村において機織りの産業化が本格的に推進されたのは，比較的新しいということが窺える。

Table. 2 には，サバガン織工組合の基本的なデータを提示した。ここから，持分資本，労働者数，生産力の規模は，サガダ・ウィー

Table. 2 サバガンにおける機織り団体・組合

	Sabangan Weavers Cooperative
Legal Status	Cooperative
Year Established	1988
Capital Equity	P0.300
No. of Production Workers	23*
Government Registration	DTI, SEC
Sectoral Membership	Mountain Province Council of Industries, Inc.
Bank Reference	PNB
Production Capacity	P100,000/month
Major Market	Mt Province, Baguio, Manila

* 1996年時点では32名

出典：GARMENTS AND TEXTILS: Industry Sector Profile
（1995年マウンテン州調査報告。表記数値は原資料のママ）

ビングを除くサガダの三つの団体・組合に相当するレベルであることが読み取れる。ただ，貿易産業省，マウンテン州産業会議，フィリピン国立銀行との関係から，サガダ・ウィービングに近い体制の下，産業化が推進されていることが指摘できる。

実際，その工房の正面入口に掲げられた表札には，貿易産業省の文字が併記されていた。また，その規模においては，サガダ・ウィービングには及ばないものの，数多くの「高機」タイプの織機に加え，数台のミシンが稼働していた。したがって，サバガン織工組合における産業化は，先に確認したサガダ・ウィービングと他のサガダの団体・組合との間に位置づけられるレベルにあるといえよう。

〈サモキ〉

サモキには，現時点で，法的・行政的に認可されている組合・団体はなく，また規模・設備において産業化と見なしうるような機織りの実践は認められない。マウンテン州の調査報告書には，サモキの名が付せられた二つの機織りの組合・団体が記載されているが，これらの実態は近郊の州都ボントックで操業している工房である。

同村で目にすることができるのは，家屋の軒先などで個人ないし家族単位でおこなわれている機織りである。また，そこで使用されている織機は，「腰機」（吉本 1995, p.259）に分類される非常に簡素なものである。これは，「高機」が導入される以前から，山地民の人々が使用していた織機で，その歴史は16世紀以前にまで遡ることができる（Scott 1994, p.261）。

以上のようなサモキの機織りは，旧来の民俗社会的な状況における実践を比較的維持している，と想定できるものである。それを裏付けるように，「祖母の代から受け継いできた」と語られる，コルディリエラ各地の村々で実践されている機織りは，織工の人数や実践の頻度を別とすれば，サモキの状況とほとんど変わるところがない。また，現地での聞き取りや記録，映像などから窺う限り，サガダやサバガンにおける機織りも，かつては類似の状況であったようだ。

しかしながら，サモキの機織りが，産業化の影響をまったく被ることなく維持されてきた，と即断することは危険だろう。というのは，その生産物である織布が，先に述べたボントックの工房などに持ち込まれ，サガダやサバガンの製品に類似した財布やバックパックなどに加工されているからである。そして，そのような需要こそが，サモキを機織りの盛んな村としている要因のひとつであることは否定できない。このため，民俗社会的な状況において実践されているサモキの機織りは，その実，産業化されたシステムの一部として維持されている，という逆説を認めざるをえなくなる。

Ⅲ．産業化による社会的実践の変容

１．技術の伝習と実践

マウンテン州を代表する機織りの地，サガダ，サバガン，サモキの状況を概観したところ，それらの間に産業化に起因する大きな差異が確認された。また，その差異は，現時点で最も産業化が遂げられたレベルから，産業化の影響を受けつつも比較的旧来の民俗社会的状況を維持しているレベルまでを示すものであった。

では，そうした産業化は，その技術の実践と伝習に，どのような影響を与えているのであろうか。そこで，以下では，それぞれの機織りにおける技術の伝習と実践に焦点を当て検討を加えてゆく。なお，サガダとサバガンについては，産業化の影響が顕著なサガダ・ウィービングとサバガン織工組合を対象とし，サモキのみ村落を単位として検討する。

〈サガダ・ウィービング〉

サガダ・ウィービングでは，「高機」とミシンを用いた製品生産がおこなわれている。その作業を一言で述べるなら，「高機」で織

布を織り，ミシンによってそれを財布やバックパックなどの製品に加工する，という二つの工程となる。このため，同工房の織工達は，「高機」による織布の生産とミシンによる製品の加工，という二つの技術的実践に携わっているといえる。

この二つの工程は，製品生産としては一連の工程として位置づけられるが，技術的には性格を異にする，まったく個別の実践と見なすべきである。実際，「高機」とミシンは，工房内の別々の場所にまとめられ，それぞれ個別に作業がおこなわれていた。だが，それ以上に，「高機」とミシンの使用には，根本的な相違が指摘できる。それは，その技術の実践と習得における難度の差である。

「高機」の操作は，特有の身体運動を数多く必要とするものであり，外部から眺める限りにおいても，その技術習得の困難さは十分に想像できる。さらに加えて，そこで織られているのは，単に「高機」の操作方法を習得したとしても，容易には作り出すことはできない複雑な文様と色彩の織布である。ここから，機織りを実践するためには，かなり難度の高い技術を習得しなければならないことが窺われる。「高機」での機織りに比べれば，ミシンの使用は，その操作方法を覚え，ある程度の経験で事足りる，格段に容易な技術的実践と見なさざるをえなくなる。

では，織工達は，かくなる機織りの技術を，どのように習得しているのであろうか。結論を述べるならば，それは同工房における「教育システム」の賜にほかならない。

サガダ・ウィービングの織工達は，同工房で働くに際して，ほぼ例外なく，まず熟練した先輩の織工につき技術訓練を受けることとなる。そこでは，工房における仕事のハードからソフトまで様々なことが「教育」される。機織りの技術は，そこでの具体的な学習過程を通して，徹底的に教授されてゆくのである。

サガダ・ウィービングにおける，上記のような技術の習得は，近代の学校教育に類比しうる，明確で固定的な教授―学習関係の下でおこなわれているといえる。また，それは，当事者達にも明瞭に意識されているようで，同工房においてインタビューをした織工すべてが，自分達の技術は「訓練された」結果である，といった回答をおこなっている[11]。

ところで，サガダ・ウィービングの織工は，すべて経営者と雇用関係を結んだ，常勤の労働者である。このため，織工達は，基本的に毎日決められた時間に出勤し，それぞれ割り当てられた作業に従事している[12]。こうした背景を加味するならば，既述のような技術の伝習形態は，ある意味で，新規採用者に対して当然施されるべき「教育システム」と見なすことができるだろう。

なお，サガダ・ウィービングにおける織工は，例外なく女性であった。さらに付言するならば，現在では作業に従事していない経営者までも含め，工房内で目にするのはすべて女性のみで，基本的に男性の姿を見ることはなかった。市場経済に適応した企業的経営がおこなわれているサガダ・ウィービングにおいても，機織りは，相変わらず「女の仕事」として実践されていることが窺われた。

〈サバガン織工組合〉

サバガン織工組合における作業は，基本的にサガダ・ウィービングと同じで，「高機」による機織りからミシンを使った製品生産までである。また，生産されている製品にも基本的に違いはない。加えて，その織工達は，同組合の代表以下すべて女性であった。ただ，

11) 「訓練」という言葉は，多くの場合，現地語ではなく英語の“ training ”が用いられていた。確認は取れなかったが，ここから，同工房での新規参入者に対する教育が“ training ”と呼称されている，という可能性が推察される。なお，後述するサバガン織工組合における回答も同様である。

12) ただし，織工のほとんどは，農家の女性であるのため，休日や農繁期には農作業に従事することがあるという。とはいえ，彼女達は，あくまでもサガダ・ウィービングでの労働がメインであることに変わりがなく，市場社会における一原則としての雇用契約に縛られている。

同工房では，ミシンの台数が少ないため，相対的な作業量として「高機」による機織りが中心となっているようであった。

いっぽう，同工房においても，機織りの技術を伝習するために採用された「教育システム」が認められた。そして，それは，前述したサガダ・ウィービングと内容的に変わるところのない，明確で固定的な教授―学習関係に基づくものであった。

そこで，現地の織工30人にインタビューを試みたところ，その全員が自ら保持する技術は，「訓練」を受けて習得したものである，と回答した。これらの回答は，サガダ・ウィービングの織工達とまったく同じものである。ここから，同様の「教育システム」を経験した当事者である，サガダ・ウィービングとサバガン織工組合の織工達は，その認識をも共有していることが窺われる。

しかし，同工房とサガダ・ウィービングとの間には，看過しえないひとつの大きな違いが指摘できる。それは，同工房における機織りや製品生産が，パートタイム的な就労形態でおこなわれていることである。

同工房の織工は，必ずしも，毎日決まった時間に，全員が集まって作業に従事しているわけではなく，各個人ごとに工房で作業する時間や日数に，ある程度の偏差が認められた。では，工房で作業していないとき，何をしているのかといえば，ほとんどの場合，家事や田畑での農作業である。事実，インタビューした30人の織工は，全員，自分は織工であるとともに農婦であることを明言していた。むしろ，彼女達にとっては，農婦としての仕事の方が優先されていると見なすべきかもしれない。

これを傍証するデータとして，同工房の織工の平均年齢が51.4歳と高く，最も若年者でも40歳であることが挙げられる（Table. 3）。というのは，こうした年齢層は，一般に子育てから開放されており，たとえば20代や30代の女性に比べると家事に割く時間が相対的に少ない傾向にある，と予想されるからである。つまり，同工房への参加は，農作業の時間を削るのではなく，家事の時間の軽減によって可能となっている，という想定が導かれる。裏を返せば，農作業の時間を割けるのであれば，20代や30代の織工が一人もいない，という極端な年齢の偏りは成立しえないだろう[13]。

Table. 3　サバガン織工組合の年齢構成

年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明
人数	0	0	0	14	14	2	0	0	0

（1996.5.調査）

いずれにせよ，同工房における織工は，市場経済の労働者とは程遠い就労形態において作業に従事している。その点においても，同工房における産業化は，サガダ・ウィービングのレベルには達していないといえる。他方，農作業を第一とし，その合間におこなわれる機織りは，後述するサモキでも認められることから，その限りにおいて，旧来の民俗社会的な状況を受け継いでいると見なすことができる。

〈サモキ〉

サモキには，工房といえるような複数の織工が一緒に作業する場はなく，すべての機織りは家屋の軒先や庭などで個人的におこなわれている。また，そこでの機織りは，すべて「腰機」を使用して実践されていた。

「腰機」は，「高機」の導入以前から，コルディリエラの山地民社会において受け継がれてきた織機である。その性格は，「高機」との比較において，以下のようにまとめること

13) 調査時，サバガン織工組合に所属する織工の数は，公式には32人であった。そのため，若干名の織工に対して，直接本人にインタビューすることはできなかった。ただ，面会しえなかった織工は，少なくとも最年少ではないらしい。したがって，本稿で提起した年齢構成の偏りに影響はないと判断される。

ができる。

a. はるかに簡素な造りの織機である。

b. 相対的な生産性は低い。

c. 要求される技術の難度が高い。

産業化に際し，「腰機」を排して「高機」が導入される理由は，主に二つ目と三つ目の性格に起因していると想定できる。というのは，生産性を高めることは当然として，要求される技術の難度が高いということは，その習得に時間を要するとともに，織工の技量差が反映されやすく生産物の品質を一定に保つことが困難となるからである。こうした特徴は，技術革新によって，個人の能力差を可能な限り排除し，均質な製品の量産を志向してきた，近代以降の産業化に反する要因であることは自明だろう。

「腰機」による機織りを簡潔に述べるならば，織工自らの身体を織機の一部とし，経験的に獲得せざるをえない身体運動や身体感覚によって達成される技術的実践といえる[14]。それゆえ，「腰機」による機織りは，「高機」にもまして，より高度な技術的実践といえるだろう。なぜなら，「腰機」による機織りでは，身体そのものに対する技術的要求が多岐にわたるのに対して，「高機」による機織りでは，かなりの程度まで道具＝機材である織機が，その身体に対する要求を軽減してくれるからだ[15]。

換言するならば，「腰機」による機織りの技術を習得するということは，身体を機織りの道具となるように構築することである，と表現できるほどだ。それでは，サモキにおける技術伝習は，いかなる形態によって実現されているのであろうか。

サモキにおける機織りの技術伝習は，筆者がかつて，同地域のカンカナイ社会における土器作りを対象として明らかにした技術伝習（大西 1998a, pp.481-484）と，軌を一にするものであった。その技術伝習とは，初級者が，熟練者と一緒に作業をおこなうなかから，“ 見よう見まね ” や自主的な質問などを通して，自ら積極的に技術を学び取ってゆく，という様相を呈するものである。そこでは，まず “ やってみる ” という実践が第一で，初級者は “ できないこと ”, “ わからないこと ” があって，はじめて熟練者に教えを請う。また，明らかに間違ったやり方でもしない限り，熟練者の方も積極的に教唆を与えることはほとんどない。熟練者が果たすべき役割とは，何にもまして，機織りを実践することによって初級者の “ 手本 ” となることである。

さらに，上記の技術伝習に加えて，同村における日常生活の営みのなかには，必ずしも明確に意識されてはいないが，経験的に機織りの技術的素養を蓄積させる側面が認められた。その最も代表的な例が，子供による “ 手伝い ” である。同村では，織工である母親や姉妹などについて，子供が機織りの“ 手伝い ” をしている姿が頻繁に認められるが，そうした経験は，作業手順はいうまでもなく，習得に時間を要する「腰機」の操作法などを学ぶ格好の機会となっていた（大西 1998a, p.482）。

以上のような技術伝習は，社会における日々の営みのなかに埋め込まれているため，局外者が眺める限りにおいて，明瞭な外縁を備えた制度やシステムとして把握しがたいもの

14) 吉本忍は，「腰機」による機織りについて，その「作業に欠くことのできない経糸の張力は，織り手が身体を前後にかたむけることによって加減される」（吉本 1995, p.259）と指摘している。ここでいう「経糸の張力」を「加減」するには，容易には真似できない絶妙の身体運動や身体感覚が必須となる。実際に「腰機」での機織りを試みてみれば，それは一朝一夕で実践できる “ ワザ ” ではないことが明らかとなるだろう。なお，「腰機」の技術的実践に関する詳細については，別稿において論じる予定である。

15) あくまでも，この判断は，「腰機」との比較において成り立つものである。「高機」による機織りにおいても，経験的に習得しなければならない技術的側面が，少なからず介在している。「高機」に伴う技術もまた，機械化によって織工達の身体から乖離していく，というのが産業革命以降の方向性である。

である。それは，サガダ・ウィービングやサバガン織工組合で見られたような，明確で固定的な教授―学習関係に基づく，近代の学校教育的なシステムとは，まったく性格を異にしている。

いっぽう，当事者の語りにおいても，サガダ・ウィービングやサバガン織工組合とは異なる傾向が捉えられた。同村の織工32人に，「どのようにして技術を習得したのか？」という質問を試みたところ，非常に多様な回答が得られた（Table. 4）[16]。織工達の多くは，「母（祖母）から学び取った」ないしは「祖母（隣人）の観察を通して」――あるいはただ一言「母（祖母，姉，友達 etc）」[17]――などと回答し，一部には「自分で学習した」や「自分の実践によって」などという回答をする織工もいた。ただ，こうした回答の多様性の反面，同村における織工達は，自らの技術の習得を語る上で，サガダ・ウィービングやサバガン織工組合で得られたような「訓練」という言葉を誰ひとりとして選ばなかった。

ところで，同村の織工もまた，すべて女性であった。ただ，織工の人数がどれほどなのか，まったく把握することはできなかった。それは，必ずしも，同村の織工が組織化されていないからではない。むしろ，その理由は，同村の女性の多くが，先に指摘した子供の“手伝い”などを含め，少なからず機織りに関与した経験を有しているため，潜在的に一定レベルの技術を習得していることにある。そうした女性達は，本人がやる気になれば，経験を積んだ織工に及ばないまでも，ある程度は機織りを実践することができるのである。

事実，同村では，10歳未満と思われる年端もいかない女の子が，母親や姉妹，隣人などが機織りをする脇で，その“手伝い”として巧みに「腰機」を操っている姿を，そこかしこで見かけることができる（Fig. 2）。このような光景を目にすると，同村の女性のうち，誰が織工で誰が織工でないかを選別する以前に，一体何をもって織工と判断すべきなのか，さらには織工を判別することの意義そのものを見出しがたくなってしまう。

Table. 4　サモキにおける織工の技術習得に関するインタビュー結果

回答実例	回答者数
母	9人
祖母	6人
母と祖母	1人
姉	2人
従姉	2人
隣人	2人
友人達	1人
母から学び取った	2人
祖母から学び取った	1人
祖母の観察を通して	1人
隣人達の観察を通して	1人
観察を通して	1人
自分で学習した	1人
自分の実践によって	1人
柵編み作りから	1人

（1996.5.調査）

なお，同村においてインタビューしえた織工は32人であったが，その年齢構成は，サバガン織工組合との対比において顕著な違いが認められた。それは，織工達の年齢が，40代以上に偏ることなく，逆に10代から30代が主体となっていたことである（Table. 5）。また，20代以上の織工は，農家の主婦などであるが，10代の織工は，すべて年齢に応じた学校に通う学生であった。

もっとも，この結果は，同村における織工の一部から得られたものであるため，全体的

16) サガダ・ウィービングやサバガン織工組合のケースと異なり，これらの回答は，すべて現地語によって表現されたものである。

17) 「母（祖母，姉…etc）」といった回答は，複数人が集まっている場において，他の織工による「～から学び取った」あるいは「～の観察を通して」を受け，自分の場合は誰からであったか，を示唆しているケースがほとんどであった。

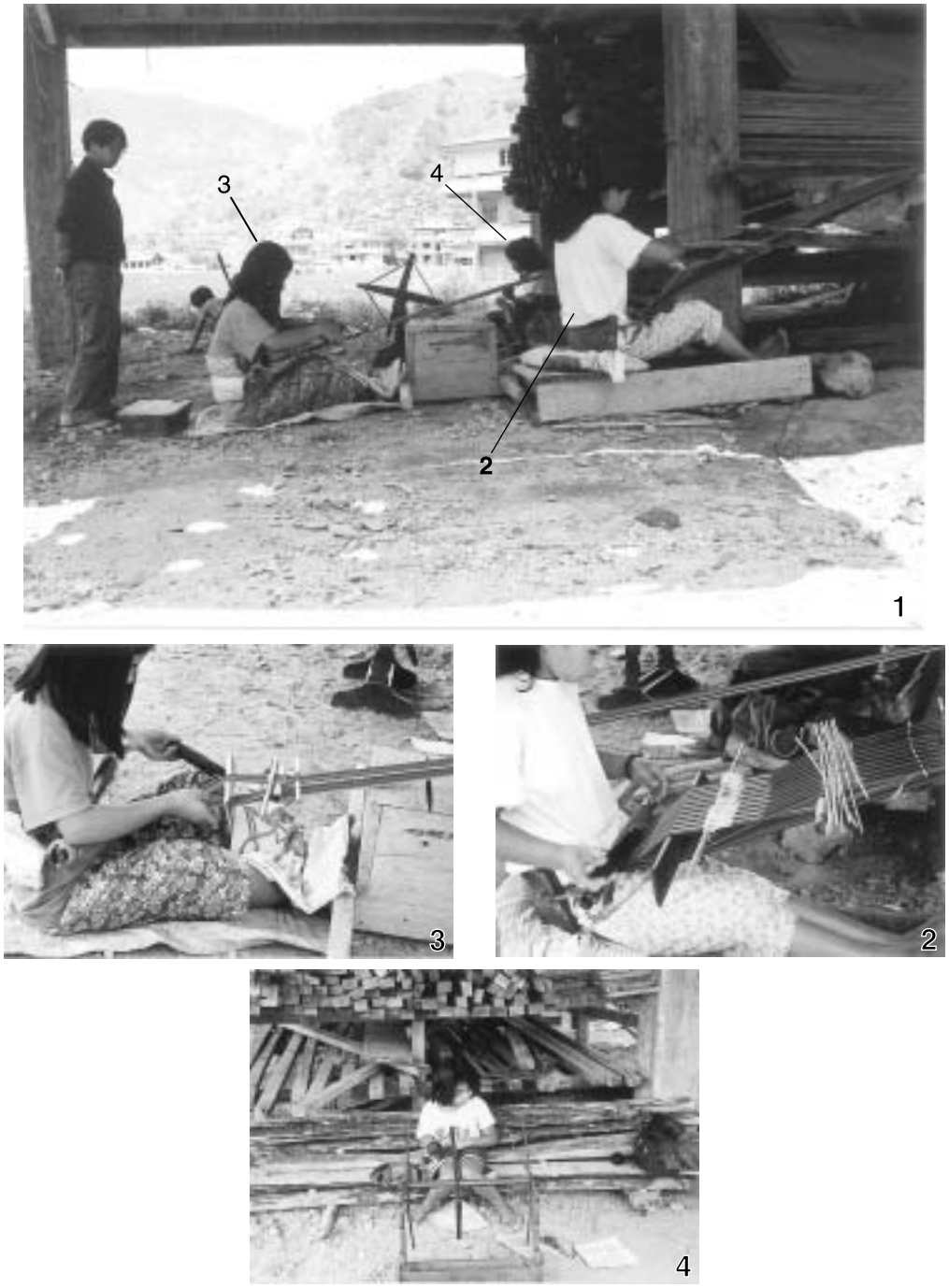


Fig. 2　織工と“手伝い”の子供（1996.5.撮写 in Samoki）

1．織工と２人の“手伝い”の子供
2．織工による機織り
3．「縁飾り」用の布を織る年長の女の子
4．糸を紡ぐ年少の女の子

Table. 5 サモキにおける織工の年齢構成

年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明*
人数	14	4	10	0	1	1	0	0	2

* 当事者自身が年齢を正確にカウントしていない。なお，両名とも高齢であった。

（1996.5.調査）

な傾向を反映していると断定することは危険であろう。ただ，少なくとも，同村には30代以下の織工が数多く存在することから，サバガン織工組合のような年齢構成の偏りがないことは確実である。加えて，同村における機織りもまた，それぞれのライフスタイルのなかでパートタイム的におこなわれている副業と判断されるが，サバガン織工組合よりもさらに，個々人の裁量の下で自由に実践されている，という想定が成り立つ[18]。でなければ，相対的に時間に余裕のない若い年代の主婦や学生などが，機織りに従事することなどとうていできないからだ。

2．産業化に伴う変容

サガダ・ウィービング，サバガン織工組合，サモキの機織りにおける技術の伝習と実践について個別に検討をおこなった結果，そこでも産業化に起因する様々な差異が捉えられた。その結果を踏まえ，ここでは，それぞれの比較検討を通して，産業化が機織りの技術の伝習と実践に及ぼした影響の把握を試みる。

産業化が推進された結果として，まず指摘しうることは，機織りの実践における組織化である。この組織化を端的に表しているのが，「実践の場」としての工房の出現である。工房は，通常，建造物としての物理的空間であり，その空間には原材料から生産設備まで，機織りのみならず，製品生産をおこなうためのすべてが揃えられている。それゆえ，織工は，サガダ・ウィービングやサバガン織工組合で見られたように，この空間に身を置いて機織りを実践することとなり，結果として全員が一堂に会することとなる。

これに対し，工房のないサモキでは，機織りの場は，個々の織工の家が核となっているため，空間的にも相当分散している。また，そこでは，せいぜい家族か友人同士が二，三人で一緒に作業している姿が見られる程度で，それ以上の人数が集まって機織りの実践がなされることは常態としてない。なお，こうした個人を単位とする実践は，サモキに限らず，最も産業化から程遠いと目される，コルディリエラ各地の村々で細々とおこなわれている機織りにおいても同様に認められた。

しかし，産業化に伴う組織化は，上記のような物理的・空間的な側面にとどまるものではない。それは，近代的な制度としての組織化である。

すでに確認したように，最も産業化が進んでいるサガダ・ウィービングでは，織工は経営者と雇用関係を結び，フルタイムで機織りに従事していた。たぶんに，こうした就業形態は，市場経済における労働者のイメージと基本的に変わるところがない。だが，サバガン織工組合とサモキにおける機織りの実践は，それとはかなり様相を異にするものであった。とくに，そこでの作業は，近代の「労働観」とは一線を画すほど，日数や時間などが一人ひとりの裁量に委ねられたパートタイムジョブであった。

ただし，サバガン織工組合とサモキにおけ

18) これを裏付けることとして，筆者自身，次のような体験をした。それは，筆者が最初に同村を訪れた時，若い織工が機織りをする姿をほとんど見かけなかった，というものである。ところが，次に調査をした時期が，ちょうど長期休暇（春休み）の時期にあたっていたため，10代の織工が数多く機織りをする姿を目にすることができたのである。おそらく，もし調査期間が異なっていたら，これほど多くの10代の織工にインタビューすることはできなかったであろう。ここから，学生である10代の織工は，当然ながら平日の日中はそれぞれ学校に行っており，機織りに従事するのはもっぱら休日などであると推察される。

る機織りの実践を，まったく同一視することは危険である。というのは，サモキと比較するならば，サバガン織工組合における就労形態が，産業化の影響を免れているとは見なしがたくなるからだ。

改めて確認するまでもなく，基本的にすべてが個々人の裁量に任された実践であるならば，機織りをいつどれぐらいおこなうかもまた，原則として当事者の一存に委ねられていてしかるべきだろう。とすれば，サバガン織工組合における織工の年齢構成は，やはり特異な状況と見なさざるをえなくなる。なぜなら，いくら時間的余裕が少ない世代とはいえ，誰ひとりとして，機織りをおこなう時間を生活のなかでまったく取れないとは考え難いからである。事実，サモキで見られたように，日々の生活時間のほとんどを学校で過ごしている10代の女子学生でさえ，休日などを使えば機織りをおこなうことはできるのだ。

これを是認するならば，サバガン織工組合における織工の年齢の偏りが，まったく自由な個々人の裁量の結果として生起している，とは決していえなくなる。そこには，産業化に由来する，次のような二つの要因が介在していると想定される。

まず一つは，機材に起因するものである。サバガン織工組合の織機は，新たに導入された「高機」であり，各個人や各世帯で所有されているものではないため，それを使用するには工房に出向かなければならない。とともに，「高機」は新機軸であるがゆえに，たとえ「腰機」を使える織工であったとしても，新たに技術を習得しなければならず，そのためには工房に出向くことが不可欠となる。このように，万事，工房に出向き，そこに身を置かなければ始まらないという状況は，時間に余裕がない者にとって少なからぬ負担となってしまう。それが，間接的にせよ，時間に余裕のない若い世代が，サバガン織工組合に参入することを阻む，一要因となっていると想定される。

いま一つは，より直接的に実践に関連するものである。一見，個々人の自由な裁量の下で実践されているように見える，サバガン織工組合における機織りであるが，マーケットとの関係において達成しなければならないノルマがある。たとえば，それは，取引先からの受注による，製品の生産量であったり納期などであったりする。また，市場経済では極々ありきたりな，そうしたノルマは，個人ではなく，組織として引き受け，遂行することになる。それゆえ，サバガン織工組合の織工達の機織りは，市場経済との接合によって組織化された上で，達成すべき作業内容を設定されているのである。このような個人の裁量に対する二重の圧迫は，若年層にとって参入に二の足を踏ませるにあまりある要因となるだろう。

ここまでの議論を加味するならば，サモキとサバガン織工組合の機織りの実践に認められた差異は，前者における織工の裁量の余地が大きいのではなく，むしろ後者の織工の裁量が産業化によって奪われている，という想定が成り立つ。産業化は，機織りの実践を組織化し，個人の裁量の余地を奪っていた。それは，本来，日々の営みのなかで個人に委ねられていた機織りの実践が，外部に位置する市場経済によって，その布置を決定されることと言い換えることができる。そして，その行き着く先のひとつの極には，サガダ・ウィービングにおいて見られた，市場経済に従属する労働者としての就労形態があることに疑いはないだろう。

他方で，産業化に伴う結果として，何にもまして看過しえないのは，技術伝習に及ぼされた影響をおいてほかにないだろう。技術伝習とは，いうなれば新たな織工を生み出し，機織りを次世代に伝えてゆく営為である。ゆえに，それは，機織りの今後に直結し，それに連関する社会的・文化的側面を転調，再構築する可能性を孕んでいる。

産業化が技術伝習に及ぼした影響を一言で

述べるならば，教える―教えられる関係の明確化，固定化に基づく教授―学習システムの構築といえる。その結果，技術伝習は，以下のような非常に異なる，二つの様相を呈することとなった。

サモキに代表される，民俗社会的な状況の下にある技術伝習は，熟練者と一緒に作業を実践するなかで，“ 見よう見まね ” や自主的な質問などを通して技術を自ら学び取ってゆく，という様相を呈するものであった。また，その前段階には，子供の “ 手伝い ” に代表される，熟練者の作業補助などの経験を経ることによって，技術的な基礎が自ずと習得されていることが窺われた。こうした伝習形態は，社会に埋め込まれており，日常生活を営むなかから，あまり明確に意識されることなく，経験的な蓄積として技術の習得が達成される学習システムといえる。

対して，産業化が推進されたサガダ・ウィービング，サバガン織工組合における技術伝習は，それまでの個々人の経験に一切関係なく，訓練＝教育をおこなうことによって達成される，近代の学校教育に類似したシステムであった。さらに，その「伝習の場」となるのは，空間的，社会的に外部から遮られた工房であるため，技術を習得するには，空間的にも社会的にも工房の内側に参入することが不可欠となる。したがって，そこでの技術伝習は，日常の生活実践から切り離された状況においておこなわれているのである。このように，産業化は，技術の伝習形態を一変させていたことが捉えられた。

いっぽう，それぞれの技術伝習を経験した当事者である織工達は，その自らの体験を説明するにあたり，異なる言葉によって語っていた。それは，サガダ・ウィービングとサバガン織工組合の織工達が，一様に「訓練された」と説明する一方，サモキの織工達が，「学び取った」ないしは「観察を通して」などといった多様な説明をしていることである。両者の語りを比較すると，サガダ・ウィービングやサバガン織工組合の織工達は，「訓練された」という受動的なニュアンスの言葉を使っているのに対し，サモキの織工達の説明には，そうした言葉は選ばれず，むしろ「学び取った」，「自分で学んだ」に代表される積極的なニュアンスを含む表現であることが指摘できる。

ところで，サモキの10代の織工達は，まさに学校教育を実体験している学生であることから，機織りの技術伝習との相違をリアルタイムで経験しうる立場にいる。そうした織工達のすべてが，自身が体験した機織りの技術伝習に対して，「訓練」という言葉を選択しなかったことは示唆的である。というのも，彼女達が，あえて「訓練」を選択しなかった背後には，それらがサモキの技術伝習を説明する言葉として相応しくない，と認識していることが窺われるからである。

いずれにせよ，民俗社会において営まれてきた技術伝習が，近代の学校教育的なシステムに取って代わられたことによって，当事者の語りにまで，その影響が顕れたことは疑いのない事実である。とともに，こうした語りの背後には，その言葉の選択を促している当事者の具体的な体験がある，という意味で単なる言葉の違いにとどまる事例ではないといえるだろう。

以上のように，産業化の推進は，観察されるレベルでの機織りの伝習，実践から，それらを担っている当事者の語りにまで影響を及ぼしていることが捉えられた。だが，そのなかにあっても，すべての機織りにおいて共通して確認されたことがあった。それは，個々人の裁量の下に実践している織工であろうが，ほとんど企業化された工房の労働者として雇用されている織工であろうが，さらにはマウンテン州に11ある機織りの組合・団体の代表者までもが，すべて女性であったということである。ここから，コルディリエラ山地民社会では，現時点において，産業化の進展に関係なく，直接的な作業のみならず機織りに

かかわること自体が総体として，すべからく女性が担うべき性別分業として維持され，実践されていることが確認できる。

3．日常世界の再構築

機織りの産業化は，その技術の伝習と実践に様々な変容を引き起こしていた。あえて指摘するまでもなく，こうした技術の伝習や実践は，決して現地の社会や文化から隔絶して成立するものではない。あまつさえ，民俗社会的な状況においては，それらが技術の伝習や実践を成り立たせる初期条件でさえあった。それゆえ，産業化に伴う技術の伝習―実践の変容は，現地の社会や文化に対して，何らかの影響を及ぼしうる可能性が措定されることとなる。

そこで注目されるのが，現在でも，コルディリエラの機織りが女性の性別分業として伝習―実践されている，という状況である。というのは，同地域の土器作りを対象とした拙稿で明らかにしたように，コルディリエラ山地民の人々による性別分業の伝習―実践は，従来，その社会におけるジェンダー（社会・文化的性差）の再生産に一定の役割を担ってきた，と想定されうるものであるからだ（大西 1998a, pp.486-489）。

繰り返し確認したように，旧来の民俗社会的な状況における機織りの技術伝習は，子供の頃の“手伝い”に代表される日常的な経験を重ねるなかから，それが伝習の過程であるということをあまり明確に意識させることなく達成されるシステムであった。他方，そうした伝習を経て織工となるのは，現在までのところ女性のみである。

ところが，この技術伝習に大きな役割を果たしている“手伝い”は，必ずしも性別を異にする男の子を排除してはいないのである。また，そこでの“手伝い”の内容も，性別による違いは基本的に認められない。このため，“手伝い”に参加した男の子は，将来織工となる女の子と一緒に，等しく機織りの技術伝習の基礎過程を経験していることとなる。ただ，そうした男の子達は，成長してゆくなかで自他のジェンダーを認識する結果，自ずと異性の仕事である機織りにかかわらなくなる。したがって，コルディリエラ山地民社会における性別分業としての機織りは，直接的な規範や禁忌などによるのではなく，個々人にジェンダーが付与されるなかから結果的に維持されているのである。

上述のような状況は，コルディリエラの山地民社会でおこなわれている，性別分業の多くに共通して認めることができる（大西 1998a, pp.486-487）。むしろ，それが常態といっても過言ではない。実際，筆者自身も，「女の仕事」とされる機織りや土器作りに男の子が，「男の仕事」とされる河川漁労に女の子が，それぞれ“手伝い”として参加している光景を何度も目にした。

実は，このような両性の性別分業への参与という経験こそが，ジェンダーの再生産に重要な役割を果たしている，と推察されるのである。というのは，山地民の子供にとって性別分業への参与は，男女別々に実践される労働のあり方を，まさに身をもって実感させられる体験となることから，当該社会における自他のジェンダーを明確に意識させるひとつのきっかけになりうるからだ（Bello 1972, pp.54-55）。さらに，そこでは，それぞれの性に特有な身振りとなる様々な所作や姿勢，たとえば「女性的な仕草」や「男らしい座り方」などが，作業のなかでもその合間にも，子供達の前で絶え間なく展開されることとなる[19]。

19) ある特定の作業や労働が性別分業として実践されるならば，原則的には，そこでの身体所作のみならず，行為者としての身体そのものがジェンダーと見なしうるものとなる。もっとも，それを担う行為者がジェンダーを付与された人物である限り，その「実践の場」では，作業や労働に直接かかわる身体所作以外にも，それぞれの性に特有の身振りが自ずと繰り広げられることとなる。むしろ，性別分業を実践するための動作や姿勢といった身体所作が，当該社会におけるジェンダーとしての身振りを基盤として構築されている，と見なすべきだろう（大西 1998a, pp.487-488; 1998b, p.1）。

いうまでもなく，そうした身振りは，最も根元的な行為としてのジェンダーにほかならない。ゆえに，性別分業への参与は，いまだジェンダーとしての身振りを身につけていない子供達にとって，それらを学び習得する場ともなるのである（大西 1998a, pp.488-489）。

機織りを含む性別分業への参与は，山地民の子供達に，当該社会のジェンダーを付与するひとつの契機となっていた。また，そこで付与されるジェンダーとは，観念的なレベルの性のみならず，行為として表出される身体的なレベルの性にまで跨るものであった。

とはいえ，コルディリエラ山地民の人々のジェンダーは，こうした性別分業への参与のみによって付与されるわけではない。他方では，より強く直接的にジェンダーを付与させる役割を担った言説や儀礼が，山地民社会にも存在している（合田 1989, pp.207-256; San Jose 1981, pp.34-35）。ある場面では，こうした言説や儀礼によって，ジェンダーが強く認識させられる結果，子供達は，異なる性によって担われる労働から離れ，自らの性が担うべき労働に従事することとなる，と捉えることもできるほどだ。

しかしながら，そのような言説や儀礼は，一般に非日常的なものであるのに比べ，性別分業への参与は，はるかに日常的な経験として実践されている。このため，性別分業への参与は，非日常的な言説や儀礼によって付与されたジェンダーを，日常的な生活のなかで相互補完的に付与している，という想定が成り立つ。とともに，逆説的ではあるが，そこでのジェンダーの付与は，強く直接的に言明されることなく経験を通してなされるがゆえに強固なものとなる[20]。さらには，すでにジェンダーが付与された成人にとっても，「女の仕事」が女性によって，「男の仕事」が男性によって，それぞれ維持され実践されている姿を日常的に目にすることは，自らの社会におけるジェンダーを繰り返し確認させられる機会となりうる。

以上から，性別分業として女性によって担われている機織りの伝習と実践は，他の性別分業と同様に，旧来の民俗社会的な状況の下では，山地民社会のジェンダーの再生産に一定の役割を果たしている，ということが了解される。これを是認するならば，旧来の民俗社会的な状況において，機織りが担っていたジェンダーの再生産装置としての役割は，産業化に伴う技術の伝習や実践の変容によって果たされなくなる，という可能性を想起することができるだろう。

具体的には，前述のような旧来の技術伝習が，産業化によって学校教育的な学習システムに変容すると，日常生活における経験一切が排除されることとなり，当然，そこに子供の“手伝い”が介在する余地はなくなる。とすれば，そこでは，自ずとジェンダーを付与する役割は果たしえなくなるだろう。もっとも，それ以前に，産業化は，機織りの「伝習，実践の場」を，空間的にも社会的にも外部から切り離し囲い込んでいた。その結果として，機織りの伝習や実践は，子供の参与のみならず，空間的・社会的外部にいるすべての人々の目に触れることさえなくなっていたのである。

すなわち，産業化によって引き起こされた最大の影響とは，社会の営みのなかに埋め込まれていた機織りの伝習―実践が，その従来の場から切り離され，独自の系のなかで再編成されることによって，そこに参与する人々の布置が大きく変換したことに求められるのである。ここにいたって，機織りが果たしえたジェンダーの再生産は，不可避的に終わり

20) とりわけ，ジェンダーとしての身振りは，一旦身体化されてしまうと，まったく意識されることなく実践され，むしろ当事者にとっては自明のものとなる。さらには，そうした身振りは，もし当事者が意識的に押しとどめようとしても，容易には解消されないほど強固に身体，行為に取り付いてしまっている。

を告げることとなるのだ。したがって，サガダ・ウィービングやサバガン織工組合などの機織りにおいて，旧来的なあり方でのジェンダーの再生産が果たされなくなる，という判断が導かれる。

機織りが担っていたジェンダーの再生産装置としての役割が，産業化によって終わりを告げるという事態は，今後ますます加速してゆくと予想される。また，その影響が波及し，さらなる社会的・文化的変容が引き起こされる可能性を大いに孕んでいる。たとえば，より市場経済に適応した産業化が進み，現金収入を安定的にもたらす「地場産業」となったとき，それまでの性別分業の枠組みが霧散し，男性が積極的に参与してくる事態さえありえないことではない[21]。

もっとも，本稿の議論のみを持って，予言めいた提起を軽々におこなうことは避けるべきであろう。いうまでもなく，社会的実践とは，すべからく社会や文化のわずかな一端でしかなく，むしろ他の様々な社会的・文化的要因を前提として，はじめて成り立つものである。実際，ジェンダーの再生産をおこないえない，サガダ・ウィービングやサバガン織工組合などの織工もまた，現時点ではすべて女性であった。この事実は，いまだ機織りを性別分業として維持，実践させるメカニズムが，機織りによるジェンダーの再生産とは別に，当該社会において働いていることを示唆してあまりあるものといえる。

いっぽう，その逆に，これまで見てきたような産業化が，仮に推進されなかったとしても，機織りによるジェンダーの再生産は，早晩果たされなくなるかもしれない。多方面から「近代化」の影響が波及する今日，コルディリエラにおける山地民の人々もまた，すでに市場経済や学校教育などを実体験し知っているのである。それゆえ，同地域の山地民の人々は，自分達の社会や文化とは異なる――そうではない他の――あり方があることを十分認識しているのだ。そして，その認識の対象には，性別分業として実践される機織りはいうまでもなく，それを支えている自らの社会におけるジェンダーのあり方さえも例外とはなりえないだろう。

とはいえ，ここまでの議論によって，コルディリエラの山地民社会における機織りに対する産業化は，その技術の伝習や実践のみにとどまらず，従来，それが当該社会に果たしていたジェンダーの再生産に少なからぬ影響を及ぼしている，というひとつの解釈が導き出された。このような限定的な成果のみをもって，「開発」や「近代化」に起因する当該社会の人々の認知―行動様式の変化を捉えた，と言明することはいささか勇み足に過ぎるだろう。だが，社会的実践によって再生産される言説や実践の変容を丹念に把握し，検討してゆくことによって，その全容とはいえないまでも一人ひとりの認知―行動様式が，「開発」や「近代化」を契機として転調，変化してゆく動態を，個々人の実践レベルにおいて捉えてゆくことが可能となるのではないだろうか。そのような意味で，本稿は，人間の身体によって担われてきた社会的実践に呼応して，社会や文化が変容してゆく動態の一端を提起しえたといえるだろう。

Ⅳ．変わりゆく技術を巡って

現代社会における技術は，語られる文脈が「伝統」であれ「近代」であれ，さらなる進歩や革新に向けた，絶えざる変容の渦中にある。いや，むしろ，今日われわれが手にしている技術は，ひとつの例外もなく，人類史の

21) もっとも，神話的世界観を別とすれば（Lambrecht 1958, pp.41-42），現在において，性別分業は，それほど当事者達に強固に意識されているわけではない。これは，本文でも指摘したように，直接的に異性の参与を排除するような，厳格な規範や禁忌がないことに由来している，と推察される。

なかで延々と試行錯誤を積み重ねてきた結晶と見なすべきだろう。

ともあれ，そうした技術の変容は，常に，社会や文化に対して何らかの影響を及ぼしてきた，といっても過言ではない。たとえば，情報技術の急速な革新によって，近年普及した携帯電話やインターネットなどが，われわれの生活様式に及ぼした影響は計り知れないものがある。さらには，これら情報技術によって，デジタルディバイドと呼ばれる，これまでになかった新しい社会格差さえ生み出されている。このように，技術は，歴史的・文化的に構築された社会的所産である反面，新たな社会や文化のあり方を構築する要因となりうるのである。もっとも，だからこそ，技術を社会的実践として位置づけることによって，行為者と社会・文化が相互に作用しながら転調，変容してゆく動態を把握しうることが可能となるのだ。

上記のような傾向は，産業革命以降とどまることなく，加速度的に進行している。とりわけ，諸種の開発事業によって，「近代化」が急激に押し進められている地域においては，その影響がより顕著に認められる。それゆえ，そこでの社会，文化に根ざした在地の技術を対象とするならば，自ずと「開発」や「近代化」は不可避な課題となるだろう。というのは，たとえ直接的に影響を被っていなかったとしても，世界大に拡大する市場経済の下に人，モノ，情報などが統合，一元化されるグローバリゼーションが進むなか，まったく変容を免れ維持され続けているとは考え難いからである。逆にもし，変容が一切窺われなかったとしたら，それは決して常態とはいえないのではないだろうか。むしろ，それはそれで，ひとつの課題として，変容が抑制されてきた要因を検討，解明すべきであろう。

ところで，こうした方向性は，現在多方面でなされている「開発」や「近代化」にかかわる議論に，否応なく参画せざるをえなくなる。社会的実践論としての技術研究が，いかなる貢献を果たしうるかは，今後，様々な既存の議論に接合するなかで，その可能性を見極めてゆくべきであろう。ただ，ひとつのビジョンを提示するならば，人々の身体が繰り広げる実践に焦点を当てることによって，従来，言説に偏向したアプローチなどにおいてややもすれば見落とされてきた，当事者の「語り」によっても容易には汲み取れない，身体的に経験された日常世界を捉えることができるのではないだろうか[22]。

もっとも，このような試みは，素朴な経験主義に立ち戻った，いささかナイーブな「言語中心主義」批判に陥る危険性がある。また，従来の言説分析的アプローチが，発話者の生活実践や経験世界を，一概に無視してきたわけでもない（cf. Hall 1996）。だが，そうしたアプローチにおいては，ある「経験」がどのように「語られ」言説に編制されるか，という問いに払われてきた配慮に比して，ある「語り」を紡ぎ出した発話者の背後に控える「経験」を，具体的かつ詳細に解明しようとする関心はどうしても低かったのではないだろうか[23]。無論，こうした指摘は，大局的には，一枚のコインの表裏を別々に捉えたものに過ぎない。それゆえ，社会的実践論は，言説分析的アプローチを否定ないし乗り越えるのではなく，それと相互に補い合うことにこそ最大の意義があるといえる。

市場経済との接合や西欧近代的な価値，制度の導入に起因する，数多くの弊害を目の当たりにし，その反省から現地の社会・文化に

22) こうした提起は，開発論や近代化論というよりも，むしろ社会的実践を対象とする民族誌的研究すべてに対するものとなる。なお，筆者による具体的な試みについては拙稿参照（大西 1998a, pp. 471-473; 1998b, pp.2-4）。

23) 同様な主旨の指摘は，アルトゥーロ・エスコバールに代表される「開発言説分析」に対する批判において提起されている（cf. Grillo 1997; 内山田 1998）。

根ざした「持続的発展」が，開発援助の国際的なキーワードのひとつとなって久しい。だが，どれほど「持続性」を掲げようとも，「開発」や「近代化」とは，そもそも当該社会の変化を前提とした概念，実践にほかならない。結局，そこで目指されている「持続的発展」とは，弊害を可能な限り排した「より良き変容」の言い換えといえる。であるならば，「開発」や「近代化」は，本稿が志向する技術研究にとっても，純粋無垢な研究対象として立ち現れるのではなく，「より良き変容」に顕されるような政治的，倫理的価値基準を不可分に伴うものとして直面せざるをえなくなる。そして，そこでの経験は，社会的実践論としての技術研究を，現代の政治と認識論が交錯する新たな議論のアリーナに導くこととなるだろう。

本稿は，日本民族学会第33回研究大会（1999年５月29日，於東京都立大学）における口頭発表，国立民族学博物館・平成11年度特別共同利用研究員報告書（2000年３月）をもとに大幅に書き改めたものである。また，本稿は，国際交流基金アジアセンター・平成７年度『次世代リーダーフェローシップ』，平成９・10年度文部省科学研究費補助金・特別研究員奨励費の助成に基づく研究成果の一部である。なお，草稿段階においては，総合地球環境学研究所・秋道智彌教授，同志社女子大学・後藤明教授から示唆に富む貴重な御教示を賜った。末筆ながら記して謝意を申し上げる。

追記

脱稿後，産業化以前（1954-55）のサガダにおける機織りについて，「女性達は，他人の機織りを見ることによって機織りを学び，稽古などを受けることはない」と指摘しているW. H. スコットの論攷に触れた（Scott 1988, p.13）。ここから，かつては，本稿で提起したサモキと類似の状況が，サガダにおいても展開されていたことを窺い知ることができた。

参 考 文 献

Barton, R. F. 1949. *The Kalingas: Their Institutions and Custom Law*. University of Chicago Press.

Bello, M. C. 1972. *Kankanay Social Organization and Culture Change*. A Community Development Research Council Publication.

Bourdieu, P. 1977. *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge University Press.

ブルデュー，P. 1988 『実践感覚１』 今村仁司・港道隆／訳　みすず書房（1980 *Le sens Pratique*. Editions de Minuit.）

――― 1991 『構造と実践―ブルデュー自身によるブルデュー―』石崎晴己／訳　藤原書店（1987 *Choses Dites*. Editions de Minuit.）

――― 1993 『資本主義のハビトゥス―アルジェリアの矛盾―』原山哲／訳　藤原書店（1977 *Algérie 60: Structures économiques et structures temporelles*. Editions de Minuit.）

Canol, L. 1981. “Death Rituals among the Benguet Kankanaeys.” *Saint Louis University Research Journal*, 12(1) pp.37-72

Eggan, F. 1941. “Some Aspects of Culture Change in the Northern Philippines.” *American Anthropologist*, 43 (1) pp.11-18

――― 1963. “Cultural Drift and Social Change.” *Current Anthropology*, 4(4) pp.347-355

Grillo, R. D. 1997. “Discourses of Development: The view from anthropology.” *Discourses of Development: Anthropological Perspectives*. R. D. Grillo & R. L. Stirrat (eds.) pp.1-33 Berg.

後藤　明　1997 「実践的問題解決過程としての技術―東部インドネシア・ティドレ地方の土器製作―」『国立民族学博物館研究報告』22(1) pp.125-187

――― 2001 『民族考古学』（情報考古シリーズ３）勉誠出版

合田　濤　1989 『首狩りと言霊―フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観―』弘文堂

――― 1997 『イフガオ―ルソン島山地民の呪詛と変容―』弘文堂
Hall, A. 1996. “Signification, Representation, Ideology.” *Cultural Studies and Communications*. J. Curran, D. Morley & V. Walkerdine (eds.) pp.11-34 Arnold.
福島真人 1995 「序文―身体を社会的に構築する」『身体の構築学―社会的学習過程としての身体技法―』福島真人（編）pp.1-66 ひつじ書房
――― 1997 「構築される身体」『新たな人間の発見』(講座文化人類学１)青木保ほか（編）pp.117-140 岩波書店
川田順造 1992 「身体技法の技術的側面―予備的考察―」『西の風・南の風―文明論の組かえのために―』pp.64-122 河出書房新社
Jenks, A. E. 1970（1905） *The Bontoc Igorot*. Johnson Reprint Corporation.
Lambrecht, F. 1958. “Ifugaw Weaving.” *Folklore Studies*, 17 pp.1-53
Lave, J. 1988. *Cognition in Practice: Mind, Mathematics and Culture in Everyday Life*. Cambridge University Press.（1995『日常生活の認知行動―ひとは日常生活でどう計算し，実践するか―』無藤隆ほか／訳 新曜社）
Lave, J. & E. Wenger 1991. *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press.（1995『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―』佐伯胖／訳 産業図書）
Lemonnier, P. 1992. *Elements for an Anthropology of Technology*. Ann Arbor, Michigan.
ルロワ＝グーラン，A.（Leroi-Gourhan, A.） 1973 『身ぶりと言葉』荒木亨／訳 新潮社（1964 *Le Geste et la Parol. Vol.1: Technique et Langage*. Aldin Michel.）
McFarland, C. D. 1980. *A Linguistic Atlas of the Philippines*. Study of Languages and Cultures of Asia & Africa Monograph Series No. 15. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa
モース，M.（Mauss, M.） 1976 「身体技法」『社会学と人類学Ⅱ』 有地亨・山口利夫／訳 pp.121-156 弘文堂(1936 “Les Techniques du Corps.” *Sociologie et Anthropologie*. Presses Universitaires de France.)
NCSO 1979. *Realistic Anthropological Studies*. NCSO.
大西秀之 1998a 「土器製作者の誕生―カンカナイ社会における技術の伝習と実践―」『民族学研究』62(4) pp.470-493
――― 1998b 「ルソン島北部・カンカナイ社会において形作られた土器製作者の身体」『物質文化』64 pp.1-28
Pfaffenberger, B. 1992. “Social Anthropology of Technology.” *Annual Review of Anthropology*, 21 pp.491-516
San Jose, R. Y. 1981. “*Daddad-at*: Some Notes on Kankanay Folktales.” *Saint Louis University Research Journal*, 12(1) pp.29-36
Scott, W. H. 1974. *The Discovery of the Igorots: Spanish Contacts with the Pagans of Northern Luzon*. Revised Edition.
――― 1988. *A Sagada Reader*. New Day Publishers.
――― 1994. *Barangay: Sixteenth-Century Philippines Culture and Society*. Ateneo de Manila University Press.
Sigaut, F. 1994. “Technology.” *Companion Encyclopedia of Anthropology: Humanity, Culture and Social Life*. Ingold, T. (ed.), pp.420-459 Routledge.
Schiffer, M. B. & J. M. Skibo 1987. “Theory and Experiment in the Study of Technological Change.” *Current Anthropology*, 28(5) pp.595-622
田辺繁治 1989 「民族誌記述におけるイデオロギーとプラクティス 」『人類学的認識の冒険―イデオロギーとプラクティス―』田辺繁治（編）pp.95-119 同文舘
――― 2002 「再帰的人類学における実践の概念―ブルデューのハビトゥスをめぐり，その彼方へ―」『国立民族学博物館研究報告』26(4) pp.533-573
内山田康 1998 「文化と開発」『文化と開発―枠組みを検討する―』内山田康（編）pp.11-14 財団法人国際開発高等教育機構
吉本 忍 1995 「日本とその周辺地域における機織り文化の基層と展開」『生活技術の人類学』吉田集而（編）pp.258-283 平凡社
渡植彦太郎 1987 『技術が労働をこわす―技能の復権―』農山魚村文化協会

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【Source Materials and Remarks】

A Talubin Text with Wordlist and Grammatical Notes

Kikusawa, Ritsuko
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Reid, Lawrence A.*
University of Hawai'i

This is a transcription of a story told in Talubin, a small town in the south of Bontoc, the capital of Mountain Province in the Northern Philippines. Some grammatical notes and a wordlist compiled from the text are also provided.

1. Introduction
2. Grammatical Notes
3. *Gaeb Ji Amuluk* 'Ritual Prayer for Newly-weds'
4. Wordlist

1. Introduction

Talubin is one of the Southern Bontok group of closely related languages which are part of the Central Cordilleran subgroup of languages spoken in the north of Luzon in the Philippines. The text presented in this paper was narrated by Agwaking, a 67 year old resident of Talubin, one of the barangays of Bontoc municipality which is located about thirty kilometers south of Bontoc town on the road which leads to Banaue, Ifugao. The text was recorded and originally transcribed by Miream Katamen, a 21 year old college graduate, from Talubin.

1.1. The Amulu Ritual Prayer-story

This story is a version of the common catastrophic flood event that is found throughout Southeast Asia and other parts of the world. Although given here in narrative form, it was traditionally recited with ritual intonation in the context of animal sacrifices associated with a wedding. These ritual prayer-stories are referred to as *gaeb* in Talubin and other Bontok-speaking communities, and as *kapya* in others. The ritual of /ʔamúlu/ was part of the traditional repertoire of old men throughout the Bontoc area who recited prayer-stories, but has died out in many places in recent years. It is still recited in traditional wedding ceremonies in Guinaang, Bontoc. The original sense of the term appears to have been "peace" or "harmony" (see sentences 143-146 in the text), and the ritual was performed to ensure harmony between the marrying couple.

Keywords: Philippine language, Talubin, text, grammatical notes, wordlist

* Visiting Professor ILCAA (September 1991-August 1992, September 1998-August 1999)

The text as presented in this paper has been edited considerably, to eliminate most of the hesitations and false starts, and to achieve consistency in orthographic representation.

1.2. Phonology and Orthography

Talubin is not commonly written by native speakers. Those that do are educated in English and are familiar also with at least Ilokano and Tagalog, and adapt the spelling practices of these latter languages to their own. The orthography used here is an attempt to alleviate some of the problems with these practices. These problems relate mainly to the representation of epsilon [ɛ] and schwa [ə], and of /o/ and /u/.

Epsilon [ɛ] is a lowered allophone of /i/, and developed also from monophthongization of the sequence *ay. It contrasts with schwa [ə]. Native speakers represent both sounds as e. Here we represent the former with é, and the latter as e.

The phonemic contrast between /o/ and /u/ is not commonly found in other Bontok speech communities, and has apparently developed as the result of several historical sound changes. Thus, 1) the reconstructed sequences *al, *ul, *el, *ew, *aw > /o/, e.g. *ʔálʔu > Talubin /ʔóʔu/ 'pestle', *bákal > /váko/ 'headhunting', *sáʔal > /háʔo/ 'return home', *ʔádal > /ʔájo/ 'body', *nalpas > /nópah/ 'finished', *ʔiyálʔan > /ʔiyóʔan/ 'get for'; *dapúl > /japó/ 'ashes'; *dáʔul > /jáʔo/ 'underneath'; *séldaŋ > /hójaŋ/ 'stage of rice development'; *téwʔan > /tóʔan/ 'not know'; *ʔáwni > /ʔóni/ 'later'; *ʔipugáw > *ʔipugó 'person'; and 2) in a few cases, *e (schwa) has undergone an irregular change to /o/, e.g., *deʔéy > /joʔóy/ 'there', and *demáng > jománg 'other side of a mountain'.

In Ilokano and Tagalog, o typically represents any back vowel phoneme in ultimate syllables, while u represents any back vowel phoneme in other than ultimate syllables. This convention completely obscures the phonemic contrasts in Talubin, and is here rejected in favor of a true phonemic representation for these vowels. It is hoped that the system used here will become an accepted local orthography.

The orthography proposed here is as follows: a, b, d, e (schwa), é (epsilon), g, h, i, j, k, l, m, n, ng (velar nasal), o, p, s, t, u, v, w, y, - (glottal stop). The consonant pairs b/v and d/j appear to have originally been allophonic variants, with the latter member of each pair appearing only before vowels, while the former never did. With the introduction of a number of unassimilated Ilokano loan words with voiced stop consonants preceding vowels, each of the sounds now appears to be phonemically distinct.

Glottal stop is represented only when it occurs as the second member of a consonant cluster. At the beginning of a word and between sequences of vowels it is not represented, following the traditional orthographic conventions of Filipino/Tagalog, the national language of the Philippines.

Stress with accompanying vowel length in open penultimate syllables is phonemic in Talubin, but is not marked in the orthography.

Some grammatical notes based on the text are presented in Section 2, followed by

the text in Section 3. A wordlist based on the text is provided in Section 4.

2. Grammatical Notes

Some grammatical aspects observed in the text are described in this section. The number in parentheses at the end of each example corresponds to the sentence number in the text transcribed in Section 3.

2.1. Basic Sentence Structures

2.1.1. Verbal Clauses

Verbs can be analyzed as either intransitive or transitive. Intransitive verbs can be classified into two classes, depending on whether they require a single Nominative noun phrase which is semantically either an actor or an undergoer, or two core noun phrases, namely, a Nominative phrase (expressing the actor) and either a Locative or a Dative phrase (expressing the undergoer). A transitive verb requires a Genitive[1] noun phrase (expressing the actor), and a Nominative noun phrase (expressing the undergoer). This is schematically shown in (1). (A list of abbreviations is provided at the end of this paper.)

(1) Basic sentence structures (verbal clauses)

a.	V	NOM		(LOC)
	–TRNS	actor/undergoer		
b.	V	NOM	LOC/DAT	(LOC)
	–TRNS	actor	undergoer	
c.	V	GEN	NOM	(LOC)
	+TRNS	actor	undergoer	

2.1.1.1. Verbal sentences with pronominal arguments

When the core arguments, or the underlined elements in (1), are expressed pronominally, they occur as clitic pronouns[2] attached to the verb. A Nominative clitic pronoun indicating the actor may occur on an intransitive verb, as shown in (2).

1) The term "Genitive" is used instead of "Ergative", because the forms of the pronouns for the case marking of the actor of a transitive verb and the possessor of a noun phrase are identical.

2) See Table 1 in 2.2 for the forms of the clitic pronouns.

(2) Intransitive sentences with pronominal arguments[3]

a. *humaokayuk...* (3)
huma?o =kayuk[4]
go.home=2PLNOM
–TRNS
'you (pl.) go home, and...'

b. *Mangankami ké.* (10)
maŋan=kami ké
eat =1PLNOM MOD
–TRNS
'We (excl.) will eat now.'

A Genitive clitic pronoun indicating the actor may occur on the transitive verb as in (3).

(3) Transitive sentences with pronominal arguments

a. *ta issayu niyu vutug* (52)
ta ?issa=yu ni=yu vutug...
so.that eat.meat=2PLGEN POSS=2PLGEN pig
+TRNS=actor undergoer
'so that you (pl.) eat your (pl.) pig, ...'

b. ... *é ajimi ammuk, ...*[5] (5)
é ?aji=mi ammuk
LIG not=1PLGEN know
AUX +TRNS
'(a person) whom we (excl.) don't know'

When the undergoer is expressed pronominally, the Nominative clitic pronoun may occur following the Genitive clitic pronoun as in (4).

3) In example sentences, the first line indicates a sentence using the proposed local orthography, while the second line shows its phonemic and morphological interpretations.
4) *-k* typically occurs phrase final when the phrase ends with a non-low vowel.
5) When the verb is preceded by an auxiliary verb, the clitic pronoun is "attracted" to the auxiliary verb.

(4) Transitive sentence with two clitic pronouns

a. ... *nu innissajaka, ...* (52)
nu ʔinissa =ja =ka, ...
if ate.meat=3PL(GEN)[6]=2SGNOM
+TRNS =actor =undergoer
'...if they (wild animals) ate you (sg.)...'

Dative and locative phrases are expressed by a sequence of a preposition and a following independent pronoun.

(5) Pronoun occurring in dative phrases

a. ...*nijakpuh eh han janum ken jija* (20)
nijakpuh ʔeh han janum ken jija
reached also DET(NOM) water DAT IND3PL
–TRNS
'...the water reached them also'

b. ...*miid ha* ken *jakamik.* (9)
miʔid ha ken jakamik
not.exist that(NOM) DAT IND1PL
–TRNS
'...that (person) is not among us (excl.).'

2.1.1.2. Verbal sentences with non-pronominal arguments

The Nominative and Genitive marking on non-pronominal core arguments is not as morphologically distinct as that on pronominal ones.[7] Their cases (indicated in parentheses) are determined by their possible alternation with pronominal forms. No distinct case-marking form occurs in the Nominative phrase of intransitive sentence (6a), nor in the Nominative phrase of transitive sentence (6b). Neither is the Genitive noun phrase of transitive sentence (6c) distinctively case-marked. These contrast with the Locative and Dative phrases, such as (6d), where each phrase is distinctively marked by a preposition.

(6) Basic sentence structures with non-pronominal arguments

a. *nginmetŋget han néy batawa.* (13)
ŋinmetŋet han néy batawa
became.dark DET(NOM) this sky
–TRNS
'The sky became dark.'

6) In the gloss, a case is indicated in parentheses when it is not morphologically distinct from that of another case, but is clear from the context and by alternation with other forms in the same position which do maintain a formal case distinction.

7) See 2.2.3 for more about Genitive marking on non-pronominal nouns.

b. *Agtana* *han* *iyAp-apuy* *hi* *apuy* *met.* (48)
ʔagtan=na han *ʔyapʔapuy* hi ʔapuy met
give.to=3sgGen det(Nom) *Ap-apuy*.person Loc fire also
+trns
'He also gave some fire to the Ap-apuy person.'

c. *Kanan* *kanu* *han* *ji* *ja* *hin-agik,* *woh,* (10)
kanan kanu han ji ja hinʔagi woh
say report det(Gen) that pl pair.sibling quot
+trns
'The two siblings said, that, ...'

d. *umeyjat,* *initikidjad* *han* *hana* *jallan.* (12)
ʔumey=ja=et ʔinitikid=ja =d han hana jallan
go=3pl(Nom)=seq climb=3pl(Nom)=Loc det that trail
−trns −trns
'They went, and they climbed up that trail.'

2.1.2. Non-verbal Clauses

A sentence may have a nominal or a prepositional predicate, instead of a verbal predicate. Example sentences are presented in (7).

(7) Non-verbal clauses

a. *Happang,* *ngantu* *keh?* (33)
happaŋ ŋantu keh
happang what also
+topic +prdc
'As for "*happang*", what (is it)?'

b. *Vaken* *nah* *imi* *vumableyan.* (84)
vaken na=h ʔi=mi vumableyan
not this=Loc our place.to.make.house
+prdc
'This is not a place to make our (excl.) house.'

c. *Hi* *tud-i* *na* *las?* (158)
hi tudʔi na las
Loc this.one its end
+prdc
'Is that the end of it?'

2.1.3. Topicalization ("fronting")

A noun phrase, both of verbal and non-verbal clauses, may be topicalized by appearing in the clause-initial position. In (7a) in the previous section, a noun in a non-verbal sentence is topicalized by fronting. Example (8) provides a verbal sentence where the Nominative noun phrase is topicalized.

(8) Verbal clause with a topicalized noun phrase

Giyag,	*aja*		*ipakud,*	*jaja*		*alan.*	(132)
giyag	ʔa	=ja	ʔipakud	ja	=ja	ʔalan	
rice.plate	get	=3PL(GEN)	grab	CONT	=3PL(GEN)	get	
+TOPIC	AUX		+TRNS	AUX		+TRNS	

'As for rice plates, they were grabbing and getting (them).'

2.2. Pronouns and Casemarking Forms

2.2.1. Pronouns

2.2.1.1. Personal pronouns

Two sets of clitic personal pronouns, a Genitive set and a Nominative set, are observed in Talubin. Table 1 shows the forms of these clitic pronouns.

Table 1: Clitic Personal Pronouns

	1	1+2	2	3
SG.GEN	*=k*,[8] *=ku*	*=ta*	*=m*,[8] *=mu*	*=na*
SG.NOM	*=ak*		*=ka*	Ø
PL.GEN	*=mi*	*=taku*	*=yu*	*=ja*
PL.NOM	*=kami*		*=kayu*	

1+2SG means the speaker and the hearer only (sometimes referred to as "first person inclusive dual"), while 1+2PL means the speaker and the hearer and more (sometimes referred to as "first person inclusive plural"). The singular versus plural contrast is observed in all persons, while the Genitive and Nominative forms are not distinct in 1+2 and 3PL as can be seen in the table.

The "clitic pronouns" are named as such, rather than as agreement markers, because they do not obligatorily co-occur with co-referential full noun phrases. However, there are many cases where a plural pronominal form appears in fact to be an agreement marker. One such example is given in (9), where the third person plural clitic pronoun *=ja* co-occurs with a noun phrase *han hin-agik* that specifies its content.

8) The short forms, *=k* (GEN1SG) and *=m* (GEN2SG), occur when they follow a word ending with a vowel. They also replace the final nasal of the verb endings *-en* and *-an*. The long forms *=ku* and *=mu* occur elsewhere.

(9) Clitic pronoun functioning as an "agreement marker"

himaoja	*han*	*hin-agi*k, ...	(5)
hima?o=ja	han	hin?agik	
went.home=3PL(NOM)	DET	pair.siblings	
–TRNS			

'...the two siblings went home.'

In addition to the clitic pronouns, some independent pronoun forms, such as *jakami* '1PL', *hiya* '3SG', and *jija* '3PL', occur also in the text. These independent pronouns occur in prepositional phrases, as *jija* in (10), and in predicate noun phrases, as *hiya* in (11).

(10) Independent pronoun occurring in a prepositional phrase

...*nijakpuh*	*eh*	*han*	*janum*	*ken*	*jija*	(20)
nijakpuh	?eh	han	janum	ken	jija	
reached	also	DET(NOM)	water	DAT	IND3PL	
–TRNS						

'...the water reached them also'

(11) Independent pronoun occurring in a predicate noun phrase

té	*hiya*	*met*	*ija*	*kanan*	(89)
té	hiya	met	?i=ja	kanan	
because	IND3SG	also	theirs	say	
	+PRDC				

'because it's also what they say'

2.2.1.2. Demonstrative Forms

Demonstrative forms show a three way contrast distinguishing the following: near the speaker, near the hearer, and away from both. The demonstrative forms are shown in Table 2. The forms occurring in the same cell are free variants.

Table 2: Demonstrative Forms

	near the spearker	near the hearer	away from both
Demonstrative nouns (Set I)	'this one' *na*	'that one' *ha*	'that one' *ji*
Demonstrative nouns (Set II)	'this' *na?ay* *nay* *néy* *né*	'that' *hana*	'that' *jo?oy* *jey*
Demonstrative Locative pronouns	'here' *hin?a* *hina*	'there' *hih?a* *hiha*	'there' *hid?i*

A demonstrative form in Set I may occur by itself, for example as the sole exponent of a Nominative noun phrase, as in (12a). It may also follow a preposition, as in (12b).

(12) Demonstrative pronoun (Set I)

a. *Iyu* *élan* *ji. ...* (80)
ʔiyu ʔélan ji
go=2plGen see that.one
+trns
'Go to see that (place) ...'

b. *...ja* *umaléh* *na.* (16)
ja umali =ah na
cont come =Loc this.one
–trns
'it continued to come to this (place)'

A form in Set II usually occurs followed by another noun as in (13)[9].

(13) Demonstrative pronoun (Set II)

...nahnab *han* *nay* *ilik* (18)
nahnab han nay ʔilik
flooded det(Nom) this village
–trns
'...this village was flooded.'

The demonstrative locative pronoun forms a locative phrase by itself, as *hin-a* in (14).

(14) Demonstrative locative noun

Inmalit *hin-a* *han* *janum.* (19)
ʔinmali=t hinʔa han janum
came=seq here det(Nom) water
–trns
'The water reached here.'

Plural is marked with the form *ja* following the demonstrative pronouns, for example, *naʔay ja* 'these', *hana ja* 'those (near the hearer)', and *ji ja* 'those (away from both)'.

9) Except in a phrase expressing 'because of this, at this point', where a form in Set II occurs by itself following *té*, or *téy*.

2.2.2. Determiners

The forms of determiners are presented in Table 3. There are personal and non-personal determiners, the former occurring preceding personal nouns while the latter precede non-personal nouns. Personal determiners are either non-plural or plural, while non-personal determiners are either definite or non-definite.

Table 3: Determiners

+PRSN		−PRSN	
		+DEF	−DEF
−PL	*hi*	*han*	*ji*
	=h	*=n*	
+PL	*ja*	*nan*	
		na	

Singular personal determiners have two forms, a free form *hi* as in (15) and a clitic form *=h*, which occurs when the preceding word ends with a vowel, as in (16). An example with a plural personal determiner is provided in (17). Personal determiners occur before proper names and kinship terms. The singular personal determiner (*hi* ~ *=h*) occur only in Nominative, Predicative and Topic noun phrases. They do not occur before proper nouns or kinship terms which are in Genitive or Dative noun phrases (see examples (23a) and (25) respectively).

(15) Personal determiner *hi*

Linmauh	*hi*	*Lumawig.*	(2)
linmaʔuh	hi	lumawig	
passed.by	+PRSN.−PL(NOM)	Lumawig	
−TRNS			

'Lumawig passed by.'

(16) Personal determiner *=h*

Di	*inanijuwanah*			*kavavaiyana.*		(54)
di	ʔinanijuwan	=na	=h	kavavaʔiyan	=na	
	make.fire.for	=3SGGEN=+PRSN.−PL(NOM)		sister	=3SGGEN	
	+TRNS					

'So he made a fire for his sister.'

(17) Plural personal determiner *ja*

ken	*ja*	*amaja*		(8)
ken	ja	ʔama	=ja	
LOC	+PRSN.+PL	father	=3PL(GEN)	

'to their parents'

Non-personal determiners have several variants. Among these, it is known from other dialects of Bontok that *han* and *nan* were distinct in earlier stages of the language, but now appear to have lost their distinctions in Talubin. The form *na* sometimes occurs before glottal stop initial forms, as in (18b).[10)]

(18) Determiners *nan* and *na*

a. *nan yayah* 'locust' (95)
nan yayah

b. *na anak* 'child' (109)
na ʔanak

The forms *han* and *=n* appear to be stylistic variants, with *=n* sometimes occurring when the preceding form ends in a vowel, as can be seen in (19a), (19b) and (19c).

(19) Alternation between determiners *han* and *=n*

a. *...jaet* *umali* *han* *janum.* (15)
ja?et ʔumali han janum
then=SEQ come –PRSN.DEF(NOM) water
–TRNS
'Then the rain came.'

b. *Mavalin* *é* *umalin* *janum.* (14)
mavalin é ʔumali=n janum
probable that come=–PRSN.DEF(NOM) water
–TRNS
'Then the rain came.'

c. *Henagenjan* *hilé.* (56)
henagen=ja =n hilé
send =3PL(GEN)=DET(NOM)
+TRNS
'They sent the wild cat.'

The indefinite Determiner *ji* is homophonous with the Demonstrative *ji* 'that, away from speaker and hearer'. The former can occur in Genitive noun phrases and requires a generic interpretation of the following noun, as in (20a), (20b) and (20c). The latter does not occur in Genitive noun phrases, and always has a definite, demonstrative sense.

10) Such forms do not have the glottal stop represented in the text. They appear as though the first vowel is the initial segment.

(20) Indefinite Genitive Determiner *ji*

a. *gaeb* *ji* *amuluk* (Title)
ga?eb ji ʔamuluk
ritual of newly-wed
DET(GEN).-DEF
'ritual for newly-weds'

b. *atutung* *ji* *vutug* (137)
ʔatutuŋ ji vutug
feeding.bowl of pig
DET(GEN).-DEF
'pig-feeding bowls'

c. *hunghung* *ji* *vutug* (102)
huŋhuŋ ji vutug
smell of pig
DET(GEN).-DEF
'the smell of pigs'

Example (21) shows both forms occurring in the same sentence. The Demonstrative (ji_1) occurs in the Nominative noun phrase (coreferential with the third person plural pronoun which is attached to the initial Auxiliary. The indefinite Determiner (ji_2), introduces the Genitive noun phrase which follows the noun *am-in* 'all'.

(21) Demonstrative *ji* and Indefinite Genitive Determiner *ji*

gehja	*nalmeh*	*ji*	*am-in*	*ji*	*kangunun*	*ya.*	(121)
geh=ja	nalmeh	ji_1	ʔamʔin	ji_2	kaŋunun	ya	
although=3PL	drowned	that	all	of	everything	INTENS	
AUX		(NOM)		DET(GEN).-DEF			

'..even though everything (else) there was drowned.'

2.2.3. Prepositions

Prepositions include those that mark Genitive, Dative and Locative. These forms are listed in Table 4.

Table 4: Prepositions

	PRSN	non-PRSN
Gen	*=n*	
Dat	*ken*	–
Loc	*ah ken*	*ah~hi~=h ad*

The Genitive marking preposition *=n* only occurs when the preceding word ends with a vowel. There is no Genitive preposition when the preceding word ends in a consonant. Genitive forms mark the possessor of a noun as in (22a), or the agent of a transitive verb as in (23a). Examples (22b) and (23b) show sentences where the form *=n* does not appear.

(22) =*n* Genitive preposition (and its absence) marking possession

a. *ilin han iBayyuk* (98)
ʔili =n han ʔibayyuk
village=Gen det Bayyew.people
'a village of the Bayyew people'

b. *hunghung ji vutug* (102)
huŋhuŋ ji vutug
smell of pig
Det(Gen).-def
'the smell of pigs'

(23) =*n* Genitive preposition (and its absence) marking agents

a. *Inanukan Lumawig, ...*
ʔinanuka=n lumawig
arranged=Gen Lumawig
+trns
'Lumawig arranged (it).'

b. *Kanan han jooy taga-Ap-apuy woh, ...* (40)
kanan han joʔoy tagaʔapʔapuy woh
say det(Gen) that Ap-apuy person quot
+trns
'That Ap-apuy person said...'

There are some instances where the Genitive preposition *=n* does not appear

although the preceding word ends with the vowel /o/. In such cases, the preceding word is known to have ended with the consonant /l/ at an earlier stage of the language, as in *jao* (<*da?ul) *han kaiw* 'underneath of the tree' (text 30).

The marking of Dative and Locative differs depending whether the following noun is personal or non-personal. Examples are shown in (24) through (26).

(24) Personal Dative phrases

a.	*ken Lumawig*	'to (a person called) Lumawig' (96)
b.	*ken ja amaja*	'to their parents' (5)
c.	*ken jija*	'to them' (20)

(25) Personal Locative phrase

Inhublijah			*ken*	*Lumawig.*	(85)
?inhubli	=ja	=h	ken	Lumawig	
return	=3PL	=LOC	DAT.PRSN	Lumawig	
–TRNS					

'They returned to Lumawig's (place).'

(26) Non-personal Locative phrases

a.	*ad Palanjey*	'to (a place called) Palanjey' (15)
b.	*ad Ap-apuy*	'from Ap-apuy' (38)
c.	*=h Kalawwitan*	'to Kalawwitan' (20)

2.3. Possessive Expressions

When a possessor is expressed by a pronoun, there are three possible structures in Talubin. One is found when the Genitive clitic pronoun occurs as a clitic following the noun that expresses the possessee, as shown in examples (27). The other is found when an independent possessive pronoun precedes the noun that expresses the possessee. An independent possessive pronoun appears in the text in two forms. It consists of a Genitive clitic pronoun expressing the person and number of the possessor attached to a form, either *ni* or *i*[11], which functions as its carrier, as in (28a) and (28b). The third structure has a Genitive pronoun occurring without a preceding nominal base, and cliticized to the noun which follows it, as in (29a) and (29b). These forms appear to be in free alternation, and probably represent ongoing stages of a process of syntactic change.

11) In other elicited material, other forms, such as *ne* and *nu* also function as carriers of Genitive clitic pronouns.

(27) Enclitic possessive pronouns (I)

a. *amayu* 'your (pl.) father' (3)
?ama=yu
father=2plGen

b. *kalalakiyana* 'her brother' (55)
kalalakiyan=na
brother=3sgGen

(28) Independent possessive pronouns (II)

a. *niyu* *vutug* 'your (pl.) pig' (3)
ni=yu vutug (Lit. your (pl.) thing, a pig)
your (pl.) pig

b. *ina* *ajo* 'his body' (6)
?i=yu ?ajo (Lit. his thing, a body)
his body

(29) Proclitic possessive pronouns (III)

a. *na* *hiki* 'its feet' (73)
na= hiki (Lit. its thing, feet)
its feet

b. *itaku* *élan* *yu* *minvavleyan.* (75)
?i=taku ?ilan yu= minvavleyan
go=1+2pl see your.pl villagers
'Let's go see your (pl.) fellow-villagers.'

The ways that a non-pronominal possessor is expressed have been briefly described in 2.2.3.

2.4. Verb Formatives

The data are not sufficient to provide a clear description of verbal morphology, though some derivational relationships are observed as can be seen in the wordlist in Section 4. A detailed description will appear in a future publication.

3. *Gaeb Ji Amuluk* 'Ritual Prayer for Newly-weds'

The text is presented in three lines. The first line presents a sentence written in the local orthography. The second line provides word-for-word glosses. The third line, where necessary, provides analyzed forms in phonemic transcription, to enable easy

cross-referencing to the wordlist.[12)]

Symbols (A) and (M) at the beginning of sentences indicate speakers, Agwaking and Miream Katamen respectively.

1. (A)

Istulyaek	*han*	*hin-agik,*	*hin-agi*	*é*	*minvakvako*
story=1sgGen	DET	pair.sibling	pair.sibling	LIG	go.headhunting
(ʔistulyaʔen, =k)		(hinʔagi, -k)		(=é)	

ad	*Jawwang.*
Loc	Jawwang

'I will tell the story of the two siblings, the two siblings who went headhunting at Jawwang[13)] River.'

2.

Linmauh	*hi*	*Lumawig.*
passed.by	DET	Lumawig

'Lumawig passed by.'

3.

Kanana	*en,*	"*Humaokayuk,*
say=3sgGen	QUOT	go.home=2plNom
(kanan, =na)		(humaʔo, =kayu, -k)

ta	*kananyu*	*ken*	*ja*	*amayu*	*ya*	*hi*
so.that	say=2plGen	Dat.prsn	pl.prsn	father=2plGen	and	sg.prsn
	(kanan, =yu)			(ʔama, =yu)		

inayu	*ta*	*issayu*	*niyu*	*vutug,*	*issayu*	*niyu*
mother=2plGen	so.that	eat.meat=2plGen	your.pl	pig	eat.meat=2plGen	your.pl
(ʔina, =yu)		(ʔissa, =yu)	(ni_2, =yu)		(ʔissa, =yu)	(ni_2, =yu)

manuk,	*kanenyu*	*niyu*	*pagey,*	*tét*	*umeyak*	*ad*	*Lagud,*
chicken	eat=2plGen	your.pl	rice	because	go=1sgNom	Loc	Lagud
	(kanen, =yu)	(ni_2, =yu)			(ʔumey, =ak)		

ék	*venngen*	*han*	*janum*	*é*	*miyahyabja*
go=1sgGen	pack.terrace	DET	water	LIG	be.recipient=3pl
($ʔi_1$, =k)	(veneŋ, =en)			(=é)	(miyahyab, =ja)

12) See 1.2 for a description of the orthography.

13) The form *jawwang* means 'river (in general)', but it is also the name of the river at Talubin.

han	*katagutaguk*."	
DET	all.person	
	(katagutagu, -k)	

'He said, "Go home, and tell your (pl.) father and mother to eat your (pl.) pig, eat your (pl.) chicken, and eat your (pl.) rice, because I am going to Lagud, I am going to stop the leakage of water, so the people can all be recipients of it."'

4.

Adwan-i	*pé*,	*himaoja*	*han*	*hin-agik*.
now	more.over	went.home=3PL	DET	pair.sibling
		(hima?o, =ja)		(hin?agi, -k)

'Now, the siblings went home.'

5.

Kananja	*ken*	*ja*	*amaja*	*hi*	*inaja*,
say=3PL	DAT.PRSN	PL.PRSN	father=3PL	SG.PRSN	mother=3PL
(kanan, =ja)			(?ama, =ja)		(?ina, =ja)

kananja	*en*,	"*Issataku*	*kanu*	*nitaku*	*vutug*,
say=3PL	QUOT	eat.meat=1+2PL	REPORT	our.INCL.PL	pig
(kanan, =ja)		(?issa, =taku)		(ni_2, =taku)	

té	*waja*	*man*	*han*	*linmauh*	*é*	*aji=mi*	*ammuk*;
because	exist	REL	DET	passed.by	LIG	not=1PLGEN	know
					(=é)	(?aji, =mi)	(?ammu, -k)

nakagkaggawan	*ina*	*mata*,	*nagallagawan*	*ina*	*ajo*."
white	his	eyes	lean	his	body
	($?i_2$, =na)			($?i_2$, =na)	

'They said to their father and mother, they said, "Let's eat our (incl.) pig, because there was someone who passed by who we (excl.) do not know, his eyes were white, and his body was lean."'

6.

(M)	*Ngantu*	*é*	*nakagkaggawan?*
	what	LIG	'nakagkaggawan'

'What's *nakagkaggawan*?'

7.

(A)	*Nakaweng*	*ha*	*et*	*nagammunglan*,	*e*	*nanung-o*,	*wen.*
	hard.working	that	in.addition	strong	HESIT	boney	yes

'That's hard-working and strong, uh, having strong bones, yes.'

8. *Hiya ji han ija kanan, na nakagkaggawan ya nagallagawan,*
IND3SG that DET their say LIG white and lean
(ʔi$_2$, =ja)

té himaojah ken ja amaja.
because went.home=3PL=LOC DAT.PRSN PL.PRSN father=3PLGEN
(himaʔo, =ja, =h$_2$) (ʔama, =ja)
'That is what they said, he was white and lean, because they went home to their father.'

9. *Kananja kanu en, "Toan ha, miid ha ken jakamik."*
say=3PL REPORT QUOT not.known that not.exist that DAT.PRSN IND1PL
(kanan, =ja) (jakami, -k)
'They said, "We don't know that person, he isn't one of us (excl.)."'

10. *Kanan kanu han ji ja hin-agik woh,*
say REPORT DET that PL.PRSN siblings QUOT
(hinʔagi, -k)

"*Mangankami ké.*"
eat=1PLNOM MOD
(maŋan, =kami)
'Those siblings said, "We (excl.) will eat now."'

11. *Manganja han ji hin-agik.*
eat=3PL DET that pair.sibling
(maŋan, =ja) (hinʔagi, -k)
'The brother and sister ate.'

12. *Nangananganja pé a, umeyjat intikidjad*
having.eaten=3PL more.over TAG go=3PL=SEQ climb=3PL=LOC
(naŋanaŋan, =ja) (ʔumey, =ja, =t) (ʔintikid, =ja, =d$_1$)

han hana jallan é umey ad Kallawitan.
DET that trail LIG go LOC Kallawitan
(=é)
'When they had eaten, they went and climbed up that trail that goes to Kallawitan.'

13. *Di inmeyjad Wayya, inhagungja, nginmetnget han néy vatawa.*
then went=3PL=LOC Wayya look.behind=3PL became.dark DET this sky
(ʔinmey, =ja, =d_1) (ʔinhaguŋ, =ja)
'When they got to Wayya, they looked back, the sky had become dark.'

14. "*Mavalin é umalin janum.*"
possible LIG come=DET water
(=é) (ʔumali, =n_2)
'"Probably the rain is coming."'

15. *Di inmeyjad Palanjey, hagungenja, jaet umali han janum.*
then went=3PL=LOC Palanjey look.back=3PL CONT=SEQ come DET water
(ʔinmey, =ja, =d_1) (haguŋen, =ja) (ja_2, =ʔet)
'When the got to Palanjey, they looked back, then the rain came.'

16. *Ja mabneng, ja umaléh na.*
CONT be.flooded CONT coming=LOC this
(ʔumali, =h_2)
'It was getting flooded, it was coming here.'

17. *Ji pé, nijatum, inmeyja ad Giniswang.*
then more.over arrived went.to=3PL LOC Giniswang
(ʔinmey, =ja)
'After that, it (the water) arrived, and they went to Giniswang.'

18. *Élanjat han janum, nahnab han nay ilik.*
see=3PL=SEQ DET water was.flooded DET this village
(ʔilan, =ja, =t) (ʔili, -k)
'They saw the water, it was flooding this village.'

19. *Inmalit hin-a han janum.*
came=SEQ here DET water
(ʔinmali, =t)
'The water had come here.'

20. *Di inmeyjah Kalawwitan, nijakpuh eh han janum*
then went=3PL=LOC Kalawwitan reached also DET water
(ʔinmey, =ja, =h_2)

ken *jija.*
DAT.PRSN IND3PL

'Then they went to Kalawwitan, the water reached them there.'

21. *Wen, inmey eh hid-i han janum.*
yes went also there DET water

'Yes, the water also went there.'

22. *Wajajah ji han kaliggaligga, kagiyagiyag,*
exist=3PL=LOC that DET all.winnowing.baskets all.rice.plates
(waja, =ja, =h_2)

té giyag ad hang-ajum, a?
because 'giyag' LOC long.time.ago Q

'There were many winnowing baskets, rice plates, because [rice plates were called] *giyag* a long time ago, huh?'

23. *Kagiyagiyag, kajuyujuyuk.*
all.rice.places all.soup.bowls

'(There were) many rice plates, many soup bowls.'

24. *Han ji juyu é hukung, tinuktuk.*
DET that 'juyu' LIG be.hollow chipped.out

'That *juyu*, it was hollow, chipped out.'

25. (M) *Mangpéan han e... ?*
put DET HESIT

'What did one put in the (bowl)... ?'

26. (A) *Iggup.*
soup

'Soup.'

27. (M) *Aa.*
uh.huh

'Uh huh.'

28. (A) *Inmeyjah* *jik,* *kanana* *kanuk,*
went=3PL=LOC that say=3SGGEN REPORT
(ʔinmey, =ja, =h_2) (ji_1, -k) (kanan, =na)

"*Inik,* *ajita* *ngen* *kéy* *mahto* *hin-a?"*
EXCL not=1+2SG Q MOD cold here
(ʔini, -k) (ʔaji, =ta)
'When they got there, he said, "Hey, aren't we (dl.) so cold here?"'

29. *Té* *néy* *naamungja* *nan* *kaughaugha*
because this gathered=3PL DET all.deer
(naʔamuŋ, =ja)

ya *kalamalaman* *ya* *kauleuleg* *ya.*
and all.wild.pigs and all.snakes and

'Because all the deer, pigs and snakes had gathered.'

30. *Am-in* *é* *vumanget,* *waja* *am-in* *eh* *hid-ik*
all LIG wild.animal exist all also there
(=é) (hidʔi, -k)

han *ji* *jao* *han* *kaiw.*
DET that underneath DET tree

'All the wild animals, there they all were under the trees.'

31. *Pé* *e* *anukaen* *e...*
more.over HESIT be.what=QUOT HESIT
(anuka, =en)
'Moreover, what's it [hesitation]...'

32. *Kanana* *kanuk* *woh,* "*Ta* *umammaak* *et* *hita* *eh*
say=3SGGEN REPORT QUOT so.that make=1SGNOM SEQ here also
(kanan, =na) (kanu, -k) (ʔumamma, =ak)

happang."
'happang'

'He said, "So I will make a *happang* here."'

33. (M) *Happang, ngantu keh?*
'happang' what also

'What's a *happang*?'

34. (A) *Atag han ji kaiw, e nakagkagga.*
shelf DET that tree HESIT messed.up

'A shelf on the tree, it was all jumbled up (below).'

35. *Inatagnah jik ta waja minhalangan*
made.shelf=3SGGEN=LOC that so.that exist place.to.climb
(ʔinatag, =na, =h_2) (ji_1, -k)

é hin-agik ta mataguwanja.
LIG pair.sibling so.that survive=3PL
(=é) (hinʔagi, -k) (mataguwan, =ja)
'He made a shelf there, so that the brother and sister would have a place to climb up on to, so that they would survive.'

36. *Jikad inmammah nija atag.*
so.then made=LOC their shelf
(ʔinmamma, =h_2) (ni_2, =ja)
'So he made a shelf for them.'

37. *Ninhalangja tet-iwa han hin-agik.*
climb.up=3PL truly DET pair.sibling
(ninhalang, =ja) (hinʔagi, -k)
'The brother and sister truly climbed up.'

38. *Kanana kanuk, "Hin-aka ngalud. kavavaiyan,*
say=3SGGEN REPORT here=2SGNOM surely sister
(kanan, =na) (kanu, -k) (hinʔa, =ka)

ta	*iyak*	*uminap,*	*ta*	*iyak*	*umah*	*apuy*
so.that	go=1SGNOM	hunt	so.that	go=1SGNOM	get=LOC	fire
	(ʔi$_1$, =ak)			(ʔi$_1$, =ak)	(ʔuma, =h$_2$)	

ad	*Ap-apuy*	*hid-ik*	*jomangna.*
LOC	Ap-apuy	there	other.side=3SGGEN
		(hidʔi, -k)	(jomaŋ, =na)

'He said, "You stay here, sister, and I will go looking, so that I will go to get fire from Ap-apuy over there on the other side."'

39. *Di inmey ad Ap-apuy.*
so went LOC Ap-apuy

'So he went to Ap-apuy.'

40. *Kanan han jooy tagaAp-apuy woh,*
say DET that Ap-apuy.person QUOT
(taga-, ʔapʔapuy)

'That Ap-apuy person said, '

41. "*Mid ké ék apuy.*
not.exist MOD my fire
(ʔi$_2$, =k)

'"I don't have any fire.'

42. *Umeykad Vinaley té jey hiya*
go=2SGNOM=LOC Vinaley because that IND3SG
(ʔumey, =ka, =d$_1$)

nan	*kawad-an*	*nan*	*minkunkunniing.*"
DET	existing.place	DET	flickering

'Go to Binaley because that is the place where there is a flickering light."'

43. *Ijuugna*[14] *nina teveb.*
start.paddling.in=3SGGEN his 'teveb'
(ʔijuʔug, =na) (ni$_2$, =na)
'He started out in his *teveb*.'

14) *juʔug*: Uncertain meaning. Suggests sound made by paddling with the hands.

44. *Han* *ji* *ja* *kanan* *teveb,* *han* *ji* *waa* *man*
DET that their say 'teveb' DET that probably MOD

haliyahi *é* *kavvangayan.*
frying.pan LIG huge

'That thing they call *teveb*, it was maybe like a very big frying pan.'

45. *Jaluluh*[15] *inlugan* *hid-ik* *umey* *ad* *Vinaley,*
ride.vehicle there go LOC Vinaley
(hid?i, -k)

han *ji* *anukan* *han* *Vallig.*
DET that what's.it=QUOT DET Vallig
(?anuka, =n_1)
'He rode in that to go to Binaley, that place which is part of Barlig.'

46. *Inmey* *tat-iwan* *jik* *inmah* *apuy.*
went truly there got=LOC fire
(ji_1, -k) (?inma, =h_2)
'He truly went there and got fire.'

47. *Iyalinad* *Ap-apuy.*
come.with=3SGGEN=LOC Ap-apuy
(?iyali, =na, =d_1)
'He brought (it) to Ap-apuy.'

48. *Agtana* *han* *iyAp-apuy* *hi* *apuy* *met,*
give.to=3SGGEN DET Ap-apuy.people LOC fire also
(?agtan, =na) (?i-, ?ap?apuy)

ah *jadluk* *iyeynah* *Kalawwitan* *han* *ji* *ina* *pinakad,*
then surely take.3SGGEN=LOC Kalawwitan DET that his torch
(jadlu, -k) (?iyey, =na, =h_2) ($?i_2$, =na)

he *apuy* *metlaeng* *é* *nakinjo* *ad* *aw-a* *ad* *Vinaley*
HESIT fire just.the.same LIG thing.begged.for LOC probably LOC Vinaley

15) Uncertain meaning.

ké *inmey* *ad* *Kalawwitan.*
MOD went LOC Kalawwitan

'He gave some fire to the Ap-apuy people, then he surely took his torch to Kalawwitan, uh, fire that he had just begged for at Binaley he took to Kalawwitan.'

49. *Kanan* *kanu* *han* *jey,* *e...*
say REPORT DET that HESIT

'That person said, uh...'

50. *Kanan* *kanu* *kalalakiyan,* *"Hik-a* *keh* *kavavaiyan,*
say REPORT brother IND2SG also sister

wajaka?"
exist=2SGNOM
(waja, =ka)
'The brother said, "You, sister, are you there?"

51. *Woh,* *"Naiyak* *pé."*
QUOT here=1SGNOM more.over
(naʔay, =ak)
'(She said), "I'm still here."'

52. *"Inik,* *kanaken* *nu* *inissajaka,* *ngantu* *té* *né*
EXCL say=1SGGEN=QUOT if eaten=3PL=2SGNOM what because this
+TRNS −TRNS
(kanan, =k, =en) (ʔinissa, =ja, =ka)

é *hinmalaktinja* *am-in* *hin-a* *nan* *vumanget."*
LIG came.close=3PL all here DET wild.animals
(=é) (hinmalaktin, =ja)

'"Oh, I wondered if you had been eaten, because all these wild animals have been approaching."'

53. *"Naiyak* *met."*
here=1SGNOM also
(naʔay, =ak)
'"I'm here though."'

54. *Di* *inanijuwanah* *kavavaiyana.*
so make.fire.for=3sgGen=sg.prsn sister=3sgGen
(ʔinanijuwan, =na, =h_1) (kavava?iyan, =na)
'So he made a fire to warm his sister.'

55. *Maoni* *pé* *ya* *kanana* *kanuk,*
later moreover and say=3sgGen report
(kanan, =na) (kanu, –k)

kanan *kanu* *kalalakiyana,* *"Inpahnagta."*
say report brother=3sgGen send.out=1+2sg
(kalalakiyan, =na) (ʔinpahnag, =ta)
'After a while he said, her brother said, "Let us (dl.) send out (a messenger)."'

56. *Henagenjan* *hilé.*
send=3pl=det wild.cat
(henagen, =ja, =n_2)
'They sent the wild cat.'

57. *Han* *jey* *ey* *hilé,* *é* *ina* *kanu* *guwangen* *han* *janum.*
det that lig wild.cat lig go=3sgGen report open det water
(=ey) (=é) (ʔi_1, =na)
'That wild cat, it was to go open a channel for the water to pass out through.'

58. *Ajin* *makaguwang.*
not=lig able.to.open
(ʔaji, =n_4)
'It was unable to open (a water channel).'

59. *Henagenja* *han* *e* *anukan* *vaniyah.*
send=3pl det hesit what's.it=quot lizard
(henagen, =ja) (ʔanuka, =n_1)
'They sent the monitor lizard.

60. *Ajin* *kay* *et* *makaguwang* *di.*
not able.to.open that.one
(ʔaji, =n_4)
'It wasn't able to open a water channel either.'

61. *Henagena* *han* *ji* *agahhél* *jakumuk.*
send=3sgGen det that crab k.o.crab
(henagen, =na)
'He sent that *jakumuk* crab.'

62. *Inmey* *han* *ji* *jakumuk.*
went det that k.o.crab

'The crab went.'

63. *Inmey* *kanuk,* *ina* *inipit* *han* *ji* *ja* *kapalépalén*
went report go=3sgGen pinched det that pl all.drift.wood
(ʔinmey) (kanu, -k) (ʔi$_1$, =na) (ʔinipit)

é *waa* *hiya* *nin* *namulet-an* *hi* *janum.*
lig probably ind3sg det blockage Loc water
(=é)
'It went, it is said, it went to pinch those piles of driftwood which were probably what was blocking the water.'

64. *Jana* *kanu* *ninpalakwinen.*
cont=3sgGen report push.aside
(ja$_2$, =na)
'Then he just pushed it aside.'

65. *Adwan-ik,* *matjuk* *et* *han* *lugyan* *han* *janum*
now subside seq det source det water
(ʔadwanʔi, -k) (=et)

é *matjuk.*
lig subside

'Now, the source of the water subsided, it subsided.

66. *Di* *natjuk* *han* *janum,* *henagena* *han* *wawak.*
when subsided det water send=3sgGen det crow
(henagen, =na)
'When the water had subsided, he sent the crow.'

67. "*Um-ilan ah nu tet-iwa é natjuk han janum.*"
go.see Q if truly LIG subsided DET water

'"Go and see, huh, if the water has truly subsided."'

68. *Idi inmey han wawak é hinnagana,*
then went DET crow LIG sent=3sgGen
(=é) (hinnagan, =na)

kénet mintupek han ji ja tagu
instead.SEQ peck DET that PL person

é natey, isunga min-agub.
LIG dead for.that stinking

'The crow that he sent went, but instead it began to peck on those people who were dead and were therefore stinking.'

69. *Henagena han..., wajana hinnag hina,*
send=3sgGen DET exist=3sgGen sent here
(henagen, =na) (waja, =na)

é eha a henagenah kalapatik.
LIG one LIG send=3sgGen=Loc dove
(=é) (henagen =na, =h_2) (kalapati, -k)
'He sends..., there are some he sent, and he sends one more, the dove.'

70. *Inmey intupkenah han dala han ji ina hikik,*
went dipped=3sgGen=Loc DET blood DET that its feet
(ʔinmey) (ʔintupken, =na, =h_2) ($ʔi_2$, =na) (hiki, -k)

invangad.
return

'It went and dipped its feet into the blood, and returned.'

71. *Kanana, "O kahahhaadja han ipugo.*
say=3sgGen EXCL all.lying.around=3pl DET people
(kanan, =na) (kahahhaʔad, =ja)
'He said, "Oh, the people are all lying scattered around.'

72. *Natjuk* *han* *janum* *ngem* *kahahhaadja* *han* *taguk*."
subsided DET water but all.lying=3PL DET people
(kahahha?ad, =ja) (tagu, -k)
'The water has subsided but the people are all lying scattered around."'

73. *Isunga* *nalavaga* *na* *hiki* *té* *ina* *vinaddekan*
for.that be.red its feet because go=3SGGEN stepped.into
(na=) (?i$_1$, =na)

han *ji* *jala,* *ya* *han* *ji* *ina* *tupek* *ya* *nalavaga*
DET that blood and DET that its beak TOP.LK red
(?i$_2$, =na)

té *ina* *injutngo* *han* *ji* *ina* *tupek* *han* *kajala.*
because go=3SGGEN dipped.into DET that its beak DET blood
(?i$_1$, =na) (?i$_2$, =na)
'That is why its feet were red because it went and stepped into the blood, and its beak was red because it dipped its beak into the blood.'

74. *Adwan-i* *pé* *é* *inmey* *et* *jik,* *a,*
now more.over LIG went SEQ that huh
(=é) (ji$_1$, -k)

pumehnak *hi* *Lumawig.*
descend SG.PRSN Lumawig

'Now after that he went, huh, and Lumawig came down.'

75. *Kanana* *kanu* *en* *"Nah* *itaku* *élan* *yu* *minvavleyan.*
say=3SGGEN REPORT QUOT well go=1+2PL see your.PL villagers
(kanan, =na) (?i$_1$, =taku) (?ila?en) (yu=)
'He said, it is said, "Let's go now and see your (pl.) fellow-villagers."'

76. *Péenna* *kanud* *Vanawo* *han* *ina* *kawitis.*
place=3SGGEN REPORT=LOC Vanawo DET his 'kawitis'
(pé?en, =na) (kanu, =d$_1$) (?i$_2$, =na)
'He placed his *kawitis* at Banaue.'

77. (M) *Kawitis, ngantu é kawitis?*
'kawitis' what LIG 'kawitis'
(=é)
'*Kawitis*, what's a *kawitis*?'

78. (A) *Waa vantulé.*
maybe spear

'Maybe a (kind of) spear.'

79. *Inpeeynah ji nina kawitis.*
place=3SGNOM=LOC that his spear
(ʔinpeʔey, =na, =h_2) (ni_2, =na)
'He placed his spear there.'

80. *Kanana kanuk, "Iyu élan ji*
say=3SGGEN REPORT go=2PLGEN see that
(kanan, =na) (kanu, -k) ($ʔi_1$, =yu)

miid eh yu min-iliyan."
not.exist also your.PL place.to.live
(yu=)
'He said, "Go see that (place) if there is any place for you (pl.) to live."'

81. *Inmeyja han ji min-agik.*
went=3PL DET that siblings
(ʔinmey, =ja) (minʔagi, -k)
'The brother and sister went.'

82. *Kananja kanuk, "Dah, uhna keh nah min-iliyan,*
say=3PL REPORT EXCL disgust also this=LOC place.to.live
(kanan, =ja) (kanu, -k) (na_1, =h_2)

inlangaga han laya.
became.ripe DET ginger

'They said, it is said, "Ugh, this place is no good to live in, the ginger is nearly ripe.'

83. *Ajija* *keh* *maanukan* *e* *anak?*
not=3PL also be.affected HESIT child
(ʔaji, =ja) (maʔanuka, =n_2)
'Won't the children be affected?'

84. *Vaken* *nah* *imi* *vumableyan."*
not this=LOC our.EXCL place.to.make.house
(na_1, =h_2) ($ʔi_2$, =mi)
'This is not the place for us (excl.) to make a house."'

85. *Inhublijah* *ken* *Lumawig.*
return=3PL=LOC DAT.PRSN Lumawig
(ʔinhubli, =ja, =h_2)
'They returned to Lumawig.'

86. *Kananja* *kanuk* *woh,* *"Vaken* *hid-i* *mi* *vumableyan.*
say=3PL REPORT QUOT not there 1PL place.to.make.house
(kanan, =ja) (mi=)
'They said, "That is not the place for us (excl.) to make a house.'

87. *Inlangaga* *han* *laya* *ya* *in-iwatiw* *han* *matek*
reddish DET ginger and hanging DET leech

ya *aji* *keh* *mamattek* *ji* *anak?"*
and not also get.leeches that child

'The ginger is nearly ripe and leeches are hanging from them and won't the children get leeches on them?"'

88. *Kah-inna* *kanu* *e* *vekhen* *ad* *Haling.*
again=3SGGEN REPORT HESIT tell LOC Haling
(kahʔin, =na)
'Next he told (them to go) to Haling.'

89. *Ajék* *ammu* *mu* *ud* *han* *Haling* *his-ad*
not=1SGGEN know if where DET Haling there=LOC
(ʔaji, =k) (hisʔa, =d_1)

anukan	*Vanawo,*	*té*	*hiya*	*met*	*ija*	*kanan.*
what's.it=QUOT	Vanawo	because	IND3SG	also	theirs	say
(ʔanuka, $=n_1$)					($ʔi_2$, =ja)	

'I don't know where Haling is there in Banaue, because that is what they just say.'

90.

Vekhen	*ad*	*Haling.*
tell	LOC	Haling

'He told (them to go) to Haling.'

91.

Anggoy	*kanu*	*ya*	*umeyja*	*eh*	*han*	*hin-agik.*
ended	REPORT	and	go=3PL	also	DET	pair.sibling
			(ʔumey, =ja)			(hinʔagi, -k)

'After that, it is said, the brother and sister went.'

92.

Kananja	*kanuk,*	*"Nawang*	*nah*	*min-iliyan*
say=3PL	REPORT	not.good	this=Loc	place.to.live
(kanan, =ja)	(kanu, -k)		(na_1, $=h_2$)	

té	*kija*	*aanuka*	*nan*	*yayah."*
because	CONT=3PL	what's.it	DET	locusts
	(ki, =ja)			

'They said, "This place is not good (for us) to live because the locusts are all what's-it."'

93.

(M)	*Kija*	*kakalik.*
	CONT=3PL	make.noise
	(ki, =ja)	(kakali, -k)

'They're all making a noise.'

94.

(A)	*Kija*	*kakalik*
	CONT.3PL	make.noise
	(ki, =ja)	(kakali, -k)

'They're all making a noise.'

95.

"Ajija	*keh*	*vangten*	*ji*	*anak*
not=3PL	also	affect	that	child
(ʔaji, =ja)				

té	*néy*	*e*	*kija*	*ya*	*kakali*	*nan*	*yayah?"*
because	this	HESIT	CONT=3PL (ki, =ja)	and	make.noise	DET	locusts

'"Won't they affect the child because here the locusts are all making a noise?"'

96. *Inhublija* *mampé* *ken* *eh* *Lumawig.*
return=3PL more.over DAT.PRSN also Lumawig
(ʔinhubli, =ja)
'They returned to Lumawig.'

97. *Kananja* *kanu* *woh* "*Vaken* *jéh* *mi* *min-iliyan,*
say=3PL REPORT QUOT not that=Loc our place.to.live
(kanan, =ja) (ji_1, $=h_2$) (mi=)

ayaka *yayah* *ya!"*
be.many locusts INTENS

'They said, "We (excl.) will not stay in that place, there are so many locusts!"'

98. *Vekhenad* *Liveng,* *ilin* *han* *iVayyuk.*
tell=3SGGEN=LOC Liveng village=GEN DET Bayyew.people
(vekhen, =na, $=d_1$) (ʔili, $=n_3$) (ʔi-, vayyu, -k)
'He told (them to go) to Liveng, a village of the Bayyew people.'

99. *Vekhena* *kanu* *eh,* *kanana,*
tell=3SGGEN REPORT also say=3SGGEN
($vekhen_2$, =na) (kanan, =na)

"*Iyu* *jinyu* *nu* *hitud-i* *yu* *min-iliyan.*"
go=2PL that= 2PL.GEN if that.one your.PL place.to.live
($ʔi_1$, =yu) (ji_1, niyu) (yu=)
'He told (them to go), he said, "You (pl.) go (and see) if that place will be the place for you (pl.) to live."'

100. *Umeyja* *kanu* *eh,* *ija* *élan.*
go=3PL REPORT also go=3PL see
(ʔumey, =ja) ($ʔi_1$, =ja)
'So they went, they went to see.'

101. *Invangihel.*
stinking

'It was stinking.'

102. *Hunghung ji vutug han jeey vavley.*
smell DET pig DET that houses

'The houses smelled of pigs.'

103. *Kag wa inmanak.*
just.as probably gave.birth

'It was like (a pig) had given birth.'

104. *Amvutug té mahunghung han ji lang-eh han vutug.*
pig.smell because be.smelling DET that after.birth DET pig

'The pig stench was because the afterbirth of the pig was smelling.'

105. *Kanan han ji hin-agik woh*
say DET that pair.sibling QUOT
(hinʔagi, -k)

"*Nawang nah min-iliyan té né invangihel.*
not.good this=LOC place.to.live because this stink
(na, =h_2)
'The brother and sister said, "This place is no good to live in because it stinks.'

106. *Kah-inta mavangad.*"
again=1+2SG go.back
(kahʔin, =ta)
'Let us (dl.) go back again."'

107. *Mavangadja.*
go.back=3PL
(mavangad, =ja)
'They returned (to Lumawig).'

108. *Kananja* *kanu* *eh* *é* *hin-agik* *woh,*
say=3PL REPORT also LIG pair.sibling QUOT
(kanan, =ja) (=é) (hin?agi, -k)

"*Lawang* *hid-éh* *mi* *min-éliyan.*
not.good that=LOC our place.to.live
(hid?i, =h_2) (mi=)
'They, the brother and sister, said, "That place is no good for us (excl.) to live in.'

109. *Ni* *keh* *invangihel* *ya* *itlek* *na* *anak!"*
EXCL also stink and stick.to DET child

'It stinks and (the smell) will stick to the child!"'

110. *Dikad* *kah-inna* *vekhen* *na* *kawitis.*
so again=3SGGEN tell his spear
(kah?in, =na)
'So then he again threw his spear.'

111. *Vinkahnad...*
threw=3SGGEN=LOC
(vinkah, =na, =d_1)
'He threw it to...'

112. *Inmalijad* *Wayya.*
came=3PL=LOC Wayya
(?inmali, =ja, =d_1)
'They came to Wayya.'

113. *Vekhennad* *Atangwey,* *ad* *Vaat,*
tell=3SGGEN=LOC Atangwey LOC Vaat
(vekhen$_2$, =na, =d_1)
'He told (them to go to) Atangwey, to Vaat.'

114. *Inmey* *kanuh* *jik.*
go REPORT=LOC that
(kanu, =h_2) (ji$_1$, -k)
'They went there.'

115. *Kanana* *kanun,* *"Iyu* *keh* *élan* *ji*
say.3sgGen report=quot go=2pl also see that
(kanan, =na) (kanu, =en) (ʔi$_1$, =yu)

miid *eh* *yu* *min-iin-gawihan."*
not also your.pl place.to.be.good
(yu=)
'He said, "You (pl.) go and see that place if it would be a good place for you (pl.) to be."'

116. *Jey* *pinmehnakja.*
so descended=3pl
(pinmehnak, =ja)
'So they descended.'

117. *Kananja* *kanuk,* *"Uninah* *nah* *min-iliyan,*
say=3pl report be.better=Loc this=Loc place.to.live
(kanan, =ja) (kanu, -k) (na, =h$_2$)

té *ja* *inlangaga* *han* *pagey."*
because cont become.ripe det rice

'They said, "It is better to live here, because the rice is becoming ripe."'

118. (M) *Inlangaga?*
'inlangaga'

'(What is) *inlangaga*?'

119. (A) *Inlangaga* *ja* *inhojang.*
'inlangaga' cont become.ready.for.harvest

'*Inlangaga* is "becoming ready for harvest."'

120. *Kapatapatangja* *nan* *manuk* *ya* *kaluklukvub* *nan* *vutug.*
all.perched.about=3pl det chicken and all.lying.around det pig
(kapatapataŋ, =ja)
'There were so many chickens perched about and there were so many pigs lying around.'

121. *Aw-aja* *ken=ja* *jaan* *natey* *jik,*
maybe=3PL and=3PL not.yet dead that
(ʔawʔa=ja) (ken, =ja) (ji$_1$, -k)

gehja *nalmeh* *ji* *am-in* *ji* *kangunun* *ya.*
although=3PL drowned that all of everything INTENS
(geh$_1$, =ja) (ji$_1$) (ji$_2$)
'Maybe they were not yet dead, even though everything (else) there was drowned.'

122. *Geh* *pinmehnakja* *yaet* *jik.*
then descended=3PL INTENS=SEQ that
(pinmehnak, =ja) (ya, =ʔet) (ji$_1$, -k)
'Then they descended to that place.'

123. *Dikad* *umeyja* *kanuk,* *kananja* *woh*
then go=3PL REPORT say=3PL QUOT
(ʔumey, =ja) (kanu, -k) (kanan, =ja)

"*Uninah* *na* *min-iliyan* *té* *néy* *nan* *pagey*
be.better=LOC this place.to.live because this DET rice.plant
(ʔunina, =h$_2$)

ja *minhojang.*
CONT be.ready.to.harvest

'So they went, it is said, they said, "This is a better place to live in, because as for the rice, it is nearly ready to harvest, '

124. *Nan* *manuk* *ya* *kapatupatung.*
DET chicken TOPLK all.perched.about

'So many chickens are all perched about.'

125. *Nan* *vutug* *ya* *kalukvulukvub.*
DET pig TOPLK all.lying.around

'So many pigs are all lying around.'

126. *Kaeekja* *am-in.*"
all.sleeping=3PL all
(kaʔeʔek, =ja)
'They are all sleeping."'

127. *Adwan-i* *pé* *pumehnakja.*
now more.over descend.3PL
(pumehnak, =ja)
'Now they descended.'

128. *In-ilijad* *Tuveng* *ah?*
live=3PL=LOC Talubin huh
(ʔinʔili, =ja, =d_1)
'They lived in Talubin, huh?'

129. *Ad* *et* *Tuveng,* *ad* *et* *Tuveng* *ja* *nin-iliyan.*
LOC SEQ Talubin LOC SEQ Talubin their lived.in.place
(ja=)
'It was in Talubin, it was in Talubin where they lived.'

130. *Ja* *kanu* *u* *anyangay* *té* *han* *janum* *jaet* *vumava*
CONT REPORT or what because DET water CONT=SEQ become.low
(ja_2, =ʔet)

é *makingking* *ja* *umakit.*
LIG be.decreasing CONT stinking

'What will they do now, because as the water was becoming low and subsiding, it was beginning to stink.'

131. *Jaja* *kanu* *maanud* *nan* *ligga*
CONT=3PL REPORT be.floating DET winnowing.basket
(ja_2, =ja)

ya *ouk.*
and rice.pounding.pestle
(ʔoʔu, -k)
'The winnowing baskets and the rice pounding pestles were floating.'

132. *Giyag,* *aja* *ipakud,* *jaja* *alan.*
rice.plate get=3PL grab CONT=3PL get
(ʔa$_1$, =ja) (ja$_2$, =ja)
'As for rice plates, they were grabbing them and getting them.'

133. *Tatag-ong,* *jaja* *alan.*
soup.dippers CONT=3PL get
(ja$_2$, =ja)
'Soup dippers, they were getting them.'

134. *Am-in* *é* *maanud* *é* *mauhal,* *alanja*
all LIG be.floating LIG be.used get=3PL
(=é) (=é) (ʔalan, =ja)
'All the floating things that could be used, they got.'

135. *Jaja* *ipakud.*
CONT=3PL grab
(ja$_2$, =ja)
'They were grabbing them.'

136. *Jaja* *kanan,* *"Ta* *wa* *ta* *uhalen."*
CONT.3PL say so.that exist 1+2SG something.to.use
(ja$_2$, =ja) (ta=)
'They were saying, "So there will be something for us (dl.)to use."'

137. *Et* *inaja* *am-in* *han* *giyag,* *ligga* *anukaen*
then got=3PL all DET rice.plate winnowing.basket what's.it=QUOT
(ʔina, =ja) (ʔanuka=en)

vanew, *ouk,* *atutung* *ji* *vutug,* *jaja* *nin-ala.*
rice.ladles pestles bowls DET pig CONT=3PL get
(ʔoʔu, -k) (ja$_2$, =ja)
'And so they got all the rice plates, winnowing baskets, what's it ah rice ladles, pestles, pig-feeding bowls, they got them.'

138. *Digad* *inhaadja* *nan* *néy* *ija* *min-iliyan* *ad* *Tuveng.*
so put.down=3PL DET this.one their place.to.live LOC Talubin
(ʔinhaʔad, =ja) (ʔi$_2$, =ja)
'Then they put them in the place in which they were living in Talubin.'

139. *Ad* *Ɣapyapan* *et* *ija* *min-iliyan*
Loc Yapyapan seq their place.to.live
(ʔi$_2$, =ja)

té *vaken* *ad* *Atangwi* *ya.*
because not Loc Atangwi intens

'It was in Yapyapan where they went to live because it was not in Atangwi.'

140. *Ad* *Ɣapyapan* *et.*
Loc Yapyapan seq

'It was in Yapyapan.'

141. *Adwan-i* *pé* *inmey* *et* *ji.*
now more.over went seq that.one

'Now he went there.'

142. *Nopah,* *kananja,* *"Né* *kéy* *maa* *nan* *tag-ong."*
finished say=3pl this mod be.gotten det soup.dipper
(kanan, =ja)
'After that, they said, "Here now the soup dippers have been gotten."'

143. *Ta* *maa* *am-in* *han* *ji* *tag-ong,* *kakada* *giyag,*
so.that gotten all det that soup.dipper every rice.plate

kada *vanew,* *kada* *anukaen* *ligga,*
every rice.ladles every what's.it=quot winnowing.basket
(ʔanuka, =en)

ta *min-am-amuluja* *é* *hin-ahawa,*
so.that be.in.harmony=3pl lig pair.spouse
(minʔamʔamulu, =ja) (=é)

té *hin-ivaja,* *nin-ahawajat.*
because pair.companion=3pl have.married=3pl=seq
(hinʔiva, =ja) (ninʔahawa, =ja, =t)
'Since every one of those soup dippers, and every one of the rice plates, everyone of the rice ladles, everyone of the what's it uh winnowing baskets were gotten, so

that there would be harmony between the husband and wife, because they were companions and they were married.'

144. *Wen,* *in-am-amuluja* *ta* *miid* *ija* *kah-in* *e*
yes be.in.harmony=3PL so.that not.exist go=3PL again HESIT
(ʔinʔamʔamulu, =ja) ($ʔi_1$, =ja)

miid *humhumhumana.*
not.exist continual.fighting=3SGGEN
(humhumhuma, =na)
'Yes, they will be in harmony so that they will again, uh, there will be no continual fighting.'

145. *Miid* *humhuma.*
not.exist conflict

'There will be no conflict.'

146. *Miid* *huhhuhungad,* *hin-agi=ja* *met* *ya* *nin-ahawa=ja.*
not.exist continual.anger pair.sibling=3PL also and were.married=3PL
(hinʔagi, =ja) (ninʔahawa, =ja)
'There will be no anger, because they were brother and sister, you see, and they were married to each other.'

147. *Inanukan* *Lumawig,* *hin-agi* *ya* *min-ahawaja.*
arranged=GEN Lumawig pair.sibling and married=3PL
(ʔinanuka, $=n_3$) (minʔahawa, =ja)
'Lumawig arranged it, brother and sister and they got married to each other.'

148. *Tế* *di* *kanan* *kanu* *kalalakiyana*
because that say REPORT brother=3SGGEN
(kalalakiyan, =na)

"Keh *wa* *manguhjung* *hi* *na* *kavavaiyan?"*
also exist one.looking.down LOC his sister

'Because her brother said, "Can someone look down at his sister?"'

149. *Kanan kanu.*
say REPORT

'It is said.'

150. *Umey ken e kavavaiyanna.*
go DAT.PRSN HESIT sister=3SGGEN
(kavava?iyan, =na)
'He went to his sister.'

151. *Kanan kanu e kavavaiyanna, "Kenjan*
say REPORT HESIT sister=3SGGEN and=3PL=QUOT
(kavava?iyan, =na) (ken=ja, =en)

wa manangad hi na kalalakiyan?"
exist one.looking.up LOC her brother

'She said, uh his sister said, "Can someone look up at her brother?"

152. *Adwan-ik, linmupilup hi Lumawig han tavvak.*
now rolled.up DET Lumawig DET tobacco
(?adwan?i, -k)
'Now, Lumawig rolled up some tobacco.'

153. *Inpaikab-itna han jey ina ivan vavaik.*
stick.into=3SGGEN DET that his companion=LIG female
(?inpa?ikab?it, =na) (?i_2 =na) (?iva, =n_4) (vava?i, -k)
'He stuck it into his female companion.'

154. *Adwan-ik malitun.*
now pregnant
(?adwan?i, -k)
'Now she got pregnant.'

155. *Masikug et kanana kanuk "Hagungem pé*
pregnant SEQ say=3SGGEN REPORT look.after=2SGGEN more.over
(kanan, =na) (kanu, -k) (haguŋen, =m)

han néy ivam té malitun ké,
DET this companion=2SGGEN because be.pregnant MOD
(?iva, =m)

éyahhalinuwam."
take.care.of=2SGGEN
(ʔiyahhalinuwan, =m)
'She was pregnant and then he said, "Take good care of your (sg.) sister because now she is pregnant, you (sg.) take care of her."'

156.	*Kanana*	*kanun*	*é*	*"Yamu,*	*iyahhalinuwak*
	say=3SGGEN	REPORT.SEQ	LIG	certainly	take.care.of=1SGGEN
	(kanan, =na)	(kanu, =n)	(=é)		(ʔiyahhalinuwan, =k)

té	*hinud*	*keh*	*mangihalinuk?"*
because	who	also	care.taker
			(maŋihalinu, -k)

'He said, "Certainly, I will take care of her because who else will take care of her?"'

157.	*Adwan-i,*	*nin-ahawaja*	*jik,*
	now	married=3PL	that
		(ninʔahawa, =ja)	(ji_1, -k)

ja	*tud-i*	*et*	*ja*	*Adan*	*ken*	*Éva*	*é*	*nin-ahawa.*
PL.PRSN	that.one	SEQ	PL	Adam	and	Eve	LIG	married

'Now, they got married, those people, Adam and Eve who were married.'

158.	(M)	*Hi*	*tud-i*	*na*	las?
		Loc	that	its	last
				(na=)	
	(M)	'That's its end?'			

4. Wordlist

The wordlist which follows contains all the lexical items, both full words and clitics that occur in the text *Gaeb Ji Amulu.* Some affixal forms are also listed. The form of each entry is as follows: 1) Source. The text contains a number of words that are probably of either Ilokano, Tagalog, or English origin. The source language is given, and the original form appears in parentheses. 2) Word class. Most of the entries that do not have a word class specified are either forms which appear to be the base of one or more derivationally related verbs in the language and from our present knowledge do not function as full words. The other forms need additional research to determine their classification. 3) Verb subclassification, by feature. The primary subclassification indicates the transitivity of the verb. In addition, known aspectual and modal features

are given. 4) Definition. 5) Derived forms (dr.) of listed bases. 6) Cross references (cf.) of derived words to their base forms, and to other derivationally related words. 7) Variants (Var.) are sets of words which seem to have identical meaning and distribution and which are similar in phonological shape. 8) Words which appear to be phonological reductions of longer words are shown with the "lesser than" symbol (<). 9) Words which appear to be combinations of entries provided elsewhere in the list are linked to them with 'See'.

Word	**Local Orthography**	**Definition**
=a	a	Ilk. (*a*). LIG occurring between a numeral and a following noun
ʔa$_1$	a	get; dr. *maʔa*, *ʔina*, *ʔuma*; cf. *ʔala*
ʔa$_2$	a	tag question marker, asking the listener for confirmation
ʔaʔa	aa	uh huh
ʔaʔanuka	aanuka	N what's it; cf. *ʔanuka*
ʔad	ad	PREP at, in. Usually introducing proper noun locations.
ʔadan	Adan	N a personal name, Adam
ʔadwanʔi	adwan-i	ADV now, today
ʔagahhél	agahhél	N crab
ʔagi	agi	N sibling; dr. *hinʔagi*
ʔagtan	agtan	V+TRNS to give to someone
ʔagub	agub	N stench; dr. *minʔagub*
ʔah$_1$	ah	ADV then
ʔah$_2$	ah	PREP to, at; of. Usually introducing non-proper noun locations; also introduces indefinite oblique objects. Var. *=h$_2$*; cf. *hi$_2$*
ʔah$_3$	ah	Tag question, huh?
ʔahawa	ahawa	N spouse; dr. *hinʔahawa*; *minʔahawa*, *ninʔahawa*
ʔaji	aji	AUX negative of verbs
ʔajo	ajo	N body (BonG *ʔáwak*)
=ak	ak	PRON 1SGNOM, I, me
ʔakit	akit	stench; dr. *ʔumakit*
ʔala	ala	get; dr. *ninʔala*, *ʔalaʔen*; cf. *ʔa*
ʔalaʔen	alaen	V+TRNS to get something; cf. *ʔala*
ʔalan	alan	V+TRNS to get something; < *ʔalaʔen*
ʔali	ali	come; dr. *ʔumali*, *ʔinmali*, *ʔiyali*
ʔama	ama	N father
ʔamʔin	am-in	N all
ʔamma	amma	do, make; dr. *ʔumamma*, *ʔinmamma*

ʔammu	ammu	know
ʔamulu$_1$	amulu	N ritual prayer for newly weds
ʔamulu$_2$	amulu	N harmony; dr. *ʔinʔamʔamulu*, *minʔamʔamulu*
ʔamuŋ	amung	gather; dr. *ʔamuŋen*
ʔamuŋen	amungen	V–TRNS –CMPL to gather something; cf. *ʔamuŋ*; *naʔamuŋ*
ʔamvutug	amvutug	N smell of pigs; dr. *vutug*
ʔanak	anak	N child; cf. *ʔumanak*, *ʔinmanak*
ʔaniju	aniju	make a fire for warming; dr. *ʔanijuwan*
ʔanijuwan	anijuwan	V+TRNS +CMPL to make a fire to warm someone; cf. *ʔaniju*; *ʔinanijuwan*
ʔanud	anud	float downstream; dr. *maʔanud*
ʔanuka	anuka	N what's it; a hesitation noun, acquiring meaning from context; dr. *ʔanuka*; *ʔanukaʔen*, *ʔinanuka*
ʔanukaen	inanuka	V+TRNS –CMPL to do something; cf. *ʔanuka*; *ʔinanuka*; *maʔanuka*
ʔanyaŋay	anyangay	Ilk. (*ania ngay*) what
ʔaŋgoy	anggoy	N ended, after that
ʔapʔapuy	Ap-apuy	N a place name; cf. *ʔapuy*
ʔapuy	apuy	N fire
ʔatag	atag	N shelf; dr. *ʔatagen*, *ʔinatag*
ʔatagen	atagen	to make a shelf; cf. *ʔatag*; *ʔinatag*
ʔataŋwey	Atangwey	N a place name
ʔatutuŋ	atutung	N a bowl for pigfeed
ʔawʔa	aw-a	ADV probably. Var. *waʔa*
ʔayaka	ayaka	N many
=d$_1$	d	PREP at, in. Usually introducing proper noun locations, follows vowel-final words; cf. *ʔad*
=d$_2$	d	ADV modal form, often following question words, what then, who then, where then, etc. Follows vowel-final words; cf. *ʔud*
dah	dah	EXCL ugh!
dala	dala	N blood. Var. *jala*
di$_1$	di	DEM PRON that one, away from both the speaker and the hearer, used also to refer to an object that has been mentioned in the previous context. Var. *jey*, *ji*$_1$
di$_2$	di	DET non-specific genitive common noun marker. Var. *ji*$_2$
di$_3$	di	Ilk. (*idi*) when

digad	digad	so, then. Var. *dikad*; cf. *di*$_3$
dikad	dikad	so, then. Var. *jikad*, *digad*
e	e	hesitation marker
ʔeh	eh	also. Var. *keh*
ʔeha	eha	N one
ʔek	ek	sleep; dr. *maʔek*; *kaʔeʔek*
=en	en	LIG introduces a direct quotation; cf. *woh*
=ʔet	et	ADV sequential, then, immediately after that, in addition. Var. *=t*, *ʔet*
ʔet	et	ADV sequential, then, immediately after that, in addition. Var. *=t*, *=ʔet*
ʔey	ey	go; dr. *ʔumey*, *ʔinmey*; *ʔiyey*
=ey	ey	LIG links head nouns with following relative clauses, and head verbs with following complement clauses. Var. *=é*
=é	é	LIG links head nouns with following relative clauses, and head verbs with following complement clauses. Var. *=ey*
ʔék$_1$	ék	I go. See: *i*$_1$, *=k*
ʔék$_2$	ék	mine. See: *ʔi*$_2$, *=k*
ʔélan	élan	V+TRNS –CMPL to see something; < *ʔilan*
ʔéva	Éva	N a personal name, Eve
gaʔeb	gaeb	N ritual prayer
gawih	gawih	good; dr. *minʔiʔingawihan*
geh$_1$	geh	AUX although
geh$_2$	geh	ADV then
giniswaŋ	Giniswang	N a place name
giyag	giyag	N rice plate
guwaŋ	guwaŋ	N a gap in a terrace wall made so that water can escape; dr. *makaguwaŋ*, *guwaŋen*
guwaŋen	guwangen	V+TRNS –CMPL to open a gap in a terrace wall to allow water to escape; cf. *guwaŋ*
=h$_1$	h	DET singular personal name marker. Follows vowel-final words; cf. *hi*
=h$_2$	h	PREP to, at; of. Usually introducing non-proper noun locations; also introduces indefinite oblique objects, follows vowel-final words; cf. *ʔah*$_2$, *hi*$_2$
ha	ha	DEM PRON that, near speaker
haʔad	haad	place something on the ground; dr. *haʔad*; *ʔihaʔad*, *ʔinhaʔad*; *kahahhaʔad*

haguŋ	hagung	look backwards; dr. *haguŋen*, *inhaguŋ*
haguŋen	hagungen	V+TRNS –CMPL to look back at something, to care for someone; cf. *ʔinhaguŋ*
halaŋ	haling	climb; dr. *ʔinhalaŋ*, *ninhalaŋ*, *minhalaŋan*
halinu	halinu	take care of; dr. *ʔiyahhalinuwan*; *maŋihalinu*
haliŋ	Haling	N a place name
haliyahi	haliyahi	N skillet, frying pan
han	han	DET singular definite non-personal noun marker; cf. *nan*. Var. $=n_2$
hana	hana	DEM that, near hearer
haʔo	hao	go home; dr. *humaʔo*, *hinmaʔo*
happaŋ	happang	N platform
he	he	hesitation marker
henag	henag	send; dr. $henagen_1$, *henagan*, *hinnag*, *hinnagan*;
henagen	henagen	V+TRNS –CMPL to send something; cf. *henag*; *hinnag*, *henagan*
hi_1	hi	DET singular personal noun marker
hi_2	hi	PREP to, at; of. Usually introducing non-proper noun locations; also introduces indefinite oblique objects, follows consonant-final words. Var. $=h_2$; cf. $ʔah_2$
hidʔi	hid-i	DEM LOC PRON there, the location which has just been referred to
hikʔa	hik-a	PRON you; independent 2SG.
hiki	hiki	N foot, feet
hilé	hilé	N wild cat
himaʔo	himao	V-TRNS +CMPL went home. Var. *hinmaʔo*; cf. *haʔo*; *humaʔo*
hin-	hin	unit, pair
hina	hina	DEM LOC PRON here. Var *hinʔa*
hinʔa	hin-a	DEM LOC PRON here. Var *hina*
hinʔahawa	hin-ahawa	N husband and wife, a couple; cf. *hin-*, *ʔahawa*
hinʔiva	hin-iva	N companions; cf. *hin-*, *iva*
hinmalaktin	hinmalaktin	V-TRNS +CMPL came close; cf. *halaktin*, *humalaktin*
hinmaʔo	hinmao	V-TRNS +CMPL went home. Var. *himaʔo*; cf. *haʔo*; *humaʔo*
hinnag	hinnag	V+TRNS +CMPL sent, cf.. *henag*; *henagen*
hinnagan	hinnaga	V+TRNS +CMPL sent to someplace; dr. *henag*; *henagan*
hinu	hinu	N who

hinud	hinud	N who then; cf. *hinu*; *=d₂*
hisʔa	his-a	DEM LOC PRON there, near speaker
hita	hita	Ilk. (*ditaʔ*) there, near speaker
hiya	hiya	PRON he, she, it, independent 3SG.
hojaŋ	hojang	N a stage in the development of rice, when the grain is ripening; dr. *minhojaŋ*
hubli	hubli	return; dr. *ʔinhubli*
huhhuhuŋad	huhhuhungad	being continually angry; cf. *huŋad*
hukuŋ	hukung	hollow
humalaktin	hinmalaktin	V-TRNS -CMPL to come close; cf. *halaktin*, *hinmalaktin*
humaʔo	humao	V-TRNS -CMPL to go home; dr. *haʔo*, *hinmaʔo*
humhuma	humhuma	N fighting; cf. *huma*, *humhumhuma*
humhumhuma	humhumhuma	N continual fighting; cf. *huma*, *humhuma*
huŋad	hungad	N anger; dr. *huhhuhuŋad*
huŋhuŋ	hunghung	N smell; dr. *mahuŋhuŋ*
ʔi-	i	noun derivational prefix, person/people of X
ʔi₁	i	AUX go. Var. *ʔé* (before *=k*)
ʔi₂	i	N empty personal noun acting as a carrier of genitive pronouns to form independent possessive pronouns. Var. *ʔé* (before *=k*), *ni*
ʔidi	idi	Ilk. (*idi*) then
ʔiggup	iggup	N soup
ʔihaʔad	inhaad	V+TRNS -CMPL to place something on the ground; cf. *haʔad*; *ʔinhaʔad*
ʔija	ija	N theirs; See: *ʔi₂*, *=ja*
ʔijakpuh	ijakpuh	V+TRNS -CMPL to reach (someone) with something; cf. *jakpuh*, *nijakpuh*
ʔijatum	ijatum	V+TRNS -CMPL to arrive (someplace) with something; cf. *jatum*, *nijatum*
ʔijutŋo	ijutngo	V+TRNS -CMPL to dip something; cf. *jutŋo*; *ʔinjutŋo*
ʔijuʔug	ijuug	V+TRNS -CMPL to paddle a canoe by dipping one's hands in the water; cf. *juʔug*
ʔila	ila	see; dr. *ʔilaʔen*, *ʔumʔilan*
ʔilaʔen	ilaʔen	V+TRNS -CMPL to see something. Var. *ʔilan*
ʔilan	ilan	V-TRNS -CMPL to see something. Var. *ʔilaʔen*
ʔili	ili	village; dr. *ʔinʔili*
ʔimi	imi	ours. See: *ʔi₂*, *=mi*
ʔina₁	ina	V+TRNS +CMPL got; cf. *ʔa₁*, *alaʔen*
ʔina₂	ina	N his. See: *ʔi₂*, *=na₁*. Var. *nina*

ʔina$_3$	ina	he goes. See: *ʔi$_1$*, *=na$_1$*
ʔina$_4$	ina	N mother
ʔinʔamʔamulu	in-am-amulu	V-TRNS -CMPL to be in harmony. Var. *minʔam*ʔamulu; cf. *ʔamulu$_2$*
ʔinanijuwan	inanijuwan	V+TRNS +CMPL made a fire to warm someone; cf. *ʔaniju*, *ʔanijuwan*
ʔinanuka	inanuka	V+TRNS +CMPL fixed something; cf. *anuka*; *anukaen*
ʔinanukan	inanukan	See: *ʔinanuka*, *=n$_3$*
ʔinap	inap	look for, hunt; dr. *ʔuminap*
ʔinatag	inatag	V+TRNS +CMPL made a shelf; cf. *ʔatag*; *ʔatagen*
ʔinhaʔad	inhaad	V+TRNS +CMPL placed something on the ground; cf. *haʔad*; *ʔihaʔad*
ʔinhaguŋ	inhagung	V+TRNS +CMPL looked back at something; cf. *haguŋ*, *haguŋen*
ʔinhalaŋ	inhalang	V-TRNS -CMPL to climb up; cf. halaŋ; *ninhalaŋ*, *minhalaŋan*
ʔinhojaŋ	inhojang	V-TRNS -CMPL to become ready for harvest, of rice. Var. *minhojaŋ*; cf. *hojaŋ*
ʔinhubli	inhubli	V-TRNS -CMPL to return; cf. hubli
ʔinʔiwatiw	in-iwatiw	V-TRNS -CMPL to be hanging; cf. *ʔiwatiw*
ʔini	ini	EXCL expression of displeasure
ʔinʔili	in-ili	V-TRNS -CMPL to live; cf. *ʔili*
ʔinipit	inipit	V+TRNS +CMPL pinched something; cf. *ʔipit*; *ʔipiten*
ʔinissa	inissa	V+TRNS +CMPL ate meat; cf. *ʔissa*
ʔinjutŋo	injutngo	V+TRNS +CMPL dipped something; cf. *jutŋo*; *ʔijutŋo*
ʔinlaŋaga	inlangaga	V-TRNS -CMPL to become ripe; cf. *laŋaga*
ʔinlugan	inlugan	V-TRNS -CMPL to ride a vehicle; cf. *lugan*
ʔinma	inma	V-TRNS +CMPL got; cf. *ʔa$_1$*; *ʔuma*
ʔinmali	inmali	V-TRNS +CMPL came; cf. *ʔali*; *ʔumali*
ʔinmamma	inmamma	V-TRNS +CMPL made; cf. *ʔamma*; *ʔumamma*
ʔinmanak	inmanak	V-TRNS +CMPL gave birth; cf. *ʔanak*; *ʔumanak*
ʔinmey	inmey	V-TRNS +CMPL went; cf. *ʔey*, *ʔumey*
ʔinpahnag	inpahnag	V-TRNS -CMPL to send out (a messenger); cf. *pahnag*
ʔinpaʔikabʔit	inpaikab-it	V+TRNS +CMPL stuck something into; cf. *paʔikabʔit*; *ʔipaʔikabʔit*
ʔinpeʔey	inpeey	V+TRNS +CMPL placed something; cf. *peʔey*; *ʔipeʔey*

ʔintikid	intikid	V–TRNS –CMPL to climb up a slope; cf. tikid
ʔintupken	intupken	V+TRNS –CMPL to dip the beak into something, of a bird; cf. *tupek*
ʔinvaŋad	invangad	V–TRNS –CMPL to return; cf. *vaŋad*; *mavaŋad*
ʔinvaŋihel	invangihel	V–TRNS –CMPL to stink; cf. *vaŋihel*
ʔipaʔikabʔit	ipaikab-it	V+TRNS –CMPL to stick something into; cf. *paʔikabʔit*; *ʔinpaʔikabʔit*
ʔipakud	ipakud	V+TRNS –CMPL to grab something; cf. *pakud*
ʔipeʔey	inpeey	V+TRNS –CMPL to place something; cf. *peʔey*; *ʔinpeʔey*
ʔipit	ʔipit	pinch; dr. *ʔipiten*, *ʔinipit*
ʔipiten	inipit	V+TRNS –CMPL to pinch something; cf. *ʔipit*; *ʔinipit*
ʔipugo	ipugo	N person, people; cf. *tagu*
ʔissa	issa	V+TRNS –CMPL to eat meat; cf. *ʔinissa*
ʔistulya	istulya	story; dr. *ʔistulyaʔen*
ʔistulyaʔen	istulyaen	V–TRNS –CMPL to tell a story; cf. *istulya*
ʔisuŋa	isunga	ADV therefore
ʔitlek	itlek	V+TRNS –CMPL to stick to something
ʔiwatiw	iwatiw	hanging; dr. *ʔinʔiwatiw*
ʔiyahhalinuwan	iyahhalinuwan	V+TRNS –CMPL to take care of someone; cf. *halinu*; *maŋihalinu*
ʔiyali	iyali	V+TRNS –CMPL to come with, to bring; cf. *ʔali*
ʔiyapʔapuy	iyAp-apuy	N Ap-apuy person. See*: ʔi-*, *ʔapʔapuy*
ʔiyey	iyey	V+TRNS –CMPL to go with, to take something; cf. *ʔey*
=ja	ja	PRON they, them, their; 3PL
ja_1	ja	DET plural personal noun marker
ja_2	ja	AUX continuative
ja_3	ja	PRON their; independent possessive 3PL
jaʔan	jaan	AUX not yet
jadlu	jadlu	ADV surely
jadluk	jadluk	ADV surely. See: *jadlu*, *-k*
jaʔet	jaet	See: ja_2, =ʔet
jakami	jakami	PRON we (excl.), us (excl.); independent 1PL
jakpuh	jakpuh	reach; dr. *ʔijakpuh*, *nijakpuh*
jakumu	jakumu	N a kind of crab
jakumuk	jakumuk	N a kind of crab. See: *jakumu*, *-k*
jala	jala	N blood; cf. *dala*
jallan	jallan	N trail, path
janum	janum	N water

jaʔo	jao	N underneath
jawwang$_1$	jawwang	N river (BonG. *wáŋwaŋ*)
jawwang$_2$	Jawwang	N name of the river at Talubin
jey$_1$	jey	so; cf. *di*, *ji$_1$*
jey$_2$	jey	that; cf. *ji$_1$*
ji$_1$	ji	Dem Pron that one, away from both the speaker and the hearer, used also to refer to an object that has been mentioned in the previous context. Var. *jey*, *di$_1$*
ji$_2$	ji	Det non-specific genitive common noun marker. Var. *di$_2$*
jija	jija	Pron they, them; independent 3pl
jikad	jikad	so, then. Var. *dikad*, *digad*
jinyu	jinyu	See: *ji$_1$*, *niyu*
jomaŋ	jomang	N the other side of a mountain (BonG *demáŋ*)
joʔoy	jooy	Dem that, away from both the speaker and the hearer
jutŋo	jutngo	dip into; dr. *ʔijutŋo*, *ʔinjutŋo*
juʔug	juug	sound made by paddling water with the hands; dr. *ʔijuʔug*
juyu	juyu	soup bowl
=k	k	Pron I, my; 1sgGen. Follows vowel-final words, and replaces the final nasal of *-an* and *-en* verb suffixes; cf. *=ku*
-k	k	an epenthetic consonant, which occurs on the end of words with final high or mid back vowels at the end of phrases (see grammar for some exceptions)
=ka	ka	Pron you; 2sgNom
ka-red$_1$	ka-red	derives a noun with a comprehensive sense; cf. *kagiyagiyag*
ka-red$_2$	ka-red	derives a verb with comprehensive actors; cf. *kahahhaʔad*
kada	kada	Ilk. (*káda*) each, every; dr. *kakada*
kaʔeʔek	kaeek	V-trns +cmpr to all be sleeping; cf. *ʔek*, *maʔek*
kag	kag	as, just like
kahahhaʔad	kahahhaad	V-trns +cmpr to all be lying on the ground; cf. *haʔad*
kahʔin	kah-in	Aux again
kaʔiw	kaiw	N tree
kajala	kajala	all bloody; cf. *jala*

kakada	kakada	Ilk. (*káda*) each, every; cf. *kada*
kakali	kakali	all making a noise; cf. *kali*
kalalakiyan	kalalakiyan	N brother; cf. *lalaki*
kalapatik	kalapatik	N dove
kali	kali	N sound, noise, language, animal cry; dr. *kakali*
kaliggaligga	kaliggaligga	N all winnowing baskets; cf. *ligga*
kallawitan	Kallawitan	N name of a mountain
kaluklukvub	kaluklukvub	V–TRNS +CMPR to all be lying face down; cf. *lukvub*
=kami	kami	PRON we (excl.), us (excl.); 1PLNOM
kan$_1$	kan	eat; dr. *maŋan*, *nangan*; *kanen*
kan$_2$	kan	say; dr. *kanan*
kanan	kanan	V+TRNS –CMPL 1) to say; 2) to mistakenly think, to wonder; cf. *kan$_2$*
kanen	kanen	V+TRNS –CMPL to eat; cf. *kan$_1$*; *maŋan*, *naŋan*
kanu	kanu	ADV reported speech
kangunun	kangunun	N everything
kapalépalén	kapalépalén	N all driftwood; cf. *palén*
kapatapataŋ	kapatapatang	V–TRNS +CMPR to all be perched about, of birds. Var. *kapatupatung*
kapatupatuŋ	kapatupatung	V–TRNS +CMPR to all be perched about, of birds; cf. *patuŋ*; *pumatuŋ*. Var. *kapatapatang*
kavava?iyan	kavavaiyan	N sister; cf. *vava?i*
kavutuvutug	kavutuvutug	N all pigs; cf. *vutug*
kavvaŋayan	kavvangayan	huge; cf. *vaŋay*
kawad?an	kawad–an	N place where something exists; cf. *waja*
kawitis	kawitis	N a kind of spear
kay ?et	kay et	either. See: *kéy*, *?et*
=kayu	kayu	PRON you (pl.); 2PLNOM
keh	keh	ADV also. Var. *?eh*. (BonG. *?ages*, *ges*)
kejo	kejo	beg; cf. *kejo*, *kinjo*
ken$_1$	ken	DET Dative personal noun marker
ken$_2$	ken	CONJ and
ken$_3$	ken	AUX and
ké$_1$	ké	ADV indicating certainty. Var. *kéy*, *kay*
ké$_2$	ké	instead; cf. *kénet*
kénet	kénet	instead; cf. *ké$_2$*
kéy	kéy	ADV indicating certainty. Var. *ké$_1$*
ki	ki	AUX continuative
kinjo	kinjo	V+TRNS +CMPL to have begged something; cf. *kejo*, *nakinjo*

=ku	ku	Pron I, me, my; 1SgGen. Follows consonant-final words; cf. *=k*
lagud	Lagud	N a place name; downstream
lalaki	lalaki	N male, man; dr. *kalalakiyan*
laman	laman	N wild pig
laŋaga	langaga	ripe; dr. *ʔinlaŋaga*
laŋʔeh	lang-eh	N afterbirth
las	las	Eng. (*last*) last, end
lauh	lauh	pass by; dr. *lumauh*, *linmauh*
lawaŋ	lawang	no good. Var. *nawang*
laya	laya	N ginger
ligga	ligga	N winnowing basket; dr. *kaliggaligga*
linmupilup	linmupilup	V-trns +cmpl rolled up; cf. *lupilup*, *lumupilup*
linmaʔuh	linmauh	V-trns +cmpl passed by; cf. *laʔuh*, *lumaʔuh*
liveŋ	Liveng	N a place name
lugan	lugan	N vehicle; dr. *ʔinlugan*
lugi	lugi	begin; dr. *lugyan*
lugyan	lugyan	N source, origin; cf. *lugi*
lukvub	lukvub	lie face down; dr. *lumukvub*; *kaluklukvub*
lumaʔuh	lumauh	V-trns -cmpl to pass by; cf. *laʔuh*, *linmaʔuh*
lumawig	Lumawig	N the name of the cultural hero in Bontok ritual prayers
lumukvub	kaluklukvub	V-trns -cmpl to lie face down; cf. *lukvub*; *kaluklukvub*
lumupilup	lumupilup	V-trns -cmpl to roll up, as a leaf of tobacco; cf. *lupilup*; *linmupilup*
lupilup	lupilup	roll up, as a leaf of tobacco
=m	m	Pron you (sg.), yours (sg.); 2sgGen. Follows vowel-final words, and replaces the final nasal of *-an* and *-en* verb suffixes; cf. *=mu*
maʔa	maa	V-trns +pssv -cmpl gotten; cf. *ʔa*$_1$
maʔamuŋ	maamung	V-trns +pssv -cmpl be gathered; cf. *ʔamuŋ*; *ʔamuŋen*
maʔanud	maanud	V-trns +sttv floating downstream; cf. *ʔanud*
maʔanuka	maanuka	V-trns +pssv -cmpl be affected; cf. *ʔanuka*; *ʔanukaen*
mabneŋ	mabneng	V-trns +sttv flooded
maʔek	ek	V-trns -cmpl to sleep; cf. *maʔek*; *kaʔeʔek*
maŋan	mangan	V-trns -cmpl to eat; cf. *kan*$_1$
maŋihalinu	mangihalinu	N care taker; dr. *ʔiyahhalinuwan*, *ʔéhaʔihalinuwa*
maŋpéʔan	mangpéan	N one who puts something in; cf. *peʔey*; *péʔan*

maŋuhjuŋ	manguhjung	N one who looks down; cf. *ʔuhjuŋ*
mahto	mahto	V–TRNS +STTV cold
mahuŋhuŋ	mahunghung	V–TRNS +STTV smelling; dr. *huŋhuŋ*
maka–	maka	formative deriving intransitive verbs with abilitative meaning
makaguwaŋ	makaguwang	V–TRNS +ABLT –CMPL be able to open; cf. *guwaŋ*
makiŋkiŋ	makingking	V–TRNS +STTV decreasing
mali	mali	V–TRNS –CMPL to come; < *ʔumali*
malitun	malitun	V–TRNS +STTV pregnant; cf. *masikug*
mampé	mampé	ADV moreover. See: *man*, *pé*
mamattek	mamattek	V–TRNS +STTV covered with leeches; cf. matek
man	man	ADV establishes a social tie between the speaker and the hearer.
manaŋad	manangad	N one who looks up; cf. *taŋad*; *tumaŋad*
manuk	manuk	N chicken
maŋan	mangan	V–TRNS –CMPL to eat; cf. *kan*$_1$; *naŋan*
maŋihalinu	mangihalinu	N someone to care for someone; cf. *halinu*
maʔoni	maoni	V–TRNS +STTV be a little while later; cf. *ʔoni*
masikug	masikug	Ilk. (*masikog*) pregnant; cf. *malitun*
mata	mata	N eye
mataguwan	mataguwan	V–TRNS +PSSV –CMPL to be surviving; cf. *tagu*, *taguwan*
matek	matek	N leech; dr. *mamattek*
matjuk	matjuk	V–TRNS +STTV subsiding; dr. *natjuk*
maʔuhal	mauhal	V–TRNS +STTV usable; cf. *ʔuhalen*
mavaŋad	mavangad	V–TRNS +STTV be on one's way back; to return; cf. *vangad*
mavalin	mavalin	V–TRNS +STTV be possible
met	met	ADV also, likewise
metlaʔeŋ	metlaeng	ADV just the same
=mi	mi	PRON we (excl.), our (excl.); IPLGEN
mi=	mi	PRON our (excl.); IPLGEN
mid	mid	V not exist; < *miʔid*
miʔid	miid	V not exist (BonG. *maʔíd*)
minʔagub	min–agub	V–TRNS –CMPL to stink; cf. *ʔagub*
minʔahawa	min–ahawa	V–TRNS –CMPL to marry; cf. *ʔahawa*; *ninʔahawa*
minʔala	min–ala	V–TRNS –CMPL to get; cf. *ʔala*; *ninʔala*
minʔamʔamulu	min–am–amulu	V–TRNS –CMPL to be in harmony. Var. *ʔinʔamʔamulu*; cf. *ʔamulu*$_2$
minhalaŋan	minhalangan	N place to climb up; cf. *halaŋ*; ʔ*inhalaŋ*

minhojaŋ	minhojang	to become ready for harvest, of rice. Var. *ʔinhojaŋ*; cf. *hojaŋ*
minʔiʔingawihan	min-iin-gawihan	N place to be good; cf. *gawih*
minʔiliyan	min-iliyan	N place for one to live; cf. *ʔili*; *ʔinʔili*; *ninʔiliyan*
minkunkunniʔiŋ	minkunkunniing	V-TRNS -CMPL +CONT to be flickering
mintupek	mintupek	V-TRNS -CMPL to peck; cf. *tupek*
minvakvako	minvakvako	V-TRNS -CMPL +CONT to go headhunting; cf. *vako*
minvavleyan	minvavleyan	villagers; cf. *vavley*$_2$
miyahyab	miyahyab	V-TRNS +PSSV -CMPL to be recipients of; to share in something
=mu	mu	PRON you (sg.), yours (sg.); 2SGGEN. Follows consonant-final words; cf. *=m*
mu	mu	if; cf. *nu*
=n$_1$	n	LIG introduces a direct quotation. Follows vowel-final words; cf. *=en*
=n$_2$	n	DET definite common noun marker. Follows vowel-final words; cf. *han*
=n$_3$	n	PREP GEN only occurs following vowel-final words
=n$_4$	n	LIG appearing between a vowel final head word and a following form
=na	na	PRON he, she, it; his, her, its; 3SGGEN
na=	na	PRON his, her, its; 3SGGEN
na$_1$	na	DEM PRON this
na$_2$	na	DET singular definite non-personal noun marker; cf. *han*. Var. *nan*
na$_3$	na	Tag. (*na*) ligature
naʔamuŋ	naamung	V-TRNS +PSSV +CMPL was gathered; cf. *ʔamuŋ*; *ʔamuŋen*
naʔay	naay	DEM this. Var. *nay*, *néy*, *né*
nagallagawan	nagallagawan	V-TRNS +STTV lean, skinny, tough
nagammuŋlan	nagammunglan	V-TRNS +STTV strong
nah$_1$	nah	well (interjection)
nah$_2$	nah	See: *na*$_1$, *=h*$_2$
nahnab	nahnab	V-TRNS +STTV flooded; dr. *mabneŋ*
naʔiyak	naiyak	See: *naʔay*, *=ak*
nakagkagga	nakagkagga	V-TRNS +STTV messed up
nakagkaggawan	nakagkaggawan	V-TRNS +STTV white
nakaweŋ	nakaweng	V-TRNS +STTV hard working
nakinjo	nakinjo	V-TRNS +PSSV -CMPL be begged for; cf. *kejo*, *kinjo*
nalavaga	nalavaga	V-TRNS +STTV red

nalmeh	nalmeh	V–TRNS +STTV drowned, submerged
namuletʔan	namulet–an	V–TRNS +PSSV +CMPL was blocked
nan	nan	DET singular definite non–personal noun marker; cf. *han*. Var. *na*$_4$
nanuŋʔo	nanung–o	V–TRNS +STTV boney; cf. *tuŋʔo*
naŋan	nangan	V–TRNS +CMPL to eat; cf. kan$_1$; *maŋan*; *naŋanaŋan*
naŋanaŋan	nanganangan	V–TRNS +CMPL +CMPR to have all eaten; cf. *kan*$_1$; *naŋan*
natey	natey	V–TRNS +STTV dead
natjuk	natjuk	V–TRNS +STTV subsided; cf. *matjuk*
nawaŋ	nawang	no good. Var. *lawang*
nay	nay	DEM this. Var. *naʔay*, *néy*, *né*
néy	néy	DEM this. Var. *naʔay*, *nay*, *né*
né	né	DEM this. Var. *naʔay*, *nay*, *néy*
nékéy	nékéy	See: *né*, *kéy*
ni$_1$	ni	EXCL expression of displeasure; <*ʔini*
ni$_2$	ni	N empty personal noun acting as a carrier of genitive pronouns to form independent possessive pronouns. Var. *=ʔi*$_2$
nija	nija	N theirs. See: *ni*$_2$, *=ja*
nijakpuh	nijakpuh	V–TRNS +PSSV +CMPL was reached; cf. *jakpuh*, *ʔijakpuh*
nijatum	nijatum	V–TRNS +PSSV +CMPL was arrived at; cf. *jatum*, *ʔijatum*
nina	nina	N his. See: *ni*$_2$, *=na*$_1$
ninʔahawa	nin–ahawa	V–TRNS +CMPL married; cf. *ʔahawa*; *minʔahawa*
ninʔala	nin–ala	V–TRNS +CMPL got; cf. *ʔala*; *minʔala*
ninhalaŋ	ninhalang	V–TRNS +CMPL climbed up; cf. *halaŋ*; *minhalaŋ*; *minhalaŋan*
ninʔiliyan	nin–iliyan	lived; dr. *minʔiliyan*
ninʔiliyan	nin–iliyan	place where one lived; cf. *ʔili*; *ʔinʔili*; *minʔiliyan*
ninpalakwinen	ninpalakwinen	V–TRNS –CMPL to push something aside
nitaku	nitaku	N ours. See: *ni*$_2$, *=taku*
niyu	niyu	N yours: See: *ni*$_2$, *=yu*
nopah	nopah	V–TRNS +PSSV +CMPL was finished
nu	nu	Ilk. (*nu*) if; cf. *mu*
ŋalud	ngalud	ADV surely
ŋantu	ngantu	N what
ŋem	ngem	CONJ but
ŋen	ngen	Ilk. (*ngen*) question word
ŋinmetŋet	nginmetnget	V–TRNS +CMPL became dark; cf. *ŋetŋet*

ŋetŋet	ngetnget	dark, as nighttime; dr. *ŋinmetŋet*
ʔo	o	exclamation, oh
ʔoni	oni	N a short time; dr. *maʔoni*
ʔoʔu	ou	N rice pounding pestle
pagey	pagey	N rice plant
pahnag	pahnag	cause a message to be sent; dr. *ʔinpahnag*
paʔikabʔit	paikab-it	cause something to be stuck into; dr. *ʔipaʔikabʔit*; *ʔinpaʔikabʔit*
pakud	pakud	grab, hold, restrain; dr. *ʔipakud*
palanjey	Palanjey	N a place name
palén	palén	N drift wood; dr. *kapalépalén*
patuŋ	patung	perch; dr. *pumatuŋ*; *kapatupatuŋ*
pehnak	pehnak	descend; dr. *pumehnak*; *pinmehnak*
pé	pé	Adv moreover, in addition
péʔan	péan	V+trns –cmpl to put into something (< *peʔey* + *-an*); cf. *peʔey*; *maŋpéʔan*; *péʔen*
péʔen	péen	V+trns –cmpl to place something in (< *peʔey* + *-en*); cf. *peʔey*; *péʔan*
peʔey	peey	cause to go, place; dr. *ʔipeʔey*, *ʔinpeʔey*; *péʔen*, *péʔan*
pinakad	pinakad	N torch
pinmehnak	pinmehnak	V-trns +cmpl descended; cf. *pehnak*; *pumehnak*
pumatuŋ	pumatung	V-trns –cmpl to perch, of birds; cf. *patuŋ*; *kapatupatuŋ*
pumehnak	pumehnak	V-trns –cmpl to descend; cf. *pehnak*
=t	t	Adv sequential, then, immediately after that, in addition. Var. *ʔet*, *=ʔet*
=ta	ta	Pron we (dual), us (dual), our (dual); Nominative and Genitive 1+2sg
ta=	ta	Pron our (dual); Genitive 1+2sg
ta	ta	Conj so that
taga-	taga	Tag., Ilk. (*taga-*) derivational prefix, person/people from X; cf. *ʔi-*
tagʔoŋ	tag-ong	N soup ladle; dr. *tatagʔoŋ*
tagu	tagu	N person, people; dr. *taguwan*; *mataguwan*
taguwan	taguwan	V+trns –cmpl to give life; cf. *tagu*; *mataguwan*
=taku	taku	Pron we (incl.), us (incl.), our (incl.); Nominative and Genitive 1+2pl
taŋad	tangad	look up; cf. *tumaŋad*, *manaŋad*
tatagʔoŋ	tatag-ong	N soup ladles; cf. *tagʔoŋ*
tatʔiwa	tat-iwa	truly. Var. *tetʔiwa*

tatʔiwan	tat-iwan	truly. See: *tatʔiwa*, *=n₄*
tavvak	tavvak	N tobacco, cigarette
teveb	teveb	N a kind of vessel that could be used on the river, possibly a raft
té	té	CONJ because. Var. tét
ténéy	ténéy	CONJ because of this, at this point. See: *té*, *néy*
tét	tét	CONJ because. Var. té
tikid	tikid	climb up a slope; dr. *ʔintikid*
tinuktuk₁	tinuktuk	V+trns +cmpl pecked; cf. *tuktuk₁*; *tuktuken₁*
tinuktuk₂	tinuktuk	V+trns +cmpl chipped out; cf. *tuktuk₂*; *tuktuken₂*
tetʔiwa	tet-iwa	truly (BonG. *tetʔewa*); cf. *tatʔiwan*
toʔan	toan	not exist (BonG. *tewʔan*)
tudʔi	tud-i	N that one; cf. *hi tudʔi*, *ja tudʔi*
tuktuk₁	tuktuk	peck; dr. *tuktuken₁*
tuktuk₂	tuktuk	chip; dr. *tuktuken₂*
tuktuken₁	tuktuken	V+TRNS –CMPL to peck something; cf. *tuktuk₁*; *tinuktuk₁*
tuktuken₂	tuktuken	V+TRNS –CMPL to chip out something; cf. *tuktuk₂*; *tinuktuk₂*
tumaŋad	tumangad	V-TRNS –CMPL to look up; cf. *taŋad*, *manaŋad*
tuŋʔo	tungʔo	N bone; dr. *nanuŋʔo*
tupek	tupek	N beak of a bird; dr. *ʔintupken*
tuveŋ	Tuveng	N a place name, Talubin
ʔu	u	CONJ or
ʔud	ud	ADV modal form, often following question words, what then, who then, where then, etc. Follows consonant-final words; cf. *=d₂*
ʔugha	ugha	N deer
ʔuhal	uhal	use; dr. *ʔuhalen*, *maʔuhal*
ʔuhalen	uhalen	V+TRNS –CMPL to use something; cf. *ʔuhal*, *maʔuhal*
ʔuhjuŋ	uhjung	look down; dr. *ʔumuhjuŋ*, *maŋuhjuŋ*
ʔuhna	uhna	EXCL expression of disgust
ʔuleg	uleg	N snake
ʔuma	uma	V-TRNS –CMPL to get; cf. *ʔa*
ʔumakit	umakit	V-TRNS –CMPL to stink; cf. *ʔakit*
ʔumali	umali	V-TRNS –CMPL to come; cf. *ʔali*; *ʔinmali*
ʔumamma	umamma	V-TRNS –CMPL to make; cf. *ʔamma*; *ʔinmamma*
ʔumey	umey	V-TRNS –CMPL to go; dr. *ʔey*
ʔumʔilan	um-ilan	V+TRNS –CMPL +MPRT go see something; cf. *ʔila*
ʔuminap	uminap	V-TRNS –CMPL to hunt; cf. *ʔinap*

ʔumuhjuŋ	umuhjung	V–TRNS –CMPL to look down; cf. *ʔuhjuŋ*; *maŋuhjuŋ*
ʔunina	unina	better
vaʔat	Vaat	N a place name
vaddek	vaddek	step into or onto; dr. *vaddekan*; *vinaddekan*
vaddekan	vaddekan	V+TRNS –CMPL to step into or onto something; cf. *vaddek*; *vinaddekan*
vaŋay	vangay	big; cf. *kavvaŋayan*
vaŋten	vangten	V+TRNS –CMPL to affect something
vaken	vaken	not; negative of nouns
vako	vako	headhunting; dr. *minvakvako*
valey	valey	N house; dr. *vavley*$_1$; *vavley*$_2$, *vumableyan*, *minvableyan*; *vinaley*
Vallig	Vallig	N a place name, Barlig
vanawo	Vanawo	N a place name, Banaue
vaneŋ	vaneng	N path along the top of terrace wall
vanew	vanew	N rice ladle
vaniyah	vaniyah	N monitor lizard
vantulé	vantulé	N spear
vaŋad	vangad	return; dr. *ʔinvaŋad*; *mavaŋad*
vaŋihel	vangihel	stink; dr. *ʔinvaŋihel*
vatawa	vatawa	N sky
vava	vava	low; dr. *vumava*
vavaʔi	vavai	N female, woman; dr. *kavavaʔiyan*
vavley$_1$	vavley	N houses; cf. *valey*
vavley$_2$	vavley	one's home village; cf. *valey*; *vumableyan*, *minvableyan*
vayyu	vayyu	N a place name, Bayyew
vekah	vekhen	throw, as a spear; cf. *vekhen*; *vinkah*
vekhen$_1$	vekhen	V+TRNS –CMPL to throw something, as a spear; cf. *vekah*
vekhen$_2$	vekhen	V+TRNS –CMPL to tell something
venŋen	venngen	V+TRNS to pack a terrace wall with mud, to prevent water leakage from the pondfield; see vaneng
vinaddekan	vinaddekan	V+TRNS +CMPL stepped into or onto something; cf. *vaddek*; *vaddekan*
vinaley	Vinaley	N a place name, Binaley; cf. *valey*
vinkah	vinkah	V+TRNS +CMPL threw something, as a spear; cf. *vekah*; *vekhen*
vumaŋet	vumanget	N wild animal

vumableyan	vumableyan	N place to make a home; cf. *vavley*$_2$
vumava	vumava	V–TRNS –CMPL to become low; cf. *vava*
vutug	vutug	N pig; cf. *kavutuvutug*, *ʔamvutug*
wa	wa	V to exist; be. Var. *waja*
waʔa	waa	ADV probably. Var. *ʔawʔa*
waja	waja	V to exist; be. Var. *wa*
wawak	wawak	N crow
wayya	Wayya	N a place name
wen	wen	yes
woh	woh	LIG introduces a direct quotation; cf. *=en*
ya$_1$	ya	CONJ and
ya$_2$	ya	LIG links a topic with its following predicate
ya$_3$	ya	ADV intensifier
yamu	yamu	ADV certainly
yapyapan	Yapyapan	N a place name
yayah	yayah	N locust
=yu	yu	PRON your (pl.); 2PLGEN
yu=	yu	PRON your (pl.); 2PLGEN

Abbreviations

ADV	Adverb	+ABLT	ablitative	DAT	Dative
AUX	Auxiliary	–CMPL	incompletive	GEN	Genitive
CONJ	Conjunction	+CMPL	completive	LOC	Locative
DEF	definite	+CMPR	comprehensive	NOM	Nominative
DEM	Demonstrative	+CONT	continuative	cf.	refer
DET, DET	Determiner	+MPRT	imperative	dl.	dual
EXCL, EXCL	Exclamation	+PRDC	predicate	dr.	derivation
HESIT	hesitation	+PRSN	personal	EXCL, excl.	exclusive
IND	independent pronoun	+PSSV	passive	INCL, incl.	inclusive
LIG, LIG	Ligature	+STTV	stative	Var.	variant
MOD	modal adverb	–TRNS	intransitive	1	speaker person
PREP	Preposition	+TRNS	transitive	2	hearer person
PRON	Pronoun	BonG.	Guinaang Bontok	1+2	speaker-hearer person
Q	question marker	Eng.	English	3	non-speaker-hearer person
QUOT	quotation marker	Ilk.	Ilokano	PL	plural
RED	Reduplication	Tag.	Tagalog	SG	singular
REPORT	reported event				
SEQ	sequential adverb				
TAG	tag question marker				
TOPLK	topic linker				
V	Verb				

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【資料・研究ノート】

タタール知識人による女性向け雑誌『スユム・ビケ *Sūyum Bīka*』（カザン，1913-1917）目録

生 田 真 澄
（神戸大学大学院）

A Table of Contents of *Sūyum Bīka* (Kazan, 1913-1917), a Journal for Women Published by Tatar Intellectuals

Ikuta, Masumi
Graduate School, Kobe University

The intention of this paper is to show the contents of *Sūyum Bīka*, a journal for women, published by Tatar intellectuals from 1913 to 1917 in Kazan. After the Russian Revolution in 1905, many Russian Muslim reformist-intellectuals published periodicals to encourage new ideas, and in particular the "new method (uṣūl-i jadīd)" of teaching. *Sūyum Bīka* was one of those periodicals, but noticeably this was the only Tatar periodical for female readers. And unlike most contemporary Muslim periodicals, which were short-lived, *Sūyum Bīka* remained in publication for four years.

Its editorial staff were Ya'qūb Khalīlī (1878-1937), the chief editor-publisher, and two women, Asmā' Khalīlīya and Fakhr al-Banāt Sulaymānīya. The journal took its name from a queen of the Kazan khanate who was "famous for her patriotism". The first issue of *Sūyum Bīka* was published on 27 October 1913 in Kazan, and thereafter, an issue was published every other week almost without fail. On the first page of issues 1-1 through to 1-19, the editors described the publication as "An illustrated journal on literature, law, economics, morals and ethics, and domestic affairs, published for women every other week". On founding the journal, they had two chief aims: to discuss the situations and roles of women in society; and to enlighten women on good ways of nursing and educating their children.

In this journal we can find many articles, novels, and poems by female writers. The journal *Sūyum Bīka* therefore gives us invaluable information to analyze the activities of Tatar reformists, and especially of Tatar female intellectuals.

Keywords: Tatar, "uṣūl-i jadīd", periodical, *Sūyum Bīka*, woman
キーワード：タタール，「新方式」，定期刊行物，『スユム・ビケ』，女性

1．はじめに
2．『スユム・ビケ』について
3．『スユム・ビケ』記事一覧

1．はじめに

19世紀末から20世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域において，「新方式 uṣūl-i jadīd」教育を支持したタタール知識人たちが女性の教育や社会進出などの問題について積極的に関わり論議していたということは，これまでの研究においてもしばしば指摘されてきている[1]。「新方式」を支持する女性教師が女子学校を運営するといった活動に取り組んだように，タタールの知識人女性が社会参加し改革運動に携わっていたという例もいくらかは知られていよう[2]。しかしながらこれらの事柄について十分な分析が行われている研究はいまだ現れてはおらず，明らかでないことはあまりにも多いと言わねばならない。その理由の一つはそれらに関する文献史料が不十分であるところに求められる。

ここに紹介する『スユム・ビケ *Sūyum Bīka*』は1913年から４年間カザンで発行されていた雑誌である。1905年革命以降ヴォルガ・ウラル地域ではタタール改革主義知識人による定期刊行物が次々と発行されるが，これはそれらの中でただ一つ，女性を読者に想定したものであった。検閲や財政難あるいは第一次世界大戦の影響などにより短期間のうちに停刊を余儀なくされた定期刊行物が多かったなかで，この雑誌は1917年の革命直後にいたるまで発行され続け，男性の著述だけでなく女性の手になる文章をも多数掲載していた。Bennigsen，Quelquejay 両氏のロシア・ムスリムの定期刊行物に関する研究の中でもこの雑誌はわずかに取り上げられているが[3]，より揃ったコレクションが利用可能な現在ではさらに詳しい紹介が必要であろう[4]。そこで本稿では『スユム・ビケ』誌の周辺について手短に説明し，記事内容を目録の形で示す。今後，タタール知識人の女性の問題に関する思想や活動，とりわけ女性の活動を研究する上で，この作業は有意味であろう。

なおアラビア文字で書かれたテキストの転写は，現代タタール語やロシア語での表記を考慮せず，記されたアラビア文字に従って行った。また年月日は露暦によって表記した。

2．『スユム・ビケ』について

『スユム・ビケ』誌は1913年10月27日にカザンで創刊された。誌名は，「祖国愛でもって知られる」[5]16世紀中葉のカザン・ハン国の后妃スユム・ビケの名にちなんだものである。

編集発行者は Ya‘qūb Khalīlī（1878-1937）[6]であるが，創刊号の目次上に載せられている

1) 例えば Kanlidere 1997, pp.74-75, pp.135-136. など。
2) 1980年代に出された Rorlich 氏によるヴォルガ・タタールの通史の中でもそのような事例はいくらか紹介されている。Rorlich 1986, pp.99-101.
3) Bennigsen et Lemercier-Quelquejay 1964, pp.98-99.
4) 筆者が利用した史料は *Suyum Bike*, Kazan, 1913-1917, filmed in October 1993, filmed by National Library of Russia, Norman Ross Publishing INC., [missing: 1-9, 1-10, 2-3, 2-19, 4-13, 4-14, 4-17].
5) Battal-Taymas 1988, pp.30-32, (1925, pp.44-45).
6) 彼は「新方式」学校のための教科書の執筆や発行なども行った。彼については “Khalili Yakub Ibragimovich”, M.Kh. Khasanov (gl.red.) 1999, p.624. で極めて簡単ではあるが紹介されている。また彼は1917年３月からは『子どもたちの世界 Bālālār Dunyāsī』誌の編集発行者にもなった。Bennigsen et Lemercier-Quelquejay 1964, p.191. 参照。『スユム・ビケ』の４-９号の裏表紙には『子どもたちの世界』誌の創刊号の広告が掲載されており，その照会先は『スユム・ビケ』編集部となっている。

犠牲祭の祝辞には彼の名前とともにAsmā' Khalīlīyaという女性の名前が記されており，彼女も編集に参加していたと考えられる[7]。また１-22号に掲載された論説の中でFakhr al-Banāt Sulaymānīyaは「あなた方諸姉および私の娘たち（読者のこと―訳註）のために務め，あなた方に贈り物を残すという目的で私は『スユム・ビケ』編集部に来ました。私があなた方諸姉を（中略）進歩と文明の世界に導いていくよう努力するつもりであることをお信じ下さい。概してスユム・ビケ編集部のメンバーは皆そのような考えと方針にあります」[8]と述べ，これ以降編集の仕事をしていた。

編集部の所在地は当初カザン市のQābān湖畔のDrūzhīnīnの建物の７号室となっているが，１-11号からはArkhīpufの建物の１号室となっており，1914年２月半ばから３月末の間に移転したようである。印刷所は１-１号と１-２号はカザンのUmīdであるが，１-３号からMa'ālifにかわり，３-１号で再びUmīdに戻っている。

創刊時の価格は１部20コペイカ。月２回発行で，予約購読価格は年間４ルーブリ，半年２ルーブリ50コペイカ，３カ月１ルーブリ35コペイカであった。１部売りの価格は３-15, 16号から30コペイカに引き上げられ，それ以降は30コペイカの場合と25コペイカの場合とあるが，基本的には２号合併号の場合が30コペイカであった。予約購読価格は３-17号から年間５ルーブリ，半年３ルーブリ，３カ月２ルーブリに改定された[9]。４-５号以降は１部売りが30コペイカあるいは35コペイカとなり，４-11，12号からは１部50コペイカ，年間８ルーブリ，半年５ルーブリ，３カ月３ルーブリとなる。４-18号には年間12ルーブリ，半年７ルーブリ，１部１ルーブリと記されている。また広告料が１ページ目や裏表紙などにロシア語で記載されている場合もある。１-３号では本文の前（つまり表紙周辺）に掲載する場合は１行40コペイカ，裏表紙周辺の場合は30コペイカだったが，１-４号では本文の前で１行60コペイカ，後で40コペイカとなった。２-14，15号には本文の前で50コペイカ，後で40コペイカと書かれている。

最終号となった４-18号が1917年12月10日に発行されるまで，『スユム・ビケ』は第一次世界大戦を乗り切ってほぼ定期的に隔週で発行され続けた。創刊号から１-19号までの約10ヶ月間の毎号１ページ目には「婦女子のために２週間に１回発行される，文学，法律，経済，倫理道徳，家庭についての，挿し絵入りの雑誌」[10]と書かれている。

創刊号には編集部によって編集方針が述べられているが[11]，それによると雑誌創刊の理由はこうである。

> 我々の存在の半分を成している婦女子の世界のことについて議論する新聞や雑誌がないということは，我々の出版における欠点であった。今から数年前に尊敬する我らの父Ismā'īl Ghaṣprīnskī氏のご息女が『婦人たちの世界 'Ālam-i Nisvān』という雑誌を発行し始めたが，残念なことに，その雑誌は長くは続かなかった。婦女子の世界は，自らのことについて議論し，またその指導者となるような雑誌

7) *Sūyum Bīka*（以下 *SB* と略記）1-1, Qazān, 1913.10.27.
8) Fakhr al-Banāt Sulaymānīya, "Khānim va ṭūtāshlār diqqatina", *SB* 1-22, 1914.9.15, pp.3-4. 彼女はこれ以降署名付きで積極的に寄稿している。Battal-Taymas 1988, p.185, (1925, p.221). では彼女は『スユム・ビケ』誌の編集者であったと述べられている。一方 Asmā' という署名のある記事は４年間で Asmā', "Iftirāgha javāb", *SB* 1-8, 1914.2.15, pp.19-20. の一点のみである。
9) ３-17号から22号までの表紙には編集部によって戦争による物価高のために雑誌の価格を上げねばならなくなったとの断りがある。"Bahā ārtdirildī", *SB* 3-17, 1916.7.15.
10) "Khātūn-qizlārgha makhṣūṣ īkī āṭnada bir chighā ṭūrghān adabī, ḥuqūqī, iqtiṣādī, akhlāqī, 'iyālī, rasmlī zhūrnāl."
11) Idāra, "Bīr nīcha sūz", *SB* 1-1, 1913.10.27, pp.1-2.

を欠いたままである。（中略）無数の，無限に多くの必要性に満ちた存在についての，議論され，検討されるべき問題は数え切れない。

ゆえに我々はその状況を考慮して，もとより婦女子の状況および彼女たちに関する諸問題について議論する『スユム・ビケ』誌を発行することとなった[12]。

女性に関する問題を論じ，女性を啓蒙する雑誌がないこと，これが『スユム・ビケ』創刊の動機であるが，「新方式」教育の提唱者である Ismāʻīl Ghaṣprīnskī（1851-1914）の娘 Shafīqa が編集していた雑誌『婦人たちの世界』（バフチサライ，1905-1907）が意識されてもいる。では「議論され，検討されるべき問題」とはどのようなものであろうか。この論説では引き続いて次のように語られる。

重視し検討すべき諸問題の中には，我々の方針において述べられているように，婦女子の社会，法律，政治，経済，家庭についての状況を説明するということがあるが，同様に子どもの教育の問題にも，わけて重要性が与えられよう。なぜならば我々の未来，将来は，我々の子どもたち，孫たちの手にあるからである。我々の未来が幸福であることを願うならば，疑いなく，教育を受けた子どもを育てなければならない。（中略）教育を受けた子どもを育てるという責務は，教育を受けた母親の肩にかかっている。そのため教育方法や家庭に関する問題において模範となっていく雑誌を母親や将来母親となるであろう女子は必要としている[13]。

以上の記述から創刊時における『スユム・ビケ』編集部の意図は，女性の置かれている状況について議論すること，および子どもを教育する役目を担っている女性たちをとりわけ教育の問題に関して啓蒙すること，の二つであると言える。この論説の中には「子どもたちを民族的 millī な精神で教育する」という言葉も見られ，また末尾は「民族 millat の未来が教育を受けた子どもたちを育てる母親の手にある，ということを知るあらゆる民族主義者 millatchī が援助してくれることを我々は期待している」と締めくくられている[14]ことから，子どもの教育は「民族的 millī」でなければならないと考えられていることも指摘できよう。

雑誌の内容は，論説の他には詩や小説などの文学が目立つが，料理のレシピや野菜の栽培法，育児方法や医学的知識などの家庭を経営するための実用的な記事も数多く掲載されている。近代科学的な情報を読者に伝えようという意図が感じられるこれらの記事の中には，ロシア語などからの翻訳記事も含まれている。「新方式」の女子校や女性教員養成課程などの紹介にも力点が置かれており，とりわけ女性の活動を紹介するものが多い。政治色の強い記事は全体的に少ないが，やはり1917年３月15日発行の４-９号以降は増える。だがこの雑誌の最大の特徴は，投書も含めて女性が書いた記事の占める割合が非常に高いということであろう。これらの記事の内容を具体的に検討し，その執筆者であった女性たちの活動を明らかにしていく作業は，今後の課題とする。

3.『スユム・ビケ』記事一覧

各記事に番号を付し，表題，執筆者名（翻訳記事の場合は翻訳者名），頁の順で示す。表題の他に欄名のあるものはそれを表題の前に［ ］で示す。表題のある記事はその日本語訳を後に（ ）で付し，その後に論説およ

12) Idāra, “Bīr nīcha sūz”, *SB* 1-1, 1913.10.27, pp.1-2.
13) Idāra, “Bīr nīcha sūz”, *SB* 1-1, 1913.10.27, pp.1-2.
14) Idāra, “Bīr nīcha sūz”, *SB* 1-1, 1913.10.27, pp.1-2.

びニュースや諸情報を伝える記事は〔論説〕，詩は〔詩〕，小説などその他の文学作品は〔文学〕，編集部から読者や投稿者への連絡事項を伝えるものは〔連絡〕と記した。表題のない記事は〔無題〕と記し，簡単な内容の説明を付けた。執筆者名のない記事は表題と頁のみを示している。各号の目次と実際の内容に相違がある場合は原則として内容に従った。なお筆者が利用したコレクションに含まれておらず入手の可能性も低い１-９，１-10，２-３，２-19，４-13，４-14，４-17の各号はここでは除かれている。

１-１号（1913.10.27）

01）Bīr nīcha sūz（若干のことば）〔論説〕/Idāra/1-2
02）Muslimalarga khiṭāb（ムスリマたちへの呼びかけ）〔詩〕/Vāqif Jalāl/2-3
03）Shi‘r（詩）〔詩〕/Sa‘īd Sūnchalay/3
04）Sharī‘at qāshinda khātūn-qizlārī（シャリーアの前における婦女子）〔論説〕/‘A. ‘Iṣmatī/4-5
05）Sūyum Bīka（スユム・ビケ）〔論説〕/‘A. Fakhrī/5-6
06）Qizlārgha bīgrākda tiyūsh（女子のために特にすべきこと）〔論説〕/Ibrāhīm Amīrkhān/6-9
07）Balakāy qizlārning ṣiḥḥatī ṣāqlāu（幼い女子の健康を保つ）〔論説〕/‘A. Fakhrī/9-11
08）Khātūn qizlārīmiz（我らが婦女子）〔論説〕/‘A. Baṭṭāl/11-13
09）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/13-15
10）Zāgrānītsāda khātūnlār ḥarakatī（外国での婦人運動）〔論説〕/16
11）Rūsyada khātūnlār ḥarakatī（ロシアでの婦人運動）〔論説〕/17-19
12）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/19-20
13）Bīzanū sarlarī（化粧の起源）〔論説〕/21

１-２号（1913.11.15）

01）Alifīyam!（我が Alifīya よ！）〔詩〕/Sa‘īd Sūnchalay/1
02）Bālā（子ども）〔論説〕/Ḍiyā’ Nāṣirī/2-4
03）Ḥuqūqmī? Tarbīyamī?（権利か？教育か？）〔論説〕/Amīr ‘Alī Ibrāhīmuf/6-7
04）Kūnchīlik（嫉妬）〔文学〕/Luṭfī ‘Ādil/7-8
05）Mūsīqīdan da bir āz（音楽について少しばかり）〔論説〕/‘Abd Allāh Nādir/8-9
06）Balakay qizlārning ṣiḥḥatī ṣāqlāu（幼い女子の健康を保つ）〔論説〕/‘A. Fakhrī/9-11
07）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/11-13
08）Qūl ishlarī（手芸）〔論説〕/13-14
09）Bāshqa millat khātūnlārī（他の民族の婦人たち）〔論説〕/15-16
10）Rūsyada khātūnlār（ロシアでの婦人たち）〔論説〕/17
11）Musulmān khātūnlārinda ḥarakat（ムスリムの婦人たちの活動）〔論説〕/17-18
12）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/18-19
13）Ītning yākhshīlighin bilu（肉の良質なものを知る）〔論説〕/19
14）Yūrṭ kīraklarī（家庭の必需品）〔論説〕/19-20
15）Idāraga maktūblar（編集部への投書）〔論説〕/20-21
16）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/21

1-3号（1913.12.1）

01）Qur'ān būzū mas'alasī（コーラン侮辱問題）〔論説〕/Sūyum Bīka/1-4
02）[Shi'r（詩）] Tūsh（夢）〔詩〕/Sa'īd Sūnchalay/4
03）Madanīyat yūlinda khātūnlār（文明の道における婦人たち）〔論説〕/5-6
04）Khātūn-qiz vaẓīfalārī（婦女子の責務）〔論説〕/'A. Fakhrī/6-8
05）Birīlgha ṣātilghān qiz（与え売られる娘）〔文学〕/N. Sh./8-9
06）Sārt khātūnlār va ānlārgha sārtlārning qārāshlārī（サルトの婦人たちと彼女たちに対するサルトの人々の見解）〔論説〕/'Abd al-'Āzīz Munāsibuf/9-11
07）Khātūnlār ṭūghrīsinda jīyilish（婦人たちに関する集会）〔論説〕/R. Sh./12-13
08）Yāsh qizlārimizdan ūtinich（若き女子の願い）〔論説〕/Aḥmadjān Bīkimīyif/13
09）Mūsīqī tārīkhindan bir āz（音楽史について少しばかり）〔論説〕/'Abd Allāh Nādir/13-14
10）Bāshqa millat khātūnlārī（他の民族の婦人たち）〔論説〕/15-16
11）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/'Aynī/16-19
12）Qūl ishlarī（手芸）〔論説〕/20-21
13）Yūrṭ kīraklarī（家庭の必需品）〔論説〕/21
14）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/21

1-4号（1913.12.15）

01）Ūzilgān umīd（破れた希望）〔文学〕/Nāẓim/1-2
02）Tātār qizī（タタール女子）〔詩〕/Vāqif Jalāl/3
03）Bizning ḥāl（我々の状況）〔論説〕/Ummukulthūm Tīrishqāvīya/3-5
04）Āvil khātūnīning ṭūrmishī（村の婦人の生活）〔論説〕/'Abd Allāhjān 'Irfānuf/5-7
05）Ṭūrmish maydāninda khātūnlār（生活の場における婦人たち）〔論説〕/Fāḍil Ṭūykīn/8
06）Khātūnlārgha ḥuqūq（婦人への権利）〔論説〕/Amīr 'Alī Ibrāhīmuf/8-10
07）Sūiklū qizim!（親愛なる我が女子よ！）〔論説〕/Sāra Ādūtīya/10
08）Ūqūchīlarīma（我が読者へ）〔論説〕/'A. Fakhrī/10-12
09）Mūsīqīshinās «Bākh» kim?（音楽家「バッハ」とは誰か？）〔論説〕/'Abd Allāh Nādir/13-14
10）'Ibratlī sūzlar（教訓的言葉）〔文学〕/14
11）Musulmān khātūn-qizlārinda ḥarakat（ムスリム婦女子の活動）〔論説〕/15-16
12）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/16-17
13）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/17-18
14）Yūrṭ kīraklarī（家庭の必需品）〔論説〕/18
15）Maktūblar（投書）〔論説〕/19-20
16）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/20

1-5号（1914.1.1）

01）Muḥtaram mushtarīlar diqqatina!（購読者の方々ご注目を！）〔連絡〕/1
02）Tātār qizī（タタール女子）〔詩〕/M. Manāf/1-2
03）Millat nī kūta（民族は何を待ち望むか）〔論説〕/Ṣadrī Jalāl/3-4
04）Yānglish Ādūm（間違った一歩）〔論説〕/Maryam M./4-8
05）Qārt qiz（老嬢）〔文学〕/Luṭfī 'Ādil/8-9

06）Bizning ḥāl（我々の状況）〔論説〕/Ummukulthūm Tīrishqāvīya/9-10
07）Tūrkistānda khātūnlār（トルキスタンでの婦人たち）〔論説〕/‘A. Tīrishqāvī/10-12
08）Mūsīqīshinās «Bākh» kim?（音楽家「バッハ」とは誰か？）〔論説〕/‘Abd Allāh Nādir/12-13
09）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/14-16
10）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/16-18
11）Yūrṭ kīraklarī（家庭の必需品）〔論説〕/18-19
12）Bālālar ūynāṭūda kīngāsh（子どもを遊ばせるにあたっての助言）〔論説〕/‘A. Karīm/19-20
13）Maktūblar（投書）〔論説〕/20

1 - 6号（1914.1.15）

01）Shahrda（街で）〔詩〕/Sa‘īd Sūnchalay/1
02）Sharī‘at qāshinda khātūn-qizlār（シャリーアの前における婦女子）〔論説〕/Tuḥfatullāh Ūghlī/2-4
03）Īrīning khiyānatī sabablī chākhūtka būlghān bir khātūnning bīshik qirindaghī sūzlarī（男の裏切りのために肺病となったある婦人のゆりかごの側のことば）〔文学〕/‘A. Būbī/5-9
04）Farghāna khātūnlārī ṭūghrisinda Nālīfkīn（フェルガナの婦人たちに関して，Nālīfkīn）〔論説〕/Aḥmad Zakī/10-11
05）Ṭūrmish maydāninda khātūnlār（生活の場における婦人たち）〔論説〕/F. Ṭūykin/12
06）Bir īki sūz（若干のことば）〔論説〕/Idāra/13
07）Mu‘allimalarga yūlbāshichi: qizlārgha makhṣūṣ sikiz sanalik maktabning prūghrāmmāsī（女性教師の指導者：女子のための八年間の初等学校課程）〔論説〕/Ya‘qūb Ādūtuf/14-16
08）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/‘Aynī/17-19
09）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/19
10）Idāraga khaṭṭlār（編集部への文書）〔論説〕/20-21
11）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/21
12）Muḥtaram mushtarīlar diqqatina!（購読者の方々ご注目を！）〔連絡〕/Idāra/21

1 - 7号（1914.1.25）

01）Payghambar（預言者）〔詩〕/‘A. Tūqāy/1-2
02）Mavlūd（生誕）〔詩〕/Ḥ. Isḥāqī/2
03）Shādliq kūnī（喜びの日）〔論説〕/‘A. ‘Iṣmatī/3-6
04）Raḥmatlī kūn（感謝の日）〔論説〕/Shahīd Aḥmadīyif/6-8
05）Payghambarimiz va khātūnlār（我らの預言者と婦人たち）〔論説〕/Akmalī/8-11
06）Muqaddas kūn（聖なる日）〔論説〕/Ustādh Bīka/11-13
07）Bayramda khātūnlār（祝祭での婦人）〔論説〕/Luṭfī ‘Ādil/13-15
08）Mavlūd-i nabī munāsabatī īla（預言者の生誕に関して）〔論説〕/‘Abd Allāh Nādir/15-17
09）Bayram īdī（祝祭であった）〔論説〕/L‘/17-19
10）Zūrlār sūz（偉人の言葉）〔文学〕/19
11）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/20

1-8号（1914.2.15）

01）Ḥāḍirgī mas'ala（現在の問題）〔論説〕/1-2
02）〔無題：Khadīja Khānim Aḥmīruvā の略伝〕〔論説〕/3-4
03）Ḥijāb mas'alasī（ヒジャーブの問題）〔論説〕/Jamāl al-Dīn Valīduf/4-6
04）Gharbī yāvrupāda khātūnlār ḥarakatī ham khātūnlār mas'alasī（西ヨーロッパでの婦人運動と婦人問題）〔論説〕/Fātiḥ Sayfī Qāzān/6-8
05）Astrakhānda khātūn-qizlārgha makhṣūṣ ūqu kīchasī（アストラハンでの婦女子のための読書の夕べ）〔論説〕/Mukhbir/8-11
06）Zūrlār sūzī（偉人の言葉）〔文学〕/11
07）Māhrūy Khānim Muẓaffarīyaning qiṣqachaghina tarjuma-i ḥālī（Māhrūy Khānim Muẓaffarīya の略歴）〔論説〕/12-13
08）Yūrṭ kūtū ṭūrinda（家庭経営について）〔論説〕/13-16
09）Khātūnlār ḥurrīyatindan bir namūna（婦人の自由の一例）〔論説〕/16-17
10）Dār al-funūnda tūrk khātūnlārīna makhṣūṣ darslar（大学でのトルコ婦人のための学課）〔論説〕/17
11）Maktūblar（投書）〔論説〕/17-19
12）Iftirāgha javāb（中傷への返答）〔論説〕/Asmā'/19-20
13）Yūrṭ kīraklarī（家庭の必需品）〔論説〕/20-21
14）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/21

1-11号（1914.4.1）

01）Khātūnlār ḥurrīyatī（婦人の自由）〔詩〕/'A. Tūqāy/1
02）'Abd Allāh Tūqāyif īchūn（'Abd Allāh Tūqāyif のために）〔論説〕/Y. Khalīlī/2-4
03）Tūqāy qabrī yāninda（Tūqāy の墓前で）〔詩〕/Vāqif Jalāl/4
04）Shā'irimiz 'Abd Allāh Tūqāyifning khātūnlārgha qārāshī（我らが詩人 'Abd Allāh Tūqāyif の婦人観）〔論説〕/Shahīd Aḥmadīyif/5-7
05）Āning sūyiklū ūghlī（その愛ある息子）〔論説〕/Ṣadrī Jalāl/7-9
06）'Abd Allāh 'Ārif Ūghlī Tūqāy（'Abd Allāh 'Ārif Ūghlī Tūqāy）〔論説〕/«Chaghatāy»/10-15
07）Un（苦しみ）〔詩〕/'A. Ḥārith/16
08）Khātūnlār ṭūrinda Tūqāy（婦人との関連における Tūqāy）〔論説〕/L. 'Ādil/16-18
09）Sūndī!（消えた！）〔詩〕/'A. Ṣan'atī/18
10）Bībī Khānim Madrasasī（Bībī Khānimのマドラサ）〔論説〕/'Abd al-Ḥamīd Azmītuf/19
11）Mu'allim va mu'allimalarga āchiq khaṭṭ（男女の教師に宛てた文書）〔論説〕/Māhrūy Muẓaffarīya/20
12）Tātār khātūnlārīning ūzghānī va kīlachagī（タタール婦人の過去と未来）〔論説〕/Zaynab Valīyivā/20-21
13）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/21

1-12号（1914.4.15）

01）Khātūnlār īska ālū（婦人たちについて述べる）〔論説〕/Y. Khalīlī/1-2
02）Fāṭima Farīda Khānima（Fāṭima Farīda Khānim に）〔詩〕/Ḥarrāth Fakhrī/3

03）‘Aqllī va ūtkin khātūnlār（聡明かつ明敏な婦人たち）〔論説〕/Jamāl al-Dīn Valīduf/3-5
04）Khātūnlār ḥurligī（婦人の自由）〔論説〕/Maryam Īzmāyiluvā/5-7
05）Būkūngī vaẓīfamiz（今日の我々の責務）〔論説〕/‘Ayān Muṣṭāqāyivā/7-9
06）Bukhārāda ūyghānū atharlarī（ブハラにおける覚醒の結果）〔論説〕/Zaynab Dīnīkāyivā/9-10
07）Qarya qizlārinda ūqū nīchik?（村の女子の学びは如何にして？）〔論説〕/Sāra/10-11
08）Kīraklī bir ish（必要な仕事）〔論説〕/Zāhida/11-12
09）Māṭūrliq narsa（美しさとは何か）〔文学〕/Badrīshīr/12
10）Ūqūchīlār bilan muṣāḥiba（読者方々とともに）〔論説〕/Ībdash/13-14
11）〔無題：投書〕〔論説〕/14-15
12）Rūscha ūqū tūrinda（ロシア語を学ぶことについて）〔論説〕/Qamar Bānū Bāltāchīvā/15
13）Ṭrūyskī（トロイスク）〔論説〕/Ummukulthūm Ismā‘īluvā, Maryam Shaykh al-Salāmuvā, Nafīsa Muḥammadashīhā, Gulchahra Muḥammadjānuvā/16
14）Khātūn-qiz diqqatina（婦女子方々ご注目を）〔詩〕/Āmina bint Mullā Muṭī‘ Allāh Tuḥfatullīnā/16
15）Khātūnlār bilan shāyārū（婦人たちとの遊び）〔文学〕/17
16）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/17-19
17）Bāqchachīliq（園芸）〔論説〕/19-21
18）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/21

1-13号（1914.5.1）

01）Yāzghī tūnda（春の夜に）〔文学〕/Jamāluddīn Yūmāyif/1-4
02）Astrakhānda ḥukūmat ūrtā maktablarinda ūqūchī musulmān qizlārī（アストラハンの官立中等学校の生徒であるムスリムの女子）〔論説〕/Q. Qūlātiqī/4-5
03）［Shi‘r（詩）］Isming（あなたの名）〔詩〕/Sūnchalay/6
04）［Shi‘r（詩）］“Qizghānich qizlār va kūkdan javāb”（「哀れな娘と天からの答え」）〔詩〕/6-7
05）Khātūn yūrāgī tālpinā（婦人たちの心が羽ばたく）〔論説〕/Naqīya/7-9
06）Marḥamatsizlar（無慈悲）〔論説〕/Fātiḥ Sayfī/9-10
07）Khātūnlār ḥālī（婦人たちの状況）〔論説〕/Sh. Aḥmadīyif/10-13
08）Bukhārāda Tūqāy kīchasī（ブハラでの Tūqāy の夕べ）〔論説〕/Fāṭima Muvallahīvā/13-14
09）Bālālār kūzin i‘tibārgha ālū（子どもたちの目を考慮する）〔論説〕/14
10）Bālālār tarbīya ṭūrisinda zūrlār sūzī（子どもの養育に関する偉人たちの言葉）〔文学〕/15
11）Imtiḥān būlū munāsabatī bilan muvaffaqīyatlī ūqū kīchasī!（試験に関して成功した読書の夕べ！）〔論説〕/Mastūra Zabīruvā/15-16
12）Ḥifẓ al-ṣiḥḥat（保健）〔論説〕/16-17
13）Ānālārgha bir kīngāsh（母親たちへの助言）〔論説〕/17
14）Bālāning avvalgī ālṭī yilī（子どものはじめの六年間）〔論説〕/17-20
15）Kabusta（キャベツ）〔論説〕/20-21

1-14号（1914.5.15）

01）Īndī mīn āngār rinjmīm!（もう私はそのことを悩まない！）〔文学〕/Ṣ. Jalāl/1-4
02）Būkūngī vaẓīfamiz（今日の我々の責務）〔論説〕/‘Ayān Muṣṭāqāyivā/4-8
03）Yārdam, yārdam!（助けを，助けを！）〔論説〕/Lah Mu‘īn/8-11
04）Qāzāq khātūn-qizlārī（カザクの婦女子）〔論説〕/Qayyūm Qūlāṭqī/11-13
05）［Shi‘r（詩）］Yāz īrtasī（春の朝）〔詩〕/‘A. Ṣan‘atī/13-14
06）Khātūn-qiz diqqatina!（婦女子方々ご注目を）〔詩〕/Āmina bint Mullā Muṭī‘ Allāh Tuḥfatullīnā/14
07）Īskī Bukhārāda maktab Khālidīya Rushdī 1nchī ṣanf ṭalabasī Fāṭima Dīninikāyūvā ṭarafindan imtiḥānda sūylangān nuṭqning khulāṣasī（旧ブハラの初等学校 Khālidīya Rushdī の第一学年の生徒 Fāṭima Dīninikāyūvā によって試験で話された演説の概要）〔論説〕/‘Āysha Būrnāshīvā/14-15
08）Ūrāliskīda Tuḥfatullīnlar idārasindagī qizlār maktabinda yāṣālmish mavlūd majlisinda Ẓarīfa Tuḥfatullīnā ṭarafindan sūylangān nuṭqning mafhūmī（ウラリスクの Tuḥfatullīn 家が運営する女子初等学校で行われた生誕集会で Ẓarīfa Tuḥfatullīnā によって話された演説の内容）〔論説〕/Ḥabīb Ḥamīduvā/16-17
09）Musulmān khātūn-qizlārinda ḥarakatī（ムスリム婦女子の活動）〔論説〕/17-19
10）Ḥifẓ al-ṣiḥḥat（保健）〔論説〕/‘A. Fakhrī/19-20
11）Diqqat ītmilī（注意せねばならない）〔論説〕/Tātār Qizī/20-21

1-15号（1914.6.1）

01）Īndī mīn āngār ranjmīm（もう私はそのことを悩まない！）〔文学〕/Ṣ. Jalāl/1-4
02）Khātūn qizlār ḥaqqinda（婦女子に関して）〔論説〕/‘A. Ṣan‘atī/4-6
03）Favzīyam!（我がFavzīya よ！）〔文学〕/Āmina Th./6-9
04）Ṭūrmish maydāninda khātūnlār（生活の場における婦人たち）〔論説〕/F. Ṭūykīn/9-10
05）Ṣārt khātūnining yāz bayram（サルトの婦人たちの春の祝祭）〔論説〕/‘Abd al-Ḥamīd Azmītuf/10-12
06）Ghūljada khātūnlār īchūn ijtihād（グルジャでの婦人たちのための努力）〔論説〕/B. ‘A./12-13
07）Qūrqālighibizdan kīlgān ḍarar ham, ghayrat, himmat（無気力から生じる害および努力と尽力）〔論説〕/Maḥabbat/13-14
08）Bakhtsiz khātūn（不幸な婦人）〔論説〕/Lapīskī/14-15
09）〔無題：投書〕〔論説〕/15-16
10）Qāzāq khātūn-qizlārī（カザクの婦女子）〔論説〕/Qayyūm Qūlāṭqī/16
11）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/17-18
12）Ḥikāyachik（小篇）〔文学〕/M. Fayḍī/19-20
13）Chībarlik ārṭindan（美しさの方から）〔論説〕/20-21
14）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/21

1-16号（1914.6.15）

01）Īndī mīn āngār ranjmīm（もう私はそのことを悩まない！）〔文学〕/Ṣ. Jalāl/1-4

02）Yashirin maḥabbat（秘密の愛）〔文学〕/Jamāl al-Dīn Yūmāyif/5-9
03）〔無題：投書〕〔論説〕/7
04）Umīd（希望）〔詩〕/Dhī al-Nūr Aḥmadī/10
05）Tarbīya ḥaqqinda（教育に関して）〔論説〕/Umm Gulthūm Tīrishqāvīya/10-12
06）Kītmas qāyghim（去って行かない我が悲しみ）〔詩〕/Maḥabbat/12
07）Bakhtsiz tātār qizī（不幸なタタールの娘）〔詩〕/Isḥāq Bākhītīf/12-13
08）Qizghānich Mīnglī Jamāl（哀れな Mīnglī Jamāl）〔文学〕/Māhrūy Muẓaffarīya/13-17
09）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/18
10）Īyū āptīkāsī（良い薬）〔論説〕/19-20
11）Ūbū nirsa?（接吻とは何か？）〔文学〕/Badrīshīr/20-21
12）Āmirīqā khātūnlār（アメリカの婦人たち）〔論説〕/21

1-17号（1914.7.1）

01）Bir mātūrgha（ある美しい人へ）〔詩〕/Jamāl al-Dīn Yūmāyif/1
02）Qirīm khāṭralarī（クリムの記憶）〔論説〕/Sh. Muḥammadyāruf/2-5
03）Īndī mīn āngār ranjmīm（もう私はそのことを悩まない！）〔文学〕/Ṣ. Jalāl/5-7
04）Ghūljada qizlār imtiḥanī（グルジャでの女子の試験）〔論説〕/Ḥasan Fāṭima Būbī/7-12
05）Khātūn-qiz diqqatina（婦女子方々ご注目を）〔詩〕/Āmina bint Mullā Muṭī‘ Allāh Tuḥfatullīnā/12
06）Mālmizhda musulmān qizlārī ūchūn hunarkhāna（マルムジュのムスリム女子のための技術学校）〔論説〕/‘A. Khaṭṭī/12-14
07）Ta’aththur mīnūtlārinda（悲しみの瞬間に）〔詩〕/V. J./15
08）Khātūnlār ṭāvishī（婦人たちの声）〔論説〕/15-16
09）Musulmān khātūn-qizlārī ḥaqqinda ānkīt（ムスリム婦女子に関するアンケート）〔論説〕/17
10）Maṭbū‘āt（出版物）〔論説〕/18
11）Qizghānich Mīnglī Jamāl: Mīnglī Jamāl Ṭūtāshning shahrga bārūvī（哀れな Mīnglī Jamāl：Mīnglī Jamāl Ṭūtāsh が街へ行く）〔文学〕/Māhrūy Muẓaffarīya/18-20
12）Bālālār āshī（子どもの食物）〔論説〕/20

1-18号（1914.7.15）

01）Pītirbūrghda kīngāsh majlisī ham khātūn qizlārimiz（ペテルブルグでの会議と我らが婦女子）〔論説〕/Kh. Ablī/1-4
02）Būkūngī vaẓīfamiz（今日の我々の責務）〔論説〕/‘Ayān Muṣṭāqāyivā/4-7
03）Īndī mīn āngār ranjmīm（もう私はそのことを悩まない！）〔文学〕/Ṣ. Jalāl/8-10
04）Khānimlār tūrkimīna（婦人たちの集まりに）〔詩〕/Qiyām Yūldāshuf/10
05）Ṭūrmish（生活）〔論説〕/Umm Gulthūm Tīrishqāvīya/11-12
06）Qitāy khātūn-qizlārī（中国の婦女子）〔論説〕/‘Alī Ḥabīb/12-14
07）Khātūn-qiz diqqatina（婦女子方々ご注目を）〔詩〕/Āmina bint Mullā Muṭī‘ Allāh Tuḥfatullīnā/14
08）Vaḥshī īr（野蛮な男）〔論説〕/Mīnglī Jamāl ‘Izzatullīnā/15-17

09）Ībdashlarīma（我が仲間たちへ）〔論説〕/Gulthūm/17-19
10）〔無題：投書〕〔論説〕/19
11）Muḥtaram «Sūyum Bīka» idārasīna!（『スユム・ビケ』編集部御中！）〔論説〕/19-20
12）Bālālār āshī（子どもの食物）〔論説〕/20

1-19号（1914.8.1）

01）Ānā maḥabbatī（母の愛）〔文学〕/Fāṭima/1-5
02）Shi'r（詩）〔詩〕/Sa'īd Sūnchalay/5
03）Dīn va tūghān til（宗教と母語）〔論説〕/Ummugulthūm Tīrīshqāvīya/5-7
04）［Shi'r（詩）］Qāzāq qizīna（カザクの娘に）〔詩〕/Jamāl al-Dīn Yūmāyif/8
05）Ūz ṭūrmishimizdan bir lavḥa（我々の生活の中のある図）〔論説〕/Bībī Jamāl Tīrishqāvīya/9-11
06）Dūstima（我が友へ）〔詩〕/Ẓahira Bāychūrīnā/12
07）Khātūn-qizlār īchūn khuṣūṣī kūrṣlār（婦女子のための学課）〔論説〕/Ismā'īl 'Ābidī/12-14
08）Tātār qizīna（タタールの娘に）〔文学〕/'Abd al-Raḥmān Adhamuf/14-15
09）Ūrāliskīda, mu'allima Bībikī Bīlīkūvā vafāt（ウラリスクで，女性教師 Bībikī Bīlīkūvā のご逝去）〔論説〕/Yūlchī/15
10）Javāb（返答）〔論説〕/Lah Mu'īn/16
11）Qūl ishlarī（手芸）〔論説〕/17-18
12）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/19
13）Bālālār āshī（子どもの食物）〔論説〕/20
14）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/20

1-20号（1914.8.15）

01）Khātūnlār ṭūrinda Gūgul（婦人との関連におけるゴーゴリ）〔論説〕/Luṭfī 'Ādil/1-5
02）Musulmān isīyizdinda qūrsīsqalārimiz（ムスリムの大会における我らが女子生徒）〔論説〕/M. Ūrālbāyuvā/5-9
03）Jalīlār（明らかなものたち）〔詩〕/'A. Ṣan'atī/9-10
04）Millat va aning ṭāmirlārī（民族とその根）〔論説〕/Ummugulthūm Tirīshqāvīya/10-11
05）［Shi'r（詩）］Ṣabī tilagī（若者の願い）〔詩〕/12
06）Kīlan（花嫁）〔詩〕/Bībī Jamāl Tīrshqāvīya/12
07）Ṣūghish ham tūrk va tātār khātūnlārī（戦争，およびトルコとタタールの婦人たち）〔論説〕/Gul'idhār/13-15
08）Ṣūghish va tātār khātūnlārī（戦争とタタール婦人）〔論説〕/Bībī Jamāl Tirīshqāvīya/16-17
09）Khātūn-qiz diqqatina（婦女子方々ご注目を）〔詩〕/Āmina bint Mullā Muṭī' Allāh Tuḥfatullīnā/17
10）Ūzingnī qizghāndirū（あなた自身を哀れませること）〔論説〕/A. 'Ābidī/18-19
11）Narsa bū（これは何か）〔詩〕/'A. 'Iṣmatī/19
12）Bālālār ūchūn ṣāf havā（子どものための澄んだ空気）〔論説〕/Mūsā al-Ismāqī/20

1-21号（1914.9.1）

01）Yālghiz gul（ひとつの花）〔詩〕/Fāṭima ʻAynullīnā/1-2
02）Khātūnlār ṭūghrinda Gūgul（婦人との関連におけるゴーゴリ）〔論説〕/L. ʻĀdil/3-5
03）Nīga ṣūng sīn mīnī sūyasing?（一体なぜあなたは私を愛するの？）〔文学〕/Ṣ. Jalāl/5-6
04）Ay mātūr qiz（ああ美しい娘よ）〔詩〕/V. J./7
05）“Nīlar bār kūklarda, nīlar bār jīrlarda?”（「何が天にあり，何が地にあるのか？」）〔論説〕/Ismāʻīl ʻĀbidī/8-11
06）Astrākhān khātūnlārī（アストラハンの婦人たち）〔論説〕/Ḥasan al-Dīn Karīmuf/11-14
07）Matānat kīrak（忍耐が必要である）〔論説〕/Vaqt ghazītasīndan/14-16
08）Ūl mātūr（かの美しさ）〔詩〕/M. Manāf/16-17
09）Ṣarb khātūnī（セルビアの婦人）〔論説〕/17-18
10）Mīnim mūngim（我が悲しみ）〔文学〕/Rāḍīya Zaynullīna/18-19
11）Āziqlānū（食べること）〔論説〕/ʻA. Fakhrī/19-21

1-22号（1914.9.15）

01）Buyūk ustādh Ismāʻīl Bik Ghaṣprīnskī（偉大なる師 Ismāʻīl Bik Ghaṣprīnskī）〔論説〕/Y. Khālīlī/1-3
02）Khānim va ṭūtāshlār diqqatina（婦女子方々ご注目を）〔論説〕/Fakhr al-Banāt Sulaymānīya/3-4
03）Istānbūl khāṭirātī（イスタンブルの回想）〔論説〕/Bāghbistān/4-8
04）［Shiʻr（詩）］Līrmūntufdan（レールモントフから）〔詩〕/Jamāl al-Dīn Yūmāyif/8
05）Āvilda muʻallima（村の女性教師）〔文学〕/Āṣil Fakhrī/9-11
06）Khātūnlār ṭūrinda Gūgul（婦人との関連におけるゴーゴリ）〔論説〕/L. ʻĀdil/11-13
07）Khātūnlār ḥimāyasizligī（婦人の保護がないこと）〔論説〕/Khadīja Chānīshuvā/13-14
08）Aṣlda ḥurrīyat nī būlā? Siz nī dīsiz?（元来自由とは何か？あなたは何と言いますか？）〔論説〕/Khādīja Shimāsīya/14-15
09）Sūyiklimning rasmīna qārāb：（私の愛するものの絵を見て：）〔詩〕/Ummugulthūm Tīrishqāvīya/16
10）Bir rasmga（一枚の絵に）〔詩〕/Ẓāhira/16
11）Qitāy ṭarafinda Trūyskī Ṣābskī dīgān shahrdan yāzālār（中国方面のトロイスキー・サブスキーという街から書く）〔論説〕/17
12）Tātār khātūnī īriklī būlūrgha tiyūsh!（タタール婦人は自由でなければならない！）〔論説〕/Ibrāhīm Valīyif/17-19
13）Qazāq khātūn qizlārī（カザクの婦女子）〔論説〕/V. J./19-20

1-23号（1914.10.1）

01）Nīndī kūn?（どんな日か？）〔詩〕/Mīrzānuf/1-2
02）Ismāʻīl Bik Ghaṣprīnskī（Ismāʻīl Bik Ghaṣprīnskī）〔論説〕/Fakhr al-Banāt Sulaymānīya/2-4
03）Millat dāhīsī（民族の賢者）〔論説〕/Y. Khalīlī/4-7
04）Bābāmiz Ismāʻīl Bik（我らが父 Ismāʻīl Bik）〔論説〕/Shahīd Aḥmadīyif/7-9

05）Qiymatlī khurma āghāchī ṣindī!（高貴ななつめやしが枯れた！）〔論説〕/Māhrūy Muẓaffarīya/9-10
06）Kūz yashlarī...（涙…）〔詩〕/'A. Ṣan'atī/10-11
07）Bir āz ūzgārtilgān tūsh（少し変えられた夢）〔論説〕/M. Aḥmar/11-13
08）Ta'zīya（哀悼）〔論説〕/Māhrūy Muẓaffarīya shāgirdlarī/13
09）Mudillī Ā.（でしゃばりな Ā）〔論説〕/Luṭfī 'Ādil/13-16
10）Ṣūghish munāsibatī īla（戦争に関連して）〔論説〕/16
11）Miṣr khātūnlārī（エジプトの婦人たち）〔論説〕/17
12）Ūqūchīlār birla muṣāḥiba（読者方々とともに）〔論説〕/Dūstingiz/17-18
13）Qitāy khātūn qizlārī（中国の婦女子）〔論説〕/18-19
14）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/20

1-24号（1914.10.17）

01）«Sūyum Bīka» Zhūrnālīna hadīyamiz（『スユム・ビケ』誌への我々の贈り物）〔論説〕/Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn/1-5
02）Ḥaḍrat-i Fāṭimaning qahramānlighī（Fāṭima さまの勇気）〔文学〕/Y. Khalīlī/5-8
03）Ṣūghish ham mūdā（戦争とモード）〔論説〕/Basharuf/8-12
04）Kūz（瞳）〔詩〕/Z. Ḥubbīya/12
05）Ḥurrīyatnī nīchik anglīsiz（Ānkītka javāb）（あなたは自由をどのように理解しますか？（アンケートへの回答））〔論説〕/Salīma/13-14
06）'Īd-i sa'īd mubārak ūlsūn!（祝祭のお祝いを申し上げます！）〔論説〕/Fakhr al-Banāt Sulaymānīya/14-15
07）Ḥuqūqqa 'ā'id（権利について）〔論説〕/Sh. Aḥmadīyif/15-17
08）Vaqt yārdim tilī（時は助けを望む）〔論説〕/17-18
09）Iftirāgha javāb（中傷への返答）〔論説〕/Fāṭima Farīda/19-20

2-1号（1914.11.1）

01）Zhūrnālimizning īkinchī ilī（我々の雑誌の二年目）〔論説〕/Y. Khalīlī/1-2
02）Ḥurrīyat nirsa?（自由とは何か？）〔論説〕/Fakhr al-Banāt Sulaymānīya/3
03）Khātūn-qizlārimiz ḥaqqinda muḥtaram Mūsā Afandī Bīgīyif fikrī（我らが婦女子に関する尊敬する Mūsā Afandī Bīgīyif の思想）〔論説〕/4-6
04）Yūragīma!（我が心へ！）〔文学〕/'A. A./6-7
05）Ḥaḍrat-i Fātimaning qahramānlighī（Fāṭima さまの勇気）〔文学〕/Y.Khalīlī/7-10
06）Yāngā ilgha īzgī tilaklarim（新しい年にむけての私の良き希望）〔論説〕/Māhrūy Muẓaffarīya/10-11
07）[Shi'r（詩）]...gha（…へ）〔詩〕/Jamāl al-Dīn Yūmāyif/11-12
08）Dār al-mu'allimāt（女子師範学校）〔論説〕/Z. Ḥusayn/12
09）Bālālārning yākhshī būlūvī ātā ānāning yākhshī būlūvinda（子どもが良くなることは父母が良くなることにある）〔論説〕/Z. Ḥubbīya/12-13
10）[Shi'r（詩）] Tūnlarim va kūnlarim（我が夜と我が昼）〔詩〕/'Ālimjān Āqchūrīn/13-14
11）Yāpūnyāda khātūnlār...（日本の婦人たち…）〔論説〕/'A. Raḥīmuf/14-15

12）Āvillārda famīnīzm（村々でのフェミニズム）〔論説〕/Lapayskī/16-17
13）Khānim va ṭūtāshlārgha（婦女子方々へ）〔論説〕/Khadīja Tīmbīkīya/17-18
14）Maṭbūʻāt ʻālamī（出版物の世界）〔論説〕/18-19
15）Qāzānda khātūn-qiz ʻālamī（カザンの婦女子の世界）〔論説〕/19-21

2-2号（1914.11.15）

01）Madanī tarbīya（文明的教育）〔論説〕/Fakhr al-Banāt Sulaymānuvā/1-3
02）Shiʻrchik（小詩）〔詩〕/S. Sūnchalay/3
03）Ṣūlghan chachak（しおれた花）〔文学〕/M. ʻUthmān/3-5
04）Muḥtaram khvājamiz Ismāʻīl Bik rūḥīna（尊敬する我らが師 Ismāʻīl Bik の御魂に）〔論説〕/ʻAbd Allāh Būbī/5-7
05）Bābāmiz Ismāʻīl Bikning rūḥī āldinda tiz chūgam（我らが父 Ismāʻīl Bik の御魂の前に私は跪く）〔論説〕/Ābrūy Naqīya/7-9
06）Ūgī bālāning kūrmishī（継子の見たこと）〔詩〕/Imām al-Dīn Shimāsī/9-10
07）Ham qūanābiz ham būrchilābiz（我々は喜びもし，心配もする）〔論説〕/ʻA. M. Chaghatāy/10-11
08）Aydangiz birla!（言ってください，ともに！）〔論説〕/Kāmila Muẓaffarīya/11-13
09）Bakhtsiz ṭūghānlār（不幸な生まれ）〔詩〕/ʻA. Ṣanʻatī/13
10）Ḥifẓ al-ṣiḥḥat（保健）〔論説〕/ʻAbd Allāh Sulaymān/14-16
11）Zīndān yīmishlarī（牢獄の果実）〔詩〕/Zayn al-Dīn Tāj al-Dīnuf/16-17
12）Muslimānlārda khātūn-qiz ʻālamī（ムスリムの婦女子の世界）〔論説〕/17-19
13）Qāzānda khātūn-qiz ʻālamī（カザンの婦女子の世界）〔論説〕/19
14）Idāraga maktūblar（編集部への投書）〔論説〕/19-20
15）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/20

2-4号（1914.12.15）

01）［Shiʻr（詩）］Yash qizgha（若い娘へ）〔詩〕/Jamāl al-Dīn Yūmāyif/1
02）Sharqda khātūn tasatturdan ilk ham ṣūng（東方における婦人の隔離について，以前と最近）〔論説〕/Fakhr al-Banāt Sulaymānīya/2-6
03）［Kitāblār ham ālārgha tanqīd（書物と批評）］Suyūn Bīka（スユム・ビケ）〔論説〕/Zakī Valīdī/7-11
04）Yāsh ānā...（若い母…）〔文学〕/N. Dūmāvī/11-14
05）Yāshā Zubayda yāshīm mīn（生きよ Zubayda，生きよ私）〔論説〕/Shahīd Aḥmadīyif/14-17
06）Ḥurrīyat（自由）〔論説〕/ʻAbd al-Ḥamīd al-Muslimī/17-19
07）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/19

2-5号（1915.1.1）

01）Biz ḥayātka nīchik ḥāḍirlanamiz（我々は人生に対しどのように準備するのか）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/1-5
02）［Kitāblār ham ālārgha tanqīd（書物と批評）］Suyūn Bīka（スユム・ビケ）〔論説〕/Zakī

Valīdī/5-6
03）Īrikim yūq（私の自由はない）〔文学〕/Ābrūy Naqīya/7-9
04）Ḥāḍirgina ānglādim（今こそ私は理解した）〔論説〕/S. ʻIṣmat/9-10
05）Kīlin（花嫁）〔文学〕/Raḥīm Bāyzīduf/11-12
06）Bālālār ūynī（子どもの遊び）〔論説〕/Mā/12-15
07）Ṣūlghan chachak（しおれた花）〔文学〕/M. ʻUthmān/16-19
08）Ṣūghish ham khātūnlār（戦争と婦人たち）〔論説〕/19-20

2-6号（1915.1.15）

01）Shihāb al-Dīn al-Marjānī ḥaḍratlārī（Shihāb al-Dīn al-Marjānī 氏）〔論説〕/Y. Khalīlī/2-7
02）Tātār khātūn-qizlārī diqqatīna（タタールの婦女子方々ご注目を）〔論説〕/Fakhr al-Banāt Sulaymānīya/7-8
03）Marjānī ḥaqqinda kichkinaligimda yāzghān baʻḍ nirsalarim munāsabatī īla（Marjānī について若い頃に私が書いたものに関して）〔論説〕/Aḥmad Zakī Valīdī/8-12
04）Yūbīlī kūnī（記念日）〔論説〕/Shahīd Aḥmadīyif/12-15
05）Shihāb al-Dīn al-Marjānī ḥaqqinda fikrī(Shihāb al-Dīn al-Marjānī に関する考え)〔論説〕/ʻA. M. Chaghatāy/15-19
06）Muḥtaram Shihāb al-Dīn ḥaḍrat（尊敬する Shihāb al-Dīn ḥaḍrat）〔論説〕/Māhrūy Muẓaffarīya/19-20
07）Shihāb ḥaḍrat（Shihāb ḥaḍrat）〔論説〕/Sharīf Ḥusaynuf/20-23
08）Mavlid kūninda（生誕の日に）〔詩〕/Jamāl al-Dīn Yūmāyif/23-24
09）«Chin bilan yālghān»（「真実と嘘」）〔論説〕/24-26
10）Iʻlānlar: ūzīna ʻumrlik ībdash izlachī（広告：自分にとって生涯の仲間を探す者）〔連絡〕/26

2-7号（1915.2.1）

01）Qizlārgha（娘たちへ）〔詩〕/M. Manāf/1
02）Zahra Khānim ṭūghrsindan（Zahra Khānim に関して）〔論説〕/Maḥbūb Jamāl Āqchūrīnā/2-3
03）Ānggh mīngī vaqtda bir tāvish!（分別無き時に声を！）〔論説〕/Kāmila Muẓaffarīya/3-6
04）［Kitāblārgha ḥaqqinda tanqīd（書評）］Suyūn Bīka（スユム・ビケ）〔論説〕/Zakī Valīdī/6-10
05）Qiz bālā（女子）〔詩〕/Mullājān Khāliquf/10
06）Īrkūtskī khānimlārī（イルクーツクの婦人たち）〔論説〕/Qiyām Yūldāshuf/10-12
07）Ātā, ānā va muʻallimalar（父親，母親，女性教師たち）〔論説〕/Khadīja Shammāsīya/12-14
08）Apīktītāsindan（エピクテトスから）〔文学〕/ʻAbd Allāh Sulaymān/14
09）Bālālār tarbīyasī ḥaqqinda（子どもの養育について）〔論説〕/F. Sulaymānīya/14-15
10）Ṭrūskīda Ūchāruflar yūrṭinda yāṣālghān «mavlid kīchasī» munāsabatīla（トロイツクの Ūchāruf 家で行われた「生誕の夜」に関して）〔論説〕/Jamāl al-Dīn Yūmāyif/15-17
11）［ʻIlm-i tarbīya sūzlarī（教育学のことば）］Bālā ūynchiqlārī（子どものおもちゃ）〔論説〕/ʻA. Khaṭṭī/18-19

12）Idāraga maktūblar（編集部への投書）〔論説〕/19-21
13）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/21

2-8号（1915.2.15）
01）Kūzgī chachak（秋の花）〔文学〕/Fātiḥ Sayfī Qazānlī/1-6
02）Āmirīqāda khānimlār qlūbī（アメリカの婦人たちのクラブ）〔論説〕/K. B./6-9
03）«Chīgish ūrnaklarī»（「刺繍の手本」）〔論説〕/Dhākira Sharaf/9-11
04）Khātūnliq īrlik tārṭish（男性性女性性の議論）〔論説〕/Ḥasan al-Dīn Karīmuf/11-14
05）Bāllādā（バラード）〔詩〕/M. Manāf/14-15
06）Ānāsīng qabrī ūstinda（その母の墓の上で）〔文学〕/'A. Ch./15-16
07）Ṣāldāt khātūnīna（婦人兵士へ）〔詩〕/J. Yūmāyif/16-17
08）[ʻIlm-i tarbīya sūzlarī（教育学のことば）] Ūyn ham ish（遊びと仕事）〔論説〕/'A. Khaṭṭī /17-19
09）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/19-20
10）Yūrṭ kīraklarī（家庭の必需品）〔論説〕/20

2-9号（1915.3.1）
01）Kūzgī chachak（秋の花）〔文学〕/Fātiḥ Sayfī Qazānlī/1-7
02）Kimdan bū?（誰からこれが？）〔論説〕/Maḥbūb Jamāl Āqchūrīnā/7-9
03）Āmirīqāda khānimlār qlūbī（アメリカの婦人たちのクラブ）〔論説〕/K. B./9-12
04）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/13-16
05）Ḥurrīyat（自由）〔論説〕/'Abd al-Ḥamīd al-Muslīmī/16-19
06）Fāṭima Farīda Khānimning āvilda vaqtī（Fāṭima Farīda Khānim の村にいた時）〔論説〕/ Marḥabā Bāṭirishīnā/19-20

2-10号（1915.3.15）
01）Khātūn（婦人）〔詩〕/«Tilmāch»/1
02）Fāṭima va āning takāmilī（Fāṭima と彼女の成長）〔文学〕/2-6
03）[Shiʻr（詩）] Qārā khāṭiralār...（暗い記憶…）〔詩〕/'A. Ṣanʻatī/7
04）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/F. Sulaymānīya/7-10
05）〔無題：投書〕〔論説〕/10-14
06）[Shiʻr（詩）] Āpāma（我が姉へ）〔詩〕/M. Abrār Saʻīdī/15
07）Yūrṭ kūtū ṭūrinda（家庭経営について）〔論説〕/15-17
08）Khātūn-qiz masʻalasī munāsabatīla（婦女子の問題に関して）〔論説〕/Ḥaqq/17-20
09）Idāraga maktūblar（編集部への投書）〔論説〕/20-21

2-11号（1915.4.1）
01）Fāṭima va āning takāmilī（Fāṭima と彼女の成長）〔文学〕/1-6
02）Qazān tātārlārīning qārā sūzlarīna 'ā'id yāngā atharlar（カザン・タタールの民俗文学に関する新しい著作）〔論説〕/Aḥmad Zakī Valīdī/6-12
03）...ṣūng（…後）〔詩〕/B. Mīrzānuf/12

04）Turkistānda（トルキスタンで）〔論説〕/K. Muẓaffarīya/13-17
05）Ankama（我が母へ）〔詩〕/M. Abrār Sa'īdī/17
06）Madanī ishlarimiz（文明的な仕事）〔論説〕/Karīm Musharrafuf/18-19
07）Tabrīk（祝辞）〔詩〕/Ruqayya Ibrāhīmuvā/19-20
08）Maktūblar（投書）〔論説〕/20

2-12号（1915.4.15）

01）'Āshiq（恋人）〔詩〕/'A. Ṣan'atī/1
02）Fāṭima va āning takāmilī（Fāṭima と彼女の成長）〔文学〕/2-9
03）Qazān tātārlārīning qārā sūzlarīna 'ā'id yāngā atharlar（カザン・タタールの民俗文学に関する新しい著作）〔論説〕/Aḥmad Zakī Valīdī/10-14
04）Būldiqsizlighibiz（我々の無能さ）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/14-18
05）[Shi'r（詩）] Maḥabbat īchūn（愛のために）〔詩〕/J. Yūmāyif/18
06）Yūrṭ kūtū ṭūrinda（家庭経営について）〔論説〕/Ghavvāṣ Fakhr al-Dīnuf/18-20
07）Muḥtaram mu'allimalar diqqatīna（尊敬する女性教師方々ご注目を）〔論説〕/'Abd al-Ghaffār Luqmānī/20-21

2-13号（1915.5.1）

01）Gulistān（花園）〔詩〕/V. J./1
02）Sū' isti'māl ītmadim（私は悪用しなかった）〔文学〕/Sh. Aḥmadīyif/2-5
03）Tūrkistānda tātār khānimlārī（トルキスタンでのタタール婦人たち）〔文学〕/Kāmila Muẓaffarīya/6-8
04）[Shi'r（詩）] Ānā irkasī（母のお気に入り）〔詩〕/'A. Ṣan'atī/8
05）Qazān tātārlārīning qārā sūzlarīna 'ā'id yāngā atharlar（カザン・タタールの民俗文学に関する新しい著作）〔論説〕/Aḥmad Zakī Valīdī/9-12
06）Ḥifẓ al-ṣiḥḥat（保健）〔論説〕/'A. Fakhrī/12-13
07）[Shi'r（詩）] Ṭūl khātūngha（未亡人に）〔詩〕/M. Abrār Sa'īdī/13-14
08）Ālmās ham qān（りんごと血）〔文学〕/Sh. Ḥusaynuf/14-17
09）Khātūnlārning ijtimā'ī vaẓīfasī（婦人の社会的責務）〔論説〕/'A. Ḥ./17-19
10）Idāraga maktūblar（編集部への投書）〔論説〕/19
11）Truyskīda（トロイスクで）〔論説〕/M. Ṣ./19-20
12）«Maṭbū'āt tīrasīnda yūrugān makhdūmga»（「出版物の周辺をめぐる者へ」）〔論説〕/'A. Ch./20-21
13）Khānimlar īchūn jāylik darslar（婦人たちのための夏季の学課）〔論説〕/21

2-14，15号（1915.5.18）

01）Sū' isti'māl ītmadim（私は悪用しなかった）〔文学〕/Sh. Aḥmadīyif/1-5
02）[Shi'r（詩）] «Āvirū ṭūl khātūnning du'āsī»（「病気の未亡人の祈り」）〔詩〕/Imām al-Dīn Shammāsī/5
03）Qazān tātārlārīning qārā sūzlarīna 'ā'id yāngā atharlar（カザン・タタールの民俗文学に関する新しい著作）〔論説〕/Aḥmad Zakī Valīdī/6-9

04）Dūstlārima（我が友へ）〔詩〕/«Kūkib»/9
05）Qizlār maktabīning prūgrāmmāsīna dā'ir（女子の初等学校のカリキュラムに関して）〔論説〕/9-12
06）Maḥabbat（愛）〔詩〕/'A. Ṣan'atī/12-13
07）Maktablarimiz（我々の初等学校）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/13-14
08）Ālmās ham qān（りんごと血）〔文学〕/Sh. Ḥusaynuf/14-16
09）Ṣūghishda bālā maḥabbatī（戦争での子どもの愛）〔詩〕/M. Manāf/17
10）Ṣūlghān chachak（しおれた花）〔文学〕/M. 'Uthmān/17-23
11）Ḥifẓ al-ṣiḥḥat（保健）〔論説〕/'A. Fakhrī/23-24
12）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/25-26
13）Maktūblar（投書）〔論説〕/26-28
14）Adabīyāt kīchasī（文学の夕べ）〔論説〕/28-29
15）Imtiḥān（試験）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/29
16）Samarqand khātūn qizlārī 'Ālamindan（サマルカンドの婦女子の世界から）〔論説〕/'Abd al-Ḥamīd 'Aẓamatī/30-33
17）Āsh ṣū būlimī（料理欄）〔論説〕/33

2-16，17号（1915.6.25）

01）Shi'r（詩）〔詩〕/N. Dūmāvī/1
02）Sū' isti'māl ītmadim（私は悪用しなかった）〔文学〕/Sh. Aḥmadīyif/2-6
03）«Ṣāghinū»（「淋しさ」）〔詩〕/M. Manāf/6-7
04）Ṣūlghān chachak（しおれた花）〔文学〕/M. 'Uthmān/7-10
05）Ūchām kūkga（私は飛ぶ，空へ）〔詩〕/V. J./10
06）Siyāḥat khāṭiralārī（旅行の思い出）〔論説〕/S. 'Iṣmat/11-12
07）Īrka qiz（わがまま娘）〔文学〕/Fayḍī/12-15
08）[Shi'r（詩）] Qūrqinich kūn...（おそろしい日…）〔詩〕/'A. Bīgī/15
09）Qāzāq 'Iyāllārīning ḥālī（カザクの家族の状況）〔論説〕/Dāmītkan Īrjānīya/16-17
10）Muftī ḥaḍratning vafātī munāsabatī īla（ムフティー猊下のご逝去に関して）〔論説〕/17-19
11）Ḥājī Ṭarkhāndaghī ta'aththrātim（ハジ・タルハンでの私の悲しみ）〔文学〕/'Alā' al-Dīn Jalālī/19-20
12）Ḥifẓ al-ṣiḥḥat（保健）〔論説〕/'A. Fakhrī/20-21
13）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/22-23
14）Fātiḥa Khānima javāb（Fātiḥa Khānimへの返答）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/23-25
15）Vaḥshī «khulfa»ga raddīya（無教養な「嘘」への反論）〔論説〕/25-27
16）Fā'idalī kīngāshlar（有益な忠告）〔論説〕/28

2-18号（1915.7.15）

01）Khātūnlār masjidda...（婦人たちがモスクで…）〔論説〕/Aḥmad Tāj al-Dīn/1-4
02）Ṣūlghān chachak（しおれた花）〔文学〕/M. 'Uthmān/4-8
03）Ṣūngghī zārim（最後の私の嘆き）〔詩〕/B. Mīrzānuf/9
04）Qāriṣ fāji'asī（痛ましい不幸）〔論説〕/Fātiḥ Bakr/10-12

05）Yūqliq dunyāsīning qārāngghīlighindan kīlgān qūnāqlār（無の世界の闇から来た訪問者）〔文学〕/12-15
06）Tanqīdmī? Taqdīrmī?（批判か？評価か？）〔論説〕/Kamāl Nūghāy/15-16
07）Siyāḥat khāṭiralarī（旅行の思い出）〔論説〕/S. ʻIṣmat/17-20

2-20号（1915.8.15）

01）［Shiʻr（詩）］Bahā?（価値？）〔詩〕/N. Dūmāvī/1
02）Ishlarga kīrak（働かねばならない）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/2-3
03）Ṣūlghān chachak（しおれた花）〔文学〕/M. ʻUthmān/3-6
04）«Qābān»da（「カバン」で）〔詩〕/ʻA. Ṣanʻatī/6-7
05）Mīn sīnī ṣāghinām（私はあなたを恋しがる）〔文学〕/ʻA. Bīgī/8-10
06）ʻĀlīya（ʻĀlīya）〔文学〕/Q. Yūldāshuf/10-12
07）Isvichda ibtidā'ī maktablarning prūghrāmmāsī（スウェーデンでの初等学校のカリキュラム）〔論説〕/ʻAbd al-Ḥamīd al-Muslimī/12-14
08）Qūl ishlarī（手芸）〔論説〕/ʻAmmī/15-17
09）Qizlār maktabīning prūgrāmmāsīna dā'ir（女子の初等学校のカリキュラムに関して）〔論説〕/Fāṭima Badrʻīya/18

2-21号（1915.9.1）

01）Ṭabīʻat bāqchasī（自然の庭）〔詩〕/B. Mīrzānuf/1-2
02）Ūqūtū bābinda tūb mas'alasī（教えることに関する基本的問題）〔論説〕/ʻA. ʻIṣmatī/2-3
03）Ṭabīʻat qūchāghinda（自然の抱擁で）〔文学〕/Raḥīm Bāyizīd/4-7
04）［Shiʻr（詩）］Bakhtsiz qiz, ṭūrmish ṭirnāghinda（不幸な娘が生活の爪で）〔詩〕/ʻA. Ṣanʻatī/7-8
05）Bir maẓlūmaning ṭūrmishindan bir yāfrāq（ある抑圧された者の生活から，一枚の葉）〔文学〕/Z. Ḥubbīya/8-9
06）Kīnimātūghrāflārgha yāsh bālālārni ālūb bārū ḥaqqinda bir nīcha sūz（映画に幼い子どもを連れていくことに関する若干のことば）〔論説〕/Ṣaj/9-11
07）ʻĀlīya（ʻĀlīya）〔文学〕/Q. Yūldāshuf/11-12
08）Ḥijāb（ヒジャーブ）〔論説〕/ʻA. ʻAẓamat/12-15
09）Ūfāgha siyāḥat（ウファへの旅行）〔論説〕/Māhrūy Muẓaffarīya/15-17
10）Isvich khātūnlārī（スウェーデンの婦人たち）〔論説〕/17-19
11）Āvil qizlārimiz（村の女子）〔論説〕/Lapayskī/20

2-22号（1915.9.20）

01）Ankām qabrī yāninda（母の墓前で）〔詩〕/B. Mīrzānuf/1-2
02）Asīrlik（捕らわれ）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/2-5
03）Gānārār（稿料）〔文学〕/B./5-13
04）［Shiʻr（詩）］Ṭūtāshgha（娘に）〔詩〕/ʻA. Ṣanʻatī/13
05）Mīnim tārīkhim（我が歴史）〔文学〕/Ḥaqq/14-18
06）Pītrāghrādda khātūn-qiz dunyāsī（ペトログラードでの婦女子の世界）〔論説〕/Zakīya

‘Ābidīya/18-19
07）Ūfāgha siyāḥat（ウファへの旅行）〔論説〕/Māhrūy Muẓaffarīya/19
08）〔無題：広告〕〔論説〕/20

2-23号（1915.10.4）
01）［Shi‘r（詩）］Bayram būlagī（祝祭の贈り物）〔詩〕/M. Abrār Sa‘īdī/1
02）‘Īd-i sharīf mubārak būlsūn（祝祭のお祝いを申し上げます）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/2-3
03）Dunyāning tūrlī pūchmāghinda jighrāfī（世界の様々な場所の地理）〔論説〕/Ḥabīb Allāh Zaynī/4-6
04）‘Ā’ila, tarbīya va ta‘līm（家族，養育と教育）〔論説〕/‘Ammī/7-10
05）Mīnim kūngilim（我が心）〔詩〕/‘Ālimjān Āqchūrīn/10-11
06）Mīnim tārīkhim（我が歴史）〔文学〕/Ḥaqq/11-15
07）Siyāḥat khāṭiralārī（旅行の思い出）〔論説〕/Bāghbistān/15-18
08）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/18-20
09）Fā’idalī kīngāshlar（有益な忠告）〔論説〕/20

2-24号（1915.10.17）
01）Īkī mūng（二つの悲しみ）〔詩〕/‘Ālimjān Āqchūrīn/1-2
02）Yāvrūpālīlār naẓarinda ‘ā’ilalarning ahammīyatī（ヨーロッパ人の見解における家族の重要性）〔論説〕/‘Ammī/3-5
03）Trūyskīda dār al-mu‘allimāt（トロイスクの女子師範学校）〔論説〕/Marfū‘a Ṭūqtāruvā/5-10
04）Siyāḥat khāṭiralārī（旅行の思い出）〔論説〕/Bāghbistān/10-14
05）‘Āshiq（恋人）〔詩〕/B. Mīrzānuf/14
06）Ānkīta, qizlārnī nīchik tarbīya qīlūrgha kīrak?（アンケート，女子をどのように教育せねばならないか？）〔論説〕/Idāra/15-16
07）Ḥifẓ al-ṣiḥḥat ham ṭibb būlimī（保健と医学欄）〔論説〕/16-19
08）Bālālār nīchik āshtūrgha（子どもにどのように食べさせるか）〔論説〕/19-21

3-1号（1915.11.5）
01）Maẓlūma zārī（虐げられし者の訴え）〔詩〕/B. Mīrzānuf/1-2
02）Mu‘allimalikda（教職で）〔文学〕/Fātiḥ Bakr/2-6
03）‘Ā’ila ṭūghrsinda prāfīsūr Būkhnarning mulāḥiẓasī（家族に関する Būkhnar 教授の考察）〔論説〕/‘Ammī/6-9
04）Qāzāchī ham bāshqurd ārāsinda siyāḥat（カザチとバシュコルトの間の旅行）〔論説〕/Bāghbistān/9-14
05）Ūrīnbūrghda khātūnlār（オレンブルグの婦人たち）〔論説〕/‘Abd al-Ḥamīd al-Muslimī/14-17
06）Yāvrūpāda īng bakhtlī khātūnlār（ヨーロッパで最もめぐまれた婦人たち）〔論説〕/17-18
07）Ḥifẓ al-ṣiḥḥat（保健）〔論説〕/19-20

3-2号（1915.11.15）

01）Ṣāghinū（焦がれる）〔詩〕/B. Mīrzānuf/21-23
02）‘Ā’ila ḥāllarī（家族の諸状況）〔論説〕/Bāghbistān/23-26
03）Mu‘allimalikda（教職で）〔文学〕/Fātiḥ Bakr/27-30
04）Ānkītqa javāb（アンケートへの回答）〔論説〕/30-33
05）Buyūk fāji‘a（大きな悲劇）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/34-36
06）‘Iffat Ṭūtāsh ḥaqqinda（‘Iffat Ṭūtāsh に関して）〔論説〕/S. ‘Iṣmat/36-38
07）［Shi‘r（詩）］Qārā kūchlar（黒い力）〔詩〕/M. Abrār Sa‘īdī/38
08）Tātār ūqitūchīlārīna yārdim jam‘īyatī（タタールの教師たちに対する援助協会）〔論説〕/Gul Munavvar Nūghāy/39
09）Idāra–i baytīya ḥaqqinda bir ūṭirish（家庭経営に関する議）〔論説〕/40

3-3号（1915.12.3）

01）Gūl bāqchasinda（花園で）〔詩〕/B. Mīrzānuf/41-42
02）Mashhūra khātūnlārdan Āmina bint Vahab（著名な婦人たちのうちから，Āmina bint Vahab）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/42-44
03）Ānkītqa javāb（アンケートへの回答）〔論説〕/45-48
04）Āvil mu‘allimasīning tūrmishī（村の女性教師の生活）〔詩〕/Isḥāq Bāḥītuf/49-50
05）Qazāndaghī musulmān qāchāqlārgha yārdam kāmītītī va ānda ishlauchī khātūn qizlār（カザンにいるムスリムの避難者たちのための援助委員会とそこで働く婦女子）〔論説〕/50-51
06）Fāṭima Farīda Khānim nāmina qūrilghān maktabka nīgiz qūrū marāsimī（Fāṭima Farīda Khānim の名にちなんで建設される初等学校の定礎の式典）〔論説〕/52-56
07）Ānālārning ‘ā’ila ichindagī va bālālarī qāshindaghī ba‘ḍ ḥāllarī（母親が家族の中におり子どもの側にいることにおける若干の諸状況）〔論説〕/57-59
08）Marḥūma ṭūghānim Nafīsa Bīka rūḥīna（我が親族故 Nafīsa Bīka の御魂に）〔詩〕/Ismā‘īl ‘Ābidī/60

3-4号（1915.12.15）

01）Birinchī ādūmlār（最初の一歩）〔詩〕/Z. R. Līya/61
02）Kharāba（廃墟）〔詩〕/N. Dūmārī/62
03）Bir īkī sūz（若干のことば）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/63
04）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/（F. B. Sulaymānīya）/63-67
05）‘Ā’ila ḥāllarī（家族の諸状況）〔論説〕/Bāghbistān/68-70
06）Ānkītqa javāb（アンケートへの回答）〔論説〕/70-73
07）Ūylār（考え）〔詩〕/Farīda Ibrāhīmuf/73-74
08）Pīnzā gūbīrnāsinda khātūnlār（ペンザ県の婦人たち）〔論説〕/Karīm Musharrafuf/74-76
09）［Shi‘r（詩）］〔無題〕〔詩〕/J. Yūmāyif/76
10）Dunyāning tūrlī yāqlārinda khātūn–qizī ḥālī（世界の様々な地方の婦女子の状況）〔論説〕/77-79
11）...ga（…へ）〔詩〕/Naqī Īsanbat/79
12）Bukhārāda maktabka ijāzat（ブハラでの初等学校への許可）〔論説〕/Zaynab Sa‘dīya/79-80

3-5号（1916.1.1）

01）Mavlid ḥurmatina（御生誕に）〔詩〕/Karīm Musharrafuf/81-82
02）Rūs khātūnlārīning ḥarakatī（ロシア婦人たちの活動）〔論説〕/Y. Khālīlī/82-85
03）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/85-91
04）‘Ā’ila ḥāllarī（家族の諸状況）〔論説〕/Bāghbistān/91-95
05）［Shi‘r（詩）］Mavlid ṭānginda（生誕の暁に）〔詩〕/M. Abrār Sa‘īdī/95
06）Qazāndaghī «kutubkhāna-i islāmīya» va khātūn-qizlār（カザンにある「イスラーム図書館」と婦女子）〔論説〕/Zakīya/96-98
07）Ītāliyada khātūn-qiz（イタリアの婦女子）〔論説〕/98-99

3-6号（1916.1.24）

01）〔無題：祝辞〕〔論説〕/101
02）［Shi‘r（詩）］Maṭbū‘āt-i mavqūta（定期刊行物）〔詩〕/M. Abrār Sa‘īdī/102
03）Maṭbū‘ātning ūn ilī（出版物の十年）〔論説〕/Y. Khalīlī/103-105
04）Maṭbū‘āt-i mavqūtamizning 10 ilī munāsabatīla（我々の定期刊行物の10年に関して）〔論説〕/‘A. Baṭṭāl/106-109
05）Īdīl būyī maṭbū‘ātī（ヴォルガ流域の出版物）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/109-111
06）Ūn il（十年）〔論説〕/Shahīd Aḥmadīyif/111-114
07）Maṭbū‘āt ham khātūn-qiz dunyāsinda ūzgarish（出版物と婦女子の世界における変化）〔論説〕/Fātiḥ Bakr/114-117
08）‘Iffat Ṭūtāshgha（‘Iffat Ṭūtāsh へ）〔論説〕/Sharīfa Tīmurbāy/117-118
09）〔無題：アンケート〕〔論説〕/119

3-7号（1916.2.1）

01）［Shi‘r（詩）］Tūshimda（我が夢で）〔詩〕/Gh. Ṣan‘atī/121
02）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/122-125
03）Ulgān āpām khāṭiralarī（亡くなった我が姉の思い出）〔文学〕/Najīb ‘Aṣrī/126-128
04）‘Ā’ila ḥāllarī（家族の諸状況）〔論説〕/Bāghbistān/128-131
05）Ānkītqa javāb（アンケートへの回答）〔論説〕/131-134
06）［Shi‘r（詩）］Kūnlik daftarimdan（我が日記から）〔詩〕/J. Yūmāyif/134
07）Maktablar, mu‘allima va mu‘allimlarimiz ḥālindan（初等学校および男女教師の状況について）〔論説〕/Karīm Musharrafuf/136-137
08）«Ūn illiq maṭbū‘ātda khātūn qiz» maqālasī munāsabatīla（「十年間の出版物における婦女子」論説に関して）〔論説〕/137-139

3-8号（1916.2.15）

01）［Shi‘r（詩）］Ṭūghānima!（我が親族へ！）〔詩〕/‘A. Bīgī Qazānlī/141
02）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/142-145
03）Ulgān āpām khāṭiralarī（亡くなった我が姉の思い出）〔文学〕/Najīb ‘Aṣrī/145-148
04）Īzdī!（殴った！）〔詩〕/«Aḥsanīya»/148
05）‘Ā’ila ḥāllarī（家族の諸状況）〔論説〕/Bāghbistān/149-152

06）Āstrakhānda qiz bālālārgha makhṣūṣ mavlid（アストラハンの女子のための生誕祭）〔論説〕/Jānbik/152-153
07）[Shi'r（詩）]〔無題〕〔詩〕/'A. Bīgī Qazānlī/153
（欠頁）

3-9号（1916.3.1）
01）[Shi'r（詩）] Ūfā īdilīna（ウファ河に）〔詩〕/N. Dūmāvī/157
02）Ulgān āpām khāṭiralarī（亡くなった我が姉の思い出）〔文学〕/Najīb 'Aṣrī/158-162
03）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/162-165
04）Ṣātilghān qiz（売られた娘）〔詩〕/Jahān Amīrīya/166
05）Muḥtarama Fāṭima Farīda Khānim ḥaqqinda ṣabīliq khāṭirātim（尊敬する Fāṭima Farīda Khānim に関する私の幼い頃の思い出）〔論説〕/Khadīja Dūnāyivā/166-169
06）Fāṭima Farīda Khānimgha īkī il（Fāṭima Farīda Khānim への二年）〔論説〕/Karīma Īshmuḥammaduvā/169-170
07）Ḥakīmlar sūzī（賢者たちの言葉）〔論説〕/171
08）Idāradan javāblār（編集部からの返答）〔連絡〕/171-172

3-10号（1916.3.18）
01）[Shi'r（詩）] Kūl alī!（見よ，今！）〔詩〕/Īsanbat/173
02）Bāqir kūz «Āzād khātūndan»（赤銅の目「自由な婦人」から）〔文学〕/Qāzānlī Fātiḥ Sayfī/174-176
03）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/177-181
04）Yāshligim（我が青春時代）〔詩〕/Fāṭima Jābūsuvā/182
05）Īr bila khātūnning 'ā'iladaghī mushtarak vaẓīfalārī（夫と妻の家庭内での共通の責務）〔論説〕/Bāghbistān/182-184
06）Kārmīn Sīlvā（カルメン・シルヴァ）〔論説〕/B./185-186
07）...ga（…へ）〔詩〕/Kūkib/187
08）Vaqt ghazītasīning ūn ilī（ワクト紙の十年）〔論説〕/Idāra/187
09）Idāradan javāblar（編集部からの返答）〔連絡〕/188

3-11号（1916.4.1）
01）[Shi'r（詩）] Marḥūm shā'irga（亡き詩人へ）〔詩〕/M. Abrār Sa'īdī/189-190
02）Bāqir kūz «Āzād khātūndan»（赤銅の目「自由な婦人」から）〔文学〕/Fātiḥ Sayfī (Qāzānlī)/190-193
03）Īr bilan khātūnning 'ā'iladaghī mushtarak vaẓīfalārī（夫と妻の家庭内での共通の責務）〔論説〕/Bāghbistān/193-195
04）Āghimgha qārshī...!（流れに逆らって…！）〔文学〕/Āqā/195-198
05）Ṭūrmish ūbqūninda（生活の深みで）〔詩〕/Īsanbat/198
06）Ṭabī'ī yūllār birla divālānū（自然な方法での治療）〔論説〕/Aḥmad Ḥabībī/199-201
07）Ūqitūchīlār tīrasinda（教師たちの周囲で）〔論説〕/Iskandarī/201-203
08）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/203-204

3-12号（1916.4.16）

01）Talaf illār（滅びの年々）〔詩〕/B. Mīrzānuf/205-206
02）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/206-208
03）Āghimgha qārshī（流れに逆らって）〔文学〕/Āqā/209-211
04）Vaẓīfalār（責務）〔論説〕/Bāghbistān/212-215
05）［Shi'r（詩）］Shafaqat ṭūtāshlārīna（やさしい令嬢方々に）〔詩〕/Gh. Ṣan'atī/215
06）Ānālār va bālālār tarbīyasī ḥaqqinda（母親と子どもの養育に関して）〔論説〕/A'mad 'Alī Ḥalīmī/216-219
07）'Iffat Ṭūtāshgha javāb（'Iffat Ṭūtāsh への返答）〔論説〕/219-220

3-13号（1916.5.1）

01）［Shi'r（詩）］Yūlda（道で）〔詩〕/N. Dūmāvī/221-222
02）Inglitrada khātūnlār ḥarakatīning tārīkhī（イギリスにおける婦人運動の歴史）〔論説〕/222-225
03）Khātūn qizlār isīyizdī（婦女子の大会）〔論説〕/'Iṣmatī/225-227
04）Ūfā khāṭiralarī（ウファの思い出）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/227-228
05）Ṭūrmishim（我が生活）〔詩〕/Karīm Amīrī/228
06）Āghimgha qārshī（流れに逆らって）〔文学〕/Āqā/229-331
07）Ṭabī'ī yūllār bilan divālānū（自然な方法での治療）〔論説〕/Aḥmad Ḥabībī/232-233
08）Mu'allimalar ūchūn qūrṣlār（女性教師のための課程）〔論説〕/233-234
09）"Kūkhna yāninda bāqcha"（" 台所の側にある菜園 "）〔論説〕/Mīrsayyid Qarīm/234-236
10）Yīr yūzinda būlghān khātūnlārning ṣānī（地球上にいる婦人の数）〔論説〕/236

3-14号（1916.5.15）

01）［Adabīyāt qismī（文学の部）］Umīd yūldizīna（希望の星に）〔詩〕/B. Mīrzānuf/237
02）«Āzāda khātūn»（「自由な婦人」）〔文学〕/Fātiḥ Sayfī Qazānlī/238-241
03）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Inglitrada khātūnlār ḥarakatīning tārīkhī（イギリスにおける婦人運動の歴史）〔論説〕/Y. Khalīlī/242-245
04）Ṣāyrā!（歌え !）〔詩〕/Īsanbat/245
05）［Tarbīya qismī（教育の部）］Bizning būrchimiz（我々の義務）〔論説〕/Amīr 'Alī Ibrāhīmuf/246-247
06）Bālālār nīlikdan yālghānīlār（子どもたちはなぜ嘘をつくのか）〔論説〕/247-249
07）Qizlārimiznī tarbīya va ta'līm ishī（我らが女子を養育し教育する仕事）〔論説〕/Karīm Musharrafuf/249-251
08）Fāṭima Khābūsuvā javābī（Fāṭima Khābūsuvā の返答）〔論説〕/Fāṭima Khābūsuvā/251-252
09）Zīlāylūkga（Zīlāylūk へ）〔詩〕/Zukām/252

3-15，16号（1916.6.15）

01）Ḥāḍirgī vaqtqa bir qārāsh（現在に対するある観点）〔論説〕/Y. Khalīlī/253-257
02）［Adabīyāt qismī（文学の部）］Ṭūtqin bilbilim（囚われの我が小夜鳴き鳥）〔詩〕/B.

Mīrzānuf/257-258
03）«Āzād khātūn»（「自由な婦人」）〔文学〕/Fātiḥ Sayfī Qazānlī/258-261
04）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/262-264
05）Kūzlarī（瞳）〔詩〕/Īsanbat/265
06）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Īr-khātūn mas'alasīna tūbdanrak qārāsh（夫と妻の問題に対するより根本的な観点）〔論説〕/'A. Y./265-268
07）Ilīzavītā Blūkīil（エリザベス・ブラックウェル）〔論説〕/268-271
08）［Tarbīya qismī（教育の部）］Bālānī tarbīya ītū（子どもを養育すること）〔論説〕/Bāghbistān/272-283
09）Bākūdan tūrkistāngha（バクーからトルキスタンへ）〔論説〕/F. Sulṭānbik/272-283
10）«Ṭabī'ī yūllār bilan divālānū»（「自然な方法での治療」）〔論説〕/Aḥmad Ḥabībī/275-281
11）Frūktālārdan vārīniya（果物のジャム）〔論説〕/281-283
12）〔無題：編集部から投稿者への返答〕〔連絡〕/284

3-17号（1916.7.15）

01）［Adabīyāt qismī（文学の部）］Yāzighī tāngda（春の夜明けに）〔詩〕/Īsanbat/285
02）Ṣūngghī mīnūtlār（最後の瞬間）〔文学〕/M. Aḥmar/286-290
03）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Īr-khātūn mas'alasīna tūbdanrak qārāsh（夫と妻の問題に対するより根本的な観点）〔論説〕/'A. Y./290-293
04）［Tarbīya qismī（教育の部）］'Ā'ila va āning vaẓīfalārī（家族とその責務）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/293-299
05）［Fīliyatūn（戯評）］Bakūdan tūrkistāngha（バクーからトルキスタンへ）〔論説〕/F. Sulṭānbik/294-298
06）Bālālār tarbīyasī（子どもの養育）〔論説〕/299-300
07）Marḥūma mu'allima Kāmila Khānim Muẓaffarīya（女性教師故Kāmila Khānim Muẓaffarīya）〔論説〕/Idāra/300

3-18号（1916.7.18）

01）Khātūnlār vaẓīfasī（婦人たちの責務）〔論説〕/Sh. A./301-304
02）［Adabīyāt qismī（文学の部）］Ṣīrdaryā būyinda（シルダリア河畔で）〔詩〕/M. Manāf/304-306
03）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/306-309
04）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Frānsiyada khātūnlār ūyghānūvīning tārīkhī（フランスにおける婦人たちの覚醒の歴史）〔論説〕/310-315
05）［Fīliyatūn（戯評）］Ūfāda mu'allimalar qūrṣīning imtiḥānī（ウファでの女性教師の課程の試験）〔論説〕/Qiyām Yūldāshuf/310-313
06）Marḥūma Kāmila Khānim Muẓaffarīya（故 Kāmila Khānim Muẓaffarīya）〔論説〕/316

3-19号（1916.8.1）

01）［Adabīyāt qismī（文学の部）］［Shi'r（詩）］Chachak（花）〔詩〕/J. Yūmāyif/317
02）Dunyā yārāṭilghānda（世界が創造されることで）〔文学〕/B. Mīrzānuf/318-319

03）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/320-322
04）Pārākhūdda（汽船で）〔詩〕/Sūnchalay/322
05）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Millī tārīkhī（民族的歴史）〔論説〕/323-324
06）［Tarbīya qismī（教育）］‘Ā’ilaning niqlighī nī birla?（家族の堅固さは何によって？）〔論説〕/Raḥīm Ātnābāyif/324-331
07）［Fīliyatūn（戯評）］«Ālā ṭāu» būyinda（「アラ・タウ」麓で）〔論説〕/F. Sulṭānbik/325-330
08）［Maktūblar（投書）］〔論説〕/331-332

3-20，21号（1916.9.1）

01）Ṣūghish ham khātūnlār（戦争と婦人たち）〔論説〕/333-337
02）［Adabīyāt qismī（文学の部）］Shi‘r（詩）〔詩〕/Maḥmūd Badīlī/337
03）Ūchītil ham yūghālghān īdīyāl（教師と失われた理想）〔文学〕/Burhān Manṣūr/337-342
04）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/342-345
05）Ūl（彼女）〔詩〕/K. Amīrī/345-346
06）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Ūlūn Bīka（Ūlūn Bīka）〔論説〕/Sh. A./346-348
07）Pītrāghrād Lāzārītindan（ペトログラードの病院から）〔論説〕/Ḥalīm ‘Umaruf/348-355
08）［Fīliyatūn（戯評）］Bakūdan tūrkistāngha（バクーからトルキスタンへ）〔論説〕/F. Sulṭānbik/349-354
09）［Khabarlar qismī（諸情報の部）］〔論説〕/355-356

3-22号（1916.9.24）

01）Kīl īrkam!（来い，愛しい人よ！）〔詩〕/M. Sa‘īdī/357
02）Āzād khātūn（自由な婦人）〔文学〕/Fātiḥ Sayfī Qazānlī/357-362
03）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/363-366
04）［Fīliyatūn（戯評）］Ṣū qizī（水の娘）〔文学〕/M. D./366-372
05）...ga（…へ）〔詩〕/Ilhām/367
06）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Bīrtāfūn–Zūtnīr（ベルタ・フォン・ズットナー）〔論説〕/368-371
07）Marḥūma Sāra ‘Iṣmat（故 Sāra ‘Iṣmat）〔論説〕/Qāyghirūchī/371-372

3-23号（1916.10.19）

01）Qir abīyī（野のおばあさん）〔文学〕/M. Sa‘īdī/373-377
02）Ṣūfya Bīka ham ānāsī（Ṣūfya Bīka とその母）〔論説〕/Sh. A./377-381
03）［Fīliyatūn（戯評）］Ṣū qizī（水の娘）〔文学〕/M. D./379-387
04）Dunyāning tūrlī pūchmāghinda khātūn–qiz（世界の様々な片隅での婦女子）〔論説〕/Ḥ. Zaynī/382-386
05）Ūfāda kūrgānlarim（ウファで私が見たもの）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/387-388

3-24号（1916.10.24）

01）Ṭūrmish nī bilan mas‘ūd?（生活は何によって幸福か？）〔論説〕/Y. Khalīlī/389-391

02）Dūstīma（我が友へ）〔詩〕/B. Mīrzānuf/392
03）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/392-394
04）［Tarbīya qismī（教育の部）］‘Ā’ila va āning vaẓīfasī（家族とその責務）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/395-403
05）［Fīliyatūn（戯評）］Ṣū qizī（水の娘）〔文学〕/M. D./398-403
06）3 mīlyārdliq yāngā zāyūm（30億の新しい国債）〔論説〕/404

4-1号（1916.11.20）

01）Qizlārgha millī gīmnāziya（女子のための民族的なギムナジア）〔論説〕/Y. Khālīlī/1-5
02）Qiz bālā（女の子）〔詩〕/Īsanbat/6
03）Tātār khātūn-qizlārī（タタールの婦女子）〔論説〕/‘Alī Aṣghar Ghafūruf/7-10
04）Tīflīs khāṭirasī（チフリスの思い出）〔論説〕/Ṣābirjān Ḥājī ‘Arabshāh Ūghlī ‘Abbāsuf Ayāgūzī/11-15
05）［Fīliyatūn（戯評）］Ṣū qizī（水の娘）〔文学〕/M. D./11-14
06）Muslimalar gīmnāziyasī（ムスリマたちのギムナジア）〔論説〕/F. B. Sulaymānīya/16

4-2号（1916.11.20）

01）Ūqitūchū qiz（教師である娘）〔詩〕/Īsanbat/17-18
02）Shahrda（街で）〔文学〕/Viqāṣ/19
03）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Sūyum Bīka（Sūyum Bīka）〔論説〕/Sh. A./20-21
04）Javāb kūtam（私は返事を待つ）〔詩〕/Fīyilām/22
05）Sūyiklīma bāghishlīm（我が恋人に捧げる）〔詩〕/Ṣ. Ḥājī ‘Arabshāh Ūghlī Ayāgūzī/
06）Tīflīs khāṭirasī（チフリスの思い出）〔論説〕/Ṣābirjān Ayāgūzī/23-24
07）［Fīliyatūn（戯評）］Ṣū qizī（水の娘）〔文学〕/M. D./24-29
08）‘Ā’ila va āning vaẓīfalārī（家族とその責務）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/27-30
09）Khāṭira（思い出）〔文学〕/Ṣ. J./31
10）Gīrmāniyaning islāmgha īkī yāqlī qārāshī（ドイツのイスラームに対する二通りの観点）〔論説〕/32

4-3，4号（1916.12.15）

01）Īl yūldizī（祖国の星）〔詩〕/Īsanbat/33
02）Quraysh qizī（Quraysh の娘）〔文学〕/F. B. Sulaymānīya/34-37
03）Vaṭan yūlinda, Nāpālyūnning pūlshalī khātūnī（祖国のために，ナポレオンのポーランド人夫人）〔論説〕/38-41
04）Yāndirilghān khaṭṭ（燃された手紙）〔詩〕/J. Yūmāyif/41-42
05）［Tārīkh qismī（歴史の部）］Sūyum Bīka（Sūyum Bīka）〔論説〕/Sh. A./43-46
06）Yatīma（孤児）〔詩〕/Dhī al-Nūr ‘Īsā/46
07）Ḥāllarimiz bīk āchiniqlī（我々の状況は非常に悲しい）〔論説〕/Qirīmlī Amīna Rashīduvā/47-48
08）Birinchī qār（初雪）〔詩〕/Gulzārskī/49
09）Tābilghān khaṭṭ（見つけられた手紙）〔文学〕/Z. N./49-50

10）Āvilda qizlār maktabī（村での女子の初等学校）〔論説〕/Ṣ. Ayāgūzī/51-56
11）［Fīliyatūn（戯評）］Ṣū qizī（水の娘）〔文学〕/M. D./52-58
12）‘Ā’ila va āning vaẓīfalārī（家族とその責務）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/57-60
13）«Millī kīmnāziya» ṭūrsinda bir īkī sūz（「民族的ギムナジア」に関する若干のことば）〔論説〕/Khadīcha Ūrskī/60-61
14）Fāṭima Khānima bāghishlīm（Fāṭima Khānim に捧げる）〔詩〕/Ruqayya Ibrāhīmuvā/61
15）Khānimlār diqqatīna（ご婦人方ご注目を）〔論説〕/61-62
16）Yārdam ītīk alī（援助しよう，今）〔論説〕/62-63

4-5号（1917.1.10）

01）［Shi‘r（詩）］〔無題〕〔詩〕/Maḥmūd Badīlī/65
02）Vaṭan yūlinda, Nāpālyūnning pūlshalī khātūnī（祖国のために，ナポレオンのポーランド人夫人）〔論説〕/Ṣ. J./66-71
03）Ṣūghish ham musulmān īlī（戦争とムスリム地域）〔論説〕/‘Ārif Ālpāruf/71-73
04）Shafākhānada（病院で）〔論説〕/F. Sulṭānbik/73-75
05）‘Ā’ila va āning vaẓīfalārī（家族とその責務）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/75-77
06）Āvillārda qizlār maktabī（村での女子の初等学校）〔論説〕/Ṣ. Ayāgūzī/78-80

4-6号（1917.1.28）

01）Sūngān yūldiz（消えた星）〔詩〕/B. Mīrzānuf/81
02）Tātār qiz（タタールの娘）〔文学〕/Burhān Manṣūr/82-83
03）Maktab kitāblārimizda rasmlar（初等学校の本の中の絵）〔論説〕/‘A. Baṭṭāl/83-87
04）Bāghishlāb（捧げて）〔詩〕/«Kūkib»/87
05）‘Ā’ila va āning vaẓīfalārī（家族とその責務）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/87-93
06）Ṣū qizī（水の娘）〔文学〕/M. D./88-95
07）Maryam Ṭūtāsh Raḥmānqūluvāgha i‘ānalar（Maryam Ṭūtāsh Raḥmānqūluvā への寄付）〔論説〕/94-96

4-7，8号（1917.2.15）

01）Ṣūlghān chachak（しおれた花）〔詩〕/B. Mīrzānuf/97-100
02）Shafaqat ṭūtāshī（やさしいお嬢さん）〔文学〕/Fātiḥ Bakr/100-104
03）Pūchṭa ūynāghānda（郵便遊びで）〔文学〕/J. Y./104-106
04）Kishī tāvishī（人の声）〔詩〕/Īsanbat/106
05）Maktab kitāblārimizda rasmlar（初等学校の本の中の絵）〔論説〕/‘A. Baṭṭāl/107-111
06）‘Ā’ila va āning vaẓīfalārī（家族とその責務）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/112-115
07）Qārt bābāy（老人）〔文学〕/F. Ibrāhīmuf/116
08）Ḍiyā’（Ḍiyā’）〔文学〕/M. Ūqmāṣī/116-119
09）Kāzāchī khātūn qizlārī（カザチの婦女子）〔論説〕/N./119-121
10）Ṭūrmishimizdaghī qārānghī bir lavḥa（我々の生活における暗い一枚の図）〔論説〕/F. B./121-122
11）Ūrinlī bir tavṣīya（適切な勧め）〔論説〕/‘Alī Qūlāṭqī/122-124

12）Bukhārāda khātūnlār（ブハラでの婦人たち）〔論説〕/Zaynab Mūsā qizī Avḥadīyivā/124-125
13）Maktūblar（投書）〔論説〕/125-127
14）Maryam Ṭūtāsh Raḥmānqūluvāgha kīlgān iʻānalar（Maryam Ṭūtāsh Raḥmānqūluvā へ届いた寄付）〔論説〕/127-128

4-9号（1917.3.15）

01）Būyūk rīvālyūtsya（大革命）〔論説〕/ʻA. Baṭṭāl/129-135
02）Khātūnlārning ḥāḍirgī vaẓīfalārī（婦人の現在の責務）〔論説〕/Y. Khalīlī/136-138
03）Ḥurrīyat dunyāsinda（自由の世界で）〔論説〕/Shahīd Aḥmadīyif/138-142
04）Musulmān khātūnlārīning tāvishlārī（ムスリムの婦人たちの声）〔論説〕/142-143
05）Khātūnlārgha tīgiz ḥuqūq（婦人たちに平等な権利を）〔論説〕/143-144
06）Maryam Ṭūtāsh Raḥmānqūluvāgha iʻānalar（Maryam Ṭūtāsh Raḥmānqūluvā への寄付）〔論説〕/144-裏表紙

4-10号（1917.4.6）

01）«Ḥurrīyat ānāsī» Brīshkū-Brīshkūfskāyā（「自由の母」ブレシュコ・ブレシュコフスカヤ）〔論説〕/145-147
02）Yāngārghān rūsyada（新生ロシアで）〔論説〕/ʻA. Baṭṭāl/147-150
03）Khātūnlārdaghī ṣāylāu ḥuqūqī（婦人たちの選挙権）〔論説〕/Shahīd Aḥmadīyif/151-153
04）Āzād khātūn（自由な婦人）〔論説〕/Y. Kh./154-156
05）Inqilāb kūnlarinda tātār khātūn-qizlārī（革命の日々におけるタタールの婦女子）〔論説〕/157-159
06）Khātūn-qizning ḥāḍirgī aḥvālī ḥaqqinda maṭbūʻāt fikrī（婦女子の現在の諸状況に関する各出版物の考え）〔論説〕/159-裏表紙
07）Maryam Ṭūtāsh Raḥmānqūluvāgha iʻānalar（Maryam Ṭūtāsh Raḥmānqūluvā への寄付）〔論説〕/裏表紙

4-11，12号（1917.5.10）

01）Maḥabbat imishī（愛の果実）〔詩〕/B. Mīrzānuf/161-162
02）Musulmān grāzhdānlār!（ムスリムの市民たちよ！）〔論説〕/163-164
03）Muslima qardashlarimizga（我らがムスリマ同胞へ）〔論説〕/«Ṭūtāshlar»/164-165
04）Maskav muslimalarī kāmītītī ṭarafindan khiṭābnāma（モスクワのムスリマたちの委員会からの文書）〔論説〕/165-166
05）Qazāndaghī ʻumūmī muslimalar isīyizdī（カザンでの全ムスリマ大会）〔論説〕/Y. Khalīlī/166-174
06）Samarqandda muslimalar jīyilishī（サマルカンドでのムスリマたちの集会）〔論説〕/ʻAbd al-Ḥamīd ʻAẓamat/175-176
07）Ūqitūchūlār isīyizdī（教師たちの大会）〔論説〕/Qiyām Yūldāsh/177-179
08）Khātūnlārning tūzūchī（婦人の法制定）〔論説〕/Viqāṣ/179-181
09）Ḥurrīyat munāsabatī īla（自由に関して）〔論説〕/Ṣābirjān Ayāgūzī/181-183

10）Mamādish jīyilishī（ママディシュの集会）〔論説〕/‘Ālīya Faẓlullīnā, Fakhrī Salīmuvā/183-184
11）Mu‘allimalar qūrṣī（女性教師の課程）〔論説〕/185-186
12）Khātūnlārning sāylāugha qātishulārīna sharī‘at yāghindan qārāsh（婦人の選挙への参加についてシャリーアからの観点）〔論説〕/187-189
13）Yāngā ghazītalar（新しい新聞）〔論説〕/189-192
14）Īkinchī mu‘allimalar qūrṣī āchilā（二回目の女性教師の課程が開講する）〔論説〕/192-（欠頁）

4-15号（1917.8.14）

01）〔無題：詩〕〔詩〕/Maḥmūd Badīlī/217
02）Millī va madanī mukhtārīyat（民族的文明的自治）〔論説〕/Y. Khalīlī/218-221
03）Khātūn-qiz mas’alasī（婦女子の問題）〔論説〕/Amīna Shams al-Dīnīya/221-222
04）Khātūnlar mas’alasī（婦人問題）〔論説〕/‘Abd al-Ḥayy Dīnmuḥammad/223-227
05）Khātūnlār ḥurrīyatī（婦人の自由）〔論説〕/227-230
06）‘Ā’ila va āning vaẓīfalārī（家族とその責務）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/231-232

4-16号（1917.9.3）

01）Ḥurrīyat kūnlarinda（自由の日々で）〔詩〕/B. Mīrzānuf/233
02）Khātūnlar mas’alasī（婦人問題）〔論説〕/‘Abd al-Ḥayy Dīnmuḥammad/234-239
03）Khātūn-qiz ḥaqqinda（婦女子に関して）〔詩〕/Shaykh Allāh Zīna/239
04）Khātūnlārning masjidga yūrūlarī ḥaqqinda（婦人たちがモスクへ行くことに関して）〔論説〕/Muṣṭafā Ṣidqī/240-241
05）Ṣūghish（戦争）〔詩〕/Karīma ‘Uthmānuvā/242
06）Tatūshinda mu‘allimalar qūrṣī（テテュシでの女性教師の課程）〔論説〕/Ṣaj/242-244
07）‘Izrā’īl（‘Izrā’īl）〔文学〕/Ṣadrī Jalāl/244-248
08）Mu‘allima kīrak kishīlarga（女性教師を必要とする方々へ）〔連絡〕/Idāra/248

4-18号（1917.12.10）

01）Ṣūghishda（戦争で）〔詩〕/‘A. Luṭfī/263-267
02）［Adabīyāt（文学）］Jānbūlā ṭāuvinda（Jānbūlā ṭāuvi で）〔文学〕/Kan/267-269
03）Ūchrīdītinī ṣābrāniyaga ṣāylāulār āldinda（憲法制定会議への選挙の前に）〔論説〕/Falak Zāda/270-271
04）Khalq qūrūltāynda muslima tilagī（人民会議でのムスリマの願い）〔論説〕/Khīrūk/271-273
05）Ūchrīdītinī ṣābrāniya va musulmān khātūnī（憲法制定会議とムスリム婦人）〔論説〕/Rūsya muslimalarī markaz byūrāsī/273-275
06）Khātūnlārning ṣāylāugha qātishūlārī tīyish（婦人たちの選挙への参加は必須である）〔論説〕/‘Ālimjān bin Muḥammadjān al-Bārūdī al-Muftī
07）Ṭūqiz āyliq ḥisāb（九ヶ月間の総括）〔論説〕/Y. Khalīlī/276-279
08）Birdan ārtiq khātūn ālū ḥaqqinda（一人より多く妻を娶ることについて）〔論説〕/

‘Ālimjān bin Muḥammadjān al-Bārūdī al-Muftī, qāḍīlār/280

09）［Ḥifẓ al-ṣiḥḥat（保健）］Ṭāzārinū（健康になること）〔論説〕/Raḥīmjān Ātnābāyif/280-282

10）Idāradan（編集部より）〔連絡〕/282

参 考 文 献

一次資料

Suyum Bike, Kazan, 1913-1917.

二次資料

Battal-Taymas, Abdullah. 1988. *Kazan Türkleri: Türk tarihinin hazîn yaprakları*, 3. basım, Ankara, (1. basım, İstanbul, 1925).

Bennigsen, Alexandre et Lemercier-Quelquejay, Chantal. 1964. *La presse et le mouvement national chez les Musulmans de Russie avant 1920*, Paris/La Haye.

Dudoignon, Stéphane A. and Komatsu, Hisao (ed.). 2001. *Islam and Politics in Russia and Centtral Asia (Early Eighteenth to Late Twentieth Centuries)*, London/New York/Bahrain.

Kanlidere, Ahmet. 1997. *Reform within Islam: The Tajdid and Jadid Movement among the Kazan Tatars (1809-1917): Conciliation or Conflict?*, Istanbul.

Khasanov, M.Kh. (gl.red.). 1999. *Tatarskii entsiklopedicheskii slovar'*, Kazan'.

Kırımlı, Hakan. 1996. *National Movements and National Identity among the Crimean Tatars (1905-1916)*, Leiden/New York/Köln.

Lazzerini, Edward J.. 1973. “Ismail Bey Gasprinski and Muslim Modernism in Russia, 1878-1914.”, Ph. diss., University of Washington.

Rorlich, Azade-Ayşe. 1986. *The Volga Tatars: A Profile in National Resilience*, Stanford.

Türkoğlu, İsmail. 2000. *Rusya Türkleri arasındaki yenileşme hareketinin öncülerinden Rızaeddin Fahreddin (1858-1936)*, İstanbul.

小松久男　1998 「危機と応戦のイスラーム世界」『岩波講座世界歴史21イスラーム世界とアフリカ』，３-78頁，岩波書店。

――――（編）　2000 『新版世界各国史４中央ユーラシア史』，山川出版社。

西山克典　2002 『ロシア革命と東方辺境地域―「帝国」秩序からの自立を求めて』，北海道大学図書刊行会。

山内昌之　1991 『ラディカル・ヒストリー―ロシア史とイスラム史のフロンティア』，中央公論社。

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【資料・研究ノート】

パプアニューギニアをめぐる華人の移動とコミュニティの変遷過程

市　川　　哲
(立教大学大学院)

Transformation of Chinese Migration Patterns and Their Community in Papua New Guinea

Ichikawa, Tetsu
Graduate School, Rikkyo University

The aim of this paper is to discuss the transformation process of Chinese migration patterns and the change of their community in Papua New Guinea (PNG). With the shifts in the migration and settlement patterns, the ethnic Chinese community in PNG have changed its characteristics. This paper deals with these changing patterns.

The origin of the ethnic Chinese society in PNG goes back to the colonial period. In 1884, Britain and Germany occupied the southeast and northeast parts of New Guinea respectively. German administration began to introduce Chinese labor to develop the economy of their colony from 1899. Under the German rule some Chinese immigrated to and established communities in New Guinea.

Chinese immigration and settlement were transformed under the Australian rule. At the outbreak of World War I, the Australian army took over German New Guinea and put it under their control. Australia applied a 'White Australian Policy' in their colony and limited Chinese immigration to the New Guinea area. Nevertheless, the Chinese kept bringing their spouses and children from China to New Guinea and continued to send their children to Hong Kong and some cities in China for higher education.

This relationship between the New Guinea Chinese and China stopped during World War II. The Japanese army occupied some parts of New Guinea from 1942 to 1945 and the Chinese were dominated by them. During the Japanese occupation, these Chinese could not maintain make contact with China.

After the war, the Chinese relationship with China and Australia drastically changed. In this period, New Guinean Chinese changed their orientation from China to Australia. It became difficult for New Guinean Chinese to visit and send their children to China because of the social and political disorder in Mainland China. As a result, the Chinese started sending their children to Australia for higher education. In the latter 1950s, Chinese in New Guinea were allowed to

Keywords: Papua New Guinea, ethnic Chinese, migration, settlement, community
キーワード：パプアニューギニア，華人，移動，定住，コミュニティ

apply for Australian citizenship because of a change in Australian policy. After acquiring citizenship, the Chinese became able to go to Australia freely.

This Australian orientation was accelerated after the independence of PNG in 1975. Before independence, a number of Chinese started leaving PNG for Australia. They were anxious about their social status as an ethnic minority in a newly independent country and afraid of persecution by local people.

After independence the Chinese communities in PNG changed their composition. As the PNG economy deteriorated and the law and order problem became serious in the 1990s, most PNG-born Chinese left for Australia. On the other hand, in 1980s, new Chinese immigrants arrived in PNG. They came not only from China but also from Malaysia, Singapore, Indonesia, Taiwan, Hong Kong and so on. These new immigrants do not always settle in PNG permanently. They often return to their mother countries and some of them re-migrate to third countries such as Australia and New Zealand. Consequently, Chinese communities in present PNG are more diversified and less settled than the ones in the colonial period.

1 問題の所在
2 ドイツ，イギリス，オーストラリアによるニューギニア島の植民地化（1884年～1914年）
3 オーストラリアによるニューギニアの植民地統治（1914年～1942年）
4 太平洋戦争と日本軍による占領（1942年～1945年）
5 戦後から独立に到る過程（1945年～1975年）
6 パプアニューギニア独立以降（1975年以降）
7 考察

1 問題の所在

移民社会はある地域から別の地域へと移動し生活する人々によって形成される。そのため人の移動は移民社会の成り立ちに関わる重要な要因となる。移動の経緯やその形態は，個々の移民社会に様々な影響を与えることとなる。

移動と同時に，居住国での定住化の過程も，移民社会を特徴付ける重要な要因の一つである。ある地域から別の地域へ移動した人々によって形成されたコミュニティも，移住先で定着し世代を経ることによって，定住化，現地化の過程を辿り，次第にその性格を変容させてゆく。そのため，移民社会を対象とした研究を行う際には，移民送出地域の延長としての性格に拘泥するのではなく，移民社会の現地化に代表される，移民送出地域とは異なった，移民社会独自の性格の現出に注目する必要がある。

このように移動と定住という二つの過程は移民コミュニティの性格に影響を与えるため，個別地域の移民社会の変遷過程を検討する際には，移動と定住の二つを共に視野に入れる必要がある。いわば，個別の移民社会における人の移動過程と定住過程の相互交渉に注目する視点が求められるのである。

本稿が対象とする華人社会も，移民及びその子孫によって形成される社会である。世界各地の華人社会は中国人が移動し定住することによって形成された。だが中国と華人社会との関係は，必ずしも固定したままであると

は限らない。中国からの移民の流入や，華人社会からの再移動といった現象は，華人社会の構成そのものに影響を与え，変化させることとなるからである。新規の移民が存在しない華人社会の場合は，居住地での現地化や定住化が華人社会の地域的特徴を形成する上の重要な要因の一つとなる。だが新規移民が流入し続ける場合や，あるいは移民社会から再び別の地域へと移出して行く人々が存在する場合には，移民社会の地域的な特徴は移動と密接な関係を持つこととなる。そのため新規移民や再移民が存在する華人社会は，他地域の華人社会との交流が存在することとなる。そうした場合，当該する華人社会は，人の移動と定住の二つから影響を受け，不断にその性格を変化させ続けることに注意しなければならない。

このように，中国人の国際移動とそれにともなって形成される海外の華人社会は，移動パターンや居住地の政治的・社会的脈絡によって様々な影響を受ける。そのため各地域の華人社会の性格には地域的なバリエーションが存在する。華人の国際移動とそれに伴う華人社会の形成や変容という現象も，必ずしも時代や地域を越えて共通するだけではなく，個別地域ごとに地域的な偏差を伴い，また時間を経ることによって変化する性格を持っている[1)]。

本稿ではこの華人の移動と定住が華人社会に与える影響についての考察を行なうために，パプアニューギニアの華人社会を事例として選択し，華人の移動とコミュニティの歴史的な変遷過程についての検討を行なう。パプアニューギニアはかつてオーストラリアによって植民地統治を受けていた経歴を持つため，現在でもオーストラリアと密接な関係を持っている。またパプアニューギニアの華人社会は東・東南アジア地域とオセアニア地域をめぐる華人の国際移動から影響を受けてきた。従来，東・東南アジア諸国からオーストラリアやニュージーランドといった国々への華人の移動に関する研究は行われてきたが[2)]，そ

1) Wang Gungwu は18世紀から20世紀後半までの比較的長期にわたる華人の国際移動に注目することにより，華商パターン，華工パターン，華僑パターン，華裔パターンの四つのタイプ分けを行なっている（Wang 1991）。さらに Wang は，中国人移民の歴史的な変遷過程を検討する中で，移民の送出国と受入国の双方における移民に対する政策の変遷が，移民の性格や地位に影響を与え，変化させることを指摘している（Wang 1998）。また游仲勲は，国際移動に注目することにより，華僑・華人史の時代区分を行なっている。彼は1949年の新中国成立を境として，中国人の自由な国際移動が不可能となり，その結果現地生まれの２世，３世等が大部分となるに至ったことが大きな分岐点となったと指摘する。そして1949年以前の時期を全て同一時期の第１期とし，中国からの移動が不可能になり，華僑が華人となっていった時期を第２期，1979年からの「経済改革・対外開放」への政策転換によって次第に増加した「新移民」や「新華僑」が誕生する時期を第３期としている。また21世紀になり，中国の WTO 加盟や一人っ子政策の緩和，中国西部地域の開拓等の要因により，中国人の移動は第４期を迎えることになったと述べる（游 2001）。Wang や游がそれぞれ指摘するように，華人の国際移動にもそれぞれの時代の送出地域，受入地域における政治的・社会的な状況や，華人社会を取り巻く国際関係が影響を与え，時代ごとに国際移動の形態を変化させることに注意せねばならない。

2) 近年のオーストラリアへ移入する華人の特徴として，中国大陸出身者のみならず，台湾や香港，マカオ，ベトナム，マレーシア，シンガポール，インドネシア，東ティモール等，東・東南アジアの様々な国や地域出身の華人が増加していることが指摘されている（e.g. 游 2000a, 2000b. Coughlan 1996. Inglis, Gunasekaran, Sullivan & Wu 1992. Jupp 1998, p.128）。現在でもオーストラリア各地では新たに移住してきた華人を成員とした各種の会館も形成されており，その中には会員の多くをマレーシア華人やインドシナ華人が占めるものもある（方・許 1995, p.532, 534）。そのため，現在のオーストラリア華人社会を対象とした研究では，中国・オーストラリア間以外にも，他のアジア地域の華人社会とオーストラリアとの相互関係に注目した研究が増加してきている。ただし，アジア以外の地域とオーストラリアとの関係，特にオセアニア諸国からオーストラリアへの華人の移入や，これらの地域の華人社会とオーストラリア華人社会との関係について扱った研究は非常に少ない。

れ以外のオセアニア地域と東・東南アジア地域とを結ぶ華人の国際移動に関する研究は少なかった。本稿は太平洋島嶼国家であるパプアニューギニアにおける華人社会の変容過程，およびパプアニューギニアをめぐる華人の国際移動の変容過程の二つに注目することにより，前述した華人の国際移動と華人コミュニティとの相互関係について考察することを目的とする。

本論に入る前に，「華人」という人々の範疇について定義しておきたい。「華人」という言葉は現在，海外に在住する中国系人の総称として使用されている。だが海外に在住する中国人は，その出国の契機や移住形態が歴史的に変化しており一様ではない。また移住先のホスト社会との関係によって，文化的・社会的な特徴を変化させており，地域的な偏差が存在する。現在では中国国籍を持った移民第一世代を「華僑」，居住国の国籍を取得し，定住化の過程にある人々を「華人」と大まかに区別する傾向がある。だがこのような区分自体，「華人」というカテゴリーが歴史的な産物であり，変化し続ける存在であることを意味している（c.f. 戴 1980. 陳 1985. 荘 1985. Suryadinata 1997）。

本稿はこのような歴史的に変化し続け，様々な地理的な偏差をともなうエスニックなカテゴリーである，海外に在住する中国系人の移動とコミュニティとの相互関係について考察するために，中国出自者という共通した背景を持つ人々を，便宜的に「華人」という用語で総称することとする。「華人」の中に存在する地理的・歴史的な変化を視野に入れることによって，特定の地域の華人コミュニティの変遷過程を追うのが本稿の目的だからである。そのため，本稿が使用する「華人」という語は，時代や地域を越えて確固として存在する民族集団を指し示すわけではない。この点を最初に指摘しておきたい。

2 ドイツ，イギリス，オーストラリアによるニューギニア島の植民地化（1884年～1914年）

オセアニア各地への華人の流入は19世紀頃であるとされる。それ以前にも華人の航海者や漂流者，商人が到来した可能性はあるが，はっきりとした記録は残されていない。初期の華人は，白檀の交易への従事や大工や料理人として太平洋地域に到来したとされる。白檀以外にも，華人はナマコ，鼈甲，真珠貝，コプラの取引も行い，南太平洋の島々に彼らの交易拠点を築いていった。最初の華人定住者はこうした交易者であったとされる。こうした華人の男性の中には現地の女性と婚姻を結ぶ者が存在したため，ポリネシアやメラネシアには，現在でも華人と現地住民との混血者が居住している。しかしこうした白檀交易や海産物，コプラの取引に従事していた華人は相対的に数が少なく，コミュニティも小規模なものであった。太平洋島嶼地域における定着的な華人コミュニティの形成は，ヨーロッパ各国による植民地化と，その後の植民地開発の過程の中で，プランテーション労働者や各種の熟練・未熟練労働者，商業従事者といった植民地労働力として華人が流入することによって始まった（Willmott 1995）。

メラネシアの植民地化は他の地域と比較すると新しいものであった。先ず1828年，オランダがニューギニア島の西半分の領有を宣言し，1843年にはフランスがニューカレドニアの領有を宣言した。さらに1874年，フィジーがイギリスに自らの主権を譲渡した。1887年にニューヘブリデス諸島はイギリスとフランスの軍隊による共同統治が定められ，1906年には英仏による共同統治の協定が正式に締結された。このようにして20世紀初頭までにはメラネシアのほぼ全ての地域がヨーロッパによって分割され，植民地となった（豊田 2000, pp.233-234）。

現在のパプアニューギニアにあたる地域の

植民地化が開始したのもこの時期である。先ず1828年オランダがニューギニア島の西半分の領有を宣言した。1884年には相継いでイギリスとドイツがそれぞれニューギニア島の南東部と北東部の領有を宣言した。イギリス領ニューギニアは後1905年にオーストラリアに引き継がれ，オーストラリア領パプアとなった。これ以降，ニューギニア島はオランダ，ドイツ，オーストラリアによって分割され，植民地化の歴史をたどることとなった。パプアニューギニア華人社会の形成も，このニューギニア島の植民地化の過程と軌を一にしていた。

ニューギニア島に華人がいつ頃から到来していたかについては明らかでない。だが西洋人によって植民地化される以前から，華人はニューギニア沿岸部に到来していたのではないかと推測される。また華人はマレー人とともに内陸部でゴクラクチョウの狩猟を行っていたとされている（Wu 1982, p.17）。しかし初期の華人の到来は，ニューギニア島への永続的な居住には結びつかなかった。こうした華人の数は比較的小規模であり，また継続的な訪問というよりも偶発的な到来という性格が強かったのではないかと思われる。華人の本格的な流入およびコミュニティの形成は，ニューギニア島の植民地化により開始した。

ニューギニア島西部のオランダ領では，華人は植民地開発が進む以前からこの地で熱帯産物の収集に携わっていたとされる。また西洋人による椰子やゴムのプランテーションが開発されると，少数の華人労働者も使用されるようになった。1935年頃までには，ニューギニア西部には約3000人ほどの華人が存在していたのではないかと推測されている（盧・彭・陳編 1984, p.56）。

イギリス領植民地となったニューギニア島南東部は，正式にイギリスが領有を宣言する以前からオーストラリア人が到来し，ニューギニア島東南部の土地と東部の沿岸地域の島嶼を占拠した者も存在した。これらのオーストラリア人の中にはこの地域にプランテーションを開発した者がおり，プランテーション労働者として，すでにオーストラリアで雇用していた華人や，香港から呼び寄せた中国人労働者を1880年以前から採用したという説がある（盧・彭・陳編 1984, p.55）。しかしこのイギリス領ニューギニアの華人についての詳細は明らかではない。また後述するように，それは今日のパプアニューギニアの華人社会とは直接の関係を持ってはいないようである。むしろ，その後のイギリスやオーストラリアは積極的に植民地開発を行わなかったため，ニューギニア島南東部（以後，この地域をパプア側と呼ぶことにする）における華人の流入は遅れ，定着的な華人コミュニティの形成にまでは至らなかった。

これに対し，ドイツはニューギニアの植民地開発に積極的に関わり，その過程で華人労働者を採用した。そのため現在のパプアニューギニアの中で，定着的な華人コミュニティが最初に形成されたのはこのドイツ領植民地に当たる地域であった。1884年のニューギニア島北東部（以後，この地域をニューギニア側とよぶこととする）の領有宣言以来，ドイツはニューギニアを保護領とし，1899年までニューギニア会社（Neuguinea Kompagnie）にドイツ領ニューギニアの統治権を任命して植民地開発に当たらせた。

ニューギニア会社は植民地開発の一環としてタバコやコプラのプランテーションを経営した。プランテーションの経営には大規模な労働力を必要とするが，ドイツ領ニューギニアに限らずメラネシア各地の植民地では，一般に労働力が不足していた。オーストラリアのクイーンズランド州やフィジー，サモア，ニューギニア各地のプランテーションではメラネシアの他の地域から労働力が集められ働かされた。この時期のメラネシアではブラックバーディング（奴隷狩り）により強制的に契約労働に従事させられたものも存在したことは，植民地開発のための労働力がいかに不

足していたかを物語っている。労働力の不足を補うために，ドイツ領植民地のニューギニア会社も，メラネシア現地住民の労働力だけではなく，外部からの労働者を探す必要があった（Willson, Moore and Munro 1990, p.78）。

ニューギニア会社は，ドイツ領ニューギニアにおけるプランテーション労働力として，はじめはニューギニア人に頼っていたが，その数は不充分であった。またニューギニア人に契約労働を取りつけるのも容易ではなかった。そのため，ニューギニア会社はアジア人を自国の労働者として採用することとなった。華人労働者はこうしたドイツ領植民地のアジア人労働者の中心を占めていた（Firth 1989, pp.182-183. Willson, Moore and Munro 1990, p.89）。

この時期の華人は主に契約労働者として採用され，シンガポールやスマトラといった，東南アジアの他の植民地からニューギニアに流入したとされる（Biskup 1970, p.86）。プランテーション労働者として流入した華人労働者の中には過酷な労働条件の下，マラリアや赤痢，インフルエンザにより病死するものや，逃亡する者がおり，ドイツ領ニューギニアの華人の死亡率は高かった。1895年のカイザーウィルヘルムスランド（ニューギニア本島）では植民地労働者の28%が死亡し，埋葬された（Firth 1989, p.184）。またこうした華人は契約期間が終るとほとんどの者が帰国した。そのためニューギニア会社により植民地開発が行われていた時代には，華人のニューギニアへの定着は進まず，永続的なコミュニティも形成されなかった。

これに対し，1899年から植民地統治を引き継いだドイツ植民地行政府は，華人の採用をプランテーション労働のための契約労働者から自由移民へと変化させた。ドイツ植民地行政府はニューギニア会社と同様，アジア人労働者を不足していた植民地労働力として採用した。それにより，ニューギニア会社の統治期と同様，華人やジャワ人がドイツ領ニューギニアに流入してきた。この時期，華人はシンガポール等の東南アジアからも流入したが，特に中国，広東省の開平県，恩平県，台山県，新会県の四県を中心とする四邑地域の出身者や恵陽地域の客家が増加し，華人労働者の中心を占めるようになった[3]。

ドイツ植民地行政府は自国の植民地への華人の流入を促進させるために，華人がニューギニアに居住することについての制限は課さなかった。ニューギニア会社もドイツ行政官も，大規模なアジア人労働者のニューギニアへの流入によってプランテーション労働力を供給することを計画していた。実際には華人はプランテーション労働のみに従事することはなくなり，また華人よりもコストが安い現地住民の労働力も使用されるようになっていった。だがそれにもかかわらず，華人のニューギニアへの流入は続くこととなった。

ドイツ領ニューギニアでは入域許可書が比較的容易に取得できるというううわさや，先行移民が稼いだ金の話を聞くことにより，華人はこれらの地域に引きつけられていったとされる。ドイツ領ニューギニアに到来した華人は，はじめは先行している華人や植民地政府の下で働いていたが，数年するとそうした仕事を離れ，自分自身の仕事を持つようになった（Firth 1989, pp.186-187）。これにより，ドイツ領植民地であるニューギニア島北岸やビスマルク諸島では，商業や熟練工として働く華人が増加し，次第に定着してゆくようになった。ニューギニア会社の下で，プランテー

3) 四邑地域からは19世紀末から20世紀前期にかけて，人口圧の高さ，政治不安，治安の乱れによる出稼ぎ移民が輩出し，アメリカ，カナダ，香港・マカオ，東南アジアなどへ渡航して行った（吉原 1991）。パプアニューギニアにおける四邑地域出身者も，こうした移出者の中の１グループであったと思われる。パプアニューギニアにおける華人は四邑地域の中でも特に開平県と台山県出身者が多いという特徴がある（劉 2000, p.88）。

ション労働に従事する，いわゆる苦力（クーリー）として流入した華人は，多様な職業に従事し，契約労働者から自立的な労働者へと変化して行ったのである。

ドイツ領ニューギニアで定着的に生活する華人が増加することにより，マダン，ラエ，ケビエン，ラバウルといったドイツ領植民地の諸都市には華人コミュニティが形成された。特にドイツ領植民地の首都であったラバウルの建設には華人も関わった。ラバウルやラエでは華人の居住地も決められており，そうした地域にはチャイナタウンも形成された（Cahill 1996, p.73. Willis 1973, p.93）。特にラバウルはドイツ領植民地統治の中心地であり，ドイツ領植民地における華人社会の中心地ともなった。

この時期には，香港・ラバウルを結ぶ航路が開設されたため，シンガポールやスマトラからのみならず香港や中国南部から直接流入する者が出てくるようになった。19世紀の華人の海外移動では，地縁・血縁を紐帯とした，いわゆる連鎖移民が多かったため，特定の地域の出身者や特定の姓の者が，同一地域に多く移民してゆき居住するという現象が生じた。ドイツ領ニューギニアでは，広東省の四邑地域出身者や客家が多かったため，華人の共通語も広東語や客家語であり（Wu 1982, p.11），その中でも特に四邑地方の方言が使用されるようになった。

ドイツ領ニューギニア各地に居住した華人はプランテーション労働者から，大工，造船工，機械工，仕立業等に従事する熟練労働者や，小規模な商店の経営者，植民地行政の職員，プランテーションの経営者等の多様な職業につくようになった。これ以降，ドイツ領ニューギニアにおける華人は，契約期間が終了すると中国へ帰国するプランテーション労働者という一時滞在者的集団から，ドイツ領ニューギニアの諸都市に定着的なコミュニティを形成し生活するという定住者的性格を持つ民族集団へと変化して行った。

ラバウルを中心とするドイツ領ニューギニアに定着的な華人コミュニティが形成されたことと比較し，ポートモレスビーを中心とするニューギニア島南岸の華人コミュニティの形成は遅れた。イギリス領ニューギニアは1905年にオーストラリアに引き継がれ，オーストラリア領パプアとなっていたが，オーストラリアは植民地経営に華人を積極的に導入することはなかった。そのため1930年代になるまで，オーストラリア領パプアの首都であるポートモレスビーには華人コミュニティが形成されなかった。

このように，ドイツ領ニューギニアにおける華人は，契約労働者から自由移民へ，プランテーション労働者から商工業従事者へ，またその社会は契約期間が終ると故郷へと戻って行く短期出稼ぎ者の集団から植民地内部で自営の仕事に従事する比較的長期にわたって存続する移民コミュニティへ，といったかたちで変化して行った。ドイツの植民地政策下での華人の移入とコミュニティの形成は，パプアニューギニアにおける華人社会の濫觴となった。

3　オーストラリアによるニューギニアの植民地統治（1914年～1942年）

ドイツ領ニューギニア内部の華人社会に変化をもたらしたのが，第一次世界大戦と，それに続くオーストラリアによるドイツ領ニューギニアの植民地統治である。その結果，華人に対する植民地政府の対応も変化した。ドイツ領ニューギニアにおける華人が，ドイツの植民地政策から影響を受けたのと同様，オーストラリア統治下におけるニューギニアへの華人の移入とコミュニティも，オーストラリアの植民地政策の影響を受け，変容することとなった。

1914年に第一次世界大戦が勃発するとともに，ドイツとオーストラリアも交戦状態となった。ドイツ領ニューギニアはオーストラリ

アによって接収され，オーストラリア軍による軍政が布かれた。その後，1920年から旧ドイツ領ニューギニアにあたる地域は，国際連盟の委任統治領として，オーストラリアの統治下に置かれることとなった。ドイツ領ニューギニアとオーストラリア領パプアとして，別々に統治されてきた地域がオーストラリアの統治下に入ることにより，現在のパプアニューギニアにあたる地域の基礎ができた。

オーストラリアの統治はドイツと異なり，ニューギニアへの華人の流入を制限するものであった。1901年，オーストラリアは連邦国家となり，同時にオーストラリアへの非ヨーロッパ人の流入を規制する「移住制限法」を制定した。オーストラリアの移住制限法は，移民に対し，ヨーロッパのいずれかの言語で書き取りテスト（dictation）を行い，合格できない場合には入国を拒否するというものであった。これ以降，いわゆる白豪主義と呼ばれる政策が施行されることとなった。非ヨーロッパ人の移民に対する制限は，オーストラリア国内のみならず，委任統治領であるニューギニアでも施行され，華人の流入は制限された（Radi 1971, p.74. Rowley 1971, p.63）。ニューギニアに移住するものはオーストラリアと同じく書き取りテストを受けねばならず，テストに合格しなかったものは移住を拒否された。

ただし移住ではなく，一時的にニューギニアに入国することは認められていた。海外からの商人，現地の商人のアシスタント，配偶者，教師，学生，旅行者，宣教師といった人々に対しては，書き取りテストを免除する証明書が交付された。これにより華人はニューギニアに３年間，一時的に滞在することが許可され，その後もさらに３年間の延長が許可された。オーストラリア統治下ではこの形態でニューギニアに移入した華人が存在した（Cahill 1996, p.78）。1922年１月以前からニューギニアに居住する華人は，ニューギニアに永住することが出来たが，それ以降ニューギニアに来た華人は，特定の期間のみ居住が許可される一時的居住者として扱われた。例外は，永住を許可された者の配偶者と子供であり，そうした人々は自由にニューギニアに出入りすることができた。だが1922年以降ニューギニアに来た華人の配偶者は，結婚後10年以上経っていなければニューギニアに来ることを許可されなかった（Cahill 1996, p.79）。植民地政府は配偶者の呼び寄せが華人人口の増加につながることを怖れ，華人女性や子供の呼び寄せを制限していたのである（Nelson 1982, p.170）。男女の不均衡な比率のため，単身でニューギニアに来た華人男性の中には，現地住民の女性と結婚するものも多かった[4]。

オーストラリアはまた，ニューギニアにおける非ヨーロッパ人とオーストラリア人との社会関係も制限した。当時，ラバウルの映画館では，白人，「黄色人種」（日本人，華人，マレー人），現地住民ごとに入場料金が異なっていた。病院や船舶内部でも，それぞれの「人種」ごとに使用できる場所が別々に決められ，相互に隔離されていた。また，華人は自分たちの墓地にするための場所を選択することはできなかった（Cahill 1996, p.75）。ドイツ領時代から，ラバウルやラエの華人はチャイナタウン内に居住していたが，オーストラリア統治下でも，華人の居住地域は制限され，チャイナタウン内部に居住し続けることを求められた。オーストラリアの統治下で，華人はオーストラリア人と現地住民との間の仲介者や，「第二級市民」としての位置を割

4) 華人男性と現地住民の女性との間に生まれた子供は，華人社会の中で華人として育てられるのが普通であり，中国や香港に送られて教育を受けるものも存在した。そうした混血の華人の男女は，成長すると華人を配偶者とすることが多く，華人社会の中で生活を続けていった。華人と現地女性との婚姻とそれによる混血者の存在は，華人のニューギニア人社会への同化にはつながらなかった。

り当てられていたのである（Nelson 1982, p. 29, p.171）。

オーストラリアの統治下での，華人の活動への制限は，ラバウルをはじめとした都市内部の生活だけに留まらなかった。その一つが，オーストラリア領域内部における華人の移動の制限である。華人の活動はニューギニア側のみに限られており，パプア側，特にポートモレスビーへの移入や，オーストラリアへの渡航は制限されていた。ドイツとオーストラリアによる植民地政策の違いにより，ニューギニア地域には19世紀末から華人コミュニティが存在し，パプア地域では存在しなかったという地域的な相違は，パプアおよびニューギニアの全域がオーストラリアの統治下に置かれてからもさほど変化しなかった[5]。中国や香港からパプア地域に移入する華人はほとんどおらず，ニューギニア地域に居住していた華人がパプア地域に移住することは制限されていたため，ドイツ領植民地とオーストラリア領植民地に分かれていた時代の華人の居住パターンは，その後もそのまま維持された。こうした居住パターンは1950年代まで変化しなかった（Wu 1977, p.87）。

このようにニューギニア地域における華人の移入や社会活動はオーストラリアによる植民地政策により制限を受けていたが，それと同時に，ニューギニアにおける華人コミュニティはこの時期も発達していった。その一つが，華人による同郷会館や宗親会[6]といった伝統的な結社の設立である。ラバウルではオーストラリアによる統治期にいくつかの地縁や血縁，方言や業縁に基く伝統的な結社が形成された。その中でも同郷会館としては台山会館，岡山会館，瓊州会館，廣益会館が，宗親会としては教倫堂，周家祠，永遠堂といった会館が形成された。また方言を紐帯とした会館としては，客家による忠義和が設立され，業縁に基くものとしては瓊華閣，和議堂，永和館，同義和，華益会館といった会館が設立された（Wu 1982, pp.69-70）[7]。

これらの伝統的な結社以外にニューギニアの華人コミュニティ内部で設立された団体としては，国民党の支部がある。1920年に国民党分部がラバウル，ココポ，ケビエン，マダンに設立され，ラバウル国民党分部はラバウル支部と改名されて1924年に正式に設立し，専用のホールも建設された（Wu 1982, p.117. 劉 2000, p.89）。この組織は華人コミュニティの全体としてのまとまりとアイデンティティを表すものであった。国民党のメンバーは，次に述べる華人学校の教師とともに，ニューギニアの華人コミュニティにおける中国ナショナリズムの促進と，中国文化の維持を担っていた。1930年代にはニューギニアに居住する華人の５分の１が国民党に参加していたとされる。（Wu 1982, p.71）。上述の諸会館は，地縁や血縁といった，いわば華人社会内部の多様性に基く組織であるが，国民党は政治組織であるとともに，ニューギニアの華人社会

5) パプアニューギニアに居住する華人の間では，1930年代はじめに香港からラバウルを経由してポートモレスビーに来た男性がパプア地域に初めて移入した華人として記憶されている。しかしこれ以降もパプア側に居住する華人は少数であり，ニューギニア側に匹敵するようなコミュニティが形成されるのは1960年代になってからであった。

6) 吉原（1987）は同郷団体を「同一地域に出身地あるいは籍貫（父祖の地）を持つ人々によって構成される団体」，宗親団体を「父系出自原理に基く伝統的な親族組織としての宗族（リニージ）を擬制した組織」と定義している。本稿が述べる同郷会館や宗親会はそれぞれ吉原の述べる同郷団体，宗親団体に当るものである。

7) ただしこれら各種の会館の中には，第２次世界大戦終了時にすでに活動を停止していたものが存在し（Wu 1982, pp.69-70），現在ではほぼすべてが消滅している。その理由としては，太平洋戦争とそれに続く日本軍の占領で活動が停止し，そのままになったものや，パプアニューギニアの独立以降，オーストラリアに移住する華人が増え，成員が減少し，活動が行われなくなったため，また1994年にラバウルに隣接する火山が噴火し会屋が破壊されたため，といったことを挙げることができる。

全体を対象とする組織であるという特徴を持っていた。また,国民党は居住地であるニューギニアにおける華人の生活を扶助する機能を持っていたが，それと同時に，中国本土のナショナリズムと連動した性格を持っていたことを指摘できる。

こうした伝統的，政治的な組織とともに，学校もこの時期，華人によって設立されていた。初期には華人は寺廟を建設し，その中で子供たちの教育を自分たちで行っていたが，後にはキリスト教伝道団からの援助を受けた学校を設立した。ラバウルには二つの華人学校があった。一つは国民党によって1922年に設立され，後にメソジスト系伝道団からの援助を受けた華僑学校（Overseas Chinese School）であり，もう一つはカトリック系伝道団からの援助を受けて1924年に設立された，養正学校（St. Theresa's Yang Ching School）である。これらの学校では英語や数学といった教科の他に中国語も教えられていた。そのためオーストラリア人教師とともに，中国人教師も所属しており，その中には中国で教育を受けた教師もいた（Venard 1978. Wu 1982, p.118）。同様の華人の学校は，第２次世界大戦以前にマダンやケビエンにも設立されていた。

華人の学校が伝道団によって支援されているところからも伺えるように，オーストラリア統治下の華人はキリスト教を信仰する者が増加していた。ニューギニアに移住した華人は，初期には中国の宗教を信仰するものもおり，寺廟も建設された。だが次第にカトリックやメソジストといった，ニューギニア地域で布教活動を行っていた伝道団の下で，キリスト教に改宗するものが増加した。ラバウルの華人コミュニティではカトリックの信者とメソジストの信者が相互に対立するということもあった。キリスト教に改宗することにより，華人はニューギニアで布教活動を行なっている伝道団からの保護を受けることが可能になったのである（Wu 1982, p.72）。

伝道団によって援助された学校で華人の子供たちは教育を受けていたが，ニューギニアでは初等教育しか受けることができなかった。より高い教育を求める華人は，子供たちを香港や広州，上海といった中国の都市に送り，そこで教育を受けさせた。こうした華人の子供たちは，学校で中国語や数学，科学といった教科を学ぶ以外にも，書や詩，武術，道教，伝統芸能等に関する知識も得た。こうした中国で教育を受けた華人はニューギニアに帰ってからも，華人社会における「中国文化」の保持者となった。

また子供の教育以外にも，華人と中国との関係は存在していた。中国における地縁や血縁を紐帯とした同郷会館や宗親会がオーストラリア統治下で設立されたことは前述したが，こうした地縁・血縁関係は，華人がニューギニアへ移入する際にも重要性を持っていた。オーストラリア統治下のニューギニアでは，新来の華人は，すでに移住していた親族や同郷者を頼って移入し，また先行してニューギニアで居住していた華人も，中国本土の配偶者や子供，キョウダイを呼び寄せた。また同郷者や親族を呼び寄せる以外にも，ニューギニアから中国への送金も行なわれていた。

オーストラリアによって華人の移入が制限されていたにもかかわらず，この時期もニューギニアに来る華人は消滅することはなかった。オーストラリア統治下のニューギニアで，華人はそのコミュニティを拡大させていった。太平洋戦争が始まるまでに，ニューギニアに居住する華人の人口は2000人を超えていた（Wu 1982, p.167）。

ドイツ領ニューギニアにおける華人の流入および定住はパプアニューギニアにおける華人社会の発端となったが，オーストラリア統治下における華人の生活は，コミュニティの規模を次第に拡大させるとともに，定着的な性格を増大させるという性格を持っていた。この時期，オーストラリアによってニューギニアへの移入や社会的な活動が制限されてい

たにもかかわらず，華人はニューギニアという居住地の条件に適応するかたちで生活し，コミュニティを発展させて行ったのである。その意味で，オーストラリア統治下のニューギニアの華人社会は，帰国を前提とし，短期間のみ滞在する集団から，現地生まれの世代も存在する，比較的長期間にわたり居住することを前提としたコミュニティへと変化して行ったのである。

だが同時に，この時期のニューギニアの華人社会は，依然として中国と様々な関係を保持し続けていたことも考慮しなければならない。ニューギニアに学校を設立し，子供に初等教育を受けさせる一方で，高等教育は香港や中国で受けさせたといったところにも，中国との関係を維持し続けたということを見て取れる。またこの時期の華人も，中国への帰国を完全に放棄し，ニューギニアでの永住を志向していたかどうかは疑問が残る。むしろ，ニューギニアで定着的なコミュニティを形成させながらも，依然として出身地である中国との絆を維持し続けたといえるだろう。このように，オーストラリア統治下のニューギニア華人社会は，中国出身者の移民社会という性格を強く持ちつつも，現地で出生する者が次第に増加し，定住的な特徴を強くして行ったのである。

4　太平洋戦争と日本軍による占領（1942年～1945年）[8)]

オーストラリア統治下のニューギニアにおける華人社会に多大な影響を与えたのが，太平洋戦争と，それに続くニューギニアの一部の地域における日本軍の占領であった。日本軍は1942年１月，ラバウルのオーストラリア守備隊と交戦し，これに打ち勝つと，続けてニューギニア島北部の各地で戦闘を行ない，その一部を占領下に置いた。戦時中に日本軍が占領した地域は，偶然にも華人コミュニティが存在する地域とほぼ一致していた。ニューギニアにおける日本軍政は1942年１月から1945年８月までという比較的短い期間であったが，ニューギニアに居住する華人には多大な影響を与えた出来事であった。

日本軍の攻撃が近づくにつれ，オーストラリアはニューギニアに居住していた自国民を保護するために脱出させていた。だが外国籍者である華人に対しては一貫した対応を採らなかった。ニューギニア本島に居住していた華人の中には，戦時中オーストラリアへと避難した者も存在したが，ニューブリテン島やニューアイルランド島に居住していた華人は保護の対象とならず，オーストラリアへの脱出も行われなかった。東南アジアでの日本軍による華人の虐殺を知っていた華人は，都市を離れ，プランテーションや教会，現地住民の村落へと避難していた。日本軍はラバウルやケビエンといった都市を占領すると，各地に散らばり避難していた華人を都市に集め，管理下に置いた。日本軍はラバウルの国民党支部の秘書を処刑し，華人に対して汪兆銘政府の支持を求めたとのことである。

戦況が悪化すると，華人はプランテーションの中の強制キャンプに収容され，そこで日本軍の監視下に置かれて生活することとなった。華人は日本軍の統治下で様々な強制労働に従事することとなった。戦争中，華人は物資の欠乏に苦しめられた。日本軍の占領により，ニューギニア地域はオーストラリアや中国といった他の国々との関係が停止し，これらの国々からの物資の輸入も行われなくなった。日本からの物資も次第にニューギニアには届かなくなり，日本軍は現地での自活を目指すようになった。日本軍の占領下に置かれた華人も，自分たちで食料の自給を行わざるを得なくなった。

1942年以前から，日本軍は中国大陸で交戦

8)　本章の内容は（市川 2001）に基いている。

状態にあったため，中国に居住していた華人の中には戦乱を避け，親族や同郷者を頼ってニューギニアに渡航していた者が存在した。そうした人々は，戦争を理由にニューギニアへの滞在の延長を求めていた。だがこの時期に中国からニューギニアへと渡航した人々も，日本軍による占領により中国へと帰る道が閉ざされ，ニューギニアに留め置かれることとなった。華人は日本軍の統治下で外部との連絡をとる手段を失った。日本軍占領下ではニューギニアに居住する華人と中国との連絡も存在せず，新規の移民も到来しなかった。太平洋戦争は，ニューギニアの華人社会と中国との関係を一時断絶させることとなった。太平洋戦争とそれに続く日本軍によるニューギニアの一部の地域の占領は，ニューギニアの華人社会をそれまでとは異なった状態に置くこととなったのである。

5　戦後から独立に到る過程（1945年〜1975年）

戦争中に日本軍によってその一部が占領されていたニューギニア地域は，戦後，国連信託統治領として再びオーストラリアの統治下に戻った。日本軍によって各地のキャンプに強制的に収容されていた華人たちも，戦争の終了とともに，ラバウルやココポ，ケビエンといったかつての居住地へと戻っていった。戦争中の空襲や戦闘により，ラバウルやラエ，マダン，ウェワクといった都市に存在した華人の家屋や店舗もことごとく破壊された。華人は戦前から築き上げてきたものを失ってしまった。

戦後，オーストラリア政府はパプアおよびニューギニア地域における戦争被害に対する補償金を準備し，これらの地域の復興に充てることを計画した。ニューギニアの華人もこのオーストラリアからの補償金を受けることが出来た。オーストラリアからの補償により，華人はかつてのように，ラバウルやココポ，ケビエンといった都市で住居や店舗を新たに建てなおし，経済活動を復活させていった。また戦後もラバウルをはじめとしたニューギニア地域にはオーストラリア軍が駐留し，華人はそうしたオーストラリア軍のための仕事に従事することもあった。

かつての居住地で生活基盤や経済活動を復興させていく一方で，戦後のニューギニアの華人社会はそのコミュニティの特徴を変化させていった。最も大きな変化としては，華人のオーストラリア国籍の取得を挙げることができる。戦争中，外国籍のためにオーストラリア政府の保護を受けられなかった華人は，戦後になりオーストラリア国籍の取得を望むようになった（Willson 1989, p.100）。太平洋戦争以前に一時滞在者の資格でニューギニアに滞在していた者は，日本軍の占領によって中国に帰ることができず，長期間ニューギニアに居住せざるを得なくなった。また第２次世界大戦が終了してからも，中国大陸では国共内戦とそれによる混乱が続いていた。1949年以降は中華人民共和国が成立し，オーストラリア領ニューギニアから中国へと帰ることは困難であった。こうした要因により，戦後も華人はニューギニアに住み続けていた。1950年代になり，戦前からニューギニアに居住してきたこれらの華人は，太平洋戦争以来の長期間にわたる滞在は永住する権利になると主張するようになった（Cahill 1996, p.83）。

1950年代の後半からオーストラリア政府のニューギニアに居住する華人に対する態度も変化した。これにはオーストラリア国内における，白豪政策の見なおしと，それに伴うオーストラリア国籍の取得に関する制限の緩和が影響を与えていた。また1950年代にはインドネシアがニューギニア島の西半分の旧オランダ領を自国の領土として主張していた。オーストラリア政府はインドネシアによるパプアおよびニューギニアへの介入を恐れており，華人のオーストラリアに対する忠誠心を喚起する必要も存在していた（Inglis 1997, p.323）。

こうした様々な要因により，1950年代後半からオーストラリア政府はパプアおよびニューギニアに居住する華人がオーストラリア国籍を取得することを認めるようになった。これを受け，それまで外国籍者としてニューギニアに居住し，戦後はオーストラリア保護民（Australian Protected Person）という不安定な立場でニューギニアに居住してきた華人たちの多くが，この時期にオーストラリア国籍を取得した。それまで華人はオーストラリア植民地に居住する外国籍者という立場にあったが，オーストラリア国籍取得以降は戦前から続いてきた各種の制限から解放されることとなった。このことは，ニューギニア地域における華人社会に多大な影響を与えたことを意味する。オーストラリア国籍取得によるニューギニア華人社会の変化はいくつか挙げることができるが，もっとも大きな影響として本稿では特に以下の２点を指摘しておきたい。

第１点目は，ニューギニアおよびパプア地域における華人の活動範囲の拡大である。正式にオーストラリア国籍者となった華人はニューギニアおよびパプアの領域内を自由に移動できるようになった（Wu 1977, pp.87-88）。それまで華人のパプア地域への移入は制限されており，またニューギニア地域においても，華人の居住地はチャイナタウンを中心とする特定の地域に集中していた。だが正式にオーストラリア国籍を獲得した後には，華人はオーストラリア領を自由に移動することが可能になった。これにより，ニューギニア北岸の諸都市に集中していた華人の中には，ニューギニア側の他地域やパプア地域へと移動して行くものが生じるようになった（Ling 2001, p.128）。

オーストラリア国籍取得後の華人の国内移動は，ニューギニア北岸各地に居住していた華人の経済的な要求とも一致していたと思われる。戦前からラバウルやケビエン，ラエといった都市では，華人が一定の地域に集住し経済活動を行なっていた。だがそうした状況下では同じ業種につく華人の数も多く，飽和状態になっていた。これら古くから華人が居住してきた地域では，更なる経済的な発展を遂げる領域も限られていた。ニューギニア側に居住していた華人はビジネスチャンスを求めて，1960年代以降，パプアニューギニアのほかの地域へと進出していった。特にプランテーション開発をはじめとした経済的な変化とともに現金経済が浸透していったニューギニア高地や，オーストラリアによる植民地行政の中心地であり人口も次第に増加していったポートモレスビーへと移動する華人が増加した[9)]。オーストラリア国籍の取得による，ニューギニアおよびパプア地域内部の移動の自由化は，華人の経済活動の範囲を広げ，同時に華人の居住地域の拡大ももたらしたのである[10)]。

第２点目は，それまで制限されていたオーストラリアへの移住の自由化である。華人のオーストラリア国籍の取得は，パプア地域と

9) ポートモレスビーの周辺はもともと現地住民の数も少なく，人口的にも経済的にもニューギニアの中では周辺的な地域であったが，この地に行政の中心地が置かれることによって都市化が進み，パプアニューギニア各地から移入する人々が増加した。しかしポートモレスビーの周辺はもともと食料の生産が不充分であるため，その多くをオーストラリアからの輸入に頼らざるを得なかった（Levine & Levine 1979, p.23）。そのためポートモレスビー在住者は基本的に商店で食物を購入する必要があった。1960年代の華人のポートモレスビーへの移入と商店の経営は，こうしたポートモレスビーの地理的な特徴に適合したのだと思われる。これは華人に限らず，パプアニューギニア人の企業家にも当てはまる状況である。塩田は食糧自給が困難であるというポートモレスビーの社会的状況に適合するかたちでビジネスを発展させたパプアニューギニア高地出身者の事例を報告している（塩田 2000, p.112）。

10) パプア地域では1947年にはヨーロッパ人や現地住民との混血者を含め，31人の華人が居住していたが，1966年には300人の華人が居住するようになった（Inglis 1972, p.171）。

ニューギニア地域内部の華人の移動を引き起こしただけではなく，パプアおよびニューギニアからオーストラリアへの移動をも可能にしたのである。

オーストラリア国籍を取得する以前にも，華人の中にはオーストラリアに渡航したり，オーストラリアの学校で子供の教育を受けさせたりする者が少数ではあるが存在した。宗主国であるオーストラリアがパプア地域及びニューギニア地域に与える影響は強く，ニューギニアに居住してきた華人にとってもオーストラリアとの関わりは少なくなかったのである。また華人の中には第２次世界大戦以前からキリスト教に改宗した者が多かったため，オーストラリア人宣教師と親しいものや，オーストラリアの伝道団と関係を持つ者が存在した。キリスト教関係者を通して，オーストラリアとの関係を持つ華人も存在した。しかしそうした華人とオーストラリアとの関係は制限されたものであり，オーストラリアに渡る華人の数も限られていた。

しかし正式にオーストラリア国籍を取得した華人には，オーストラリアへの訪問や移住に対しての制限が課されなくなった。そのため1950年代後半以降，パプアおよびニューギニアの各地に移動する華人が増えるのと同様，オーストラリアに行く華人の数が増加することとなった。

1960年代以降のオーストラリアへの華人の訪問の中でも，特に注目できるのが子供の教育のためのものである。現在のパプアニューギニア出身の華人で第２次世界大戦以前に高等教育を受けた者の多くは，中国や香港に送られて高等教育機関に進学したが，戦後に高等教育を受けた華人は，オーストラリアの高等学校，特に寄宿学校（boarding school）に進学したと語る者が多い。これらの華人の子供は前述したように，パプアやニューギニアで伝道団からの援助を受けた学校や，植民地政府によって運営される学校で初等教育を受け，その後オーストラリアに送られ，高等学校に通っている。特にシドニーやブリスベン，トゥウンバといったオーストラリア東部の学校に進学する者が多かった。現在のパプアニューギニア華人が，この時期にオーストラリアで子供の教育を受けさせた理由としてしばしば挙げるのが，ニューギニアには高等教育機関が存在しないことと，英語を学ばせるためにはニューギニアよりもオーストラリアで教育を受ける必要があることである。第２次世界大戦以降，ラバウルやポートモレスビーに居住する華人の中には，オーストラリアの企業や統治機関で働く者も存在し，オーストラリア人との関係も深めていた。また宗主国であるオーストラリアで教育を受けることは，オーストラリア植民地における華人の地位の向上に繋がると考えられたのかもしれない。こうしてオーストラリアの高等学校に進学した華人は，教育を終えるとパプアやニューギニアに戻り，家族が所有する商店やプランテーションの経営といった仕事に参加することが一般的であった。

このようにして1950年代後半以降，華人はパプアおよびニューギニア領域内での国内移動と，パプアおよびニューギニアからオーストラリアへという国際移動の二つを行うようになったのである。これは第２次世界大戦以前の，中国からニューギニアへ，という移住経路とは異なるものである。

オーストラリアを訪問する華人や，オーストラリアで教育を受けた華人が増加することにより，パプアおよびニューギニアの華人の間では，次第に英語話者が増加していった。ニューギニアの華人は広東語の四邑方言や客家語を共通語として使用してきたが，戦後は世代が下るにつれて英語を日常的に使用する者が増え，華人同士の会話も英語でなされることが多くなってきた。またオーストラリアでの生活経験は，華人のライフスタイルを次第にオーストラリア人的なものへと変えてい

った。この傾向は，世代が下るにつれて顕著になっていった。

このようにして，オーストラリア国籍の取得以降，華人はニューギニア島北岸やビスマルク諸島以外のパプアおよびニューギニアの各地，さらにはオーストラリアにも居住するようになり，華人のコミュニティも各地に存在するようになった。ポートモレスビーでは1960年代中頃に，華人のクラブ組織であるキャセイ・クラブが結成された。キャセイ・クラブはポートモレスビーに在住する華人がコミュニティ活動を行う場となった。当時，ラバウルをはじめとするニューギニア地域からポートモレスビーに来た華人は，ボロコやイーストボロコといった地域で商店を始めるようになった。また，ラバウルでは華人により，新年[11]には獅子舞や龍舞が行なわれていたが，ポートモレスビーでも同じように華人によって獅子舞や龍舞によって新年が祝わるようになった[12]。

このような，華人の国内移動と国外移動によってもたらされた活動領域の拡大とは逆に，第２次世界大戦後は華人と中国大陸との関係は次第に疎遠になっていった。第２次世界大戦後も中国大陸では国共内戦が続き，政治的・社会的な混乱が続いていた。また1949年に中華人民共和国が成立すると，ニューギニアの華人は中国に居住する親族を訪問することが困難になった。ラバウルをはじめとするニューギニアの都市に支部を置いていた国民党と，中国共産党とは対立関係にあった。華人は香港を通じて中国大陸との関係を保っており，それ以外にはシンガポールをはじめとする東南アジアに居住する華人と貿易等を通じて関係を持つこともあった（Wu 1977, p.91）。しかし戦前のように中国大陸から直接，親族や同郷者をニューギニアに呼び寄せるということは困難になった。香港からの華人の移入は戦後もあったが，広東省の僑郷との関係は，第２次世界大戦後は疎遠になっていった。香港や中国大陸からの物資の輸入といった経済活動は存在していたが（Wu 1998, p.211），戦前のように子供を中国に送って高等教育を受けさせ，それによって移民社会における「伝統的」な中国文化を維持するといったことは行なわれなくなった。オーストラリアへの訪問や教育，生活経験者の増加や英語の使用等は，パプアおよびニューギニアの華人が保持してきた「伝統的」な中国文化を次第に衰退させ，代わってオーストラリアを志向した行動や生活様式を採るという状況をもたらした。オーストラリア政府が1971年に中華人民共和国を中国の正式な政府と認めるようになると，ラバウルの国民党支部の活動も停止した。

このようにして，華人は次第にオーストラリアとの関係を深め，その一方でポートモレスビーをはじめとするパプアおよびニューギニアの各地に居住地を拡散させていったが，華人は現地社会の中に拡散し，同化してゆくということはなかった。パプアおよびニューギニアの華人は，現地社会やオーストラリアからの影響を受け，次第に文化を変容させたが，その一方で華人という民族的なカテゴリーを消滅させることはなく，自己のコミュ

11) パプアニューギニアの華人は農暦の１月１日ではなく，グレゴリオ暦の１月１日に新年を祝っていた。

12) こうした獅子舞や龍舞を行なうことで祝われる華人の新年は，パプアニューギニアの独立前後には無くなってしまった。その理由としては，次第にパプアニューギニアに居住する華人が減少していったことや，独立以後，ポートモレスビーで新年を祝っていた際に，パプアニューギニア人と華人の行列が衝突したこと，パプアニューギニア政府が爆竹の使用を禁じたこと，など複数の理由が，現在パプアニューギニアに居住している華人によって挙げられている。ただし現在のパプアニューギニアでも，クラブ組織や華人商店の敷地内といった場では，獅子舞や龍舞が練習され，披露されている。

ニティを維持しつづけたのである（Wu 1982, pp.158-159）[13]。

このパプアおよびニューギニアで，文化変容を遂げながらも，定着的な性格を持つようになった華人のコミュニティに影響を与えたのが，1975年のパプアニューギニアの独立である。

パプアニューギニアの独立に到る過程は，第２次世界大戦後の，欧米の植民地が国民国家として続々と独立してゆく気運の中で起こったものであった。もともとパプアニューギニアでは独立の気運が高かったわけではなく，独立はオーストラリアの指導のもとで進められた。1964年にはパプアニューギニア地域で普通選挙が実施された。さらに1973年には自治政府の初代首相が選出され，1975年にはパプアニューギニアが正式に独立した。

この時期，それまでオーストラリア植民地の中の外国籍者として，後にはオーストラリア国籍者として生活していた華人は，パプアニューギニアの独立という政治的な変化に直面することとなった。パプアニューギニアの独立に対し，華人は一部の者を除いて，積極的に政治に関わることはなかった[14]。パプアニューギニア人の政治家と接触し，資金的に援助する華人も存在するが（Willson 1989, p.106），大部分の華人は，自ら政治の場に参加しようとはしなかった。

また華人は新たな独立国における外国籍者という自己の社会的立場について不安感を持つようになった。この時期の華人にとっての外国籍者という自己の立場は，パプアニューギニアにおける中国国籍者ではなく，オーストラリア国籍者であるという点に注意する必要がある。パプアニューギニア政府は自国内の華人が自動的にパプアニューギニア国籍を取得することを認めず，華人はパプアニューギニア国内における土地に関する権利や店舗のライセンス取得等の分野で制限を受けることとなった（Willson 1989, p.101）。

またこの当時，インドネシアでの華人の迫害をはじめとする，新たに独立した他の国々で見られたエスニック・マイノリティへの抑圧も，パプアニューギニアに居住する華人に不安感を与えることとなった。すでにオーストラリア国籍を取得した者が大多数であった華人は，外国籍のままパプアニューギニアで生活するか，帰化を申請してパプアニューギニア国民になるかの選択を迫られることとなった（Willson 1989, pp.101-102）。華人の中の何人かは，パプアニューギニアの国籍を申請し，パプアニューギニアでの生活を継続することを選択した。だが多くの華人はオーストラリア国籍を放棄することはなかった。このため，1970年代になりパプアニューギニアが独立に向うにつれ，パプアニューギニアをはなれ，オーストラリアへと移住する華人が増加することとなった。ラバウルやラエのチャイナタウンやポートモレスビーでは，オーストラリアへと移住する華人が増加することにより，次第に華人の人口が減少し，華人コミュニティの規模も縮小してゆくこととなった。

第２次世界大戦後のパプアニューギニアに

13) パプアニューギニアの華人がパプアニューギニア人の在地社会と同化しなかった理由はいくつか考えられるが，主なものとして以下の二点を挙げることができる。第一点目は，華人は主に都市に居住していたが，パプアニューギニアの在地社会は都市を形成することはなく，華人が居住していた都市もヨーロッパ人が植民地化の過程で形成したものであった。そのため都市に居住する現地住民の数もそれほど多くはなく，都市における華人と現地住民との社会的な接触も限られていたということである。第２点目は，華人と現地住民の女性との間に生まれた子供も華人社会の中で華人として育てられ，現地住民社会の中で育てられることはあまりなかったということである。

14) パプアニューギニアの首相を２回経験したジュリアス・チャン（Julius Chan）や，下院議員に選出されたペリー・クワン（Perry Kwan）は，積極的にパプアニューギニアの政治に関わった例外的な華人である。

おける華人社会は，華人のオーストラリア国籍の取得により，それまでとは異なる性格を獲得した。第２次世界大戦以前には，宗主国であるオーストラリアの白豪政策の影響を受け，華人のニューギニアにおける社会活動は制限されていたが，オーストラリア国籍の取得後は新たな形態の移動が執り行われるようになった。前述したように，この時期には華人によるパプアニューギニア域内の移動と，パプアニューギニアからオーストラリアへの移動の二つが行なわれた。その意味で，戦後の華人はパプアおよびニューギニアにおける社会的な活動範囲を拡大しえたといえよう。だがパプアニューギニアの独立に向けた動きは，華人のオーストラリアへの移出を増加させ，華人人口の減少という変化を引き起こすこととなった。華人のオーストラリア国籍の取得とパプアニューギニアの独立は，パプアニューギニアに数世代にわたり居住し，定着的なコミュニティを形成し続けてきた華人が，再び移住する契機となったのである。

6　パプアニューギニア独立以降（1975年以降）

パプアニューギニアの独立以降も，植民地時代から居住してきた華人のオーストラリアへの移住傾向は変わらなかった（Wu 1989, p.213）。それまで，オーストラリアの高等学校に進学していた子供は，教育が終わるとパプアニューギニアに戻り，家族の仕事に参加することが多かったが，パプアニューギニアの独立以降は，教育を終えた後もオーストラリアに留まり，オーストラリアで仕事につき，生活し続けることが一般的になった。またパプアニューギニアで経済活動に従事していた華人も，オーストラリアで不動産を購入し，自己の移住に備えるようになって行った。一旦オーストラリアに移住し，その後再びパプアニューギニアへと戻り，経済活動を開始する華人も存在するが，そうした者は全体の中では少数派に属していた。1970年代から始まったこの華人の移出傾向は，パプアニューギニアの独立後も存在し，現在でも継続している。

植民地時代からパプアニューギニアに居住してきた華人の人口が減少し続ける一方で，独立以後のパプアニューギニアの華人社会では新たな変化が生じることとなった。それが，新たな華人のパプアニューギニアへの流入である[15]。

パプアニューギニアへの新たな華人の流入は，パプアニューギニアの独立以後，特に1980年代になってから増加した。この傾向は時代とともに変化しながらも現在まで続いている。パプアニューギニア独立以後に移入してきた華人の中には，中国以外の国家や地域の出身者が存在する。そのため，新たにパプアニューギニアへと移入する華人たちは，必ずしも相互に共通する特徴を持っているわけではない。またパプアニューギニアへの移入の経緯や，移入後の生活様式も一様ではない。ただし植民地時代から居住してきた華人と，これらの独立以後パプアニューギニアへと移入してきた華人では，以下に述べるようにその性格に大きな違いが見られる。そのため本

15)　現在のパプアニューギニアに居住する華人の人口に関する統計資料は存在しない。センサスに記載されている外国籍者の数から華人の人口を推計した Inglis（1997）は，現在のパプアニューギニアに居住する華人はおよそ1500人であると述べる。しかし Inglis 自身も述べるように，現在のパプアニューギニアには非合法に入国・滞在する華人も存在し，また一時的に滞在するだけの短期滞在者も多いため，センサスでもパプアニューギニアに滞在している華人の正確な数は把握できないと思われる。マレーシア大使館職員の話では，大使館でもパプアニューギニアに存在するマレーシア人の正確な総数を把握していないが，およそ5000人のマレーシア人が存在し，そのほとんどが華人であるとのことだった。中華人民共和国の出身者もマレーシア華人とほぼ同数存在するとパプアニューギニア在住の華人は認識している。そのため筆者は現在のパプアニューギニアにはおよそ10,000人程度の華人が存在しているのではないかと推測している（市川 2002）。

稿では両者を区別するために，前者を「華人オールドカマー」,後者を「華人ニューカマー」と便宜的に呼ぶこととする。

華人ニューカマーとオールドカマーとの顕著な違いは，その出身地である。近年のパプアニューギニアに移入する華人ニューカマーは，中国出身者だけではなく，マレーシア，シンガポール，インドネシア，フィリピン，香港，台湾，中華人民共和国等の，東・東南アジアの国々や地域を出身地とする人々である（Inglis 1997, pp.329-331）。また華人オールドカマーの祖籍地が広東省の四邑地域や恵陽地域といった，比較的限定された地域であったのに対し，近年中国大陸から移入する人々は，必ずしもこれらの地域出身者とは限らず，広東省以外にも北京や上海，福建省，四川省等，中国各地の出身者が存在している。

華人オールドカマー同士の共通語は広東語の四邑方言や客家語，英語であり，特定の地域出身者が中心であったため比較的均質な特徴を持った集団を形成していた。だがニューカマーは必ずしも広東語を共通語とするとは限らない状態にある。マレーシアやシンガポールのような東南アジア出身の華人や香港出身者の中には広東語を話す者が存在するが，中華人民共和国出身者同士の共通語は標準中国語であり，その他の地域の華人の間でも標準中国語を共通語とする場合が数多くある（Inglis 1997, p.334）。このため，標準中国語を解さないオールドカマーにとって，広東語や客家語話者ではないニューカマーと意思疎通をすることは必ずしも容易ではない。そのためニューカマーとオールドカマーとが会話をする際には英語が用いられる場合がある。その他にもニューカマーがパプアニューギニアに移入してから広東語を新たに学ぶという現象も見られる。またパプアニューギニア人と会話をする際には英語やメラネシア・ピジンを使用する必要があるため，華人ニューカマーの中にはパプアニューギニアに移入した後に，英語やメラネシア・ピジンを新たに学ぶ者も存在する。このようにして，複数の地域出身の華人の流入は，パプアニューギニア華人社会内部の言語状況を複雑化させることとなった。

ニューカマーのパプアニューギニアへの移入の形態と要因も，植民地時代とは異なるようになった。植民地時代にニューギニアへと移入してきた華人は，先行する親族や同郷者を頼った連鎖的な移民を行なっていたが，独立以降流入するニューカマーはこれらオールドカマーとの血縁関係や地縁関係を持つわけではなく，独自に移入するものがほとんどである。近年の東・東南アジア諸国出身の華人の多くは，企業の従業員としてパプアニューギニアに到来している。後述するように，パプアニューギニアにおける天然資源の存在や経済状態に応じ，パプアニューギニアに進出し，活動を行なう外国企業が存在するが，そうした企業の中でも東南アジアの華人系企業や中国企業では，従業員も華人が多い。パプアニューギニアでは労働集約的な産業は発達しておらず，華人系の外国企業もそうした分野には進出していない。パプアニューギニアにおける華人系企業は小売業や卸売業，貿易業といった分野に参入しており，また特に中華人民共和国政府はパプアニューギニアに対して各種の援助計画を執り行っているため，華人ニューカマーの中にはこうした企業の労働者や援助計画の従事者としてパプアニューギニアに入国する者が存在する（Inglis 1997, p.330）[16]。またこのような企業の従業員としてパプアニューギニアに入国した華人は単身者が多く，必ずしも家族を伴って移入するわ

16) パプアニューギニアは独立以降，近隣のメラネシア諸国を含むオセアニア地域との関係以外にも，東南アジアや東アジアといったアジア太平洋地域の国々との関係を重視してきた。特に1993年には当時首相であったウインティが，パプアニューギニアの北方に位置するアジア地域との関係の必要性を強調した，「ルック・ノース政策」を提唱した（小柏 1995）。

けではないため，一定の期間が過ぎると，出身国へと戻ってゆく，比較的短期間の滞在者が増加した。その意味で，現在の華人ニューカマーはパプアニューギニアへの永住を目指しているわけではなく，移住するためにパプアニューギニアに来たわけではないという状況にある。

だがその一方で，企業の関係者としてパプアニューギニアに入国した華人の中には，それまで属していた企業を辞めて，自分で独自に経済活動を開始する者や，自己の親族や出身地域の知人をパプアニューギニアに呼び寄せる者も存在する。これはかつての華人が，配偶者や親族を呼び寄せ，定住的なコミュニティを連鎖移民的に形成していった過程に類似した現象である。だが近年のニューカマーが行なう知人や同郷者の呼び寄せは，必ずしもパプアニューギニアへの定着的，永住的なコミュニティを目指したものではなく，ビジネス・パートナーや自己の企業の労働者として呼び寄せるところに特徴がある。後述するように，現在のパプアニューギニアに移入する華人は必ずしも長期的にパプアニューギニアに居住するわけではなく，出身地へと帰国したり，さらに別の国へと再移動するものが存在する。そのため，こうした華人ニューカマーによる新たな華人の呼び寄せは，パプアニューギニアに在住する華人の数を増加させはするが，必ずしも定住者を増加させるわけではなく，むしろ比較的長期間に渡って移住先に居住する一時滞在者（Wang 1996）が増加するという傾向を生じさせた。

これらの華人や華人系企業がパプアニューギニアへと移入する理由は幾つかある。そのもっとも主要なものと思われるのが，パプアニューギニアの経済的な特徴である[17]。

第一に挙げることが出来る特徴は，パプアニューギニアの通貨であるキナ（kina）の交換レートが，かつては高く設定されていたことである。パプアニューギニアは独立から1994年まで，自国の通貨と外貨との交換レートを高く設定していた（Duncan & Xu 2000. King & Sugden 1997）。そのため，パプアニューギニアで経済活動を行なう華人は現地でキナを獲得し，帰国後に自国通貨と交換することにより，利益を得ることが可能であった。現在パプアニューギニアに滞在する華人の多くが，パプアニューギニアで経済活動を行なう魅力として，このキナの交換レートの高さを挙げている。

第二の特徴としては，パプアニューギニアの独立以降，それまで植民地行政や経済活動に携わっていたオーストラリア人が，次第に帰国してゆくことにより，政府機関の職員の数が減少したことや，経済的なニッチに空白が生じたことが挙げられる。それまでオーストラリア人によって占められていた職業や経済分野に生まれた人材不足を埋めるかたちで，1980年代からフィリピン人をはじめとするアジア人がパプアニューギニアに流入するようになった（Connell 1990, 1997, p.175）。現在パプアニューギニアに移入する華人もそうした新たなアジア人移入者の一部に含まれる。

第三には，パプアニューギニアの天然資源の存在とそれに依存した経済状態が，華人の移入要因となっていることが挙げられる。パプアニューギニアの特徴としてしばしば指摘されるのが，鉱物資源や森林資源といった，豊富な天然資源の存在である。その中でも林業の開発は積極的に行なわれており，外国企業も参入して森林地帯で伐採を行なっている。（Saulei 1997. Connell 1997, p.100）。近年のパプアニューギニアへの華人の移入を特徴付ける例として，この森林資源に携わるマレーシア系企業のパプアニューギニアへの進出と，それに伴うマレーシア華人の移入を挙げることが出来る。現在パプアニューギニアで活動している Rinbunan Hijau 社や Land & General

17)　パプアニューギニアへの華人の経済的な移入要因については別稿でも述べた（市川 2002）。

社等のマレーシア系の林業企業は，もともとマレーシアで操業を行なっていたが，乱伐等による環境問題や，労働賃金の上昇といったコストの高騰により，インドネシアやソロモン諸島，パプアニューギニアといったマレーシア以外の地域でも操業を行なうようになった（原 1998, p.80）。特に1990年代になり，マレーシアのサバ州とサラワク州で産出される材木の輸出量が減少し，その一方で主要な木材輸入国である日本における需要には変化がなかったため，木材の値段が高騰した。そのためこの時期に，木材の伐採と輸入を行なうためにパプアニューギニアとソロモン諸島で操業するマレーシアの林業企業が増加することとなった（Connell 1997, p.110）。

こうしたパプアニューギニアへと移出するマレーシア企業の従業員として，マレーシア華人がパプアニューギニアへと移入することとなった。植民地時代の華人の主な活動の場はニューギニア地域，特にラバウルやケビエンといった都市部であり，従事する経済活動も，商工業やプランテーション労働者や管理者であった。だが近年のマレーシア華人は都市部のみならず，伐採を行なうために都市から離れた地域でも活動し，居住するようになってきている。従来の華人は主にビスマルク諸島やニューギニア北岸の一部の都市周辺で現地住民と商品の売買やコプラの買取等を通じて接触してきた（e.g. Epstein 1992, p.39. Salisbury 1970, p.175, p.188. Willis 1974, p.111）ことと比較し，これらのマレーシア華人は，それほど都市化が進んでいない遠隔地に居住する現地住民とも接触することになった（Wood 1995）。林業に従事する華人の存在は，それまでのパプアニューギニア華人社会とは異なる現地住民との接触のパターンをもたらしたといえるだろう[18]。

こうした林業に従事するマレーシア華人のように，もともと華人系企業の従業員としてパプアニューギニアに流入した華人の中には，前述したようにパプアニューギニアに来てから，所属していた企業を辞めて，自分自身で経済活動を行なう者も存在するようになった。これら華人ニューカマーがパプアニューギニアで従事する分野は，小売業や卸売業，林業，貿易業，漁業，機械・自動車修理といったものから，レストランや娯楽施設等，多岐にわたる。またこれらの華人ニューカマーの中には，それまでオールドカマーが所有していた店舗や工場の権利を入手し，新たに経済活動を開始する者が存在する[19]。それまでパプアニューギニア各地で経済活動を行なっていた華人オールドカマーがオーストラリアへと移住してゆくにつれ，経済的なニッチに空白が存在するようになったために，そうしたニッチを引き継ぐかたちで華人ニューカマーが様々な商業分野に参入するようになったのである。またニューカマーの中でも，比較的早い時期にパプアニューギニアへと移入し，その後出身地へ戻ったり，オーストラリアやニュージーランドといった第三国へと再移動した華人のビジネスを，後発移民が引き継ぐという状況もある[20]。

以上述べたように，植民地時代から居住し

18) パプアニューギニアの都市部以外の地域で活動する華人としては，林業に従事するマレーシア華人以外にも，海岸部でナマコ等の海産物の収集・売買に従事する華人が存在する（田和 1995）。

19) 現在のパプアニューギニアには自国民の経済活動を保護するために，外国籍者の参入を制限する保留業（Reserved Business）が設定されている（Rannells 1995）。そのため，こうした業種への参入をする華人は，すでにパプアニューギニア人名義で登録をした企業や店舗の権利を買い取るということも行なわれている（市川 2002）。

20) パプアニューギニアに在住する多くの華人は，先ず華人オールドカマーがオーストラリアに移住することにより生じた経済的な空白を1980年代から移入したマレーシア華人が引き継ぎ，さらにマレーシア華人の帰国や再移動によって生じた空白を1990年代以降増加した中華人民共和国出身者が引き継ぐようになってきたと説明する。それぞれの華人による移出と移入の時期の差と経済的ニッチの引継ぎは，現在のパプアニューギニアにおける華人社会の内部構成の変遷を反映しているといえよう。

てきた華人オールドカマーはオーストラリアへ移住してゆく傾向があり，その数を減少させ続けているが，その一方で東・東南アジア諸国からの華人ニューカマーが移入し続けることにより，パプアニューギニアの「華人社会」そのものは消滅することなく，むしろ拡大することとなった。だが新たにパプアニューギニアに移入してきた華人も，そのままパプアニューギニアに留まり，永続的に居住するというわけではない。前述したように，企業の従業員としてパプアニューギニアに入国し働く華人の多くは，出身地に家族を残しているため，一定の期間が過ぎると帰国することを前提とした生活を送っている。またパプアニューギニアで個人的に経済活動を行なっている華人も，必ずしもパプアニューギニアでの永住を希望するとは限らず，個々人の資質と状況に応じて，オーストラリアやニュージーランド，グアムといった他のオセアニアの国々への再移動を望み，実際に再移動をする華人も存在する（市川 2002）こうした華人ニューカマーのパプアニューギニアからの移出要因は幾つかあるが，主要なものとしては，パプアニューギニア国内，特に都市部の治安が悪化しているという社会的な理由や[21]パプアニューギニアの経済状況の悪化という経済的な理由[22]を挙げることが出来る（市川 2002）。そのためパプアニューギニアでの永住を望まず，出身地域や再移住地との頻繁な人の往来や情報の交換が行なわれており，パプアニューギニア華人社会の内部構成は，他地域の華人社会とも連動した，流動的なものに変化しつつある。

これと比較し，オーストラリアに移住したパプアニューギニアの華人オールドカマーの中には，オーストラリア華人のコミュニティに参加する者が存在するが，同時にオーストラリアでもパプアニューギニア出身者が中心となってコミュニティ組織を形成するといった活動を行う者も存在する[23]。華人オールドカマーはオーストラリアに移住した後も，自己をパプアニューギニア出身華人として認識しており，オーストラリア華人や中国本土の華人とは異なる自己を認識している。これらオーストラリア在住のパプアニューギニア出身華人は，パプアニューギニアに現在でも居住している親族や知人と頻繁に連絡をとっており，パプアニューギニアとオーストラリアの両地域のコミュニティを結ぶネットワークを構築している[24]。

21) パプアニューギニアは独立以後，犯罪率が上昇し，急速に治安を悪化させた（Levantis 1997, 2000, pp.10-14. Levantis & Gani 1998）。特に都市部では失業者の増加が犯罪の増加を引き起こしており，殺傷を伴う強盗が頻発している。パプアニューギニアに滞在し，経済活動を行なっている華人も治安の悪化の影響を受け，より安全な国家や地域での生活を望む者が多くなっている。

22) パプアニューギニア政府は，1994年にキナの価値切り下げを行ない，それまで高く設定されていた外貨との交換レートの維持を取りやめた（King & Sugden 1997）。そのため，それまでキナを自国の通貨や外貨と交換することにより利益を得てきた華人は，経済的なメリットを失い，パプアニューギニアで経済活動を行なう魅力を半減させた。

23) オーストラリアに移住したパプアニューギニア出身華人は，PNG Chinese Catholic Association（在シドニー）や，Cathey Club（在ブリスベン）といった組織を形成し，コミュニティ活動を行なっている（梁・張編 2001, Ling 2001, p.129，及び筆者の調査）。またオーストラリアには19世紀から金鉱労働者等として華人が流入し，コミュニティを形成していたという歴史がある。これらの華人も広東省出身者が多く，パプアニューギニア華人の僑郷である四邑地域出身者も存在する。そのためパプアニューギニア出身華人の中には四邑同郷会や僑青社（在シドニー）といった同郷会館や青年組織に参加する者も少数ではあるが存在する（余他編 1998，及び筆者の調査）。

24) ただし，このようなパプアニューギニアからオーストラリアへの移住や，オーストラリアの不動産への投資は，華人によってのみなされるわけではない。パプアニューギニア人の中でも比較的高い社会階層に属する人々の中には，オーストラリアでの子供の教育や，オーストラリアの不動産への投資を行なうものも存在する（e.g. Gewertz & Erington 1999）。その意味で，パプアニューギニアとオーストラリアとの間の移民や投資といった関係の重要性は，必ずしも華人だけの特徴なのではなく，むしろパプアニューギニア社会全体の階級分化との関係を持つものであるといえる。

このように，現在のパプアニューギニア華人社会は，パプアニューギニア国内のみで完結する集団ではなく，東・東南アジアやオセアニアの他の国々や地域との人の往復や相互の連絡によるネットワークの中に位置付けられる。そしてその他地域との関係は，かつての中国とパプアニューギニアといったような移民送出地域と移民先との二点間の関係なのではなく，複数の移民送出地域と，更なる再移動先との，複数の地域との関係なのである。

7 考 察

以上，パプアニューギニアにおける華人社会，およびパプアニューギニアをめぐる華人の国際移動との相互関係を，ニューギニア島がドイツとイギリスによって植民地化された時期から現在に至るまでという比較的長期間にわたる時間的な範囲の中で検討してきた。第一章で述べたように，華人の国際移動とそれにともなう華人社会の形成も，個々の華人の送出地域と受入地域における政治的・社会的な状況の変化により，影響を受けることとなる。パプアニューギニアにおける華人社会も，華人の送出地域の変化，居住地であるパプアニューギニアにおける社会的な変化，さらにはパプアニューギニアからの帰国や再移住といった移動の形態の変化により，各時代でその性格を変容させてきた。最後にパプアニューギニアをめぐる華人の国際移動とコミュニティとの相互関係について，その地域的な特徴に注目することにより考察してみたい。

第一点目は，パプアニューギニアをめぐる華人の移動と，華人によるコミュニティの形成は，相互に影響を与えあうことにより，当該地域における華人社会を形成し続けてきたということである。これには中国や東・東南アジアからパプアニューギニアへの移入という国際移動だけではなく，ニューギニア側からパプア側へという国内移動や，パプアニューギニアからオーストラリアへという移出も含まれる。ドイツやオーストラリアによる植民地統治の時代，華人は宗主国の植民地政策や，植民地の社会・経済状況に応じ，ニューギニアへと移入してきた。この時期の華人社会は，中国大陸の移民母村の延長という，一時滞在者的な性格の強いコミュニティであったことを指摘できる。現地生まれの二世や三世が増加することにより，ニューギニアの華人社会は次第に現地化し，定住化の過程を歩むことになった。だが華人は現地のニューギニア社会に同化することはなく，独自の文化や民族集団を維持し続けていった。植民地労働力として移住した中国出身者が，自己の民族的なアイデンティティを保持しながらも，次第に定着的なコミュニティを形成する過程は，パプアニューギニアに限らず，隣接する東南アジアや他のオセアニア地域でも見られるものである。だが1950年代後半からニューギニアに居住する華人がオーストラリア国籍を取得することが認められ，その結果1960年代以降にパプアおよびニューギニア域内での移動，およびオーストラリアへの移動が増加することで，それまでの中国大陸出身者の定着的な移民コミュニティというニューギニアの華人社会の性格は変化することとなった。第五章でも述べたように，オーストラリア国籍を取得した華人にとって，パプアおよびニューギニアからオーストラリアへの移動は，必ずしも「外国」への移住といった意味合いを持つものではない。

その意味で，オーストラリアへの移出はニューギニア領内における移動の連続線上にあるといってもよいだろう。中国からニューギニアへという第２次世界大戦以前の華人の移動がパプアニューギニアにおける中国出身者の移民コミュニティを形成する契機となったことと比較し，1960年代以降の華人のパプアおよびニューギニア領域内，及びパプアおよびニューギニア領域外への移動は，華人のコミュニティや活動範囲を拡大したという性格を持つ。戦前の中国からニューギニアへとい

う華人の移入から，戦後のニューギニアからオーストラリアへの移出という移動経路の変化は，パプアニューギニアにおける華人社会を取り巻く社会的状況の変化に応じるかたちで生じたものであるが，この移動形態の変化は，華人のコミュニティそのものにも影響を与えることとなったのである。パプアニューギニアへの移入と，パプアニューギニアからの移出という華人の移動は，双方が相俟ってパプアニューギニアにおける華人社会を特徴付けてきたのである。

第二点目は，パプアニューギニアをめぐる華人の移動には，移入に関わる移動要因のみならず，パプアニューギニアからの移出に関する要因の二つが存在することである。華人の移住については，従来プッシュとプルの二つの要因によって説明される傾向があった。プッシュ要因とプル要因という二分法的な観点は，現実の移民現象を分析する際に過度の一般化を行なってしまう恐れがあり，また個々の移民が機械的に二つの要因に従って移動するわけではないといった問題点がある。だが華人の移動と定住の選択には，いくつかの特定の要因が存在するのは明らかである。中国や東南アジアからパプアニューギニアへと移入する華人の移動要因は時代ごとに変化しており，それは現在でも変化し続けている。またこれと同時に，パプアニューギニアからの移出要因も歴史的に変化していることも指摘できる。一旦移入してきた華人が出身地に戻ったり，別の地域へと再移住する理由も，前述したように植民地期と独立以後では異なっている。それぞれの華人の出身地，パプアニューギニア，更なる移動先といった複数の地域の間のプッシュ要因とプル要因が，パプアニューギニアの華人社会の特徴に影響を与えてきたのである。

第三点目は，華人の移入と移出に見られる移動形態の多様化と，移民送出地域の多様化が，パプアニューギニアにおける華人社会内部の構成を変化させたことである。これは特に近年の東・東南アジア出身者の増加の中に顕著に見られる。これにより，「華人社会」の内部構成自体も多様化することとなった。現在，「華人」という言葉は，中国国外に居住する中国系の人々を指す総称として使用されている。だが前述したように，現在のパプアニューギニアに居住している中国系人は，出身地や文化的・社会的背景が異なり，必ずしも共通した特徴を持っているわけではない。そのため現在のパプアニューギニアの華人社会は，様々な文化的・社会的背景を持った，多様な地域出身の華人が移入することによって形成された，複数のサブ・グループを内包した存在であるということが出来る。「パプアニューギニア華人」という確固とした民族集団が存在しているというよりも，複数の地域出身の華人によって，パプアニューギニア国内に華人のコミュニティが形成されているというイメージのほうがより現実に近いといえる。

さらに，これら近年の華人はオールドカマーにせよ，ニューカマーにせよ，必ずしもパプアニューギニアでの永住を志向しているわけではない者が大多数を占めている。前述したように，植民地時代からパプアニューギニアに居住する華人の大部分はオーストラリア国籍を取得しており，パプアニューギニア独立以後は多くの者がオーストラリアに移住していった。パプアニューギニアに在住している華人オールドカマーの多くも，いずれはオーストラリアに移り住むことを前提として生活しているものが大半である。そのためパプアニューギニアに居住する華人オールドカマーは，今後その数を減少させ続けるであろうと思われる。また，パプアニューギニア独立以後に新たに移入してきた華人ニューカマーも，同様にパプアニューギニアを，自分が将来にわたって住みつづける地であると認識することも少ない。パプアニューギニアに長期にわたって居住することにより，パプアニューギニア国籍を取得する華人ニューカ

マーも存在するが，多くの華人は自己の出身地とパプアニューギニアを頻繁に往復しており，必ずしもパプアニューギニアに将来にわたって住み続けるという意味での「移民」を志向する状況にはない。また企業の従業員としてパプアニューギニアに移入した華人は一定期間が過ぎるとパプアニューギニアに滞在する必要がなくなる。ニューカマーの中にも，パプアニューギニアに入国して後に，再びオーストラリアをはじめとする第三国へと出国するものが存在するように，華人ニューカマーのパプアニューギニアへの移入は，パプアニューギニア在住者の数を増やすことはあっても，必ずしも定着的で現地化を志向するコミュニティの形成に結びつくとは限らないのである。

このような状態からは，「パプアニューギニアの華人社会」とは，パプアニューギニアという地理的な領域の中で完結した存在なのではなく，複数の地域間の華人の移動とコミュニティの形成という二つの過程によって，絶えず形成され続ける存在なのだということが出来る。すべての民族集団やコミュニティは，単一の地理的な領域の内部のみで完結しているわけではなく，常に外部社会との関係の中に存在している。その意味では，中国人の移民によって形成された華人社会は，そうした外部社会とコミュニティの相互関係を顕著に表す典型的な存在である。パプアニューギニアをめぐる華人の移動とコミュニティの形成過程は，パプアニューギニアにおける華人社会の特徴にも顕著な影響を与えてきた。だがそうした地域的な特徴も必ずしも固定したものなのではなく，パプアニューギニアにおける社会状況の変化と，華人の送出地域である東・東南アジアとの関係や，新たな移民先であるオーストラリアとの関係の中で，絶えず変化し続けてきたのである。前述したように，現在のパプアニューギニアにおける華人社会は，複数の地域出身の華人によって構成されており，必ずしも内部が均質な民族集団というわけではない。華人の移動とコミュニティの形成過程は，パプアニューギニアにおける華人社会が形成される契機であったが，この移動とコミュニティの変遷は現在でも継続しており，不断に華人社会に影響を与え，その特徴を変化させ続けているのである[25]。

25) 本稿は主に文献資料に依拠し，パプアニューギニアをめぐる華人の移動とコミュニティの変遷過程について検討したが，議論の基となった現地調査は1999年から2001年にかけて断続的に行われた。調査はマレーシア，パプアニューギニア，オーストラリアの三カ国で行なわれ，それぞれ華人の移民送出地域，移住地域，更なる移住先という三つのコミュニティを対象としたフィールドワークを行った。調査を行うにあたり，財団法人日本科学協会の笹川科学研究助成「パプアニューギニアにおける華人社会の動態的把握」と，文部科学省科学研究費補助金研究プロジェクト「パプアニューギニアにおける太平洋戦争：占領政策，歴史認識，戦争による社会変容」（代表：豊田由貴夫）および文部科学省科学研究費補助金研究プロジェクト「グローバリゼーション下の東南アジアの社会変容と地域変化」（代表：梅原弘光）からの援助を受けた。現地調査ではパプアニューギニア華人の方々からの協力を得た。また游仲勲先生からは貴重な資料の提供を受けた。関係者各位に深謝します。

参 考 文 献

市川　哲　2001「ニューギニア華人にとっての太平洋戦争」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』71, pp.1-8。
――――　2002「パプアニューギニア，ポートモレスビーの華人社会―定住と移動にみる生活戦略―」吉原和男・鈴木正崇編著『拡大する中国世界と文化創造―アジア太平洋の底流―』弘文堂，446-457頁。
小柏葉子　1995「パプアニューギニアの APEC 加盟―アジア太平洋外交の追求―」『広島平和科学』18, pp.113-129。
塩田光喜　2000「ビジネスと福音―パプアニューギニアにおける都市文化の形成とその主体―」熊谷圭知・塩田光喜編『都市の誕生―太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容―』日本貿易振興会アジア経済研究所，pp.87-156。
戴 国 煇　1980『華僑：「落葉帰根」から「落地生根」への苦闘と矛盾』研文出版。
田和正孝　1995『変りゆくパプアニューギニア』丸善ブックス。
豊田由貴夫　2000「メラネシア史」山本真鳥編著『オセアニア史』山川出版社，pp.221-262。
原 不二夫　1998「マレーシア企業の対外直接投資」『アジア経済』39-12，pp.56-90。
游 仲 勲　2000a「オーストラリア華人・華僑研究序説（1）」亜細亜大学アジア研究所編『最近の中国系の政治，経済，社会，文化等の変化に関する研究』亜細亜大学アジア研究所，pp.93-120。
――――　2000b「オーストラリア華人・華僑研究序説（2）」亜細亜大学アジア研究所編『最近の中国系の政治，経済，社会，文化等の変化に関する研究』亜細亜大学アジア研究所，pp.121-153。
――――　2001「中国系人の国際移動―現状と21世紀の展望―」游仲勲編著『21世紀の華人・華僑』ジャパンタイムズ，pp.34-53。
吉原和男　1988「移民都市のボランタリー・アソシエーション―香港の宗親団体と同郷団体―」末成道男責任編集『文化人類学　5』アカデミア出版，pp.151-163。
――――　1991「香港の同郷会と華僑送出村―97年問題とのかかわり―」可児弘明編『香港および香港問題の研究』東方書店，pp.129-154。

陳 碧 笙　1985「華僑的名称和意義」『華僑歴史論叢』第二輯，pp.1-5。
方 雄 普・許 振 礼　1995『海外僑団尋踪』北京：中国華僑出版社。
梁　　雲・張 健 徳　編　2001『国泰会第20週年紀念特刊』Brisbane：国泰会。
劉 渭 平　2000『大洋州華人史事叢稿』香港：天地図書。
盧 文 廸・彭 家 礼・陳 澤 憲　編　1984『華工出国資料匯編』北京：中華書局。
余宜滄他編　1998『澳洲雪梨四邑同郷会関聖帝廟百周年紀念』Sydney：雪梨同郷会。
荘 国 土　1985「“華僑”一詞名称考」『華僑歴史論叢』第二輯，pp.10-16。

Biskup, Peter. 1970. Foreign Coloured Labour in German New Guinea. *The Journal of Pacific History* 5, pp.85-108.
Cahill, Peter. 1996. Chinese in Rabaul―1921 to 1942: Normal Practice, or Containing the Yellow Peril? *The Journal of Pacific History* 31-1, pp.72-91.
Connell, John. 1990. “The Last Wave: Filipino Labour Migration to the Pacific.” *Labour in the South Pacific.* (Clive Moore, Jacqueline Leckie and Doug Munro, eds.) Townsville: James Cook University of North Queensland. pp.128-132.
――――. 1997. *Papua New Guinea: The Struggle for Development.* London: Routledge.
Coughlan, James E. 1996. The Transformation in the Characteristics of Chinese Migration to Australia, 1982-1993. *Asian Profile: Asia's International Journal* 24-2, pp.99-129.
Duncan, R.C. and Xinpeng Xu. 2000. Should Papua New Guinea Adopt a Strong Exchange Rate Regime? *Pacific Economic Bulletin* 15-2, pp.36-45.
Epstein, Arnold L. 1992. *In the Midst of Life: Affect and Ideation in the World of the Tolai.* Berkeley: University of California Press.
Firth, Stewart. 1989. “Labour in German New Guinea.” *Papua New Guinea: A Century of Colonial Impact 1884-1984.* (Lātūkefu, Sione, ed.) Port Moresby: The National Research Institute and the University of Papua New Guinea. pp.179-202.
Gewertz, Deborah and Frederick Errington. 1999. *Emerging Class in Papua New Guinea―The Telling of Difference.* Cambridge: Cambridge University Press.
Inglis, Christine. 1972. “Chinese.” *Encyclopedia of Papua and New Guinea.* (Peter Ryan, ed.) Victoria:

Melbourne University Press in Association with the University of Papua and New Guinea. pp.170-174.
———. 1997. The Chinese of Papua New Guinea: From Settlers to Sojourners. *Asia and Pacific Migration Journal* 6-3/4, pp.317-341.
Inglis, C., Gunasekaran, S., Gerard Sullivan and Chung-Tong Wu (eds.). 1992. *Asians in Australia—The Dynamics of Migration and Settlement*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
Jupp, James. 1998. *Immigration* (Second Edition). Oxford: Oxford University Press.
King, Tim and Craig Sugden. 1997. Managing Papua New Guinea's Kina. *Pacific Economic Bulletin* 12-1, pp. 20-29.
Levantis, Theodore. 1997. Urban Unemployment in Papua New Guinea: It's Criminal. *Pacific Economic Bulletin* 12-2, pp.73-84.
———. 2000. *Papua New Guinea: Employment, Wages and Economic Development*. Canberra: Asia Pacific Press.
Levantis, Theodore and Azmat Gani. 1998. Labour Market Deregulation, Crime and Papua New Guinea's Severe Drought. *Pacific Economic Bulletin* 13-1, pp.89-97.
Levine, Hal B. and Marlene Wolfzahn Levine. 1979. *Urbanization in Papua New Guinea: A Study of Ambivalent Townsmen*. Cambridge: Cambridge University Press.
Ling, Chek. 2001. *Plantings in a New Land: Stories of Survival, Endurance and Emancipation*. Brisbane: Society of Chinese Australian Academics of Queensland & Cathey Club.
Nelson, Hank. 1982. *Taim Bilong Masta: The Australian Involvement with Papua New Guinea*. Sydney: Australian Broadcasting Commission.
Radi, Heather. 1971. "New Guinea under Mandate 1921-41." *Australia and Papua New Guinea*. (W. J. Hudson, ed.) Sydney: Sydney University Press. pp.74-137.
Rannells, Jackson. 1995. *PNG: A Fact Book on Modern Papua New Guinea: Second Edition*. Oxford: Oxford University Press.
Rowley, C. D. 1971. "The Occupation of German New Guinea 1914-21." *Australia and Papua New Guinea*. (W. J. Hudson, ed.) Sydney: Sydney University Press. pp.57-73.
Salisbury, Richard F. 1970. *Vunamami: Economic Transformation in a Traditional Society*. Melbourne: Melbourne University Press.
Saulei, Simon. 1997. Forest Exploitation in Papua New Guinea. *The Contemporary Pacific* 9-1, pp.25-72.
Suryadinata, Leo. 1997. "Ethnic Chinese in Southeast Asia: Overseas Chinese, Chinese Overseas or Southeast Asians?" *Ethnic Chinese as Southeast Asians*. (Suryadinata, Leo ed.) Singapore: Times Academic Press. pp. 1-24.
Venard, Mary. 1978. *The History of the Daughters of Our Lady of the Sacred Heart in Papua New Guinea*. (Private Circulation)
Wang Gungwu. 1991. *China and Chinese Overseas*. Singapore: Times Academic Press.
———. 1996. "Sojourning: The Chinese Experience in Southeast Asia." *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asian Chinese*. (Anthony Reid, ed.) Sydney: Allen and Unwin. pp.1-14.
———. 1998. "Upgrading the Migrant: Neither Huaqiao nor Huaren." *The Last Half Century of Chinese Overseas*. (Elizabeth Sinn, ed.) Hong Kong: Hong Kong University Press. pp.15-34.
Willis, Ian. 1974. *Lae: Village and City*. Melbourne: Melbourne University Press.
Willson, Margaret. 1989. "The Trader's Voice: PNG-Born Chinese Business and the 1987 Elections." *Eleksin: The 1987 National Election in Papua New Guinea*. (Michael Oliver, ed.) Port Moresby: University of Papua New Guinea. pp.99-108.
Willson, Margaret, Clive Moore and Doug Munro. 1990. "Asian Workers in the Pacific." *Labour in the South Pacific*. (Clive Moore, Jacqueline Leckie and Doug Munro, eds.) Townsville: James Cook University of North Queensland. pp.78-107.
Willmott, William E. 1995. "Origins of the Chinese in the South Pacific Islands." *Histories of the Chinese in Australia and the South Pacific*. (Paul Macgregor, ed.) Melbourne: Museum of Chinese Australian History. pp.129-140.
Wood, Mike. 1995. White Skins, Real People and Chinese. In Some Spatial Transformations of the Western Province, PNG. *Oceania* 66, pp.23-50.
Wu, David Y.H. 1977. Ethnicity and Adaptation: Overseas Chinese Enthrepreneurship in Papua New Guinea. *Southeast Asian Journal of Social Science* 5-1/2, pp.85-95.
———. 1982. *The Chinese in Papua New Guinea: 1880-1980*. Hong Kong: Hong Kong University Press.（呉燕和著，王維蘭訳 1985『巴布亜新幾内亜華人百年史（1880-1980）』台北：正中書局）
———. 1998. The Chinese in Papua New Guinea: Diaspora Culture of the Late 20th Century. *The Chinese Diaspora: Selected Essays Volume II*. (Wang Ling-chi & Wang Gungwu, eds.) Singapore: Times Academic Press. pp.206-216.

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【Source Materials and Remarks】

The Fijian Transitive Ending *-(C)aki/a* in Loan Words

Tamata, Apolonia*
Pacific Languages Unit
University of the South Pacific

This paper focuses on verbs that were borrowed from English to Standard Fijian (SF), and examines how they are adapted to the verb system of SF. Applying Lexicase dependency grammar, it shows that these loan verbs show derivational relationships between unergative and unaccusative intransitive verbs and their corresponding transitive verbs, as the SF verbs do. Unlike the SF verbs, however, a loan verb may carry only one ending, namely, *-(C)aki/a*, while a SF verb may occur, as well, with the so-called "short transitive ending".

1.0 Introduction
2.0 Verb Classes in Fijian
3.0 Loan Verb Classes
4.0 The Transitive Ending
5.0 Conclusion

1.0 Introduction

Loanwords in the Fijian languages are not uncommon. There are loanwords from English and some are from Hindi. The contributing factor to English as a source for loan words is the British rule for about 100 years when Fiji was a colony of Britain. From that time until today, English has been the official medium of instruction in schools and has also been the official language of government. Apart from native Fijians, there are also Indians, Chinese and part Europeans living in Fiji and English emerged to be a convenient lingua franca. As a result, English became a widely used language in Fiji's communities thus penetrating into the language system with the result that there are numerous borrowings from the English language in Fijian. The other contributing factor of course is that with western education, ideas and technology comes borrowed terminology.

This paper is an attempt to study loanwords that are classed as verbs in Fijian. First of all, it will be shown that loan verbs function in four principle ways based on the relationship between intransitive and transitive verb in Fijian. Secondly, it will be

Keywords: Fijian language, Lexicase dependency grammar, unergative, unaccusative, transitivity

* Visiting Professor ILCAA (June 1998-January 1999)

shown that, of the several transitive endings, only one transitive ending is used or is productive in transitive loan verbs. Other types of verbal affixation in loan verbs, for example causative affixation, will not be part of the present study.

The dialect examined in this study is Standard Fijian (SF). Data for this study are mostly from *Na iVolavosa Vakaviti*, (1998) but examples are mine. The grammatical analysis applied in this study follows closely the Lexicase dependency framework used in Kikusawa, (1998). Lexicase dependency grammar is a theory in which syntactic notions are strictly defined according to morpho-syntactic criteria which are believed to be universal (ibid.).

2.0 Verb Classes in Fijian

There are several types of verbs in Fijian. *Na iVolavosa Vakaviti*, (2003) has seven distinctions. This paper will focus on the derivational relationships between intransitive and transitive verbs and will describe the patterns of loan verbs in the Fijian verb system. Fijian intransitive verbs are considered to be of two types. The first type is that which is described as 'active' in Schütz (1985), and as 'agent oriented' in Arms (1990, p.130). In lexicase, active transitive verbs are considered to have a derivational relationship to intransitive verbs, such that the Agent (actor) of the transitive verb corresponds to the Patient (actor) of an intransitive verb. These verbs are here labelled 'unergative'.

The second type of verb in Fijian is described as 'stative' in Schütz (*ibid.*), and as 'patient oriented' in Arms (*ibid.*). In Lexicase, stative transitive verbs are considered to have a derivational relationship to intransitive verbs, such that the Patient (undergoer) of the transitive verb corresponds to the Patient (undergoer) of an intransitive verb. These verbs are here labelled 'unaccusative'. Transitivity in Fijian is marked by the ending -(C)i or -(C)aki when the PAT is a proper noun or pronoun, for example:

1.
	E	tala-i	rau
	AGR	send-TR	3d
	AGT	+trns	PAT
	actr		

"S/He sends them (on an errand)."

2.
	E	drō-taki	Lusi
	AGR	flee-TR	Lusi
	AGT	+trns	PAT
	actr		

"S/He ran away from Lusi."/"S/He ran away with Lusi."

or is marked by the ending -(C)a or -(C)aka when the PAT is a common noun preceded

by a Determiner.

3.	Au	dola-va	na	kātuba
	AGR	open-TR	DET	door
	AGT	+trns		PAT
	actr			

"I opened the door."

4.	Era	butu-laka	na	voivoi	na	gone
	AGR	step-TR	DET	pandanus leaves	DET	children
		+trns		PAT		AGT
						actr

"The children trampled on the pandanus leaves."

This paper treats a verb as intransitive when it takes only one complement noun phrase (Kikusawa, 1998, p.116), the PAT, which can be either an undergoer (ex. 5), or an actor (ex. 6a), and transitive when it takes two complement noun phrases, the AGT and the PAT, as seen in examples 1-4 above.

5.	E	moce	na	gone
	AGR	sleep	DET	child
		-trns		PAT
				ndgr

"The child is asleep."

2.1 Unergative verbs

Verbs in the examples below illustrate the usage of unergative intransitive verbs and their corresponding transitive derivations following the definition of unergative verbs described in 2.0, i.e., the PAT of an intransitive verb corresponds with the AGT of a transitive verb:

6a.	E	kaba	o	Jo
	AGR	climb	PRP	Jo
	-trns			PAT
				actr

"Jo climbed."

6b.	E	kaba-ta	na	vunimaqo	o	Jo
	AGR	climb-TR	DET	mangoe tree	PRP	Jo
		+trns		PAT		AGT
				ndgr		actr

"Jo climbed the mango tree."

6c.	Sa	kaba-taka	na	isele	o	Jo
	AUX	climb-TR	DET	knife	PRP	Jo
		+trns		PAT		AGT
				ndgr		actr

"Jo has climbed taking the knife."

7a.	Rau	sa	vodo
	AGR	AUX	board
	PAT		–trns
	actr		

"They have boarded (e.g., the bus)."

7b.	Rau	vodo-ka	na	basi	ni	ciwa
	AGR	boarded-TR	DET	bus	of	nine
	AGT			PAT		
	actr			ndgr		

"They boarded the nine o'clock bus."

The PAT in unergative intransitive sentences is the AGT in the corresponding transitive verb derivation as we see in the above examples and which is summarized below:

8. Unergative verb derivation=intransitive PAT : transitive AGT

2.2 Unaccusative verb

In contrast to the derivational relationship which results in an unergative verb, illustrated in 6-7, when the PAT (undergoer) in an intransitive sentence corresponds with the PAT (undergoer) in a derived transitive sentence, an unaccusative verb results, as the following examples illustrate:

9a.	E	bulu	na	lovo
	AGR	bury	DET	earth oven
		–trns		PAT
				ndgr

"The 'lovo' is buried."

9b.	E	bulu-ta	na	lovo	o	Jo
	AGR	bury-TR	DET	earth oven	PRP	Jo
		+trns		PAT		AGT
				ndgr		actr

"Jo buried the 'lovo'."

10a.	Era	sa	masi	oti	na	veleti
	AGR	AUX	wash	finish	DET	plate
			–trns			PAT
						ndgr

"The plates have already been washed."

10b.	E	masi–a	na	veleti	o	Lusi
	AGR	wash–TR	DET	plate	PRP	Lusi
		+trns		PAT		AGT
				ndgr		actr

"Lusi washed the plates."

10c.	E	masi–raka	na	veleti
	AGR	wipe–TR	DET	plate
	AGT	+trns		PAT
	actr			ndgr

"S/he washed the plates vigorously."

Unaccusativity can thus be summarized as follows:

11. Unaccusative verb derivation=intransitive PAT : transitive PAT

The summaries in 8. and 11. illustrate the main difference between two types of intransitive verbs in Fijian in terms of the derivational relationships that hold between the structures in which they participate. This difference is also implied in the English glosses where examples for the intransitive sentences as in 6a. and 7a. represent English active sentences while examples 9a. and 10a. typify English passive structures.

2.3 Transitive verbs having both unergative and unaccusative derived intransitive forms

There are some transitive verbs that have both unergative and unaccusative derivationally related intransitive verbs. This implies that while in some sentences, the AGT of a given transitive verb corresponds with the PAT of its intransitive derivation, in other sentences, it is the PAT of the same transitive verb that corresponds with the PAT of its intransitive derivation. Below are a few examples:

12a.	E	taki	tiko	o	Seru
	AGR	take (liquid)	CNT	PRP	Seru
		–trns			PAT
					actr

"Seru is water–fetching."

12b.	E	taki	mai	wailevu	na	wai
	AGR	take (liquid)	PRP	river	DET	water
		–trns				PAT
						ndgr

"Water is fetched from the river."

12c.	E	taki–va	na	wai	o	Seru
	AGR	take liquid–TR	DET	water	PRP	Seru
		+trns		PAT		AGT
				ndgr		actr

"Seru fetched the water."

Note here that the PAT (actor) in 12a corresponds with the AGT (actor) in 12c, as the result of an unergative verb derivation. In another usage of *taki*, the PAT (undergoer) in 12b corresponds with the PAT (undergoer) in 12c — the result of an unaccusative verb derivation. The following examples illustrate the same derivations:

13a.	Au	a	tavuteke	vakamatakalailai
	AGR	PAST	fry	early morning
	PAT		–trns	
	actr			

"I did some frying early in the morning."

13b.	E	tavuteke	na	ika	qai	vaka–lolo
	AGR	fry	DET	fish	SEQ	with–coconut milk
		–trns		PAT		
				ndgr		

"The fish is fried then cooked in coconut milk."

13c.	Au	tavuteke–taka	e	tolu	na	ika
	AGR	fry–TR	AGR	three	DET	fish
	AGT	+trns				PAT
	actr					ndgr

"I fried three fishes."

14a.	E	lose	o	Seru
	AGR	mix	PRP	Seru
		–trns		PAT
				actr

"Seru mixed (the kava)."

14b.	Sa	lose	oti	na	me-na	wai
	AUX	mix	finish	DET	POS-3s	medicine
		–trns				PAT
						actr

"Her medicine is already prepared."

14c.	E	lose-a	vakasosoko	na	wai	o	Ana
	AGR	mix-TR	strong	DET	medicine	PRP	Ana
		+trns			PAT		AGT
					ndgr		actr

"Ana made a strong mixture (of herbal medicine)."

15a.	Wāwā	me-u	vakasuka	
	wait	CNJ-1s	with sugar	
		-PAT	–trns	
		actr		

"Wait so that I add sugar."

15b.	E	sa	vakasuka	na	me-na	ti
	AGR	AUX	with sugar	DET	POS-3s	tea
			–trns			PAT
						ndgr

"His tea has been sugared."

15c.	Au	vakasuka-taka	vakalailai	na	ti
	AGR	with sugar-TR	little	DET	tea
	AGT	+trns			PAT
	actr				ndgr

"I added a little sugar to the tea."

2.4 Transitive verbs having no derived intransitive forms

Another type of transitive verb in SF is the type without a corresponding derivationally related intransitive form. Such verbs require a transitive ending. The verb root cannot be used as an intransitive verb. For example:

16.	E	lai-vi	ratou	me	ratou	liu
	AGR	let-TR	3p	to	3p	lead
	AGT	+trns	PAT			
	actr					

"S/He allowed them to go first."

17. *E lai

18. Dua na ka e mana-ta na mata-na
one DET thing AGR inflict-TR DET eye-POS.3s
AGT +trns PAT
actr
"Something happened to his eye."

19. *E mana

20. Keimami taba-laka na kana
AGR proceed-TR DET eating
AGT +trns PAT
actr
"We were earnest in eating."

3.0 Loan Verb Classes

This section will show that loan verbs in SF also occur in the same verb classes as other verbs in SF described in Section 2. They participate in unergative and unaccusative verb derivations. Some verbs participate in both unergative and unaccusative verb derivations, and some occur as transitive verbs without any derivationally related intransitive form.

3.1 Unergative loan verbs

Examples 21 - 25 represent loan verbs which participate in unergative verb derivations, i.e., the PAT (actor) of an intransitive verb corresponds with the AGT (actor) of the verb in its corresponding transitive form:

21a. Au a aplae.
AGR PAST apply
PAT –trns
actr
"I applied."

21b. Au aplae-taka na itutu ni vunivola
AGR apply-TR DET post of secretary
AGT +trns PAT
actr
"I applied for the post of secretary."

22a.	E	jao	vakalailai	ga	o	Ana
	AGR	eat	little	only	PRP	Ana
		–trns				PAT
						actr

"Ana ate a little only."

22b.	Sa	jao–taka	na	ika	o	Ana
	AUX	eat–TR	DET	fish	PRP	Ana
		+trns		PAT		AGT
						actr

"Ana has eaten the fish."

23a.	E	qes	ia	e	cala	
	AGR	guess	CNJ	AGR	wrong	
	PAT	–trns		PAT	–trns	
	actr			actr		

"S/He guessed but s/he was wrong."

23b.	E	qes–taka	na	naba	ni	motoka	
	AGR	guess–TR	DET	number	of	motor–car	
	AGT	+trns		PAT			
	actr						

"S/he guessed the number of the car."

24a.	Era	pati	tiko	na	gonevuli	
	AGR	party	CNT	DET	students	
		–trns			PAT	
					actr	

"The students are 'partying'."

24b.	Era	pati–taki	Lusi	na	gonevuli	
	AGR	part–TR	Lusi	DET	students	
		+trns	PAT		AGT	
					actr	

"The students are having a party for Lusi."

25a.	E	tos	o	Seru	
	AGR	toss	PRP	Seru	
		–trns		PAT	
				actr	

"Seru tossed (a coin)."

25b.	E	tos-taka	na	ilavo	o	Seru
	AGR	toss-TR	DET	money	PRP	Seru
		+trns		PAT		AGT
						actr

"Seru tossed the coin."

3.2 Unaccusative loan verbs

As we have seen earlier in the Fijian examples, when the PAT (undergoer) in an intransitive sentence corresponds with the PAT (undergoer) in a derived transitive sentence, an unaccusative verb results. The following examples show loan verbs that are used unaccusatively:

26a.	E	sa	ekspel	o	Jo
	AGR	AUX	expel	PRP	Jo
			–trns		PAT
					ndgr

"Jo is expelled."

26b.	E	ekspel-taki	Jo	o	qasenivuli liu
	AGR	exspel-TR	Jo	PRP	teacher head
		+trns	PAT		AGT
			ndgr		actr

"The principal expelled Jo."

27a.	E	intaviu	o	Ana
	AGR	interview	PRP	Ana
		–trns		PAT
				ndgr

"Ana is interviewed."

27b.	E	intaviu-taki	Ana	na	manidia
	AGR	interview-TR	Ana	DET	manager
		+trns	PAT		AGT
			ndgr		actr

"The manager interviewed Ana."

28a.	Sa	of	na	cina
	AUX	off	DET	light
		–trns		PAT
				ndgr

"The light is switched off."

28b.	E	of-taka	na	cina	o	Ana
	AGR	off-TR	DET	light	PRP	Ana
		+trns		PAT		AGT
				ndgr		actr

"Ana switched the light off."

29a.	E	na	babakiu	na	toa
	AGR	FUT	barbecue	DET	chicken
			-trns		PAT
					ndgr

"The chicken will be barbecued."

29b.	E	qai	babakiu-taka	na	toa	o	Jo
	AGR	SEQ	barbecue-TR	DET	chicken	PRP	Jo
			+trns		PAT		AGT
					ndgr		actr

"Jo then barbecued the chicken."

30a.	E	blekae	o	koya
	AGR	black eye	PRP	3s
		-trns		PAT
				ndgr

"S/He has a black eye."

30b.	E	blekae-taki	koya	o	Jo
	AGR	black eye-TR	3s	PRP	Jo
		+trns	PAT		AGT
			ndgr		actr

"Jo gave him a black-eye."

3.3 Transitive loan verbs with both unergative and unaccusative forms

There are also some loan verbs that have both unergative as well as unaccusative verb forms. This means that the PAT (actor) of the intransitive verb corresponds with the transitive AGT (actor) in one type of sentence with certain arguments, while in another type of sentence with another set of arguments, the intransitive PAT (undergoer) corresponds with the transitive PAT (undergoer). For example:

31a.	E	skrab	o	Ana
	AGR	scrub	PRP	Ana
		-trns		PAT
				actr

"Ana scrubs."

31b.	E	skrab	na	lalaga
	AGR	scrub	DET	wall
		–trns		PAT
				ndgr

"The wall is scrubbed."

31c.	E	skrab–taka	na	lalaga	o	Ana
	AGR	scrub–TR	DET	wall	PRP	Ana
		+trns		PAT		AGT
				ndgr		actr

"Ana scrubbed the wall."

32a.	E	miks	o	Jo
	AGR	mix	PRP	Jo
		–trns		PAT
				actr

"Jo mixes."

32b.	Sa	miks	tu	na	yaqona
	AGR	mix	CNT	DET	kava
		–trns			PAT
					ndgr

"The kava is already mixed."

32c.	E	miks–taka	o	Jo	na	yaqona
	AGR	mix–TR	PRP	Jo	DET	kava
		+trns		AGT		PAT
				actr		ndgr

"Jo mixed the kava."

Other loan verbs that can be used both as unergative and unaccusative are listed below. A common semantic feature with this type of verb is that the action involved is repetitive and therefore takes some time to complete the act. Secondly, the action involves the use of the hand and an instrument.

Intransitive form	Meaning of the unergative verb	Meaning of the unaccusative verb	Transitive form	Meaning of transitive form
barasi	to be brushed	to brush	barasi-taka	to brush s.t.
drili	to be drilled	to drill	drili-taka	to drill a hole
dili	to be dealt	to deal	dili-a, dil-taka	to deal a pack of cards
flash	to be flushed	to flush	flash-taka	to flush the toilet
krousa	to be made by crotchet	to crochet	krousa-taka	to crochet s.t.
mop	to be mopped	to mop	mop-taka	to mop the floor
polisi	to be polished	to polish	polisi-taka	to polish s.t.
rives	to be reversed	to reverse	rives-taka	to reverse s.t.
slek	(kite) to be slack	to slacken	slek-taka	to slacken a kite
spoil	to be spoiled	to spoil	spoil-taka	to disrupt s.t.
sprey	to be sprayed	to spray	sprey-taka	to spray s.t.
vurumu	to be swept with a broom	to sweep using a broom	vurumu-taka	to sweep s.t.
vurusi	to be brushed	to brush	vurusi-taka	to brush s.t.

3.4 Transitive loan verbs without intransitive forms

Some loan verbs take transitive endings but the corresponding bare forms do not occur as intransitive verbs. For example:

33a. Au bit-taki Lusi e na veitaucici
AGR beat-TR Lusi PRP DET race
AGT +trns PAT
actr ndgr
"I beat Lusi in the race."

33b. *E bit o Lusi / *Au sa bit

34a. E fiks-taka nona cakacaka o Seru
AGR fix-TR his work PRP Seru
+trns PAT AGT
ndgr actr
"Seru arranged for her/his job."

34b. *E fiks na cakacaka / *E fiks o Seru

The intransitive form *fiks* can be used as an active unergative verb but its meaning differs from the meaning used in 34a & b.

35a.	Au	min-taka	nimataka,	sega	ni	nikua
	AGR	mean-TR	tomorrow	not	CNJ	today
	AGT	+trns	PAT			
	actr		ndgr			

"I meant tomorrow, not today."

35b. *Au min / *E min nimataka

36a.	E	mis-taki	luve-na
	AGR	miss-TR	child-POS.3s
	AGT	+trns	PAT
	actr		ndgr

"S/He misses her/his child."

36b. *E mis o Ana / *E mis o luvena

37a.	E	sa	pous-taka	na	ivola
	AGR	AUX	post-TR	DET	letter
	AGT		+trns		PAT
	actr				ndgr

"S/He has posted the letter."

37b. *E pous na ivola / *E pous o koya

However, verbs such as those in in 33-37 above can also be used as intransitive verbs when joined with the *-taki* ending in sentences with only one complement noun phrase. In these sentences, the verbs function as unaccusatives, where the Patient (undergoer) of the intransitive verb corresponds with the Patient (undergoer) of the transitive form in the corresponding examples above:

38.	E	sa	qai	bittaki	tu	o	Lusi
	AGR	AUX	SEQ	beat-*taki*	CNT	PRP	Lusi
				-trns			PAT
							ndgr

"Lusi is finally beaten."

(corresponds with 33a.)

39.	E	poustaki	nikua	na	ivola
	AGR	post-taki	today	DET	letter
		–trns			PAT
					ndgr

"The letter was posted today."

(corresponds with 37a.)

This section shows that loan verbs in SF do not all operate in the same way but that they are used in different ways. Some occur as unergative and others as unaccusative. Some loan verbs have both unergative and unaccusative verb forms. Some loan verbs occur as transitive verbs without a corresponding intransitive form.

4.0 The Transitive Ending

As stated earlier, when a verb is transitive in Fijian, its ending is either a short *-(C)i/a* or a long *-(C)aki/a*, where *C* stands for a consonant and where the verb has two complement noun phrases. In Arms (1973), meaning correlations with particular consonants are claimed for the short and long endings. Arms also states that verbs with *-(C)i/a* ending take "affective objects" while verbs with *-(C)aki/a* ending take "confective objects" (*ibid.*: 512). The object in the former is "external" to the action while the object in the latter type is part of or "internal" to the action.

4.1 The *-(C)i/a* ending

The meanings associated with the consonants of the short endings identified by Arms (1990: 133) are as follows (examples are mine):
-ci 'pliancy, gentle contact, bodily experience', e.g., *boi-ca* 'to smell s.t.'
-gi same as *-ni*, e.g., *taro-gi koya* 'to ask s.o.'
-ki 'hardness, force, opening out', e.g., *basu-ka* 'to break s.t. open'
-mi 'insertion, going inside', e.g., *curu-ma* 'to enter s.t.'
-ni '-ify, en-, be-, form, support', e.g., *kumu-na* 'to gather s.t.'; *toma-ni koya* 'to accompany s.o.'
-ri 'location, posture, change of state', e.g., *cuva-ra* 'to be bent over s.t.'
-ti 'use of limb or instrument, moderate force, performative', e.g., *caqe-ta* 'to kick s.t.'
-vi 'motion to, motion for, motion over', e.g., *cudru-va* 'to be angry at s.o.'
-øi 'mild force, miscellaneous', e.g., *kari-øa* 'to grate or scrape s.t.'

4.2 The *-(C)aki/a* ending

Like the *-(C)i/a* ending, meaning correlations with the consonant of the long ending have also been proposed by Arms. There are about nine long endings for transitive verbs, each showing a different consonant. The following endings are not as

common and occur with only a few verbs: *-caki/a*, as in example 40., *-naki/*a, as in example 41., *-maki/a*, as in example 42., and *-kaki/a*, as in example 43.:

40.	E	*mī-caka*	na	drā
	AGR	urine-TR	DET	blood
	AGT	+trns		PAT
	actr			

"S/He passed blood in her/his urine."

41.	E	*tere-naka*	nona	bō	o	Jo	qai	tagi.
	AGR	graze-TR	his	boil	PRP	Jo	SEQ	cry
		+trns		PAT		AGT		
						actr		

"Jo had his boil grazed against and he cried."

42.	E	taqo-maki	Lusi	o	Jo
	AGR	protect-TR	Lusi	PRP	Jo
		+trns	PAT		AGT
					actr

"Jo protects Lusi."

43.	Rau	rū-kaki	Ana
	AGR	curse-TR	Ana
	AGT	+trns	PAT
	actr		

"They really cursed Ana."

The more common *-(C)aki/a* endings are the following:
-raki/a 'intensive, repeatedly', as in 44.
-taki/a 'recipient', as in 45.; 'reason' as in 46.; 'instrumental/accompaniment', as in 47.
-vaki/a 'means', as in 48.; 'time duration', as in 49.
-laki/a 'intensive', 'repeatedly', as in 50.
-yaki/a (with *vei-*) 'dispersive', as in 51.

44.	E	butu-raka	na	iteitei	na	bulumakau
	AGR	step-TR	DET	plantation	DET	cow
		+trns		PAT		AGT
						actr

"The cow trampled on the plantation."

45.

E	tatadrataka	na	nona	vale	o	Lusi
AGR	dream-TR	DET	his	house	PRP	Lusi
	+trns			PAT		AGT
						actr

"Lusi dreams about her house."

46.

Au	marau-taka	na	nomu	pasi
AGR	happy-TR	DET	your	pass
AGT				PAT
actr				

"I am happy for your pass."

47.

E	kaba-taka	na	isele	o	Jo
AGR	climb-TR	DET	knife	PRP	Jo
	+trns		PAT		AGT
					actr

"Jo climbed with/taking the knife."

48.

E	cici-vaka	na	kato	o	Jo
AGR	run-TR	DET	suitcase	PRP	Jo
	+trns		PAT		AGT
					actr

"Jo ran with the suitcase.'

49.

Ratou	bogi-vaka	na	talitali
AGR	night-TR	DET	weaving
AGT	+trns		PAT
actr			

"They weave into the night."

50.

Era	tosi-laka	na	lālaga	na	gone
AGR	write-TR	DET	wall	DET	child
	+trns		PAT		AGT
					actr

"The children scribbled on the wall."

51.

E	vei-biu-yaka	nona	isulu	o	Lusi
AGR	dispersive-put-TR	her	clothes	PRP	Lusi
	+trns		PAT		AGT
					actr

"Lusi puts her clothes everywhere."

4.3 The *-taki/a* ending

Of the several short and long transitive endings, SF loanwords, in general, use only one transitive ending, *-taki/a*, to make a loan verb transitive. The *-taki/a* transitive ending is also found to be most widely used in Fijian verbs; it is a "general transitiviser" (Shütz, 1985, p.141) or a "verb-maker" (Arms, 1973, p.516). Schütz notes that verbs that do not use the short *-(C)i/a* ending use the *-taki/a* ending, thus explaining the easy applicability of *-taki/a* to loanwords which would not have had the short ending (Schütz, *ibid.*). When this happens, it is usually the 'recipient' meaning of *-taki/a* that is used, as in 45. above.

A few loan verbs also occur with the short *-(C)i/a* transitive ending. In most cases, these also use the *-(C)aki/a* long ending. When the short ending is used as well as *-taki/a*, their meanings have not been noted as changing. It can probably be assumed that the use of the short endings is a recent innovation and that they occur on loanwords that have become widely used in Fijian. The following Table shows most of these words:

-trns	**+trns**	**Meanings**	**Source Word**
noka	nokara, nokataka	to knock s.o. out	knock-out
sovu	sovuta, sovulaka	to rub soap on s.t., to rub soap on s.t. repeatedly	soap
kisi	kisiva, kisilaka	to kiss s.o., to kiss s.o. repeatedly	kiss
loka	lokata, lokataka	to lock s.t	lock
yani	yaniøa, yāyanitaka	to iron s.t.	iron
dili	diliøa, dilitaka	to deal s.t. (cards)	deal
pamu	pamuta, pamulaka	to pump s.t., to pump s.t. intensively	pump

4.4 Loan verb transitivity

What appears to have happened in the loan verbs is that a simplification process has occurred in the transitive verb system. With the reduction to the use of basically one transitive ending, the richness of transitive endings and their suggested meanings are not available in loan verb vocabulary; the various meanings implied in the Fijian endings, both the *-(C)i/a* and *-(C)aki/a* endings, would not be so implied in the transitive loan verb vocabulary. In other words, the various consonant and meaning correlations evident from using the short and long endings, as discussed in 4.1 and 4.2, are obscured in the use of the *-taki/a* ending.

Secondly, as mentioned earlier, the transitive ending *-taki/a* implies more than one meaning and include both the affective meaning: 'recipient', as well as the confective interpretations 'reason', 'instrumental', and 'accompaniment' (Arms, 1973, p.516). In SF loan verbs, although the *-taki/a* ending implying 'recipient' is a common usage, the 'reason' and 'instrumental' meanings are also implied. This can be seen in *patitaki/a*,

24b., which implies 'reason', and 49 & 50, below which imply 'instrumental'.

49.	E	pati-taka	nona	ilavo	o	Jo
	AGR	party-TR	his	money	PRP	Jo
		+trns		PAT		AGT
						actr

"Jo spent his money on parties."

50.	O	sprei-taka	na	wainimate	ni	cō	cā
	AGR	spray-TR	DET	medicine	for	grass	bad
	AGT	+trns		PAT			
	actr						

"You spray the weed killer" (not sprinkled or otherwise applied).

The following examples illustrate the common usage of the *-taki/a* ending in transitive loan verbs:

50.	E	pik-taki	Ana	mai	koronivuli
	AGR	pick up-TR	Ana	from	school
	AGT	+trns	PAT		
	actr				

"S/He picked Ana up from school."

51.	E	diliva-taka	na	madrai	e	na	veimataka	o	Jo.
	AGR	deliver-TR	DET	bread	PRP	DET	each morning	PRP	Jo
		+trns		PAT					AGT
									actr

"Jo delivers the bread every morning."

52.	Au	sa	lisi-taka	na	iyāyā	me	voli
	AGR	AUX	list-TR	DET	items	to	buy
	AGT		+trns		PAT		
	actr						

"I have listed the items to be bought."

53.	E	solo-taka	na	sere	o	Lusi
	AGR	sing solo-TR	DET	song	PRP	Lusi
		+trns		PAT		AGT
						actr

"Lusi sang the song solo."

54.	Rau	sprei-taka	na	cō	cā
	AGR	spray-TR	DET	grass	bad
	AGT	+trns		PAT	
	actr				

"They sprayed the weeds."

55.	E	via	plei-taka	na	teip	ni	rakavī
	AGR	AUX	play-TR	DET	video tape	of	rugby
	AGT		+trns		PAT		
	actr						

"S/He wants to play the rugby tape."

56.	Ratou	pul-taka	na	sotasota	na	timi	ni	Maris
	AGR	pull off-TR	DET	tournament	DET	team	of	Marist
		+trns		PAT		AGT		
						actr		

The Marist team won the tournament."

5.0 Conclusion

This study has, to some extent, tried to show that loan words in SF which function as verbs "fit into" or have been nativised in the Fijian verb system. Like other verbs in Fijian, loan verbs can occur as unergative, and as unaccusative intransitives, with corresponding derivationally related transitive verb forms. They can occur as transitive verbs without any corresponding intransitive root form, and there are also transitive verbs that have two coresonding, derivationally related forms, the one unergative and the other unaccusative.

However, although loan verbs fit into the Fijian verb system by forming part of the different verb classes characteristic of SF that have been discussed in this paper, loan verbs do not use all the transitive endings in the Fijian verb system of which there are two types – the short ending and the long ending. One ending, the long *-taki/a* ending, has extended its role of being a 'general transitiviser' in Fijian to loan verbs and is typically the component that marks loan verbs as transitive.

Abbreviations used:

3p: third person paucal
3pl: third person plural
1s: first person singular
2s: second person singular
3d: third person dual
3s: third person single

actr: actor macrorole
ndgr: undergoer macrorole
AGR: in agreement with actor
AGT: Agent
AUX Auxiliary verb
CNT: Continuous
CNJ: Conjunction
DET: Determiner
FUT: Future tense
HAB: Habitual
PAT: Patient
POS: Possession
PST: Past tense
PRP: Preposition
SEQ: Sequential
SF: Standard Fijian
TR: transitive ending
s.o.: some one
s.t.: some thing,
–trns: intransitive verb
+trns: transitive verb

Bibliography

Arms, David, G., 1973. *Whence the Fijian Transitive Endings?* Oceanic Linguistics 12, pp.503–58.

Kikusawa, R., 1998. "A Formal Analysis of the So-called 'Passive' in Fijian." In *Journal of Asian and African Studies No. 56*, ILCAA. Tokyo University of Foreign Studies.

Longman Dictionary of Contemporary English, 1991. Essex: Longman.

Na iVolavosa Vakaviti (The Fijian Monolingual Dictionary). Draft version. February, 1998.

Na iVolavosa Vakaviti (The Fijian Monolingual Dictionary). Draft version. March, 2003.

Schütz, Albert, J., 1985. *The Fijian Language.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【資料・研究ノート】

大　き　な　罠　小　さ　な　罠

――焼畑周辺をめぐる小動物狩猟――

西　谷　　大
(国立歴史民俗博物館)

Big Traps and Little Traps:
Shifting Cultivation and Small Animal Hunting

Nishitani, Masaru
National Museum of Japanese History

This essay deals with small animal hunting, particularly mice hunting of the Lee tribe, and describes how such hunting has been incorporated into real life and its importance for feeding.

The reason why mice hunting could be established is that by doing shifting cultivation, it created a zone where such cultivation is possible and also a field zone where wild animals could easily live. Shifting cultivation supplies food all year round to village people, but this also supplies food to mice, too. Those wide open spaces around the village thereby worked as a big trap to lure wild animals. On the other hand, hunting tools, "little traps", also were developed for efficient hunting between agricultural activities. Their development shows how hunting developed as an important means of gathering food, and not for pleasure.

"Big traps and little traps" are a system which is operated around cultivated field and their surroundings. They function as a means of incorporating wild animal hunting into an agricultural society. This society can serve as a model for analyzing the question of food gathering in ancient society. This research shows the importance of small animal hunting as compared to big animal hunting as a sustainable supply of protein. On the other hand, it also suggests the need to reanalyze domestication of big animals such as a wild bore.

Those elements seem to give an insight into the process of domestication of wild animals, and also motivation of the agricultural society doing so. It also suggests the importance of the present research concerning the hunting activities around shifting cultivation societies such as the Lee tribe as a process for the incorporation of hunting into agricultural society.

Keywords: big traps and little traps, around shifting cultivation, small animal hunting, mice hunting, the hunting into the agricultural society
キーワード：大きな罠小さな罠，焼畑周辺，小動物狩猟，ネズミ罠猟，狩猟の内部化

はじめに―問題の所在
Ⅰ 初保村の概要
1 村の位置と生業
2 ゾーンと狩猟場の関係
Ⅱ 生業としてのネズミ罠猟
1 ネズミ罠猟の罠設置ポイント
a ネズミと罠猟の時期
b 狩猟場の選定条件
c 罠の型式
2 ネズミ罠猟の具体例
a 二つの狩猟場
b 罠設置の行動
c ネズミ回収の行動
d 聞きとりによる他のネズミ猟
Ⅲ 技術からみたネズミ罠
1 旧タイプの型式分類
2 型式変化の要因
Ⅳ 焼畑が作り出す機能
1 食料としてのネズミ肉
2 狩猟場としての焼畑
結論にかえて
―「大きな罠小さな罠」システム―

はじめに―問題の所在

焼畑研究は，これまで多くの研究者によっておこなわれてきた。そのなかで，焼畑における野生動物駆除が，焼畑の生産性を高めるために必要不可欠な作業であることは指摘されてきた（佐々木 1972，福井 1983）。そして焼畑周辺でおこなわれるこうした駆除としての大型野生動物狩猟が，実は食料獲得の一手段になっており，生業の一部であると指摘したのは尹紹亭である。しかし特にネズミなどの小動物も，駆除するだけでなく，むしろ食料として積極的に利用してきたのではないかという研究はほとんどなされていない。

筆者は，中国海南島の山間部におけるリー族の焼畑周辺でおこなわれてきた小動物狩猟が，自然環境と生業とどのような関係にあるのかを明らかにしようとした。自然界に作られた焼畑という攪乱環境は，動物を引き寄せる罠になっており，これは「大きな罠」と呼ぶことができると考えた。そのなかで実際に狩猟をおこなう道具としての罠が「小さな罠」に相当する。リー族は焼畑の作物におびき寄せられ作物を荒らす小動物を駆除しながらも，それを食料として積極的に生業システムに取り入れ利用してきたと思われる。

本稿では，リー族が伝統的におこなってきた小動物狩猟のなかでも，ネズミ猟を取り上げ考察する。調査地は中華人民共和国海南省五指山市毛陽鎮初保村である。調査は，2001年８～９月，2002年３月～４月にかけて，初保村に住みこんで実施した[1]。

リー族の自然利用は，焼畑・水田・動物狩猟・植物採集などの活動によって自然資源を複合的に利用してきたことに特徴がある。そして，それを支えていたのは地理的環境の多様性と生物多様性に依存した生活適応戦略としての生業システムである［篠原 2001，西谷 2001c］。これから考察しようとする小動物狩猟は，この二つの多様性を背景にして成立している可能性が高い。そこで調査にさいしては，まず自然環境とその季節的変化を背景にした，村の複合的な生業のありかたについて調査をおこなった。さらに筆者自身もネズミ猟に参加し直接観察したことを記載しつつ，過去の狩猟活動の資料を得るために聞き

1) この調査は1999年から始まって2003年３月末終了予定の学術振興会未来開拓学術研究推進事業「アジア地域の環境保全」（大塚プロジェクト）の一つである「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究―海南島班（リーダー篠原徹）」調査の一つとしておこなわれた。調査地点は，海南島五指山市の四つの村（初保・保力・太平・水満）であり，自然と人の関係についての調査が主な内容である（大塚 2000, 篠原 2000・2001）

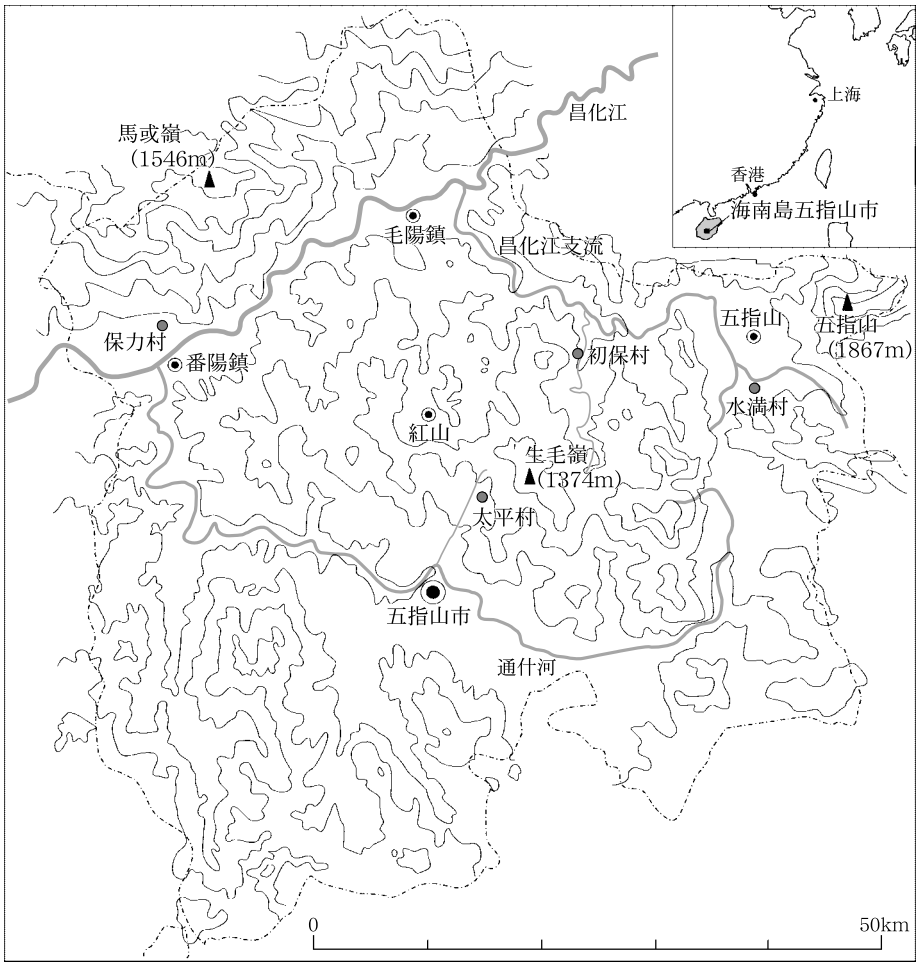


図１
海南島と初保村の位置

とり調査をおこなった。

Ⅰ　初保村の概要

１　村の位置と生業

海南島は，北緯18 °10 ′～20 °10 ′，東経108 °37 ′～110 °03 ′にあり，中国南端に位置する。海南島は，熱帯モンスーン地帯に属しており，植生は熱帯から亜熱帯の様相を帯びる（図１）。面積は，日本の九州とほぼ同じ大きさであり（約34000平方キロメートル），人口はおよそ700万人である。海南島の主要なエスニック・グループは，海岸部の漢族，山間部のリー族とミャオ族であり，リー族は山間部を中心に居住し，人口はおよそ100万人いるといわれている。海南島は現在一島で海南省となっており，省都は島の北側にある海口市である。海南島には，南側に三亜市という第２の港湾都市がある。この三亜市の北およそ70キロメートルに，五指山市が位置する。

五指山市の五指山郷と毛陽鎮の間には，昌化江支流が流れ，それに沿って多くの村が展開する。調査地である初保村は毛陽鎮からおよそ10キロメートル東にいき，さらに南から

写真１
初保村の全景

写真２
斜面のゾーニング。村の上からアンゾーン，灌木ゾーン，草地ゾーンに分かれる

図２
初保村周辺地形図

流れ込むナムハ川をおよそ２キロメートル遡ったところにある（図２，写真１）。初保村[2]は，五指山市毛陽鎮牙合行政村に属する自然村の一つである。牙合行政村は，初保を含む，什沖・方満・什好・便文の五つの村からなっている[3]。初保村の戸数は現在50戸で，人口246人を数える。

生業としては，全戸が農業を経済的基盤としており，水田と焼畑（常畑化しつつある），そして狩猟採集という複合的な生業を営んでいた。村の生業は，南からほぼ真北に流れるナムハ川の渓流沿いと，その両側を南北に走る斜面と谷筋を基盤にしている。村の耕作地は河川沿いと山の斜面に展開しており，しかも河岸段丘から山の斜面を垂直利用する点に特徴があり，谷の両側を南北に走る山のほぼ山頂までを何らかの形で利用している。

この耕作地は，ゾーニングすることが可能である。ゾーンは，ナムハ川沿いの河岸段丘上と谷筋に棚田を展開する水田ゾーン，集落

2) 初保村の名前の由来にもなっている。初保（普通語ではチューバオ）は，リー語の海南語の漢語表現であるが，リー語の発音はシューバオといい，ブタの餌箱（細長い丸太の中心をくりぬき箱状にし餌を入れる）という意味になる。つまり谷間の細長い土地そのものの地形を表現している。

3) 中国では一般的に，県の下にいくつかの鎮があり，その下に郷がある。郷はいくつかの行政村で構成されている。通常一つの行政村は，いくつかの自然村で，成り立っている。ただし，自然村の言い方は，中国研究者の慣用的な使い方であり，言葉の字義通りの意味で，政治が関与せずにもともとあった村という意味ではない。「初保村」という場合は行政村の下のいわゆる自然村を指している。

ゾーン，その上に展開するアンゾーン[4]と灌木ゾーン，さらにその上の草地ゾーンの５分類が可能である［篠原 2001，西谷 2001c］（写真２）。集落ゾーンは山麓にテラスを作り，その周辺を利用している。集落周辺の菜園畑（ゴツ）もこのゾーンに含まれる。水田ゾーンは，河岸段丘上と水が豊富な谷筋に棚田が作られている。リー族は水田の二期作をおこなう。従来，リー族は水田に植える多種類のコメの在来種を保持しており，一，二期でさまざまな在来種を使い分けながら水田耕作をおこなってきた。しかし1980年代後半からは，ハイブリッド米（中国名，雑優と薄優）がほとんどすべての水田で植えられるようになった[5]。

本来焼畑は，耕作地の地力が落ちれば移動を繰り返す点に特徴がある。しかし1993年以降の国家政策による焼畑禁止にともなって，新たな伐採と火入れが禁止されている。そのためこれまで伝統的だった自由な耕作地の移動が制限され，焼畑は現在常畑化しつつある。そのため初保村には現在三つのタイプのアンがある。

Ⅰタイプは，アンに山欄稲（陸稲），トウモロコシ，キマメ，ヘチマ，サツマイモなどを混作し，４～５年すると放棄する。バナナなどの単一の換金作物への特化はしない。

Ⅱタイプは，山欄稲，トウモロコシ，バナナなど，数種類の作物を１年目に混植するが，山欄稲が収穫された後は，バナナかキャッサバだけを植え，作物の特化と単作化が進むアンである。ただし，バナナ畑へと変化しても，地面にはサツマイモを混植する場合もある。

Ⅲタイプは，ライチ・リュウガン・マンゴウ・コショウ・パラゴムノキ・ビンロウなど，多年生の換金作物を主として植える。ビンロウとサツマイモなどを混作する場合もあるが，基本的には１種類の換金作物をアンに植え他の作物との混植はおこなわない

Ⅰタイプが，リー族固有の焼畑の姿である。反対にⅢタイプが完全に換金作物へ特化したアンで，Ⅱタイプが，従来の焼畑の技術を残しつつ，今まさに常畑化しつつあるアンだといえる。

アンゾーンの上に展開する灌木ゾーンは，以前は焼畑と牧草地にするため，山焼きをして一年生の禾本科植物の生長を促していたが，山焼きの禁止で現在は灌木林になっている。さらにその上は，かつて山焼きをした草地ゾーンと自然林が混在している。しかし現在は，林業局によるコウヨウザンと馬占想思樹（ユーカリの仲間）の植林がおこなわれている。灌木ゾーンは，水牛・黄牛の放牧地であり，自然林は建材などの採集ゾーンでもある。

2　ゾーンと狩猟場の関係

初保村ではイノシシやキョンなどの大型野生動物の狩猟は，草地ゾーンや灌木ゾーンなどでおこなわれることが多い。しかし今回主として取り上げる小動物狩猟のなかでも，ネ

4) 海南島リー族では焼畑はかつて盛んにおこなわれていた。しかし1986年の政府がおこなった「封山育林政策」以降は，法律で焼畑が禁止される。初保村では施行が少し遅れ，村人の話では1993年以降に山焼きが禁止される。この山焼きが禁止されたのは，黄牛や水牛を放牧する草地ゾーンと，従来山の斜面を耕作し畑にしてきたいわゆる焼畑の三つの場所が含まれる。そこで，本稿で「焼畑」と使う場合は，初保村で焼畑が禁止されていなかった1993年以前の状態を指し，山焼きを禁止されて以降の焼畑について「アン」という言葉を使いたい。アンはリー語で「山の畑」という意味である

5) 現在村でもごく一部ではあるが，在来種が植えられている。種類は，大葉青，尾優，高尖である。高尖は，市場にもっていけば，ハイブリッドと比較して２割くらい高く売れるが，収量ははるかに少ない。

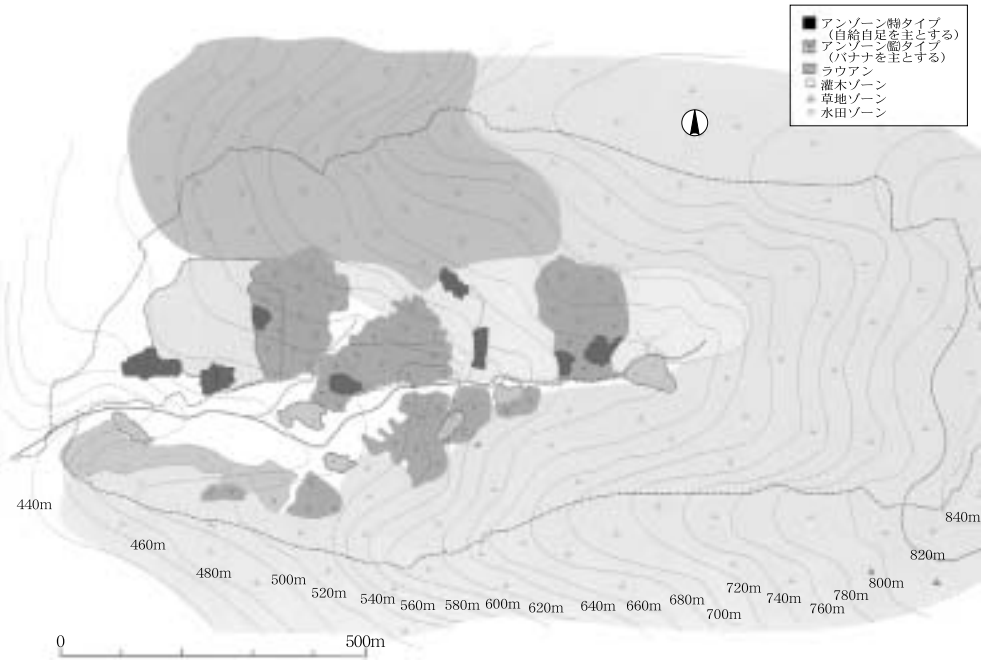


図３
ホウチュオウヒャン谷のゾーンニング

ズミ罠猟は，むしろゾーンとゾーンとが接する境界線上や，ゾーンとゾーンとの間にできるもう一つの空間である境界ゾーンがあり，この場所が絶好の狩猟場を形成している。

この焼畑周辺の境界ゾーンの具体的な様相を，ホウチュオウヒャン谷という谷筋を例にして述べてみたい。ホウチュオウヒャン谷は，初保村を出てナムハ川を渡った対岸に位置する村から最も近い谷筋で，東西およそ1500メートル，南北で最も幅がある地点でおよそ700メートルを測る東西に細長い形状を呈している（図３）。

谷の入り口の海抜は標高およそ450メートルで，東側の谷を巡る最も高い稜線上で，標高およそ840メートルを測る[6]。リー族はシブリングの関係のものが中心となり新しい村を作ることが多い。ホウチュオウヒャン谷も，Ａ氏[7]とその近い親戚[8]の土地が展開する谷筋で，彼の父親の兄弟とその子供たちが中心となって土地を利用している。谷筋には，彼らの水田・アン・水牛と黄牛の放牧場・有用植物利用，そして動物狩猟などの多様な生業が展開しているだけでなく，墓など精神生活に関わるものまでもが集中している。

6) 谷筋全体の測量には，トリンブル社製の GPS を使用した。また水田や焼畑，それに出作小屋周辺の測量図はトランシット測量をおこない，等高線は比高差を表す。

7) Ａ氏は，主任をしている。行政村には，行政組織として，村民委員会があり，その構成は，主任１名，副主任１名，文書（資料管理）１名，婦女委員，治安委員が行政村の選挙によって選ばれる。村民委員会の重要な役割は，政府の法令の施行にあり，各自然村の執行管理権を有している。行政村の下のいわゆる自然村には，通常１組の人民公社時代の生産小隊が対応しており，組ごとの組長（村長）が選挙で選ばれる。組長は，正と副の両名選ばれる。したがって，主任といった場合には，行政村の村民委員会の役職を指し，組長または村長といった場合は，自然村の役職を指す。

この谷筋も，生業によってゾーニングすることができる。水田は，谷筋のほぼ中央を流れる小川の南側に広がる。谷筋の一番低いところと，谷筋の水が容易に利用できる緩斜面には棚田が広がる。この谷の標高およそ660メートルの，ナムハ川から比高差にしておよそ200メートルも高い位置に棚田があるが，これはこの谷だけでなく村内でも最も高い水田の一つである。

谷間から北側斜面と，南側斜面にはアンが展開する。アンと水田以外の空間が境界ゾーンの一つである。初保村でおこなわれているアン（かつての焼畑）は，さまざまな作物の混作をおこない，地力が落ちればそこを放棄し別の場所に移動させ，ある一定の領域内で循環させていく輪作型である。そのためアンとアンとの間には耕作されなくなり放棄された空間が形成されていく。これをリー語でラウアンと称する。現在耕作されているアンの縁から，ラウアンという空間は灌木ゾーンとの境界ゾーンを作り出しており，この空間も小動物狩猟の猟場を形成する。

この谷の灌木ゾーンは，谷の北側の稜線を越えて反対側斜面にまで広がる。灌木ゾーンでは家の建築材に使うフウやアカギなどの有用植物を切り出したりするだけでなく，その内部及びアンや水田と接する境界ゾーンでも野生動物の狩猟が活発におこなわれてきた。

1980年代以前の焼畑やその周辺で行われてきた野生動物狩猟は，イノシシ，キョン，テナガザルなどの大型野生動物を対象とするだけでなく，センザンコウ，キツネ，ハクビシンなどの小動物も，村内の自給用食料として狩猟対象だった。しかし中国政府によって，1988年に制定された「野生動物保護法」以降，年々法的規制が厳しくなっている[9]。初保村おいても，ほとんどの野生動物は狩猟禁止対象になっている。しかしネズミは対象外であり，現在でも活発に罠による狩猟がおこなわれている。

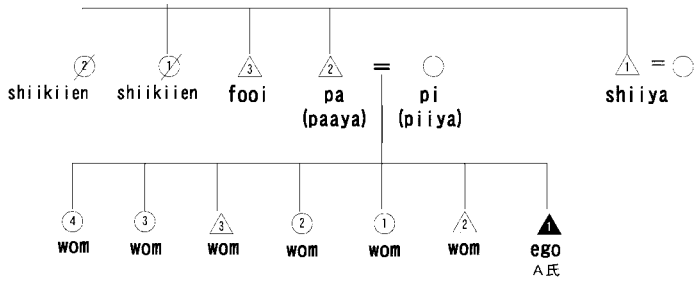
Ⅱ　生業としてのネズミ罠猟

1　ネズミ罠猟の罠設置ポイント

a　ネズミと罠猟の時期

ネズミは，彼らの民俗分類では３種類に分かれる[10]。まず背中が黄色で腹が白いもので，体長は12センチメートル前後の種類がある。

8)　A氏を中心とした家系図を示す。A氏からみた弟と妹はすべて「wom」と呼称される。そこで以下文章で個別の弟をさす場合は，何番目のウォンと表記する。



A氏からみた家系図

9)　『野生動物保護法』第16条により，重点保護野生動物を捕獲，殺害することは原則として禁止され，特別な理由により捕獲などが必要な場合には行政機関による許可を受けなければいけない。重点保護野生動物は一級と二級に分けられている。『刑法』第341条１項では，重点保護野生動物を違法に捕獲，殺害し，または購入，運搬，販売する行為について，一般には５年以下の懲役または拘役及び罰金，情状が重大なものは５年以上10年以下の懲役及び罰金，情状が特別に重大なものは10年以上の有期懲役を科し，併せて罰金または財産の没収を科すると定めている。

10)　初保村ではネズミの総称は，ナウチンという。さらに３種類に分類するが，個別の民俗名称はないようである。

写真３
民俗分類では３種類に分類される。

次に背中が黒っぽく腹が灰色でやはり体長が12センチメートルくらいのものがある。最後に背中が黄色と灰色が混じり腹が白っぽいもので体長が20センチメートル前後と大きいものである（写真３）。

現在同定中であるが，背中が黄色で腹が白いネズミがマーモットで，背中が黒っぽく腹が灰色のネズミがアカネズミ属，もっとも大きいネズミはクマネズミ，またはドブネズミの可能性が高い[11]。

ネズミ罠猟は，主として一年のうち12月～４月の冬場と６月～10月の夏から秋にかけての２回のシーズンにおこなわれる。ネズミ罠猟は，小動物狩猟のうちでも，ほぼ10カ月近くと長期間にわたってコンスタントに捕獲できることが魅力になっている。しかし冬場の期間と，夏から秋にかけての狩猟期間とでは，罠を設置する場所が若干異なっている。それはネズミの生態や，猟場の自然環境の季節的な変化によって規定されている。

11月から翌年の１～２月の気温が比較的低い時期にかけて，ネズミは周囲が湿った谷間の小川近くに集まって棲息しており，夜になるとアンに侵入して作物を餌にする。一方，６月以降の夏場から秋の時期にかけては，ネズミは灌木ゾーンや草地ゾーンなどに移動して棲息するようになる。

そのため時期によって，罠を設置するポイントが異なってくる。ネズミは体の一部を岩などの硬いものに当てながら移動する性質がある。そのため，岩陰や倒木の下などに，ネズミがよく使うネズミ道が自然と形成される。冬場は，アン，ラウアン内部，境界ゾーンで，こうした物の陰にできたネズミ道を探しだし，そこに罠を設置する。特に谷間の小川沿いからアンにかけての境界ゾーンは，冬場はネズミの棲息地が小川沿いに集中するため捕獲率も高くなる。

夏場になると，草が生い茂りネズミ道を発見することが難しくなり，また，ヒルが多く山歩きをしつつ罠を設置する作業が困難になる。そこで罠は境界ゾーンやラウアンではなく，アン内部にだけ設置することが多い。

b　狩猟場の選定条件

ネズミ罠猟は，各家の男性がおこない，女性はおこなわない。またこの罠猟は，各家内でも，親子や兄弟間で共同しておこなうことはまれで，個々人によっておこなわれる。

村所有の土地内ならば村人は，どこに罠を設置しても自由だという慣習的規範が存在する。つまり，他人が耕作しているアンや水田に，罠を設置しても許容されることになる。しかし一般には，罠は各家が耕作するアンや水田が集中する場所に設置する。ネズミ罠猟は，動物性タンパク質の確保と作物を荒らす害獣を駆除するという二面性を有している。例えば，２～４月に収穫するキャッサバは，ネズミ罠猟をもしもおこなわなかったとすると，ネズミに作物をほぼ食べ尽くされてしまい，収穫は見込めなくなるという。そのためネズミ罠猟をおこなう場合は，自分が耕作しているアンや水田が集中している場所を選定し，罠を設置する。

またネズミ道の位置は，比較的変化することがない。そのため罠を設置するポイントも

11) 北垣憲二氏（都留文科大学社会学科・動物行動学）に，写真によって同定してもらった私信によるものである。

かなり固定的である。他人の耕作地の周囲など，過去に罠を設置した経験がない場所では，ネズミ道を新たに探しつつ仕掛けるため，罠の設置自体に時間がかかるうえ，捕獲率の高いポイントについての知識がない。このこともネズミ罠猟を，自分が耕作している土地が集中している谷筋でおこなうことの理由になっている。

c　罠の型式

罠は，トラバサミを使う（図４，写真４）。この型式を新Ｉタイプとしておく。新Ｉタイプは全長がおよそ20センチメートルで，全体の形はうちわ状を呈している。材料は町の市場で買ってくる鋼鉄線を用いる。鋼鉄線をおりまげて作った，直径およそ10センチメートルの二つの半円形の部分と，さらにそれに連なる柄の部分からなる。二つの半円形の部分が，鋼鉄線を巻いたバネで綴じ合わせるとともに，このバネの弾力を利用してネズミを挟み込む。

写真４
トラバサミを設置する。中央につけたのが餌のキャッサバ

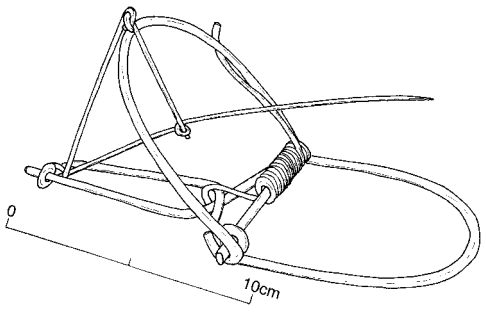


図４
新Ｉタイプ

仕掛ける方法は，挟み込む部分を広げ，その中央に餌を仕掛ける針を突き出す。この針金の一方の端は柄の部分にくくりつけられている。広げた半円形の上から柄にくくりつけたもう一つの針金をかぶせるようにして，その先端を中央に突き出た針金の真ん中あたりに作った輪にそっと入れ，半円形の閉じる部分を広げた状態で微妙に固定する。ネズミが餌を食べた瞬間に，この中央の輪に入れた針金がはずれ罠が閉じるという構造である。

新Ｉタイプのトラバサミが，村で使われるようになったのは，1995年からだという。それまでは，タケを使ったネズミ捕獲弓（２種類）と重力罠（１種類）を使っていた（図８～12）。村で捕獲弓と重力罠が使われなくなった理由は後述する。村では，1995年から数年間は市販品を買ってきていたが，現在はほとんどの村人が，町から鋼鉄線を買ってきて自分たちで製作し使用している。今回筆者が観察したネズミ罠猟でも，市販品のトラバサミは使用されていない。

2　ネズミ罠猟の具体例

a　二つの狩猟場

具体的なネズミ罠猟の方法を，Ａ氏がホウチュオウヒャン谷でおこなっている実例から述べる。Ａ氏の狩猟場は大きく２カ所に分かれる（図５）。第１の狩猟場は谷間の小川から南の斜面にある自分のアンと水田周囲から，Ａ氏の父親と三番目のウォンが所有しているアン周囲とその周辺のラウアンにかけての範囲である。第２の狩猟場は，この谷筋の最も高い水田の周囲である。

第１，２の狩猟場ともに，アンと谷間との間に広がる境界ゾーン，ラウアンとアンとその周辺の境界ゾーンなど，一つの狩猟場内で罠を仕掛ける多様なポイントが展開している

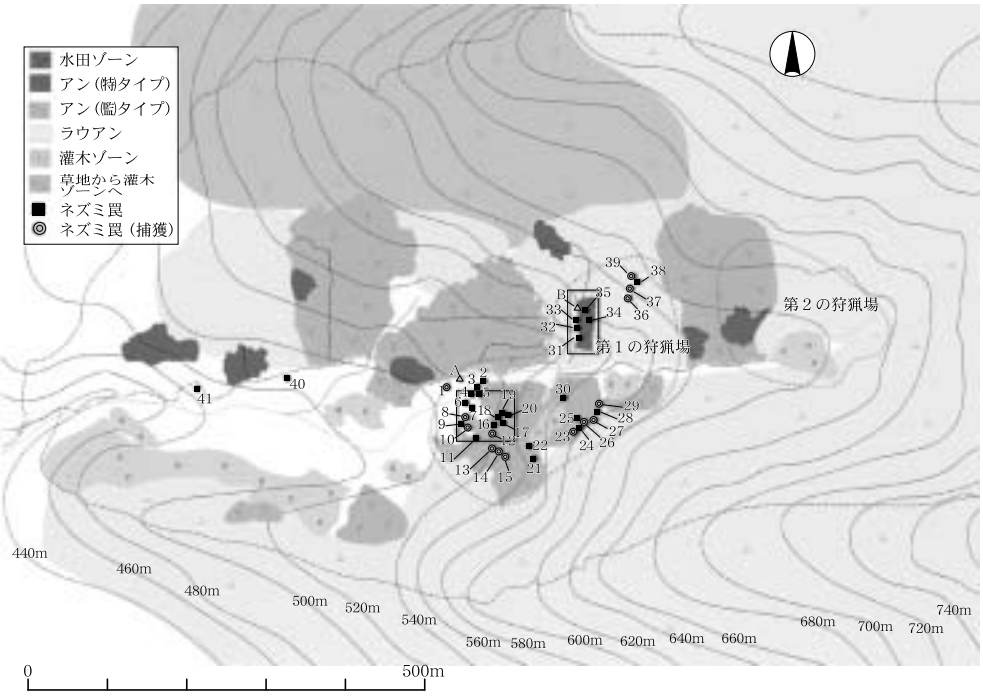


図５
ネズミ罠を仕掛ける位置

ことが特徴である。

A氏は，12月ごろからこの２カ所の狩猟場を交互に使いながらネズミ罠猟を開始する。まず最初に使うのは，第１の狩猟場である。１日目は，この狩猟場内におよそ50個前後の罠を設置する。次の日に罠を見回って，捕獲できた罠の位置は移動させ，別のポイントに罠を設置する。ネズミが捕獲できなかった罠は，餌は新しいものに取り替えるが罠の位置はそのままにしておく。このようにして最初の狩猟場は，およそ３日間くらい，毎日罠を見回りながら，罠に捕獲されたネズミの回収と罠の餌の付け替えを続ける。

およそ３日を過ぎると，ネズミの捕獲数が減ってくる。そこで一端設置した罠をすべて回収し，２～３日ほどは，罠を設置せずに時間をおく。そして２回目に罠猟を再開するときには，第２の狩猟場に罠を設置する。罠を設置する方法は初回と同じである。冬場はこの二つの狩猟場を交互に使いながら，連続してネズミ罠猟をおこなう。

b　罠設置の行動

一日の罠設置の概略は次の通りである。４月×日の朝８時過ぎ，村を出てナムハ川を渡りホウチュオウヒャン谷に入る。A氏の叔父の出作小屋を少し登ったところにある従兄弟のアンで，罠に装着しネズミをおびき寄せる餌にするキャッサバを調達する。キャッサバを３個掘り，２センチメートルくらいの輪切りにして，皮を剥ぎさらに四つ割にする。

出作小屋をさらに登り，右手にA氏のアンが見える小道から，第１の罠の設置を開始する（図５，No. 1）（写真５）。最初に罠を設置する場所は，道の右手下が谷間の小川になっており，左手がアンでバナナとキャッサバが植わっている。小川の対岸の南斜面はA氏のバナナ畑になっている。

小道から谷間の小川に降り，罠を設置していく（図５，No. 2～7）。小川近くでは，ネ

写真５
小道の左側下に小川が流れ，右手がキャッサバとバナナを植えたアンになる。

写真６
ネズミ道は岩陰などにできる。

ズミ道を探しだし，罠を設置する（写真６）。岩陰や倒木の下といった場所で罠を設置する方法は，ネズミ道をふさがないようにトラバサミを仕掛けることである。道の左右どちらからでも罠の餌を食べるようにすることで，捕獲できる確率が高まるからである。そのため，トラバサミはネズミ道に対して平行に置くように仕掛け，ネズミ道をふさがないように注意する（写真７）

小川を南に渡って，A氏のアンにあがっていく小道の周囲にも，岩陰や道の両脇の草むらのなかにネズミ道が走っている。A氏のアンの西側端には，黄牛や水牛が入らないように高さ50センチメートルほどの石垣が南北方向に30メートルほど積み上げられている。この石垣の縁に沿ってネズミ道が走っている。ここに罠を３カ所設置した（図６，No. 9〜11）。A氏のアン内部には，大きな石が散在

写真７
ネズミ道に仕掛けられた罠。

しており，こうした岩陰にそって，ネズミはアンに侵入する。岩陰の３カ所に罠を設置する（図５，No. 11, 14, 15）。

このように谷間の小川からアン周辺の境界ゾーンでは，罠を草むらのなか，岩陰，倒木，それにアンの縁に沿って作られたウシよけの石垣の下にできたネズミ道に設置した。

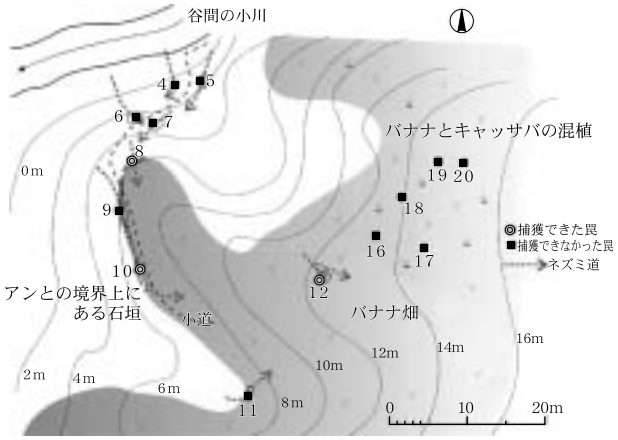


図６
A氏アン周辺のネズミ罠

アン内部での罠の設置方法は，境界ゾーンとは異なる。アン内部では，ネズミが餌であるキャッサバなどの作物をもとめて自由に走り回るために，明確なネズミ道が形成されない。そのためアン内部での罠の設置方法は，すでにネズミに食べられたキャッサバなどを探し，そこに罠を仕掛けるという方法をとる（写真８）。ネズミは必ず数日は連続して同じ地点の作物（A氏のアンの場合にはキャッサバ）を掘り出して食べる。罠の設置には，このネズミの習性を利用して，ネズミが食べ残したキャッサバを取り除き，その同じ場所に餌をつけたトラバサミを設置する。この方法でアン内部には，合計５カ所のポイントに罠を設置した（図５，No. 13, 16, 19, 20, 26）。

写真８
ネズミに食べられたキャッサバ

アンをつきぬけ，アンの東側にあるA氏の水田に達する。水田周囲では，アン周辺と同じように，ネズミ道を探しそこに罠を設置する（図５，No. 22）。やはり設置するポイントは，岩の陰や倒木などの下にできたネズミ道である。しかし，この時期の水田周囲では，ネズミの捕獲はあまり期待できないという。水田には水が張ってあり，しかもコメがまだ実っておらず，ネズミの餌がないためだという。

A氏のアンの東側は，従来は草地ゾーンだった。現在は灌木ゾーンに変化しつつある（写真９）。このアンと灌木ゾーンの境は溝を掘り，水牛・黄牛よけの柵が設けてあるが，柵の下にもネズミ道が形成されており，ここにも罠を設置する（図４，No. 23〜29）。

アンの縁を通りぬけ，再度谷間の小川を渡って，A氏の三番目のウォンが所有するアン内部とその周囲のラウアンに罠を設置する（図７，No. 31〜35）。このアンでは斜面の下にサツマイモを植え上部にキャッサバとキマメを混作していた（写真10）。ラウアンとアンが接する境界線上沿いのネズミ道は，草が生えておらず土の地面が見え道筋がはっきりしている。それとともに，このアンの西側の

写真９
水田，バナナとキャッサバを植えたアン，その上に灌木ゾーンが広がる。

写真10
サツマイモを植えた弟のアン

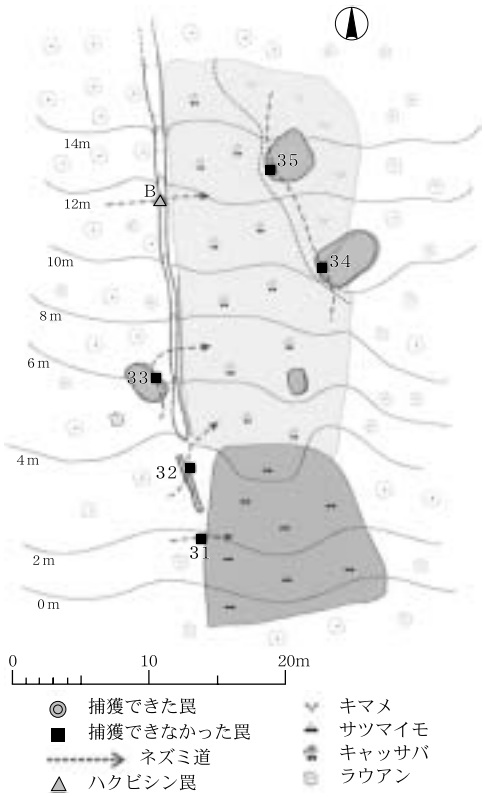


図７
A氏三男のアン周辺のネズミ罠

ラウアンとの境界線上には，倒木，岩陰などがあり，３カ所に罠を設置する（図７，No. 31, 32, 35）。アンの東側のラウアン内部でも，岩陰や倒木の下に走るネズミ道を探して罠を設置する（図５，No. 36～39）。

そして最後に谷を下りながら，谷間の小川との間の境界ゾーン内にある岩陰とフウの倒木の下に二つの罠を設置した。これでこの日のネズミ罠猟の罠設置は完了した。朝の８時過ぎから始め，およそ３時間後の午前11時に終了し，全部で41個の罠を設置した。

c　ネズミ回収の行動

翌日の８時半からネズミの回収を始める。罠の見回りは，罠を設置した順に見て回る（表１）。一番最後に仕掛けた No. 40, 41には，ネズミは捕獲されていなかったが，第１番目に設置した No. 1 の罠（図４，No. 1）で，１匹のネズミが罠に掛かっていた。谷間の小川周辺からアンに登る No. 2～7 のポイントでは，ネズミは罠に捕獲されなかった。

しかしA氏のアンの縁の石垣沿いに設置した４つの罠のうち，No. 8 と No. 10 で２匹のネズミを捕獲することができた（写真11）。またアンの内部の岩陰に設置した，No. 12, 13, 14, 15 の４カ所でネズミを捕獲することができた。

アン内部のキャッサバの食べ残しに設置した No. 16～20 の５カ所の罠は，結局ネズミを１匹も捕獲することはできなかった。No. 20 では，罠自体が見つからなかった。ネズミの尻尾など一部だけが，トラバサミに挟まれた場合には，罠と一緒に逃げられ罠を失う

表１　仕掛け罠一覧表

No.	地点	ネズミの場所	捕獲	備考
1	谷間の小川とアンの間	草むら	○	小道の脇。すぐ北側がバナナとキャッサバを混植したアン
2	同上	草むら	×	
3	同上	倒木の下	×	
4	同上	草むら	×	
5	同上	岩陰	×	
6	同上	岩陰	×	
7	同上	岩陰	×	
8	アンの境界	石垣の下	○	ウシの進入を防ぐ石垣の下にネズミ道が走る
9	同上	石垣の下	×	同上
10	同上	石垣の下	○	同上
11	同上	岩陰	×	
12	アン内部（バナナ畑）	岩陰	○	
13	同上	キャッサバの食べ残し	○	
14	同上	岩陰	○	
15	同上	岩陰	○	
16	アン内部（バナナとキャッサバを混植した畑）	キャッサバの食べ残し	×	罠の下を掘りキャッサバだけを食べ逃げられる
17	同上	岩陰	×	
18	同上	岩陰	×	
19	同上	キャッサバの食べ残し	×	
20	同上	キャッサバの食べ残し	×	罠を失う
21	アンと灌木ゾーンとの境界	倒木の下	×	
22	アンと水田との境界	岩陰	×	
23	アンと灌木ゾーンとの境界	草むら	○	
24	同上	草むら	×	
25	同上	草むら	×	
26	同上	キャッサバの食べ残し	○	
27	同上	草むら	○	
28	同上	草むら	×	
29	同上	草むら	○	必ずネズミが捕まる絶好のポイント
30	アン内部（バナナとキャッサバを混植した畑）	岩陰	×	
31	アンとラウアンとの境界	草むら	×	アンはイモ，キャッサバ，キマメの混植
32	同上	倒木の下	×	同上
33	同上	岩陰	×	同上
34	同上	草むら	×	同上
35	アン内部	岩陰	×	同上
36	ラウアンの内部	倒木の下	○	放棄して５年のラウアン
37	同上	岩陰	○	同上
38	同上	倒木の下	×	同上
39	同上	岩陰	○	同上
40	谷間の小川とアンの間	岩陰	×	村へ帰りがけについでに仕掛ける
41	同上	倒木の下	×	
A	小道の脇。谷間とアンの間	ハクビシン道		ハクビシン捕獲くくり罠。
B	アンとラウアンの境界	ハクビシン道	○	ハクビシン捕獲カゴ罠

写真11
罠にかかったネズミ

ことがあるという。No. 19 の罠は，餌だけを食べられ罠は閉じていた。さらに No. 20 の罠は，ネズミが罠の下に穴を掘り，罠の下のキャッサバだけを食べて逃げられていた。水田とアンとの境の No. 22 ポイントでは，ネズミは罠に掛かっていなかった。しかし，アンと斜面上の灌木ゾーンとの境界線上に仕掛けた，No. 23～29 のポイントでは，４カ所の罠でネズミを捕獲することができた。

小川を渡った小川の北側斜面のＡ氏の三番目のウォンが所有するアンとその周囲のラウアンでは，ネズミを捕獲することはできなかった。しかしその東側のラウアン内部で仕掛けた四つのポイントでは，No. 36, 37, 39 の３カ所で３匹のネズミを捕獲できた。

41カ所のネズミ罠を見て回るのが終わったのは，10時過ぎでおよそ１時間半の時間を要した。捕獲数は，14匹であった。そのうち１匹はまだ子供で食べるところがないという理由で捨ててしまったので，村に持ち帰ったのは13匹である。

捕獲したネズミは，小川の岸辺ですぐに，肝臓以外の内臓をとりだす作業をおこなう。こうすることでネズミの肉が臭くなるのを防げるという。

村人は，ネズミ罠猟をおこなうときは，１人だけでおこない，他人に見られることを極端に嫌う。罠を設置したり，獲物を罠から回収する朝に，他人から猟に関わる話題をしゃべりかけられることさえタブー視されている。その理由は，他人に見られたり聞かれたりすると，以後獲物が捕獲できなくなると信じられているからである。この信念が，他の村人の罠猟を調査したり，長期間にわたる連続した観察調査を困難にしている。

ｄ　聞きとりによる他のネズミ猟

聞き取り調査によると，1980年代までは，家屋や村内の入り口付近に建てられている食料貯蔵倉庫，それに水田の畦畔に棲息するネズミも捕獲・食料の対象になっていたという。

水田の畦畔に穴を掘って棲息しているネズミを捕獲するには，３種類の方法があった。

１　ネズミ穴には必ずもう一方に出口があり，二つの穴をもつのが普通である。一方に水を入れるともう一方の穴から浮かび上がってくる。これを捕獲する。

２　ネズミ穴を掘り，ネズミを土ごと掘り出しナタか棍棒で撲殺して捕獲する。

３　ネズミ穴に煙を入れ，いぶりだす。木などを燃やした煙を使うが，同時にトウガラシを一緒に燃やすと，より効果的にネズミが捕獲できたという。

村内のネズミ捕獲は，特に雨が多くなる８・９月ごろ，最も盛んにおこなわれたという。その方法は，村はずれにある穀物貯蔵倉庫（写真12）を数十人で取り囲み，１人が屋根に登り倉庫の屋根を叩いてなかにいるネズ

写真12
倉庫群

ミを驚かす。さらに２～３人が倉庫のなかに入り，屋根裏にいるネズミを叩き落とす。倉庫から逃げようとするネズミを倉庫の周囲を取り囲んだ村人が叩き殺して捕まえる。この方法によると一度におよそ100匹ものネズミが捕獲できたという。

Ⅲ　技術からみたネズミ罠

ネズミ罠猟が生業の一部として生活に取り込まれてきた実態をより明らかにするため，道具の型式変化と生業の効率化との関係性から考察する。

１　旧タイプの型式分類

現在ネズミ罠猟に使用されているのは，新タイプⅠに分類した，鋼鉄線を使用したトラバサミである。しかし1995年以前のネズミ捕獲道具には，三つのタイプがあり，タイプごとに使用場所や設置方法も異なっていた。旧タイプから新タイプへの型式変化の背景には，ネズミ罠猟に使用する時間を，短縮し効率化する必要があったと考えられる。この効率化の意味を他の生業との関係から明らかにしたい。

1955年以前に使用されていた旧タイプのネズミ罠を，旧Ⅰ～Ⅲタイプに型式分類する。

旧Ⅰタイプ（図８・９，写真13）は，リー語名はヒョッガで，ヒョが罠，ガが刀の意味である。このネズミ捕獲道具は弓の弾力を利用したタイプで，ネズミ捕獲弓と名づけた（西谷2002）。ネズミ捕獲弓は弓の弾性を利用して，ネズミを挟みとる構造をもつ。タケの竿に籐

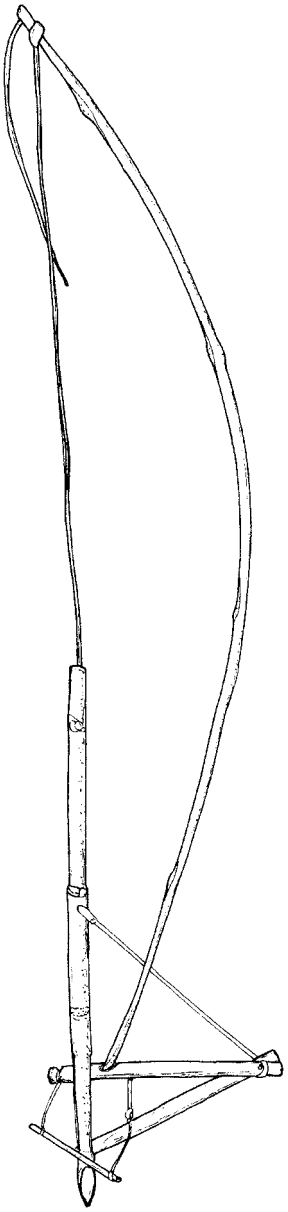


図８
旧Ⅰタイプ

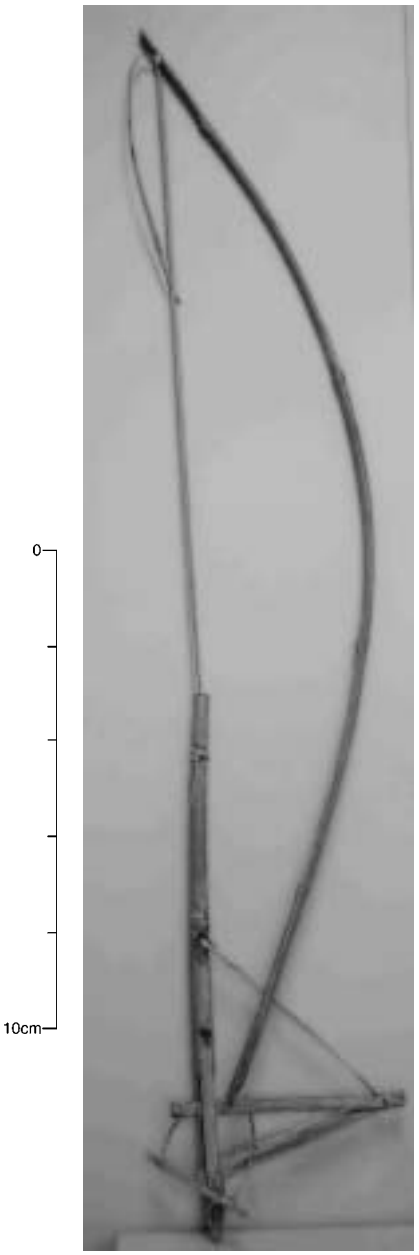


写真13
旧Ⅰタイプ

の弦を張り，一方の竿の端が弓の力でネズミを挟みとる構造になっており，それが相当の力で閉じる仕掛けである。捕獲弓本体を地面に突き刺し，ネズミを捕獲する。

普通の弓は，竿の両端に弦を張る。捕獲弓の竿の一方の部分は，刻みを入れ籐の弦を引っ掛けるようになっている。反対のネズミを挟む部分は，弦を直接結ばない。ネズミを挟み込む部分は，開いた状態では「＞」形になる。竿は「＞」形の左端の上端に，竿の端に刻みを入れ，はめ込む構造になっており，竿の弾力で，「＞」形の部分が閉じる。閉じると，上下が互い違いにハサミのように合わさる構造である。弦の下半部は，タケで作られ筒状になっているが，これが「＞」形のネズミを挟み込む部分を支えるだけでなく，捕獲弓全体を土に突き立て動かないように固定する役目をはたす。弦の端はこの筒の上端に結びつけられている。筒の下半部には，１×12センチメートルの窓が穿たれており，ここに「＞」形の左部分がはめ込まれ，左下の先端は固定される。筒のほぼ中心部あたりと，「＞」形の挟み部分の右端が，籐で結んである。これは，「＞」形の挟み部分を開き，セットしたとき，挟み状の部分が，竿の弾力によって下方向に押されないよう，引っ張り固定する役目がある。

次に仕掛ける順番を述べておこう。

1　挟み部分を，上に引き上げる。
2　細いタケの棒（長さ20センチメートル，太さ３～５ミリ）を「＞」形の下側の上にそっと置く。
3　その上に，「＞」形に開いた状態で，長さ５センチメートルの棒で，挟み込む上の部分を支える。これで罠のセットは完了である。
4　ネズミが，この「＞」形の間を通ることで，微妙な力で「＞」形の挟み込む部分を支えている棒を押し倒しネズミを挟み込む。

旧Ⅱタイプ（図10・11，写真14）は，リー語名はヒョッバイという。ヒョは罠でバイはタケ筒の意味である。やはり弓の弾力を利用してネズミを挟み込む罠である。しかし弓を横向きにした形態に特徴があり，構造は旧Ⅰタイプと比べると比較的単純である。

ネズミを挟み込む部分は，円筒のタケが二重に入れ子状になっている。外側のタケ筒の

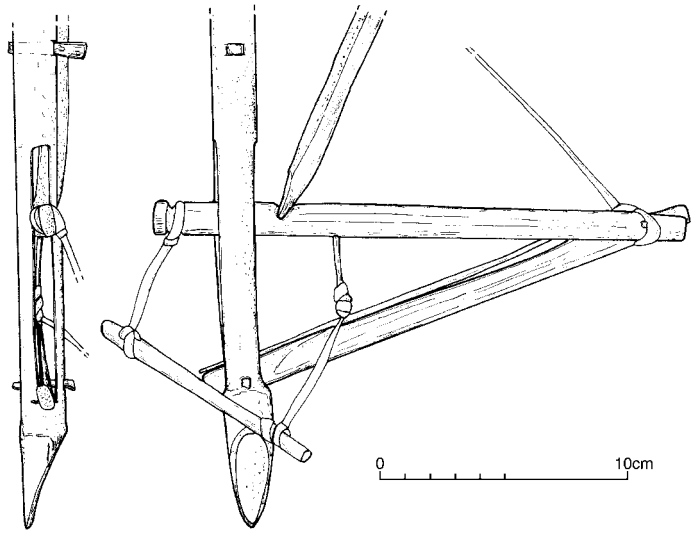


図９
旧Ⅰタイプ（部分）

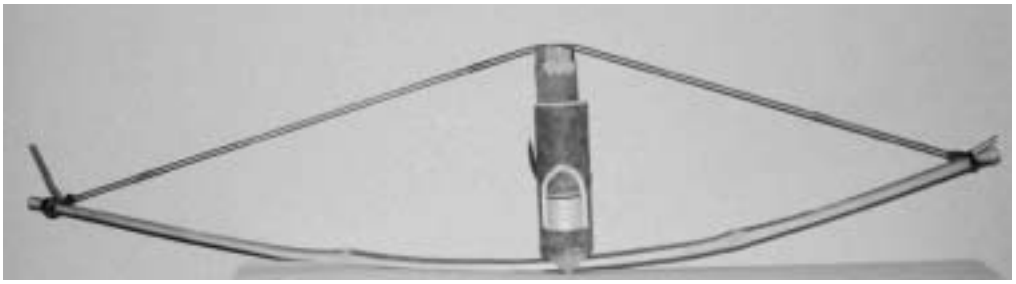


写真14
旧Ⅱタイプ

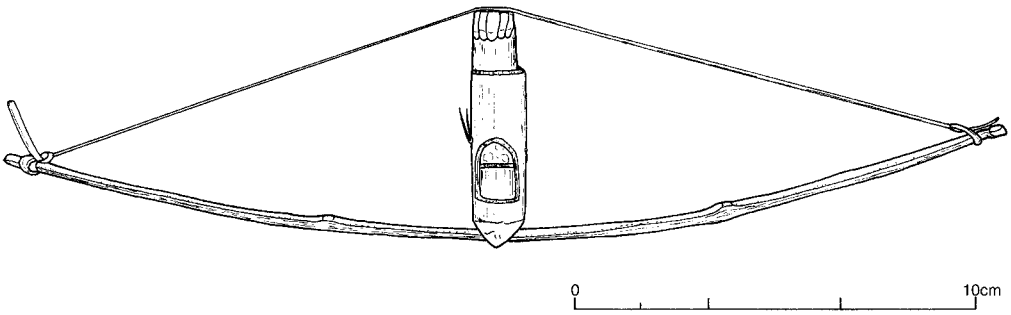


図10
旧Ⅱタイプ

下半分にはおよそ15×５センチメートルの窓が開いている。その窓と上部の両側に細い穴をあけ，糸を通しておく。そのさいにタケ筒のなかを通った糸には餌をつけておく。もう一つの内側のタケ筒をなかに入れ込み，この二つの入れ子になったタケ筒を，まるで矢をつがえるように弓にセットする。

ネズミがこのタケ筒の窓から首を突っ込み，餌を食べると同時に内側の筒を支えていた糸も噛み切る。内側の筒は弓の弾力で上から押さえつけられているので，矢が放たれたと同じ状態になり下へと押され，餌を食べていたネズミの首の部分を挟み込む。ネズミの首根っこを挟み込むため，この罠ではネズミが逆立ち状態になって捕獲されるという。なおこのネズミ捕獲弓は，尾高邦雄が1930年代に重合村で調査をおこない，報告したものと全く同じタイプである［尾高 1942］。

旧Ⅲタイプ（図12，写真15）は，石の重み

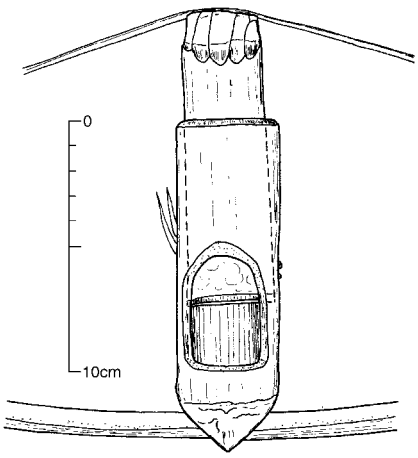


図11
旧Ⅱタイプ（部分）

を利用してネズミを捕獲する重力罠で，リー語名はヒョッシーンという。ヒョは同じく罠で，シーンは石という意味である。この罠は，固定式で移動することはない。材料は，周囲

写真15
旧Ⅲタイプ

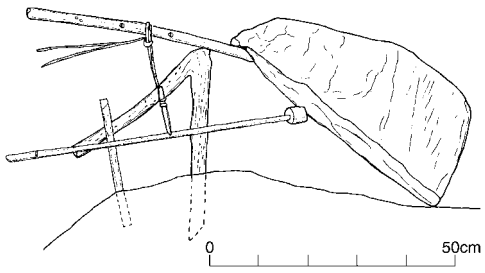


図12
旧Ⅲタイプ

に生えている木（木の種類は問わない）と，タケと，ツタから作った紐の３種類の材料を使う。まず角度がおよそ45度の二股になった木を探す。その部分をおよそ長さ30センチメートルほどの長さに切り取る。そしてこのＶ字形になった木の股を逆にして，ネズミ道に対して，直角方向に地面に突き刺し固定する。次に重さ10キロ程度の平たい石を選び，逆さ「∧」形の先端に乗せた長さ50センチメートルほどの棒で支える。この棒のほぼ中程にツルをくくりつけ，さらにその先端には，長さ５センチメートルほどのタケをくくりつける。このタケを，「∧」の左側に引っ掛ける。そしてその先端の部分を，長さ40センチメートルほどのタケで，つっかえ棒をする状態にすることで，石が微妙に支えられる状態ができあがる。この横方向のタケの先端は，持ち上げられた石のちょうど真下にくるように調整し，さらにその先端に餌になるキャッサバやサツマイモなどを突き刺しておく。ネズミが餌を食べると，微妙に支えられていた石がはずれて下に落ち，ネズミは圧死する。

旧タイプと新タイプの鋼鉄線で作ったトラバサミとの最大の相違は，旧タイプが，それぞれのⅠ～Ⅲの型式によって仕掛ける場所が異なることである。旧Ⅰタイプは，餌をつけてネズミをおびき寄せることができないが，ネズミが罠を通過するだけで，挟み捕ることができる。そのためアン周囲の境界線上にあるネズミ道や，アン内部や水田内部に仕掛けることが多い。しかし旧Ⅰタイプは，高さが150センチメートルと大型であるため，岩陰や倒木の下のネズミ道に仕掛けるには不便である。そういった場所には，旧Ⅱタイプを使う。このタイプを岩陰や倒木の下にできたネズミ道に仕掛ける場合は，新Ⅰタイプのトラバサミと基本的には同じ要領である。必ず捕獲弓をネズミ道に沿って並行に設置し，ネズミが頭を突っ込む窓をネズミ道側に向ける。こうすることで道の左右両方からやって来るネズミを捕獲することができる。

旧Ⅲタイプの重力罠は，旧Ⅰ・Ⅱタイプの長所を併せもっている。ネズミをおびき寄せる餌をつけることもできるし，さらに罠を通過するだけでネズミを石で押しつぶすことが可能である。欠点は，固定式のため移動できず，また石が調達できないアンや水田内部，それに草地ゾーンなどの地点では使えない。そのため設置可能な地点は，谷間の小川沿いやその側を走る小道脇のネズミ道などに限られる。しかし３種類の罠を比較すると，捕獲率からだけいえば，旧Ⅲタイプが最も高かったという。

2　型式変化の要因

初保村で1995年以前まで使われていた３種類の罠は，タケ，石，木というごく身近な材料を使い，しかもネズミ道のポイントの条件によって特化していることが特徴である。ネズミ罠猟は，彼らの自然に対する深い生態学

的知識によって支えられており，そのため個人によっては，罠をどこに設置するかという自然知の差によってネズミ捕獲数にある程度の差が出てくることも事実である。

しかし旧タイプのネズミ狩猟道具の特化は，おそらく素朴な材料を使った条件下では，これ以上の改良はできないほど，かなり完成度が高い。しかもその「技術革新」の方向は，罠を仕掛ける条件によって道具を特化することで，誰でもが簡単にネズミを効率よく捕獲可能にすることだったと考えられる。そこで次にネズミ捕獲道具がもつ技術革新の意味を，旧タイプから新タイプへの型式変化がなぜおこったという，その理由を考えることで明らかにしてみたい。

A氏によると，旧タイプⅠ・Ⅱ・Ⅲと，新Ⅰタイプのトラバサミを使った場合を比較しても，もし同じ数の罠数を設置すれば，ネズミ捕獲数はほぼ同じくらいだという。つまり新タイプのトラバサミを導入した結果，村におけるネズミ捕獲数が飛躍的に増大したわけではないという。

旧タイプから新タイプへと変化した最大の要因は，旧タイプが持ち運びに不便だからである。一日に罠を設置する数は，新タイプも旧タイプも変わらず，およそ50個前後である。新タイプは，１個150グラムで，50個で7.5キログラムになる。袋に入れ肩に担いで，一度に十分持ち運べる重さである。一方旧Ⅰタイプは，340グラムであり旧Ⅱタイプで180グラムである。重量の問題だけでなく，この２つの旧タイプは，新Ⅰタイプよりはるかに大きく，１人の人間が一挙に50本も持ち運ぶことはまず不可能である。また先ほど述べたように，旧Ⅲタイプは，構造上持ち運びは不可能である。そのため，旧タイプの罠を設置する場合は，出作小屋に罠を置いておき，何本かを設置し終わると出作小屋に引き返し，また狩猟場に戻るということを繰り返していたという。一方の新タイプのトラバサミは，一度に50個の罠を運べるため，罠を設置する時間を，旧タイプよりはるかに短縮することができる。

ネズミ罠を設置する時間をなるべく短縮する必要性は，ネズミ罠猟と他生業との関係性から考える必要があると思われる。特に冬季のネズミ罠猟は，時間の短縮と日常的な動物タンパク質確保の両立を必要条件としてきたのではないかと考えられる。その理由は，この時期がコメの収穫と田植えと春節が重なっており，１年で最も忙しい農繁期に相当するからである。

12月から翌年の２月は，まず12月のコメの収穫に始まり，すぐに一期目の田植えの準備に入り，その農作業が２月中旬まで続く。この期間は，重労働が連続する。現在では，町の市場や村内の小商店で買う干し魚などを利用して，食事を準備する時間の節約と栄養補給をおこなう家もある。しかし現在でもネズミなどの小動物狩猟は，コメの収穫と田植えのための農作業の合間に可能な狩猟活動と，貴重な動物性タンパク質確保の手段として彼らの食生活にとって重要な地位を占めている。

Ⅳ　焼畑が作り出す機能

１　食料としてのネズミ肉

小動物は，リー族にとって日常的な食料として重要な位置を占めている。リー族は，ブタ，水牛，黄牛などの家畜を飼育しているが，これらは結婚式や葬式，それに春節などの特別なハレの日以外に食べられることはめったにない。現在の初保村では，イノシシはこの２年で３頭しか捕獲されていない。イノシシやキョンなどの大型野生動物の捕獲数は1950年代の記録をみても，とても日常的に動物性タンパク質を確保できるほどの捕獲数ではない［西谷 2001 2002a］。

リー族は野生の小動物を徹底的に利用している［梅崎, 良, 伊藤, 蒋, 西谷 2001］。水田では，カエル類・イナゴ・エビ・オタマジャクシ・カニ・クモ類・ケラ・コオロギ・タニ

シ・トンボの幼虫・ネズミなどが食料として採集されている。また斜面畑や灌木林，それに自然林では，鳥類（スズメ，ハト，フクロウ，カラス，ツバメなど）・キツネ・センザンコウ・コウモリ・タヌキ・トカゲ・ヘビ・リスなどがあげられる。こうしたリー族の食料のための小動物狩猟は，解放前のスチューベルや岡田謙によっても報告されている［スチューベル 1943, 岡田 1942］。

初保村における小動物狩猟による食料の重要性を理解するには，ネズミ肉の食料としての利用方法と，捕獲量を考察する必要があろう。

まず食料としてのネズミ肉について述べる。村に持ち帰ったネズミの処理は二つの方法がある。その日の内に調理し食べるか，捕獲数が多い場合は保存する。最初に，ネズミの毛を処理する。鉄串をネズミの肛門から突き入れ頭骨に突き刺すようにして固定する。次にタケを地炉で燃やしながら，ネズミをその上で回転させながら毛を焼く（写真16）。この時最初に尾の部分を焼く。そして尾を握って引っ張り，尾の周りの皮をはぎ取る。次に毛を焼きながら，時おり竹ベラなどで焼いた毛をそぎ落としていく。皮を丁寧に剥ぎ終わると，全体を四〜五つの適当な大きさに切り分けておく。これを調理する。調理法には，３種類ある。

１　煮る。蒸留酒や醸造酒を醸す時に残った酒粕や，ニラやネギなど香味野菜を一緒に入れる。

２　炒める。ニンニクやネギなどと一緒に炒める場合が多い。

３　焼く。ネズミの腹に包丁を入れ，開いて串刺しにした状態で，地炉の上で焼く。

煮る方法と焼く方法が伝統的なネズミ料理である。炒めるという調理は，1960年代以降に，中華鍋が普及するようになってから村に広がった。

冬季に捕獲されるネズミの数量はかなりの頭数に達する。そこで一度に食べきれないものは干物に加工して保存する。その方法には２種類ある。

１　毛を焼き，次に醤油と塩をふって味付けをしそのまま火であぶり乾かす。２〜３時間かけて火であぶることで干物になる。

２　一度ネズミを煮てからそれに塩をふって天日で干物にするか，毛を焼いてまだ肉のなかまで火が通っていない生肉を開いて，それを天日干しにする。この場合は，ほぼ一日干す必要がある。

乾燥させるか天日干してできあがったネズミの干物は，およそ２〜３カ月の保存が可能である。ただし約10日おきの間隔で家のなかからもちだして，再度天日に干して乾かし，カビの発生を防ぐ必要がある。

次にネズミの捕獲量について述べてみる。Ａ氏は，2002年の春節前後から10数回ネズミ罠を仕掛けた。毎回50数個の罠を仕掛けたが，１回に20匹〜30匹の収穫があり，この年の捕獲数は統計でおよそ230匹だったという。彼は村の主任をしているため，その仕事が忙しくネズミ罠猟にあまり時間がとれなかった。そのため230匹という捕獲数は，例年の捕獲数と比較すると少なく，普段の冬であれば300〜400匹は確実に捕獲できるという。

初保村では各家が，冬季には必ずネズミ罠猟をおこなう。村の50世帯が，少なく見積もって一冬に300匹捕獲したとすると，およそ

写真16
ネズミの毛を焼く。

15000匹ものネズミを一冬に捕獲することになる。230匹という数は，５人家族が１～２月の２カ月間にわたって，動物タンパク質としての肉をほぼ昼と夜の食事に毎回食べられる量である。そして先ほど述べたように，食べきれない肉は乾肉にして保存することが可能である。

これに加えて1980年代までおこなわれていた村内の倉庫や，水田の畦でおこなわれていたネズミ罠猟から得られるネズミの総数を推測すると，ネズミの肉が初保村の人々にとって，動物性タンパク質として食料にかなりの比重を占めていた可能性が高いと推測できる。

また現在では，バイク行商や村に小さな商店ができ，日常的に現金によって町からもたらされる魚や乾肉, ブタ肉, インスタントラーメンなどが手に入るようになり，農繁期の忙しい時期にはこうした食料に頼る村人が多くなっている。しかし，かつてほぼ動物性タンパク質を自給していた時代には，ネズミ罠猟による肉の供給はかなりの割合を占めていたと推定できる。それだけに日常的な食料としてネズミ罠猟は重要な生業の一つであるとともに，農作業の妨げにならないように効率よく一日の生活に組み込む必要性があったと考えられる。

2　狩猟場としての焼畑

焼畑や山焼きによる人為的な行為によって作り出される攪乱環境の一つである境界ゾーンは，野生動物が棲息しやすい場を作り出すだけでなく，人間側からみれば決して意識的ではないが，野生動物をおびき寄せるという「大きな罠」機能を成立させてきたと述べてきた。さらに野生動物にとって焼畑が魅力ある場として機能している理由は，焼畑にはほぼ１年間にわたってさまざまな作物が連続して収穫される点にある。

初保村の焼畑は，かつて一家族が１年間を通じて食べるさまざまな種類の作物を植え付けてきた。その姿をＡ氏の二番目のウォンのアンの様子からみてみたい（図13）。焼畑の作物の植え付けの特徴は，混作と混植にある。ここでいう混作とは一区画のアンに，さまざまな作物を一定の小区画に植え付けることである。混植とは，さらにある一つの小区画に，二種類以上の作物を同時に植えることであると定義しておく。

例えば一つのアンでは，陸稲である山欄稲をはじめ，トウモロコシ，カボチャ，キマメ，ラッカセイ，ヘチマ，インゲンマメ，アズキ，キャッサバ，タロイモ，ヤムイモを混作する。さらに，小さな一つの区画にいくつかの品種を混植する。Ａ氏の二番目のウォンのアンでは，西半分に山欄稲を植え，その同じ区画にトウモロコシを混植していた。山欄稲はこの他にキマメも混植することができる。ヤムイモとタロイモを植えた場所には，他の作物は植えない。サツマイモなど地を這う作物と山欄稲は混植できないが，このアンではサツマイモを植えた場所に，キマメ・アズキ・サヤインゲン・カボチャを混植していた。またアンの下部に面積としては狭い（およそ８×11メートル）ものの，コショウとパイナップルを混植している。

作物の１年間にわたる播種と収穫を一覧にしたものが表２である。焼畑の作物のほとんどが３～４月の２カ月にわたって播種がおこなわれる。３月に入ると収穫が終わった焼畑の作物を丁寧に刈り取り，従来ならばそれをアンの上で焼く作業が始まる。初保村の雨期は５月に入ってから始まる。イモ類やラッカセイ，サヤインゲン，アズキなどのマメ類は，雨を待たずに播種を開始するが，山欄稲は４月下旬から５月上旬に雨が降り始めると播種を開始する。

これらの多種類の作物の収穫は，１年間を通じておこなわれる。最も早く収穫できるのはラッカセイである。植え付けてから２～３カ月後には収穫可能で，その後トウモロコシ，アズキと続き，山欄稲は９月下旬から10月になると収穫できる。山欄稲が収穫される時期

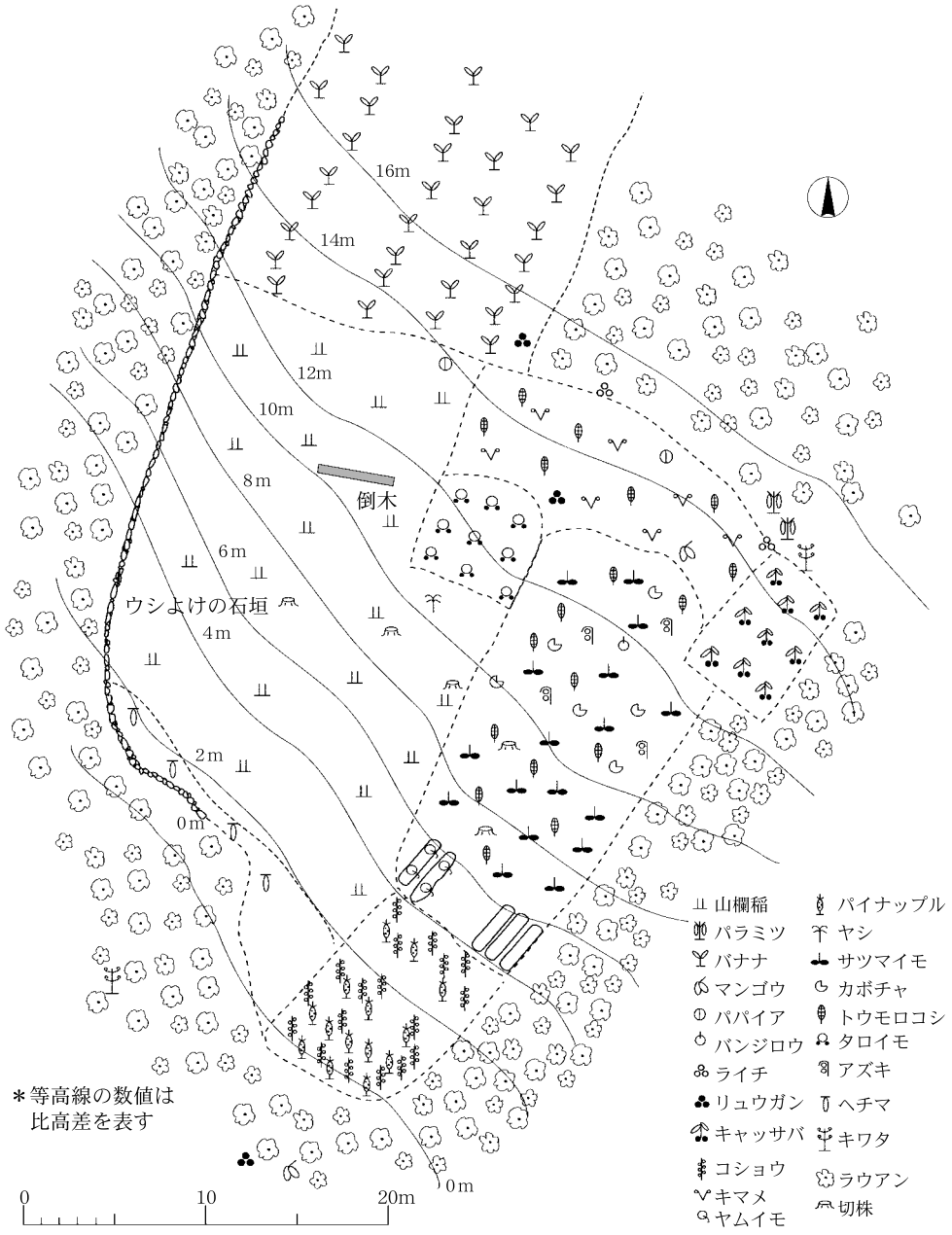
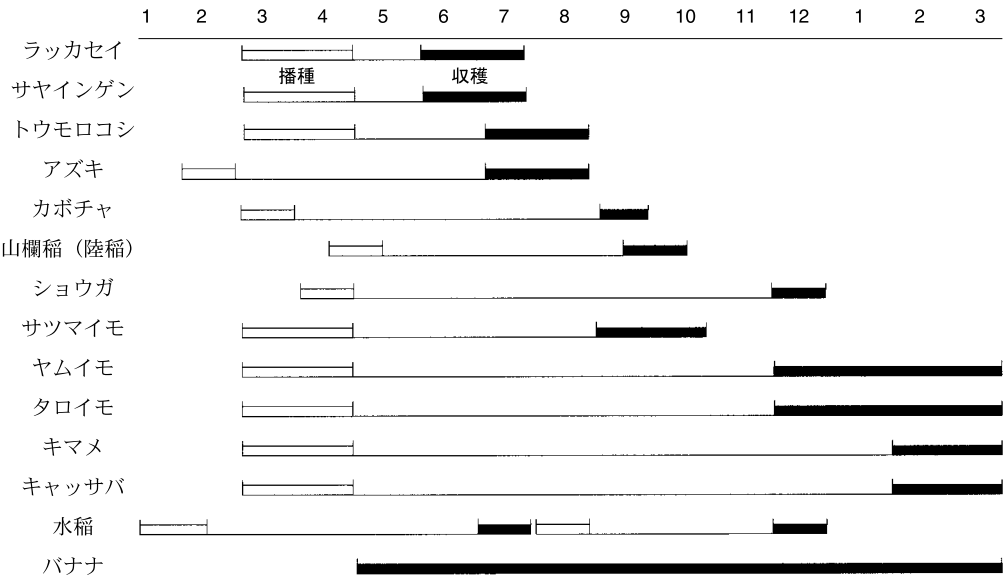


図13
タイプⅠのアン（伝統的な焼畑技術を残したアン）

表２　焼畑の作物カレンダー



になるとサツマイモの取り入れが可能になり，これは翌年の３月まで続く。タロイモやヤムイモは，植え付けてから収穫できるまで比較的時間がかかり，12月になってから可能で，それが翌年の３月まで続く。キマメやキャッサバは，植え付けてからちょうど１年後の２～３月に収穫の時期がやってくる。さらに水稲は，二期作のため６月と12月に稲刈りの時期があるし，バナナはほぼ１年を通じて毎月のように実る。

焼畑カレンダーに列挙した作物について，ネズミはほぼ全種類を餌にしている。地中のイモ類は掘り返して食べ，イネは根本をかみ切り引き倒して食べるという。トウモロコシやバナナなど茎が比較的しっかりしているものは，登って実を食べる。ネズミ以外にも焼畑という「大きな罠」におびき寄せられる野生動物は多い。鳥類は，特に山欄稲やマメ類を狙って収穫時に大きな被害を与える。大型野生動物であるイノシシは，イネやキャッサバなどのイモ類を好んで餌にする。

かつて小動物狩猟は，ネズミだけではなかった。ネズミなどの小動物を獲物とする，フクロウ，ヘビ，ハクビシン，キツネなどもまた狩猟対象であった。焼畑という「大きな罠」には，焼畑の作物に引き寄せられてくる野生動物だけでなく，その野生動物にまた引き寄せられる野生動物も狩猟できるという効果があると思われる。

焼畑は１年間にわたって作物がほとんど途絶えることなく連続して収穫できる。このことは反対にネズミなどの野生動物にとっては，ほぼ年間を通じて食料が豊富にあり，しかも餌を探し回る必要がなく常に一定の場所に確実にあるという，理想的な餌場を提供していることを意味している。このことが野生動物を焼畑に引きつける最大の魅力であるとともに，人間側からみれば，「大きな罠」としての狩猟場が成立しうる最大の要因だと考えられる。

結論にかえて
―「大きな罠小さな罠」システム―

ネズミ罠猟について，その具体的な狩猟方法を述べてきた。リー族の野生動物狩猟につ

いては，1930年代や1950年代におこなわれてきた過去の民族調査でも言及されている。しかしそれはイノシシ，キョンなど大型野生動物の狩猟についての調査記録であった［中南民族学院本書編輯組 1992, H.スチューベル 1943, 岡田 1942, 尾高 1942］。今回取り上げたネズミ食については，尾高邦夫が報告書のなかで言及している程度であり，その他の調査者は，ネズミ捕獲が生業の一部であるという認識には至らなかったと考えられる。

松井健は，多様な生業を分析するにあたって，中心的な生業だけでなく副次的な生業を扱うことで，そのなかに生業全体の問題を解き明かす端緒がかくされているのではないかと主張する。そして集団にとって最重要とされる生業活動の陰にありながら，副次的ですらない生業活動をマイナー・サブシステンスと呼び，その諸活動の意味を分析することが重要だと述べる［松井 1998］。

ではネズミ罠猟は，松井健が提唱する中心的生業ではなく経済的意味がほとんどないマイナー・サブシステンスの範疇に入るのだろうか。マイナー・サブシステンスの定義をもう少し詳しく述べると以下のようになる。

1　経済性がないとはいえないが生計維持に必須のものではない。
2　資源のうち分散性が高いものを対象とする。
3　技術的に低いレベルにある。
4　擬似的な体験では得られない自然との一体感が存在する周辺的な生業を指す。

これに対して初保村におけるネズミ罠猟は，「自然との一体感」といった楽しみとしての周辺的な生業ではなく，生活にとって必須の生業システムの一部分であり，リー族の生活適応戦略に組み込まれてきたと推測できる。

その理由は「Ⅱ　技術からみた罠猟」で考察したように，狩猟に必要な時間は，農作業に影響を与えないことが必要条件になっている。今回のネズミ罠猟は朝の８時半ごろから始めたが，通常であればもう少し早い時間に設置し，それから再び農作業を開始する。50個以上の罠を設置するには，新Ⅰタイプでも少なくとも３時間程度は必要である。そのためネズミ罠猟に関わる時間と労働力をできるだけ節約できれば，それだけ農作業に振り向ける時間が捻出できる。農作業を重視すると，ネズミ狩猟は「朝飯前」の作業として終わらせる必要性があったと思われる。

農繁期にネズミ罠猟を成立させる条件は，農作業の合間にいかに効率よく実施できるかという点にあったと考えられる。そのため旧タイプから新タイプへの道具の型式変化による効率化とは，道具の機能の向上によるネズミ捕獲数の増加を目的としたものではなく，むしろ狩猟に投資しなければならない時間と労働力をできるだけ短縮するという方向性にあったと推定できる。このように道具の型式変化から抽出されたネズミ罠猟の特質は，マイナー・サブシステンス的な生業ではなく，農繁期の動物タンパク質確保と農作物の被害を最低限に押さえる目的を効率よくおこなうという，彼らの生活適応戦略として組み込まれてきた重要な生業の一部だったと考えられる。

そしてネズミ罠猟を生業として可能にしているもう一つの要因が，「Ⅲ　焼畑が作り出す機能」で論じた，焼畑とその周辺の攪乱環境の働きである。焼畑は地力が落ちれば別の場所へと移動していく。そのため焼畑の周辺には休耕地が広がる。こうした水田，焼畑という人為的な攪乱環境が，その周辺に境界ゾーンを作り出し，かえって小動物の棲息場所を増加させる。それがまた狩猟にとっては格好な場となっている。またかつては盛んにおこなっていた草地ゾーンにおける山焼きも，草地を焼畑周囲に作りあげ，これが野生動物のうち特に大型のイノシシやキョンなど棲息地と狩猟場の両方を兼ねあわせる装置の役目をはたしていた。

人類の定住と農耕の開始によって，森林が切り開かれ攪乱環境が成立する。中尾はさら

にこうした人為的な攪乱環境に自生する植物群が野生と栽培の中間段階である「半栽培」植物であり，これが栽培植物の起源になるのではないかと推定した［中尾 1967］。つまり焼畑周辺の人為的環境は，野生と栽培，さらには野生動物とを結びつける多様な環境を形成しているという考え方である。

焼畑周辺の攪乱環境と動物狩猟に注目した南真木人は，ネパール山地民マガールの藪林焼畑を調査して，焼畑にともなって休耕地が出現し，そこでおこなわれたメスのミフウズラを囮に使った仕掛け猟の実態を報告している。そして植生が復元されていく藪林が多様に利用され，その過程の一つである小動物狩猟の重要性を指摘している［南 2002］。また市川光雄は，中部アフリカの森林地帯では，農耕民が放棄した畑やその跡地である二次林には野生動物が多いことと，古い二次林に採集対象となる食用樹種が多いことを指摘する。そしてこのような二次植生の存在が，森における人間と自然の相互作用を示しており，ここが狩猟場になっていると述べる［市川 1992］。

初保村のリー族がおこなってきた狩猟もまた，集落の周辺に形成された攪乱環境を多様に利用してきものであるが，それを促進してきたのが，焼畑をおこなうことのできる境界ゾーンの成立や，山焼きをおこなうことで草原ゾーンを作り出したことだと考えられる。焼畑で作り出された人為的環境である草原ゾーンは，草食性動物が棲息しやすくなる場を提供し，さらにその内部にある焼畑は，餌場としての機能を必然的にもつようになる。これは初保村の人々からの聞きとりによる情報であるが，海南島に住むミャオ族は，山間部で狩猟する場合に，イノシシをおびき寄せるため小さな面積の焼畑を作るという。

焼畑が作り出すこうした人と野生とを結びつける機能を「大きな罠小さな罠」と呼んだわけだが，初保村ではこの機能が彼らの生活適応戦略に組み込まれた生業の一部であると思われる。さらにいえばシステムとしての「大きな罠小さな罠」は，野生動物狩猟を，耕作地内部や周辺でおこなうことを可能にしており，いわば狩猟自体を農耕内部に取り込んでいると考えられる。そして焼畑周辺のこうした機能は，実は動物狩猟だけでなく，おそらく野生植物の栽培化にも関わってくると思われる［篠原 2002b］。

耕作地周辺で狩猟する動物の種類は，過去の時代や地域による生態学的基盤の違いによって，異なってくるであろうし，今回紹介したようにネズミ罠猟だけが小動物狩猟の対象動物とは考えられない。しかし少なくとも人類が農耕を開始すると，焼畑を含む耕作地において，作物を狙ってやってくる野生動物からいかにして作物を守り通すかは，普遍的な問題であったと思われる。

動物狩猟をマイナー・サブシステンス的に利用するか，もしくは食料獲得と害獣駆除という二面性をもった生業の一部として取り込んでいくかは，それぞれの人類社会の生活適応戦略に関わってくる選択の問題だと考えられる。しかし，焼畑周辺でおこなわれてきた野生動物狩猟を農耕に内部化するという「大きな罠小さな罠」機能は，人類にとって定住農耕を開始して以降の少なくとも東アジアの歴史において，かなり普遍的に成立しうる装置として想定できると思われる。そしてもしこの想定が可能であるならば，焼畑周辺でおこなわれてきたであろう動物性タンパク質確保の手段として，日常的かつ効率的な小動物狩猟の重要性に着目する必要があると考えられる。

焼畑周辺の自然と人の関係を探ることは，人類が過去におこなってきたであろう野生動物利用という生活適応戦略の問題だけにはとどまらないと推測している。人類がおこなってきた野生動物の家畜化や栽培化を，自然との共生関係のメカニズムから明らかにしようとする研究への関心が高まっている［福井 1995］。つまり，人と自然との長い間の共生

というすり合わせのなかから家畜化や栽培化が生まれてくるという考え方である。現在の中国考古学の成果では，農耕の開始と同時に家畜化が始まったのではなく，ある程度の時間が経過してから（前7000年前後）家畜が出現すると考えられている［袁靖 2000］。しかし谷泰が指摘するように，考古学的方法では，動物遺骨の形態変化によって家畜化されたであろう確実な時期は決定できたとしても，それがどのような過程とメカニズムを経たのかを証明するのはおそらく困難であろう［谷 1995］。

松井建は西アジアの遊牧民の研究から，人間の生活様式が狩猟・採集から農耕や遊牧へと移行した中間段階として，知的前適応としてのセミ・ドメスティケーションという状態を想定している［松井 1989］。西アジアの乾燥地帯において最初に家畜化されたのは，ヒツジやヤギである。その家畜化は人間側からの例えば宗教的に，ある特定の動物を保護するとか，収穫に近いムギ類の種実を守るために有蹄類の群を追い払うことで始まったといった動機からではないと述べる。ヒツジやヤギの家畜化は，野生動物の群れそのものを制御する技法にあると主張する。こういった野生動物をコントロールする技術は，狩猟民にもみられ，人間と狩られる動物とのかかわり方が変化したとき「群れのままの家畜化」が始まったのだと，自然と文化との関わり方のメカニズムから家畜化の問題を論じている。

おそらく東アジアにおける家畜化過程は，西アジアとは異なる別のメカニズムではなかったのではないかと考えられる。中国では黄河中流域で，豚便所というブタを農耕へと内部化するだけでなく，家屋への内部化まで推し進めていくことが象徴しているように，西アジアとは別の農耕と家畜との関係が想定しうるからである［西谷 2001a, 2001b, 2002a］。

また狩猟段階のイノシシは，日常的な安定した食料とはなりえなかったが，イノシシから家畜化されたブタも，一般的には非日常的なハレの食料だった。耕作地周辺での小動物狩猟は，大型野生動物よりもはるかに日常的かつ安定的な動物タンパク質を確保できた可能性を示唆しており，逆になぜ耕作地に近寄ってくる野生動物のうち，非日常的な家畜であったイノシシを家畜化する必要があったかという問題を改めて問うていると思われる。

東アジアの人類の歴史において，野生動物がどのように家畜化されてきたという過程や，野生植物の栽培化をどのように押し進めてきたかという問題を解き明かすヒントは，野生と人との生業活動の接点にあり，狩猟をも農耕に内部化する働きをもった焼畑周辺に隠されているのではないかと推察している。

引用・参考文献

尹　紹亭（白坂　蕃訳／林　紅翻訳協力）　2000 『雲南の焼き畑―人類生態学的研究―』農林統計協会
伊藤貴子　2001 「太平村における生活文化に関する基礎調査」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No. 3―特集　海南島，変貌する村落社会と環境―』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
岩槻邦男　1997 『文明が育てた植物たち』東京大学出版会
梅崎昌裕　2001 「環境保全と両立しうる生業の可能性」『アジア・太平洋の環境・開発・文化　No. 3 ―特集　海南島，変貌する村落社会と環境―』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
袁　　靖　2000 「中国古代農耕社会における家畜の問題について」『第３回　歴博国際シンポジウム　東アジアにおける農耕社会の形成と文明への道』国立歴史民俗博物館
大塚柳太郎　2000 「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」『アジア・太平洋の環境・開発・文化　No. 1』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室

岡田　謙　1942 『海南島黎族の社会組織』出版社不明（2001年，クレス出版復刻版）
尾高邦雄　1942 『海南島黎族の社会組織』出版社不明（2001年，クレス出版復刻版）
掛谷　誠　1998 「焼畑農耕民の生き方」『アフリカ農業の諸問題』高村泰雄・重田真義編著，京都大学学術出版会
呉　永章　1997 『黎族史』広東人民出版社
坂本寧男　1995 「半栽倍をめぐる植物と人間の共生関係」『講座地球に生きる④自然と人間の共生―遺伝と文化の共進化―』福井勝義編，雄山閣
坂本寧男　1996 『ムギの民族植物誌―フィールド調査から―』学会出版センター
佐々木高明　1970 『熱帯の焼畑―その文化地理学的比較研究―』古今書院
――――　1972 『日本の焼畑―その地域的比較研究―』古今書院
重田眞義　1988 「ヒト―植物関係の実相　―エチオピア西南部オモ系農耕民アリのエンセーテ栽培と利用」『季刊人類学』19-1
――――　1995 「品種の創出と多様性の維持をめぐるヒト―植物関係」『講座地球に生きる④自然と人間の共生』雄山閣
篠原　徹　2000 「海南島」『アジア・太平洋の環境・開発・文化　No. 1』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
――――　2001 「生物多様性と連関する生計維持機構の多様性」『アジア・太平洋の環境・開発・文化　No. 3―特集　海南島，変貌する村落社会と環境―』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
――――　2002a 「実践としてのエスノ・サイエンス―論文解題―」寺嶋秀明・篠原徹編『エスノ・サイエンス』京都大学学術出版会
――――　2002b 『野生と栽培をつなぐ植物たち』『人間文化 H & S』17号，神戸学院大学
蒋　宏偉　2001 「換金作物栽培と出稼ぎの村における生業の現状」『アジア・太平洋の環境・開発・化　No. 3―特集　海南島，変貌する村落社会と環境―』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
杉村和彦　1987 「『混作』をめぐる熱帯焼畑農耕民の価値体系―ザイール・バクム人を事例として―」『アフリカ研究』31
H. スチューベル著，平野義太郎編・清水三男訳，1943 『海南島民族誌―南支那民族研究への一寄與―』畝傍書房
田中二郎　1990 『ブッシュマン―生態人類学的研究―（新装版）』思索社
中南民族学院本書編輯組　1992 『海南黎族社会調査』広西民族出版
中尾佐助　1967 「農業起源論」『自然―生態学的研究―』中央公論社
――――　1977 「半栽倍という段階について」『どるめん』13
――――　1966 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
西谷　大　2001a 『豚便所―飼養形態からみた豚文化の特質―』国立歴史民俗博物館研究報告第90集
――――　2001b 「黎族と縄文人の美食家たち」『食は異なもの味なもの―食から覗いた中国と日本―』（財）歴史民俗博物館振興会
――――　2001c 「山地住民の生業における山の垂直利用とその変化」『アジア・太平洋の環境・開発・文化　No. 3―特集　海南島，変貌する村落社会と環境―』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
――――　2001d 「家財道具調査」『アジア・太平洋の環境・開発・文化　No. 3―特集　海南島，変貌する村落社会と環境―』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
――――　2002 「海南島リー族のネズミ捕獲弓」『動物考古学』18，動物考古学研究会
塙　狼星　2002 「半栽培と共創―中部アフリカ，焼畑農耕民の森林文化に関する一考察―」『エスノ・サイエンス』寺嶋秀明・篠原徹編，京都大学学術出版会
久馬一剛　1989 「焼畑」『東南アジアとアフリカ：地域間研究へ向けて』（海外学術調査コロキアム記録），海外学術調査に関する総合調査研究班。
福井勝義　1974 『焼畑のむら』朝日新聞社
――――　1983 「焼畑の普遍性と進化―民俗生態学的視点から―」大林太良編『日本民俗文化体系５山民と海人―非平地民の生活と伝承―』小学館
――――　1994 「自然の永続性：焼畑と牧畜における遷移と野火の文化化」『講座地球に生きる②環境の社会化―生存の自然認識』掛谷誠編，雄山閣
――――　1995 「自然を内在化する文化装置」『講座地球に生きる④自然と人間の共生―遺伝と文化の共進化―』福井勝義編，雄山閣

松井　健　1998「マイナー・サブシステンス―民俗世界における労働・自然・身体―」『文化学の脱＝構築―琉球弧からの視座―』榕樹書林
――――　1989『セミ・ドメスティケイション』海鳴社
宮崎　卓　2002「海南島の水田植生における植物社会学的研究」『アジア・太平洋の環境・開発・文化 No. 4』未来開拓大塚プロジェクト事務局，東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室

Journal of Asian and African Studies, No. 65, 2003

【資料・研究ノート】

フィリピン・ココヤシ栽培農村における生業の変遷

――ルソン島ラグナ州S村の事例――

藤 井 美 穂
(京都大学大学院)

Livelihood Change in a Philippine Coconut Farming Village:

A Case Study in Laguna province of Luzon

Fujii, Miho
Graduate School, Kyoto University

This study examines changing livelihood strategies in a village in Laguna province (Luzon, Philippines). It describes how people utilize economic opportunities that came about in a period of 70 years using an historical approach. The coconut industry, a major component of the Philippine economy since the beginning of the twentieth century, has directly affected the livelihood of this village. It changed from merely producing traditional coconut products such as coconut oil and lambanog (coconut wine) to production of copra, material for the coconut export industry.

Dependence, however, on one product did not arise since the village people, individually and collectively, sought other means of livelihood. They gradually adopted different activities from working in lowland farms to vegetable farming in the mountains. In addition, the land in the village is not solely planted with coconuts. There are fruit trees and crops (lanzones, bananas, root crops) which are also a source of livelihood.

The village is mainly composed of small land holders. Tenancy hardly exists. Through the years covering the American colonial period the three years of Japanese occupation and the post-war era (up to the end of the 60s), the people in the village showed capability to adjust to the changing economic situation of the country. These economic adaptations addressed the changing global and national market for the still major source of livelihood — copra production. This leads to the conclusion that this village economy is not necessarily dictated by national economic industries but by the economic opportunities and facilities offered by the surrounding areas. The study shows how people in the village responded to these opportunities.

Keywords: small holders, coconut farming, commodity product, livelihood change, Laguna province
キーワード：小農，ココヤシ栽培，商品作物，生業の変遷，ラグナ州

はじめに
１．S 村とその周辺
　１- １　ラグナ州
　１- ２　S 村
　１- ３　ココヤシ栽培
２．新しい時代の始まり（1903-1940年）
　２- １　S 村の成立
　２- ２　コプラの登場
　２- ３　S 村を取り巻く社会変化
３．日本軍の占領（1941-1945年）
　３- １　コプラ生産の停止
　３- ２　開墾と野菜栽培
　３- ３　ココナツ油とココヤシ蒸留酒
４．生活の再建（1946-1969年）
　４- １　フク団と食糧不足
　４- ２　コプラ生産の再開
　４- ３　低地稲作地帯の開発と出稼ぎ
　４- ４　山の開墾
おわりに

はじめに

本論は，フィリピン・ルソン（Luzon）島におけるココヤシ栽培小農の村を事例に取り上げ，商品作物経済と村を取り巻く地域の社会経済的な変化を視野に入れて，村の生業の変遷を歴史的に跡づけることを目的とする。そのことを通して，20世紀初頭のフィリピンにおけるココヤシ産業の成立と発展に伴い，村が商品経済に巻き込まれていく過程およびココヤシ栽培小農の経験を明らかにしたい。なお，ここでは，調査村が成立した1903年から，ココヤシ産業にマルコス政権が介入する以前の1960年代末までを扱う。考察する時間の幅を村の成立から約70年間としたのは，村の生業基盤であるココヤシ栽培の成立過程が顕著だからである。

ココヤシはフィリピンにおける主要な商品作物である。ココヤシの商業化は古く，アメリカ植民地支配が始まる20世紀初頭から本格的に開始された。アメリカへ輸出するコプラ（ココナツの胚乳を乾燥させたもの）を生産するココヤシ産業が成立したからである。現在，ココヤシ産業はフィリピンの代表的な農業関連産業であり，ココヤシは重要な商品作物である。1999年の時点で，フィリピンは世界市場におけるコプラ油の64%を供給し，ココヤシ栽培面積は全農地の３分の１を占めている（Department of Agriculture 2001, p.1）。ココヤシ栽培は一部においてプランテーションがみられるが，多くは小農経営である[1)]。調査村が位置するルソン島南タガログ地方のラグナ（Laguna）州は，19世紀半ば，ココヤシ蒸留酒の主要な生産地であり，アメリカ植民地期には同地方のタヤバス州（現，ケソン州）やビサヤ地方とともに，ココヤシ産業の中心地として発展した。現在，同州のココヤシ栽培地帯は農地面積の約70%を占め，丘陵地と山腹斜面に広がる。

これまでのルソン島の農村研究は主に低地稲作地帯の農村で行われ，低地を取り巻くココヤシ栽培地域は等閑視されてきた。同島で農村研究が活発に行われるようになったのは，1960年代である。第二次世界大戦中に共産党により結成されたフク団（Hukbong Mapagpalaya ng Bayan，戦後，人民軍と改称）は，戦後，ルソン島中部地方で農民を結集した。フク団による武装闘争は，農村の社会不安と農業生産の停滞を引き起こした。こうした時代的状況に対応し，ルソン島の農村研究は，フク団の活動の中心地であった中部平野の稲作地帯で行われ，研究の焦点は地主制度を軸とする農村の社会構造の把握におかれた（高橋 1969, Umehara 1974）。1960年代

1) 本論で記す小農とは自らとその家族の労働に依拠して耕作し，耕作地からの収穫で家族が生活を維持できる農民のことであるが，現実にはそれよりも零細な農民を含む（梅原 1992, p.17）。

半ば，稲の高収量新品種の開発を契機に化学肥料や農薬を投入し，機械力に依存した稲作が始まり，同年代後半以降は「緑の革命」と呼ばれる農業技術革新が普及した。そのため，1970年以降，農地改革と技術革新に研究関心が集中し，稲作農村の社会経済構造の変動に焦点があてられることになった（高橋 1977, 梅原 1978, Wolters 1984）。

ルソン島の農村研究は中部平野の他にラグナ州の低地稲作地帯でも行われ，農村の階層分化に関する研究（菊池 1978），在郷地主の村における土地所有と生産構造の研究などがある（梅原 1967）。速水と菊池は，梅原が1966年に調査した村について，1970年から30年間にわたる農業変化を研究した（Hayami・Kikuchi 2000）。彼らは「緑の革命」による低地稲作農村の農業経営上の諸変化の一つとして，収穫作業における高地からの雇用労働者の増加を取り上げた。この研究は低地稲作地帯に集中していた従来のルソン島の農村研究にはない新しいものである。しかし，これらの農村研究は食糧作物である稲作を重視し，商品作物のココヤシをほとんど扱ってこなかった。

このような研究状況を踏まえ，本論が高地におけるココヤシ栽培農村の生業の変遷過程を明らかにすることは，低地の稲作農村とは異なったルソン島の農村像を提示する重要な意味をもつと考える。

本論はフィリピンにおける現地調査と文献資料に基づくものである。現地調査は，2000年２月と３月，同年８月と９月，2000年12月と2001年１月に，ラグナ州ナカーラン町Ｓ村で行った。調査期間は合計６カ月である[2]。

１．Ｓ村とその周辺

１-１　ラグナ州

調査村Ｓが位置するラグナ州は，ルソン島中南部に位置し，広域行政区画の南タガログ地方に属する（図１）[3]。2000年のラグナ州人口は196万5,872人で，住民の大部分はタガログ語を母語とするカトリック教徒である[4]。同州はマニラの南東に位置し，州都サンタ・クルース（Sta Cruz）町はマニラから87キロの距離にあり，フィリピン最大のバイ（Bay）湖の南湖岸を西から東にかけて細長く弧状に囲む地域である（図２）。同州は，サンタ・クルースを中心に西部の低地と，州の総面積82.7％を占める南部と東部の丘陵地・山地に分かれる（Provincial Planning and Development Office 1998, p.10）[5]。気候は西部では雨季と乾季が明瞭で，東部とＳ村が位置する南部は１年を通して雨が多い。両地域の地形と気候の違いは経済活動にも影響を与えている。19世紀，西部では米とサトウキビを栽培し（Mallat 1983, p.84），東部と南部ではココヤシを栽培してココヤシ蒸留酒

2) 本論は，2002年１月に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士予備論文『フィリピン・ココヤシ栽培農村の社会変容―ラグナ州の事例から―』の一部である。

3) フィリピンは全国が１つの自治区と14の広域行政区（region）に分かれている。地方自治行政単位にあたるのは州（province），特別市（chartered city），町（municipality），小行政区（barangay）で，それぞれ公選の首長をもつ。最小の行政単位である村がいくつか集まって町ができ，この町が複数合わさって州となる。

4) 人口密度は１平方キロメートルあたり1,117人である。1995年から2000年の５年間における同州の人口増加率は4.08％で，人口増加率の全国平均2.36％を1.72％も上まわっている（National Census and Statistics Office 2000）。これは，1980年以降，首都圏に近い同州の西部工業団地や住宅団地の開発が進み人口流入が続いているからである。

5) 速水と菊池は，ラグナ州における低地稲作地帯を囲んでいる丘陵地と山を高地（upland）と記している（Hayami・Kikuchi 2000）。

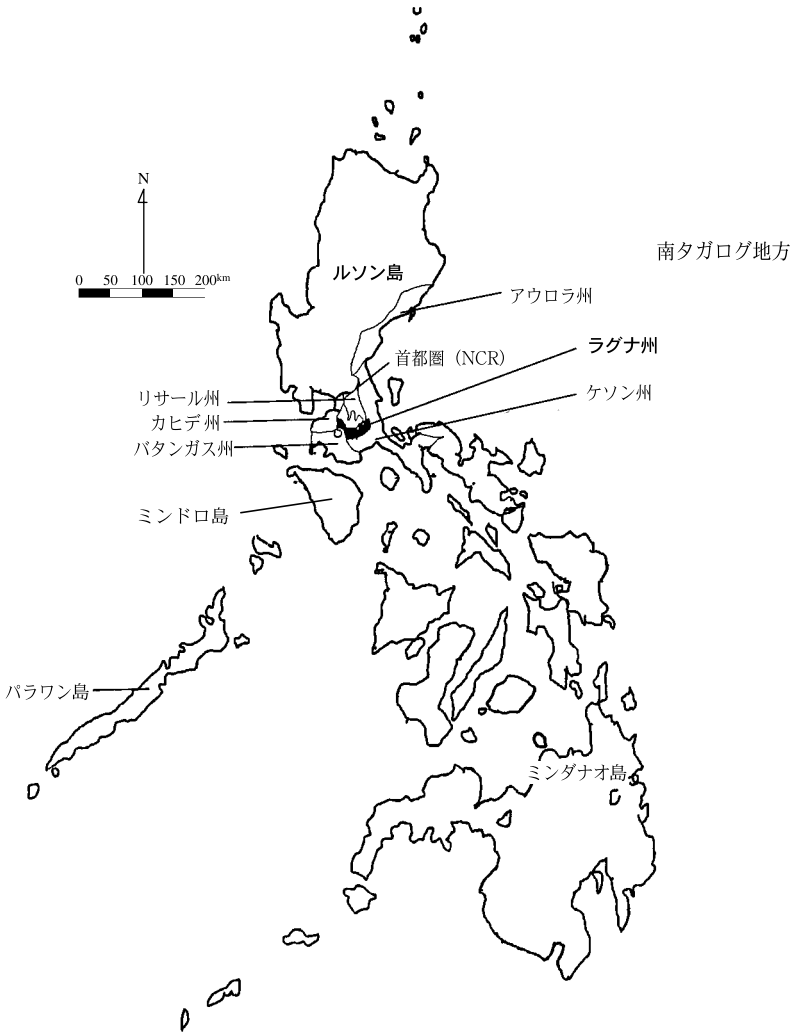


図1　フィリピン地図
出典（梅原 1995，p.49）に著者加筆

とココナツ油を生産していた（Mallat, 1983, pp.265-266)[6]。20世紀初頭のアメリカ植民地期には，アメリカへ砂糖とコプラ，コプラ油を輸出するためにサトウキビとココヤシ栽培がラグナ州で拡大した。現在，サトウキビ栽培地は工業団地となり，水田地帯は西部の低地からバイ湖岸に広がっている。東部と南部の丘陵地と山地はココヤシ栽培地帯である。

6) ココヤシ（*Cocos nucifera* L）の製品について様々な用語が使われるために，本論では以下のように用語を整理し，使用する。ココヤシの果実はココナツと呼ぶ。ココヤシから生産される油は2種類あり，コプラ（ココナツの胚乳を乾燥させたもの）から絞る油をコプラ油とし，ココナツ・ミルクから作るものをココナツ油とする。一般には，両者をココヤシ油と総称するが，生産方法と品質が異なるため，ここでは区別することにする。ココヤシ蒸留酒はココヤシの花芽を切った断面からにじみ出てくる樹液を発酵させ，その後蒸留した酒であり，フィリピンで一般的に知られているココヤシの樹液を自然発酵させた酒（tuba）とは異なる。

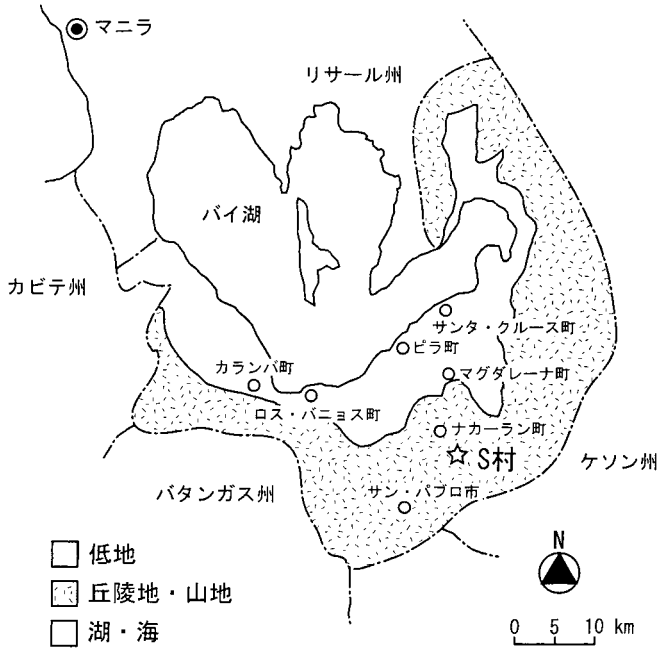


図２　ラグナ州の高地・低地地域図
出典（Hayami・Kikuchi 2000，p.2）に著者加筆

ラグナ州において工業地帯の占める面積は州面積17万5,973ヘクタールの1.5%，商業地域は１%にしかすぎない。一方，農地は州面積の48.7%を占め，内73%がココヤシ栽培地であり，ココヤシ栽培は同州の農業の中心である（Provincial Planning and Development Office 1998, p.10)[7]。こうした西部と東部・南部の相違はラグナ州の住民にとっても自明であり，調査村が位置する東南部のバナハオ山麓から山腹斜面のココヤシ栽培地域はラグナ州の人々からイタアス（itaas 高地）と呼ばれている。高地地域の住民は「私たちが低地の地主と小作人のような貧富の大きな差がないのは，小さな土地を持っているからだ」と語り，低地と高地を区別している。従って，本論で記す高地とは地域住民が称する高地であり，研究者や行政により設定された高地とは異なる。

1-2　S村

高地の標高320メートルにあるS村は，州都サンタ・クルースから21キロ離れたナカーラン町に位置する。ナカーランの中心である市街地と外を結ぶルートは２つある。同町から16キロの丘陵地のサン・パブロ市を経るものと，サンタ・クルースへのルートである。同町の住民は市街地をバヤン（bayan）と呼ぶ[8]。バヤンはスペイン植民地期にスペイン人が行政を円滑に行うために建設した町の中心地である。スペイン人は公園を中心にカト

7) 1999年のラグナ州のココヤシは1,000万870本で，樹齢が41年以上で盛年期を過ぎているのは735万9,942本，73.5%である。そのため，ココヤシ庁はココヤシの植え替えが必要であるとしている（Philippine Coconut Authority and Bureau of Agricultural Statistics 1999, pp.1-2)。
8) 本論では，ナカーラン町の市街地を住民の呼称に応じてバヤンと記す。一般的に，フィリピンでは市街地はスペイン語風にポブラシオン（poblasyon）と呼ばれる。

リック教会，地方行政のための庁舎を建て，その周囲に植民地官吏，現地人の有力者を住まわせ，バヤンを中心に町を形成した。現在，バヤンには役所，商店，市場があり，高地地域の経済・社会の中心地として重要な位置を占める。

ナカーラン町の面積は11,489.4ヘクタールであり52のバランガイ（barangay）により成り立っている。市街地は３つのバランガイから構成され，残り49のバランガイは農村部に位置する。2000年のナカーラン町の人口は４万8,727人，世帯数は10,708世帯である（National Census and Statistics Office 2000）。1993年の資料によると農地は町の面積の87%で，主要な農作物はココヤシである。農地の90%を占めるココヤシ園ではランサット，ランブータン，マンゴを間作栽培している（Nagcarlan Municipal Office 1993, p.70）。

S 村は，バヤンから約３キロの距離にある。S 村とバヤンの間には小型乗り合いバスと乗り合いオートバイが運行している。

S 村の S とはタガログ語で「分ける」という意味で，その名が示すように，村は隣接する B 村から分かれ，1903年に行政村として成立した（Nagcarlan Public School Teachers 1957, p.45）。村の面積は40ヘクタールで，2000年の調査時には142世帯から成り，人口は559人で男277人，女282人であった。ここでいう世帯とは一つの住居に住み生計を共にする者の集団である。村での世帯は夫婦とその子供，夫婦のどちらかの未婚のキョウダイを含むのが一般的で，１世帯が２組以上の夫婦で構成されることはない。結婚した者は独立の住居を持つべきとされ，住居がないために夫婦のどちらかの親と同居している場合は，生計を異にする別の世帯とみなされている。村地の大部分はココヤシ園と屋敷地で占められている。ココヤシ園は一世帯平均約0.2ヘクタールで，屋敷地は0.05ヘクタール以下である。ココヤシ園ではアンスリウム，ランサット，バナナ，タロイモが栽培され，アンスリウム以外は自給用である。屋敷地には菜園がなく，裏庭で現金獲得のための養豚が行われている。家屋の多くはセメントと木材を併用した平屋であり，140軒中，竹の家は６軒で内４軒が借地に建てたものであった。また，村人は村外にもココヤシ園を所有し，１家族が村内外に分散所有するココヤシ園の総面積は平均約２ヘクタールである。その他に畑や水田を村外に所有する者がいる。村人は海抜約600メートル以上のバナハオ山腹に１ヘクタール以下の畑を２，３カ所に分散して所有し，総面積は１戸当たり平均2.5ヘクタールであり，他にバナハオ山の国有地を畑地として利用している。山麓に所有する水田は１戸当たり１ヘクタール未満である。

村の142世帯の内，耕作地を所有し農作物を栽培する65世帯（46%）中，ココヤシ栽培世帯は61世帯で，他４世帯は野菜だけを栽培している。ココヤシ栽培世帯の内，17世帯は野菜栽培，４世帯は稲作を兼業している。これら65世帯の中には養豚や農業外の収入がある。

上記以外の77世帯（54%）も全く農業に関わらないわけではない。ココヤシ園を所有しない世帯の中にはココヤシ園管理やココナツの収穫作業を請け負う世帯がある。現在はココヤシ園を所有しないが，土地名義人の親が死亡すればいずれこれを相続する世帯もある。農業外職種につく人の中でも，仕事がない時期はココナツの収穫や野菜の植え付け・日雇い収穫労働をする場合がある。聞き取り調査では40歳以上の男はココヤシ栽培，コプラ，ココヤシ蒸留酒，ココナツ油の生産，ココヤシ樹液採取の経験があった。かつて，村ではココヤシ栽培の他にココナツ加工品を生産していた。だが，現在，村で見られるのはコプラと自家消費用のココナツ油の生産だけである。S 村は歴史的に小農経営によるココヤシ栽培村であり，現在70歳代，80歳代の高齢者は，彼らの父親が行っていたココヤシ栽培とココヤシ加工品の生産方法が，今もほとんど

変化がないと言う。高齢者の話と現在の村で行われているココナツ加工品の生産方法を参考にしながら，ココヤシ栽培について次に見てみたい。

1-3　ココヤシ栽培

ココヤシはタガログ語でニョグ（niyog）と言い，幹の高さは25メートルにも達する。ココヤシの樹齢は60年から70年である（佐藤 1983，p.4)[9]。１本のココヤシに年間約60個のココナツが成り，コプラ収量はココナツ１個から平均300グラムであるから，１年に１本のココヤシが生産するコプラは18キロとなる。１ヘクタールに100本のココヤシが栽培されていると，1.8トンが標準的なコプラの年間生産量である（阿部 1989, p.31, 佐藤 1983, p.54)。外皮が緑色の未成熟なココナツはブコ（buko）と呼ばれるが，外皮が褐色で成熟したものはココヤシと同様にニョグと呼ばれ，コプラ生産に使用される。

高齢者の話によると，1930年代のココヤシ栽培では，まず鉄棒状の農具〔棒の一方の先端が鋭利で他方がへら状になっているバレタ（bareta)〕で，直径，深さともに50センチの穴を掘り，１メートルに成長した苗を定植する前に，男がしゃがんで睾丸を穴の内側に触れさせた。これはココヤシの成長を願って行ったとされる。定植後数年間はココヤシの葉は短く，隣接する株と株の間は十分日光を通すため間作物の栽培ができる。小農経営ではココナツの収穫ができるまでの期間(約８年)，ある程度間作物で生計を補える利点がある。定植後は，ランサットとバナナを植える。種を栽植してから３年後，約1.6メートルのランサットの苗を７月にココヤシの間に移植する。次に，バナナの根本から出ている株を掘り起こしてココヤシとランサットの間に植える。最後に，タロイモ，キャッサバ，サツマイモを栽培する。ココヤシ園の除草は２カ月に１度行う。

ココナツの収穫は植え付け後，８年頃から始められ，15年で最盛期に達し，３カ月ごとに行う。収穫から運搬まで通常４人の男が分担して行う。ココナツの盗難を防ぐため，村人はできるだけ家族や親族だけでこの作業を行う。収穫作業に熟練し，信頼された者は，親族関係を問わず村内外から多数の仕事の依頼があり，コプラ価格が高い時には，収穫作業だけで生計が維持できた。長い竹棒の先につけた鋭利な鎌で地上から約20メートルの高さに成るココナツの房を切り落とす。

次に，収穫したココナツをココヤシ園の集積所に運搬し，そこでココナツの外皮を剥ぐ。ススド（susud）という外皮を剥ぐ道具は鉄製の鋤のような鋭利な刃が木製の三脚台の上に据え付けられている。鋭利な刃にココナツを突き刺し，ねじりながら外皮を剥がす。外皮を剥いだココナツは馬でコプラ生産所に運搬される。収穫から運搬までの４種類の作業に人を雇う場合，ココナツ１個につき価格の１割を各作業に支払うため，１個の価格の４割がこれらの経費となる。ココヤシ園がコプラ生産所から遠距離の場合は運搬費が加算される。現在，S 村のココヤシ園で収穫されたココナツは全て村のコプラ生産所に運ばれる。

村にはバヤンから村を通る道沿いに村人が所有するコプラ生産所が１カ所あり，コプラを乾かす大（縦 3.8 m，横 2.3 m），小（縦 2.8 m，横 1.7 m）の２つの炉がある。炉はセメント・ブロックとセメント材で作ってあり，炉の上にはスチールの棒が渡してある。

１日のコプラ生産量は大きい炉では4000個，小さい炉は2500個である。生産所の所有者が1979年に炉を作った当時，炉の中をココヤシの木の板で囲い炉の上に渡す棒は竹であったため，板と竹が燃えて壊れるたびに取り替え

9) 佐藤（1983, p.4）はココナツの生産がココヤシの樹齢が70年まで可能であるとするが，他方，フィリピン・ココヤシ庁は，ココナツの生産の盛年期をすぎている樹齢50年のココヤシは伐採して栽培すべきだとする（Philippine Coconut Authority and Bureau of Agricultural Statistics 1999, pp.1-2)。

る必要があったという。コプラの生産方法については後述する。

1940年代末まで，村のココヤシ園には樹液採取場と蒸留所があった。その後，蒸留所はB村に移された。現在，村人はB村の蒸留所で蒸留酒を生産している。

樹液採取場はカリタン（karitan）と呼ばれ，ココヤシの木と木の間に足がかり用の竹と手すり用の２本の竹が平行して張り渡してある 。樹液採取人はココヤシを１本ずつ登り降りせずに，木の間に渡された竹の上を移動して樹液を採取する。採取された樹液は蒸留所に運ばれる。

蒸留所には銅製の蒸留機が１機設置されており，数人が共同運営している。現在，蒸留機の使用は共同運営者に限られ１日単位の利用者の順番があり，使用料を払う。蒸留酒の生産は共同運営者または酒職人を雇用して行われ，１年間に集金した使用料は蒸留機の修繕と買い換えに利用し，蒸留機は５年おきに新しくする。

現在，村の生業は多様な職種を組み合わせて営まれているが，ココヤシ栽培が基盤となっている。村の成立から生業がどのような変遷を経たのかを，行政資料やフィールドにおける高齢者からの聞き取り調査を踏まえ，村人の経験を中心に再構成し，振り返ることにする。

２．新しい時代の始まり（1903-1940年）

２-１　S村の成立

S村の歴史に関する文献資料として，『ナカーラン町の村の歴史と文化』があるが，村の成立年と村に伝わる諺しか記載されておらず，村の具体的な歴史記述は乏しい（Nagcarlan Public School Teachers 1957）。また，この資料以外に村の歴史に関する文献は存在しないのが現状である。従って，以下ではS村と周辺の村々で聞き取った資料をもとに，村の歴史を再構成することを試みる[10]。

村の成立について語れる高齢者はいなかったが，祖父母や両親からスペイン植民地期の山腹斜面の様子を伝え聞いていた者がいた。当時，山腹斜面の土地は未開拓で，バヤンの少数の人により占有されていたが，希望者には土地が無償で分け与えられた。高齢者の祖父母世代は，土地を求めてバナハオ山腹斜面を開墾した。祖父達は樹木を伐採した後，その区画の周囲に生えている木の幹に斧で切れこみを入れて印しをつけ，土地の占有権を示した。

S村がB村から独立し，行政村として成立するのはアメリカ期（1899-1941年）の1903年であり，村の歴史はアメリカ植民地支配とともに始まった。1903年の村の人口は142人で，村が成立した20世紀初頭，山腹斜面にはすでに４つの行政村が存在していた（United States Bureau of the Census 1905, p.173）。1907年生まれの古老が祖父から聞いた話によると，1900年代初頭からバナハオ山の開墾地にココヤシが栽培されたが，高所は暴風の被害にあい，さらに病害虫，干ばつ，台風によって多くのココヤシが枯れた。古老の記憶では，1910年代末までには，ココヤシ，ランサット，バナナ，コーヒーがS村とその周辺地域を覆っていた。ココヤシ栽培に適さない山の土地は畑として利用され，タロイモ，キャッサバ，サツマイモが栽培された。山腹のココヤシ園では間作物のランサット，根菜類が植えられていた。

現在，村に隣接する山麓の西北部地域は緩

10) 聞き取りをした70歳以上の高齢者の人数は，S村18人および近隣の３村12人の合計30人である。その内，２回以上の聞き取りをしたのは10人である。村人達との出会いを通して特に印象に残った人は，A（男　1917年生）とF（女　1921年生）であった。２人は記憶が明瞭で観察力に優れており，筆者の聞き取りに何回も応じてくれた。２人の話は，S村の歴史を再構築するうえで基本となった資料である。

やかな傾斜地で，水田が存在する。数人の高齢者の親世代はこの地域に水田を所有していたが，その経緯は明らかでない。その他に，村人は山腹斜面，S 村，近隣村に土地を所有していた。主生業はココヤシを栽培し，現金収入源としては蒸留酒やココナツ油の生産を行い，他に自給用の根菜類や果樹を栽培していた。蒸留所は村にはなく，村で樹液を採取し，バヤンの近隣村に所有するココヤシ園に建てた蒸留所で酒を生産していた。蒸留所の所有者は酒や根菜類を運搬する馬を所有し，酒職人を雇っていた。雇われた樹液採取者は馬を所有していなかったため，蒸留所まで天秤棒で樹液を運んだ。他方，ココナツ油を生産する者もおり，バヤンの石鹸工場に馬で運搬した。S村で馬を所有していた家族は限られていたが，村にはラグナ州の低地に見られる地主と小作人のような貧富の差がなかったという。

1920年代初頭，S 村では屋敷地を兼ねたココヤシ園でコプラを生産する家族がいたが，まだ村ではコプラ生産は一般的ではなかった。

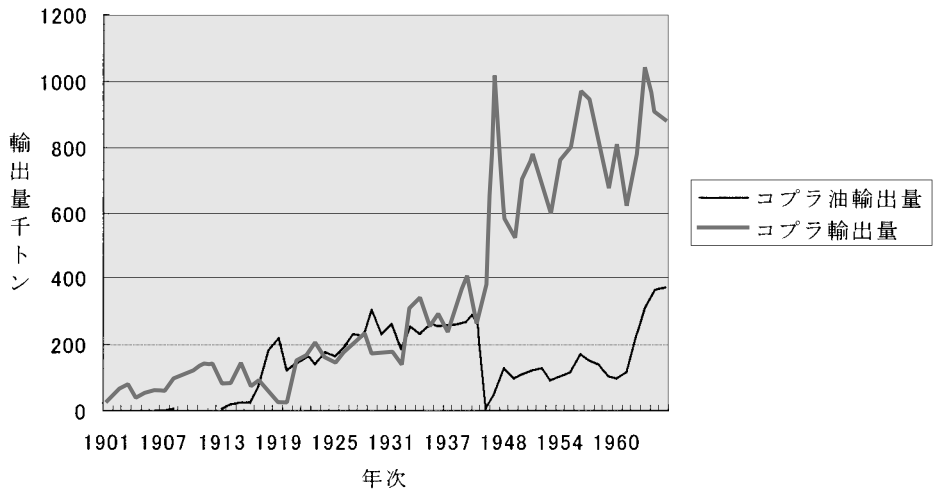
2―2　コプラの登場

コプラ（copra）はココナツの内胚乳を乾燥したもので，搾油してコプラ油を作る。コプラが商品作物として国際市場に登場するのは，19世紀半ばである。19世紀末，フランス人ムーリエがバターの代用品としてコプラ油からマーガリンを製造した（松井・杉村 1998, p.94）。高騰していた動物性油脂よりも，コプラ油から安価にマーガリン製造が可能となったため，西ヨーロッパ諸国がコプラを輸入した（Magat 1991, p.1）。ヨーロッパ市場のコプラ需要の高まりにより，フィリピンではココヤシはコプラ生産のための商品作物となるにいたった。

20世紀初頭のアメリカ植民地支配の確立から1930年代までの間に，フィリピンの外国貿易は輸出入ともアメリカ市場に依存する形となった。アメリカは1898年12月，スペインとの戦争後，パリ講話条約を締結し，フィリピン諸島の統治権を修復した。同条約から10年後，アメリカのフィリピン向け輸出関税の制約がなくなると，1909年にアメリカ議会でペイン＝オルドリッチ関税法が制定され，アメリカの商品は無税でフィリピンへの輸出が可能となり，輸出量にも制約が課せられなくなった。1913年，アンダーウッド＝シモンズ関税法が成立し，フィリピン産タバコ，砂糖の輸出量の割当量制限は全て撤廃され，フィリピン・アメリカ間の貿易は無関税となった。1910年代後半からフィリピンの輸出農業はアメリカへの依存度を深めながら急速に成長し，特にコプラ，コプラ油と砂糖の輸出増大が著しかった。コプラ輸出量は1901年の３万2,500トンから1912年には14万2,800トンに増加した（Nyberg 1968, p.225）（グラフ）。コプラ油の生産輸出拡大にはアメリカ資本が中心的役割を果たし，1906年，米国資本による最初の近代的な搾油工場がマニラに建設された（Sullivan 1991，p.193）。

コプラ生産が始まる以前の19世紀末には，すでにラグナ州ではココヤシ栽培が盛んであった。ルソン島の６州がココヤシ蒸留酒の主要な生産地で，984ヵ所の蒸留所があり，その約３分の２の蒸留所がラグナ州に集中し，多くは高地のナカーラン，マハイハイ，リリウにあった（Mallat 1983, pp.265-266）[11]。1903年頃のラグナ州の産品は，蒸留酒，ココナツ油から製造する石鹸の他，タバコ，精米，木彫品，帽子やゴザ等の手工芸品，陶器で，近隣州とマニラに供給していた（Gleeck 1981, p.84）。ペイン＝オルドリッチ関税法の制定後，1910年代初頭にはラグナ州でコプラ生産を目的とするココヤシ栽培地の拡大が始まった。1912年の同州のココヤシ栽培面積は４万5,000ヘクタールで，95％はコプラ生産

11)　６州は，南タガログ地方のラグナ州，タヤバス州（現，ケソン州），中部地方のパンパンガ州，パンガシナン州および，ビコール地方のカマニネス州，アルバイ州である。



グラフ　フィリピンにおけるコプラ・コプラ油の輸出量の推移（1901-1965年）

出典（Nyberg 1968，pp.225-226.）より作図。

のためであり，翌年には６万ヘクタールに増加し，同州の総面積の34%を占めるに至った（Gleeck 1981, p.86）。ラグナ州のココヤシ栽培地が飛躍的に拡大した頃，第一次世界大戦によるコプラ油特需が起こり，アメリカで植物油製造業者がコプラ油生産に参入した結果，コプラ油とコプラのアメリカへの輸出が伸びた。さらに，1914年にパナマ運河が開通したことにより，フィリピンからアメリカ東海岸までの航海距離が短縮され，輸送費が削減されたため，東海岸の市場へのココナツ加工品の供給が増加した（Sullivan 1991, p.193）。この時期にラグナ州ではココヤシ栽培農民によるコプラ生産が定着した。

コプラは天日乾燥が最も単純な方法であるが，1908年当時，ラグナ州では炉による乾燥が盛んであった（Byars 1908, p.517）。当時の記録からコプラ生産所の形状を見てみよう。

> コプラを乾燥させる炉は長方形で，小屋の土間床に掘る炉の深さは１ｍで短い辺は１ｍから２ｍ，長い辺は小屋の長さに応じて決める。長方形の炉の短い辺にそって何本も細い棒を並行に渡して穴をおおう。棒と棒の間には小さな隙間をあけておく。この上に外皮をとって半分にしたココナツを積み上げる。そして，穴の中の火から出る煙で燻してココナツを乾燥させる。ココナツの外皮を剥ぐ道具は，台座にナイフを曲げたような刃が取り付けてある。その刃を使って燻したコプラは簡単に殻から取り出すことが出来る。その後，コプラを少し天日で乾かして袋につめ，市場に運ぶ。このような小さなコプラ生産所はラグナ州とタヤバス州のココヤシ園の中に散在しているのが見られた（Byars 1908, p.517）。

コプラはグリセリンの含有量が高く，爆薬を製造するためにも不可欠な商品であったため，第一次世界大戦中，欧米諸国ではコプラ油の需要が増大し，価格が高騰した。戦争により船舶が不足したため，かさばるコプラをフィリピンで搾油し，アメリカに輸出するようになった（Sullivan 1991, p.194）。欧米諸国のコプラ油の需要に応じ，1916年に設立されたフィリピン国立銀行の融資を中心に搾油工場建設への投資が行われ，フィリピンではコプラ油の生産が拡大した。1915年まで１カ所であった搾油工場は，1918年までに41カ所に

増加した（Kwok-Chu 1999, p.56）。国内で生産するコプラだけでは不足をきたし，オランダ領東インドのスラウェシ島のマカッサルからもコプラを輸入した（三神 1921, p.126）。第一次世界大戦のコプラ油の需要増大により，フィリピンではコプラからコプラ油へと輸出の中心が移行した。コプラ油の輸出量は，1913年から1919年まで増加し続け，同年には過去最高の13万9,942トンとなり，1913年の5,010トンの28倍に達した（Hawes 1984, pp. 77-78）。

しかしながら，コプラ油ブームは継続しなかった。第一次世界大戦後，ヨーロッパ諸国の搾油所でコプラ油の生産が再開されると，フィリピンの搾油産業は不況に陥った[12]。1920年には，コプラ油輸出量は７万7,000トンに減少し（Hawes 1984, pp.77-78），搾油工場が倒産した。工場の統廃合後，1926年には７カ所の搾油工場だけが生き残った（Kwok-Chu 1999, p.56）。この状況を受け，1921年アメリカは緊急関税法を制定し，免税品であったコプラ油に１ポンド当たり2.67セントの関税を賦課する一方，フィリピン産コプラ油に限り植民地特恵として免税を維持したため，フィリピンのコプラ油はアメリカ市場を独占することになり，輸出先はアメリカに集中した。このような背景のもと，1928年，イギリス資本の会社がレッド・ヴイ（Red V）搾油工場をナカーランから約４キロに位置するラグナ州の低地マグダレーナに建設した。搾油工場がナカーランの近距離で操業したことにより，同町のコプラの需要は増大した。

S村では，1920年代末には，すでにココヤシ園にコプラ生産所が３カ所存在した。親戚や友人同士の４，５家族が共同で炉を作りコプラ生産所を運営し，その１家族が土地を無償で提供した。生産所を持たない家族は，炉の燃料となるココナツの外皮と殻を提供すれば，生産所を無料で使用できた。炉を扱うのは男であった。炉の作り方は簡単で，土地があれば建設費用はほとんどかからなかったため，男は炉を作る作業を手伝う傍ら，作り方を覚え，自分達で炉を作った。炉の燃料はココナツの殻と外皮のため燃料代は不要であった。村で生産したコプラはジュート袋に入れ，男が馬でバヤンの仲買人に運んだ。コプラはバヤンの仲買人によりマニラやマグダレーナの搾油工場に運搬された。

1930年代の世界不況はフィリピンのココヤシ産業に大打撃を与えた。1934年には，コプラ価格は100キロ，５ペソまで下落した。この価格は，1919年の好景気の100キロ，35ペソの７分の１以下であった。だが，世界恐慌の時でさえ，ラグナ州とタヤバス州（現，ケソン州）のココヤシ産業従事者は他産業で働く者に比べて経済的被害が少なかったと言われるが，それは２州のココヤシ栽培農民の多くが小農だったからである（Gleeck 1981, p. 94）。例えば，S村のAは，当時，ココヤシ栽培を中心に野菜と米を作る小農であり，村でコプラ生産所を借りてコプラを生産し，バヤンの仲買人に売っていた。Aはコプラ価格の下落による現金収入の激減に対し，コプラからココナツ油の生産に切り替えることで，現金収入を得ることができた。

> 私が15,6歳のときだったと思うが，バヤンのココナツ油搾油所で油を絞ってもらったことがあった。搾った油はバヤンの教会の裏手にあった石鹸工場に持っていった。他に，低地のマグダレーナ，サンタ・クルース，パグサンハンに運び，

12) コプラ油の輸送は，輸送用のスチール製ドラム缶をアメリカから輸入しており，コプラよりも輸送経費が高くついたため，ヨーロッパではコプラ油よりもコプラの方が需要が高かった。また，ヨーロッパでは，コプラの絞り粕であるコプラ・ケーキ（copra cake）とそれを粉砕したコプラ・ミール（copra meal）が家畜や家禽の飼料として消費された。

仲買人に売った。当時，油は木製の樽に入れて馬で運んでいた[13]。馬１頭と１人が１組となって，５組が一緒になって油を運んでいた。マグダレーナでは，ココナツ油を貯蔵していて，鉄道でマニラへ運んでいた。当時，鉄道はマニラからマグダレーナ，パグサンハンまで通っていた[14]。（A：男，1917年生，83歳）

A はココナツ油をバヤンの仲買人に売らずに石鹸工場や低地の仲買人に運んだ。介在する仲買人が多いほど農民の利益が少なくなるため，仲買人の介入を避ける方策であった。

コプラ価格は変動が激しかったが，S 村ではコプラによる現金収入だけで生活ができたという。収入源が蒸留酒からコプラに移行したにもかかわらず，村人はコプラ生産だけに特化しなかった。むしろ，コプラ生産とともに蒸留酒の生産に励んだ。既述したように，以前，村人は蒸留所を村外に所有していたが，コプラ生産が軌道に乗ると，親族や友人同士の３，４家族が金を出しあい村の中に蒸留所を建てて，共同で運営し，蒸留所を持たない村人は，蒸留機の使用料を払えば利用できた。村には蒸留所が２カ所あり，主にバヤンの顧客に酒を運搬した。村では，生産所を所有できない者でも，生産所を利用できる互助が存在していた。コプラや蒸留酒の生産は主に男が行ったが，男女が共同で行う場合は夫婦単位であり，女だけがこれらの生産に従事することはなかった。

2-3　S 村を取り巻く社会変化

ラグナ州のココヤシ産業の発展にともない，コプラ生産が盛んとなったナカーランの経済は向上した。橋，道路などのインフラ整備が1910年末から始まり，特にバヤンが大きく変化した。まず，1918年に電気が通り，1919年には公立小学校が建設された。1920年には水道が引かれている。1920年代の初頭になると，発電機を使った映画館や，闘鶏場が建てられた。バヤンの近郊に建てられたラグナ州で最大規模の闘鶏場は，日曜日と祭日にはラグナ州全域から人々が押し寄せてすし詰めの状態であったという。

S 村においても，1926年に小学校が設立された。小学校が設立される以前は，S 村の H という男が母親の家で子供を集めて読み書きを教えていた。当時は，S 村小学校は２学年までで，教育を継続する子供は，近隣の SP 村の小学校へ通った。村の現在70歳代，80歳代の高齢者の中には，バヤンの小学校へ通った者がおり，英語を話すのが上手で読み書きもできる。だが，S 村の小学校を終えた人は，英語が全くできない。このことから，バヤンの小学校では英語教育に力を入れており，S 村とバヤンの小学校では教育の格差があったことがわかる。バヤンでは，裕福な家庭の子供は男女の区別なく小学校を卒業してから州都サンタ・クルースの公立高校で教育を受け，その後，マニラの大学に進学した。バヤンでは裕福な家庭だけに限らず，一般的に子供の教育に熱心であった。

しかし，S 村では，子供は小学校４年を卒業すれば良しとされた。卒業後は両親と一緒に農作業をしなければならなかった。女子は，教育よりも結婚が期待されていた。このことは，女子よりも男子に教育が必要と考えられていたのではない。男子も小学校を卒業するとすぐ両親と農作業に従事し，子供に対して

13) 実際は樽ではなく，木の幹をくりぬいて作った容器であった。当時，高地地域の村には，木製の洗濯用のたらいや，木臼を作っていた人がいた。

14) ラグナ州には２鉄道が開通していた。南部本線（Main Line South）は，マニラからビコール地方アロネロス＝ラガイ（Aloneros-Ragay）の全長464キロであった。1909年１月マニラ＝カランバ間，1911年６月マニラ＝サン・パブロ間であった。もう一つは，サンタ・クルース支線（Santa Cruz Branch）で，1912年１月カランバ＝マグダレーナ間，同年12月カランバ＝パグサンハン間の46キロが開通した（Corpuz 1999, pp.49-50）。

読み書き以上の教育は必要とは考えられていなかったのである。

子供が期待される仕事は，７歳頃，12歳頃，15歳頃の３期の年齢層により異なった。子供は７歳頃になると男女の区別なく，野菜栽培，水田の草取り・収穫時に働き，根菜類の菓子作りを手伝った。12歳頃，男児は野菜栽培，稲作の他に父親の仕事を手伝いココヤシ栽培，ココナツ加工品の生産に関わった。女児はココヤシ栽培には関わらず，両親と一緒に野菜栽培と稲作に従事するほか，菓子を作り，母親と売りに行った。子供は12歳頃から男女による異なった仕事を行い，同性同士で仕事をした。男がココヤシ栽培の全般を担うようになるのは15歳頃からで，生産物を馬で運搬するようになった。運搬にも年齢の相違があり，男児はパサノ（pasano）と言い，１本の棒を肩にのせ，後ろに生産物の入った袋をぶら下げて運んだ。15歳になると男は天秤棒（balangwit）で運搬し，女は頭上運搬（sunong）を行った。

1930年以前，バヤンからサン・パブロとサンタ・クルースへの交通手段は馬と２輪の馬車であった（De Paz 1999, p.52）。1930年に，トラックやバスがバヤンを通り，町の外とのアクセスが容易になっても，村では，ナカーランの外へ行くことは一般的ではなかった。女の間では特にそうであった。しかし，夫を亡くした妻の中には，C の母親のように生計を立てるためにタロイモを原料とした菓子を作り町の外へ売りに出かけた者もいた。

> 13歳から16歳の時，菓子（kalamay）を作る母を手伝った。母は自分で栽培したキャッサバやタロイモでスマン（suman）を作った[15]。村からバヤンまで歩き，バヤンからトラックに乗って，土曜日はサン・パブロ，水曜日はサンタ・クルースへ母と二人で売りに行った。月曜日はマハイハイまで歩いて売りに行った。（C：女，1914年生，86歳）

タロイモやキャッサバで作った菓子は，午前と午後に軽い食事をするメリエンダ（merienda）や夕食に多く用いられた。C の母親が菓子を販売したのは，サン・パブロやサンタ・クルースの市日である。これらの町は人口が多く，市は大きく活況を呈しており，菓子の売れ行きはよかった。トラックやバスに乗りバヤンの外に行けるようになったことは，C の母親のように一人で稼がなければならない女に，新たな収入を得る機会を与えた。C の母親は，土地を所有し，菓子の原料となるタロイモとキャッサバを栽培することができたため，生計が維持できた。別の見方をすれば，村ではココヤシ栽培，コプラ，蒸留酒の生産は女の仕事ではなかったために，菓子の販売しかなすすべがなかった。村のこれらの生産所を所有していなくとも，これを利用できる互助があるにも関わらず，寡婦にはその互助が全く適用されなかったのである。だからこそ，C の母親は村の外で生計を立てようとしたのである。

バヤンの経済的な発展に伴い市場が活況を呈すると，村人は従来のタロイモやキャッサバの他にトマト，カボチャ，トウモロコシを山の畑で栽培し始めた。自家消費以外の野菜を，男は天秤棒，女は頭上運搬で運び，バヤンの市日に売った。客に直接野菜を売るため仲買人は介在しなかった。また，女や子供も根菜類から菓子を作り，バヤンで売り始めるようになった。

1930年代は世界恐慌の打撃を受けた時期もあったが，，ラグナ州はココヤシ産業で経済的に繁栄した時代であり，村ではコプラ生産だけでも生計が立てられるようになった。しかし，1940年代初頭から始まる日本占領期には，村人は主生業であったコプラが売れなく

15) スマンはもち米あるいはキャッサバやタロイモにココナツ・ミルクと砂糖を入れて混ぜたものを，ニッパヤシの葉を筒状に巻いたものの中に入れ，ゆでたものである。

なり，主要な現金収入源を失うこととなるのである。

3．日本軍の占領（1941-1945年）

3-1　コプラ生産の停止

1941年12月８日，太平洋戦争の勃発と同時に，フィリピンは日本軍の侵略を被った。1942年１月２日，日本軍はマニラへ入城し，翌日から軍政を開始した。以後，1945年８月まで，フィリピンは３年８カ月に及ぶ日本の占領支配を受ける。フィリピンの工業はラミー麻，綿花，マニラ麻，コプラと油関連産業に限られ（Jose 1998, pp.177-178），企業と工場は日本軍に接収され，軍の許可なしには操業できなかった。

1942年７月，フィリピン・コプラ統制組合が設立された。軍政当局の監督下で操業するこの組合の目的は，コプラ生産者から独占的にコプラを買い占めることであった。同年，農民のコプラ生産を１カ月間援助するコプラ増産隊が結成され，南タガログ地方に１千名が派遣され，ラグナ州のサン・パブロには240名が派遣される予定であった（マニラ新聞 1942年12月19日）。1943年３月５日付『マニラ新聞』はコプラ統制組合が，フィリピン経済と日本化学工業にとって必要なコプラ生産増強を直接農民に呼びかけるビラを配布するという記事を掲載している[16]。ビラには，「コプラ増産につとめよ，コプラ一片は実に新比島建設の一礎石である，即ち新比島建設の鍵はコプラの増産にある」と記され，コプラ生産が国家建設に重要だと強調されている。同年３月28日付の同新聞のコラムは，「比島人の一大生活支柱―マニラの椰子油生産世界一」の見出しで，マニラのP・M・C（Philippine Manufacturing Company），P・R・C（Philippine Refining Company）等の大小の工場が日本占領期前と同様に昼夜操業を続け，コプラ油生産が世界一で，コプラ油から燃料用油，食用油，石鹸等の多様な精製が行われていると記載している[17]。『マニラ新聞』はコプラ増産隊や増産宣伝の計画を記載したが，その実行に関する記事は見あたらない。いずれにしても日本軍政がコプラ増産に力を入れようと試みていたことが見て取れる。しかしながら，以下に記すように，コプラ増産計画はS村やナカーランでは全く実施されなかったことが推察される。

ナカーランのバヤンではトラックを所有する仲買人がコプラのかわりにココナツ油をマニラの搾油工場に運んでいた（De Paz 1999, p.67）。現在，S村に住むUは，当時ココナツ油を運搬するトラックの運転手であった。

> バヤンの仲買人がマニラのパコにあるP・R・Cに油を運んでいた。この油はコプラから作るのではなく，ココナツの果肉（胚乳）を絞って作ったココナツ油だった。油が入った15本のドラム缶を運んだ。私は仲買人に雇われた運転手だった。トラックはガソリンがなかったので，ウリン（uling，ココナツの殻で作った炭）を燃やして動かした。１週間に３日ぐらいマニラへ行った。マニラからバヤンに帰る際には，マニラのビストリアの闇市で中国人から精米，赤砂糖，パノチャを買い，ココナツ油が入っていたドラム缶の中に入れて運んだ[18]。ドラム缶は検問所で調べられるため，物資は真ん中の列のドラム缶に入れた。日本兵は並んでいる外側のドラム缶しか調べなかった

16) 1942年11月に第１号が発刊されたマニラ新聞は日本人を対象とした日本語の新聞で，朝刊だけの１枚の新聞であった。

17) 当時，フィリピンではラードや落花生油を上海や香港から輸入していた。P・M・Cは1913年からコプラを商い，翌年に搾油を開始し，1919年にはショートニングの製造を始めた。

18) Panocha（パノチャ）はスペイン語で，タガログ語ではパヌチャ（panutsa）と言い，半分に割ったココナツの殻に糖蜜を入れて固めたものである。

からだ。砂糖と米はバヤンの市場の店に売った。（U：男，1924年生，76歳）

P・R・Cは，1938年からコプラ搾油を行い，植物油脂，マーガリン，洗濯石鹸の製造を開始し，他工場と同様に1942年１月に日本軍に接収された。P・M・Cは，1944年に石油不足により閉鎖された（アキノ・バイチョン・ティグラオ 1996, p.328）。同様にP・R・Cも石油不足により閉鎖に追い込まれたと推測されることから，同年，バヤンでは搾油工場へのココナツ油の運搬は停止したと考えられる。1944年頃まで，バヤンからマニラへ輸送されたココナツ油は全てバヤンの生産所が供給していた。

コプラが売れなくなったS村では，コプラ生産を停止し，従来からのココヤシ蒸留酒生産を継続した。その他に，村ではココナツ油を生産するための生産所が親族によるバヤニハン（bayanihan，相互扶助慣行）で３カ所建てられた[19]。ココナツ油はバヤンの石鹸工場へ運搬された。ココナツ油生産所には，削ったココナツの内胚乳を絞る木製の長さ約1.5 m，幅約20 cmの細長い２枚の厚い板の万力（hapitan）が設置された[20]。村ではカビヤオ（kabiyaw）で削った果肉は，水に浸してから竹籠に入れて万力で絞った。絞った液を煮た透明な液がココナツ油である。

バヤニハンに参加した人は生産所で働くことができ，その報酬は主にココナツ油で支払われた。彼らは生産所で得たココナツ油から自家製の石鹸を作り，村内のみならず近隣村やバヤンに売りに行った。

3－2　開墾と野菜栽培

フィリピンは戦前から食糧の自給ができず，主食の米はタイからの輸入で補っていた。日本軍がフィリピンの船舶に軍需物資の運搬を強制したため，フィリピンには米を運ぶ船舶がなかった。しかも，数十万の日本兵が少ない食糧の大部分を消費していた（南條 1995, p.165）。日本軍は米とトウモロコシの生産増加を目指し，灌漑改善，高収量品種の使用，病害根絶等の５ヵ年計画を立てた。しかし，この計画は実施されず，日本軍は作付面積増大による穀物増産をフィリピン人に行わせた。日本軍は焼畑農業を許可し，未耕作地の開墾を命じ，収穫高の１割を土地税として政府に差し出すならば，不在地主の土地を誰でも取得できるとした。州知事や市長には農民に配給する種が与えられ，食糧増産計画の活動結果を内務部や農商部に報告する義務を負った（コンスタンティーノ 1979, pp.111-112）。

ナカーランでは1943年８月14日，町長名で農商部の食糧増産計画の実行をするための行政令を発布した（Nagcarlan Municipal Council 1943, p.20）。同行政令では食糧増産計画のために米，根菜類，豆の栽培を奨励している。村人は食糧を得るためにバナハオ山と隣接するサン・クリストバル山を開墾し，焼畑でタロイモ，キャッサバ，サツマイモ，陸稲を栽培した。村の女達はグループを組み，高地のリリウへ根菜類を売りに行った。女達の販売方法は従来の市場で買い手を待つ売り方ではなく，買い手を求めて出向く訪問販売であった。

3－3　ココナツ油とココヤシ蒸留酒

フィリピン国内の食糧不足の要因は，日本軍による米の増産計画が病虫害の発生，早魃，天候不順による自然災害，気候風土に不適な品種導入により失敗したからである。また，

19) バヤニハンは相互扶助慣行のことである。道造りや用水路清掃等の村をあげて行われる共同労働から田植え，収穫の農作業における相互労働交換，家屋の建築，出産，婚礼，葬儀に際して親族間，友人，隣人の間で行われる生活面の助け合いまでが含まれる（梅原 1992, p.276）。

20) 万力によるココナツ油の生産はすでに19世紀末に行われていた。当時，フィリピンを旅行したアメリカ人フォーマンがココナツ油の作り方を記述しており，S村の生産方法と類似している（Foreman 1899, p.358）。

戦火による農地の荒廃，ゲリラの食糧輸送の妨害，農民の作付け・収穫・売り渡しの拒否，日本軍が発給した軍票に対する不信から生じた販売拒否によって，食糧不足は悪化の一途をたどった。食糧不足に加えて物価の上昇は食糧事情を逼迫させた。戦前の１ペソ紙幣と1942年の軍票の交換率が同額であったことから，日本占領期前半，物価は安定し，軍票が交換手段として機能していたといえる。だが，軍票の交換率は，1944年に１対90，1945年には１対120となった（Jose 1998, pp.182-183）。軍票の価値は物資不足によるインフレで日本軍が大量の軍票を発行したために下落した。日本軍は価値の裏付けのない軍票を濫発して物資の調達をはかったため，物価は戦前の百倍，千倍に上昇した（池端・生田 1977, p.133）。1943年11月の風水害が食糧事情をさらに悪化させた。災害による食糧難と軍票の貨幣価値の喪失が重なり，ラグナ州では食糧が不足した。

1944年，日本の陸海両軍が「比島作戦」に備えて物資の獲得競争を開始してから，物価上昇は極限状況に達した（池端・生田1977, p.133）。サンタ・クルースの市場では戦前１サック５ペソの米が5,000ペソというけたはずれの値段で売られた（Fernandez 1998, p.145）[21]。食糧不足が深刻な状態になった日本占領期後半，ピラ一帯はラグナ州の主要な米の生産地であったため，低地や高地から米を買うために人々が訪れるようになった。

日本占領期後半，ナカーランでは疎開が度重なり，人々は水田やココヤシ園で耕作できなくなり，食糧不足が深刻な状態となった。従来，米の自給ができないＳ村では米の不足は危機的な事態であった。村人は軍票を持っていたが，全く利用価値がなかった。

> 日本占領期は収入も食糧もなかった。日本の紙幣はバッグにいっぱいあったのに，商売をしている人はこの金を全く受け取らなかった。（A：男，1917年生，83歳）

米はすでにナカーランの水田地帯にはなく，低地のピラしかなかった。ピラで米と交換できる村の生産物はココナツ油，蒸留酒，根菜類であった。村の３カ所のココナツ生産所では，ココナツ油をピラに運び，米と交換するようになった。更に，米と交換するココナツ油の生産を行うために，隣人同士によるバヤニハンでココナツ油生産所が１カ所建てられた。村人は土地を無償で提供し，バヤニハンに参加した村人は誰でも生産所を無料で利用できた。村人はピラまで天秤棒で油を運び，米と交換した。日本占領期以前から蒸留所の共同経営者であった家族は蒸留酒を米と交換した。蒸留酒はココナツ油より生産量が少なかったため，米との交換率が高かった。

> 日本占領期にはボカヨ（bokayo）[22]や蒸留酒を村で作り，ピラへ運び米と交換した。１週間に１回，25キロの籾または４サロップ（salop）の精米と数匹のナマズを交換した[23]。夫は天秤棒に４つのパントッグ（pantog，水牛の膀胱を膨らませて乾かしたもの）に蒸留酒を入れて歩いて運んだ。朝４時に村を出発し，帰宅は日が暮れてからだった。ピラへ行く途中，日本軍の検問所で身分証明書と荷

21) １サックは籾や精米を入れるマニラ麻の袋１つ分で，１カバンと等しい。籾１カバンは44キロであるが，1973年に50キロに統一された。カバンは元来，容量の単位で，75リットルに相当するが，米の場合，重量単位として使われる。

22) ボカヨはココヤシ樹液を煮た中に，ほどよく熟したココナツ果肉を削って入れ，再び煮た後，平たくして直径３センチ程の円形にして固めた菓子である。

23) １サロップは１ガンタ（ganta）と同じである。１カバンは25サロップで，籾１サロップは1.6キロである。籾４サロップは，7.7キロである。精米は籾の分だけ量が多くなる。したがって，Ｆは１回に，籾と精米をあわせて，おおよそ32キロの米を交換したことになる。

物が調べられた。夫を含め４人の男が一緒にピラへ行った。（F：女，1921年生，79歳）

F の家族は自家消費用にココナツ油を自宅で作っただけであった。日本占領期には共同運営者が常時蒸留機を使用したために，それ以外の人は蒸留機を利用することができなくなった。つまり，日本占領期以前，コプラ生産で生計が立てられた時期には蒸留所利用の互助機能が働いていたが，経済的に困窮した状況下ではその機能が停止したのである。蒸留酒の生産には，燃やすとススが出て蒸留機を汚すためココナツの外皮や殻は燃料として用いず，薪を購入していたが，以前のような安い値段で薪が買えなくなった。また，銅製の蒸留機が壊れた場合，修繕する目処がつかなかった。これらのリスクを伴ってまで蒸留所の所有者は互助を継続しようとはしなかったのである。蒸留所の替わりとして，村にはココナツ生産所が存在した。

村で語られるのは米の交換に関する苦労話である。日本占領期は家畜が欠乏し，馬がなく，村人は歩いて重い荷物を運搬した。高地は降雨量が多く道がぬかるむため，裸足で油や酒を天秤棒で半日かけてピラに運び，米を天秤棒で担いで村に戻ってきた。バナナの葉に包んだ少量の飯と干し魚が昼飯で，山のわき水を飲んだ。検問所では日本軍の取り調べを受け，ゲリラの嫌疑がかけられるのではないかと恐怖にかられたと村人はいう。ピラでは米の代わりに軍票で支払われることがあり，常に米を得ることはできなかった。村人は米の代替食とするため，山で根菜類と陸稲の栽培に励んだ。日本占領期末，食糧不足が逼迫し，村人が毎日食べたのはココヤシの樹液を煮つめた中につぶしたショウガを入れたものだけで，空腹にさいなまれたと言う。

戦争の終結を村人が知ったのは，ナカーラン町役場から終戦の知らせが村に届いたからであった。隣町リサールにアメリカ軍がパラシュートで食糧を投下した。ナカーランの各村の村長が馬で投下された物資を集めに行き，村に持ち帰り村人に分配した。また，アメリカ軍から各村に米と鰯の缶詰が配給された。村人は日本占領期の終結を解放（liberation）と英語で語る。村で終戦時について語られるのは「解放」と食糧をもたらしたアメリカ軍と，戦争に敗れて山に逃亡する惨めな日本兵の対照的な姿であった。高齢者は「日本軍がアメリカ軍に降伏したので，とても幸せだった」と語った。村人は「解放」によって深刻な食糧不足と経済的な困窮が解決されることを期待したのであった。

４．生活の再建（1946-1969年）

４-１　フク団と食糧不足

日本軍敗退後の飢えと混乱の中で1946年７月４日，フィリピンは共和国として独立した。共和国発足の日，フィリピン政府はアメリカとフィリピン通商法を締結し，日本占領期に途絶えていた米比間の自由貿易が再開された。ただし，フィリピンの輸出農産物の砂糖，マニラ麻には，一定量以上の輸入を認めない絶対割当量や，コプラ油やタバコに無関税割当量が課され，アメリカの農産物が保護されていた。フィリピン通商法は，アメリカ依存のモノカルチュア経済再形成へとフィリピンを導いてゆくことになる。

アメリカに依存したフィリピンの経済体制は，アメリカに追従して利益を得た地主階級と農民間の経済的格差を顕著にさせた。この状況の中で終戦直後から反政府活動が活発化し，1946年から1951年にかけてルソン島中部地方を中心に地主制，地主階級の対米従属，反共体制に異議を唱えるフク団（Hukbalahap）と政府軍や地主の私兵との間の激しい武力闘争が起こった（深見・早瀬 1999, p.399）。その勢力は1950年頃には正規軍１万1,000人から１万5,000人で，活動はルソン島中部が中心であったが，同島南部でも盛んであった

（Kerkvliet 1979, p.210）。

ラグナ州の高地や丘陵地の町ではフク団に金銭，米，薬，衣料品，家畜の提供を強制され，拒否した場合には殺される事件が起こった。低地のサンタ・クルースはこのような強要が比較的に少なかったため，同町に移住した人が少なくなかったといわれる（Fernandez 1998, p.159）。ナカーランにはフク団の支持者がおり，メンバーが町に潜むようになったため，住民は町の外に出る際，検問所で警察隊の尋問を受けた（De Paz 1999, p.82）。住民は警察隊にフク団と嫌疑をかけられることを恐れる一方，フク団からは政府のスパイと疑われることに恐怖を抱いた。

> 検問所が設置されたために身分証明書を持たなければならず，村からバヤンへ行く道にも検問所があった。フク団と政府の戦いはフィリピン人同士が戦う市民戦争のようだった。フク団はS村にも来た。フク団と見分けがつくのは彼らが村人と親しくないからだった。彼らは村にスパイを潜入させ，政府の監視がないことがわかると村にやってきた。フク団が村に来ても村人が政府に報告しないのは，彼らの報復を恐れたからだった。彼らは村人に食糧を要求し，村人の許可なく鶏や豚を奪っていった。L村の老人はフク団が食糧を要求した際に拒否したので，殺された。日本軍のスパイであったマニラ出身の男はフク団にS村とB村の村境で殺された。（E：男，1928年生，72歳）

S村では，再び日本占領期に似た不自由な生活を強いられた。村から４人の男がフク団に参加したが，大多数の村人は支持しなかった。しかし，村人は報復を恐れ，フク団の要求に応じて食糧を提供した。村では日本占領期に聖ヨセフ像が村を守ったと語り継がれていたにも関わらず，村人はフク団が聖像を破壊するのを恐れ，聖像を持ってバヤンに疎開した[24]。フク団は日本軍以上に，村人にとっては脅威だったのである。

フク団と政府の抗争という政治的な状況の他に，村人が苦しんだのは経済的な困窮であった。戦後の経済復興期とはいえ，人々の生活状況は日本占領期とほぼ同じ状態から脱出できないでいた。戦争による荒廃はフィリピン経済に大きな影響を及ぼし続けていた。戦後数カ月は破壊された工業と農業設備の復旧に必要な資金が得られず，生産は停止し船舶と鉄道の運行が止まり，商品の輸送手段もなかった。農園は戦争による家畜の減少や灌漑設備の破壊が回復できない状態であった。そのため，農産物の生産量は上昇せず，ヤミ商売が日常茶飯となり，食糧価格の高騰が人々の窮状をさらに悪化させた（アゴンシルリョ 1977, p.238）。

ナカーランも経済的に困窮した状態であった。1945年12月，町議会では住民の困窮を解決する救済措置を大統領に訴える決議案が採択された。町議会議事録には困窮状況が記されている。

> ナカーランの財政と経済は非常に困窮した状態である。２万人の住民は現在の物価高によって窮乏している。コプラとコプラ油の価格低下は，ココヤシ産業で生計を立ててきた多くの住民の主要な収入源を直撃し，失業を招いた。戦争による町の荒廃，高い商品価格，失業率の増加

24) ラグナ州の各村には，簡素なカトリックの礼拝所があり守護聖人がまつられている。守護聖人の聖ヨセフ像は，「奇跡の聖ヨセフ」（Milagrosong San Jose）と呼ばれ，さまざまな災いから人々を加護する像として，ラグナ州や近隣州では知られている。70歳代の年寄りの話によると，彼らが子供の時には，S村の教会には聖ドロレス像がまつってあった。B村の教会では，宗教行事の時にだけ，奇跡の聖ヨセフ像がまつられた。宗教行事以外の時には，S村とB村の１家族が１年間ごとに交替して自宅で聖ヨセフ像をまつった。

> により，住民は生活必需品や衣料を買うことすらもできない状況である（Nagcarlan Municipal Council 1945, p.41）。

S村でも人々は生計を立てるのに必死であったことは，これまで高地の外へ出たことがなかった女がサン・パブロへ一人で菓子を売りに出かけたことからも見て取れる。

> 長男が１歳の時，私と夫はスマンを作った。村からバヤンまでスマンを運ぶのは夫で私は一人でサン・パブロへ売りに行った。夫は２つの籠に入ったスマンを天秤棒でバヤンまで歩いて運んだ。バヤンからサン・パブロまで小型乗り合いバスの運転手に20センタボを払ってスマンを運んでもらった。スマンは１つが10センタボ，２つだと15センタボで売った。（F：女，1921年生，79歳）

サン・パブロはラグナ州のココヤシ産業の中心地として栄えた都会であった。高地の外に出たことがないFは，一人で都会に行き菓子を売る大胆な行動に踏み切ったのである。そうまでして菓子を売りに行かざるを得ない困窮状況にあった。村の生活状況をいくつかの家族を例にみてみよう。

Fの家族は日本占領期までココヤシ蒸留所の運営者であった。太平洋戦争後，1946年１月から６カ月間，Fの夫はマニラの民間救済所で働いた[25]。夫の替わりにFの兄がココヤシ樹液を採取し，蒸留酒を生産した。Fの兄は樹液採取中にココヤシの間に渡してある足がかり用の竹から落ち，足を骨折した。Fの夫が帰宅した時にFの両親は息子の二の舞をさせまいとして，彼に樹液採取の停止を説得したため，Fの世帯では樹液採取と蒸留酒生産をやめた。以降，Fの世帯は蒸留酒の収入を野菜栽培で代替し，Fは野菜栽培の合間にスマンを作り，サン・パブロで売った。さらに，1947年からサン・パブロとバヤンの市日で緑葉野菜販売を開始した。早朝，サン・パブロの市日でバタンガス州の農民からシャクシ菜やカラシ菜を仕入れて売り，翌日，バヤンの市日で前日に売れ残った野菜と自分で栽培したサツマイモ，タロイモ，キャッサバを販売した。サン・パブロの市日は土曜日，バヤンは日曜日で，連続している市日を活用した。Fがサン・パブロで野菜販売ができたのは，1940年代半ば，バヤンとラグナ州の町をつなぐ小型乗り合いバスが運行し始めたからである。Fの事例にみる野菜を仕入れて売る販売方法はバイ・アンド・セルと言う。

1948年１月の台風はフィリピン全土に災害をもたらした。ナカーランでもココヤシの木が倒れ，稲作も被害を受け，農村経済を直撃した。同町の低地村は町の主要な米の供給地であるが，台風後，水田の灌漑用水路が修復できなかったため，収穫量が低下した（Nagcarlan Municipal Council 1948, pp.2-6）。S村では生計がたてられなくなり，仕事を探しに村を出る世帯もあった。

T（男，1927年生，73歳）の世帯は屋敷地とバナハオ山に小規模な畑を持っていたが，ココヤシ園を所有していなかった。戦争終了後，Tの世帯の主生業はココナツの収穫作業で，村内外のココヤシ園で雇われていた。他に山で焼き畑を行い陸稲，トマト，根菜類を栽培し，バヤンの市日に売った。しかし，この台風の被害によりココヤシは不作であったため，Tの世帯は収穫の仕事がなく，1950年代初頭，ケソン州の親戚を頼り出稼ぎに行った。ココヤシ園を所有しない世帯に比べ，ココヤシ園所有世帯は経済的な困窮がまだ少なかった。しかし，次に述べるAのように疎開した世帯はココヤシ栽培を中断しなければならなかった。

25) 民間救済所とは，戦後アメリカ軍が自らの備蓄を提供して，配給制度や分配地点を設置してマニラの人々に食糧を供給した場所である。

1950年から３年間，A（男，1917年生，83歳）の世帯はバヤンの祖母の家に疎開した。A の疎開の理由は，村ではフク団が来た時に食糧を提供しなければならず，他方，その行為はフク団の一味としてフィリピン兵の嫌疑をまねいたからである。

すでに述べたように，1940年末から1950年代は，F が高地の外に野菜販売の領域を広げた時期である。F が生業の活動範囲を拡大したのとは対照的に，A は疎開のため水田耕作と野菜栽培ができなくなった。A の生業の活動範囲は，村でココヤシと間作物の栽培，樹液採取と蒸留酒の生産に限られ，バヤンから日帰りで村に通った。しかし，それでも A は生計を維持できた一方，F の世帯は蒸留酒の生産を停止したため，生業の活動範囲を広げて生計を立てる必要があった。1950年代初期，A が樹液採取と蒸留酒生産だけで十分に生計を維持できたのは，蒸留酒の価格が高騰していたからである。

日本占領期後，蒸留所の互助は復活されず，生産所の共同経営者以外の村人は樹液採取に雇われることはあっても，酒の生産に従事することはできなかった。

4－2　コプラ生産の再開

戦後のココヤシ栽培農民を取り巻く状況を理解するために，当時のフィリピンにおけるココヤシ産業の再開とコプラ生産について次に検討する。

日本占領期にココヤシ栽培地の多くが放棄されたため，ココヤシ産業は崩壊状態となり，戦後，ココヤシ加工品の生産は落ち込んだ。1948年の統計によると全国のココヤシ栽培面積は85万9,000ヘクタールで1938年度よりも20万ヘクタール，約20%減少した。ココヤシ栽培面積の減少が最も深刻であったのは戦争の被害が多かったラグナ州とタヤバス州で，占領期以前より40%の減少であった（Huke 1963, p.289）。

1950年，ココヤシの病害であるカダン・カダン病（Coconut cadang-cadang viroid）がルソン島に発生，拡大した[26]。同年，ナカーランのココヤシ園でもカダン・カダン病が広まり，町議会では病害に対する救済措置が議題となった（Nagcarlan Municipal Council 1950, p.78）。さらにココヤシ栽培の収益減少に追い討ちをかけたのが，同年５月６日の台風であった（Nagcarlan Municipal Council 1951, p.57）。病害と台風によりココヤシ栽培農民は大打撃を被った。1952年当時，全国のココヤシ産業の従事者は400万人で，内30%はココヤシ栽培を主な収入源としていたが，コプラが非常に安いため，ココヤシに依存した生産者は餓えに直面することになった（Nagcarlan Municipal Council 1952, p.37）。ナカーランでもコプラとココナツ価格の低下により町の予算編成にさえ影響が及んだ（Nagcarlan Municipal Council 1952, p.41, p.67）。

フィリピンのココヤシ栽培の危機的な状況を打開するために，1954年に政府はココヤシ公団（Philippine Coconut Administration）を設立し，コプラ輸出の振興と生産増大をはかる政策を打ち出した。世界市場においてコプラは無関税であったため，生産国間では自由競争が激化していた。主に炉で乾燥させるフィリピン産コプラの品質は乾燥が不十分で水分含有量が多く，世界市場では低価格で売られていた（Tiongson 1964, p.164）。同公団はコプラの品質を向上させて価格を上げるとともに，生産の拡充に力を注ぐようになった。

26) カダン・カダン病の病名は，南部ルソン島のビコール地方の言葉で，死ぬ（cadang）という語を重ねたと言われている。1926年頃，ルソン島南部の太平洋岸にあるサン・ミゲル島からルソン島に被害が広がった。この病気にかかると，３，４年後には全くココナツができなくなり，最終的には裸のココヤシの幹だけが残ってしまう。発病してから枯死するまで，５年から10年の経過をたどる（徳重 1971, pp.3-4）。

ココヤシ公団が提案した水分計量法（Moisture Meter Law, 共和国法 第1365号）は1955年に制定されたため，同公団は仲買人にコプラの水分量を測らせ，品質に応じた価格購入を要求した[27]。また，品質基準に不適合なコプラの輸出を禁止したため，輸出コプラの品質は向上した（Hicks 1967, p.45）。その結果，1958年にはコプラ，コプラ油，デシココ[28]のフィリピンの輸出額は３億6,800万ペソで，世界の総輸出額の38％を占め（Zafra 1960, p.153），従来，他の諸国に比べて安かったコプラの市場価格も，他国の価格を上まわった（Tiongson 1964, p.164, 恒松 1963, p.32）。1950年代末までにココヤシ公団の政策は成功し，ココヤシ産業は復興した。

1950年代末から，S村の人々の中にはコプラの生産量を増やすために，村内でコプラ生産所を借りるのをやめ，山間部や山麓に所有するココヤシ園内に生産所を建て，コプラを生産するようになった。生産所を建てた場所はS村の南西に位置するA村とF村の村境にあるタンラク山と呼ばれる地域である。タンラク山とは，村人が名付けたバナハオ山中の一画である。

タンラク山のココヤシ園にコプラ生産所を建てた村人は，馬でコプラをバヤンの仲買人に運搬した。仲買人はコプラをサン・パブロの搾油工場と低地のマグダレーナのレッド・ヴィー搾油工場に運搬した。筆者が聞いた限りではS村の３世帯がタンラク山でコプラを生産するようになった。その内の２世帯は数人と共同でコプラを生産した。通常，生産所では２日間かけて約1,000個のココナツからコプラを加工した。コプラ生産と兼ねて，ココヤシ園の管理を行った。コプラ生産の価格は1962年を除き1960年から上昇したため（表１），F村の周辺ではコプラ生産所が増えると伴に，コプラの生産量が増加した。

表１　コプラ買取価格（1953-1966年ルソン島南タガログ地方）（単位ペソ）

年度	価格（１キロ）
1953	23.01
1954	18.13
1955	17.44
1956	19.90
1957	19.90
1958	31.52
1959	19.75
1960	33.04
1961	27.00
1962	33.00
1963	40.00
1964	40.00
1965	42.00
1966	43.00

出典　Central Bank of the Philippines（1966）
注）表の価格はルソン島南タガログ地方において，仲買人がコプラ生産農民から買い取ったコプラ価格を示す。

1960年代初頭，コプラ価格上昇とF村周辺におけるコプラ生産量の増加のために，F村の商才のあるココヤシ栽培農民は同村付近のコプラ生産者からコプラを買い取り，バヤンの仲買人へ馬で運搬するようになった。彼らは村仲買人（baryo buyer）と言われ，バヤンの仲買人と区別された。1960年代半ば，村仲買人は仕事が軌道にのると，コプラを生産して町仲買人に売却する方が収益があったため，コプラ生産所を建て，村人からココナ

27) 1965年までに，水分計量に登録したのは，大規模なコプラ仲買人のほかに，コプラ搾油工場，輸出業者で，登録者数は1570であった（Hicks 1967, p.45）。
28) デシココはケーキやクッキーのトッピングとして使われる。デシココの原料はコプラではなく成熟したココナツである。ココナツの内胚乳を乾燥させた後，小片状，フレーク状，細粒状に応じた形状にする。

ツを買い，コプラを生産して町仲買人に売り始めた。以降，村人はコプラ生産を停止し，村仲買人にココナツを売るようになった。

これまで仲買人はバヤンにしか存在しなかったが，村仲買人が出現したために，バヤンの仲買人は町仲買人（town buyer）と呼ばれるようになった。村仲買人は以前，ココヤシ栽培をしていた小農であった。彼らは仲買人になることを強く望み，バヤンの仲買人にコプラを運搬しながら仲買人の仕事を覚え資金を蓄えた。

アメリカ植民地期と同様に，戦後もココヤシ産業はアメリカの市場経済に左右されたが，1950年代半ばにフィリピン政府はココヤシ公団を設置し，ココヤシ産業の発展に関わるようになった。独立後，国の政策がS村のココヤシ栽培に影響するようになったのである。また，政府は野菜栽培，稲作にも介入し，村の生業に影響を与え始めた。

4－3　低地稲作地帯の開発と出稼ぎ

戦後，フィリピン政府にとって食糧生産増大は最も重要な課題であった。その要因は３つある。第１は，人口増加である。1918年には約1,000万人であったフィリピン人口は1948年には倍増して2,000万人近くになった。第２は，戦後の復興と工業化による輸入超過により，国際収支が悪化したことである。第二次世界大戦直後に約７億ドルあった政府の手持ち外貨は1950年代末には激減して２億ドルを割り，深刻な外貨危機に直面した。その間の米輸入量は年平均籾米15万トン前後で，その額は全輸入の１％から２％にすぎなかったが，悪化した国際収支の改善を図るうえで，大きな重圧となった。第３は，農村社会不安である。不安の根源はルソン島中部と南部で戦前から絶えなかった農民暴動と小作争議であった。戦後は，それがフク団の反体制活動に結集されて1950年頃には高揚期を迎えた。フク団の活動は政府の武力鎮圧により1950年代半ばまでに制圧されたが，政府は社会不安に対して対処を迫られることとなった。1952年農業共同組合法，1954年農業小作法，1955年土地改革法などの農業政策が出されたが，法案審議過程で地主勢力により事実上骨抜きにされた。これらの農業政策は効力がなかったため，政府は地主制度などの土地問題に関わる生産関係に手をつけずに農民の生産力を引き上げ，所得増大をはかろうと個別経営の収量改善をした。たとえば，1950年代には品種改良，耕作法の改善，化学肥料の使用も試みられた。しかし，食糧増産そのものは技術改良による収量改善ではなく，主に栽培面積の拡大によって実現された（梅原 1992, pp. 58-71）。

1950年代後半，ラグナ州の低地稲作地帯における水田稲作を変化させたのは水利灌漑事業の展開であった。1958年，国家灌漑局サンタ・クルース川水利事業区はラグナ州のピラ一帯の水田地帯における水利灌漑事業を開始した[29]。灌漑面積は3,600ヘクタールで，水量が比較的豊富で天候異変がない限り，年間を通して全域に給水が可能となった。1958年以降，ピラ一帯の水田は完全な通年灌漑田となり，二期作が進み，集落の畑作地や未利用荒廃地がすべて水田化した（梅原 1992, pp. 233-235）。ラグナ州の１ヘクタールあたりの米生産高は1956年の２トンから1966年には５トンに上昇した（Climacosa 1989, p.134）。

低地の水田地帯では耕作地の拡大と二期作のために，労働力を必要とした。そのために，1950年代末から，高地の村人が低地の水田地帯で雇われ，主に収穫期に働くようになった。水田を所有しないFの世帯は，ココヤシや

29) 国家灌漑局は公共事業省灌漑局の一部局であったが，1963年に分離独立した。その後，フィリピン全土の灌漑開発を推進した（増田 1995, p.205）。サンタ・クルース川水利事業区は，1956年に建設資金150万ペソで開始された。サンタ・クルース川とバイ湖に向かって流れるいくつかの河川を統合して灌漑水路建設にとりかかり，1958年から給水を開始した（梅原 1992, p.254）。

野菜栽培の合間をぬって，夫，長男，次男が収穫時に４カ所の水田に出稼ぎに行き，行き先はバタンガス州にまで及んだ。

> 11歳の頃にはSI村の親戚の水田で両親と一緒に収穫をした。他に収穫に行った所は，マグダレーナ，ルンバン，ピラ，バタンガス州のサント・トマスだった。これらの町では日雇い労働者として働いた。収穫期は４月と10月だった（Fの次男，1947年生，53歳）[30]

1960年代までにFの世帯構成員数はFの父親，F夫婦，５人の子供の８人にとなり，世帯員の米消費量が山麓の水田での小作では賄えなくなった。同様に現在50歳代の村人が子供の頃，親と一緒に水田耕作をした経験が多いのは，村の各世帯の世帯員数が増加したからである。自給の米を得るために山麓に水田を所有する世帯でも低地の水田で日雇い労働をした。

低地稲作地帯での収穫作業の労働力調達方法は，まず収穫予定日を付近の農民や農業労働者に口伝えで流す。収穫日になると，雇用機会を求めて待機していた村内外の農業労働者が集まってくる。労賃は収穫基準による歩合制であった（梅原 1992, p.252）。

ラグナ州の労働力だけでは補うことができなかったために，バタンガス州等のラグナ州外の地域からも農業労働者がピラの稲作地帯に出稼ぎにきていた。労働力不足はこの地帯からマニラへの出稼ぎが増加したことによる（Climacosa 1989, p.145）。また，低地の水田地帯はバイ湖に接近し地下水が浅く湿田が多いため，近隣の住民は収穫作業をしたがらなかった。だが，他地域の収穫労働者はこうした水田の条件にかかわらず収穫作業に従事したため，低地稲作地帯では収穫に欠くことができない存在であった（梅原 1992, p.252）。S村の収穫労働者は低地稲作地帯では重要な労働力だったのである。

4－4　山の開墾

戦後，農村地帯からマニラへの人口流入により，マニラの人口が膨張した。1948年から1961年のマニラの人口増加率は3.83%で，全国水準2.89%を上まわっている。マニラの人口増加により食糧の消費量が増え，マニラ近郊におけるラグナ州の野菜の需要が高まった。

特に，1950年代初頭，トマトの生産額が増大した。アメリカからの輸入品であったトマト・ソースやトマト・ソースで味付けをした鰯の缶詰が，1950年初頭からアメリカのブランド名を使用するライセンスを得てフィリピンで生産されるようになり，安価に市場に出回ることが可能となったからである（Spencer 1954, p.64）。こうしたこともあり，1948年200万4,200ペソであったが，1950年は384万460ペソ，1951年605万4,980ペソと急増している（Department of Agriculture and National Resources 1954, p.274）。ラグナ州でも1950年の８万8,500ペソから1951年は29万ペソと１年間にトマトの生産額は３倍に増加した（Department of Agriculture and National Resources 1954, p.274）。

トマトの需要増加にともない村人は畑の栽培面積を拡大するために開墾を行うようになった。バナハオ山の山林は国有地とみなされており，開墾に関しては政府の管轄下にあった。環境天然資源省のラグナ州支部では森林保護を目的としており，開墾を奨励することはなかったが，現在，バナハオ山の国有地で耕作しているナカーランの世帯は200世帯で，その多くは1960年以前に開墾を始めたという。村ではココヤシ栽培に次いで野菜栽培が重要な収入源となった。開墾地を得た後，主とし

30)　Fの世帯がバタンガス州の水田で収穫作業をしたのは，ピラで収穫時に出会った同州の収穫労働者から情報を得たと思われる。低地の水田における収穫期の仕事の情報は，Fの世帯は親戚から得ることが多かった。また，収穫時に低地の人が村に仕事の話を持ってきたと言う。

て野菜栽培で生計を立てている村人がでてきた。

> 1944年に結婚をした時，私はタンラク山でカラシ菜，サヨテ，タロイモを栽培していた。35歳の時にシアポ山での開墾が可能との情報をオジから得たので，そこで開墾をしてトマトを栽培した。開墾は男も女も働いた。ブロル山ではココヤシとバナナを栽培し，タロイモも植えた。山の高さが違う畑に異なった野菜を植えた。山の高さはシアポ山が一番高く，次にブロル山，そしてタンラク山だった。私は1960年頃から野菜栽培で生計を立ててきた。ココヤシはその次に重要だった。（S：男，1922年生，78歳）

H・S の語りから村人が名付けたシアポ山等の区画は標高が異なり，村人はバナハオ山の区画を標高差によって区別していたことがわかる。１区画の耕作地には根菜類，トウモロコシ，トマト，ナス，陸稲などの作物を栽培していたが，トマトの価格が高まるにつれ，主としてトマトを栽培するようになった。1960年代半ばには，村人はバヤンの仲買人の買い値を参考に，栽培野菜を選択し，野菜が商品作物として高地の村に定着していった。高地の野菜栽培は1950年代半ばに，トマトの需要と開墾による耕作地の拡大によって確立されたのである。

以上が，20世紀初頭の S 村におけるコプラ生産の開始からその生産停止に至った1960年代末までの生業の変遷である。最後に，1970年代以降の S 村における生業について付け加えておきたい。

1970年代初頭から S 村の生業は大きく変わった。1970年に低地から S 村に小型乗り合いバスが運行したため，村から低地へのアクセスが容易になった。さらに，ラグナ州低地における交通網が発達し，1978年，同州のカランバからマニラまでの高速道路が開通した。

まず，ラグナ州における道路のインフラ整備の発展は S 村の女の生業に大きな影響を与えた。村の女達の中には，小型乗り合いバスの交通網を利用して高地の外で野菜栽培を始め，低地の市場で販売を開始する者がでてきた。さらに，1980年代，女達はココヤシ園を利用して，養豚，アンスリウム栽培，菓子製造を始めた。その販売地域はラグナ州内および南タガログ諸州，マニラに広がっている。

このように，S 村では女達がココヤシ栽培以外の収入機会と経済活動の範囲を開拓していったのである。この変化の過程については，いずれ機会をあらためて考察したい。

おわりに

本論では，高地と呼ばれるバナハオ山腹斜面に位置し，ココヤシ栽培を主生業とする農村を取り上げ，1903年の村の成立から70年間の生業を中心とした村の歴史的な変化を考察した。次に明らかになったことをまとめてみたい。

S 村が位置するラグナ州は，20世紀初頭，アメリカ植民地支配体制に組み込まれた。S 村が行政村として成立した頃には，高地地域ではすでにココヤシが栽培されており，ココナツ油と蒸留酒生産は村の重要な経済的基盤であった。米比自由貿易の成立によって，ラグナ州ではアメリカ輸出向けのコプラを生産するココヤシ産業が始まり，1930年までには同州の主要産業となった。S 村でも，すでに1930年にはコプラ生産が主生業となり，村の経済生活は，商品作物経済と直接的に結びつきをもち，コプラの国際市場の変動に左右されるようになった。ここで，注目すべきことは，S 村はコプラ生産だけに特化せず，従来の蒸留酒やココナツ油生産，根菜類栽培を継続していたことである。コプラに特化しなかったことで，1930年代の世界不況において，村人はコプラの替わりにココナツ油や蒸留酒

の生産をして生計を維持し得たのである。従来から村で生産していた蒸留酒とココナツ油は，日本占領期の食糧不足には，低地で米と交換することができた。このように，S 村の人々は経済的な困窮状態に陥った時に，蒸留酒とココナツ油で危機を乗り越えてきたのである。

独立後，1950年代のコプラ価格下落，世帯員数の増加により，村ではこれまでの生業形態では生計が維持できなくなっていた。低地やマニラの人口増加による野菜栽培の需要や，ラグナ州低地稲作地帯の水田開発と低地の労働力不足は，村人にとって絶好の機会であった。村人は低地の稲作地帯へ収穫労働者として出稼ぎに行くようになる一方，山を開墾してトマトを栽培した。彼らの生業の場所は高地から低地にまで広がりはじめた。

更に，これらのことを通して明らかになったことがある。一つは，S 村の生業の変遷において，ココヤシ栽培以外の新しい生業を開拓してきた女の役割である。女は現金収入をえるために，高地と低地の交通の便を率先して利用し，経済活動の範囲を広げ，菓子の製造販売や野菜の売買を高地の外で行い生計を支えた。村の主生業であるココヤシ栽培とココナツ加工品の生産は主として男の仕事であったため，女はココヤシ栽培以外の経済活動を行わざるを得なかったのである。

二つ目は，村ではコプラ，蒸留酒，ココナツ油の生産の互助があったことである。コプラと蒸留酒生産は，村人同士の自発的な助け合いであった一方，ココナツ油生産の互助はバヤニハンと呼ばれる村の相互扶助慣行であった。村人の自発的な互助は村を取り巻く経済的な状況に左右されており，村では常に助け合いの関係があったわけではない。例えば，日本占領期，蒸留酒は米との交換率が高かった際に，蒸留所は，その共同運営者により独占され，蒸留酒の生産所は互助機能が働かなかったのである。蒸留酒生産の互助が機能しなくなった時に，村では相互扶助慣行が機能し，ココナツ油生産が実施されたのである。

本論ではアメリカ植民地期，日本占領期，独立後を通して，商品作物経済や村を取り巻く社会経済状況に影響を受け，適応して生計を維持するココヤシ栽培小農の行動の一側面を捉えたにすぎない。しかしながら，従来の低地稲作地帯に焦点を当てたルソン島の農村研究では見えてこなかった低地と高地の歴史的な連動というラグナ州の地域の動態が明らかになったといえよう。

謝辞

本稿の資料をえたフィリピンの調査において，2000年の計４カ月の現地調査は関西日米婦人会の援助により行った。調査地ではナカーラン町役場の協力により歴史および行政資料を収集することができた。調査村 S 村をはじめ多くの方々および機関によるご協力のもとで調査を実施することが可能となった。

本稿の執筆にあたっては，構想の段階から貴重なコメントを指導教官である加藤剛先生からいただいた。また，京都大学東南アジア研究センターの田中耕司先生，京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科の杉島敬士先生に有益なご教示を得た。

以上，ここに記して，感謝を表したい。

参　考　文　献

阿部　登　1989 『ヤシの生活誌』東京：古今書院。

アキノ, クレメン・バイチョン, E コラソン・ティグラオ, リゴベルト　1996 「フィリピンのココヤシ化学産業―ヤシの実から石鹸まで」『ヤシの実学』鶴見良行，宮内泰介（編）pp.319-330, 東京：コモンズ。

アゴンシルリョ, テオドロ　1977 『フィリピン史物語―政治・社会・文化小史』岩崎玄（訳）東京：井村文化事業社。

Byars, A. F. 1908. “Coconuts in Laguna and Tayabas Provinces.” *The Philippine Agricultural Review*, 1-12, pp. 516-520.
Climacosa, David. 1989. *Economic History of Laguna, 1946-1988*. P.h.D. thesis. Quezon City: University of Philippines.
Corpuz, Arturo C. 1999. *The Colonial Iron Horse: Railroads and Regional Development in the Philippines, 1875-1935*. Quezon City: University of the Philippines Press.
De Paz Ernesto L. 1999. *Nagcarlan in Perspective*. Manila: De La Salle University Press.
Department of Agriculture. 2001. *Agrikulturang Makamasa–Coconut Program–Maunlad Na Niyugan Tugon sa Kahirapan*. Quezon City.
Department of Agriculture and Natural Resources. 1954. *Philippine Agricultural Statistics*: Manila.
Fernandez, Asuncion. 1998. *Santa Cruz, Laguna; 1571-1996 Four handred twenty five years of Development*. MA thesis. Manila: Manuell Quezon University.
Foreman, John. 1899. *The Philippine Islands: Political, Geographical, Ethnographical, Social and Commercial History of the Philippine Archipelago*. New York: Charles Scribmers Sons.
深見純生・早瀬晋三　1999 「脱植民地下の道」『東南アジア史』（世界各国史６）池端雪浦（編），pp.366-405，東京：山川出版社。
Gleeck, Lewis Jr. 1981. *Laguna in American Times: Coconuts and Revolucionarios*. Manila: Historical Conservation Society.
Hawes, Gray Artur. 1984. *The Political Economy of Transnational Corporate Investment in Philippine Agriculture*. P.h.D.thesis. Hawaii: University of Hawaii.
Hayami, Yujiro; and Kikuchi, Masao. 2000. *A Rice Village Saga; Three Decades of Green Revolution in the Philippines*. Lanham: Barnes and Noble.
Hicks, George L. 1967. *The Philippine Coconut Industry Growth and Change, 1900-1964*. Field Work Report #17.
Huke, Robert E. 1963. *Shadow on the Land*. Manila: Bookmark.
池端雪浦・生田　滋　1977 「フィリピン」『東南アジア現代史Ⅱ　フィリピン・マレーシア・シンガポール』pp.1-162，東京：山川出版社。
Jose, Ricardo T. 1998. “Mickey Mouse Money, The Japanese Occupation,” in *KASAYSAYAN*, Volume Seven, edited by Ricardo, Jose T, pp.182-201. Hong Kong: Asia Publishing.
Kerkvliet, Benedict J. 1979. *The Huk Rebellion. A Study of Peasant Revolt in the Philippines*. Quezon City: New Day Publications.
菊池眞夫　1978 「フィリピン農村における制度的変化」『農業総合研究』32-3，pp.1-77。
恒松制治　1963 「産業構造の特質」『フィリピンの経済開発と国際収支』恒松制治（編）pp.1-44，東京：アジア経済研究所。
コンスタンティーノ，レナト　1979 『フィリピンの民衆の歴史Ⅲ』鶴見良行（他訳）東京：井村文化事業社（原著 Constantino, Renato. 1975. *The Philippines: A Past Revisited*. Quezon City: Tala Publishing Services. Vol.3）
Kwok-Chu, Wong. 1999. *The Chinese in the Philippine Economy: 1898-1941*: Quezon City. Ateneo Manila University Press.
Magat, Severino. 1991. *Coconut Industry in Philippines*. Quezon City; Asian and Pacific Coconut Community.
Mallat, Jean. 1983. *The Philippines; History, Geography, Customs, Agriculture, Industry and Commerce of the Spanish Colonies of Oceania*. Manila: National Historical Institute. *Les Philippines Histore, Geographie, Meceurs.. Agriculture, Industrie. Commerce. Des Colonies Espagnoles dans L'oceanie*. 1846: Paris.
マニラ新聞　1942 『マニラ新聞』1942年12月19日。
――――．1943 『マニラ新聞』1943年３月５日。
――――．1943 『マニラ新聞』1943年３月28日。
増田萬孝　1993 「稲作生産と水管理」『フィリピンの稲作の経済構造』金沢夏樹・松田藤四郎（編）pp. 204-240，東京：農林統計会。
松井宣也・杉村順夫　1998 『ココヤシの恵み―文化，栽培から製品まで―』東京：裳華房。
三神教伸　1921 『比律賓事情』東京：拓殖新報社。
Nagcarlan Municipal Council. 1943. *Ordinances and Resolutions*. Year Book. Nagcarlan.
――――. 1945. *Ordinances and Resolutions*. Year Book. Nagcarlan.
――――. 1948. *Ordinances and Resolutions*. Year Book. Nagcarlan.
――――. 1950. *Ordinances and Resolutions*. Year Book. Nagcarlan.
――――. 1951. *Ordinances and Resolutions*. Year Book: Nagcarlan.
――――. 1952. *Ordinances and Resolutions*. Year Book. Nagcarlan.

Nagcarlan Municipal Office. 1993. *Municipal Profile Municipality of Nagcarlan.* Nagcarlan.
Public School Teachers. 1957. *Historical Cultural Life of the Different Barrios in Nagcarlan,* Laguna Data. Nagcarlan: Philippine National Library.
南條岳彦　1995 『一九四五年マニラ新聞―ある毎日新聞記者の終章』東京：草思社。
National Census and Statistics Office. 2000. *Census 2000.*
Nyberg, Albert John. 1968. *The Philippine Coconut Industry.* P.h.D thesis. Cornell University. New York.
Philippine Coconut Authority and Bureau of Agricultural Statistics. 1999. *Basic Coconut Statistics.* Quezon City.
Provincial Planning and Development Office, Laguna. 1998. *Socio-Economic Profile, Province of Laguna.*
佐藤　孝　1967 「東南アジアのヤシ」『東南アジア研究』5-2，pp.2-47。
Spencer, JE. 1954. *Land and People in the Philippines; Geographic Problems in Rural Economy.* University of California Berkeley and Los Angeles.
Suillvan, Rodney J. 1991. *Exemplar of Americanism: The Philippine Career of Dean C. Wolcester.* Michigan Papers on South and Southeast Asia, Number 36. Center for South and Southeast Asian Studies, The University of Michigan.
高橋　彰　1977 「フィリピン農村の構造変化と賃労働」『アジア経済』18-6, 7 pp.4-28。
――――　1969 「バリオ・カトリナン―フィリピンの米作農村」『アジアの農村』大野盛雄（編）東京：東大出版会。
Tiongson, Fabian Aramil. 1964. *Improved Merchandising of Selected Farm Products.* Quezon City: The Community Development Research Council. University of Philippines.
徳重陽山　1971 『フィリピンに発生しているココヤシのカダンカダン病に関する報告』東京：農林省熱帯農業センター。
梅原弘光　1967 「フィリピンの米作農村―ラグナ州トゥブアン村の実態調査報告―」『アジアの土地制度と農村社会構造Ⅱ』滝川勉，斎藤仁（編）東京：アジア経済研究所。
――――．1978 「フィリピンにおける『緑の革命』と農民」『アジア経済』19-9 pp.26-40。
――――．1992 『フィリピンの農村―その構造と変動』東京：古今書院。
――――．1995 『もっと知りたいフィリピン』綾部恒雄，石井米雄（編）p.49，東京：弘文堂。
Umehara, Hiromitsu. 1974. *A Hacienda Barrio in Central Luzon; Case Study of a Philippine Village.* Tokyo: Institute of Developing Economics.
United States. 1905. *Census of the Philippine Islands. Population.*. Vol.II. Washington D.C. Government Printing.
Wolters, William. 1984. *Politics, Patronage and Class Conflict in Central Luzon* Queson City: New Day Publications.
Zafra, Urbano A. 1960. *Philippine Economic Handbook 1960.* Washington D.C.: Westland Printing Company.

アジア・アフリカ言語文化研究 51〜65　総目次
A General Table of Contents (Nos.51-65)

第 51 号（1996年３月）

論文（Articles）

Agentless versus Non-agentive Passives in Swahili ..... Mkude, Daniel Joseph ... 1

Prototypicality and the Syntax of Possession in Swahili ..... Mkude, Daniel Joseph ... 15

Aḥmad Kasravī: Literary Critic ..... Parsinejad, Iraj ... 29

From History to Fiction: The Formal Interlace in *San Guo Yan Yi* ..... Yao Yao ... 63

The History of Akan Complementizers ..... Osam, Emmanuel Kweku ... 93

カメルーンの頼母子講組織 ― ヤウンデにおけるバミレケの場合 ― ..... 野　元　美　佐 ... 105
（Rotating Credit Association in Cameroon:
The Associations of the Bamileke in Yaounde ..... Nomoto, Misa ... 105）

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

雲間の曙光 ―『明台報』に見られる臺灣籍日本兵の戦後臺灣像
..... クリスチャン・ダニエルス（唐立） ... 131
（A Glimmer of Light between the Clouds: The Vision That Formosan
Military Personnel Serving in the Japanese Army Held for Post-War
Re-construction in Formosa as Seen through the *Mei Tai Hō* ..... Daniels, Christian ... 131）

『明台報』全文 ..... 岡　崎　郁　子 ... 151
（The Complete Text of the *Mei Tai Hō* ..... Okazaki, Ikuko ... 151）

現代クメール語の前置詞の省略 ..... 上　田　広　美 ... 171
（Deletion of Prepositions in Modern Khmer ..... Ueda, Hiromi ... 171）

オラン・アスリの内陸交易ルートとその戦略的側面
― トゥミアの事例を中心に ..... 信　田　敏　弘 ... 185
（Inland Trade Route and Its Strategic Aspect among the *Orang Asli*:
A Case Study of *Senoi Temiar* ..... Nobuta, Toshihiro ... 185）

The Wa State (1045-60): Problems of Emergence into the Modern World ... Sai Kham Mong ... 209

Linguistic Schizophrenia or Linguistic Competence?:
The Bilingual's Linguistic Repertoire ..... Magura, B. J. ... 265

第 52 号（1996年９月）

論文（Articles）

Conspicuous Consumption and Classes of Goods ..... Karim, Wazir-Jahan ... 1

The Construction and Transformation of a Social Identity: Malayness and
Bumiputeraness Re-examined ..... Shamsul, A. B. ... 15

Religious Legitimation in the Healing Practice of an Uyghur Preacher:
A Field Report from Rural Turpan ..... Wang Jianxin ... 35

ボンガンドにおける個人名 ..... 木　村　大　治 ... 57
（Bangando Personal Names ..... Kimura, Daiji ... 57）

Esquisse du Kibinja-Sud: Langue Bantoue de la Frontière C-D ..... Motingea, Mangulu ... 81

On the 'Kwaness' of Nigerian Pidgin: Insights from Verb Serialization ... Ndimele, Ozo-mekuri ... 125

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

「インドラ神の柱」をめぐって（2）― タイ系文化理解の一視角 ― ..... 森　　幹　男 ... 137
（Notes on Indra's Post (Part 2) ..... Mori, Mikio ... 137）

A Changing Tugutil of Halmahera, Indonesia:
Twofold Studies for Further Research .....Martodirdjo, Haryo S.... 151

日野舜也教授 ― 年譜と業績 167
(Professor Syunya Hino: Curriculum Vitae and a List of Academic Works..... 167)

第 53 号（1997年３月）

論文（Articles）

西大西洋中央地域（CWA）とポロ結社の史的考察
― シェラレオネ，リベリア，ギニア，コートディヴォワール ― .....真 島 一 郎... 1
(Étude historique de 'Central West Atlantic Region (CWA)' et de Poro:
Sierra Leone, Libéria, Guinée et Côte d'Ivoire .....Majima, Ichiro... 1)
ヒンディー語における消失シュワーの問題
― 音韻変化の痕跡とその機能 ― .....町 田 和 彦... 83
(Schwa Syncope and Apocope in Hindi: in the perspective both of
synchrony and diachrony .....Machida, Kazuhiko... 83)
Vowel Elision and Tones in Edo CV#VCV (CV) Constructions.....Omozuwa, Edosa Victor... 113

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

ヘレロ語適用形の機能 .....米 田 信 子... 123
(The Primary Function of the Applicative in Herero .....Yoneda, Nobuko... 123)
A Phonology of the Bu Dai (Thu Lao) Language .....Kosaka, Ryuichi... 137

A Supplement to Sai Kham Mong, 1996, "The Wa State (1945-60):
Problems of Emergence into the Modern World" .....Sai Kham Mong... 155

第 54 号（1997年９月）

論文（Articles）

琉球方言形容詞成立の史的研究 .....伊豆山 敦 子... 1
(A Historical Study on the Adjectives in Luchuan Dialects .....Izuyama, Atsuko... 1)
ラーマ６世王の「文化の翻訳」
― 20世紀初頭シャムにおける西欧文化・思想との接触に関する一考察 ― 杉 山 晶 子... 33
('Translation of Culture' of King Rama VI: A Study on Contact with
European Culture and Thought in Siam in the Early 20th Century .....Sugiyama, Shoko... 33)
言説から立ち現れる「アフロキューバ」
― フェルナンド・オルティスの文化論をめぐる考察 ― .....工 藤 多香子... 55
(Creación de "lo afrocubano" en la obra de Fernando Ortiz:
Análisis de su discurso .....Kudo, Takako... 55)
ラオラオとマウノ ― ボルネオ島カリスの狂気の分類について ―.....奥 野 克 巳... 77
(*Rao-rao* and *Mauno*: On the Classification of Insanity among
the Kalis of Borneo Island .....Okuno, Katsumi... 77)
都市の同姓団体の機能に関する一考察
― 台湾北部 A 市の B 姓宗親会を事例として ― .....上水流 久 彦... 105
(Surname Association in Urban Taiwan: A Study of Changes
Caused by Urbanization .....Kamizuru, Hisahiko... 105)
「ラマ」再考 ― 北東ネパール，ヘランブーのフィールドワークから ―.....佐 藤 斉 華... 127
(Rethinking the Word Lama: A View from Helambu, Northeast Nepal .....Sato, Seika... 127)

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

中国福建省閩南地区の王爺信仰の特質 ― 実地調査資料の整理と分析 ― ……三　尾　裕　子… 151
（Characteristics of Wanye Worship in the Minnan Area of Fujian Province, China: Through an Analysis of Field Data ……Mio, Yuko… 151）
北インド・ムスリム社会の婚姻儀礼と贈与交換
― ウッタル・プラデーシュ州 C 町のサイフィー・ビラーダリーの事例から ―
……小　牧　幸　代… 195
（Rites and Gift-exchanges Associated with Marriage among Muslims in North India: A Case Study of the Saifi-biradari in a Township of Uttar Pradesh ……Komaki, Sachiyo… 195）

書評・紹介

奥平龍二（監修）『ミャンマー ― 慈しみの文化と伝統』 ……根　本　　敬… 215
（Okudaira, R. (ed.), *Myanmar: Itsukushimi no bunka to dentō*, (*Myanmar: Its Tradition and Culture of Affections*) ……Nemoto, Kei… 215）

坂本恭章教授 ― 略歴と発表一覧 …… 219
（Professor Yasuyuki Sakamoto: Curriculum Vitae and a List of Academic Works …… 219）
川田順造教授 ― 略歴と著作目録 …… 227
（Professor Junzo Kawada: Curriculum Vitae and a List of Academic Works …… 227）

第 55 号（1998年３月）

論文（Articles）

ショナ語（ゼズル方言）Fortune 資料の音調分析とそれに基づく音調システム
……加賀谷　良　平…　1
（Tonal Analysis of Fortune's Data and Constructed Shona Tonal System: the Zezuru Dialect ……Kagaya, Ryohei…　1）
鉄道整備と新たなる物流の形成 ― タイにおける豚の事例 ―……柿　崎　一　郎…　45
（Introduction of Railways and the Creation of New Commodity Flow: The Case of Pigs in Thailand ……Kakizaki, Ichiro…　45）
ジャワ島チアンジュール盆地開拓試論 ― 1820年代を中心に ―……大　橋　厚　子…　73
（Paddy Field Development in Canjur Basin, West Java: Up to 1820s……Ohashi, Atsuko…　73）
ダルエスサラームのアフリカ系住民社会における遊びと政治
― 独立前のカリアコー地区を中心とした都市文化の生成と発展の過程 ―　鶴　田　　格…　93
（Popular Music, Sports, and Politics in Dar es Salaam during the British Colonial Period ……Tsuruta, Tadasu…　93）
系譜における母方，妻方親族
― 中国四川省南部農村の『経単簿』に関する一考察……謝　　荔…　119
（Maternal and Affinal Relationships in Chinese Genealogy: An Analysis of the "Jing Dan Bu" in a South Sichuan Village ……Hsieh, Li…　119）
『五族譜』モンゴル分支と『集史』諸写本 ……赤　坂　恒　明…　141
（The Šu'ab-i Muγūl of *Šu'ab-i Panǰgāna* and Manuscripts of *J̌āmi'al-Ṭawārīx* ……Akasaka, Tsuneaki…　141）
チベット文書簡の構造から見た17世紀のチベット，モンゴル，清関係の一断面
― ダライラマ五世，摂政サンゲギャムツォ，ガルダンの書簡を用いて ―　石　濱　裕美子…　165
（An Aspect of the Tibet, Mongol and China Relationship in the Late 17th Century from the View of Tibetan Letter Format: Based on the Letters of the Fifth Dalai Lama, the Regent Sangs-rgyas-rgya-mtsho and the Mongolian Prince Galdan ……Ishihama, Yumiko…　165）

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

ヘレロ語動詞アクセント試論 ……湯 川 恭 敏… 191
（A Tentative Tonal Analysis of Herero Verbs ……Yukawa, Yasutoshi… 191）
グイ語の名詞形態論 ……中 川 裕… 237
（Nominal Morphology in |Gui ……Nakagawa, Hiroshi… 237）
アラビア語フェズ方言における *bγa*（～したい）と *xəṣṣ*（～しなければならない）
……榮 谷 温 子… 255
（*bγa* (to want) and *xəṣṣ* (to need) in Colloquial Arabic of Fez ……Sakaedani, Haruko… 255）

第 56 号（1998年９月）

論文（Articles）

Précis de grammaire wolof ……Diouf, Jean Léopold… 1
The Transnational Dynamics of the Marcos Plunder ……Aquino, Belinda. A.… 37
Ethnohistory of Land and Identity in Khurda, Orissa:
From Pre-colonial Past to Post-colonial Present ……Tanabe, Akio… 75
A Formal Analysis of the So-called ‘Passive’ in Fijian ……Kikusawa, Ritsuko… 113
東南アジアにおける「失われた本」伝説とキリスト教への集団改宗
― 上ビルマのラフ布教の事例を中心に ― ……片 岡 樹… 141
（On the Notion of “the Lost Book” in the Early Mass Conversion to
Christianity among the Lahu in Upper Burma ……Kataoka, Tatsuki… 141）
ツォンガ語動詞のアクセント ……湯 川 恭 敏… 167
（A Tonological Study of Tsonga Verbs ……Yukawa, Yasutoshi… 167）
ショナ語現代ゼズル方言の動詞音調形とその通時的変化
― 高音調の低音調への被さりと見かけ上の右方向への移動 ― ……加賀谷 良 平… 211
（Tonal Patterns of the Contemporary Zezuru Dialect of the Shona
Language and Its Diachronic Changes: The High Tone Covering the
Next Low Tone and Its Shifting to the Right ……Kagaya, Ryohei… 211）

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

独立後アフリカ諸国における国家と宗教
― 共同研究開始のための予備的考察 ― ……小 川 了… 249
（Etat et religion dans les pays Africains contemporains:
Note de recherches préliminaire pour le projet d’étude en équipe (1998-2000) Ogawa, Ryo… 249）

第 57 号（1999年３月）

論文（Articles）

Transitivity and Intransitivity ……Tsunoda, Tasaku… 1
Schema vs. Prototype: An Integrated Approach to Transitivity ……Nakamura, Wataru… 11
Decomposing the Transitivity of Algonquian Verb Stems ……Campana, Mark… 33
Space, Time and Agency in Akan: Syntactic and Semantic
Interconnections in Locative Sentences ……Essilfie, Thomas… 51
マニカ語動詞のアクセント ……湯 川 恭 敏… 63
（A Tonological Study of Manyika Verbs ……Yukawa, Yasutoshi… 63）
マテンゴ語動詞の声調（バンツー系，タンザニア） ……米 田 信 子… 133
（Tonal Analysis of Matengo Verbs ……Yoneda, Nobuko… 133）
ショナ語ゼズル方言の動詞音調形の通時的変化
― 目的接辞のある場合 ― ……加賀谷 良 平… 157
（Diachronic Tonal Changes of the Zezuru Dialect of the Shona
Language: In the Case of Verbs with Object Prefixes ……Kagaya, Ryohei… 157）

フィリピンにおける国民国家の形成
— 1934年憲法制定議会におけるその方向性 — ……内　山　史　子… 195
(Nation Building in the Philippines: A Study of the Directions and Problems of Nation Building Apparent in Discussions at the Constitutional Convention of 1934 ……Uchiyama, Fumiko… 195)
The Dios-Dios and Pulahan Movements in Samar and Leyte ……Cullamar, Evelyn Tan… 221
タビテウエア・サウスにおけるボータキ（饗宴）の氾濫
— 周辺社会に生起する社会集団の統合と平等理念の再生産 — ……風　間　計　博… 241
(The *Botaki* Feast and Its Modern Context in Tabiteuea South, Kiribati ..Kazama, Kazuhiro… 241)

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

海域史に関する試論 — 地中海からインド洋まで —……家　島　彦　一… 281
(Essay in the History of Maritime Spaces: From the Mediterranean to the Indian Ocean ……Yajima, Hikoichi… 281)
ジャワのモンチョパット再考 ……宮　崎　恒　二… 301
(Javanese Mancapat Reconsidered……Miyazaki, Koji… 301)
The Development of the Story of 'Lion and Hare' ……Iwase, Yuka… 325

第 58 号（1999年９月）

論文（Articles）

ナポレオンのエジプト遠征期のアレッポ ……黒　木　英　充…　1
(Events in Aleppo during Napoleon's Expedition of Egypt ……Kuroki, Hidemitsu…　1)
16世紀オスマン朝におけるムカーターの監理・運営に関する一考察
— ハレブ財務組織作成の文書の分析を中心として — ……清　水　保　尚…　23
(A Study on the Ottoman Administration of Mukātaas in the Late Sixteenth Century: Analysis of Documents of the Haleb Financial Organization ……Shimizu, Yasuhisa…　23)
雲林県馬鳴山鎮安宮の発展と地域社会 ……三　尾　裕　子…　45
(The Development of *Wangye* Temple of Mamingshan in Yunlin and Its Relationship with the Local Community ……Mio, Yuko…　45)
韓国の地方邑における「郷紳」集団と文化伝統
— 植民地期南原邑の都市化と在地勢力の動向 — ……本　田　　洋… 119
('Gentry' of *Ŭpch'i* and Their Cultural Traditions in a Korean Local Town: A Case Study of Namwon District during the Colonial Period ……Honda, Hiroshi… 119)
On the Typology of Questions: The Echie Example ……Ndimele, Ozo-mekuri… 203
On the Functions of the Arabic Connectives *wa* and *fa* in Narrative Texts ..Nakamichi, Shizuka… 221

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

New Documents Concerning the Economic and Social Situation in Iran, 1860-1872 ……Nasiri, Mohammad Reza… 263
植民地期朝鮮における識字調査 ……板　垣　竜　太… 277
(Literacy Survey in Colonial Korea……Itagaki, Ryuta… 277)
キノコとタケノコ —— 東北タイ農村での自然資源利用文化 ……藤　田　　渡… 317
(Mushrooms and Bamboo Shoots: The Culture of Natural Resource Utilization in a Northeast Thai Village……Fujita, Wataru… 317)
言語におけるタブーと性差 — ケレウェ語の女性語分析 —……小　森　淳　子… 343
(Analysis of Women's Words in Kerewe (Tanzania): A Language Aspect of the Avoidance Relationship ……Komori, Junko… 343)
バリ社会におけるコード切り替えと敬語使用の相互作用 ……原　　真由子… 365
(Interaction between Codeswitching and Usage of Honorifics in Balinese Society ……Hara, Mayuko… 365)

Anthropolinguistic Evidence of the Evolution of *Chi* Names in Igbo .....Ọnụkawa, M. C.... 383
Negation in Ifẹ̀: A Yorùbá Dialect .....Adéwọlé, L. O.... 397

第 59 号（2000年３月）

論文（Articles）

ブズルク・ブン・シャフリヤール『インド奇談集』に関する新資料 .....家 島 彦 一... 1
(A New Material on Buzurk b. Schahriyār's *Kitāb 'Ajā'ib al-Hind* .....Yajima, Hikoichi... 1)
コモロにおける憑依霊の種族，親族，個体 .....花 渕 馨 也... 31
(Tribes, Kinship and Individual Spirits among the Comoros .....Hanabuchi, Keiya... 31)
善堂と習藝所のあいだ ― 清末天津における社会救済事業の変遷 ―.....吉 澤 誠一郎... 57
(Social Welfare Institutions in Late-Qing Tianjin .....Yoshizawa, Seiichiro... 57)
アルタンとソナムギャンツォのチャブチャール会見とその意義 .....井 上 治... 89
(Altan's Meeting with bSod nams rgya mtsho at Čabčiyal and Its Significance ..Inoue, Osamu... 89)
ショナ語マニィカ方言の動詞音調形 ..... 加賀谷 良 平... 139
(Tonal Analysis of the Manyika Verbs: Two Layers of Tonal Phenomena ..Kagaya, Ryohei... 139)
The Status of the Indirect Object in Akan .....Osam, Emmanuel Kaweku... 171

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

A Comparative Study on Two Different Versions of the *Manugye Dhammathat*:
A Leading Law Book in Eighteenth Century Burma (Myanmar) .....Okudaira, Ryuji... 179
野生植物利用の知識とそのあり方 ― 東北タイの事例から ―.....藤 田 渡... 197
(Folk Knowledge on Wild Plant Usage in Northeast Thailand .....Fujita, Wataru... 197)
The Handling of Foreign Names and Abbreviations (Acronyms) in
Kiswahili Translations .....Massamba, David P. B.... 223

第 60 号（2000年９月）

論文（Articles）

The First Congress of the Indochinese Communist Party (1935) and
its Aftermath: A Turning Point in the Comintern-ICP Relations.....Kurihara, Hirohide... 1
ビルマ独立期におけるカレン民族運動 ― " a separate state " をめぐる政治 ―
.....池 田 一 人... 37
(The Karen Nationalist Movement in the Independence Period of Burma:
The Politics of "a separate state".....Ikeda, Kazuto... 37)
英国陸軍グルカ兵のダサイン
― 外国人兵士の軍隊文化と集団的アイデンティティの自己表象 ― .....上 杉 妙 子... 113
(Dashain of the Gurkhas in the British Army:
Foreign Soldiers' Military Culture and Self-representation of
Collective Identity.....Uesugi, Taeko... 113)
『ムカディマット・アル・アダブ』において *'alif* と *hâ'* で音写された
モンゴル語の語末母音について .....斎 藤 純 男... 159
(Mongolian Word-final Vowels Transcribed with *'alif* and *hâ'* in
Muqaddimat al-Adab.....Saitô, Yoshio... 159)

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

現代ペルシア語の音とカナ表記 .....上 岡 弘 二・吉 枝 聡 子... 169
(Persian Sounds and Their Transcription into
Japanese Syllabary .....Kamioka, Koji & Yoshie, Satoko... 169)
孤立語研究の方向性について .....峰 岸 真 琴... 237
(Towards a Descriptive Study of 'Isolating Languages' .....Minegishi, Makoto... 237)

ソガ語動詞アクセント試論 ……湯　川　恭　敏… 249
(A Tentative Tonal Analysis of Soga Verbs ……Yukawa, Yasutoshi… 249)

第 61 号（2001年３月）

論文（Articles）

家内的領域と公的領域の位相の語られ方
― 北西部マダガスカル・ツィミヘティ族におけるムラの集会の
会話資料の分析に基づいて ― ……深　澤　秀　夫…　1
(Discourse of Domestic Domain and Public Domain:
On an Analysis of the Conversational Data of the Community Meetings
among the Tsimihety People of North-Western Madagascar ……Fukazawa, Hideo…　1)

カタカタとパグビッサラ
― スールー諸島南部 T 島における儀礼的語りの変容について ― ……床　呂　郁　哉…　51
(Katakata and Pagbissara: Transformation of Ritual Oratory in
Southern Sulu ……Tokoro, Ikuya…　51)

モンゴルにおけるアラク・スゥルデの祭祀について ……楊　　海　英…　71
(The Worship of the Alaγ Sülde (Speckled Standard) in Otroγ Banner,
Ordus, Mongolia ……Yang, Haiying…　71)

司祭の儀礼と女性の儀礼
― インド・ベンガル地方における女神祭祀と女性 ― ……外　川　昌　彦… 115
(Multiple Discourse in the Relation between Women and Priests in
the Ritual System of *Durgāpūjā* in Bengal ……Togawa, Masahiko… 115)

チュクチ語の使役構造の輪郭 ― 自動詞・他動詞との関わりを通じて ― ……呉　人　徳　司… 129
(An Outline of Chukchi Causative Constructions:
The Relation between Intransitive and Transitive Verbs and
their Causatives ……Kurebito, Tokusu… 129)

Structure microscopique des récits folkloriques: modèle descriptif du
motif aux sèmes ……Oda, Jun'ichi… 149

Clausal Coordination in Lobirè ……Kambou, Moses Kwadwo… 161

On the Grammar of Clitics in Degema ……Kari, Ethelbert E.… 179

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

ヘンリー・ソールト ― その人生，政治，美学 ……高知尾　　仁… 193
(Henry Salt: His Life, Politics and Aesthetics ……Takachio, Hitoshi… 193)

明治期日本におけるフィリピンへの関心 ……池　端　雪　浦… 203
(Japanese Interest in the Philippines during the Meiji Era ……Ikehata, Setsuho… 203)

バリ語の /a/ と /ə/ の音韻的解釈 ……原　　真由子… 231
(A Phonological Interpretation of /a/ and /ə/ in Balinese ……Hara, Mayuko… 231)

ナシ（納西）語「緊喉母音論争」の意義
― 中甸県三壩郷白地方言に見られる音声現象からの考察 ― ……黒　澤　直　道… 241
(The Meaning of the Controversy about laryngeal Constricted Vowels
in Naxi Language ……Kurosawa, Naomichi… 241)

ゴアの言語紛争（1985-87）― 言語，宗教，政治 ― ……鈴　木　義　里… 251
(Language Conflict in Goa, 1985-87: Language, Religion and Politics ……Suzuki, Giri… 251)

Linguistics in the Corridor: A Review of Research on the Bantu
Languages of South-west Tanzania, North-east Zambia,
and North Malawi ……Walsh, Martin T. & Swilla, Imani N.… 275

Grammatical Traditions in Contact: The Case of India ……Bhatia, Tej K.… 303

第 62 号（2001年９月）

論文（Articles）

ショナ語ゼズル方言の名詞の音調分析 ……加賀谷 良 平… 1
（Tonal Analysis of Nouns of the Zezuru Dialect of Shona ……Kagaya, Ryohei… 1）
A Sketch of the Syntactic Structures of Nadrau Fijian ……Kikusawa, Risuko… 35
Syllable Rimes in Old Indo-Aryan and Dravidian……Kobayashi, Masato… 91
コリャーク語の名詞句階層と格・数標示 ……呉 人 恵… 107
（The Animacy Hierarchy and Case/Number Marking in Koryak ……Kurebito, Megumi… 107）
Muslim Law in Britain …… Menski, Werner F.…127
教育をめぐる政治と文化 ― エチオピア南部における紛争事例を中心に ―….増 田 研… 165
（A Politico-Cultural Approach to Modern Education in Southern Ethiopia …Masuda, Ken… 165）
茶：薬から嗜好品への道
― 技術史・医薬史の研究から見た喫茶の起源・道教の影響 ― ……関 剣 平… 201
（Tea: The Path from a Drug to a Luxury Good ……Guan, Jianping… 201）

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

中古漢語の不字句 ……北 川 修 一… 239
（A Study of Fouziju in Middle Old Chinese ……Kitagawa, Shuichi… 239）
Authority in Language: The Role of the Chichewa Board (1972-1995)
in Prescription and Standardization of Chichewa……Kishindo, Pascal J.… 261

第 63 号（2002年３月）

論文（Articles）

類型分類の再検討 ― 孤立語の視点から ……峰 岸 真 琴… 1
（Traditional Typology Revisited: From the Viewpoint of Isolating
Languages ……Minegishi, Makoto… 1）
On Endoclitics: Some Facts from Degema ……Kari, Ethlbert E.… 37
タージ・マハル・コンプレクスのプランについての新解釈及び
アフマド・ヤサヴィー廟における終末的シンボリズム ……山 田 篤 美… 55
（A New Perspective on the Layout of the Taj Mahal and the Eschatological
Symbolism of the Aḥmad Yasawī Shrine ……Yamada, Atsumi… 55）
「アレクサンドリアの虐殺」再考 ……勝 沼 聡… 81
（The “Alexandria Massacre” Reconsidered）……Katsunuma, Satoshi… 81）

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

M. K. ガーンディーと日本人 ― 日中戦争をめぐって ― ……内 藤 雅 雄… 125
（M. K. Gandhi, the Japanese and the Sino-Japanese War……Naito, Masao… 125）
ブルキナファソ・マリ・セネガルにおける学術研究体制の動向
― ワガドゥグ大学・マリ大学の学術研究機構，セネガル国立公文書館
収蔵資料，およびコートディヴォワールの政治情勢について ……真 島 一 郎… 175
（La situation actuelle du régime de recherches scientifiques au Burkina Faso
(l’Université de Ouagadougou), au Mali (l’Université du Mali) et au Sénégal
(Archives du Sénégal): suivie des renseignements chronologiques sur la
situation politique ivoirienne après le coup du décembre 1999 ……Majima, Ichiro… 175）
Social Conflicts, Resource Distribution and Social Justice in Nigeria ……Ujomu, Philip Ogo… 197
クリア語動詞アクセント試論 ……湯 川 恭 敏… 229
（A Tentative Tonal Analysis of Kuria Verbs ……Yukawa, Yasutoshi… 229）
アラビア語エジプト方言の未完了形の用法 ……榮 谷 温 子… 265
（Imperfect Form in Egyptian Colloquial Arabic ……Sakaedani, Haruko… 265）

池端雪浦教授 — 略歴・研究業績 303
(Professor Setsuho Ikehata: A Record and a List of Academic Works ..... 303)
家島彦一教授 — 略年譜と主な研究業績 311
(Professor Hikoichi Yajima: A Record and Academic Works ..... 311)
森幹男助教授 — 略歴と作品リスト 319
(Assistant Professor Mikio Mori: A Record and Publications ..... 319)
内藤雅雄教授 — 略歴と発表一覧 325
(Professor Masao Naito: A Record and Publication ..... 325)

第 64 号（2002年９月）

論文（Articles）

外部の馴化と公共空間の成立—エチオピア西南部クシ系農牧民ホールの首長制をめぐる象徴空間についての考察— ..... 宮　脇　幸　生... 1
(Domestication of Outside and Genesis of Public Order: Some Notes on the Symbolic Universe of Chieftainship of the Hor of Southwestern Ethiopia ..... Miyawaki, Yukio... 1)
邪術師を暴き出す — インドネシア辺境における差異と同一化 — ..... 奥　野　克　巳... 37
(Disclose the Sorcerers: Difference and Unification in an Indonesian Marginality ..... Okuno, Katsumi... 37)
The Space of Africanness: Using Gnawa Music in Morocco as Evidence of North African Slavery and Slave Culture ..... Goodman-Singh, David R.... 75
形態類型論の形式モデル化 ..... 峰　岸　真　琴... 101
(On Formalization of Morphological Typology ..... Minegishi, Makoto... 101)
Inflection *vs.* Derivation in Degema ..... Kari, Ethlbert E.... 129
Reflexive Marking and Related Functions in Akan ..... Osam, Kweku E.... 141
マルタ語の動詞語幹母音再建 ..... 長　渡　陽　一... 153
(Reconstructing of Maltese Verbal Stem-Vowel ..... Nagato, Yoichi... 153)
黎朝前期紅河デルタにおける屯田所政策 ..... 八　尾　隆　生... 173
(The State Farm System in the Red River Delta in the First Half of the Le Dynasty Vietnam ..... Yao, Takao... 173)
国家・教会・人々 — タンザニアにおける信仰覚醒運動の展開 — ..... 小　泉　真　理... 193
(Nation, Church and People: A Development of the Christian Revival Movement in Tanzania ..... Koizumi, Mari... 193)
ナイジェリアの宗教と政治 — 2000年シャリーア紛争が語るもの — ..... 戸　田　真紀子... 217
(Religion and Politics in Nigeria: The Real Cause of the Sharia Conflict in 2000 ..... Toda, Makiko... 217)

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

Conversational Roles and Social Functions of Code-Switching among Igbo Bilinguals ..... Okolo, Bertram A.... 237
Negative Questions in Hindi: Negative Questions in Asian Language 1 ..... Mathur, Ramesh & Učida, Norihiko... 251

中嶋幹起教授 — 略年譜と研究業績 273
(Professor Motoki Nakajima: A Record and a List of Academic Works ..... 273)

第 65 号（2003年３月）

論文（Articles）

サラワク・イバン社会における小家族の編成と機略的行為 ……内 堀 基 光 1
（Strategic Actions and Structure: Iban *Bilek*-family Reconsidered ……Uchibori, Motomitsu… 1）
ホー・チ・ミンとスターリン
― ホー・チ・ミン訪ソ（1950年２月）の歴史的意義……栗 原 浩 英… 19
（Ho Chi Minh and Stalin: The Historical Significance of Ho Chi Minh's
Visit to the USSR in February 1950 ……Kurihara, Hirohide… 19）
Note d'introduction sur les musiques traditionnelles des Antakarana ……Live, Yu-Sion… 45
社会的実践としての工芸技術の変容
― フィリピン・ルソン島北部山地民社会における機織りの産業化を巡って ―
……大 西 秀 之… 67
（Change of Craft Technology as Social Practice:
A Study on the Industrialization of Weaving as Folk Craft in
the Philippine Highlanders' Society, Northern Luzon ……Ōnishi, Hideyuki… 67）

資料・研究ノート（Source Materials and Remarks）

A Talubin Text with Wordlist and Grammatical Notes
……Kikusawa, Ritsuko & Reid, Lawrence A.… 89
タタール知識人による女性向け雑誌『スユム・ビケ *Sūyum Bīka*』
（カザン，1913-1917）目録 ……生 田 真 澄… 149
（A Table of Contents of *Sūyum Bīka* (Kazan, 1913-1917), a Journal
for Women Published by Tatar Intellectuals ……Ikuta, Masumi… 149）
パプアニューギニアをめぐる華人の移動とコミュニティの変遷過程 ……市 川 哲… 181
（Transformation of Chinese Migration Patterns and Their Community
in Papua New Guinea ……Ichikawa, Tetsu… 181）
The Fijian Transitive Ending *-(C)aki/a* in Loan Words ……Tamata, Apolonia… 207
大きな罠小さな罠 ― 焼畑周辺をめぐる小動物狩猟 ―……西 谷 大… 229
（Big Traps and Little Traps:
Shifting Cultivation and Small Animal Hunting ……Nishitani, Masaru… 229）
フィリピン・ココヤシ栽培農村における生業の変遷
― ルソン島ラグナ州 S 村の事例 ― ……藤 井 美 穂… 259
（Livelihood Change in a Philippine Coconut Farming Village:
A Case Study in Laguna Province of Luzon ……Fujii, Miho… 259）

アジア・アフリカ言語文化研究 51-65号 総目次 …… 287
（A General Table of Contents (Nos.51-65) …… 287）

Journal of Asian and African Studies
Published by the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, a national government research institution affiliated with the Tokyo University of Foreign Studies (TUFS), has worked to implement and stimulate research on the languages, linguistics, history, cultural anthropology and ethnology of Asia and Africa since its foundation in 1964. It was the first Inter-University Institution to be designated in the Humanities and social sciences in Japan, and has been engaged in the computerization of data in Asian and African languages and cultures since the 1970s. This area of speciality has been strengthened further by the establishment of the Information Resources Center in 1997, the main purpose of which is to process information resources pertaining to the languages and cultures of Asia and Africa.

The ***Journal of Asian and African Studies*** welcomes contributions in Japanese, English, French, German and Chinese that fall within the following three categories; Articles, Source Materials and Remarks, and Reviews. Articles should be based on original research, those devoted to new interpretations and new questions are particularly encouraged as are substantial review articles on particular areas of scholarship. For more details on our publishing requirements see Guidelines for Authors.

Manuscript Review Procedure: All articles, contributions received are sent to referees. Favorably evaluated submissions are generally published six to twelve months after the final manuscript has been received.

Guidelines for Authors

To submit a manuscript for consideration, send one copy to: The Editorial Committee, Journal of Asian and African Studies, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3 chome, Asahi-cho, Fuchuu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan. Articles are selected by peer review. Authors sending manuscripts to the journal should not simultaneously submit them to another journal, nor should manuscripts have been published elsewhere in substantially similar form or with substantially similar content.

Manuscripts must be either printed or typewritten, on standard A4 size paper, on one side only with wide margins all around. Double space everything, including block quotations, footnotes, Bibliography and figure captions. Those who write with computers or word processors are encouraged to send a disk version together with the manuscript (disk format is given below). Authors should clearly indicate on the first page of the manuscript to which category their submission is intended, by writing in red ink one of the following, Article, Source Materials and Remarks, or Reviews. For manuscripts indicated as Articles and Source Materials, contributors should supply a table of contents to go before the text. The title of the submission, author's name and institution of affiliation should be given only on a separate title page, and should not appear anywhere else.

Footnotes: Footnotes should be numbered consecutively throughout the manuscript, and printed or typewritten on separate sheets from the main text. They should be indicated by raised numbers in the text. Citations to publications should be placed in the footnotes as follows:

Taylor 1976, pp.189-190.

Full references should be given in a separate bibliography which follows the text. Entries should be made as shown below:

Taylor, Robert H. 1976. "Politics in Late Colonial Burma: The Case of U Saw." *Modern Asian Studies*, 10, pp.161-193.

Abstracts: Authors of manuscripts designated as Articles and Source Materials and Remarks must supply an abstract in English of not more than 500 words. All manuscripts, no matter to which category they belong or which language they are written (except Japanese), must include a list of five keywords in English.

Tables and Figures: Authors should indicate the sizes of tables and figures with clear instructions to show where they are to appear in the text. Captions for all tables and figures should also be provided.

Special Scripts: Any special linguistic or other scripts/signs should be listed on separate sheets.

Reviews: Full data of books or articles to be reviewed should be indicated in the following style:

Benedict Anderson: *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Revised Edition). London: Verso, 1991, 224pp.

Disk Format: We only accept disks that contain plain text-files of the manuscript. The file should not contain any private/corporate defined characters. Characters that cannot be represented by the standardized character sets should be so marked, or simply left blank. Software-dependent file formats such as MS Word or TeX sources are not accepted. Disks should be in IBM 9 sector format (2HD 1.44MB [High Density], 2DD 720KB [Double Density]), or Macintosh Format (2HD 1.44MB, 2DD 800KB).

Proofs: Authors are requested to read the first proofs. Corrections should be limited to typographical errors only.

Any manuscript that does not conform to these guidelines may be rejected. As a rule, manuscripts submitted will not be returned to the authors. Also, the Editorial Committee reserves the right to reproduce and transmit by electronic and other means (e.g. on www pages) all contributions that are published in the ***Journal of Asian and African Studies***. The ***Journal of Asian and African Studies*** (ISSN 0387-2807), is published twice a year in March and September by Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3 chome, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan.

Back Issues: Information about availability of back issues may be obtained from the Editorial Committee (address below).

Address changes, manuscripts for publication, inquiries, and all other communications should be sent to the following address:

The Editorial Committee, Journal of Asian and African Studies, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3 chome, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan
FACSIMILE: 81-42-330-5617. URL: http://www.aa.tufs.ac.jp
TELEPHONE: 81-42-330-5617 E-mail: editcom@aa.tufs.ac.jp

執 筆 要 領

1. 原稿には，「ジャーナル原稿」と朱書し，論文，資料・研究ノート，書評・紹介の区別をしるす。
2. 原稿はプリントアウトしたものを正本とする。用紙はA4を用いる。
   日本語（中国語）の場合，手書きによる投稿も認める。その場合，横書き原稿用紙（20字×20行）を用いること。
3. 投稿にあたっては，パソコンのフロッピーディスクを同封することが望ましい。
   ＊ディスクを送る場合は，IBM 9 sector formatの2HD 1.44 MB（High Density），2DD 720 KB（Double Density）またはMacintosh Format（2HD 1.44 MB，2DD 800 KB）にし，ディスクのラベルに「IBM format」あるいは「Mac Format」と明記する。
   ＊文書はテキストファイル（plain text file，ASCII file）を原則とし，MS WordやTeXソースは認めない。
4. 欧文の場合，タイプライターによる投稿も認める。その場合，ダブルスペースでタイプし，イタリック体の箇所には下線をほどこすこと。
5. 表題，執筆者名及びその所属は，別紙に一枚にまとめる。その他の箇所には，執筆者名及び所属を記載しないこと。日本語及び中国語の原稿については，表題の下に欧文訳を必ず添えた上，執筆者名及びその所属を日（または中）欧両文で明記する。
6. 写真，図表などにはキャプションを添え，希望の挿入場所，大きさを指定すること。
7. 特殊字母・符号使用の原稿については，特殊字母・符号の一覧表を別に添えること。
8. 日本語の論文，資料・研究ノートには，500語以内の外国語（英語，フランス語，ドイツ語，中国語）のレジュメを附して，同時提出すること。日本語以外の言語を用いた場合は，500語以内の英文レジュメを附すること。
9. 日本語の論文，資料・研究ノートには，キーワード（日本語と英語それぞれ5語）を附して同時提出のこと。日本語以外（英語，フランス語，ドイツ語，中国語）の場合には，英語5語のキーワードを附すること。
10. 論文，資料・研究ノートの場合，章，節などの目次を本文冒頭にしるす。
11. 注は通し番号にし，番号順にまとめて別冊にする。注の番号は一字分の肩に n) の形で入れる。
12. 他著作を引用・言及する場合，注には下の〔例〕のように著者名，年数，ページ数のみをしるす。
   〔例〕 Sapir 1925, pp.40-41.
   今西 1972, p.25
   ＊同一著者の著作物が1年に2点以上ある場合 1975a, 1975b のように a, b で区別する。
13. 文献名は稿末にまとめて参考文献の一覧をつける。その場合，著者の姓のアルファベット順に列記するか，または文献を言語別に分けてわかりやすく並べる。記載方法は，下記の〔例〕にしたがう。
   〔例〕単行本
   Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York: Henry Holt & Co.
   〔例〕雑誌
   前嶋信次 1966 「テリアカ考―文化交流史上から見た一薬品の伝播について」『史学』38-4, pp.1-39
   Sapir, Edward. 1925. “Sound Pattern in Language.” *Language*, 1, pp.37-51.
   〔例〕論文集掲載論文
   Polanyi, Karl. 1957. “The Economy as Instituted Process.” *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi, C.W. Arensberg and H. W. Pearson, eds.), pp.243-270, Chicago: The Free Press.
   白鳥庫吉 1944 「拂菻問題の新解釈」『白鳥博士記念論文集（東洋学報29-3・4)』pp.407-500, 東洋協会学術調査部
   ＊同一論文集中の論文を多数引用している場合，その論文集自体を単行本の扱いで見出しとして出し，各論文には次のような要領で論文集を示す方式を取ってもよい。
   Polanyi, Karl. 1957. “The Economy as Instituted Process.” *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi et al. eds.), pp.243-270.
14. 書評・紹介の場合は，本文冒頭に本，論文についてのデータをなるべく詳しくあげる。
   〔例〕
   Joseph H. Greenberg: *Anthropological Linguistics: An Introduction* (Random House Studies in Anthropology, AS8). New York: Random House, 1968, 212pp., US$3.95.
   Muhammad ’Abd al-Qadil: *Ta’rikh al-Yaman al-Qadim* 〔古代イエメン史〕, Beirut: al-Mu’assasat al-’Arabiyya li’l-Dirasat wa’l-Nashr. 1973, 291pp., Lira 8.
   西田龍雄 『緬甸館譯語の研究―ビルマ言語學序説』（華夷譯語研究叢書Ⅱ）京都松香堂 1972, 394pp. 6,000円
15. 校正は最低限，初校を著者校正とする。なお校正時の手直しは，誤植及び字句の修正にとどめること。

投 稿 規 定

1. 原稿の内容は，アジア・アフリカの言語文化研究に学術的に寄与しうるものとします。投稿にあたっては，論文，資料・研究ノート，書評・紹介の区別をしてください。但し，この区分についての最終的な判断は，当編集出版委員会の責任で行います。
2. 投稿された原稿は，レフェリー制度を通じて審査の上，当編集出版委員会が最終的な採否の決定をします。また採否にかかわらず，原則として原稿（フロッピー，図表を含む）は返却しません。
3. 投稿者の資格は，特に制限しません。
4. 原稿の分量は制限しませんが，未発表のものに限ります。
5. 使用言語は，日本語，英語，フランス語，ドイツ語，中国語のいずれかとします。
6. 稿料の支払い，掲載料の徴収は行いません。なお，著者に抜刷を50部贈呈します。それ以外にも，あらかじめ注文があれば，実費で作成します。
7. 締切期日は，9月30日（3月31日発行）及び3月31日（9月30日発行）とします。
8. 本誌に発表されたものを転載する場合は，あらかじめ当編集出版委員会にご一報の上，出版物を一部ご寄贈ください。
9. 編集出版委員会は本誌に掲載された全ての原稿を電子化媒体によって複製，公開し，公衆に送信することができるものとします。
10. 連絡先：東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
編集出版委員会
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
電 話：042-330-5617
FAX：042-330-5617
URL：http://www.aa.tufs.ac.jp
E-mail：editcom@aa.tufs.ac.jp

アジア・アフリカ言語文化研究　65号

2003 年 3 月 8 日　発　行

発行者：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1（電話 042-330-5600）

編集者：（編集出版委員会）
内堀基光，小川　了，菊澤律子，C. ダニエルス（委員長），
陶安あんど，新谷忠彦，高知尾仁（副委員長），床呂郁哉，豊島
正之，永原陽子，羽田亨一，星　　泉，三尾裕子（五十音順）

印　刷：中 西 印 刷 株 式 会 社
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入

表紙の題字（津田貞子）

JOURNAL
OF
ASIAN AND AFRICAN STUDIES

No.65

CONTENTS

Articles

Strategic Actions and Structure: Iban *Bilek*-family Reconsidered ····· Uchibori, Motomitsu··· 1

Ho Chi Minh and Stalin: The Historical Significance of Ho Chi Minh's Visit to the USSR in February 1950 ····· Kurihara, Hirohide··· 19

Note d'introduction sur les musiques traditionnelles des Antakarana ···Live, Yu-Sion··· 45

Change of Craft Technology as Social Practice: A Study on the Industrialization of Weaving as Folk Craft in the Philippine Highlanders' Society, Northern Luzon ····· Ōnishi, Hideyuki··· 67

Source Materials and Remarks

A Talubin Text with Wordlist and Grammatical Notes ····· Kikusawa, Ritsuko and Reid, Lawrence A.··· 89

A Table of Contents of *Sūyum Bīka* (Kazan, 1913-1917), a Journal for Women Published by Tatar Intellectuals ····· Ikuta, Masumi···149

Transformation of Chinese Migration Patterns and Their Community in Papua New Guinea····· Ichikawa, Tetsu···181

The Fijian Transitive Ending *-(C)aki/a* in Loan Words ····· Tamata, Apolonia···207

Big Traps and Little Traps: Shifting Cultivation and Small Animal Hunting ····· Nishitani, Masaru···229

Livelihood Change in a Philippine Coconut Farming Village: A Case Study in Laguna Province of Luzon ····· Fujii, Miho···259

A General Table of Contents (Nos. 51-65) ····· 287

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA (ILCAA)